日本プロレタリア文学大系

1

三一書房

責任編集　平野謙　蔵原惟人
小田切秀雄　野間宏　竹内好

日本プロレタリア文学大系

1

運動擡頭の時代

社会主義文学から「種蒔く人」廃刊まで

三一書房

第一巻

「運動抬頭の時代」

凡例

一、収載作品はできるかぎり初出の新聞・雑誌によって校合した。ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねもとのままとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアッピールなどは資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によったが、ときに執筆年月によって配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、栗林一石路の両氏に協力をあおいだ。

第一巻目次

I 小説

II 評論

III　詩・短歌・俳句

詩

短歌

俳句

I 小説

坑夫

宮島資夫

一

涯しない蒼空から流れている春の日は、常陸の奥に連る山々をも、同じいように温め照らしていた。物憂く長い冬の眠りから覚めた木々の葉は、赤子の手のようなふくよかな身体を、空に向けて勢よく伸していた。いたずらな春風が時折そっとその柔い肌をこそぐって通ると、若葉はキラキラと音もたてずに笑った。谷間には鶯や時鳥の狂わしく鳴き渡る声が充ちていた。

池井鉱山二号飯場づきの坑夫石井金次は、その日いつものように闇黒な坑内で働いていた。皮がむけて、あざれた骨のようになった松の木で囲った坑口が、凡ての熱も光も吸い取って了っているので、山の肉を割き骨を刳って切り込んだ洞の奥には、永遠に動かない黒い冷たい闇が一杯にこもっていた。岩の裂目にかけたカンテラの、赤ずんだ弱い光が、生々しく破られた岩肌や、汚れた仕事衣を着て立っている石井の姿を僅かに照らし出している計りであった。

カンテラは絶え間なく石油臭い油煙をたてていた。行き詰った、風通しの悪い洞窟の奥には、むせるようなダイナマイトの煙が、黒い油煙に交って、人の血を乱す荒々しい匂が濛々とこもっている。

日の輝く世界と全くかけ離れたそこには、外界で起る如何なる物音も更に伝わらなかった。死のような闇黒と静寂の境で、石井が振う鋼の鎚の冴えた響が岩壁を唸って行く絶え間には、山肌から滴る水の啜り泣くような音も聞えていた。

彼れは泥水で地肌もわからない程汚れた仕事衣を身に纏って、腰には莚で造った四角な尻当をぶら下げていた。長く伸びた髪の毛を鉢巻で額に止めていたが、蒼白い顔のせまった眉の下で蛇のように光る目と、少し曲げて結んだ口が、彼の性格の何物かを語っているようであった。

彼の前には刳られた山の肉の断面が立っている。赤黒い母岩を貫いて走っている真白い筋のような、稍傾斜した硅石の脈の中には、オルフラマイトが石炭のように黒く光っていた。真鍮色の硫化鉄や金色の銅、緑の鮮やかな孔雀石も鏤んでいる。小さな剣を植えたような透明六方石のスカリは、所々に氷のような光を放っていた。カンテラの焔がゆらめくと樋の内は仏壇のように美しく輝いた。

山はダイナマイトをかけられる毎に、大きな身体をもだえて苦しげに呻いた。が、石井にはその轟然とした凄まじい音響と共に、鉄のような堅岩も微塵に粉砕されるのが、日毎に味う限りない快感であった。彼れは又何万年とも知れぬ昔から、何物にも触れた事のない山の肉を、自分の持つ鑿の刃先で一鎚毎に擘いて行く快さをも貪り味っていた。鑿を持った左の腕を真直ぐに伸して、反身にした身体を半ば開いて、右に持った鉄鎚を遠くから勢こめて打ち下すと鑿の頭からは火花が散って、岩に切り込む刃先からは目に見えぬ何物かが、手から腕へやがて全身に伝わるように覚えるのであった。びちょびちょと血のように赤い冷たい水の滴る坑内でも、彼は汗をかいていた。

彼はその時朝から三度目の爆発穴を刳っていた。三尺近い鉄の鑿はもう五六寸しか岩の外に現われていなかった。気の乗った彼の目には、盃のようにひしゃげた鑿の頭より外は、何物も映らなかった。尻当は腰の辺りで、妙な調子を取ってゆれていた。

石井の切り出した岩片を一輪車に積んで、坑外に運んでいた掴子の三吉は、岩片を出し終ってから、少し離れた彼の後に一輪車に腰をかけて、呑気らしく鉱山歌を謳った。単調な歌の音は激しく打ち合う鉄の響に和して、トンネルの闇の中を異様な声で唸って行った。

穴を刳り終ってから石井は、細長い爆発薬に雷管と導火線を装置して押し込んで、息の洩れないように丹念に細い岩片を詰めて、やっと額の手拭をとって汗をふいた。襟のあたりから微かに立つ湯気が、カンテラ の焔に白く映った。彼れは振り返って三吉に、

「もう午かな」と聞いた。

「まだ鈴は鳴らねえけど、もう午でやすべえ」と三吉は待ち設けたように答えた。三吉は早く此の暗い冷たい坑から出たいと思っていた。温かな日を浴びながら乾いた砂の上に転がって、午休みの選鉱女にからかう楽しさを思い詰めていたのであった。

石井は黙ってカンテラの焔をかざして、導火線に火を点けた。白い縄はシュッシュッと音をたてて、闇の中に赤い火花を散らして燃え込んでいった。新らしい煙硝の臭が二人の鼻をついた。

「三吉出よう」と云って石井は先きに立った。暗いトンネルを二人は屈むようにして、冷たい水を踏んで歩いた。黒い尾を曳いたカンテラの光が、濡れた岩や水に映った。

二人が坑口を出てからダイナマイトは凄まじい音を立てて爆発した。肉を破られた山は苦しそうに大きな身体を震わせて、長く呻いた、前に聳えている山も悲しげに反響した。悲鳴は谷を伝い森の木の葉を慄わせて遠く響いて行った。

石井は坑口の傍の若草の上に転がって、じっと響の行方を追っていたが、響がすっかり消えると彼れの蒼白い頬に微かな笑が浮んだ。側に立っている三吉に

「今の爆発薬は能く利いたなあ」と云った。

「又岩片がうんと出たでやすべえ、石井さんについてると、はあ、全く楽が出来ねえだ」と道化顔した三吉は、ジョリンで足下の土を掻きながら云った。

「おれにつくのがいやなら止せ」と石井はすぐ険しい眉をぴりつかせた。

「そうら何か云うとじき怒るだから、石井さんにつくのは皆ないやがるだよ、俺あ見張で憎まれてるもんで、毎日石井さんの仕事場にばかりつけられてはあ、やんなるだよ」

「野郎ッまだ」と石井が半ば身を起した時、三吉は身を翻えして逃げ出した。彼れは追いかけるのも何だか慵いので、其儘再び若草の中に身を横たえた。若葉を濾した春の陽が彼の冷えた身体を温め、優しい春風が疲れをいたわるように撫でて通った。

下の方の坑内からも、午の揚り爆発薬をかけた響がいくつも続いて起った。が、響はやがて一つになって、穏かな春の大気を震わせて蒼空の中に拡がり消えた。遠くの選鉱場で女達が謳う、かすかな選鉱節の絶え間に、石を砕く響がどすっどすっと断え断えに聞えて来る。水のように蒼く澄んだ空を、銀色の雲が静かに流れていた。彼れは何となく薄ら眠くなった。何時も彼れの心を責めている苛立しい気も消えて、懐かしい夢の世界のような中に、じっと長く浸っていた。

麓の方で午を知らせる鈴がけたたましく鳴った。彼れは眠りから覚めたようにやっと身を起して、丸太で足留をした山道を下って行った。

下の広場に、見張所と鉱量小舎が向き合って立っている傍の、みすぼらしい大工小舎が、坑夫の休み場とも大工の仕事場ともなっていた。彼れが下って行った時、鉱量小舎の周りに坑夫等が多勢集まっていた。低い杉皮で蔽われた屋根の下は人垣の影で薄暗くなって、中はよく見えなかった。同じように土で赤く汚れた着物を着て、尻当をぶら下げて、油煙で目鼻の黒くなった坑夫等は

「小幡の野郎が悪いんだ」「やっつけちまえ」と殺気立ったことを、口々に怒号していた。

石井は穏かに静まった気を掻き乱されることを厭わしくも思った。けれども其騒ぎを冷やかに無関心で看過すには、彼れの血は余りに煮え易いものであった。彼れは思い切ったように、歩み寄って、仲間の後ろから中を覗いてみた。鉱石を堆く積んだ傍に係員の小幡が顔の半面を泥と血に滲ませて、真蒼になって立っていた。廂を洩れた陽が切りつけたように傷の上に射している。洋服を着た事務員が三人、眼を光らして附き添うように傍に立っていた。四辺にはバケツや箱箕がだらしなく散らばっていた。

一同の視線は鉱量台の前に集中していた。其処では飯場頭の萩田が、佐藤という若い坑夫の胸倉を捉えて、片手で続けさまに彼の横面を張り飛ばしながら、噛みつくように

怒鳴っていた。
「やい手前は何だってこんな生意気な真似をしたんだ、不足があるなら何故俺ん所へ云って来ねえ。俺の面を踏み潰しやがったな」
佐藤はまだやっと二十歳になった位の、薄い眉の下に太い刺青をした、生意気らしい顔をした男であった。萩田に打たれる度にびりびりと身体を震わせるばかりで黙って立っていた。
石井は原因を知りたいと思った。彼れが腕を組んだ儲仲間を押し分けて一番前に進み出ると、其処に立っていた野田という坑夫が
「兄弟好いとこへ来た。小幡の野郎が余り判らねえ事をいうもんだから佐藤が怒って横面を蹴飛したんだ、ところが今度は頭が怒っちゃって皆な手がつけられねえで困ってるんだ。何とか止めてやって呉れよ」と佐藤のために懇願するような顔をして言った。
野田の言い草を聞くと、石井は無暗に腹が立った。此間から仲間の間に、鉱量係の鉱石の買方が無理だという苦情の起っていた事も知っていた。年の若い佐藤が皆に煽てられて間違を起したのではないかと思った。利口顔して能く喋舌るこの野田なんか、先きに立って煽てたのだろうと思うと、反感が胸を衝いた。
「お前こそ止めてやんねえな、平常から小幡なんか遣っつけちまわなきゃ駄目だって言ってたじゃねえか」と言って冷笑した。野田は間の悪そうな顔をして黙って了った。けれども萩田がまだ怒鳴り続けているのをみると、何となく佐藤が気の毒になった。腕を組んだまま仲間の群から離れた石井は二人の側に歩み寄った。
「何だか知らねえけど兄貴、もう好い加減にしてやれよ」と言って、固く捉えている萩田の腕に手をかけた。萩田は逆いもせず素直に手を離して、
「兄弟、兎に角此奴を飯場に引張って行って呉れ。俺は見張へ行って話をつけてすぐ行くから」と佐藤を石井に渡した。
「さあ俺と一緒に来ねえ」と言って石井は佐藤を引いた。佐藤は黙って小幡の顔を睨みつけてから石井の後に従った。
事務員等は黙って見ていた。坑夫達は列を割って通したが、二人が休み場の方へ道具を取りに行く後から、またぞろぞろ随いて来た。
「小幡の野郎が余り因業だから悪いんだ」
「これで下山(おろ)されちゃ佐藤の兄弟が可哀相だ」とわやわや喋舌った。それを聞くと石井は又むかむかした。彼れは振り返って、
「何だ、お前達そんなに佐藤が気の毒なら佐藤が怒って小幡を蹴飛ばした時、何故皆して鉱量小舎でも踏み潰しちまわねえんだ」
鋭く光る眼を据えて言い放った。坑夫達は黙って二人か

ら離れて行った。
「お前誰かに煽てられたんじゃねえか」と今度は佐藤に訊いた。
「ううん、俺あ誰にも煽てられやしねえけれど、此間から小幡の野郎が癪に触って堪らなかったんだ。今日だって俺が五分あるって鉱石を、野郎二分だって吐かしやがるから、そんなら試験してみろって言や、俺の見た目に違いはないって威張るんだ、俺あもうかっとしたから合の上へ飛び上って、奴の横面を蹴飛ばした丈けよ。もうこれで気が済んだから下山でも何でも勝手にしろだ。丁度春先きだ。浪人して歩く方が呑気で好いや。なあ伯父御」
「そうか、そんなら好いけど、人を煽てて手前が楽をしようってけちな奴が多いからな」
「さ、道具を纏めたら飯場へ行って縁起直しに一杯やろう」
休み場の広い土間に、幾組か鏨や鎚が投げ出してある中から、佐藤は自分の道具を取って縄で結えて肩に担いだ。
「忘れ物あねえか」と石井が訊いた。
「大丈夫だ」
二人は黙って歩き出した。鉱量小舎の側を通る時
「小幡の間抜ッ、面あ見ろ」と佐藤が怒鳴ったが、中は森としていた。山道の片側に長く続いた選鉱小舎の前を通ると、女工達は恐相な顔をして窓から二人を覗いていた。
山裾を一つ廻った沢の底に、坑夫長屋が立ち並んでいた。樹脂（まつやに）のふいた松の細い柱と、薄板を打つけて、杉皮で葺いた屋根が、褐色の太い長い線を引いている下の方に、楢や山毛欅（ぶな）の丸木を柱にして、茅で囲った小舎の中に、渡り者の人足達が、土の上に板と莚を敷いて住んでいた。高い山が前後から圧っ被さるように聳えているので、これ等の家の中には、何時もどんよりとした薄暗が漂っていた。
僅かに切り拓いた往還の向う側には、切り残されたひょろ長い杉の木が疎らな並木を作っていた。方々の坑内から出て一つになった、赤ちゃけた小川がその根方に流れて、所々に野菜の切り屑や瀬戸物の破片などが、汚ない塵塚を作っていた。
長屋の前には軒並に大きな鳥籠が伏せてあって、赤肌に毛の脱けた鋭い眼の軍鶏が太い声で鬨をつくっていた。彼等は坑夫達の荒い血を娯ませるために飼われているのであった。退屈になると坑夫等は莚で囲んだ土俵の中に、軍鶏を入れては蹴合わせるのであった。同類と闘うためばかりに生れて来たような鳥は、狂気のように争った。鶏冠がちぎれて頸も羽根も血だらけになって目を白黒させて倒れると、坑夫等は声を揚げて喜ぶのであった。
午後や夜中に入坑する、昼は用のない坑夫等が、褞袍を着て長屋の前をぶらついていた。二人が下って行った時、行き会った一人が、
「今時分どうかしたのか」と訊ねた。
「俺あ下山だ」と言った切り、佐藤はきっと口を結んでさ

っさと行き過ぎた。その様子が余り激しかったので、誰も続いて訊く者はなかった。

煤け切った薄暗い飯場にも一人者の坑夫や掘子が七八人、退屈相にごろごろしていた。誰も満足な着物なんか着ている者は一人もなく、中には素肌の上に垢光りのする四布蒲団を帯で巻きつけている者もあった。蒼白い顔と、蓬々伸びた髪の毛ばかりが薄暗い中に目立って、汗臭い匂が部屋一杯に漲っていた。

佐藤は飯場に入ると「ええ畜生ッ」と担いでいた道具を土間に投げつけた。鋼鉄はガチャガチャンと凄まじい音を立てて散らばったので、寝ていた者は驚いて起き上った。

「何うしたんだ兄弟」

上り口近くにいた山田という坑夫が、突っ立っている佐藤の顔を見て尋ねた。それは蒼白く痩せた顔に、目ばかり大きい男だった。

「小幡を蹴飛ばしたんで下山よ」と捨てるように言った佐藤は、腰を下して草鞋の紐を解きはじめた。

「石井の兄貴もか」

「俺は佐藤を引っ張って来た丈けよ」と言って石井は直ぐ下駄と手拭を持って、前の筧へ顔を洗いに行った。長い竹樋に導かれて一旦桶に溜った水は、またぼしゃぼしゃと音を立てて流れ落ちていた。彼れはバケツに水が溜るのを待ってざぶざぶ顔を洗った。

佐藤が続いて来た時、彼れは、

「飯場で飲むと五月蠅から山へ行こうじゃねえか」と小声で言った。

「うん」とうなずいて佐藤は、先刻打たれたところを水で冷していた。

石井が着物を着換えている中に、佐藤は通いを持って用度掛りへ行った。其処には田舎の荒物屋のように雑然といろいろな品物が並べてある中に、太田という係員の爺さんが眼鏡越しに帳面を調べていた。佐藤は、

「おい、太田さん酒を一升」と通いを前に投り出した。

「昼間っから山遊びか」と爺さんはビールの壜に分けて酒をつぎながら言った。

「俺あ今日で下山だ。酒も石井の名にしといてお呉れ。もう少しこの山にいりゃあ用度へも爆発薬を叩き込んでやろうと思ってたんだ」

「馬鹿、用度が何を知ってるい」太田は恐ろしそうにむきになって言った。

「酒が高えからよ、アハハハ」と佐藤は笑って壜を持って出た。

二人が各自に罎と罐詰を持って飯場を出ると、上の方から帰って来た萩田に出会った。

「頭、先刻はどうも済まなかった」佐藤は間の悪そうに顔を下げた。

「なあに、俺あ丁度見張りにいたものだから、黙ってる訳にも行かねえで飛び出したのよ。お前にゃ気の毒だったが

まあ我慢しといてくれ」と優しく笑った。
「兄貴、俺あ今日はこれで休むから届けを甘く頼むぜ。これから山へ行って飲もうってんだ。兄貴も行かねえか」と石井が言った。
「表向きがあるからそうも行かねえや、見張りの山口が馬鹿に怒って即刻下山させろなんて言ってやがるのを、吉田に頼んで一寸納めてもらって、どんな様子だかと思って見に来たんだ。晩にでもゆっくり別れをやるから、まあ二人でやってて呉れ」と言って、萩田は又見張りの方へ上って行った。

飯場と長屋の間を抜けると、裏山へ登る道が若草の中に黒くついている。右へ峠を登って隣りの沢へ通う道は、若葉の中に消えていた。両側から迫った山の中腹に咲いた山桜が、わけて目立って真白く見えた。二人は黙って険しい山道を登って行った。何処かにかくれて咲いている草花の強い香が、時折二人の鼻を打った。小鳥が頭の上をかすめて通った。

頂上へ登った時は二人とも汗ばんでいた。赤味がかった芽の萌えた山躑躅や、小松の生い茂った中に一本高い松の根方を切り拓いた平地が、この山の坑夫等の遊び場所になっていた。二人は持って来た酒や鑵詰を其処に置いた。佐藤は落胆(がっかり)したように草の中に仰向けに転がって、真蒼な空を眺めた。
「ああ、此処へ来るとほんとに好い心持になる、五月蠅え奴がいないからな」と言って石井は立ったまま両腕を幾度も振り廻した。
「俺あ何だか消々したような、落胆したような、変な気になっちゃった」
引っくら返ったまま佐藤が言った。
「けちな事を言わねえで起きて飲めよ。お前は明日っから浪人して歩くんだ。呑気で好いな。起きてみろよ好い景色だ。お前はあの山ん中を歩いて行くんだ」
石井は腰を下して懐ろから茶碗を出した。

西に廻った春の陽は、西北に連る青葉に包まれた峰々を柔らかに照らしていた。遠い北国の高い山の頂きには、厚く残った雪が金色に光っていた。所々低い山の間から紫色の煙りが立ち上るのは、其処にも人の住む村のあることを思わせた。

東の方はずっと展けて、麓の村や、石塚大山などいう、酒と女のある小駅が霞んだ大気の底に沈んでいる。遠く水戸の町らしく見える先きには、海が微かに光っていた。

佐藤もやっと起きた。二人は和らかな春の気に包まれて、楽し気に酒を酌み交した。何時もひそめた石井の眉もやや開けて、険しい眼もうっとりと細くなっていた。彼れは麗らかな陽を浴びて長閑な村を歩きながら若い娘にからかったり、夕暮になると宿賃のいらない飯場に泊って、方方の国々の様子など話しては、心ゆくまで放浪した時のことなどを想っていた。そして何処の山へ行っても、誰も恐

ろしがって相手にする者のない今の身を思っては、自由な旅に出られる佐藤に比べて、寂しく悲しいような気にもなった。

「さ、一つ飲めよ」と茶碗を佐藤に渡してから、

「こうして山へ来て酒を飲んでると、不思議に好い心持になって来るなあ。俺あ平素はもう何時でも、頭ん中がむしゃくしゃして、何でも癪に触って堪らねえんだ、片っ端から爆発薬で吹き飛ばしてやりたいような気になるんだけど、そんな時にゃ仕方がねえから一人で此処に来て酒を飲むんだ。怒りてえような相手もいねえし、好い心持になって何だか自分の家へでも帰って来たような気がするんだ。俺達みたいな風来坊は自分の家ってものあねえんだし、山で生れて山を歩いて、死んでも山に埋められるんだから、山が家みたいな気がするのも無理やねえかも知れねえやな」と言って「あああ」と身体を後ろに反らした。

佐藤はこんな優しい石井を見たのは初めてであった。何処の山へ行っても喧嘩ばかりして直きに人を傷ける――此処にいても、平素飯場にいる時は、無暗に人を怒鳴りつけていても誰も恐ろしがって逆らわないその人と、同じ人間とは思えなかった。

「伯父御、今日は馬鹿に気の弱えことを言うな、お前だってまだ三十前の身体して、どうしたって言うんだ」

「そうじゃねえ、俺なんか何処へ行ったたって働く山なんかありやしねえ、皆けちな了見の奴ばかりだからな、もう駄目よ、だけど俺もお前位の時分にゃ随分よく浪人して歩いたもんだ、石州の笹ヶ谷を脱走した時なんざ、幾日歩いても飯場あなし、兄弟分と二人してまるで乞食みてえになっちゃって、何でも丹波辺りの川の辺で鼈をうんと取って、全焼きにして食ったこともあったっけ。それでも浪人して歩いてる方が呑気でよかった、おまけに此頃のような春先きのぽかぽかする日に歩くなあ、何とも言えねえ気持だからなあ」

「全くよ、俺ももう春先きになると、とてもじっとしていられなくなってくるんだ。村の娘手合にでもからかいながら歩いてると、本当に好い気持だから――」

「もうそろそろ野州花も咲き出すから、足尾坑夫も巣立ちをする時分だなあ、初めの中は彼方の山が好いか、此方へ行きゃぁ甘いことがあるかと思って、みんな当なしに歩くんだけど、段々歩きたくって歩くようになっちまわ。暗い坑内へ這入って仕事してるより、銭なしでも呑気に清々と歩いている方が好くなるからな。俺なんか何処へ行っても険呑がって使ってくれねえから、手前で危くって浪人することも出来なくなった。お前歩いてる中に甘いことがあったら呼んでくれ、え佐藤」と言って佐藤の手を取った。誰でも狼のように思ってる気の荒い石井が馬鹿気て萎れた姿を見ると、佐藤は変な気になった。

「伯父御は女癖が悪いからなあ」と言って強いて笑った。

「まあ、そんな事あどうでも好いや、一つ唄でも謳って山

の神様でも驚かしてやろうじゃねえか」
　石井は手を拍って謳いはじめた。
「俺あ一つ盆踊りをやる、伯父御、音頭取ってくれ」
　佐藤はふらふらする足を踏みしめて立った。
「よしっ、さあ謳うぞ」と石井は、
「ああ――え――盆が来たかよ、こらしよッ」と大きな口を開いて目を細くして謳い出した。佐藤は両手を拍ったり振ったりして、若草に輪を描いて踊り廻った。
　春風は笑って通った。
　騒ぎ疲れると二人は、草の中に子供のように転がった。そして又冷たい酒を酌みかわした。酒に酔って我れを忘れ、邪気のない戯れに胸の開いた二人はもう全く、優しい春の大気の中に溶け込んで了っていた。

　夕暮になった。陽は遠い西の山の影に落ちて、麓の村も野も森も深い谿の底に沈んで了った。薄緑の空には夕の星が輝き初めた。快く酔った二人はひょろつく足を踏みしめて山を下った。途中まで来たとき石井は手にしていた空罎を谷にのぞんで突き出ている岩をめがけて叩きつけた。硝子は小気味よく砕けて破片は光って飛んだ。二人は手を拍って面白そうに笑った。
　長屋の前には蓬のような頭をした女房達が、夕餐の支度に忙がしく旅やバケツを持って往来していた。筧の周りを取り巻いた女はよくべちゃべちゃ喋舌っていた。二人はよろけながらわざと大手を振って歩いた。女達に行き会うと手を拡げて抱きつこうとしては、その慌てて逃げるのを見て喜んで笑った。
　飯場にはいつ磨いたとも知れない煤けた洋灯が、鈍い光を放っていた。妙な姿をした坑夫が十人計り囲炉裡をかこんでいたが、それは薄黒い大きな物の塊りのようにも見えた。暗い片隅で蒲団を被って寝ているものもあった。そこからは変な唸り声が時々聞えて来た。坑夫等は今日の佐藤の事について話していた。長屋から来た野田は俺一人と云った風な顔をして、
「全く此頃のように鉱石の買い方が矢釜しくっちゃこつとらはとてもやり切れねえ。岩片がちょいと這入ったっちや、二分引く、三分引くって云われたんじゃ全く働く勢がありゃしねえ。第一飯の喰い上げだ。一体此の山の現場員なんか労働者を馬鹿にしてるからいけねえんだ。佐藤が怒ったなあ当り前だ、なあ兄弟達」と喋舌り立てているところに、二人はぬっと這入って来た。佐藤の顔を見ると一同は「何処へ行ってたんだ兄弟、皆して酒を買って待ってたのに」と云った。
「ああ、そんな心配かけちゃ済まねえ。俺あ山へ行って石井の伯父御と飲んでたもんだから」と両手をつくと、ぐたりと坐った。石井もそこに坐ると眼を据えて野田の顔を睨みつけた。酒に血走ったその眼には何か物狂わしいものが燃えていた。重く鋭いその光に出会うと、野田は、はっと

いやな顔をした。
「おい野田の兄弟」と石井は圧えるような声で呼んだ。
「なに、何だ石井の兄弟」と云ったが、野田の陰険な顔にはもう狼狽た色が浮んだ。彼れは血に餓えた獣の前に据えられたようにおどおどしていた。
「お前は随分よく喋舌って人を煽てるけど、てめえじゃまだ何にもした事がねえな」とこんどは攻めるように言った。
「だって兄弟、話をしなけりゃ判らねえじゃねえか、此頃の鉱量係が余り酷過ぎるからよ」
「じゃお前はここで何か愚痴をこぼしゃ、何うにかなる気でいるのか、下らねえ野郎だな。お前達が泣き言をいやあ言う程見張の奴等あまだいじめても大丈夫だと思って高を括ってら、彼奴らあ何でも癪にさわったら黙って睨みつけていりゃぁいいんだ。そうしていざと云う時にダイの一本も叩き込んでみろ、慄え上って云う事を聞かあ、お前みたいに人計り煽てたり、見得で理窟を言ったって何になるもんか、つまらねえ事あよせってんだ」
「何も俺あ煽てたり見得で理窟なんか云やしねえ、只当り前の事を云った丈けだ。兄弟も可笑しな事を云うなあ」
「手前俺が知らねえと思ってそんな事を云うんだろ、見張へ行ったって飯場へ来たって仲間の前だと労働者だの危険だのって妙な漢語を使って理窟を云やがって、かげへ廻ると役人にペコペコお辞儀しているんじゃねえか、手前見たいな了見の腐った二た股野郎は俺大嫌いだ」
「おい兄貴、二た股野郎なんて余り馬鹿な事を云ってくれんな。いつ俺がそんな事をしたって云うんだ。お前は少し自分の癪にさわると云いてえような事計り云ってるけれど、ダイを投げたり暴れたりしたんじゃ何もかもお終いじゃねえか、お前はじきそんな無茶計り云うからいけねえって云うんだ」
「なにが無茶だ、手前がお喋舌の卑怯野郎だ、何だってお終いまでやらなくって事が出来るかい。野州の騒ぎの時だって始まらねえ中はそこいら中無暗に喋舌って歩きやがって、いよいよ騒ぎが始まったら通洞ん中へ隠れていやがったんじゃねえか、それで騒ぎのお情を一番先きに蒙りやがった事まで俺あちゃんと知ってるんだ。手前見たいな二た股の意気地無し野郎が多いから、俺達がいくら何をしたって、世間から馬鹿にされて山ん中でくすぶって、危え仕事をして坑夫病になって若死するのを何うする事も出来ねえんだ。俺あ手前の面あ見ても癪にさわって堪らねえんだ、二股の畜生野郎ッ」罵る中にも石井は激情に堪えない顔をした。びりびりふるえる濃い眉の下で憎悪にみちた目は火のように燃えていた。爆発薬のような男に逆う危険を知ってる野田は黙って下を向いてた。傍にいる坑夫等も、止み難い沈黙に息をつまらせていた。
「此んなに云われたって何うする事も出来ぬえんだろ、口惜しくねえのか意気地なしッ」と石井は続けて罵った。

「そんな、気狂の相手は俺あ御免だ」
「なにッ、気狂だ」と石井が飛びかかろうとしたとき、佐藤が、
「伯父御よして呉れ。ここで喧嘩されちゃ俺が皆に申訳がねえから止めてくれよ」と抱きついて止めた。
「此んな野郎がいるから手前が小幡を擲ったって何にもならねえんじゃねえか、離せッ」鎖につながれた獣のように石井はもがいた。
「今夜だけよしてくれ、え伯父御頼むからよ」
「兄貴、まあ佐藤が可哀想だから今夜はまあ我慢しろよ」と一同もやっと止めたので、
「畜生ッ覚えてやがれ」と野田を睨みつけて石井も坐った。
「さ、おそくなるから早く飲り始めよう」と徳利や茶碗を出しかける者もあった。
「俺あもう飲みたくねえから先に寝ら、佐藤、お前明日の朝早く発つんなら俺を起して呉れ」と云って石井は暗い隅の方へ云って蒲団を被って了った。
一同は急に陽気になった。
少時してから萩田も帰って来た。賑やかな笑い声や、不器用な歌の声が夜更まで飯場の中から起っていた。

二

翌朝、佐藤は空も未だ薄暗い中から起き出して旅支度を始めた。前の晩、酒が済んでから別れの礼を云った時一同は、
「下山になったって構うものか、二三日ゆっくり遊んでから発ったら好いじゃないか」と言ったが、佐藤は、
「又小幡の面でも見て擲りたくなるといけねえから」と断って発つ事にした。――晴れやかな日に輝き息づく若葉に充ちた野や森を渡ってくる、芳ばしい柔らかな風に吹かれて歩く、真青な麦の穂や菜種の花の咲いた畑道、或は又思いがけない街に出て珍らしい物に気をそそられて、当てもなく逍遥う楽しさが、彼の若い心を全く奪って了っていたのであった。
石井も早くから起きていた。佐藤の支度が終ると二人は、火の気のない炉のそばで冷たい朝飯を喰った。
「別に餞別もやれねえから塩子まで送って行こう」と石井が云った。
「いろんな心配をかけた上そんな事をして貰っちゃすまねえから」佐藤は幾度も辞退した。
「もう起きちゃったものを、今から寝るわけにも行かねえだろ」と石井は仕事衣を着て草鞋を履いた。
「じゃ伯父御、頭もまだねてるようだし皆にも宜敷頼むぜ」
「ああ好いとも、あとで好く云っといてやる、さ行こう」と二人は飯場を出た。佐藤は着物や道具を入れた小さな行

李を横に背負って、片手に洋傘を持っていた。
未だ明け切らない暁の空には、夢のような薄月が残っていた。前の山も肌は真白な靄に包まれて梢の若葉だけ青く現われていた。草鞋を履いた二人は足音も立てずに、黙って見張所の方へ登って行った。なだらかな山腹に立ち並んだ、がらんとした選鉱小舎の中にも、朝靄はゆるく流れていた。上の方の平地に建てた見張所の杉皮で葺いた褐色の屋根の上には、隣村へ越える山の凹から薄蒼い空が覗いていた。佐藤は誰もいない鉱量小舎に這入って、昨日の事を新しく描くように見廻した。
「野郎口惜しかったろうな」と云って快さそうに笑った。
「そうよ、彼んな奴はうんと泣くような目に会わしてやる方が好いんだ。だけどお前も何処へ行ったたって余り暴れると終えにゃ俺みたいに歩けなくなっちまうぞ」と石井はしみじみと訓えるように云った。
「歩けなきゃ無理に押し歩く丈けよなあ伯父御、癪にさわる事を我慢して生きたって仕様がねえや」
「まったくだ、俺も自分よか若え者を見ると、俺見たいな不自由な目にあうといけねえと思ってつい意見じみた事は云うけど、自分じゃ死ても我慢が出来ねえんだ。どうせ仕合せだの楽な暮しだのってもなあ俺たちと一緒に生れ合せていねえんだから、云いてえ事でも云って暴れてえだけ暴れてでも暮さなきゃあ埋め合せがつかねえのよ」
「そうだ、俺もうんと暴れて歩かれるだけ歩き廻ってやろうと思ってるんだ。伯父御もくすぶっていねえで歩き出せよ」
「何うせ歩き出さなきゃならねえようになるとは思ってるんだ。お前何処かへ落ちついたら手紙を寄越してくれ」
「ああ落ちつきゃ直ぐ寄越すけどいつ落ちつくんだか判らねえや」
向き合って並んだ真暗な坑口の前を抜けると、道は険しい山路になった。じめじめ湿った木立の下を佐藤は傘を力杖にして屈んで登って行った。まだ眠りからさめ切らない葉末からは、靄の凝った雫が滴って、精気に充ちた若葉のいきが一杯に漂っていた。嶺に登り切ったとき二人は胸を張って二三度大きくいきを吸った。麓の村の黒ずんだ茅屋根や黄ばんだ竹藪、青い麦畑が薄れ行く朝靄を透して足下に展けていた。村端れを流れる広い川の面には、煙のような濃い靄が立ち籠めていた。左の方に突き出ている高い峰の彼方に、大きな朝日が上り初めたのであろう。その山の裏側だけを黒く残して、空は俄に赤く輝き初めた。佐藤は二人が登って来た麓の方を振り返った。見張所や選鉱小舎の杉皮の家根だけ見える傍に、硅石を敷きつめた黄色い道が長く続いて、坑内から出る水は細く光って流れていた。
佐藤は、
「もう此んな山あ用なしだ」と云って身体を伸して背負ってた行李を一とゆりゆすった。
「そうよ帰って来るような山じゃねえや」と石井は吐き出

すように言った。
「こんだあ面白え山に出会すまで歩くかな」
「面白え山なんてあるもんか、みんなそんな気で一生歩くんだけど、面白かったなんて聞いた事がねえや、みんなつられたような夢を見て歩いてるんだ」
「そうとも限らねえぞ伯父御、大きな脈でも発見して見ねえ、一ぺんに旦那様だあははは」
「そんな気んなって歩いてろよ、うふふふ」と二人とも笑って了った。
「じゃ俺あその気で行くとしよう、伯父御も大事に暮してくれ」佐藤は改まって叮嚀に頭を下げた。
「お前も大事に行きな」
「済まねえけど皆によろしく」と云い残して佐藤は朝露の閃いた山道を下って行った——。岩蔭に行李計り動くのが見えるようになってから、石井はもと来た方へ振り向いて腕を組んで、沈んだ眼つきをして下って行った。——彼れは歩きさえすれば楽しい事に出会うような心で出て行った佐藤を思うと羨ましくなった。そして何処の山へ行っても悪魔のように除け物にされる自分を思っては、遣る瀬ない激情と孤独の寂しさが胸の中に湧き上った。命を懸けても構わない、何んな無理でも押し通して行きたいような焦燥が、空しく心をじりつかせた。
その日仕事場(きりば)についてからも彼れは、口を結んで目を光らせて力任せに鑿の頭を叩きつけていた。煙の抜ける間もない程断えず爆発薬をかけた。山は苦しそうに唸りつづけていた。その度毎に岩片(ずり)は夥しく出るので三吉は、呑気な歌を唄う隙もなく汗を滴らして一輪車を押していた。暗黒な洞窟の奥で気に喰わない人の顔を見る事もなく、有る限りの力を振って岩を砕いて、山の肉に突き入って行く間だけ、彼れは凡てのいまわしさをも忘れていた。交代時の鈴が鳴って他の仕事場の坑夫は疾(とう)くに出てしまってからも、彼れは工事を続けていた。三吉はおずおずしながら、
「石井さんもう鈴が鳴りやんした」と云った。
「矢釜しい、手前が上りたきゃ先きに上れ」と怒鳴られたので又一輪車を押し始めた。二の番の坑夫が交代に這入って来て、
「兄弟、馬鹿に稼ぐなあ、俺あとても追附けねえぜ」と声をかけたので、石井はやっと仕事の手を止めた。仕事衣は汗に濡れてせまった濃い眉根にも、蒼白い頬にも精一杯働き切った労れが現われていた。
「飯場へ帰ったってつまらねえもんだから、——ああ、疲れちゃった」と言って彼は道具を纏め始めた。
見張所の前には交代時にごたつく坑夫の列もなくなっていた。石井が判座帳をとりに行った時、窓から顔を出した事務員が、
「おい馬鹿に稼ぐじゃないか」と笑い乍ら判を押した紙を渡した。石井は、

「今日は少し忙がしかったから、三吉にも分を付けてやっておくんなさい」と云った。
「よし、後でつけといてやるから判座帳は置いて行け」と出しかけた紙を引き込ました。
「そうけえ」と三吉は莞爾々々しながら、先きに立って坂路を馳け出して行った。
　石井は、毎日同じように愚痴や泣言ばかり繰り返してる仲間達が、ごちゃごちゃ集まっている、埃っぽい騒々しい飯場へ帰るのが何よりもいやだった。けれども、飯場より他に帰るべき家のない彼れは、物憂げな顔をしてぐずぐず歩き出した。彼れは選鉱場を覗いて女達にからかって見た。選鉱機の前に立っては、ガタガタゆする音につれて、選り滓になった岩が水に流し出されて落ちるのを眺めたりして、ゆっくりと帰って行った。
　飯場の前の野天に建てた風呂場では先きに上った坑夫等が、もう筋張った身体を押し合って、わいわい騒いでいた。薄暗い部屋の中にも五六人して何か無駄話をしていたが、今朝発った佐藤の事などは忘れたように、誰れも口にする者はなかった。石井は別れて行った人の事を思っているのは自分一人でもあるかと思うと佗しくなった。酒でも飲み合う時ばかり、親しく友達らしい事を云う、卑しい心の仲間が憎らしくなった。彼れは並んで喋舌っている人達の顔をじろっと見廻した。その氷のような目に出会うと誰も顔を顰めて黙って了った。彼れは仕事衣を脱ぐと風呂場へ行った。彼の顔が見えると、そこにも冷たい沈黙が流れた。
　湯槽に浸って彼れは冷え疲れた四肢五体を温め伸ばした。湯から出たときは血が快く流れて気持も稍ゆったりした。けれども彼れはひたすらに退屈だった。彼れの顔を見ると誰れもが警戒する。そのおびえたような眼を見ると彼れは苛々した。そして自分の身の廻りには、鉛のような重い気が漂っているように思うのであった。
　彼は遂に此の気色の悪い人々の間にいる不快に堪えなくなって飯場を出た。裏へ廻って隣の沢へ通う道を登って行った。左に茂っている深い木立を抜けると、そこには谷に臨んだ旧坑がある。それは佐竹時代とも烈公当時に掘ったとも云われている錫の廃坑であった。年経た洞窟の中には一面に苔が蒸して、闇を好む蝙蝠が夥しく巣くっていた。夕暮になると洞の中から此の小さな動物の羽音が凄まじく聞えて来るのであった。それは丁度烈しい風の吹くような響であった。水が入口から一杯に溜っていた。ぴちゃんぴちゃんと岩から滴るかすかな水の音が岩壁に響いて、静かな洞の中にはいつでも優しい諧調を奏でていた。
　彼れは薄暗い木立を抜けてその旧坑の前まで来ると、ふと中を覗いて見た。けれ共そこには黒い冷たい闇より外には何もなかった。洞の前は昔し切り出した岩片で平らにならされて、谷も半ば埋められていた。その石塊の積った懸崖にも古びた灌木が生い茂って、深い谷底を隠してい

た。四辺はただ静かであった。名も知れない小鳥が思い出したようにけたたましく飛んだあとは、直ぐに圧しつけるような寂寥にかえった。

西をむいたなだらかな山腹を午後の日が照らしていた。彼れはその柔らかな叢の中に腰を下した。腕に抱えた両膝の間に顔を埋めて、恰度その静かな自然の中に置かれた岩のように固まっていた。彼の心にはその仲間に対する反感が火のように燃えていた。彼れがそれを強て圧えようとすれば、遣る瀬ない激情になって、骨を削り血を吸うように彼を苦しめた。時としては鬱積した瓦斯のように爆発する事もあった。彼れは争って仲間を傷つけた。腥い血の香を嗅いで喜ぶ程残忍にもなっていた。争の後の寂しさに苦しむ事も多かった。彼は仲間の顔を見ないように声を聞かないように努めるようになった。深い木立の奥にも、谷間にも、高い山の嶺にも、沈黙に眈る場所を彼れは見出した。その気味の悪い沈黙と危険な争闘から仲間は段々離れて行った。孤独になり行く寂しさも彼れは能く知っていた。けれども彼れはそれ以外に出ることが出来ないのであった。

——

彼の親も坑夫であった。彼れが何処かの山で生み落されてからも、生活に追われて安住の地を得られない両親が、山から山へ果敢ない流浪の日を送る中に彼れは育てられた。物心のつくまで彼れは山より外に何んな人が生活をしているかさえ知らなかった。彼れが小さな身体に鉱石箱を背負って、親父の後について暗い坑内に掘子稼ぎに行くようになってからであった。或夜、見張に宿直している事務員が寂しい夜の退屈まぎれに都の話をして聞かせた事があった。事務員は彼れに、都には三層五層という立派な家が立ち並んでいる。広い坦らな街の両側の物売る店は、赤や黄や紫の華やかな色彩で飾られている。夜も眩い瓦斯や電灯の光が昼よりも明るく輝いて、美しく装い凝らした人々が歩いている。美妙な音楽はそこここから起って、いつも春のような楽しさがあると云った。そして絵葉書や雑誌の口絵を出して見せた。

そのとき彼れは初めて、自分が今まで見て来た寂しく荒れた山や村の生活の外に、そんな美しい華やかな世界のある事を知ったのであった。彼れの幼い心にも、底も見えない程暗く深い井戸のような坑内から、朽ちかかった梯子を慄える手に握りしめて登ったり、崩れ落ちる大きな岩に圧されて死ぬ事のないような、美しい都に安楽に生活する人人を幸福だと思う念が湧いた。——驚異と羨望に充ちた目をもって、彼れはいつまでもその絵葉書に見入っていたのであった。

彼れが十五の年であった。彼れの親は長い間吸い込んだ鉱毒や煙毒の為に坑夫病（よろけ）になった。執念深い病はその身体から精気と力を奪って了った。稼ぐ事の出来なくなった父親は土気色に瘠せ細った顔をして、毎日力のないせきをしては黒い痰を吐いていたが、遂に思い切って金次を兄弟分

の家に預けて、仲間が作ってくれた奉願帳を胸にぶら下げて、妻を連れて、金次には、
「坑夫なんかしていると長生が出来ねえから、手前は早く足を洗えよ」と云い残して、果てしない旅に出たが、半歳程してから北国の山で死んだと云う知らせが来た。母親は新らしい亭主を持って何処へ行ったかわからなくなって了った。

負け嫌いだった彼れは、此の悲しい運命の訪ずれにもめげる事なく、伸々と育って行った。細い少年の腕一つに己が身を支えて、山から山へ流浪もした。幼い時からその道に仕込まれた彼れは、十七八の頃にはもう人に勝れた腕前の坑夫になって何処の山でも威張って通れるようになった。若い血のそそるが儘に放浪もした。夢のような望を胸に描いて、何のこだわりもなく山を歩いて、気が向けば止まって働き、飽けば又当てもない旅に出る。身軽な自由の生活は若い彼れには楽しかった。けれども時として何か物思いに耽ったときなどに、枯木の様に色も香もなく朽ち果てて行った父親のみじめな最期が胸に浮ぶと自分の手で自分の命を削る様な職に従う果敢なさをつくづくと思うのであった。――そんな時に彼れは、美しい都に生活する人々の幸福を思った。――

秋から冬へかけて、冷酷な自然の力に放浪の自由を奪われる労働者は、眠に入る蛇のように物憂い退屈な時を過さなければならなかった。野山の木の葉が色づき初めて、山路におりた霜柱が、やがて来る冬の烈しい寒さを思わせるようなときであった。彼れは思い切って、都へ生活を求めに出た。

都の街は彼れが長い間夢に描いていた程美しいものではなかったが、初めて見る彼れの目を驚かすには十分の力をもっていた。車馬の入り乱れる巷にも華やかな絃歌やさざめきの湧く色街にも、彼れの心は巧みな手品師の前に立った人のように、他愛なく引きつけられて了っていた。整った家や飾りたてた店の中に住む人を見ては、彼はひたすらに羨ましく思った。寂しい単調な山奥で獣の住むような茅小舎や汚れくさった長屋に佗しい日を送る自分達の果敢なかった暮しに比べて、都に住む人ばかり生甲斐のある日を送っているようにも思った。彼れは大きな店にはいり込んで自分を使ってくれと頼んでみた。しかし銅山筒袖に胸合せの腹掛けをかけた彼の坑夫姿と、まだ見も知らぬ人の口から出る突然の懇願は聞く人々に怪しい警戒を与えたばかりであった。彼れは口入屋にも行ってみたが、そこでは工夫か土方になれと云った。がそれは坑夫に等しい職業である事を彼れはよく知っていた。僅かな金は直ぐに失って了った。飢え疲れて都の町をさまよって、嘲笑と侮辱と失望の外には、遂に何物も得られなかった。

弱々しい冬の日が、停車場の色のあせたペンキ塗りの上にしみつくように慄えている、氷のような風の吹く朝、汽車賃のなくなった彼れは、煙を吐いて行く汽車を空しく眺

めて、霜柱のたった田舎道を力なく歩いて、いやな山へ帰って行った。

彼れは著しく沈鬱に怒りっぽい人間になって行った。些細の賃金のいきさつにも好く事務員と争うようになった。時には仲間の事まで買って出た。そんな時の彼れは自分の主張の徹るまで頑固に云い張るようになった。

「坑夫だって人間だ、石盞を被って働いて馬鹿にされてたまるかい」と云うのが彼の口癖だった。事務員と争っては、絶えず浪人をするようにもなった。

或る年の事だった。雪の深い北国の山に、見込みのある金の旧坑が発見された。山が売れるか成り立つかすれば、思い切って礼をするからと云った鉱主の言葉を真に受けて、彼れは雪に囲まれた山奥に一人して、餓と寒さと戦って苦しい一と冬を過した事があった。往古の土蜘蛛みたいに山腹へ掘り込んだ土小舎の中に送る沈黙の幾日かを寂しさに堪えないで、気も狂わしくなる事もあった。幾日目かに町から定まって来る仕送りが、激しい吹雪に二三日遅れると心細さに堪えなかった。

何百年か昔に掘った人の精の残っているような陰惨な旧坑を見廻るのが山番の彼の役だった。深い旧坑の奥の斜卸にはいつの世からとも知れない古い水が溜っていた。そこに行くとカンテラの火が黒い水の面に映って、気味の悪い淋しさがひしひしと襲って来た。何百丈数とも云えそうな横樋を追ってだだ広く掘った跡には、カンテラの弱い火は隅々までわたらなかった。

坑道の中に岩の落ちそうな場所があると、留木を当てて繕った。寂しく冷たい仕事に手間取って小舎に帰ると、囲炉裡の火はいつも絶えていた。湿った榾には容易に火がつかなかった。濃い煙ばかりぷすぷすたって狭い小舎の中はすぐに息苦しくなった。差しかけた茅屋根に積った雪は、煙の温みで溶けて目の前に落ちた。煙にむせて外に出ると灰色の空からは、粉のような雪が風に捲かれて濃く薄く流れるように降っていた。そんな時に一面に真白な向うの山の峠に、仕送りの荷を積んだ馬の影がぽつんと黒く見えると、彼れは跳り上って喜んだ。小舎に来た馬方を少しでも長く止めて置きたいと思って、彼れはよく喋舌ったが、馬方は雪の山路の暮れるのを恐れて急いで帰った。前にも増した孤独の寂しさが彼れを苦しめた。がまた、当分食物にも不自由しないと思うと心強くもなった。夜になると風が闇の中を吹き荒れた。雪に蔽われた山や谷は悪魔のように唸っていた。風の絶え間には、渦を巻いて落ちて来る軽い雪片のふれるかすかな音が、死の訪れのように淋しく聞えた。彼れは氷のように冷たい蒲団にくるまって、春になって山が売れて沢山金を貰ったらと楽しい空想に耽っていた。——薄暗いトンネルを歩くような、単調な日は長かった。——春近くなって長い間閉じていた、厚ぼったい雲が切れて、久し振りに青空を眺めたとき、彼の心は喜びに充

ちていた。
　雪解の水に谷川の流れが増して、枯草の下に萌え出てる若芽の見られるようになった頃には、髯の生えた洋服姿の男や商人風の人達が、立ち替り鉱主と一緒に山を見に来た。彼れは物慣れた様子でカンテラをさげて坑内を案内した。鉱量の豊富な辺りは殊に注意して説明した。間もなく山は売れて鉱主は巨万の金を獲たが、石井に与えた恭しい紙包の中には十円紙幣が十枚あった許りであった。
　凄まじい冬の自然の圧迫に堪え、昔しの流人にも勝る孤独の寂しさを忍んで来た、命がけの労苦に対する報酬として、又鉱主の得た金に比べて、彼れはその分け前の余りに少ないのに驚いた。初め鉱主の誓った言葉を思うと憤怒の情に堪えなかった。
　その夜彼れは匕首を懐ろにして鉱主の宿を訪ねた。一時に巨万の富を得て気の驕った鉱主の周囲には美しい女がいた。前には酒が並んでいた。それを見ると抑えていた怒りは彼れの胸を衝き上げた。蒼くなってわなわな慄えながら坐った彼れの物凄い形相を見たとき、鉱主は危険が迫ったのを感じた。便所に行くふりをして座敷を出た切り鉱主の姿は再び見る事が出来なかった。
　巧みにかわされた口惜さに彼れは、
「やい狸野郎を出さねえか」と宿屋の中を暴れ廻ったが、その時既に来ていた警官に押えられて了った。彼れが留置場から放免された頃には、鉱主はもうその町にはいなかった。彼れの得た餞と寒さの報酬は直ぐに達磨茶屋の酒と女に消えて了った。彼の胸に燃え初めていた反抗の火は、漸く強い焔になった。
　野州の山に大暴動の起った時も、生れつきしなしなと機敏な身体を持った彼れは、暴動の主唱者よりも勇敢に闘った。手から離れると直ぐ爆発する導火線の短いダイナマイトを投げつけ、家を焼き人を傷つけて、血と火の漲る叫喚の裡に、全身に充ち渡った反抗の念を熔け込ましたが、怖ろしい軍隊の力に圧迫されて重だった者の多くが捉えられたときも、素敏い彼れは、山伝いに巧みに逃げ終せた。
　けれ共彼が日蔭者の浪人になって、山から山へこっそり隠れて使役を求めて渡り歩くようになったとき、所々の山に散在してる彼れの兄弟分や仲間達は彼れを隠匿する事を恐れた。何処へ行っても彼れは態の好い口実で追っ払われた。突き刺すような冷たい山風の吹く冬になっても彼れは、薄い着物に慄えながら苦しい旅を続けなければならなかった。
　彼れは、自分が暴動の時に身を挺して働いたのはその遣る瀬ない反抗心を満足させる為であった事は能く知っていた。然し又それによって仲間に多くの利益を与えられたとも信じていた。現に野州鉱山の暴動が導火になって、二三の山に同じ事が起って以来何処の鉱山も暴動を恐れて、坑夫に対する態度の著しく変ったのは明らかな事実であるのに、今自分を恐れ疎んずる仲間のけちな態度に出会って

は、事ない時ばかり友人だの兄弟分だのと、義理堅く、死生も共にするような顔をしていて、一旦事が起ると巧みに他人の勇気を利用してひたすらに己れ等の利益と安逸とを計る、彼等の卑劣な貪慾な心を憎しみ卑しまずにはいられなかった。

味方と思っていた人々に裏切られた孤独の寂しさは、彼の心を攪き乱した。そしてその仲間に対して抱くようになった新しい反感は、曽て社会や資本家に対して、おぼろげに抱いていたそれよりも更に激しく強かった。

警戒の手がゆるんで、彼も漸く職にありつけるようになってから、彼れは住み込んだ山では必ず仲間の妻を犯した。その優しい顔と兇猛な性格と敏捷な身体はいつも巧みに利用された。僅かな事にも争えば直ぐに刄物で人を傷けた。一二年の中に彼の名は何処の山でも悪魔のように呪われた。彼れは又使役の口が得難くなった。――苦しい放浪の日は再び続いた。

常陸の奥の池井鉱山が開かれて、萩田が飯場頭になったと聞き伝えると、彼れは直ぐに尋ねて来た。萩田は彼れが愛想をつかした仲間の中で、まだ親しい情をつないでる唯一人の兄弟分だった。鬼と云う綽名を取ったその半生の歴史を語る、腕にも足にもある刀傷や弾痕だけでも、気の荒い坑夫共を征服する力があった。石井が此の山に来た時見張所へ使役願を出すについても、仲間中から苦情が起ったが萩田は石井の身に就て起った事は凡て自分が引き受けると云ったので、誰れも遂に黙って了った。然し石井の素行は決して穏かにはならなかった。彼れは三の番に入坑した仲間の留守へも這い込んだ。彼れが此の山へ来てから××××××××××は尠くなかった。怒れば直ぐに人を切る彼の荒い気は、誰れも能く知っていた。彼れの為る事には何の故障も起らなかった。その意に従った女達は余儀ない堅い沈黙を守っていた。けれども或時は夜中に不意に女の亭主に帰って来られて、息を殺して低い床下を這って逃げた事もあった。そうして危い事に出会うのは彼の淫蕩を制するより、危険を好む血を湧き立たせる力があった。然し此の放縦な思うが儘の生活も、彼の心に燃えている激情を消す事は出来なかった。

重苦しい雲のような沈鬱の気が、時々彼れをくるしめた。そんな時には凡ゆる物を粉砕して了いたくなった。見る物は凡て憎悪の種だった。自分の身体さえ、大きな岩に圧され薄紙のようにへし潰れたら快かろうと思う事さえあった。然し繰返された苦しい経験は彼れを怪しい沈黙に導びいた。そして彼れは今日のように、谷間や嶺の人気のない自然の中に来て、沈思の幾時かを過すのであった。

そこには憎らしい人の姿も声音もなく、温かい日の光が無言の歌をうたいながら、凡ての物を同じように育てている。空も地も草も木もその大きな調べの中にかすかな吐息をついている。彼れの心も優しい母に抱かれたように、静まり落ちついて行くのであった。懐かしみや憐れみの優し

い姿さえ、ふとその心に現われたが、燃えたぎってる激情に追い払われてすぐに影を消して了った。
山蔭に日が沈んで、四辺が紫色に暮れかかると急に肌寒くなったので、彼れは静に起き上った。旧坑はもう入口から真暗になって、闇の好きな蝙蝠の羽音が、洞の中で烈しい唸りを立てていた。深い木立の中にも、薄暗い夕闇が漂って、木の葉は静に首垂れていた。
落ちついて歩んで行く彼の姿には、いつもの苛々しさも見えなかった。
その夜であった。彼れは早くから隅の方で蒲団を被っていたが、中々眠りつけないので一人でじりじり苛ついていた。十時過ぎると二の番に出た坑夫や掘子が帰って来て、飯を喰ったり湯に入ったりするので、飯場の中は一としきり騒がしくなった。が、やがて夫等の人達も寝て了って寂寥は再び帰って来た。しばらくすると下の茅小舎や村から通う居残りをした掘子達が、各自にカンテラの油煙をあとに長く曳いて闇の山路を帰って行った。飯場の前を通るとき皆なが「お休みなんしょ」と声を揃えて云った。が赤ずんだ焔にうつる真黒な塊は、すぐに飯場の前から消えて了った。その群が茅小舎の前へ行った頃、誰れか大きな声で選鉱歌をうたった。「いやと思えばよ――」と高く張り揚げて長く曳いた声が、闇を美しく彩ったが、「照る日も曇るよ――」と落したときには向うの山の峠の方に薄れて了った。

垢光りのした蒲団に柏餅にくるまって寝ていた彼の頭には、云い知れぬ寂しさがむくむくと拡がった。いつもの様な苛ら立たしさが彼の心を襲ってきて、じっと寝ている事が出来なくなった。彼は蒲団をはねて起きて見た。暗い梁から吊した洋灯の鈍い光が粗雑な建物の羽目にぶら下げた汚れた仕事衣や、両側に並んで寝ている一人者の蒼ぶくれた顔をだるく照していた。いぎたなく大きな口を開けている者もあった。にょきっと両腕を出してる者は土左衛門のように見えた。誰かぎりぎりっと歯切しりをすると又誰かだらけた声で歌のような寝言を云った。それ等の顔は生きてる者のようには見えなかった。
火の気の絶えた囲炉裡は大きな口をだらしなくぽかんと開けていた。
彼れは此んな寂しい山奥で、甘い酒や美しい女に親しむ事もなく、危険の多い仕事に侘しい月日を送って、中年になれば坑夫病にかかって、枯木のように朽ちて行く人達が、果敢ない身を不思議に思い患う事もなく安閑と寝入ってる姿を見ると、片っ端から叩き起してやりたくなった。然しそれは結局何にもならない事を思うと、彼れは又寂しさに堪えなくなった。
じりじりと寄せてくる焦燥の念に彼はじっとしている事が出来なくなった。立ち上って寝衣の裾をまくって、静に皆の枕元を通った。労れに深く寝入ってる人々はそれに気のつくものもなかった。外に出ると高山の春の夜は死のよ

うに暗く冷たく静まり返っていた。暗碧の空に夥しい星の光っている中でも村境の峰に輝いてる星は、殊に鋭い光を放っていた。前の筧から流れ落ちる水は夜も単調な音を繰りかえしていた。

彼れは誰か女のところへ行きたいと思った。三の番に入ってる坑夫の名を思い浮べて見たときその中に前高のいる事を考えた。前高の妻のお芳は美しい女だった。彼の身体には冒険者のような勇ましい血潮が湧き上った。石ころの多い道を、静に音の立たないように探りながら歩いて前高の家の戸の隙から中を覗いたとき、お芳は亭主が仕事に出たあとをまだごとごと片づけていた。彼は何となく這入りにくいので少時木立の蔭に身をひそめて、次に覗いた時、お芳は蒲団の上に坐って何か思いに耽っているようであった。

彼れは建附けの悪い戸をそっと開けて中に這入った。不意に目前に現われた人影に驚いたお芳は、慌てて声を揚げようとしたが、彼れはすぐに匕首を抜いて見せた。そして手を振った。お芳はそれが石井である事が判ると痙攣（ひきつ）ったように声が出なくなった。恐怖と絶望におびえた優しい目は、じっと空を見詰めていたが、間もなく諦めたようにがっくり首垂れて了った。鈍い洋灯（ランプ）の光が蒼くなった横顔を照らして、身体のふるえが着物の端れで波打っていた。石井は匕首をしまうと静かに戸を閉めて、何事もないような顔をしてお芳の側に坐った。

「今晩は」と低い沈んだ声で言ってから、

「おっかねえかいお芳さん」と言いながら突然その腕を女の首に捲いた。身をすくめた女の、柔かい慄えが彼の身体に伝わった。彼の目は蛇のように光って蒼白い頬には血の色が浮んだ。

「もう仕方がねえさ、なあ」と女の顔を覗き込んだとき、蒼白くなった頬には冷たい涙が流れていた。その萎れた姿を見ると彼れの血は犠牲（にえ）を得た野獣のように荒れ狂った。

彼は頸を伸して洋灯の火を吹き消した。押し倒された女は逆らいもしなかった。

三

夜中に帰るとき彼れは、

「さよなら、又来るよ」女の耳に囁いて接吻をした。飯場へ帰って再びそっと冷たい蒲団に入ってからも彼れはついに眠れなかった。薄白い眠に悩む中に夜が明けると、彼れはすぐに仕事衣を着て飯場を出た。朝靄は村へ通う道の上を、山裾をめぐって静かに流れて、軍鶏は太い声で閧をつくっていた。

お芳ももう起きて家の前に出した石油罐で作った竈の下を焚きつけていた。真白なむくむくした濃い煙は、湿った地面を這って靄の中へ溶け込んでいた。

石井は側に寄って、

「お早う」
と態と大きな声で言った。びっくりして顔をあげたお芳の眼には、煙に痛んだ涙が一杯溜っていたが彼の顔を見るとニコッと笑って下を向いて了った。彼れは何となく満足を感じた。その心は喜びに跳った。首を振って鼻歌をうたいながら見張の方へ登って行った。昨日佐藤が越えて行った山の凹みからは今朝も晴れた空が覗いていた。高く抜き出て聳えた山の頂きは朝陽に赤く輝いていた。

見張所の土間の大きな囲炉裡には、積み上げた炭が赤くおこって焔を立ててるまわりを、三の番の坑夫が五六人して取り囲んで、濡れた仕事衣を乾かしていた。熱にふれた所だけ腹掛や股引から白い湯気が立っている。空も地も闇の真夜中に、何百尺と深く掘り下げた坑底で、岩の目から雨のように滴る水を浴びて仕事して身体の心まで冷え労れた坑夫等は土気色の顔をしてぶるぶる震えていた。前高もその中にいた。石井の顔を見ると

「兄弟、馬鹿に早いなあ」と云った。

「一人者は早起きよ」石井はいつものように眉をひそめながら言った。疲れ切った人達は交る交る身体の向きをかえては温めていた。誰ももう口をきくのも惰いように黙っていた。奥の物置のような宿直部屋でごとごと音がして、吉田と云う若い事務員が、眠たげに目をこすりながら出て来て、

「石井は塩子から来る女でも張る気で早く来たんだろう」

と笑いながら言った。

「お前さんこそ昨夜帰らねえから村で多勢待ってますぜ」

と石井はなかなか負けていなかった。三の番の者達は吉田の顔を見ると

「旦那上りにゃすこし早いけど、濡れて寒くって仕方がないから帰しておくんなさい」とせがむように言った。

「毎日早く上っちゃ駄目だぞ」と言いながら、吉田が判座帳を渡すと、坑夫等はペコペコお辞儀して鑿と鎚を担いで、赤い朝陽を浴びながら麓の方へ帰って行った。

石井は前高の人の好い顔を見たときは、気の毒の思いにも打たれた。がまた、彼んな奴に限って友達がいくら難儀していても知らん顔をして、事務員の機嫌ばかり大事に取る奴だと思うと、却って小気味のいい気になって後姿を見送った。その目には勝ち誇った色が浮んでいた。

仕事場について鑿を持って岩に対うと、彼は熱心に働いた。堅い岩を破る快さが、凡ての念いを奪っていたが、ダイナマイトをかけて気滞の抜ける合間を坑外に出て晴れ渡った空からたぎり落ちる春の陽を浴びて休んでいると、お芳の事ばかりが心に浮んだ――白い柔かい肌、赤い唇、うるんだ優しい目、そしておどおど慄えていた可憐らしい姿――それを思うと彼れは今でも抱きしめたくなった。

争闘や反抗の荒々しい日を送って来た彼の過去に恋はなかった。彼の目に映る凡ての女は、折折身を焼くように起ってくる本能を満足させる道具であった、只その昏るめく

ような瞬間には、何んな暴力をも辞さない代りに、執着も未練もなかった。それが今優しい恋が初めて彼の心に訪れた。彼れは嘗て知らなかった楽しく甘い空想に耽る事を覚えたのであった。

　仕事から帰りしなにも彼れは砕鉱場の入口に立って中を覗いた。広い小舎の羽目に添った四周には、土間に莚を敷いて、大きな角石を前にした女達が列んで坐っていた。女達が角石の上に鉱石をのせて鉄鎚でどしっどしっと砕く音や、音頭に合せて歌う選鉱歌の声が小舎の中に溢れていた。頭の上に張ったマンゴク網の上から、選鉱夫が一輪車で運んで来た鉱石を明けると、長い網を転る石の音は雷のように響いて来た。廂から射し込む板のような日の光に、茶褐色の細粉がぎらぎらしていた。石井は白い手拭を冠ったお芳を隅の方に見出すと、じっと見詰めていたが、お芳が顔をあげたとき二人とも微かに笑った。

「石井さあ、また見込みをつけに来ただかね」鉱石を箱箕に入れて配っていた世話役のお兼という婆さんが、しゃがれた声で突然怒鳴った。

「お前達がなまけるから、俺が監督に来てやったのよ」と石井は背中の道具をゆすりながら云った。

「石井さあに見込まれると、はあ助からねえぞ、若え者は皆な顔隠してろよ」と婆さんが云ったので、お芳は自分の事でも云われたように身をすくめた。

「くそ婆あ、余計な事をいうな」石井は真顔になって怒鳴ったが、そのとき鳥打帽子を頭の後に冠って見廻りに来た事務員の安藤が、彼の後にそっと立つと肩を叩きながら、

「おい石井、ここで女にからかってちゃいけないから、早く帰って村へでも遊びに行けよ」と云った。石井は振返ると一寸間の悪そうな顔をしたが、

「だってお前さん。遊びに行ける程稼がせねえんじゃありませんか」と云いながらまたお芳の方を見た。監督の姿が見えると女達は又熱心に石を砕き始めたので、どしっどしっという響が強くなって、お芳も下を向いて了っていた。

　彼れは心に微かな喜びを感じて飯場へ帰って行った。

山蔭に日がかくれると家の中は早くから薄暗くなるので坑夫等は往還に出て子供のような戯れに耽っていた。陽はまだ沈み切らないので空は明るく大気は暖かだった。石井も長屋の前をぶらぶら往来していたが、ふと前高の家の前に立ち止まって中を覗いてみた。夜を日にかえた眠から覚めた前高は、薄ぼんやりした顔をして火鉢の側に坐っていた。お芳はまだ仕事衣の儘で夕餐の支度をしていた。

「これから晩飯か」と云いながら石井は中へ這入った。

「晩飯だか、朝飯だかよ」と前高はがっかりした声で言った。向うをむいて野菜を切っていたお芳は振りむきもしなかった。石井が上り口に突っ立っているので前高は、

「さあ上って茶でも飲んでけよ」と火鉢の側へ薄い座蒲団を押しやった。

家の中はもう暗くなっていた。石井は昨夜の事を思うてふと見やったが、何にも知らない前高は下を向いて、鉄瓶の湯を急須に注いでいたので、気軽くなった彼れは、
「どうだいこんだの仕事場あ随分滴るだろう」と訊いてみた。
「滴るって兄弟全で滝のようだ。三の番じゃ外へ出たって太陽(おてんと)さまあなしよ。焚火をすりゃ危ねえって叱られるし、帰ってくると身体中氷みてえだ。昼間あ寝られねえもんだから稼ぎもみんな水よ——ああ全くやり切れねえ」と泣くような顔をした。石井は別に可哀想とも思わなかった。それよりも彼れは働いているお芳の手元に気をとられていた。
「三の番は全くいやだなあ」と思い出したように云った。
支度が出来るとお芳も上って来て、
「石井さんは一の番でいいねえ」と云いながら膳ごしらえをしていた。
「おれたちゃ昼間だって夜だって同じ事よなあ兄弟」と石井は薄笑いをして前高の顔を見た。
「人なんか何うだか知らねえけど、俺あ死ぬ程いやだ」と云った勢のない声は、薄暗い部屋の中に消えて了いそうだった。お芳は起って洋灯に火をつけた。狭い部屋は急に明るくなった。前高の後から女は「早く帰って」と言うような目配ばせをしたので、
「さ俺もいって飯を喰おう」と云って石井はたち上った。
「一杯つきあって行かねえか」と前高が止めたが
「俺は飯場で盛っ切りをやった方が好いや」と言って石井は外に出た。四辺は柔かな薄闇がとじていた。彼れは幸福を感じて歩いた。

その夜も更けてから、彼れは又お芳のとこへ行った。お芳はもう昨夜のように泣きもしなかった。両隣の家とは羽目一重で劃られて、鴨居は行き抜けている部屋の中では、大きな声で語り合う事も出来なかった。蒲団を被ってお芳の耳に口を寄せて、
「俺あ真剣にお前が可愛いいんだ。此んな事をしたって怒ってくれんな」と云った。お芳は黙って石井の為すが儘になっていた。

石井はお芳の事計り思い続けるようになった。初めて知った恋は彼れには苦しいものだった。眠る間さえない隠れた歓楽に耽る夜が続いて、彼の顔には激しい疲れと衰えの色が現われた。然しその目や眉に踊っていたとげとげしい影は消えて何処かに優しさが浮んでいた。——目付かったところで暴れてやる丈けだ——と思っていたような、猛々しい気は失せて、お芳の為に息をひそめて猫のように用心深く歩くようにもなった。

坑夫の仕事時間が交替になる日の前夜だった。いつものように晩(おそ)くなってから彼れはお芳のとこへ行った。お芳はもう蒲団を被っていた。彼はその枕元へ坐るとほっと息を

ついた。むくむくと夜着を動かして女は目から上だけ出して彼の顔を見た。彼れは思い切ったように沈んだ声で言った。
「なあお芳さん、明日っから前高が二の番になりゃ当分こうやって会えねえんだけど、俺あ考えると寂しくって――つまらなくって――なあおい俺と一緒に逃げて呉れねえか」
それは女には思いがけない事だった。お芳は聞いてる中に身体をぶるぶる慄わせた。
「まあ――そんな怖い事が」とひっつるような声でやっと言った。
「なあに、何にも怖ねえ事ああありやしないよ、近所の山にいて工合が悪けりゃ北海道だって台湾だって俺達の働く山あ沢山あら、前高ぐれえ追っかけて来たって、俺あんな奴に指でもささせやしねえ。安心して一緒に行けよ」彼れは唯お芳一人が欲しかった。それが為なら何んな手段も苦痛もいといはしなかった。一日でも二日でも――それから後はどうなろうと――事情も結果も思う暇さえないのであった。
そのときお芳は嵐のような恐怖に襲われていた。寝ている事も出来なくなったのでそっと起きて坐ると、蒲団の中に突伏しておろおろ泣いた。お芳の為に石井は懐かしい恋人ではないのであった。物凄い力にひた圧しに圧しつけられて胸苦しい幾夜さかを過しはしたものの、憎くもない前高を捨てて逃げるような気にはなれなかった。けれども、いやと云ったら一と挫ぎに殺しかねもしない、獣のように荒い男の力がひしひしと身に伝わってくるように感じるので、頭の中は恐れと嘆きに石のように固まってしまって、身体ばかり震わせて声さえろくに出せないでいた。
「なんとか云わねえか。ええ黙ってんないやだからか」と石井は又低い沈んだ声でささやいた。
「え、おい」と肩口を突かれたので、お芳は涙に濡れた、おどおどした目をあげたが、火のように燃えている石井の目に出会うと、直ぐに顔を伏せて了った。
「こうしていたって又会えるじゃないの、私にゃそんな恐い事は出来ないもの」しばらくたってから、震え声でお芳はやっと言った。女の卑怯たらしい言葉を聞くと、石井の怒は破裂しそうになった。手足はびりびり慄えて、眉毛も顳顬も烈しい痙攣にぴくぴく動いていた。お芳はできる丈け身体を固く縮めて微かな苦しい息をついていた。――
「お前も随分不貞腐れ女だなあ、前高一人を大事にもしなけりゃ、俺と逃げる事も出来ねえなんて、かまわねえから俺大声で怒鳴り出すぞ」と怒りに慄える声で石井の云ったのが、お芳の耳にはもう大声で怒鳴られたように響いて氷のような恐怖がその背筋から全身に流れた。――羽目一重の上は鴨居が行き抜けている此部屋で少し大きな声でも出されて近所隣りにそれが聞えたら、二人とも簀巻にされるか打殺されるか――何れ無事では済まないと思うと、お芳

はどうして好いか判らなかった。蒲団に顔を当てた儘、声を呑んで身もだえして泣いていた。石井はそのぶるぶる震えている後髪のあたりを射すような鋭い眼で睨んでいた。

「あああ、手前みたいな根性骨の腐った女と心中したって初まらねえや、こうやってやらあ畜生ッ」起ち上りながらお芳の背中を力任せに蹴飛した。鞠のように転ったお芳はその儘苦しそうに泣き続けていた。

「畜生ッ——此の位のこっちゃ——む——」突立って唸りながら睨んでいたが「覚えてろ」と云い捨てると土間に降りて外に出た。彼れの頭の中は旋風の吹き廻るように掻き乱れていた。闇の中を吊り上った眼を据えて睨みながら我むしゃらに歩いて行った。

真暗な足下もろくに見えないような凸凹な山道を彼れは無茶苦茶に歩き廻った。——暗碧の空には無数の星が冷たく光って真黒な高い山は黙々として脅かすように闇の中に聳えていた。更けた夜の冷たい大気が絶えず彼れの熱した頬を冷やしていた。

怒りの頂点に達した瞬間には、塵一つ惜しい物もないと思った彼の心にも、やがて燃えさかる焔を消す水のように、云い知れぬ寂しさが滲んで行った——彼は今日の夕方までもお芳が一緒に逃げると云って呉れたなら、今夜の中にも支度して此の山を脱走しようと思っていた。お芳を伴れて歩く放浪の楽しさを胸に描いた丈けでも、その心は喜びに跳っていたのに——美しい幻も残ることとなく消えて了った今は、ただ遣る瀬ない寂寥と悲哀ばかりがその心を痛ました。彼れはそのとき出来る丈け多勢の人と争って、身体が鱠になるまでも闘ってみたいような気も起った。また自分の口に爆発薬を咥えて火をつけて、むずつく身体を粉粉に吹き飛ばして了いたくも思っていた。

夜明け近くまで狂人のようになってうろつき廻ってから、彼れはやっと飯場に帰ったが、遂に一睡もしなかった。朝起きたとき彼の顔は凄い程青くなっていた。凹んだ眼は真赤に充血して、眉の上には抉ったように深い皺がよっていた。彼れはその日からお芳に出会うと、憎悪に充ちた目で射抜こうとするように烈しく睨みつけた。お芳は彼の鋭い眼を恐れた。遠くからでも彼の姿が見えると物影に身をかくすようになった。

四

みすぼらしい山桜の花が散って、山の春はあわただしく過ぎて行った。その晩春の名残を彩る山躑躅は夕陽のように赤く青葉の中に燃えていた。若葉が放つ精気の強い香は木立の中に充ち渡って、若い坑夫等はてんでんにこだわりのない放浪を夢みるようになっていた。夕暮になると村境の峰には此処の飯場へ一宿を乞いに来る、浪人の姿がきっと見えた。それは一人者が多かったが、中には若い女房を連れた者もあった。

飯場にいる若い者たちも、春の誘惑にたえないように暇を取っては当てもない旅に出て行った。借金の多くある為に暇を取る事の出来ない者は、夜更けてから他人の着物を盗んで着て、そっと脱走する者もあった。飯場にいる者の頭数は殖えていったが、その顔ぶれは余程変った。夜になると彼等は暗い洋灯の下に集まって、雪の解けた北国の山や、空の碧い南国の新しい山の噂をして、旅好きの血をそそらせていた。けれども石井の顔はいつもそれ等の人々の群の中には見えなかった。

お芳を失ってから彼の心の荒みかたは、だんだん烈しくなっていった。暖かい日の照る間は裏山に登ったり、旧坑の前の谷の上に寝転んで、孤独の時を過していたが、飯場にいるといつもぶりぶり怒っていた。少しでも気に触れば火のようになって怒るばかりか、どんな危険な事をも仕出かしかねないので、誰れも彼には近づかなかった。彼は多勢の人の中にいながら、彼の周囲はいつも冷たい孤独と沈黙が取りまいていた。

日を浴びた大地が温みをもって暖かい吐息をつくようになると、森蔭や谷間にひそんでいた、大きな青大将や精悍な蝮の気味の悪い姿が、よく人の目につくようになった。石井は人の嫌いな蝮を平気で捕えては好んで喰った。彼の目に触れるのはどんな敏捷い毒虫にも悲しい最後の運命だった。午休みの合間にも仕事から上りしなにも彼れは根よく叢を探しまわった。鋭い眼をした銭形のある虫の姿を見出すと、何の恐れ気もなく彼れは素早く圧えつけて、小さな焔のような舌を吐く口元から、直ぐに二つに割いてしまって、執念深い虫が赤身にむかれた身体をいつまでもぴくぴく動かせているのを、彼れは平気でぶら下げて見張の前に湧いている清水まで持って来ては洗っていた。日の光に透して見ると皮のない虫の身体が瑪瑙のように美しく光るのを、彼れは楽しそうに眺めていた。目の悪い坑夫や、脾弱い掘子が寄って来て、

「兄弟俺に目を呉れよ」

「すまねえけど胆をおくんなんしょ」

などと云っては、まだ動いてる胆や、くり抜かれて可笑しく二つ並んで光ってる眼を呑んでいた。皮は傷薬になると云って誰かが大切に拾っていった。彼は傍の岩に腰を下すと、まだ動いているような肉を生の儘むしゃむしゃ噛り出した。或時東京から来た事務員が驚いて、

「石井、そんなものが甘いのか」と訊いた。

「こりゃお前さん鮪の刺身よか甘いんだよ、だけど此奴で酒を飲むと、あたるってえからいけねえけど――少しやって見ますかね」と千切って出した。

「石井の兄弟は余り蝮ばかり喰うもんだから、気が立っていけねえんだ」と坑夫等は噂していた。

晩春の沈鬱な日が続いた。空には鼠色の厚い雲が重く圧っ被さるように浮んでいた。単純な労働者等もわけの判らない物思いに耽っていたが、石井の顔には取り分け云い難

い苦悶の色が浮んでいた。彼は裏山に登って見ても鈍色の雲がすぐ頭の上から果てしなく続いていて、野も山も只けだるく息苦しいように見えるので、頭の中までその重い雲が拡がったように、どんよりとした物憂さを感ずるばかりであった。自分の身体一つを持て余した彼れは、病人のような顔をして、薄暗い飯場の汚れ畳の上に転がって、長く伸びた髪をつかんでジッと目をつぶっていた。

彼れの周囲にも屈託顔をした坑夫が七八人、ごろごろ寝ていた。

「あああ、稼がにゃならねえし、借金にゃなるし全くいやになっちまうな、——脱走でもしなきゃやり切れねえや」と誰か生ぬるい声でつぶやくように言った。

「まったくよ、此頃の銭にならねえったらほんとに酷いな、そのくせ鉱石は随分出るんだけど」向き合って寝ていた男が、勢のない声で合槌を打った。

「なあに、鉱主が一人でうまくやってるのよ、手前が儲けせえすりゃ好いもんだから、岩が堅くなるのに間代を下げやがるし、鉱石は矢釜しい事ばかり云やがるしよ、癪にさわる事ばっかりだ」

「ストライキでもやらねえかなあ」と誰か云ったので、皆が笑った。石井はそのときまで黙っていたが、

「おい皆なもう下らねえ愚痴は止せよ、俺あ聞いてる丈けでも頭が痛くなら、お前達や意気地なし野郎ばかりだから、ストライキでもやらねえかなあ、なんて人ばかり当てにしてやがら、——株ったかりがよく揃ってら」と大きな声で我鳴った。

「だって兄弟、お前にやってくれって頼みやしねえよ」と沈んだ声の男が言った。

「俺に言わなくったってよ、そんな事を言ってるまに三番鑿でも担いで見張へ行って掛け合って来い、それが出来なきゃ黙ってろってんだ——下らねえ」

「何もお前、愚痴を云ったって俺達の勝手じゃねえか」

「いけねえッ、俺あ愚痴を聞くなあ大嫌いだから止せってんだ、それでも云いたきゃ俺と喧嘩しろッ」と彼れは突然起き上った。然し誰れも相手になる者はなかった。いやな顔をして苦笑しながら、

「まあいいや、お前一人で威張ってろよ」と誰か云ったがそれきり皆黙って了った。やがて一人減り二人減りして皆何処へか出て行って了った。石井は、

「畜生ッ、面あみろ」と怒鳴って又仰向けに転がった。泣き出しそうな空が暮れて、灯の点く頃までも彼れは身動きもせずに寝転んでいた。出て行った人達が帰って来てからも、誰もいやな顔をして黙っているので、そこにも重苦しい沈黙が漂っていた。

快く晴れた日であった。仕事から上ると彼れは直ぐ湯に這入った。温い液体が毛孔にしみ込んで行くと、疲れに凝った筋は伸びて、冷えて鬱結した血はゆるやかにめぐり始

めた。湯から出ると彼れは衣服を片手に下げて裸の儘、晩春の午後の陽を浴びて澄みちぎった空を見上げたとき、その心に微かな喜びが湧いて来た。――珍らしくも人懐かしい思い――彼れは、誰かと笑い興じて話をしたくなったが、萩田のいない間は飯場にも長屋にも誰れ一人話相手はいなかった。

飯場に這入ると彼れは棚の上から行李を下して、新しい銅山筒袖や腹掛や半袴衣を出して身に着けた。乾いた跣足足袋をはいて外に出ると彼れは身も心も軽々と浮くようにに思った。――下の村には甘い酒も白粉をつけた女もある、――彼はそこに行こうと思っていた。

しばらくしてから彼れは青葉に囲まれた山道を快さそうに歩いていた。茅小舎から二三町下の岩の間から、此の山の銀明水と呼んでいる綺麗な水が湧き出ている。潔癖な坑夫の女房達は四五町の道を通ってそこまで水を汲みに来るので、彼れは道々、手桶に湛えた水の面に大きな草の葉を浮かばせて、重そうに提げて行く女に出会った。

「重そうだな、さげてってやろうか」と笑いかけた。

「石井さんに頼むと後がおっかねえからね」と女達は笑って行き過ぎた。

「ばかあ言うねえ――あははは」と面白そうに彼も笑っていた。

凸凹した岩の間に灌木の生い茂った崖道を過ぎると、そこには広々と続いた雑木林があった。そのあたりは、両側に連る山も低くなって遥かに隔たっている為に、青葉の深い林の中にも明るい光が漲っていた。林のずっと奥からは山から来る小川のせせらぐ音も聞えたが、年毎の洪水に拡げられた河原には若草が一杯に勢よく蔓っていた。

彼れは道端の細い竹を折って無暗に振り廻して歩いた。竹が蔓草の大きな葉が目につくと力をこめて打って見た。竹がひゅーッと鳴ると、葉は鋭い刃物で切られたようにひらひらと落ちた。彼は又大きな声で唄い初めた。――林の奥に響く反響は彼と歩調を共にしていた――林の端れまでくると、蒼空の下に村へ越える峠の道が、青草の中に黒い線を引いていた。

その峠の頂きに登ると下の村はもう手に取るように見えた。左に小高い丘の上に建てられた事務所の白壁が、夕近い陽を浴びて光っている。働きに来ている女達の冠った白手拭もちらちら見えた。遠く福島境の連山も霞んだ大気の中に長く続いて、いぶしをかけた銀のように光る那珂川の流れは、遠くの森や野の間にそのゆるい姿を隠見させていた。

峠の下には此の界隈でたった一軒の茶屋があった。足袋はだしの彼れはわざと入口から這入らずにそのわきの崖を下りて川に臨んだ座敷の方へ廻って行った。火鉢のはたに閑らしい顔をして坐っていた女達は彼の姿を見ると、

「おやいらっしゃい」と笑って愛想よく迎えた。

石井が座敷に上ると遊んでいた女達は三人とも出て来て

彼の相手をした。肥った丸顔の団子鼻の女の名はお金であった。瘠せた二人はお千代にお花と名前丈けは美しかったが、どれも青ざれた生気のない顔をしていた。石井は平素と全で別の人のように、面白そうに話して笑っていた。川向うの山の新緑の梢を渡った風がそよそよと部屋の中まで訪れた。女達も酔ってくると声を揃えて歌った。お花は立って踊り出した。唄い疲れると運んで来た肴をむしゃむしゃ貪り喰っていたが、何も彼も楽しそうに彼れは眺めていた。

「山から随分遊びに来るかい」と石井がきくと、

「ええ毎晩大てい二三人――ね」とお金は二人を見ながら云った。

「じゃ随分兄弟分が多いわけだな」

「ふふん」と笑ってからお千代が「だけどあなたはちっとも来ないわね、あの取立てのときちょいと来たんでしょ、――あなた何んて云うの――お名前は」と甘えるように云った。

「来たくったって肝腎なものがなくちゃ来られねえじゃないか、俺あ石井ってのよ」

「あら、あなたが石井さん！」とお花が頓狂な声を出したので、皆な顔を見合せて笑った。

「何が可笑しいんだ」と石井は妙な顔をした。

「だって山から来る人だって村の人だってみんな石井さんて人は恐い人だって云ってるわ」とお千代が云った。

「なにおっかねえ人なもんか、こんなに優しいじゃねえか」と石井はくすくす笑った。

「ほんとねえ見たとこ丈けは」とお金は云いかけてから「これからちょいちょい来て頂戴」と妙な目つきをした。

「それゃお前可愛がって呉れさえすりゃ」

「ええええ、皆して命の続かない程可愛がって上げてよ」とお花がまた大きな声で云ったので、みんなが笑った。

日は静に音もなく暮れていった。山間や木立の蔭から湧く夕闇は、川面をこめてやがて座敷の中にまでそろそろよせて来た。前の山の頂きに登った月は柔かな靄にうるんだ。――一座はふとしめやかになった――が年かさのお金が起って料理場の方から、明るく磨いた洋灯をさげて来たので、一同は元の陽気に帰って騒ぎ出した。

表の入口から客らしい声が聞えて、二階へ上る足音がしたので、目元の赤くなったお千代とお花が起って行った。

「どら、邪魔になるといけねえから、俺帰えるとしよう」と石井は支度を始めた。

「今夜泊ってったって好いんでしょ、ね」お金は馴れ馴れしく止めた。が酔った女のしどけない姿を見ると彼れは何だかいやになった。

「初めっから余り可愛がられると病みついていけねえから、まあ、勘定書を頼ま」

「うそ、お前さんきっとお千代さんが好かったんだろ」と云いながらお金は立って行った。書き付けを持って来た時

は石井はもう足袋を穿いて外に立っていた。
「ほんとにまた近い中に来て頂戴。お千代さんを取り持ってあげるから」と金を受取りながらもお金は喋舌っていた。
「お前が一番可愛いんだよ」
「ほんとにうまい事を云うよ此人は」と背中を叩いて「ほんとにね、さよなら」
「あははは」と笑いながら石井は崖を登って往還に出た。
夏近い夜の大気はしんめりと暖かだった。彼れは直ぐ山に帰るのも惜しいような気がしたので、村道をぶらぶら歩き初めた。少し行くと右側の崖は急に深くなった。闇の漂う底の方には水の面に月の光が砕けていた。左は一段小高い畑が目路の限り遠く広がって、その真黒な土に殖えられた野菜や煙草の青い葉も遠くにぼやけた暗い森も、ただしめやかに息づいていた。飛び飛びに立っている百姓家も、その白壁に月を宿して、薄黒い茅屋根はぼんやりと霞んでいた。
村道の片側には駄菓子や酒を売る店もあった。障子に明るく火影の射した店は次郎と云う百姓が、野良仕事の片手間に床屋を営む店であった。次郎はまだその外におすがと云う六十近い婆さんの男妾までしていたが、四十近い頓間な顔に狐のような狡猾さを持ってる男であった。
石井は平素から次郎を憎しみ卑しんでいた。彼れは男妾と云えば強盗より醜いものと思っていた。いまその家の前まで来た時、彼れはふと、障子にはめた硝子をすかして中を覗いてみた。広い土間には大きな明るい洋灯が吊してあって、椅子は隅の藁束を積み上げた側に寄せてあった。婆さんが留守と見えて次郎は一人して膳に向って、大きな茶碗を持って晩飯を喰っていた。石井は、澁紙色をした間抜な顔で、締りのない口がぱくぱく動いているのを、腰を屈めて何かを狙うような形をしてジッと眺めていたが、酒にそそられた荒い血が激しく彼れを衝き動かした。妙な意地悪い笑いをその顔に浮べると、突然手を障子にかけて力一杯引き明けた。戸は凄まじい音を立てて走った。明りは暗い道にさっと流れ出た。彼れは土間に這入ると同時に、
「やい、次郎ッ」と鋭い声で怒鳴った。熱心に飯を掻き込んでいた次郎は、身体をびくっとさせると、茶碗と箸を持った傀儡機械のように突っ立ったが、入口の方をすかして見てから、やっと、
「なんだな、次郎に何か用ですけえ」と言った。
「用だから呼んだだ俺の頭を刈れ」と石井は土間の中程へ進みながら、命令するように云った。次郎の眼に石井の姿が明瞭わかると、
「何っ事った此の金掘が、われ酔ってるだな」茶碗と箸を持った手をぶるぶるっと慄わせながら叫んだ。石井はその乾からびた皮の下に汚れ腐った血をつつんでいるような顔を見ると、頭の中が焼き鉄のように熱して了った。血に餓

えた彼の目はぎらぎらと凄く光った。
「生意気云うな此の芋掘りの男妾め」と飛び付きそうな風を見せた。
「何いうだ此の命知らずが、俺の棒で片輪にでもされてえか」と茶碗と箸を叩きつけた。土間に当った瀬戸物は滅茶滅茶に砕けて飛んだ。――寝呆けたような次郎の顔も蒼くなって、額には蚯蚓のような太い筋が現われた。――変に武張って湿いのない気風の此辺の村人は、誰れも棒の一手位は知っていた。分けて次郎は平素から自分を棒の名人と思い込んでいるのであった。――
長押にかけた六尺棒を取ると次郎は土間に飛び降りて振冠ったが、石井はその時既に逆手に握った匕首を後に隠して身構えていた。次郎は呼吸をはかるように可笑しな身振りをしていたが、石井は猟犬のように素早くその手元に飛び込むと、弱腰に抱きついて仰向けにうむと倒れた。それは次郎には全く思い掛けない事だった、――棒を持った両手を広く拡げた儘、丸太のように折り重って倒れた。石井は匕首をその臂に力任せに突きたてたので噴き出す血汐は見る間に田舎縞の汚れた着物に赤く滲んだ。
「人殺しだ――助けてくれよ――」と起きも得ないで次郎は太い悲鳴を揚げた。
石井は素早くはね起きて、蟇のようにへたばっている次郎の顔を、土足に力を込めて踏みつけた。蒼くなった頬にぶざまな黒い泥形がついた。が、また大きな口を開けて、
「人殺しだよ――」と怒鳴って手足ばかりばたばたさせた。
「矢釜しい。此の男妾の畜生野郎、口惜しかったら魂でも入れかえて仕返しに来い」と云って、丁度子供が虫でも殺したように、唾をぱっと吐きかけてその儘戸外に飛び出した。彼れは山の方へ一散に走った。月を浴びた影は地上に黒く跳って行った。
村と山の中頃まで来た時には、身の軽い彼れも稍息の切れるのを感じた。なだらかに開いた山裾の木立の影に腰を下して、ほっと息をついた。月を仰いで蒼くなった彼の顔には凄惨の気が漲っていた。彼れはせわしい呼吸を押しつけて二三度大きく大気を吸うと漸く気が落ちついてきたが、身体一杯にかいた汗の為に着物のべとつくのが心地悪くなった。腹掛の胸のあたりが殊に濡れているので、こすって見るとぬるっと冷たい手触りがして、固まりかけた黒い血がべっとりついてきた。蒼くなって倒れた次郎の顔が、ふと彼の目に浮んだ。そしてあの傷の為に今頃は死んでいはしないかと思った。今頃あの家に百姓が大勢集まっているだろう――後から自分を追い馳けて来る者もあるだろう――と思うと彼れは急に立ち上って見た。が、見ゆる限りの山路には、木も草も岩も海のような青白い月の光の底に、静かに横たわっているばかりで、人らしい影は見えなかった。彼れはまたふと腹掛の丼に手を入れて見た。今日山から出る時に、気が向いたら魚でも取って見ようと思って持

って来た爆発薬が雷管も導火線もつけた儘二本あった。

「追っかけて来やがったら、こいつに火をつけて投げりゃ百姓達は驚いて逃げ出すだろう」と思うと安心してまた腰をおろした。

月は、果てしない空を静に歩んでいた。夜露にぬれた草の葉はしっとりと輝いていた。薄緑の明るい空に透して見える――峰一つ向うには飯場のある――山の頂の毎日見つけた一本松は、くっきりと際立って黒く見えた。大浪のように揺れていた心が静まって行くと共に、彼れは淡い寂しさと悲しみの中に沈んで行った。

彼れは日頃から嫌いな次郎を切った事を思うと、胸に蟠っていたもやもやした想いが、溜った膿でも押し出して了ったように、溢れ出た後の清々しい快さを感ずるのであった。けれども若し次郎があの儘死んだなら、幾ら逃げてもきっと捉まるだろうと思うと、また暗い不安に襲われた。彼れはまた今日の夕方人懐かしい想いを抱いて山を出た事を思うと、僅かな時のへだたりの間に此んな事を惹き起して、何処へ行っても結局は血を見るような事に終らなければ止まない、荒々しい自分の性質を悲しむような気にもなった。――激しい怒の後に襲ってくる寂しさが彼の心を暗く冷くしていって、その頭の中は妙な物悲しさで一杯になって了った。――

「どうせ打突かるとこまで打突からなきゃ納まりがつかねえんだ」と彼は強いて圧えつけるように諦めて見た。そしてこんな不自由な山奥でつまらない日を送るのも、暗い牢屋で暮すのも大した変りはあるまいと思うと、何うでもなるようになれと云うような捨鉢の気も起って来た。

胸の動悸が納まって汗が冷えると、肌寒くなったので、彼れは起き上ると今度はゆっくり歩み出した。道端に生えた草も薄明い夜の空も、峰の松も――今夜は分けて懐かしかった。茅小舎から洩れてくる弱々しい火影も、優しい光のふるえるように彼の目に映っていた。

山に帰って彼れは真暗な納屋にそっと這入った。そこには薪や漬物が乱雑に押込んであった。血だらけの腹掛を脱ぐと、手さぐりで漬物樽の後にかくしてから、素裸になって風呂場に行った。幸に誰れもいなかったが湯は垢と油汗でどろどろに臭くなっていた。彼れが手足を洗っている時下の方から人の来る気勢が段々近づいて来た。彼れはきっと誰か村からあの騒ぎを知らせに来たのだと思った。それは果して村にいる掘子が二人、萩田のとこへ来たのであった。掘子等は萩田を呼び出すと何かこそこそ立ち話をしていたが、直ぐにまた村の方へ駈けて帰った。石井が湯から出ると萩田は、

「おい兄弟、ちょいと来てくれ」と自分の居間に呼び込んで膝近く坐らせて、

「お前また村で何かやって来たな」と低い声で云った。

「うん、俺ぁ次郎といざこざやって打っ切って来たけど、

もうちゃんと覚悟しちゃってるから、兄貴余り心配しねえでくれ」と石井は平気な顔で言った。

「何にもそんなに早く覚悟する事あねえさ、今掘子の話じゃ、何でも次郎の傷も深かなし、警察へも未だ届けてねえって言うから、俺これから行って話をつけてくるけど——本当に兄弟、ちっと気をつけてくれよ——お前の事じゃ始終俺んとこへ色んな事を云ってくる奴があるんだけど、お前の気は判っているから鼻であしらって追っ帰して、お前にゃ聞かせずにいるんだからな」

「兄貴にゃ全く済まねえけど、こりゃもう俺の病だな——まあ勘弁しといて呉れ、俺あ自分でも時々——苦しくってやり切れなくなるんだ」

「まあ後でゆっくり話をするとしよう、兎に角俺が行ってくるまで、お前がここにいて外の奴に聞えるとうるせえから、工藤の兄弟の家へ行っててくれ」と言って、萩田は支度をして出て行った。

確りした足取を運びながら萩田は石井の事を考えていた。その悶えている心持を能く知っている彼は石井が能く争うのも決して無理ではないと思った。が明日になって此事が知れ渡れば、今度は仲間の者より見張の役員等が騒ぐだろうと思った。勝れた腕を持ってる石井の事だから、此山を解雇されてどこに行っても威張って通れる身ではあるけど、その放縦と残忍に近い粗暴の性質が余りに能く知れ渡っているのを気遣った。坑夫に優しい吉田に頼んだら何うにか取り做して呉れるかと思うと——明日は早く起きて朝の中にそっと話して見ようとも考えた。

雑木の中には新緑の梢を洩れた月の光が、地上に淡くゆらいでいた。細い立木の間には夜の靄がうっすらとめぐっていた。

「ああ、俺でさえ時々はいやになるんだからな」と彼はふと口走った。実際彼れも窮屈な飯場頭なんか止めて、思い切り喧嘩でもぶちまくってやろうかと思う事は度々あった。

「下らない屁みたいな奴が百人いたって何にもならないんだ、石井一人を助けておく方が余程いい」と思うと、彼れはまた足を早めて歩いた。

次郎の家の広い土間には、村の若い衆が多勢集まって、寝ている怪我人とは別の事のように酒を飲んで、無暗に興奮した事をがやがや喋舌り合っていた。萩田のはいって来た姿を見ると、皆ぴたっと黙って目ばかり光らせた。枕元に坐っていたおすが婆さんは萩田の顔を仇のように睨めた。

「石井が暴れて飛んだ気の毒な目に遭わせたってな、工合はどうだね」と萩田は上り口に腰をかけながら底力のある声で言った。

「頭まあ」と婆さんは一寸会釈してから「石井って人は、はあ、なったひでえ人でやすべえ、俺が家の次郎は今迄村の衆とだってはあ、一度だって喧嘩なんかした事はねえで

やんすよ、――誰にども聞いて見なんしょ」と立て続けに喋舌り始めた。気の短い萩田も仕方なしに「ふむふむ」と云って聞いていた。けれ共その口から――次郎の傷のたいして深いものでない事も、村から二里もある駐在所には未だ知らしてない事も――直ぐに知れた。喋舌りたいだけ喋舌ったので婆さんの気色が稍和らいだころ、萩田は懐中から十円紙幣を一枚出して、

「どうも全く気の毒だったよ、俺ぁ別に石井が可愛ってわけじゃないけど、俺の飯場から不始末な人を出しちゃ事務所に俺の顔が立たなくなる訳だ、それに村の人にもこんなに集まって貰ったんじゃさぞ物入りだろ、僅かで済まないけどまあこれを薬代に取って内済にして貰おうじゃないか」と押しやった。婆さんは、

「俺とこじゃはあ、別に薬代をとろうたあ思わねえんだけど、それじゃ折角でやんすから頂戴しときやす、こりゃかえってはあ」と押し戴く真似をした。萩田は土間の方へ向いて、「村の衆にもとんだ騒ぎをさせて済みませんでした」と叮嚀に挨拶をした。

「なあに頭こそ夜になってはあ、大変でやんしたろ」と口々に云った。

「さあ頭、なんにもねえけど一と口飲んでっておくんなんしょ」と婆さんは禿げかかった膳の上に徳利と肴をのせて出した。が、萩田は、

「おら、遅くなるといけねえから、又御馳走になりにくる」と辞退してから、

「じゃ折角大事に頼むよ」と云って帰りかけた。婆さんや村人等は、

「どうもほんとに御苦労さまでやんした」と幾度も繰り返して言った。

萩田が帰ると若い衆達は又酒を飲み初めて、怪我人の事などはまるで忘れたように夜更けまで騒いでいた。

ほっと安心した萩田は、更けた夜の月を浴びながら気持よく山路を歩いて帰った。

工藤の家にいた石井をまた自分の居間に呼んで来て、村での事を話すと、彼れは、

「兄貴にゃ心配ばかりかけてほんとに済まねえ、けど、金なんかやると奴等癖にならあ」とまだぶりぶり怒っていた。

「そんな事あどうでも好いじゃねえか、それよかお前は自分の病に気をつけろよ、此頃のお前は全くただじゃねえぜ」

「俺だって兄貴、ちっとも怒りてえ事あないんだけど、ほんとに苦しくって堪らなくなるんだ、誰の面を見ても癪にさわってやり切れなくなるんだ、全く病気だなあ」と云って石井は長く伸びた髪の毛をむしゃむしゃ掴んだ。

「だから自分で癒すようにしろよ、また面白い芽の吹くことだってあるじゃねえか」

「芽が吹いたってどうするもんか、俺にゃちっとも面白かねえや、俺ぁ退屈でやり切れねえんだ――一体どうすりゃ

好いんだ――なあ兄貴――俺つまらなくって手がつけられねえ」石井はその濃い眉を暗くさせた。
「何うせ人間は皆くたばっちまうんだから、大して面白い世の中じゃないに違いないけどよ――お前みたいに怒って計りいたって仕方がねえじゃないか、それよか酒でも飲んだら面白く騒いで暮らせよ、え兄弟――」と同じような思いに苦しんでいる萩田はそうでも云うより仕方がなかった。
「俺だって今日は初めは気持が好いもんだから村に行って面白く遊んだのだけど、帰りに次郎の家の前まで行ったら――こう血が煮えくりかえるような気がしてよ――そうなると喧嘩でもしなきゃ、納まりがつかなくなるんだ、矢張り病気かなあ――あああ」と頭の後に両手を組んで嘆息した。
「嬶あでも持って見ろよ、ちったあ心持が違うかも知れねえぞ」
「俺が嬶あを持ったら、兄貴、擲り殺しちまわ」
「それじゃ世話も出来ねえなあ、ははは」と萩田が笑うと、
「嬶あでも貰った夢でも見て寝てる方が安心だろ」と云って石井も淋しく笑ったが、
「じゃ御免」と暗い部屋へ帰って行った。
翌朝、萩田は早くから起きて自分の居間の上り口に腰をかけて、表を見張っていた。前の塵だらけの道も麗かな朝陽を受けて、美しく輝やき初めた頃から、村から来る掘子や選鉱女の汚い群がぞろぞろ通った。それが途切れてしばらくしてから、いつも外の役員とは一人切り別になってる吉田が、鳥打帽子を冠って、脚絆草鞋をつけた洋服の肩をそびやかして登って来た。萩田はいきなり飛び出して、「吉田さん吉田さん」と呼び留めたが、後から来る人に見られると都合が悪いので、
「一寸」と手まねきして飯場の後へ連れていった。
「何だい、昨夜のこったろ」と吉田は笑いながらそこに立った。
「ええ、石井の野郎がつまらない間違いをやりやがったもんで――」と萩田は頭を掻きながら云った。
「僕も今朝聞いたんだよ、また山口がぐずぐず云うだろうと思って道々考えながら来たんだけど――彼奴は村の娘を女房にしてるもんだから、じきに村の方を同情するからね」
「それに石井は平素から乱暴なので、見張で睨まれているんですから、いい幸いにやられやしないかと思って心配してるんです。彼奴あ何しろ何処へ行っても嫌われもんですから――あなたに頼んで何とか取り做して貰いたいと思って実あ――」
「ああ好いとも僕が出来る丈けの事はするよ、薬代をやったって、君が立て替えたのか」
「あんなもなあ、災難にあったと思やいいんですけど、何

にしろ石井は私を頼って来たんですし、知っての通りの男ですから、何卒一つ」と萩田はまた頭を下げた。
「やるだけやって見るさ」と言って吉田は萩田と別れて見張の方へ登って行った。
午頃になって見張では、松板を打ちつけた卓子を囲んで事務員が六七人、石井の事で議論を初めた。一時は随分激しく言い合ったが、吉田の剣幕が余り鋭いので、有耶無耶の中に済んで了った。
その夜、石井は萩田の居間へそっとはいって、
「兄貴、ほんとに気を揉ませてすまなかった」と手をついて礼を言った。萩田は、
「俺よか吉田さんが馬鹿に心配してくれたんだ、序でがあったら礼を云っといてくれ」と言った。
「そうか、俺やまあこれからうんと稼いで早く借金を返さなきゃ」と独言のように云った。
「けちな事を言うな、それよかなるたけ下らねえ喧嘩なんかしないようにしてくれよ」
「ふふん」と頸をちぢめて、「でも気がすまねえもんだから」と、どっちつかずの事を言っていた。
二三日過ぎて吉田が見張で宿直した晩であった。晩くなってから石井はそっと出て行った。見張所の硝子は夜気にうるんで洋灯の火影が柔かに映っていた。中には吉田がぽつんと一人で何か本を読んでいたが、這入って来た石井の姿を見ると、
「どうしたんだ今頃」とけげんな顔をして尋ねた。
「今晩は」と石井は改めて礼をしてから「こないだは大変心配して貰って済みませんでした」子供のようにつかえ勝ちに云った。
「なんだわざわざ礼に来たのか、僕あふだんから奴等が余り鉱主におべっかしたり、村の奴ばかり気にしてるのが癪にさわるから云っただけさ、――わざわざ来ることなんかありゃしないのに」と云ってから「だけど石井、もうつまらない喧嘩なんか止せよ。立派なストライキでもやった方が好いじゃないか」とじっと石井の顔を見つめた。
「吉田さんおらストライキじゃもうこりこりしたんですよ、今だって何も命が惜しくっていやなわけじゃないんだけど、あれをやる前だの最中にゃさんざ人を煽てやがって、お蔭でちったあ楽になった奴まで後になると、人をまるで仇みたいな目に会わせやがる――間尺にあわねえより癪にさわって堪ったもんじゃありませんや――何にしろ仲間が意気地なしの狡猾野郎計りだから何をしたってとても駄目でさ、奴等がもっと確りしてりゃ坑夫だって威張って世の中が渡れるんだけど、しみったれた了見の奴が多いから――一生働いて馬鹿にされて、若死しちまう――好い気なもんでさ」と云って淋しく笑った。
「じゃ当分、酒と喧嘩と嬶盗人か」
「その中にゃどうにかなるでしょうよ」
「全くな、嬶でも取られるか、痛い目にでも会わされなき

ゃはっきりしないような——僕が見てさえ歯がゆい奴が多いから、じれるのも無理はないけど——萩田は随分お前の事を思ってるから、余り心配させるな」と吉田はしみじみと云った。

「俺もそうは思っているんだけど、時々調子が狂うんですね」と仕方なしに笑ってから「何うもお邪魔しました」と云って静かに帰って行った。

「あああ」と吉田は両腕をぬっとあげて、大きな溜息をしてから外に出た。山の中腹に稲妻形につけた道を、鉱石箱を背負って登り降りする掘子の持ったカンテラが、闇の中に狐火のようにちらついていた。真黒な山に周囲をかこまれた底を仰ぐと、星ばかりいかめしく光って——静まりかえった夜の沈黙を、どこかの坑内でかけた爆発薬の響が、一時に凄まじく破ったが、響が消えると同時に死のような静寂に返って来た。

「まったく癪にさわるな」と吉田はつぶやいたが見張の中へはいってまた本を読んでいた。

五

梅雨になって、鼠色の空から雨は毎日根気よくじけじけ降った。山の心まで滲み透った水は真暗な坑内の岩の隙間から、滝のような音をたてて流れ落ちた。水にゆるんだ岩が音も立てずにすとすとと不意に落ちるので、それに打たれて負傷する坑夫が多くなった。飯場にも長屋にも頭や足に繃帯を巻いて蒼い顔をして遊んでいる者が沢山出来た。

暗い坑道から更に又井戸のように掘下げた竪坑（シャフト）の底から、上下に別れて掘進した洞敷の中などは、森に夕立の注いだように凄まじく水が滴っていた。

仕事場（きりば）交代の日であった。その日は雨に洗われて艶々と光る木の葉も、寒そうに萎れて見える程冷々とした気が全山を閉じ籠めていた。見張所前の大工小舎や鍛冶場の中にも、五六十人の坑夫がぎしぎしと身動きも出来ないほど詰め込んで、仕事場を定める籤の出来るのを待っていた。石井は一人それ等の群から離れて、佗しい雨の落ちてくる灰色の空を見上げていた。

見張所の硝子戸がガタッと開いた音がした。待ちあぐんでいた籤が出来たのかと、彼等の視線が、そこへ集まったとこへ、吉田が首を出して、

「おい、みんなあ、洞敷は滴りがひどいから一円の本番で鉱石を買ってやるけど誰かはいらないかあ」と大きな声で怒鳴った。坑夫等はがやがや云い始めた。

「之れから先き長く使う身体だ。おやしちまっちゃつまらねえ」

「金より身体が大切よ」とぶつぶつ言うばかりで誰も進んで出るものはなかった。

「俺が這入りましょう」石井は雨をよけるように首を伸して下を向いて、大股に窓の下まで飛ぶように走った。

「たいそう慾張り始めたな」と吉田が笑うと、
「薬代を返さなくっちゃならねえからね」と小声で言ってから「引立ては川上を押すかね、下ですかね」
「鉱石が多いから下の方を押してくれ」
「そう定りゃ俺あ仕事場へ行って見て来て置こう」と石井はカンテラを提げて坑口の方へ歩んで行った。
「命知らずにゃ丁度好かんべえ」と小舎の中で誰かつぶやいた。みんな嘲笑うような顔をして彼れの後姿を見送った。

坑内にはいって二三間行くともう水はぴちょぴちょ滴っていた。進むにつれてそれは漸々激しくなった。岩の裂目から闇の中へ噴水のように迸っている所などは、不意に顔を水で打たれる事もあった。下水から溢れた水は小河のように坑道の岩を洗って流れているので、草鞋は重くなって歩く度にじょぼりじょぼりと冷たい響をたてた。——襟元に水が垂れると背中に流れ込むのが心地悪いので彼れは首をすくめて歩いた。

坑口から半町程進むと、片側の岩壁へ桝のように大きく四角に切り込んだ所があった。太い松丸太の柱が四本立った中程から、冷たい光を放つ、鉄の捲き揚げハンドルが突き出ている——その下に、深い竪坑が真黒な口を開けていた。——石井はカンテラをかざしてふと中を覗いて見てから、身を屈めて梯子につかまると、するすると降り初めた。

闇は一層濃くなった。手に持ったカンテラの光が濡れた梯子のこまを照らしているばかりで、上も下もただ限りなく闇が続いているようだった。途中で梯子の向きの変る所は、厚い松板が渡してあった。彼れはそこに立ってホッと息をつくと又下って行った。竪坑の底には岩を深く掘った大きな水溜が作ってあった。三四時間も汲み上げずにある水は溜の周囲に、膝につく程溢れて、空桶が大きな口を明けてぽかんと浮いている——そこから、上下に別れて掘り進んだ洞の中からは、じゃじゃ——と凄まじく落ちる水の音が聞えて来た。彼れは梯子を降り切らない中にカンテラを振り廻して見て、余り水の溜っているので当惑した顔をしたが、思い切って降りるとじゃぶじゃぶ音をさせて歩き出した。俄に騒ぎ出した水の面にカンテラがぎらぎら映って岩の目から落ちる水は、無数の銀の棒を立てたように光っていた。

十歩と進まない中にずくずくに濡れて了った腹掛や襯衣が、身を引き締めるように纏いついた。彼れはカンテラの火を消さないように、半纏の裾をひろげて蔽いながら歩いたが、岩につまずいた拍子に身体がゆれると、焔に水が当ったのでじじっと大きな音がして、闇は僅かな光の領分をも奪って了った。俄に物を見る事の出来なくなった彼れは、自分の身体の中心まで奪われたような気がして、しばらくジッと立ちすくんだ。水音ばかり急に烈しく聞えて来て、彼れの上にも容赦なく滅茶々々に降りそそいだ。

彼れは腹掛に手を入れて燐寸を出して見たが、紙はべとべとになって箱は彼の手の中でぐしゃっとくずれて了ったのでチョッと舌打をして闇の中へ叩きつけて了った。——その時彼れの頭に妙な悲しい影が射した。——彼れは、こうして此所に此儘二三時間も立っていれば、滴る水に身体は冷えて了うだろうと思った。そうして一分毎にも増して行く水はやがて自分の身体を溺らして了うだろう——真暗な洞窟の底で人知れず死んで了えば、癪にさわる事も悲しい事もなくなって、凡ての苦しさやいまわしさから離れて、全く楽になれるような気がした。仲間が笑おうと人が嘲けろうとそんな事はどうでも好いと思った——その瞬間死は彼には最も美しく楽しいものに思われて、ジッと立ちすくんでいたのであった。流るる水が彼の身体から熱を奪って行くので、冷さが漸々にしみ渡って行った。初めは胸が悪くなった。次には気持の悪い寒さが全身を襲った。頭ばかり熱くなってふらふらし始めた——死の手がもう眼の前に突き出された——と思うと彼は自分のしている事が馬鹿らしくなって来た。こうしていればもう直ぐに死ぬかも知れないと思うと、急いで岩壁に手を触れて、それに伝わって探り乍ら水を蹴って歩き出した。闇に慣れた坑夫には、それは困難な事ではなかった。梯子に手が触れると彼れは素早く登り初めた。本坑道に出て外界から流れ込んで来る光線をかすかに認めると、身を屈めて馳け出した。鈍色の空と雨に濡れた青い山を仰いだとき、彼れは矢張り生の悦びを感じた。ほーっと大きな溜息をした彼の顔は真蒼になっていた。飯場に帰ってから彼れは一人して命拾いをした祝酒を飲んでいた。

その翌日から彼れは、蔽いをつけたカンテラをぶら下げて、素肌に腹掛け一つかけただけで、坑内にはいって働いた。濡れ仏のように水に打たれても仕事に夢中になってる間は、大した寒さを感じなかったが一寸でも手を休めれば一時に冷えが身体に廻って唇は紫色になってがたがた慄え出した。八時間の規定時間も午前中丈け働くのがやっとであった。午後になると鍛冶屋場の鞴の前に来ては火にあたっていたが、坑内監督も別に苦情を云わなかった。

雨は毎日根気好く降り続いた。それは別けて空の暗い日であった。宮沢と云う坑夫は、本坑道の上磐から四角な煙突のように高く掘り上げた打上げの仕事場で仕事をしていた。岩の崩れを防ぐ為に松丸太で櫓のように内部を囲ってあったが、その上の行き止りには、いつもモヤモヤした煙が滞っている為にカンテラの光も薄ぼんやりとしていた。宮沢は丸太を十本ほど渡した足場に立って長い鑿を垂直に天井に当てて、鎚をぶらぶら振るようにして冠り穴を刳っていた。彼れの腕は余り達者ではなかったが若い割に熱心に能く働いた。村のお波と云う娘を女房にして長屋に新しい家庭を持った許りであった。彼れが冠り穴を刳っている時、上磐のゆるんだ大きな岩が突然頭の上に落ちて、激し

い打撃に身体の中心を失った彼れは、ふらふらとすると足場を踏み外して暗い穴を真逆様に落ちて了った。途中で縦横に渡してある留木に幾度も突っかかって歯をかいだり鼻を挫いたりして、本坑道へ落ちる迄にはもう死んでいた。

丁度その時一輪車を押していた掘子が、打上げの下まで来ると変な音がして岩片が落ちて来るので、手前で止って身をよけている目の前の岩の上へ、ばしゃっと大きな音をさせて宮沢の身体が落ちた。掘子は一輪車を握っていた両手をあげて

「大変だ――打上げから誰か落ちた――」と怒鳴りながら夢中で坑道を馳けて出た。その声を聞き付けた事務員や坑夫は慌ててそこに集まった。

宮沢の身体はもうめちゃめちゃに打ち壊れていた。坑道に落ちた時、身体の重み一杯叩きつけた為だろう、頭はぐしゃぐしゃに砕けて半分飛び出した眼は怨めしげに何かを睨みつけているようだった。柘榴のように裂けた唇はうじゃじゃけて、折れた頸骨は無態にへし曲がっていた。死骸を洗って流れる水には赤い血汐が交っていた。――人間の身体を能るだけ無茶苦茶に酷たらしく破壊したような悲惨な姿を見た坑夫等の顔には、同じ運命に対する危惧と恐怖の色が浮んでいた。

選鉱場で仕事をしていたお波は、悲しい報らせを聞くと夢中になって駆けて来た。真暗な坑内でカンテラの裸火に照らされた、宮沢の怖ろしい死顔を見ると、水の流れている坑道に泣き崩れて了った。取り巻いていた人達もなだめる勇気もなくなって、深い沈黙に耽っていた。そのとき後の方で

「みんなこんな目に会って死ばるのか、よろけになって厄介者にされるんだ。手前ばかり長生が出来るような気でいやがるから物が間違うんだ。此奴を見ちゃ考えるだろ」と沈んだ声で言った者があった。振り返って見ると裸に腹掛をかけた石井が冷え切った蒼い顔に凄い目を光らせて腕を組んで立っていた。誰もまた「気狂か」と云った風な顔をして黙っていた。

「お波さん、どうせ坑夫の嬶になりゃ皆こんな目に会うんだ、死んでから泣いたって追っ付きゃしねえ、一人になって寂しけりゃ、俺が代って可愛がってやるからよ、泣きなさんな下らねえ」と突っ伏しているお波の肩に手をかけてゆすった。女は肩をふるわせて一層大きな声を揚げて泣いた。然し誰も彼れの乱暴な言い草をとがめる者はなかった。黙って睨みつけるばかりであった。

「ああつまらねえこった。――寒くって堪らねえや、どら行って温まろう」と言って彼れは一人でさっさと出て行った。

「彼奴は全く狂人だな」と見送っていた山口が云った。

「ただじゃありませんとも」と後の方にいた野田が出てきて、「さ、お波さん、泣いてたってしょうがねえ、今俺達が担いでってやるから、先きへ行って家でも片附けてい

な」と云ったので、お波はやっと起きて両手で顔を抑えて、暗い坑道をしょぼしょぼ出て行った。
「さ、皆して担いで行こうや」と野田が言った。皆気味悪そうに死骸に手をかけて、やっと持ち上げると唇の裂けて顋の外れた口が、だらりと大きく開いて、歩く度にがくがくゆれた。頭からはまだ血がぼたぼた滴っていた。
「おい此の顔をどうかしろや、此奴を見てちゃ遣り切れねえや」と誰かが云ったので、野田が腰にはさんでいた手拭を取って顔にかけた。選鉱場の女達は泣きながら見送っていた。その日は終日山中が静かにしめり返っていた。
　夕方になってまだしょぼしょぼ降っていた。空は厚い雲に閉じられて、周囲を高い山でかこまれた長屋の中には、早くから夕暗が訪れた。平素は音もなく流れていた小河も、水量が増したので矢のように早く走る凄まじい音ばかり響いていた。
　宮沢の死骸を横たえた狭い家の中には一杯人が集まっていた。喪心したお波は枕元へただぽかんと坐っているばかりなので、飯場頭や、山中大当番だの長屋世話役が代って世話をやいていた。遠い村の役場や駐在所に届けたり、医者を迎える為に行く若い者は「どうせ今夜は泊りがけだ」と空を仰いでつぶやいた。
　村の事務所からも髯の生えた所長が来て弔みを述べてから
「とりあえず香奠と見舞金を」と包み金を出して帰ると間もなく、裏山の観音堂から、頭の禿げた坊主が来て経を誦み始めた。人いきれのした部屋に線香の煙が漂って、鐘の音や読経の声が起ると、並んでいた坑夫等も俄に無常を感じたような顔をした。経が終ってからも一としきりシンとしていたが、誰かが「ああ、死(くたば)っちまっちゃつまらねえな」と泣くような声で云った。
「だけど皆一度は死ぬのさ」と年老った坑夫が云った。諦めたようなその声が皆に、寂しい物悲しい思いを与えた。
　けれども通夜の酒が始まると――怖ろしい死――の事なぞは誰も云わなくなって了って、死人の側にいる事を忘れたように、陽気な話を始めた。殊勝らしい顔をしていた坊主まで酔が廻ると若い時の惚気を語り始めた。狭い部屋の中からは時々破れるような笑声が起って、陰気らしい気はなくなっていた。
　飯場にいる一人者の連中などは、自分の仲間が悲惨な死を遂げた事などは、てんで知らないような顔をしていた。夕方みんなが集まって飯を食うときに誰かが
「宮沢の兄弟も可哀そうになあ」と云ったら「死ぬ者貧乏よ、明き女(もの)が一人出来たんで誰か助から」と外の者が云ったので一どに笑い出した。隅の方に一人離れて暗い顔をして膝を組んでいた石井は
「誰れも自分だけ死なねえような面をしてやがら、今に番が廻ってくるぜ」と無気味な声を出した。
「そのときやそんときよ、そんな事を考えてた日にゃ坑夫

なんかできやしねえ」と太い声の男が云った。
「生意気云ってやがら、意気地なしのくせに」石井は冷笑した。
「死人の事なんかいくら話したってつまらねえや、さ、カブでもやろうや」と云い出した者があったので、みんな洋灯の下に集まって、夢中になって花札をいじり始めた。
翌日、午頃になってやっと医者が来た。三里も離れた元木の町へ棺桶を買いに出た若い者が二人して新しい桶を担いで帰って来たのは午過ぎてからであった。死骸を棺桶に納めるときもねじれた首はなおらなかった。顔を仰向けにすると外れた下顎がだらりと垂れて、唇の裂けた肉がいやに無気味に白ちゃけていた。飛出した目や腫れた鼻にも人間らしい影は見えないので、すぐに棺の蓋に釘を打って了った。
夜になってから寂しい葬いが宮沢の家を出た。真黒な闇の中に霧のような小雨が降って、秋のような冷たい風が吹いていた。池井鉱山飯場だの山中大当番と書いた提灯を持った者が、五六人先きに立った後に、若い者に担がれた棺桶や見送りの人が続いた。雨はそれらの人達のさした傘にも棺桶にも音もなく降りそそいで、ひやりとする風が闇の中から吹いて来ては、附き添う人々の面を撫でて過ぎて行った。お波は門口に立って提灯の火影に白々と映る棺桶をじっと見送っていたが、折曲った沢合についと消えると家へはいって畳の上に突っ伏して、おいおい声を揚げて泣き出した。手伝いに来ていたガサツな女房達も黙ってうつ向いて了った。——鈍いランプの火が憂いに沈んだ人々の姿を悲しげに照らしていた。
昼間から飯場で酒を飲んでいた石井も、葬の出るときわざわざ外に出て雨の中に突っ立って、いつまでも見送っていた。闇にゆらぐ提灯や、黙って歩いてゆく人々をじっと見つめている彼の頭には、限りない憂愁と寂寥の念が渦巻のように湧き上った。その苦しい思いを語るべき人すらないと思うと彼れは一層寂しくなった。葬の列は過ぎて了った。飯場に入って彼れは一人して考えた。——宮沢はまだ若かった。丹念に熱心に働いた。見張でも仲間中でも評判のいい男だった。けれども公平で無心な岩の塊は平気でその善良な男の頭を叩きつぶして了った。一目見てもぞっとする程醜く変りはてた姿は誰からも厭われた。棺桶に押し込まれて暗い道を担いで行かれて、土の中に埋められて了えば、冷たい雨が降りそそぐ。その身体が腐り初める頃には誰も再び彼の事を思い出す者はなくなるだろう。死んで了えばどうする事も出来ないのだ。生きてる中が価値の世の中を、慎ましく不自由に暮した宮沢は気の毒だと思った。又馬鹿だったとも思った。そう思う自分も又面白くもない日を送りつつ何うする事も出来ずに死んで行くのが情なくも口惜しくもなった。哀愁や憤恨が彼の頭をめちゃめちゃに引っ掻き廻した。
「ああつまらねえな」と思わず大きな声で怒鳴った。

「何がよ、兄弟」と側にいた太った男がきいた。
「だってよ、考えて見ねえ、俺たちゃ何だって此んな馬鹿げた苦しい目にばかり会わなきゃならねえんだ、蒼くなって働いてよ、間誤つきゃ岩に打っつぶされて、雨の降る晩に冷てえ土ん中に埋められちまうなんて……それが当りめえの事なのか、鉱主は毎日甘い酒を飲んで美い女を抱いてやがる……下らねえ端た銭の愚痴なんかこぼす時じゃねえや。手前達やみんな寝呆けてやがら」とむかむかする思いを一ぺんに吐き出すように云った。
「石井の兄貴なんか、そんな事を考えねえたって、お波っ子んとこへでも行きゃ好いじゃねえか」と若い坑夫がまぜっかえした。
「手前みたいな豚あ黙って引込んでろッ」と突然傍によって横面を力一杯擲りつけた。
「あッ」と顔を抑えたが「だって兄貴が余り情ねえ事を云うからよ」
「まだいやがんな、叩っ切るぞ」と眼を光らしたのでその男も黙って了った。石井の苛立たしさは容易に納まらなかった。四辺に敷きちらけた汚れた蒲団や油染みた枕からたつ湿っぽい臭い匂まで厭わしくなって来た。
「考えてたって始まらねえや、村へでも遊びに行ってくべえ」と独言を言って起き上ると手早く支度して外に出た。
雨はまだ降っていた。ぬかって滑り易い山道を探るようにして彼は村の方へ下って行った。闇の中を歩きながら、彼れは宮沢の棺も同じ此道を通った事を思った。死んで担がれて行った宮沢よりこうして女の許に遊びに行ける自分の方がまだ仕合せだとも考えた。然しいずれ同じような危険な運命がつき纏っている事を思うと、堪らなくいやな気がした。
「どうだって仕方がねえや、生れたのが不仕合せなんだ」とつぶやいた。
茶屋にいってからも彼れは浮かない顔をして、無暗に酒を呷っていた。女達が、いくらはしゃいでも蒼い顔をして物思いに耽っていた。
「石井さん今夜はどうかしてるのね、心配事でもあるの」とお千代が訊ねた。
「みんなつまらねえんだ――うんと酒を持って来てくれ」と云って、死人のように蒼くなって倒れるまで飲み続けていた。
石井の村通いはそれからしばらくつづいた。人のいやがる水仕事場で働く彼れは、稼ぎ高も多いのでその当座遊ぶ金にも不自由しなかった。けれども宮沢の酷たらしい死態を見てからの彼の心は、ともすれば暗い重苦しい思いに襲われがちになっていた。茶屋の女にからかったり不覚になる程酒に浸っている間ばかり、僅かにその息苦しさから免れていても仕事の合間や飯場に帰って来てからでも、まぎれるもののない時にはいつも彼の頭に暗い影が漂ってい

た。それは真黒な冷めたい大きな、得体の判らない死の顔が彼の思いに意地悪くつき纏っているのであった。
　彼れはそのいまわしい脱れる事の出来ない死の手に抱かれる為に、身を苦しめて働いて疲れたり、怒ったり憎んだり悸えたりして、貧しく果敢ない寂しい日を送らなければならないかと思うと、檻に入れられた獣のような窮屈と疲労を感じた。――世の中にはもっと自由に楽しく生きている人もある――坑夫だって立派な生産を営んでいる以上、それ等の人と同じ生活を為し得る権利のある事を彼れは朧ろげながらも知っていた。ただ自分達の仲間が怠惰で卑怯である為に世の中からは全で金掘りに生れて来た道具のように扱かわれて、凡ての力を奪われ虐げられて、愚かな獣のようにこき使われて、僅かに餓え死なない丈けの命をつないで、心から楽しい一日を送る事もなく空しく死んで行くのを伺うする事も出来ないと思うと、自分の孤独と無力が口惜しくなった。愚かな仲間が憎くもなった。不安や焦燥や憤怒の情が入り乱れて、身に喰い入るように彼れを苦しめた。
　梅雨明けに近くなって蒸暑い日が地を訪れた。空を厚く閉じこめた灰色の雲が裂けると、カッとした日の光が洩れて雲の切れ目が銀色に眩しく光った。濡れた大地や山の青葉もきらきら輝いた。雲がとじると四辺は急に暗くいきれるように暑くなった。石井の頭は破れそうに痛み悩んだ。仕事が済むと直ぐに彼れは村の茶屋に出掛けたが、酒はただ苦い水だった。いくら飲んでも冷汗ばかり出て彼れは少しも酔わなかった。お世辞を云う女の声も耳元にガアガア空しく響くような気がして、彼はもう世界中に息吐(いきつ)き安らう僅かな場所も失っていた。
　梅雨が霽れると暑さは急に激しくなった。坑道から流れ出る煙や白く凝ったいきも、地面を這うようになって坑内は水の滴りも少くなった。月初めの仕事場更(がえ)の時には特別仕事場もなくなったので、石井はもう前のように村へ遊びに行く事も出来なくなった。
　その頃から山の鉱況は漸々盛んになって来た。事務所では掘進を急ぐ為にどしどし人を増すので、飯場にも長屋にも坑夫は一杯になった。風通しの悪い沢合に建てられたそれらの家の上を、日中は暑い日が容赦なくかっかと照りつけるので、夜になっても家の中はむんむんしていた。そればかりでなく裸のままで寝る人達の汗や脂肪を思い切り吸い込んだ夜具や、周囲の羽目にぶら下げた汚れくさった仕事衣からは、たえず臭い匂を放っているので、室の中にはむかつくようないきれが一杯にただよっていた。生温くほてった真黒な畳の上に、坑夫等がべとべとに汗をかいた軀ごろごろ寝転んでいる有様は、人間の家と云うより全く豚小舎に近いものだった。
　石井は村へ遊びに行かなくなってからも、飯場にいる事は稀だった。涼しい木蔭や風通しのいい岩蔭をあさって、寂しい時を過していた。

二日目置きに一人位ずつ増していった坑夫は遂に飯場から溢れそうになった、夜になると柏餅になって寝る者が、重なり合わない丈けに押しつまるので温気と臭気はいやが上に烈しくなった。蒸暑い晩などは
「あ！　畜生ッ苦しくって寝られやしねえッ」とみんなして怒鳴り出した。
　事務所では慌てて飯場の増設に取りかかった。職違いの土方の群が来て、燃ゆるような日の光に鶴嘴やショベルを閃かして、一段上の山裾を切り開いて地ならしを始めると、新飯場の頭には誰れがなるかが坑夫仲間の問題になった。野田が事務所や山口の家へお百度を踏んで、頭になる運動をしていると云う噂も起った。実際その頃から野田は見張へ行っても、妙な理窟を云わないようになった。そして坑夫長屋を歩いて愛嬌を振りまいたり、夜更けてからそっと村へ下って行ったりしていた。
　月末には地ならしの出来た端の方から、ガサツな家が建て始められた。大きな飯場を第一にして狭い長屋の骨組ばかり並んだのは、丁度玩弄物の汽車のような形をしていた。夕方大工が帰る時分になると長屋から女房達が、笊だの炭俵をさげて来て木片や鉋屑を争って拾っていた。
　その時分から野田の家には彼れの伯父分になる大沢と云う坑夫が来て泊り込んでいた。大沢はすぐに使役願を出すでもなく、毎日酒を飲んではぶらぶら長屋中を遊び廻っていた。岩のように頑丈な体軀とぐりぐり光る目やいかった鼻が、鈍間な猛獣を思わせるような男だった。彼れは好い機嫌に酔うと長屋に出かけて誰れをでも相手にして
「俺あ今まで随分山あ歩いたけど、何処へ行ったって喧嘩に負けた事あねえよ」と長々と腕自慢を述べ立てた。坑夫等は力の弱い野田が飯場を持ったら心張棒にする気で呼んだのだろうと云っていた。そして誰れが新飯場に廻されるかと、そんな事ばかり気を揉んで寄り合っては話していた。
　石井は、野田が飯場頭になろうと大沢がどうなろうとそんな事は何うでも好いと思っていた。何うせ飯場に置かれた人間は、不味い菜を高く売られて汚い蒲団の損料を取られて、蒸し殺されるような所に寝かされて、苦しんで、甘い汁はみんな頭に吸われるに定まってる事だと思った。自分達がもっと奮発しなけりゃならない事は忘れて、けちな些細な事計りに心配するような意気地なしは、目の覚める程苦しんだ方が好いとも思った。
　暑い日は毎日続いた。晴れ渡った真昼の空にはちかちかした光が漲っていた。焼けつくような日に照りつけられた草木の葉は、ぐんなりと白い葉裏を見せて萎れていた。叢からはむっとしたいきれがたつばかりで、そよりとした風もなく、山路に敷いた硅石の破片は熱し切って焔のような吐息をついていた。坑夫も掘子も事務員も休み時間には、薄暗い坑口に吸い付けられたように集まって、坑道から吹いてくる冷たい風に蘇っていた。
　八月になって山には一月遅れの盆が来た。若い坑夫や掘

子達は三日間続く休みを早くから楽しんで云い暮していた。事務所では休みの中に坑夫等が余り酒に溺れて、間違いを起されては困るので、盆の書き入れ時に鉱山を目当てに来た旅役者に、芝居をやらせる事にした。建かけの長屋は都合よく小屋になった。敷居に劃られた床の土間、戸棚になるべき桟敷も、旅廻りの土臭い新派劇にはふさわしいものだった。

足尾にいる頃山祭りのある毎に素人芝居の俳優になった事のある野田は、昼間から多勢の若い坑夫を指図して舞台や観客席を作っていた。隣り合った長屋の戸棚の段の間には厚板を渡して、縄で結えた丸太の欄も出来た。床板をはがして根太に渡した板は腰掛になっていた。――金弐拾円也、事務所より――を筆頭に鴨居に張り並べたびらが夕風に勢好く翻える頃になって、近くの村の百姓や娘達が見物に押し寄せて来て、長屋七八軒打ち抜いた小屋の中も直ぐに一杯になって了った。派手な浴衣や田舎縞の着物が揉み合って、安白粉や油の香が漂う中に若い坑夫等が酒の廻った顔を輝かして、娘達にからかっていた。他愛ない笑い声はそこここから起っていた。村の事務所に帰る事の嫌いな吉田の姿も桟敷の上に飯場頭や山中大当番と交って見えた。

飯場や長屋から集めてきた洋灯が小屋の中に輝き初めると、巴三寅さんえと書いた古ぼけた幕の前に野田の姿が現われた。黒絽の紋附の羽織を着て髪の毛を分けた彼は、坑夫のようには見えなかった。

「ええ御見物の方様へ、愈々狂言が始まります、一番目が御家騒動恋の暗路が三幕、中幕が喜劇、御化屋敷、二番目が孝女の一心二幕に御座います。お静に御ゆっくり御見物の程願い上げます」と鮮かに口上を述べ終って幕中に引っ込んだ。

衣裳を持たない旅役者の女形は、坑夫の女房(かみ)さんの着物を借りて舞台に出た。労働者に扮した者は坑夫が水仕事場に這入る時の帽子を冠っていた。それは誰れの目にも余り知れてる物なので、笑い声はどっと起った。二幕目に舞台の羽目に――先祖代々之墓――と書いた字は、後から座敷の場になっても、監獄署の幕になっても消えずにちゃんと残っていた。

二た幕目頃になって、白い浴衣の上に紋附の薄羽織を着て、田舎医者の代診のようななりをした石井が、ぐでぐでに酔って小屋に来た。酒臭い息を吐きながら酔った目を据えて何物かをあさるように見物の間をうろついていた。娘等は彼れに見られるのを恐れるように身をひそめた。彼は隣村から選鉱に通って来る色白で小肥りに太ったお新が、若い坑夫に囲まれているのを見出すと、四辺の人を押し分けてその側に歩み寄った。お新の隣に腰をかけていた男は怨めしげに彼の顔を見たが、その鋭い眼に出会うとひょいと立って振り向き勝ちに歩み去った。彼はその空席に腰を下した。薄い浴衣を通して女の体温が伝わると汗はじとじ

と湧いても、彼れは平気で快さを貪っていた。周りにいた若い坑夫等も気むずかしい石井が来ては面白くないので漸漸に遠のいて、あとには村の人や女達が入れ替って来た。

舞台では悪人の罠に陥入った善良な若者が、死刑執行になる瞬間を演じていた。若者に扮した俳優は横に長く引張った二本の細引の間に首をはさんで立ったまま、身体を前後に揺っていた。典獄が「ひとーつ」「ふたーつ」と数を読み上げて、それが百に達した時命は絶たれるのだと宣告した。——無智な観客の気分は可成り緊張して、心はまるで舞台に吸いつけられていた。その時石井はお新に

「暑いだろう」とささやいた。

お新はふだんから石井は山で一番恐ろしい人だという事を聞いていた。自分の隣に来られたときは、身内がすくむような気がして、胸はわくわく踊っていた。舞台よりも隣にいる石井にまるで心をとられて了っていた。初めは直ぐに外へ逃げようかとも思ったが、執念深い男に見込まれてはそれも叶わない事と思うと、その心も挫けて了った。諦めたように屈従してしまえば、恐怖に伴う快さも湧いていた。

「暑かないか」二度目にいった声が耳に這入ったときは、男の腕がお新の背中を捲いていた。

「わしいもう暑くって逆上せやんした」とお新は両手で赤くなった頬を抑えた。強い男の腕から伝わって来る、何とも知れない力が、女の血潮を掻き乱して了っていた。

「あれが済んだら外へ出よう、山は涼しいぜ」と石井が云った。女は黙って点首いていた。

舞台では典獄の読み上げる数が、九十九から百に移る刹那に、楽屋から死刑執行猶予、死刑執行猶予と叫びながら劇中の名探偵が司法大臣命令書の折紙を捧げるように突きつけて出て来た。若者は身体を揺る事を止めた。

見物はほっと息をついた。間もなく悪人は短銃で自殺して幕は引かれた。我れに返った人達は急に暑さを感じた。扇子や団扇のばたばた云う音が俄かに起った。小屋の空気は濁ってむしむししていた。ぞろぞろ外に溢れ出た若い之れ等の幾組かは、真暗な木立の奥や谷間に姿を消して、いつまで経っても帰って来なかった。

石井は

「さ出よう」と促した。女は黙って立つと彼の後に従った。息詰るように熱い人いきれから免れて二人は小屋の外に出た。涼しい夜風が汗ばんだ肌えを快く吹いて通った。石井は両手で胸をくつろげて、空を仰いではーっと息をした。秋近くなって深く海のように透き徹った夜の空には、銀河が白く縦に流れていた。小屋から流れ出る光は外の闇をくっきりと劃っていた。暗いとこへ来たとき石井はお新の手をとった。日毎の働きに強ばった掌も熱い血汐にほてっていた。二人は黙って選鉱小舎の方へ登って行った。真暗な小舎の中には坑内から来る水がひそやかな音を立てて流れていた。——

翌朝になって書き入れ時を忙がしく廻る旅役者の群は、鉱力のサーベルを手にした座頭を先きに立てて、僅かな衣裳をつめた鞄を代り合って担ぎながら村境の峰を越えて発って行った。山路の草はまだ露に濡れて、朝陽にきらきら輝いていた。

その夜は諸国から寄り集った坑夫等が、各自に生れ故郷の盆踊りをやると云っていたが、朝の間は皆な酒に浸っていた。音頭取が叩く為に用度から持って来た醤油の空樽も飯場の前に放り出してあった。午近くなると酒精の気は飯場にも長屋にも万遍なくしみ渡って、はしゃいだ人達の無揃な唄声や手拍子の響きが、門並に起っていた。飯場では若い坑夫等が盆踊りの予習をやり始めた。荒くれた大男が揃って、太い毛脛を踏みしめて踊り廻る度に、黒く汚れた畳からむせっぽい煙のような埃が舞い上った。

石井は前の晩酒を飲みすぎて感覚が爛れたようになってから、血も上ずった歓楽に耽った揚句夜更けまで、露の深い山道を歩き廻ったので、今朝起きた時は、関節は破れそうにだるくなって、冷汗ばかりぞくぞく出て頭は破れそうに痛んでいた。苦しいのを我慢して迎え酒を飲んでから彼れは隅の方で、汗をかいてぐたぐたに寝入っていたが、俄かに床を轟かす騒がしい物音に驚いて醒めた。まだ意識の判然しない目の前を、太い毛脛や細い足が飛び廻っていた。彼れは何事かと思ってむくっと起き上って瞳を定めて見ると、向うの隅の方で一人が羽目を叩きながら音頭をとっている。酔いどれた男達が七八人しどろの足を踏みしめては、「こらしょい」と声を合せて踊り狂っているのだ。目の前を過ぎる足を片端から払ってやりたい程にも苛々したが、年に一度の盆休みの事と思うと逼に彼れも怒る気にもなれないので、重い瞼をこすりながら、外の筧に顔を洗いに出た。

その日は分けて暑かった。午近い残暑の空からたぎり落る、焔のような光が四辺をかっと照りつけているので、木も石も水の面も燃ゆるような光りをちかちか放っていた。その光に打たれると、どろんとした彼れの目はずきずき痛んで重い頭はぐらぐらと倒れそうになった。彼れは急いで飯場に這入ると入り口に腰を下して静に休んでいた。踊っていた人々も疲れたと見えてぐったり坐ってだらだら流れる汗を拭きながら苦しそうにはっはっと息をついていた。日が頭の真上に来たので室の中は温室のように暑くなった。みんなは裸になって獣のようにごろごろ寝ころんだ。長屋の人達も暑さにめげたと見えて歌の声も聞えなくなった。

外には溶ろかすような熱い日が、杉皮の屋根や、硅石を敷いた往還の上に燃えている。四方を高い山に遮ぎられた摺鉢の底のような此の沢合には、そよりとした風も来ないので、一としきり湯釜のような熱さになった。草木の葉も息を止めたようにぐんなりと萎れ返って、無性な女達の捨

てた塵埃が煮えてすえるような匂いを絶えずたてていた。――此の暑さを冒して家の外に出る人もないので、あたりは森閑とした真昼の静寂に沈んでいた。

石井は再び眠る気もしないので、手拭を肩にして上り口に腰をかけたまま、ジッと暑さと戦い堪えるように空しく表を見つめていた。浴衣を帯なしでぱっとあおった大沢が、酒臭い息をしながら這入って来た。

「どうだ此の暑いのに、どこでもみんなよくねてるなあ、目玉も身体も溶けちまうだに」と怒鳴り散らしてから「石井の兄弟も退屈そうだな、一杯やらねえか」と云った。

「暑くってしようがねえんだけど、少しなら飲っても好いな」大沢を好かない石井も退屈なままに言った。

「俺あ行って酒を持って来るで」と大沢は足を返して外に出たが、やがて徳利をさげて来た。石井もその間に自分の箱膳を出して、帳場から肴になりそうな品を取って来て湯呑も二つ並べて待っていた。

「さ、やるべえ」と二人はなるたけ風通しのよさそうな所に向き合って、飲み初めた。石井は初め二三杯飲む間は、爛れた内臓に悪くしみるようにも思ったが、少し廻るとひそんでいた酔も出て元気のいい顔になった。

大沢は初めから酔っていた。それでも最初の中は二人とも、方々の山の噂などをして他愛なく笑っていたが、漸々酔が烈しくなると大沢はまた得意の喧嘩自慢を喋舌り出した。石井が黙っていやな顔をしていても、興に乗った彼れは夢中になって

「俺赤沢に居た時だっけよ、賄部屋の後ろでみんなして丁半をやってる所へお前、請願の野郎が来やがってよ」と膝を乗り出した。

「おい、もうよしてくれ、俺あ自分の喧嘩であきあきしてるんだから」と石井は堪らなくなったので顔をしかめて手を振った。折角話しかけた腰を折られて、大沢はむっとした顔をしたが、相手も普通外れて気の荒いのを知っているので、仕方なしに黙って了った。二人はいやな沈黙に耽った。酒に興奮してとがった気と、ふだんから抱いていた反感がそこで音もなく争っていた。

石井は胡座の膝に頬杖をついて首をかしげて湯呑の酒を乾していた。彼れはもう此んな大沢を相手に酒を飲んでる事はいやになった。――昨夜お新と別れるとき、今夜は塩子の弁天堂で逢う約束をした事を思っていた。そして早くこの暑い日が暮れて涼しく楽しい夜の来るのを待っていた。大沢は石井の顔をジッと見入っていたが、濃い眉をぴくぴくと動かすと

「おい石井の兄弟」と強く呼んだ。

「なんだ」と石井は顔をあげたが、二人の目は険しく光っていた。

「俺が甥っ子の野田もよ、近え中に三号の頭になるかも知れねえけど、お前とも折角こうして飲み合っただ、兄弟の盃しようでねえか」と湯呑を突きつけた。石井の顔には激

しい侮蔑と嫌悪の情が表われた。
「俺いやだ」ときっぱり言ったので、大沢はぶるぶるっと身体を慄わせた。
「なにが――なにがいやだ」とつめよせた。
「いやだから、いやだってんだ――第一手前(てめえ)の云いぐさが、一々癪にさわら、いやだったって手前と俺と盃をするのに何になるんだ、下らねえ事を云うな法螺吹き、――俺あ野田みてえなおべっか野郎は大きれえだ、手前もきれえだ」
「な、生意気云うな二歳っ子のくせに、俺あ今まで盃しよって弾かれた事なんかねえだ、――うぬ此山で幅を利かしたって、俺が来てからそうはさせねえだ」と腕をまくって突張って見せた。
「馬鹿っ」鋭い声と共に石井は立ち上りながら、右足を飛ばして大沢の胸を蹴った。はずみを喰った膳や徳利は、カラカラ土間に転げ落ちた。倒れかかった身体をやっとささえて大沢は
「やったな野郎ッ」と叫びながら立ち上った。その時彼の目に、横の羽目に立てかけてあった支柱斧が映った。半月形の双先きは研ぎ上げたばかりのように、薄暗い中に青く光っていた。大沢は身を翻すと斧をとって振り上げた。
「しゃれた真似を」と云った石井の手にも匕首が閃いていた。二人とも烈しく酔っているので、自分ばかり確かり闘っているように思っても、可笑しい程ふらついていた。二人はめちゃめちゃに獲物を振り廻した。石井がひょろけるように手元にぐろうとしたとき、肩先をどしっと切られたが、それと同時に大沢の脇腹に匕首を突き通した。妙な攣痙(ひきつ)るような唸り声が二人の口から洩れて、夢中になってしがみついた二つの顔は見る間に蒼ざめて行った。どくどく噴き出す血汐は浴衣に滲んで赤く拡がった。血に狂った二人の眼には何物も映らなかった。――小犬のようにもつれて、熱い大地に転がり出した。
惨劇は咄嗟の間に行われた。――その物音に最初に昼寝の夢を破られた男は、真赤な血の塊りの転がるのを見た、――慌てて外に出ると両手をあげて、
「喧嘩だ――皆出ろよ――」と身を屈(かが)めて怒鳴った。――静寂は破られた――飯場や長屋から軒並に素裸の男が飛んで出て、筧のそばで血みどろになって、かじりついているのを引離したが、眼の眩んだ二人は誰れにでも狂犬のように飛びかかった。野田が大沢を後から抱き止めようとしたが、大きな身体で暴れるので自分まで倒れそうになった。
「誰れか手を貸してくれよ」と切なげに言ったので四五人してばたばたする手足を持って、野田の家へ担ぎ込んだ。血はまだ糸をひくように滴って行った。石井はもう相手の見境がなくなっていた。誰かにしがみ附こうとしたのを邪慳に突き離されると、どたんと大地に倒れた。
「うーむ」と苦しそうに呻いて手足をもがいた。
取巻いていた坑夫等の眼には惨忍な笑が浮んだ。――そ

の中には女房を弄ばれた者もあった。彼れに怒罵されたり蹴られて恨を忍んでいた者もあった。けれ共彼れの心を知ってる者は一人もなかった——誰か最初に
「つらあ見ろ畜生ッ、余り威張りやがったもんだから好い態だッ」と力任せに蹴飛した。せかれていた水口を切られたように、卑怯な下駄履きの足は怪我人の上に注がれた。反抗の力を失った者にする復仇は容易かった。妙な唸り声は直ぐに消えて、手足のもがきも止んで了った。

吉田はその日も朝から長屋の下の用度掛で、萩田や用度の書記を相手に酒を飲んでいたが、その時飯場の掴子が慌ただしく駈けて来た。
「かしら——石井さんが喧嘩して斬られただ——」と怒鳴った。萩田は顔色をかえて盃を投り出して跣足で飛び出した。吉田も少し遅れてつづいた。

二人の姿が遠くに見えると誰かが
「かしらが来た。よせよせ」と云ったのでしゃがんで介抱するような風をする者もあった。

併し石井の死顔は、卑怯な人々の残忍な行為を明らかに物語っていた。ずたずたに裂けた浴衣は、血と泥に滲んで赤黒くなっていた。肩口のあたりには殊に濃い血が固まっていた。顔は目鼻の見分けもつかない程でこぼこに紫色に腫れ上って、ぶっ切れた所に滲んだ血がいやな色どりを見せていた。口惜しそうに固く結んだ口の端には汚い血汐がこびりついていた。

萩田はやっと馳けつけて、その恐ろしく浅猿しい死態を見ると鋭い目を光らして、取り巻いてる人々の顔と死骸を見比べた。が誰れも知らん顔をしていた。吉田は身体をぶるぶる慄わせて
「誰れがこんな真似をしたんだ」と口惜しそうに怒鳴ったが、それに答える者はなかった。四辺に滴った血汐は、焦げつくような日の力に乾きかけて薄黒くなっていた。

（一九一六年一月近代思想社刊、一九二五年四月改作）

転機

伊藤野枝

一

不案内な道を教えられるままに歩いて古河の町外れまで来ると、通りは思いがけなく、まだ新らしい高い堤防で遮られている道ばたで、子供を遊ばせている老婆に私はまた尋ねた。老婆はけげんな顔をして私達二人の容姿に目を留めながら、念を押すように、今私の云った谷中村と云う行く先きを聞き返しておいて、

『何んでも、その堤防を越して、河を渡ってゆくんだとか云いますけれどねえ。私もよくは知りませんから。』

何んだか、はっきりしない答えに、当惑している私達が気の毒になったのか、老婆は自分で他の人にも聞いてくれたが、矢張り答えは同じだった。しかし、兎に角その堤防を越して行くのだと云う事だけは分ったので、私達はその町の人家の屋根よりは遥かに高い位な堤防に上った。

やっと、のぼった私達の前に展かれた景色は、何と云う思いがけないものだったろう！　今、私達が立っている堤防は黄褐色の単調な色をもって、右へ左へと遠く延びて行って、遂には何処まで延びているのか見定めもつかない。しかも堤防外の総てのものは、それによって遮ぎりつくされてただ漸々に一二カ所ずつ木の茂みが、低く暗緑の頭を出しているばかりである。堤防の内は一面に黄色な枯れ葦に領された広大な窪地であった。私達の正面は五六町を隔てた処に横たわっている古い堤防に遮ぎられているが、右手の方に拡がったその窪地の面積は、数理的観念には極めて遠い私の頭では、一寸どの位と云うような見当はつかないけれど、何しろそれは驚くべき広大な地域を占めていた。こうして高い堤防の上に立つと、広い眼界がただもう一面に黄色なその窪地と空だけで一杯になっている。

その思いがけない景色を前にして、私はこれが長い間――本当にそれは長い間だった――一度聞いてからは、ついに忘れることの出来なかった村の跡なのだろうかと思った。窪地と云ってもこの新しい堤防さえのぞいて仕舞えば、この堤防の外の土地とは何の高低もない普通の平地だと云う事や、窪地の中を真っ直ぐに一と筋向うの土手まで続いている広い路も、この堤防で遮ぎられた先刻の町の通りに続いていたものだと云う事を考え合わせて見れば、どうもそうらしく思われもする。けれど、堤防の中の窪地に今もなお居残って住んでいると云う、今私の尋ねて行こ

うと云う人達は、この広い窪地の何処に住んでいるのであろう？　道は一と筋あるにはあるが、彼の土手の外に人家があるとは、聞いた話を信用すれば少しおかしい。

『一寸お伺いいたしますが、谷中村へ行くのには、この道をゆくのでしょうか？』

丁度その窪地の中の道から、土手に上って来た男を待って、私は聞いた。その男もまた、不思議そうに、私達を見上げ見下ろしながら、谷中村はもう十年も前から廃止になって沼になっているが、残っている家が少々はない事もないけれど、とても行ったところで分るまいと云いながら、それでも、其処はこの土手のもう一つ向うになるのだから、土手の蔭の橋の傍で聞けと教えてくれた。けれど彼はなお、私達に、とても行ったところで仕方がないと云うような口吻で、残った人達を尋ねる事の困難を説明した。

窪地の中の道の左右は、疎に葦が生えてはいるが、それが普通の耕地であった事は一と目に肯かれる。細い畔道や、田の間の小溝が、ありしままの姿で残っている。しかし、この新らしい高い堤防が役立つ時には、それも新らしい一大潴水地の水底に葬り去られてしまうのであろう。人人はそんなかかわりのない事は考えても見ないと云うような顔をして、坦々と蹈みならされた道を歩いてゆく。

土手の蔭は、教えられたとおりに河になっていて舟橋が架けられてあった。橋の手前に壊れかかったと云うよりは拾い集めた板切れで建てたような小屋がある。腐りかけたような蜜柑や、みじめな駄菓子などを並べたその店先きで、私は又尋ねた。

小屋の中には、七十にあまるかと思われるような、目も、鼻も、口も、その夥だしい皺の中に畳み込まれて仕舞ったような、ひからびた老婆と、四十位の小造りな、貧しい姿をした女と二人いた。私はかねがね谷中の居残った人達が、だんだんに生計に苦しめられて、手当り次第な仕事につかまって暮らしていると云うような事も聞いていたので、この二人がひょっとしてそうなのではあるまいかと云う想像と一緒に、何となくその襤褸にくるまって、煮しめたような手拭いに頭を包んだ二人の姿を哀れに見ながら、それならば、多分尋ねる道筋は、親切に教えて貰えるものだと期待した。しかし、谷中村と聞くと、二人は顔見合わせたが、思いがけない嘲りを含んだ態度を見せて、私の問に答えた。

『谷中村かね、はあ、あるにはあるけれど、沼の中だでね、道も何にもねえし――いる人も、いくらもねいだよ――』

あんな沼の中にとても行けるものかと云うように、てんから道など教えそうにもない。それでも最後に橋番に聞けと云う。舟橋を渡ると直ぐ番小屋がある。三四人の男が呑気な顔をして往来する人の橋銭をとっている。私は橋銭を払ってから又聞いた。

『谷中村ですか、此処を右に行きますと堤防の上に出ま

す。其の向うが谷中ですよ。此処も、谷中村の内にはなるんですがね。』

一人の男がそう云って教えてくれると、直ぐ他の男が追つかけるように云った。

『その堤防の上に出ると、すっかり見晴らせまさあ。だが、遊びに行ったって、何にもありませんぜ。』

彼等は一度に顔見合せて笑った。多分、私達二人が、気紛れな散歩にでも来たものと思ったのであろう。笑声を後にして歩き出した時、私は、この寒い日に、わざわざ斯うして用もない不案内な廃村を訪ねてゆく自分の酔狂な企てを振り返って見ると、今の橋番の言葉が、何か皮肉に聞こえて、苦笑しないではいられなかった。

一丁とは行かないうちに、道の片側には綺麗に耕された広い畑が続いていて、麦が播いてあったり、見事な菜園になっていたりする。畑のまわりには低い雑木が生えていたり、小さな藪になっていたりして、今、橋のそばまで見て来た景色とは、可なりかけ離れた、近くに人の住むらしい、稍や温かなけはいを感ずる。片側は、直ぐ道に添うて河の流れになっているが、河の向う岸は丈の高い葦が、丈を揃えてひしひしと生えている。その葦原もまた何処まで拡がっているのか解らない。しかし、左側の生々した畑地に慰さめられて、もう左程遠くもあるまいと思いながら歩いて行った。

『可笑しいわね、堤防なんてないじゃありませんか。どうしたんでしょう？』

『変だねえ、もう大分来たんだが。』

『先刻の橋番の男は堤防にのぼるとすっかり見晴せますなんて云ってたけれど、そんな高い堤防があるんでしょうか？』

私と山岡がそう云って立ち止まった時には、小高くなった畑地は何処か後の方に残されて、道は両側とも高い葦に迫まられていた。行く手も、両側も、後も、森として人の気配らしいものもしない。

『橋の処から此処まで、ずっと一本道なんだからな、間違える筈はないが、――まあもう少し行って見よう。』

山岡はそう云って歩き出した。私は、通りすごして来た畑が、何か気になって、あの蔭あたりに家があるのではないかと思ったりした。

漸く、向うから来かかる人がある。待ちかまえていたように、私達はその人を捉えた。

『さあ、谷中村と云っても、残っている家はいくらもありませんし、それも、皆な飛び飛びに離れていますからな、何と云う人をおたずねです？』

『Sと云う人ですが――』

『Sさん、ははあ、どうも私には分りませんが――』

その人は少し考えてから云った。

『家が分らないと、行けない処ですからな。何しろその、皆な一とかたまりになっていませんから――』

意外な事を聞いて当惑した。しかし兎に角、人家のある所まででも、行くだけ行って見たい。
『まだ、余程ありましょうか？』
『左様、大分ありますな。』
丁度その時私達の後から来かかった男に、その人はいきなり声をかけた。
『この方達が谷中へお出なさるそうだがお前さんは知りませんか』
その男も矢張り、今までと同じように妙な顔付きをして、私達を見た後に云った。
『谷中へは、誰を尋ねてお出なさるんです？』
『Sと云う人ですが――』
『ああ、そうですか、Sなら知って居ります。私も、直ぐ傍を通ってゆきますから、御案内しましょう』
前の男にお礼を云って、私達は、その男と一緒になって歩き出した。男はガッシリした体に、細かい茶縞木綿の筒袖袢纏をきて、股引わらじがけと云う身軽な姿で、先きにたって遠慮なく急ぎながら、折々振り返っては話かける。
『谷中へは、何御用でお出です？』
『別に用と云う訳ではありませんが、実は此処に残っている人達が愈々今日限りで立ち退かされると云う話を聞いたもんですから、どんな様子かと思って――』
『ははあ、今日かぎりで、そうですか、まあ何時か一度は、どうせ逐い払われるに極まったことですからね。』
男はひどく冷淡な調子で云った。
『残っている人は実際のところどの位なものです？』
山岡は、男が大分谷中の様子を知っていそうなので、頻りに話しかけていた。
『さあ、確かりしたところは分りませんが、十五六軒もありますか。皆んな飛び飛びに離れているので、よく分りません。Sの家がまあ土手から一番近い所にあるのです。その近くに、二三軒あって、後はずっと離れて、飛び飛びになっています。Sの母親と、私の母親が姉妹で、あの家とは極く近い親戚で――え、私も元は矢張り谷中の者です。Sも、どうもお百姓のくせに、百姓仕事をしませんで、始終何にもならん事に走りまわってばかりいて困ります。』
彼はそんな事も云った。若いSは谷中の為めに一生を捧げたT翁の亡き後は、その後継者のような位置になって、残留民の代表者になって、いろいろな交渉の任にあたっていた。Sにはそれは本当に一生懸命な仕事でなくてはならなかった。
『堤防を切られて水に浸っているのだと云いますね。』
『なあに、家のある処は皆な地面がずっと他よりは高くなっていますから、少々の水なら決して浸るような事はありませんよ。Sの家の地面なんかは、他の家から見るとまた一段と高くなっていますから、他は少々浸っても大丈夫な位です。お出になれば分ります。』
彼はさも、何でもない事を大げさに信じている私達を笑

うように、また私達をそう信じさせる村民に反感をもってでもいるように、苦い顔をして云い切ると、またスタスタ先きになって歩き出した。

　何時のまにか、行く手に横わった長い堤防に私達は近づいていた。

『あ、あの堤防だ、橋番の奴、直ぐ其処のような事を云ったが、随分あるね。でもよかった、こういう道じゃ、うまくあんな男にぶつかったからいいようなものの、それでないと困るね。』

『でも、よくうまく知った人に遇ったものね、本当に助かったわ。』

　二人はやっと思いがけない案内者が出来たのに安心して、少し後れて歩きながら、そんな話をした。

『これがずっと元の谷中です。』

　土手へ上った時、男は其処に立ち止まって、前に拡がった沼地を指して云った。

二

　それは何と云う荒涼とした景色だったろう！　遥かな地平の果てに、雪を頂いた一脈の山々がちぢこまって見える他は、目を遮ぎるものとては何物もない、唯だ一面の茫漠とした沼地であった。重く濁った空は、その広い沼地の端から端へと同じ広さで低くのしかかり、沼の全面は枯れすがれて生気を失った葦で覆われて、冷たく鬱した空気が鈍くその上を動いていた。右を向いても左を向いても、同じような葦の黄褐色が目も遥かに続いているばかり、うねり曲って左右に続く堤防の上の道さえ、何処まで延びているのか、遂には矢張り同じ黄褐色の中に見分けもつかなくなって仕舞う。振り返れば来る来る歩いて来た道も、堤から一二丁の間白く見えただけで、一と曲りしてそれも丈の高い葦の間にかくされている。その道に沿うてただ一叢二叢僅かに聳えた木立が、其処のみが人里近いことを思わすだけで、何処をどう見ても、底寒い死気が八方から迫って来るような、引き入れられるような、陰気な心持を誘われるのであった。

　古河の町を外ずれて、高い堤防の上から谷中村かと思われる沼地の中の道に踏み入ろうとして私は嘗って人の話に聞いて勝手に想像していた谷中村と云うものとは、あまりの相異に総ての自分の想像から持っている期待の取捨に迷いながら、やっと此の土手まで来たのであった。先刻道を聞いた時、橋番が云ったように、成程廃村谷中の跡は此処から一と目に見渡せるのであった。しかも見渡した景色は、瞬間に、私の及びもつかない想像をも期待をも押し退けた。それは此処までの途すがらに散々私を悩ました、あの人気のない、荒寞とした、取りつき端のないような景色よりも、更に思いがけないものだった。

『まあひどい！』

そう云ったなりで、後の言葉がつづかなかった。ひどい！と云う言葉も、私が今一度に感じた複雑な感じのほんの隅っこの切れっぱしにすぎないとしか思えないような、不満な思いがするのであった。冬ではあるが、それでも、こうして立っている足元から前に拡がったこの広大な地に、目の届く処にせめて、一本の生々とした木なり草なり生えてでもいることか、ただもう生気が失って風にもまれる枯れ葦ばかり、虫一匹生きていそうなけはいさえもない。ましてこの沼地の何処に人が住んでいるのだなどと思えよう？

案内役になった連れの男はさっさと歩いて行く。何処をどう行くのかも分らずに、蹤いて行くのに不安を感じて私は聞いた。

『谷中の人達の住んで居る処まではまだよほどあるのですか？』

『そうですね、この土手をずっとゆくのです。一里か一里半もありますかね。』

道は幅も広く平らだった。しかし、この道をもう一里半も歩かなければならないと云う事は私には可なり思いがけもない辛らい事だった。殊に帰りもあるのに、この人里離れた処では乗物などの便宜のないと云う分り切った事が無暗に心細くなり出した。それでもこの雪もよいの寒空に自分から進んで、山岡までも引っぱって出かけて来ておいて、まさかそのような事までも、口へ出しては云いかねて黙って歩いた。

『斯うして見ると広い土地だね、荒れている事も随分荒れてるけれど、これで人が住んでいた村のあとだとは一寸思えないね。』

『本当にね随分ひどい荒れ方だわ。こんなにもなるものですかねえ。』

『ああ、なるだろうね、もう随分長い間の事だから。しかし、こんなに酷くなっていようとは思わなかったね。何んでも、此処は実にいい土地だったんだそうだよ。田でも畑でも肥料などは施らなくても、普通より多く収穫がある位だった、と云うからね。御覧、そら、其処らの土を見たって、真黒ないい土らしいじゃないか。』

『そう云えばそうね。』

私は土手を匐うように低く生えた笹の葉の緑色を珍らしく見ながらそう云った。この先きの見透しもつかないような広い土地——今はこうして枯れ葦に領されたこの広い土地——に、嘗てはどれだけの生きものが育くまれたであろう。人も草木も鳥も虫も総ての者が。だが、今はそれ等の総てが奪われて仕舞ったのだ。そして土地は衰え果ててもとのままに横わっている。

『何故このように広い、その豊饒な土地をこんな惨めに殺したものだろう？』

もとのままの土地ならば、この広い土地一ぱいに、春が来れば菜の花が咲きこぼれるのであろう。麦も青く芽ぐむ

に相違ない。秋になれば稲の穂が豊かな実りを見せるに相違ない。そうして総ての生きものは、しあわせな朝夕をこの土地で送れるのだ。それだのに、何故、その豊かな土地を、わざわざ多くの金をかけて、人手を借りて、こんな廃地にしなければならなかったのだろう？

それは、私がこの土地の事に就いての話を聞いた最初に持った疑問であった。そして、私はその疑問に対する多くの答を聞いている。しかし現在この広い土地を見ては、矢張り、そのような答えよりも最初の疑問が先ず頭をもたげ出すのであった。

歩いて行く土手の道の内側の処々に、土手と並んで僅かな畑がある。先きに歩いて行く男は振り返りながら、

『こう云う処はもと人家のあった跡なのですよ。』

と思い出したように教えてくれる。もとは、この土地に住んでいた村民の一人だと云うその男は、この情ないような居村の跡に対しても、別段に何の感じもそそられないような無神経な顔をして、ずっと前にこの土地の問題が世間に彼れ是れ云われた時の事などをポツリポツリ話しているのであった。そして、それも嘗ての自分達の事を話していると云うよりは、まるで他人の身の上の事でも話しているような無関心な態度を、私は不思議な気持で見ていた。彼は惨苦のうちにこの土地に未練をもって、今もなお池の中に住んでいる少数の人達に対しても、冷淡な侮蔑を躊躇なく現わすのであった。

『ずっと向うに一寸した木立がありますね。ええずっと遠くの方に、今煙が見えるでしょう？　あの少し左へよった処に、矢張り木の茂った処が見えますね、あれがSの家です。まだ大分ありますよ。』

指された遥かな方に、漸くのことで小さな木立が見出された。細い貧し気な煙も見える。私と山岡が、今尋ねて行こうとしている人達の住居は其処なのだった。連れの男は折々立ち止まっては、後れる私達を待つようにして、一言二言話しかけては又先きにずんずん歩いて行く。道に添うて、先刻はただ一と目に広く大きいままに見た景色の中につつまれた、小さな一つ一つのみじめな景色が順々にむき出しにされて私達を迎える。何時か土手に添うた畑地はなくなって、土手の直ぐ下の沿岸の、疎らになった葦間に、みすぼらしい小舟がつなぎもせずに乗り捨ててあったり、破れた舟が置きざりにされてあると見てゆくうちに、人の背丈の半ばにも及ばないような低い、竹とむしろで漸くに小屋の形をしたものが、腐れかかって残っていたりする、長い堤防は人気のない沼の中をうねり曲って、何処までも続いている。

山岡は乾いた道にステッキを強くつきあてては高い音をさせながら、十四五年も前にこの土地の問題に就いて世間で騒いだ時分の話や、知人の誰れ彼れがこの村の為めに働いた話をしながら歩いて行く。

『今じゃ皆な忘れたような顔をしているけれど、その時分

には大変だったさ。それに何の問題でもそうだが、あの問題も矢張りいろんな人間の為めに随分利用されたもんだ。あのTと云う爺さんがまた非常に人が好いんだよ。それにもう死ぬ少し前なんかにはすっかり耄碌して意気地がなくなって、僕なんか会っても厭やになっちゃったがね。少し同情するような事を云う人があるとすっかり信じてしまうんだよ。それで随分いい加減に担がれたんだろう。』

『そうですってね。死ぬ時には村の人にそう云ってたじゃありませんか。でも、誰も他をあてにしちゃいけないって。仕舞いにはこりたんでしょうね。』

『それやそうだろう。』

『だけど、人間の同情なんてものは、全く長続きはしないものなのね。もっとも各自に自分の生活の方が忙しいから仕方はないけれど。でも、此の土地だって、その位に皆んなの同情が集っている時に、何とか思い切った方法をとっていれば、どうにか途はついたのかもしれないのね。』

『ああ、これで矢張り時機と云うものは大切なもんだよ。此処だってむしろ旗をたてて騒いだ時に、其の勢でもっと思い切って一気にやって仕舞わなかったのは嘘だよ。こう長引いちゃ、どうしたって、こう云う最後になる事は解り切っているのだからね。』

けれど兎に角世間で問題にして騒いだ時には、多くの人に涙をわかされた土地なのに、それが何故に何の効果も見せずに、斯うした結末に来たのだろう？　他事としての同情なら続く筈もないかもしれない。しかし、一度はそれを自分の問題として寝食を忘れてもつくした人が、もう思い出して見ないと云うような事が、どうしてあり得るのであろう？　私はこの景色を前にして、色々な過ぎ去った話を聞いていると、最初に私が、その事件に対して持った不平や疑問が、新らたにまき帰って来るのであった。

三

私が始めて其の谷中村と云う名を聞き、其の事件に就いて知り得たのは、三年か四年も前の事だ。其の頃私の家に一番親しく出入していたM夫妻によって、初めて私は可なり委しく話して聞かされた。

或る日――それはたしか一月の寒い日だったと覚えている――M氏夫妻は、何時になく沈んだしかし何処か緊張した顔をして門を這入って来た。上ると直ぐ例のとおりに子供を抱き上げてあやしながら、一としきりよろこばしておいて、思い出したように傍にいた私に、明日から二三日他へゆくかもしれないと云った。

『何方へ？』

何気なしに私はそう尋ねた。

『え、実は谷中村まで行って来たいと思うのです。』

『御存じありませんか、栃木ですがね。例の鉱毒問題のあ

の谷中ですよ。』
『へえ、私些っとも知りませんわ、その鉱毒問題と云うのも――』
『ああそうでしょうね、あなたはまだ若いんだから。』
そう云ってM氏は妻君と顔見合わせて一寸笑ってから云った。
『T翁と云う名位は御存じでしょう？』
『ええ、知ってますわ。』
『あの人が熱心に奔走した事件なんです。その事件で問題になった土地なんです。』
『ああそうですか。』
私にもそう云われれば何かの書いたものでT翁と云う人は知っていた。義人とまで云われたその老翁が、何か或る村の為めに尽したのだと云う事も朧ろ気ながら知っている。しかしそれ以上の委しい事は何にも知らなかった。
『実は今日その村の人が来ましてね、いろいろ話を聞いて見ると実にひどいんです。何だか、とてもじっとしてはいられないので一つ出かけて行って見ようと思うのです。』
M氏は急に、恐ろしく興奮した顔付きをして、突然にそう云って黙った。私には何の事だか一切分らなかったけれど、不断何事にも真面目なM氏の一と通りの事ではないような話の調子に、まるで外れているのも済まぬような気がして、さぐるようにして聞いた。
『その村に、何かあったのですか？』
『実はその村の人たちが水浸りになって死にそうなんですよ。水責めに遇っているんですよ。』
『え、どうしてです？』
『話が少しあとさきになりますが、谷中村と云うのは、今日ではもうない事になっているんです。旧谷中村は全部堤防で囲まれた豬水池になっているんです。いい加減な話では解らないでしょうけれど。』
斯う云ってM氏は先ず鉱毒問題と云うものから話しはじめた。
谷中村は栃木県の最南端の、茨城と群馬と接近した土地で、渡良瀬と云う利根の支流の沿岸の村なのであるが、その渡良瀬の水源が足尾の銅山地方にあるので、銅山の鉱毒が渡良瀬川に流れ込んで、沿岸の土地に非常な被害を及ぼした事がある。それが問題となって、長い間物議の種になっていたが、政府の仲介で鉱業主と被害民の間に妥協が成立して、一と先ずそれは片附いたのだ。しかし水源地の銅山の樹が濫伐された為めに、年々洪水の被害が絶えないのと、その洪水の度びに、矢張り鉱毒が濁水と一緒に流れ込んで来るので、鉱毒問題の余炎がとかく上りやすいので、政府ではその禍根を絶つ事に腐心した。
水害の原因が水源地の濫伐にあることは勿論であるが、栃木、群馬、茨城、埼玉等の諸県にまたがるこの被害のもう一つの原因は、利根の河水の停滞と云う事にもあった。本流の河水の停滞は支流の渡良瀬、思等の逆流となって、

其の辺の低地一帯の氾濫となるのであった。そこで、その河水の停滞をのぞく為めに、河底を渫えると云う事、その逆流を緩和さす為めの瀦水池をつくる事が最善の方法として選ばれた。そして渡良瀬、思の両川が合して利根の本流に落ちようとする処、従って、何時も逆流の正面に当って一番被害の激しい谷中村がその用地にあてられたのである。土地買収が始まった。躍起となった反対運動も、何の効も奏しなかった。激しい反対の中に買収はずんずん遂行された。しかし、少数の強硬な反対者だけはどうしても肯んじなかった。彼等は祖先からの由緒を楯てに、官憲の高圧的な手段に対しての反抗、または買収の手段の陋劣に対する私憤、その他種々な、からみまつわった情実につれて、死んでも買収には応じないと頑張った。大部分の買収を終って、既に工事にかかった当局は、この少数の者に対しては、どうしても、土地収用法の適用によって、他に立退かすより他はなかった。そこで、その残った家の強制破壊が断行された。

『その土地収用法と云うのは一体何んです？』

『そう云う法律があるんです。政府で、どうしても必要な土地であるのを、買収に応じないものがあれば、その収用法によって、立ち退きを強制する事が出来るのです。』

『へえ、そんな法律があるんですか。でも家を毀すなんて、乱暴じゃありませんか。もっとも、それが一番有効な方法じゃあるでしょうけれど、あんまりですね。』

その家屋破壊の強制執行は、更らに残留民の激昂を煽った。

『そのやり方も随分ひどいんですよ。本当ならば先ず毀す前に、皆なを収容するバラック位は建てておいて、それからまあ毀すなら毀して、それも他の処に建ててやる位の親切はなければならないんです。それを何でも家をこわして、此処にいられないようにしさえすればいい位の考えで、滅茶苦茶にやったんでしょう。それじゃ、とても虫をおさえている訳にはゆきませんよ。第一他にからだのおき場所がないんですからね。』

彼等はあくまで反抗する気で、其処に再び自分達の手でやっと雨露をしのげる位の仮小屋を建てて、どうしても立ち退かなかった。勿論、下げ渡される筈の買収費をも受けなかった。県当局も、それ以上には手の出しようはなかった。彼等がどうしても、その住居に堪えられなくなって立ち退くのを待つより他はなくなった。しかし、それから、もう十年の月日が経った。工事も済んで、谷中全村の広い地域は、高い堤防を囲まれた一大瀦水池になった。そして河の増水の度びに、その瀦水池の中に水が注ぎ込まれるのであった。それでも彼等は其処を去りそうな様子は見せなかった。

『今となっちゃ、もう愈々動く訳にはゆかないようになっているんでしょう。一つはまあそうした行きがかりの上から意地にもなっていますし、もう一つは、最初は手をつけ

る筈でなかった買収費も、つい困って手をつけた人もあるらしいので、他へ移るとしても必要な金に困るような事になったりして。其処からは、この頃にまた堤防を切ったんだそうです。処が、この三月時分の水源の山の雪がとけて川の水嵩がまして来ると、どんどん水が這入って来て、とても今のようにして住んでいる事は出来ないんだそうですがね。当局者は、そうでもすれば、どうしても他へゆかなければならなくなって立ち退くだろうと云う考えらしいのですがね。残っている村民は、例えその水の中に溺れても立ち退かないと決心しているそうです。Sというその村の青年が、今度出て来たのもその様子を訴えに来たような訳なのです。』

『随分ひどい事をしていじめるのですね。じゃ今だって水に浸っているようなものなんですね。その上に水を入れられちゃ堪ったものじゃありませんわ。そして、その事は世間じゃ、ちっとも知らないんですか？』

『ずっと前には鉱毒問題から続いて、収用法適用で家を毀されるようになった時分までは、随分世間でも騒ぎましたし、一生懸命になった人もありましたけれど、何しろ、もう三十年も前から続いた事ですからねえ、大抵の人には忘れられているのです。』

それは私には全く意外な答えであった。先ず世間一般の人達はともあれ、一度は、本当に一生懸命にその為めに働いた人があるとすれば、今また新らしくそうした最後の悲惨事をどう上の空で黙過することが出来るのだろう？　私はM氏に、何か不満なその考えをむき出しにして云った。しかしM氏はおしなだめるように云った。

『それや、あなたは始めて聞いたんだからそう思うのはあたりまえですけれど、みんなは、「まだ片付かなかったのか」くらいにしか思いはしないのでしょうよ。そう云う事はほんとうに不都合な事です。不都合な事ですけれど、しかし、それが普通の事なんですから。いまは三河島に引っ込んでいるKさん、御存じでしょう？　あの人でさえ、一時は、あの問題の為めに一身を捧げる位な意気込みでいたんですけれど、今日じゃ、何のたよりにもならないのですからねえ。』

K氏と云えば、一時は有力な社会主義者として敬意を払われた人である。創作家としても、その人道的な熱と情緒によって多くの読者を引きつけた人である。

『へえ、Kさん？　ああ云う人でも――』

私は呆れて云った。

『Kさんも、前とはよほど違っていますからねえ。然しKさんばかりじゃない、皆ながそうなんです。要するに、もう随分長い間どうする事も出来なかった位ですから、この場合になっても、どう手の出しようもないから、まあ黙って見ているより仕方はあるまいと云うのが皆なの考えらしいんです。しかし。』

M氏は一たん言葉を区切ってから云った。手の出しよう

のないのは事実だ。今まで十年もの間苦しみながら、しがみついて残っていた土地から、今になってどうして離れられよう、と云う村民の突きつめた気持に同情すれば溺れ死のうと云う決心にも同意しなければならぬ。と云って手を束ねてどうして見ていられよう！　けれど、事実の上では矢張り黙って見ているより他はないのだ。しかし、どうしても自分は考えて見るだけでも忍びない。この自分の気持を少しでも慰さめたい。せめて、その人達と暫くの間でもその惨めな生活を共にして、その人達の苦しみを自分の苦しみとして、もし幾分でも慰められるものなら慰めたいと云うような事を、センティメンタルな調子で云った。

　私も何時か引込まれて暗い気持に襲われ出した。然し私には、どうしても、『手の出しようがない』と云う事が腑に落ちなかった。兎に角幾十人かの生死にかかわる悲惨事ではないか。何故に犬一匹の生命にも無関心ではいられない世間の人達の良心は、平気でそれを見のがせるのであろうか。手を出した結果が、どうあろうと、のばせるだけはのばすべきものではあるまいか。人達の心持は『手の出しようがないのではない』『手を出したってつまらない』と云うのであろう。

『ではもう、どうにも手の出しようはないと云うのですね。本当に採って見る何の手段もないのでしょうか？』

『まあそうですね、もう此の場合になっては一寸どうする事も出来ませんね。』

　然し、結果はどうとしても、何とか皆んなの注意を引く事位は出来そうなものだ、と私は思うのであった。こう云う事を、いくら古い問題だからと云って、知らぬ顔をしているのはひどい、私はM氏の話に感ずるあきたらなさを考え詰める程、だんだんに或る憤激と焦慮が身内に湧き上って来るのを感ずるのであった。

『Sと云う人は、K氏やH氏の処に、その事で何か相談に来たんですか。』

　今まで黙っていたTが突然に口を出した。

『ええ、まあそうなんです。しかし、村民も今更他からの救いをあてにしてる訳ではないので、相談と云うのも、ほんの知らせかたがたの話に来た位のものなんですけれど、どうも話を聞いて見ると実に惨めなもんです。実際どうにかなるもんなら――』

　M氏はそう云って、どうにも手出しの出来ない事をもう一度述べてから、K氏のろくに相手にもならない心持は、多分、今当局に、他からいくら村民達の決心を呑み込ませようとしても無駄だから、矢張り何処までも、本人達によって示されなければ、手応えはあるまいと云う事、そうした場合になれば、ひとりでに世間の問題にもなるだろうと云う考えだろうと説明した。

『僕もそう思いますね。実際もう何とも仕方のない場合になって来ているのですからねえ。』

　Tは冷淡な調子で、もうそんな話は片附けようとするよ

うに云った。

四

けれど、私はそれなりで話を打ち切ってしまうには、あまりにその話に興奮させられていた。私は出来るだけ、その可哀想な村民達の生活を知ろうとして、M氏に根掘り葉掘り聞き初めた。

彼等の生活は、私の想像にも及ばない惨めさであった。僅かに小高くなった堤防のまわりの空地、自分達の小屋のまわりなどを、畑にして耕したり、川魚をとって近くの町に売りに出たりして漸くに暮しているのであった。そればかりか、とてもその位の事ではどうする事も出来ないので、瀦水池の工事の日傭になって働いて、漸くに暮している人さえあるのであった。その上にマッチ一つ買うにも、二里近くの道をゆかなければならないような、人里離れた処で、彼等の小屋の中は、真直ぐに立って歩く事も出来ないような窮屈な不完全なものであった。

『よくまあ、そんなくらしを十年も続けて来たものですねえ。で、その他の、買収に応じて他へ立ち退いた人達はどうなっているんです?』

私の頭の中では聞いてゆく事実と、私の感情が、いくつもいくつもこんぐらがって一杯になっていた。しかし、そのもつれから起って来る焦慮に追っかけられながらも、なお聞くだけの事は聞いて仕舞おうとして尋ねるのであった。

『ええ、その人達がまた矢張り、お話にならないような難儀をしているのです。皆んなが苦しみながら、でもまだ、谷中に残っているのは、一つはその為めでもあるんです。今いる人達の間にも一旦は他へ行って、まだ戻って来た人などもあるんだそうです。』

買収に応じた人達も、残った人達に劣らぬ貧困と迫害の中に暮らさなければならなかった。最初はいい加減な甘言にのせられて、それぞれ移住して、或る者は広い未開の地をあてがわれて、其処を開墾し始めた。しかし、それは一と通りや二通りの困難ではなかった。長い間朝も晩も耕し、高い肥料をやっても、思うような耕地にはならなかった。収穫はなし僅かばかりの金はなくなる。人里遠い荒涼とした知らない土地に、彼等は寒さと飢にひしひし迫られた。或る者は、偶々住みよさそうな処に行っても、其処では土着の人々からきびしい迫害を受けなければならなかった。彼等のたよりは、僅かな金であった。その金がなくなれば、どうすることも出来なかった。土を耕すことより他には、何の仕事も彼等は知らないのだ。耕やそうにも土地はないし、金はなくなると云えば、彼等はその日からでも路頭に迷わねばならなかった。そうしたはめになって、或る者は再び惨めな村へ帰った。或る者は何のあてもない漂浪者になって離散した。

M氏によって話される悲惨な事実は、何時までも尽きなかった。殊に、豬水池に就いての利害の撞着や、買収を行うにあたっての多くの醜事実、家屋の強制破壊の際の凄惨な幾多の悲劇、それらがM氏の興奮した口調で話されるのを聞いているうちに、私も何時かその興奮の渦の中に巻き込まれているのであった。そして、それ等の事実の中に何の罪もない、ただ善良な無知な百姓達を惨苦に導く不条理が一つ一つ、はっきりと見出されるのであった。ああ！ 此処にもこの不条理が無知と善良を虐げているのか。事実は他所事でもその不条理の横暴は他所事ではない。これをどう見のがせるのであろう？ 嘗ってその問題の為めに一身を捧げてもと、人々を熱中せしめたのも、ただその不条理の暴虐に対する憤激があればこそではあるまいか。それ等の人はどう云う気持ちで、その成行を見ているのであろう？

M氏は日が暮れてからも、長い事話していた。夫婦が辞し去ってから、机の前に坐った私は、暫くして漸く興奮からのがれて、始めて、いくらか余裕のある心持ちで考えて見ようとする落ち付きを持つことが出来た。けれど、その沈静は、私の望むような、批判的な考え方には導かないで、何となく物悲しい寂しさをもって、絶望的な其の村民達の惨めな生活を想像させるのであった。私の心は果てしもなく拡がる想像の中に総てを忘れて没頭していた。

『おい、何をそんなに考え込んでいるんだい？』

余程たってTは、不機嫌な顔をして、私を考えの中から呼び返した。

『何って先刻からの事ですよ。』

『何んだ、まだあんな事を考えているのかい。あんな事をいくら考えたってどうなるもんか。それよりももっと自分の事で考えなきゃならない事がうんとあらあ。』

『そんな事は、私だって知っていますよ。だけど他人の事だからと云って、考えずにゃいられないから考えているんです。』

私はムッとして云った。どうにもならない他人の事を考えるひまに、一歩でも自分の生活を進めることを考えるのが本当だと云う事位知っている。Tの個人主義的な考えの上からは、私が何時までも、そんな他所事を考えているのは、馬鹿々々しいセンティメンタリストのする事として軽蔑すべき事かもしれない。現に今日私とM氏との間に交わされた話も、彼には普通の雑談として聞かれたにすぎない。けれど、今私を捉えている深い感激は、彼の謂ゆる幼稚なセンティメンタリズムは、彼の軽蔑位には何としても動かなかった。それればかりではない。今日ばかりはそうした悲惨な話に、無関心なTのエゴイスティックな態度が忌忌しくて堪らないのであった。

『他人の事だからと云って、決して余計な考え事じゃない、と私は思いますよ。皆んな同じ生きる権利を持って生れた人間ですもの。私たちが、自分の生活を出来るだけよくしよう、下らない圧迫や不公平をなるべく受けないよう

に、と想って努力している以上は、他の人だって同じようにつまらない目には遇うまいとしているに違いないんですからね。自分自身だけのことと云っても、そんなに自分ばかりに没頭の出来る筈はありませんよ。自分が受けて困る不公平なら、他人だって矢張り困るんですもの。』

『それゃそうさ。だが、今の世の中では誰だって、満足に生活している者はありゃしないんだ。皆それぞれに自分の生活について苦しんでいるんだ。それに他人の事まで気にしていた日には、切りはありゃしないじゃないか。そりゃ随分可哀想な目に遇ってる者もあるさ。しかし、そんな酷い目に遇っている奴等は、意気地がないからそう云う目に遇うんだと思えば間違いはない。何時でも愚痴を云ってる奴にかぎって弱いのと同じだ。自分がしっかりしていて、不当なものだと思えばどんどん拒みさえすればいいんだ。世の中のいろんな事が正しいとか正しくないとかそんな事がとても一々考えられるものじゃない。要するに、皆んなが各々に自覚をしさえすればいいんだ。今日の話の谷中の人達だって、もう家を毀されたときから、とても自分達の力で叶わない事は知れ切ってるんじゃないか。少しばかりの人数でいくら頑張ったってどうなるものか。そんな解り切った事に何時までも取りついているのは愚だよ。云わば自分自身であがきのとれない深みに這入ったようなもんじゃないか。』

『そんな事が解れば苦労はしませんよ。それが解る人は買収に応じて夙うに、もっと上手な世渡りを考えて村を出ています。何もしらないから苦しむんです。一番正直な人が一番最後まで苦しむ事になっているのでしょう？ それを考えると、私は何よりも可哀想で仕方がないんです。』

『可哀想は可哀想でも、そんなのは何にも解らない馬鹿なんだ。自分で生きてゆく事の出来ない人間なんだ。どんなに正直でも何んでも、自分で自分を死地におとしていながら何処までも他人の同情にすがる事を考えているようなものは卑劣だよ。僕はそんなものに向って同情する気にはとてもなれない。』

私は黙った。しかし頭の中では一時に云いたい事が一杯になった。いろいろTの云った事に対しての理窟が後から後からと湧き上って来た。Tはなお続けて云った。

『お前はまださっきのMさんの興奮に引っぱり込まれたままでいる。だから本当に冷静に考える事が出来ないのだよ。明日になってもう一度考えて御覧。きっと、もっと別の考え方が出来るに違いない。お前が今考えているように、皆んながいくら決心したからと云って、決して死んでしまうような事はないよ。そういう事があるものか。よし皆んなが溺れようとしたって、屹度救い出されるよ。そして結局は無事に何処かへ、おさまって終うんだ。本当に死ぬ決心なら相談になんぞ来るものか。今云っている決心と云うのは、こうなってもかまってくれないかと云う面当てなんだ、脅かしなんだ。何んで本気に死ぬ気でなんかいる

もんか。もし、そうまで谷中と云う村を建て直したいのなら、何処か他のいい土地をさがして立派に新らしい谷中村を建てればいいんだ。其の意気地もなしに、本当に死ぬ決心が出来るものか。お前はあんまりセンティメンタルに考え過ぎているのだよ。明日になって考えて御覧、屹度今自分で考えている事が馬鹿々々しくなるから。』

けれど、此の言葉は、私にはあまりに酷な言葉だった。私がいま、出来るだけ正直で善良で可哀想な人達として考えている人々の間に、そんな卑劣な事が考えられているのだと云うような事を、どうして思えよう！

だが私は又、『その善良な人達が何んでそんな事を考えるものですか』と直ぐに押し返して云う程にも、その事を否定してしまう事は出来なかった。

けれど、なお私は争った。

この可哀想な人達の『死ぬ』と云う決心が、よしTの云うように面当てであろうと、脅かしであろうと、どうして私はそれを咎めよう。よしそれが本当に卑劣な心からであっても、そんなに卑劣には何がしたのだろう？

自分の力でたつ事が出来ないものは、亡びてしまうより他に仕方がない。そうして自から、其の自分を死地に堕す処に思いきり悪く居残っているものが亡びるのは当然の事だ。それに誰が異議を云おう。だのに、私は何故その当然の事に楯つこうとするのだろう？

私は其処に何かを見出さなければならないと思いあせりながら、果しもない、種々な考えの中に何にも捕捉し得ずに、何となく長い考えのつながりのひまひまに襲われる、漠然とした悲しみに、床についても、とうとう三時を打つ頃まで私の目はハッキリ灯を見つめていた。

五

次の日も、その次の日も、当座は毎日のように、私は目前に迫った仕事のひまひまには、黙って一人きりでその問題に就いて考えていた。Tの云った事も、漸次に、何の不平もなしに真実に受け容れる事が出来て来はしたけれど、最初からの私自身が受けた感じの上には何の響きも来なかった。

Tの理窟は正しい。私はそれを理解する事は出来る。併し、私には、その理窟より他に、その理窟で流して仕舞う事の出来ない、事実に対する感じが生きている。私はそれをTのように単に幼稚なセンティメンタリズムとして、無雑作に軽蔑する事も出来ないし、無視する事も出来ないのだ。

私が偶々聞いた一つの事実は、広い世の中の一隅に於ける、ほんの一小部分の出来事に過ぎないのだ。もっともっと酷い不公平を受けている人も、もっと悲惨な事もあるかもしれないと云う事位は、私にも解らない事はない。けれど私は、それ等の事実に鑑みて、直ちに『先ず自分の生活

をそのように惨めに蹂躙されないように、自分自身の生活から堅固にして行かねばならぬ』と考えて仕舞う事は出来ない。勿論、先ず自身の生活に忠実であらねばならぬと云うことは、私達の生活の第一義だとは、私も考えるけれど、私自身の今日までの生活を省みて、本当に自分の生活を意のままにしようと努力して、その努力に相当する結果が、一つでも得られたろうか？ 私達は大抵の場合に、自分達の努力に幾十倍、幾百倍とも知れない、世間に漲った不当な力に圧迫され、防ぎ止められて、一歩も半歩も踏み出すことは愚か、どうかすれば反対に、底の底まで突き落され弾ね飛ばされなければならなかったではないか？ 唯だ、『正しく、偽わらず、自己を生かさんが為めに』のみ、どれ程の無駄な努力や苦痛を忍ばねばならなかったかを思えば、いろいろ堪えがたい不当な屈辱をどうして忍ばねばならなかったかを思えば、『不公平を受ける奴は意気地がないからだ』と、一と口に云い切って仕舞う事がどうして出来よう？ 私達はまだ、どんな不当な屈辱をでも忍ぶだけの、どんな苦痛をも堪え得る、自分に対する根拠のある信条をも持っていれば、物事の批判をするに都合のいい、いくらかの知識を持っている。意気地がないと云う、その多数の人達にはそれがない。単に『天道様が見ていらっしゃる』位の強いられた、薄弱な拠り処では、彼等の受けている組織立った圧迫には、あまりに見すぼらし過ぎる。それだから『乗ぜられ圧倒されるのが当り前』だけれど、私はそれだから猶更無知な人達が可哀想でならない。気の毒でならない。人間として持って生れた生きる権利に何の差別があろう？ だのに、何故、ただ無知だからと云って、その正しい権利が割引されなければならないのか？ 恐らく、それに対する答えは只だ一つでいい。どんなに無知であろうとも、彼等はその一つの事を知りさえすればいいのだ、だが、彼等はそれを何によって知ればいいのだろう？『彼等自身で探しあてるまで』待つより仕方がないと云う人もあるだろう？ けれど、それまでじっと見ていられぬ者はどうすればいいのだろう？

自分も生きる為めには戦わねばならない。そして同時に、もっと自分よりも可哀想な人々の為めにも戦うことは出来ないであろうか。

私が今日まで一番自分にとって大切な事としていた『自己完成』と云う事が、どんな場合にでもどんな境地に於いても、自分の生活に於いての第一の必須条件であると云う事は、私にはだんだん考えられなくなって来た。

私達は本当に、どんな場合にでも、与えられるままの生活で、自分を保護する事より他に出来ないのであろうか。『虐げられているのは少数の者ばかりじゃないのだ。大部分の人間が、皆んな虐げられながら惨めに生きているのだ。今はもう、何んだって一番わるい状態になっているのだ。』

深い溜息と一しょに私はこんな事しか考える事は出来な

かった。幾度考えて見ても同じ事だった。

けれど、私はこうして自分の考えを逐いまくられると、きまって夢想する他の世界があった。

ほんの些細な事からでも考え出せば人間の生活の悉ゆる方面に力強く、根深く喰い込み枝葉を茂らしている誤謬が、自分達の僅かな力で、どうあがいたところで、とても揺ぎもするものではないと云う絶望のドン底に突き落される。ではどうすればいいだろう？　私は其の度びに、自分の力の及ぶかぎり自分の生活を正しい方に向け正しい方に導こうと努力しているのだと云う事に僅かに自分を慰めて、自分の小さな生活を保って来た。しかし、第一に私は手近かな、家庭と云うものの為めに、不愉快な『忍従』のしつづけであった。種々な場合に、そんな時には何の価値もない些細な家の中の平和の為めに、そして自分がその家庭の侵入者であるが為めに、自分の正しい行為や云い分を、遠慮しなければならない事が多かった。その小さな一つ一つが、やがて全生活をうずめて仕舞う油断のならない一つ一つである事を知りながらでも、その妥協と譲歩はしなければならなかったのだ。そして、それが嵩じて来ると、何もかも呪わしく、馬鹿らしく、焦立たしくなるのだった。

『こんなにも苦しんで、私は一体何をしているのだろう。余計な遠慮や気がねをしなければならないような狭い処で、折々思い出したように自分の気持を引ったてて見る位の事しか出来ないなんて――』

同じ事ならこんな誤謬にみちた生活にこびりついていなくたって、いっそもう、何も彼も投げすてて広い自由の為めの戦いの中に、飛び込んでゆきたいと思うのだった。そのムーヴメントの中に飛び込んで行って、力一杯に手ごたえのある事をして見たいと思うのだった。自分のもっているだけの情熱も力も其処ならば一杯に傾け尽せそうに思われた。

私は、自分の現在の生活に対する反抗心が炎え上ると、そう云う特殊な仕事の中に、本当に強く生きて動く自分を夢想するのだった。

しかし、その夢想と眼前の事実の間には、文字通りの隔りがあった。私は矢張り夢想を実現させようとする努力よりも、一日々々の事に逐われていなければならなかった。けれどそれは決してそうして放って置いてもいい事ではなかった。必ずどっちかに片をつけなければならない事なのだった。

私に、時にそうした、はっきりした根のある夢想を持たせるように導いたのは、山岡が二三年前に創めた『K』雑誌であった。私は何にも知らずに、そのうすっぺらな創刊号を手にしたのであった。私の興味は一度に吸い寄せられた。号を逐うて読んでいるうちに、だんだんに雑誌に書かれるものに対する興味は、其の人達の持つ思想や主張に対する深い注意に代って行った。そのうちに私の前に、もっ

と私を感激させるものが置かれた。それは、エンマ・ゴオルドマンの、特に、彼女の伝記であった。私はそれによって始めて、伝道と云う『奴隷の勤勉をもって働き、乞食の名誉をもって死ぬかも知れない』仕事に従事する人達の真に高価な『生き甲斐』と云うようなものが本当に解るような気がした。

それでも、私はまだ出来るだけ不精をしようとしていた。それには、一緒にいるTの影響も大分あった。彼は、ずっと前から山岡達の仕事に対しては理解も興味も持っていた。しかし、彼は何時もの彼の行き方どおりに、その人達に近よって交渉をもつ事はいやだったのだ。交渉をもつ事が嫌やだと云うよりは、彼は山岡達のサアクルの人達が、どんなにひどい迫害を受けているかをよく知っていたので、その交渉に続いて起る損害を受けるのが馬鹿らしかったのだ。それ故私もまた、それ程の損害を受けないでも、自分には、手近かな「婦人解放」と云う他の仕事があるのだ、「婦人解放」と云った処で、これも間違いのない「奴隷解放」の仕事なのだから意味は一つなのだなどと、勝手な考えで遠くから山岡達の仕事を、矢張り注意ぶかくは見ていた。

思いがけなく、今日まで避けて来た事を、今、事実によって、考えの上だけでも極めなければならなくなったのだ。

『曲りなりにも、とにかく眼前の自分の生活の安穏の為めに努めるか。遥かな未来の夢想を信じて「奴隷の勤勉」をも、「乞食の名誉」をも甘受するか。』

勿論私は何処までも、自分を欺きとおして暮して行けると云う自信はない。その位なら、これほど苦しまないでも、とうに何処かに落ちつき場所を見出しているに相違ない。では後者を選ぶか？ 私はどの位、それに憧憬をもっているかしれない。本当に、直ぐにも、何もかもすてて、其処に駆けてゆきたいのだ。けれど、其処に行くには、私の今までの生活をみんな棄てなければならない。苦しみあがきながら築きあげたものを、この、自分の手で叩きこわさねばならない。今日までの私の生活は、何の意味も成さない事になりはしないか？ それではあんまり情なさすぎる。しかし、今日までの私の卑怯は、みんなその未練からではないか。本当の自分の道が展かれて生きる為めになら、何が欲しかろう？ 何が惜しかろう？ 何物にも執着はもつまい。もたれまい。ああ、だが――もし本当にこう決心しなければならない時が来たら――私はどんな事があっても、辛い目や苦しい思をしないようにと思わないけれど、それにしても、今の私にはあまりに辛らすぎる。苦しすぎる。せめて子供が歩くようになるまでは、ああ！ だが、それも私の卑怯だろうか？

六

Ｍ氏の谷中ゆきは実行されなかった。折角最終の決心にまでゆきついた人々に、また新らしく他人を頼る心を起さしては悪いと云う理由で、他から止められたのであった。氏は私の為めに谷中に関する事を書いたものを持って来て貸してくれたりした。

私がそれ等の書物から知り得た多くの事は、私の最初の感じに、更に油を注ぐようなものであった。その最初から自分を捉えて離さない強い事実に対する感激を、一度は是非書いて見ようと思ったのはその時からであった。そして、その事を考えついた時には、自分のその感じが、果して、どの位の処まで確かなものであるかを見ようとする、落ちついた決心も同時に出来ていた。それが確かめられる時に、私の道が始めて確かになる。私は本当にあわてずに自分の道がどう開かれてゆくかを見ようと思った。

私がそうして、真剣に考えているような事に対して、本当に同感し、理解をもつ事の出来る友人は私の周囲にはひとりもなかった。そう云う事に対してはTを措いて他にはないのに、今度はTでさえも取り合ってはくれない……。私は本当にだまりこくって、独りきりで考えているより仕方がなかった。しかし、兎に角、私は散々考えた末に、二日ばかりたってから、思い切って山岡の処に初めての手紙を書いた。勿論、谷中の話も、聞いてからの気持を順序もなく書いたものだった。私は、もしそれによって彼のような立場にいる人の考えをさぐることが出来ればとも思い、また、それによって、自分の態度に、気持に、ある決定を与える事が出来ればいいと思ったのであった。

しかし私は彼からも、何ものをも受取る事が出来なかった。彼もまた、私の世間見ずな幼稚な感激が、きっと取り上げる何の価値もないものとして忘れ去ったのであろうと思うと、何となく面映ゆさと、軽い屈辱に似たものを感ずるのであった。同時に出来るだけ美しく見ていたその人の、強い意志の下にかくれた情緒に裏切られたような腹立たしさを覚えるのであった。私はもうこの事に就いては、誰にも一切話すまいと固く断念した。山岡にも其後幾度も遇いながら、それについては素知らぬ顔で通した。

二年後に、私とTとは、種々な事情から一緒に暮らす事は出来ないようにまで離れて来た。私は一たん家を出て、それから静かに、自分一人の『生き甲斐』ある仕事を本当にきめて勉強しようと思った。私はあんまり若くて、あがきのとれない生活の深味に這入ったことを、本当に後悔していた。

けれど、事は計画どおりにすらすらとは、大抵の場合運ばない。もうその話にある決定がついて後に、山岡と私は始めて二人きりで会う機会を与えられた。そして、それが総ての場面を一変した。順当に受け容れられていた事が、総て曲解に裏返された。私はその曲解を云い解くすべも総ての疑念を去らせる方法も知っていた。しかし、総ては世

間態を取り繕う、悧巧な人間の用うるポリシイとして、知っているまでだ。私はたとえどんなに罵られようが嘲られようが、真っ直ぐに、彼等の矢面に平気でたって見せる。彼等がどんなに欺かれやすい馬鹿の集団かと云う事を知っていても、私はそれに乗ずるような卑怯は断じてしない。第一に自分に対して恥しい。また今度の場合、そんな事をして山岡にその卑劣さを見せるのはなおいやだ。どうなってもいい。私は矢張り正しく生きんが為めに、当てにならない多数の世間の人間の厚意よりは、山岡ひとりをとる。それが私としては本当だ。それが真実か真実でないか、どうして私以外の人に解ろう？

Tと別れて、山岡に歩み寄った私を見て、私の少い友達も多くの世間の人と一緒に、

『邪道に堕ちた……』

と嘲り罵った。けれど、彼等の中の一人でも、私のそうした深い気持の推移を知っている人があるであろうか？

久しい間の私の夢想は、かの谷中の話から受けた感激によって目覚まされた。私の目からは、最早決して、夢想ではなく、彼の歩み入るべき真実の世界であった。その真実の前では、私は何ものにも左右されてはならなかった。こうして、私は恐らく私の生涯を通じての種々な意味での危険を含む最大の転機に立った。今まで私の全生活を庇護してくれた一切のものを捨てた私は、背負い切れぬ程の悪名と反感とを贈られて、その転機を正しく潜りぬけた。私は新たな世界へ一歩踏み出した。

『ようようの事で――』

山岡と私は手を握り合わされた。しかしその握手は、二人にとっては、世間の人に眉をひそめさすような恋の握手よりは、もっと意味深いものであった。やっとの事で私の夢想は、悲しみと苦しみと歓びのごちゃごちゃになった、私の感情の混乱の中に実現された。私は彼の生涯の仕事の仲間として許された。一度は拒絶しても見たY――K――等という彼と関係のある女二人に対しても、別に、何の邪魔も感じなかった。真っ直ぐに自分だけの道を歩きさえすればいいのだ。他の何事を省みる必要があろう？　とも思った。あんな二人にどう間違っても敗ける気づかいがあるものかとも思った。またあんな事は山岡にまかしておきさえすればいい。自分達の間に間違いがありさえしなければ、自分達の間は真実なんだ。あとはどうともなれ とも思った。要するに、私は今までの自分の生活に対する反動から、ただ真実に力強く、すばらしく、専念に生きたいとばかり考えていた。

併し、とは云うものの、山岡との面倒な恋愛に関連して、彼の経験した苦痛は決して少々のものではなかった。幾度私は、お互いの愚劣な嫉妬の為めに、不快に纏る関係に反感を起して、その関係から離れようと思ったか知れない。けれど、そんな場合に何時でも私を捕えるのは、私達の前に一番大事な生きる為めの仕事に必要な、お互いの協

力が失われてはならないと云う事であった。

山岡に対する私の愛と信頼とは、愛による信頼と云うよりは、信頼によって生れた愛であった。彼の愛を、彼に対する愛を拒否する事は、勿論私にとって苦痛でない筈はない。しかしそれはまだ忍べる。彼に対する信頼をすてる事は、同時に折角見出した自分の真実の道を失わねばならぬかもしれない。それは忍べない。私はどうしても、どうなっても、あくまで自分の道に生きなければならない。

そうして、私は総てを忍んだ。本当に体中の血が沸えくり返る程の腹立たしさや屈辱に出会っても、私は黙って、おとなしく忍ばねばならなかった。それは悉ゆる非難の的となっている、私の歩みには、必然的につきまとう苦痛だったのだ。そして、私が一つ一つそれを黙って切り抜ける毎に、卑劣で臆病な俗衆はいよいよ増長して調子を高める。しかし、たとえ千万人の口にそれが呪咀されていても、私は自身の道に正しく踏み入る事の出来たのは、何の躊躇もなく充分な感謝を捧げ得る。

谷中の話を聞いた当座の感激は、今の私にはもう全くないと云ってもいい。しかし、その感激は知らず知らずのうちに俗習と偏見の生活に巻き込まれ去ろうとする私を救い出した。谷中村と云う名は、今はもう忘れようとしても忘れられぬ程に、私の頭に刻み込まれている。勿論、山岡と私の間には、その話は折々繰り返された。一度はその廃村の趾を見ておきたいと云う私のねがいにも彼は賛成した。

丁度、四五日前の新聞の三面に、哀れな残留民が愈々この十日限りで立ち退かされると云う十行ばかりの簡単な記事を私は見出した。直ぐに、私の頭の中には、三四年前のM氏の話が思い出された。

『もういよいよこれが最後だろう。』

と云う山岡の言葉につけても、是非行って見たいと云う私の望みは、どうしても捨てがたいものになった。とうとう、その十日が今日と云う日、私は山岡を促し立てて、一緒に来て貰ったのであった。

七

行く手の土手に枯木が一本しょんぼりと立っている。低く小さく見えた木は、近づくままに高く、木の形もはっきりと見えて来た。木の形から推すと、嘗つては大きく枝葉を茂らしていた杉の木らしい。それはこの何里四方と云う程な広い土地に、たった一本不思議に取り残されたような木であった。嘗つては、どんなに生々と、雄々しくこの平原の真ん中に突っ立っていたかと思われる、幾抱えもあるような、たくましい幹も半ばは裂けて凄まじい落雷のあとを見せ、太く延ばしたらしい枝も、大方はもぎ去られて見るかげもない残骸を、いたましくさらしている。しかも、その一本の枯れた木に、四辺の景色が、他の一帯に生気を失った、沈んだ、惨めな景色よりも、一層強い何となく底

しれぬ物凄さを潜めているような感じさえする。
行くほど空の色はだんだんに沈んで来、沼地は何処までとも知らず広がり、葦間の水は冷く光り、道は何処までも曲りくねっている。連れの男はずんずん先きに歩いて行くので、折々姿を見失ってしまう。二人の話がとぎれると、私達の足元からもつれて起る草履と下駄とステッキの音が、はっきりと四辺に響いてゆく。黙って引きずるように歩いている自分の足音を聞きながら、この人里遠いあたりの荒涼たる景色に目をやってゆくと、まるで遠い遠い旅で知らぬ道に踏み迷っているような心細さがひとりでに浮んで来るのであった。
『どうしたい？』
『まだかしら、随分遠いんですね。』
『もう直きだよ。くたびれたのかい。もっとしっかりお歩きよ。足をひきずるから歩けないんだ。今から疲れてどうする？』
『だって私こんなに遠いとは思わなかったんですもの、こんな処、とても私達だけで来たんじゃ解りませんね。あの人が通りかかったので、本当に助かったわ。』
『ああ、これじゃ一寸分らないね。どうだい、一人でこんなに歩けるかい。今日は僕来ないで、町子ひとりよこすんだったなあ、その方が屹度よかったよ。』
山岡はからかい面にそんな事を云う。
『歩けますともさ。だって、今そんな事云ったってもう一緒に来ちゃったもの仕方がないわ。』
私はそう云った。けれど山岡の冗談は、私には何となくむずがゆく皮肉に聞えた。先刻から眼前の景色に馴れ、真面目な話が途切れると、他に人目のない道を幸いに、私は彼に向って甘えたり、ふざけたりして来た。彼のその軽い冗談ごかしの皮肉に気づくと、私はひとりでに顔が赤くなるように感じた。その感じを胡魔化すように一層ふざけても見たが、私の内心はすっかり悄気てしまっていた。
『何しに来た？』
そう云って正面からたしなめられるよりも幾倍か気がひけた。本当に、考えて見れば、あの先きに歩いて行く男にも遇わず、彼もきてくれないで、自分ひとりで道を聞きながら、うろうろこんな道を歩いてゆくとしたら？　二人で歩いていてさえあまりさびしすぎるこんな道を——。私は黙った。急にあたりの景色が一層心細く迫ってくるようにさえ思われる。
蘆の疎らな泥土の中に、くるった土台の上に、今にも落ちそうに墓石が乗っているのが二つ三つ、他には土台石ばかりになったり、長い墓石が横倒しになっていたりして見える。それが歩いてゆくにつれて、彼方にも此方にも、蘆間の水たまりや小高く盛り上げた土の上に、二つ三つと残っている。弔う人もない墓としか思われないような、その墓石の傍まで、土手からわざわざつけたかと思われそうな畔道が、一条ずつ通っているのも、この土地に対する執着

の深い人々の、いろいろな心根が思いやられる。
泥にまみれて傾き横わった沼の中の墓石は、後から、後からと、私に種々な影像を描かせる。その影像の一つ一つに、私の心はセンティメンタルな沈黙を深めてゆく。あたりは悲し気に静まり返って、私の心の底深く描かれる影像を見つめている。亡ぼしつくされた『生』が今、一時にこの枯野に浮き上って来て、みんなが私の心を見つめている。——その感じが私に迫って来る。同時に今にもあふれ出しそうな、あてのない私のかなしみを洗ますような太いゆるやかなメロディが、低く強く私を襲うて来る。今までただ茫漠と拡がっていた黄褐色と灰色の天地の沈黙が、見る見る私の前に緊張して来る。けれど、やがてそれも何時の間にか消え去った影像と同じく、その影像を描いたセンティメントが消えてしまう頃には、矢張りもとの何の生気もないな荒涼とした景色であった。しかし、私はそれで充分だ。僅かに頭をもたげた私のセンティメントは、本当のものを見せてくれたのだ。
『何しに来た？』
もう私はそう云ってとがめられる事はない。一人で来たら私のセンティメントはもっと長く私を捕えたろう。もっと惨めに私を圧迫したろう。だが、もう充分だ。これ以上に私は何を感ずる必要があろう。私はしっかり山岡の手につかまった。
漸くに、目指すS青年の家を囲む木立が直ぐ右手に近づいた。木立の中の藁屋根がはっきり見え出した時には、沼の中の景色も稍や違って来ていた。木立はまだ他に二つ三つと飛び飛びにあった。疏間の其処此処に真黒な土が珍らしく小高く盛り上げられて、青い麦の芽や、菜の葉などが、生々と培われてある。
道の曲り角まで来ると、先きに歩いていた連れの男が、遠くから、其処から行けと云うように手を動かしている。見ると沼の中に降りる細い道がついている。土手の下まで降りて見ると、沼の中には道らしいものは何にもない。蘆は其の辺には生えてはいないが、足跡のついた泥地が洲のように所々高くなっているきりで、他とは変りのない水たまりばかりであった。
『あら、道がないじゃありませんか。こんな処から行けやしないでしょう？』
『此処から行くのさ、此処からでなくて何処から行くんだい？』
『他に道があるんですよ、屹度。だって此処からじゃ、裸足にならなくちゃ行かれないじゃありませんか。』
『あたりまえさ、下駄でなんか歩けるものか。』
『だって、いくら何んだって道がない筈はないわ。』
『此処が道だよ。此処でなくて他に何処にある？』
『向うの方にあるかもしれないわ。』
私は少し向うの方に、小高い島のような畑地が三つ四つ続いたような形になっている処を指しながら云った。

『同じだよ、何処からだって。こんな沼の中に道なんかあるもんか、ぐずぐず云ってると置いてくよ。ぜいたく云わないで裸足になってお出で。』
『いやあね、道がないなんて、冷たくってやり切れやしないわ。』
『此処でそんな事云ったって仕様があるもんか、何しに来たんだ？　それとも此処まで来て、このまま帰るのか？』
山岡は、そんな駄々は一切構わないと云ったような態度で、足袋をぬいで裾を端折ると、そのまま裸足になって、ずんずん沼の泥水の中に入って行った。私はいくら沼の中とは云っても、せめて其処に住んでいる人達が歩くのに不自由しない畔道くらいなものはあるに違いないと、自分の不精からばかりでなく考えていたのに、何にもそのような道らしいものはなくて、その冷たい泥水の中を歩かなければならないのだと思うと、そう云う処を毎日歩かねばならぬ人の難儀を思うよりも、現在の自分の難儀の方に当惑した。それでも山岡の最後の言葉には、私はまたしても自分を省みなければならなかった。私はすぐに思い切って裸足になり、裾を端折って山岡の後から沼の中に這入った。冷たい泥が足の裏にふれたかと思うと、ぬるぬると、何とも云えぬ気味悪さで、五本の指の間にぬめり込んで、直ぐ足首までかくしてしまった。そのつめたさ！　体中の血が一度に凍えてしまう程だ。二三間は勢いよく先きに歩いて行った山岡も、後から来る私をふり返った時には、流石に冷たい泥水の中に行きなやんでいた。
『どう行ったらいいかなあ。』
『そうね、うっかり歩くとひどい目に合いますからね。』
つい其処に木立は見えているのだが、うっかり歩けば、どんな深い泥におちこむかも知れないし、私たちは一と足ずつ気をつけながら足跡を拾って、漸々の事で蘆間の畑に働いている人の姿をさがし出した。其処は一反歩位な広い畑で、四五人の人が麦を播いていたのだ。私達がS青年の家への道を聞くと、其の人達は不思議そうに私達二人を見ながら、此の畑の向うの隅からゆく道があるから、この畑を通ってゆけと云ってくれた。けれど私達の立っている処と、その畑の間には小さな流れがあった。私には到底それが渡れそうにもないので、当惑し切っているのを見ると、間近にいた年を老った男は、直ぐに私に背を貸して渡してくれた。私達はお礼を云って、其の畑を通りぬけて、再びまた沼地に這入った。畑に立っていた二人の若い女が、私の姿をじっと見ていた。私はそれを見ると気はずかしさで一杯になった。柔かに私の体を包んでいる袖の長い着物が、其時ほど恥かしくきまりの悪かった事はなかった。足だけは泥まみれになっていても、こんなに自分が意気地なく見えた事はなかった。甲斐々々しい女達の眼には、小さな流れ一つにも行き悩んだ意気地のない女の姿がどんなに惨めにおかしく見えたろう？　だが一体どうした事だろう？　まさかにあの新聞の記事があとかたもない嘘とは思え

ないが、今日を限りに立退きを請求されている人達が、悠悠と落ちついて、畑を耕やして麦を播いていると云うのは、どう云う考えなのだろう？　矢張り、どうしても此の土地を去らない決心でいるのであろうか。私はひとりでそんな事を考えながら、山岡には一二間も後れながら、今度は前よりも更に深い、膝までも来る蘆間の泥水の中を、ともすれば重心を失いそうになる体を、一と足ずつ漸くに運んでゆくのであった。

『皆んな、毎日こんなひどい道を歩いちゃ、癪に障ってるんだろうね。』

山岡は後をふり向きながら云った。

『たまに歩いてこんなのを、毎日歩いちゃ本当にいやになるでしょうね。第一、私達なら直ぐ病気になりますね。よくまあこんな処に十年も我慢していられること。』

と云っているうちにも、一と足ずつにのめりそうになる体をもてあまして、幾度も私は立ち止まった。少し立ち止まっていると刺すように冷たい水に足の感覚を奪われて、上辷りのする泥の中にふみしめる力もない。下半身から伝わる寒気に体中の血は氷ってしまうかとばかりに縮み上って、後にも先きにも動く気力もなくなって、私はもう半泣きになりながら、山岡に励まされて僅かの処を長い事かかって漸々に水のない処まで来ると、其処からはSの家の前までは、細い道がずっと通っていた。

八

木立の中の屋敷は可なりな広さをもっている。一段高くなった隅に住居らしい一と棟と、物置小屋らしい一棟とがそれより一段低く並んでいる。前は広い菜圃になっている。畑のまわりを鶏が歩きまわっている。他には人影も何んにもない。取りつきの井戸端に下駄や泥まみれのステッキをおいて、家に近づいて行った。正面に向いた家の戸が半分しめられて、家の中にも誰もいないらしい。

『御免！』

幾度も声高に云って見たが何の応えもない。住居と云っても、傍の物置きと何の変りもない。正面の出入口と並んで、同じ向きに雨戸が二三枚しまるようになった処が開いている。他は三方とも板で囲われている。覗いて見ると、家の奥行きは三間とはない。あとは土間になっている。勿論押入れもなければ戸棚もない。夜具や着物などが片隅に押し寄せてあって、上りかまちから土間へかけて、いろいろな食器や、鍋釜などがゴチャゴチャにおかれてある。土間の大部分は大きな機で占められている。家の中は狭く、薄暗く、如何にも不潔で貧しかった。けれどその狭い畳の上には、他のものとは全くふつり合いな、新らしい本箱と机が壁に添うて置かれてあった。机の直ぐ上の壁には、T翁の写真が一

つかかっている。人気のない家の中には、火の気もないらしかった。私達二人は寒さにふるえながら、着物の裾を端折ったまま、戸のあいたままになっている敷居に腰を下ろした。

　腰を下ろすと直ぐ眼の前の柚子の木に黄色く色づいた柚子が鈴なりになっている。鶏は丸々と肥って呑気な足どりで畑の間を歩きまわっている。木立で囲まれてこの青々とした広い菜圃を前にした屋敷内の様子は、何処となく、のびのびした感じを持たせるけれど、木立の外は、正面も横も、広いさびしい一面の蘆の茂みばかりだ。この家の中の貧しさ、外の景色の荒涼さ、それにあの難儀な道と、遠い人里と、何と云う不自由な、辛らいさびしい生活だろう。

　二人が腰をかけている処から、正面に見える蘆の中から『オーイ』と此方に向って呼ぶ声がする。返事をしながら、其方の方に歩いてゆくと蘆の間から一人の百姓が鉢巻きをとりながら出て来た。挨拶を交わすと、それはS青年の兄にあたる、此の家の主人であった。素朴な落ちつきを持った口重そうな男だ。主人は気の毒そうに私達の裸足を見ながら、S青年が昨日から留守であると云う。家の方に歩いて行く後から、山岡は今日訪ねて来た訳を話して、今日立ち退くと云う新聞の記事は事実かと聞いた。

『は、そう云う事になっては居りますが、何にしろ此のままで立ち退いては、明日から直ぐにもう路頭に迷わなければならないような事情なものですから、——実は弟もそれで出て居るような訳でございますが。』

　彼は遠くの方に眼をやりながら、其処に立ったままで、思いがけない、はっきりした調子で話した。

『私共が此処に残りましたのも、最初は村を再興すると云うつもりであったのですが、何分長い間の事ではありますし、工事もずんずん進んで、この通り立派な瀦水池になって仕舞い、その間には当局の人もいろいろに変りますし、此処を収用する方針に就いても、県の方で、だんだんに都合いい決議がありましたり、どうしても、もう私共少数の力では敵わないのです。しかし、そう云って此処を立ち退いては、もう私共は全くどうする事も出来ないのです。収用当時とは地価ももう随分違ってますし、その収用当時の地価としても満足に払って呉れないのですから、その位の金では、今日ではいくらの土地も手に入りませんのです。何んだか慾にからんでもいるようですが、実際その金で手に入る土地位ではとても食べてはゆけないのですから、何とか其の方法がつくまでは動けませんのです。此処にまあこうしていれば、不自由しながらも、ああして少しずつ地面も残って居りますし、まあ食う位の事には困りませんから、余儀なくこうして居りますような訳で、立ち退くには困らないだけの事はして貰いたいと思って居ります。』

『勿論その位の要求をするのは当然でしょう。じゃ、まだ当分のびますかな。』

『そうです。まあ一と月や二た月では極まるまいと思いま

す。どうせそれに今播いている麦の収穫が済むまでは動けませんし。』
『そうでしょう。で、堤防を切るとか切ったとか云うのは何の辺です。その方の心配はないのですか？』
『今、丁度三ヵ所切れて居ります。つい此の間、直ぐこの先きの方を切られましたので、水が這入って来て、麦も一度播いたのを、また今播き直している処です』
　堤防の中の旧谷中村の土地は、彼の云う処によると二千町歩以上はあるとの事であった。彼はなお、其処に立ったままで、ポツリポツリ自分達の生活に就いて話しつづけた。しかし彼の話には自分達がこうした境遇におかれた事に就いての、愚痴らしい事や未練らしい云い草は少しもなかった。彼は総ての点で自分達の置かれている境遇をよく知りつくしていた。彼は本当にしっかりしたあきらめと、決心の上に立って、これからの自分の生活を出来るだけよくしようとする考えを持っているらしかった。こうしてわざわざ遠く訪ねて来た私達に対しても、彼は簡単に、取りようによっては反感を持ってでもいるような冷淡さで挨拶をしただけで、よく好意を運ぶものに対して見せたがる、殊更らしい感謝や、その他女々しい感情は少しも見せなかった。私達が暫く話をしている間に、其処に来合わせた一人の百姓は、矢張り此処に居残った一人であった。彼は主人から私達に紹介されると幾度も私達の前に頭を下げて、こうして見舞った好意に対する感謝の言葉を連ねるのであった。その男は、五十を過ぎたかと思われるような人の好い顔に、意地も張りも失くしたような皺が一杯たたまれていた。
　主人と其の男と、山岡の間の話を聞きながら、私はあとからあとから種々尋ねて見たいと思う事を考え出しながら、一方にはまたもう何にも聞くにも及ばないと云うような気がして、どっちともつかない自分の心に焦れながら、気味わるく足にぬられた泥が、少しずつかわいてゆくのをこすり合わしていた。
　風が出て来た。広い蘆の茂みのおもてを、波のように揺り動かして吹き渡る。日暮近くなった空は、だんだんに暗くなって、寒さは骨までも滲み透るように身内に迫って来る。
『折角お出下さいましたのに生憎留守で――』
気の毒そうに云う主人の声をあとに私達は帰りかけた。
『矢張りその道を歩くより他に、道はないのでしょうか。』
私は来がけに歩いて来た道を指して、分り切った事を未練らしく聞いた。またその難儀の道をかえらねばならない事が、私にはただもう辛くてたまらなかった。
『左様だね、矢張りその道が一番楽でしょう。』
と云われて、また前よりは一層冷たく感ずる沼の水の中に足を入れた。
　漸々の事で土手の下まで帰って来はしたものの、足を洗う場所がない。少し歩いているうちには何処か洗える処が

あるかもしれないと思いながら、そのまま土手を上った。白く乾き切った道が、気持よく走っている。けれど、一と足そこに踏み出すと思わず私は其処にしゃがんだ。道は小砂利を敷きつめてあって、その上を細かい砂が覆うている。むき出しにされて、その上に冷たさでかじかんだ足の裏には、その刺戟が、とても堪えられなかった。と云って、今泥の中から抜き出したばかりの足を思い切って草履の上に乗せる事も出来なかった。

『おい、そんなところにしゃがんでいてどうするんだい。ぐずぐずしていると日が暮れて仕舞うじゃないか。』

そう云ってせき立てられる程、私はひしひし迫って来る寒さと、足の痛さに泣きたいような情なさを感ずるのだった。それでも、両側の草の上や、小砂利の少ない処を撰るようにして、やっとあてにした場所まで来て見ると、水は青々と流れていても、足を洗うような所はなかった。私はとうとう懐から紙を出して、よほど乾いて来た泥をふいて草履をはいた。二人はやっとそれで元気を取返して歩き出した。

日暮れ近い、この人里遠い道には、私達の後になり先きになりして尾いて来る男が一人いるだけで、他には人の影らしいものもない。空はだんだんに低く垂れて来て、何時か遠くの方は、ぼっと霞んでしまっている。遠く行く手の、古河の町のあかりかと思われる一叢の木立の黒ずんだ蔭から、濃い煙の立ち昇っているのが、やっと見える。風はだんだんに冷たくなって道の傍の篠竹の葉のすれ合う音が、私達の下駄の音と、もつれあってさびしい。二人はSの家の様子や主人の話など取とめもなく話しながら歩いた。

『あの主人は大分しっかりした人らしいのね。だけど後から来たおじいさんは、本当に意気地のない様子をしていたじゃありませんか。』

『ああ、もうあんなになっちゃ駄目だね。尤ももう長い間ああした生活をして来ているのだし、意気地のなくなるのも無理はないが——彼処の主人見たいなのは残っている連中の内でも少ないんだろう。皆な、もう大抵はあのじいさん見たいのばかりなんだよ、屹度。残っていると云っても、他へ行っちゃ食えないから、仕方なしにああしているんだからな。』

『でも、それも惨めな訳けね、あんな中にああしていなきあ困るのだなんて。今度は、お上だって、いよいよ立ち退かせるには、せめて彼の人達の要求は容れなくちゃあんまり可哀想ね。沢山の戸数でもないんだから、何とか出来ない事はないのでしょうね。』

『勿論出来ない事はないよ。少し押強く主張すれば、何でもない事だ。だが、残った連中は、他の者からは、すっかり馬鹿にされているんだね。来るときに初めて道を聞いた男だって、そらあの婆さんだって、そうだったろう！一緒に行った男なんかもあれで、Sの家を馬鹿にしてるんだよ、Sを批難したりなんかしてたじゃないか。』

『そうね、彼の男なんか、こんな土地を見たって別に何の感じもなさそうね。ああなれば本当にのんきなものだわ。』

『そりゃそうさ、皆なが何時までも、そう同じ感じを持って居た日にゃ面倒だよ。大部分の人間は、異った生活をすれば、直ぐその生活に同化してしまうことが出来るんで、世の中はまだ無事なんだよ。』

『そう云えばそうね。』

『どうだね。少しは重荷が下りたような気がするかい？もっと彼処でいろんな事を聞くのかと思ったら、何んにも聞かなかったね。でも、ただこうして来ただけで、余程いろんな事が分ったろう？　Sがいればもっと委しくいろんな事がわかったのだろうけれど、この景色だけでも来た甲斐はあるね。』

『沢山だわ。この景色だの、彼のうちの模様だの、それだけで、もう何にも聞かなくてもいいような気になっちゃったの。』

『これで、町子ひとりだと、もっとよかったんだね。』

『沢山ですったら、これだけでも沢山すぎる位なのに。』

長い土手の道は何時か終りに近づいていた。振り返ると、今沈んだばかりの太陽が、低く遥かな地平に近い空を、僅かに鈍い黄色に染めている。他は一体に、空も、地も、濃い夕暮の色に包まれている。総ての生気と物音をうばわれたこの区切られた地上は、たった一つの恵みである日の光りさえ、今は失われてしまった。明日が来るまでは此処は更らに物凄い夜が来るのだ。黄昏れて来るにつけて、黙って歩いていると、心の底から冷たくなるような、何とも云えない感じに誘われるので、道々私は精一杯の声で歌い出した。声は遮ぎるもののないままに、遠くに伝わってゆく。時々蘆の間から、脅かされたように群れになった小鳥が、あわただしい羽音をたてて飛び出しては、直ぐまた降りてゆく。

古河の町はずれの高い堤防の上まで帰って来たとき、町の明るい灯が、どんなになつかしく明るく見えたか！　私はそれを見ると、一刻も早く暖かい火の傍に、その凍えたからだを運びたいと思った。

古びた、町の宿屋の奥まった二階座敷に通されて、火鉢の傍に坐った時には、私のからだは何ものかにつかみひしがれたような疲れに、動くことも出来なかった。落ちつかない広い室の様子を見まわしながらも、まだ足にこびりついて残っている泥の気味悪さも忘れて、火鉢にかじりついたまま湯の案内を待った。――一九一八・一――

（一九一八年一・二月「文明批評」）

労働者誘拐

江口渙

上野で発車まぎわに、ようやく汽車に飛び込むことのできた私は、そのため列車が動き出した後までも、しばらくの間、荷物の整理に忙殺されていた。やがて溢れるような汗をふきながら、そばのガラス窓を開けたときには、汽車はもう荒川の鉄橋を渡るところであった。

「いつ日暮里や田端を通ったのだろう」

成程汽車が二三度停車したのはおぼえている。しかし慌てて無茶苦茶につめこんで来た手荷物のつめ直しに思わず没頭していたために、いつの間にか時間がたってしまったのだ。そう思うとわれながら妙におかしくなったので、私はうすら笑をおさえながら周囲を見廻した。

客車の中には午前十時の真夏の光が、ぎらぎらと漲っている。斜に照り込む光の縞の中ではたえず埃の粉が躍り上る。それが如何にもむし暑い。私は今し方あけた左側の窓からひたすら風を取入れて肌を冷した。

この時私は再び眼を自分の周囲に移した。細長いボギー車は満員で、どこにも少しの空席を見ない。私のすぐ前には、田舎ものらしい二人の青年がいた。双方とも二十歳位である。血色の悪い顔と光の鈍い瞳とは、可なり着古した縞の単衣とあいまって、その人柄を薄暗いものに見せていた。通路をへだてた向う側の角には、夏羽織を着た二十六七の男がいる。髪をきれいに分けて鼻の下に短い髯を蓄えている様子が、官吏とも会社員ともつかない。でこぼこのある蒼白い顔には如何にも神経質らしい色が溢れている。その隣は百姓の爺さんである。爺さんはそのすぐ前に座をしめた二人の女を、一心に見詰めている。女は二人とも傍若無人の態度で水蜜桃を食べている。髪形から凡ての物腰が田舎行きの酌婦らしい。二人の唇が赤く動く度に、爺さんの顔には何か不思議なものでも見るような不安な影が動いた。

一人々々車内の人を見て行くうちに、私はこの一車内の乗客の八分までが、白シャツに紺の腹掛をした労働者であることに気がついた。その労働者の大方は若い男である。しかし、中にはもう四十歳から五十歳位のもいる。又、ようやく十七八になったかならないのもいる。年からいえば千差万別である。それが皆一様に栄養不良と労働過度の結果らしい、暗く力のない顔色をしている。

彼等はこうして群居していながら、何故か互いに口をきかない。ある者は窓ガラスへ顔を押し付けてだらしなく眠

っている。ある者は黙然と前の人の襟元を見詰めて、一人何か考えている。ある者は頭へ捲き着けた鉢巻をといては捲き、といては捲いてぼんやりと外の方を眺めている。遠くの隅では一本の扇子を四五人のあいだに持って廻って、順々にあおいでいるものもいる。よく見るとみんな扇子を渡すにも、受けとるにも互いに口をきくでもなければ、何の表情を見せるでも無い。唯、黙々として受け、そして、黙々としてあおぐだけである。その中で真中へんにいる二三人だけがときどき何か耳打をしあっては、かすかに笑い顔を見せることがある。それさえ哀れに暗い笑い顔である。

私はしばらくそれらの人々を見守っていた。そのうち、ふと、それが近頃ことに盛んになった例の北海道へ誘拐されて行く労働者ではないかしらと疑い出した。すると私の好奇心は不思議なほど煽られはじめた。私は一そう注意ぶかくその一群の上を見守った。

しばらくたつと後部の列車につづく扉が開いて、一人の男が入口に立ちどまった。やはり、白シャツに紺の腹掛をした若い小柄な男である。一寸小才のききそうな顔付をしている。

「親方。親方」

男はよく透る声で二度どなった。すると中央のへんから太い声がそれに答えた。

「何んだ。親方どこにいるんかと思ったら、そんな地面の上に坐ってるんか」

笑いながらその男は真中の方へ歩き出した。その時、一人の大きな男がぬっと車室の中央に立上った。やはり、シャツに紺の腹掛である。その太いカアキ色の半ズボンとよく光った黒の長靴とが特に私の眼を引いた。親方は振向きながら何の用だというような眼つきをした。それに対して男はまた眼で答えた。そして、二人は私の座席の横まで来て立ちどまった。私の座席は車室の一とう前方の端であって、直ぐうしろには列車行商人の売店がある。親方は売店の煙草の飾り棚に背をよせながら、小声で話す相手の言葉を聞き取るように身を屈めた。

「仕様がねえなあ。あれじゃ一そうみんなこの箱へ一とまとめにしようじゃねえか。百人以上いるんだから、団体にしさえすれば、この箱一つは買切れるんだ。車掌にそういってこの辺にいる普通の人間を皆出しちゃってよ、そのあとへ彼方の奴らを入れようじゃないか。こうばらばらにおいといちゃ、無用心で仕様がねえ。』

「この辺にいる普通の人間」という言葉がひどく耳障りだった。私とその周囲の二三人が、しげしげと親方の顔を見上げた。年は三十四五らしい。背は五尺七寸は充分ある。全体の骨格も肉附も背丈けに応じてよく整っている所が、如何にも「親方」と呼ばれそうな男である。色の黒い唇の厚いその顔は、自ら好んで悪党呼ばりをしそうである。

「この箱一つはどうしたって買切らなくっちゃ駄目だぜ。青森へ着くまでには、一と箱だけじゃ入りきれなくなるか

らな。何しろこの先の大きな駅では、きっと四五人ずつは積込むことにきまってるんだ。」
親方の太い声と若い男の低い声とがまたしばらく続いた。「青森」「函館」「北見」というような言葉が幾度も私の耳を打った。やはり、彼等は北海道行きの労働者なのだ。今しも私のそばで相談しているのは、それをまとめて運ぶ親方と、その腹心の者らしい。
「それじゃよく車掌にかけ合って見ましょう」
「うむ、それがいいよ」
若い男は丁寧に挨拶をして、再び皆の中を分けて、後部の列車の方へ出ていった。親方はしばらくぽつねんと売店の飾棚によりかかっていたが、やがて何か一人で笑いながら、のそりのそりと歩き出した。しかし、こんどは真中へは帰らずに、彼等の群と普通の乗客との境界線ともいうべきへんに腰をおろした。するとそこにいた労働者の一人がうやうやしく席をゆずって、自分は通路の中央へ尻を据えた。横にいた中年の男がすぐ親方に話しかけた。親方が笑ってそれに答えた。やがて、周囲には珍らしくも笑い声が溢れた。その中で親方の図抜けて太い声だけが、皆の声を圧していた。
すると向うの隅にいた若い一人が出しぬけに席を立った。立って親方の前を通ろうとして腹掛のどんぶりに右手を差入れながら、一寸挨拶をした。
「おい。何処へ行くんだ」
親方が男を見上げた。
「饅頭買いにだ。」
「そうか。あまりやたらに動かないようにしろよ」
男はもう一度丁寧にお辞儀をして、そっと親方のそばをとおり過ぎた。やがて売店でいくつかの大型の饅頭を買って、また、こそこそと自分の席に帰った。彼らは汽車の中をさえ自由に歩かれないらしい。気がつくと後部の出入口のそばにも、カアキ色の半ズボンをはいた男がいる。中肉中背の一寸苦味走った男である。その男と親方とは時々顔を見合せて、何か目と目で合図を仕合っては、油断なく一群の上を警戒している。これもやはり親方の腹心らしい。
浅草公園のロハ台を中心にして下級労働者の集りそうなところから木賃宿の隅々まで、都下のいたるところに、この種の人間の誘拐がしきりに行われるという事は、前にも聞いていた。しかし、それがこうまで束になって輸送されるものとは思わなかった。膝を交えて坐っていながら、労働者同志の間にはほとんど何の会話も交されないのを見ても、彼等のすべてが全然相識の間ではなく、「狩集められて来た者」という事がわかる。その上、一寸見ただけでも、すでに誘拐者と被誘拐者との間には、あわれな羊と狡い狼とのような区別が明らかに受取れる。事実において狼は最早無智な羊の運命を完全に掌握しているのである。最初彼等が公園のロハ台とか木賃宿の片隅とかに、一定の職もなくゴロゴロしている時、狡い狼はいつの間にか羊の皮

をかぶって巧みに忍び寄る。そして、遠くにある「幸福」の宝の庫の話をしては、その値打ちの如何に大きいかを言葉巧みに説いて聞かせる。すると絶えず莫然とした「幸福」の宝の庫を夢見ている彼等は、何も苦もなくそれに乗る。そして、やがては知らぬまに自分で自分の墓穴を掘るような運命に陥るのである。

しばらくすると通路を隔てた向うにいる夏羽織の男が、突然、私に話しかけた。その男も私と同じく先刻から労働者の群に好奇の眼を注いでいたのである。

「あなた。あれを何とお思いになります」彼は眼で彼等の方を指した。

「やはり例の北海道へ誘拐されて行く連中でしょう。」

「ええ左様です。気の毒ですがあの連中はみんな要するに殺されに行くようなものですよ」

「そうでしょうね。私も北海道の労働者虐待の話は大分聞きましたが、寒気や病気や猛烈な虐待で、半数位は死んだそうじゃないですか」

「いいえ、半数位じゃないんです。二三年こき使われているうちにほとんどみな死ぬといっていい位でしょう。とにかく一たん連れて行かれたが最後、もう二度と再びこの世の中へは帰って来られないのです。死ぬまで無報酬でこき使われるのです」

彼は充分の確信を持つもののようにこういって、さらに言葉をついだ。

「北海道の山の中の土木工事に使われる労働者ぐらい悲惨なものはありませんよ。じつにお話にならない、残忍な虐待を受けるんですからね。実際を見ない人にはどうしてもウソとしか思われないほどひどいのです。私も最初はまさか話ほどとは思いませんでしたが、行って見て全く驚きましたよ。まああの連中は地獄へ送られて行くようなもんですよ。あるいは地獄よりもっとひどいかもしれません」

ながい間いいたくって堪らなかったのを我慢していたという風に、言葉が後から後から男の唇を出た。そして、神経質らしい顔にはかすかな不安と興奮とが次第に影を拡げて行った。

彼の話によると私が想像していたのより、より以上のさまざまな犯罪が、公然と彼等被誘拐者の上に行われるのである。誘拐されてから労働地へ連れて行かれて労働に従事するまでの間に、無智な彼等は知らぬ間に何度も人身売買の憂き目を見る。その間には、無論、「違約」「詐欺」「横領」「強迫」「賭博」というような事件が絶えず彼等の上を襲って来る。最初、東京で北海道行きの契約を結ぶときの条件は非常にいい。それは実際、下級労働者のすべてが、即座に応諾せざるを得ないくらいにいいのである。つまり労働地へ行くまでの一と通りの身仕度と、旅費の全部と、道中の小づかいとは、残らず先方で持つ。その上、当人の腕次第で賃銀は東京あたりの三倍四倍出す。その上、当人の腕次第で分合は幾らでもつける。

（どうだ。三四年働いて見ないか、そうすれば一生らくに食えるくらいな金は大丈夫出来る）こんな事をいっては、いわゆる成功者のでたらめの例をひいて巧みに誘拐する。無智な彼等はつい果敢ない夢に誘われて、何時か自分を人身売買の憂き目に落してしまうのである。つまり一群の誘拐者は東京や東北線の沿線で、巧みに誘拐した彼等を、「各鉄道沿線の駅渡し、一人いくら」という契約で仲買に売る。仲買は買った彼等を大切に輸送して「労働地渡し、いくら」でもって、さらに、先方の請負師が使っている飯場頭に売るのである。誘拐されて行く者は、そんな事は夢にも知らない。はるばると目的地に行っていよいよ働くとなると、はじめて自分達が、巧みにあざむかれ陥いれられていたことを知るのである。最初の契約は（勿論それは単なる口頭の契約であるが）無残にふみにじられて、いつのまにか旅費やしきせやこづかいなども「前借」という名目に変っている。しかも、もう非常に高い利息さえがついている。その上、ほんの体裁だけにくれる僅かの賃金は、全部食費として飯場頭の手で差引かれてしまう。表面では食費を引いたあとの残りは労働者の所得となるべきはずであるが、事実は飯場頭が極端にぼるので、ほとんど一銭も労働者の手には入らない。そんな時になってからは、如何に驚いてももうとり返しがつかないのである。

最初、彼等が仲買から先方の手に売渡されると、請負師とか飯場頭とかいうような人々と、厳然とした形式の下に親分子分の盃を交わす。一どこの盃を取交すともうそれが最後である。その席においてすでに親分の犯し難き威容に怖れをなすのみではない。席の周囲をかざる小銃や拳銃や、日本刀や短刀、鉄棒、棍棒、工事用の爆薬、火縄というような危険性を帯びた品物のために頭から脅かされて、いつか一種の不文律が、彼等の周囲を拘束する。そしてそのあとは、絶対の服従の外はなくなる。彼等はもうどうする事もできなくなって、死ぬまで無報酬で酷使されるだけである。

もし彼等の中に少しでも腹のふとい者があって、不当を鳴らしたり不正を指摘したりするならば、その者は即座に撲ぐられる。気絶するまでぶちのめされる。とにかく二度と抗議の申込み得ないような目に会わされる。さもなければ彼等の無智を幸い、嘘八百の法律で逆に屈服さすのである。もうそうなると次に来るものが何であるかはいうまでもない。あらゆる「不正」「暴逆」「残忍」「貪婪」というようなものが、闇に跳る悪魔のように彼等罪なき囚人の運命を、次第に喰い荒して行くのである。

同じ誘拐でも「足尾」や「日立」あたりの鉱山へ引張って行かれる方が、まだましである。銅山鉱夫という職業は、無論、怖しくもあり苦しくもある。そこにも、同じような飯場頭に対する「前借」の枷もあれば、親方の獰猛な威圧もある。その上やはり谷間に追詰められた羚羊の如く、外の世界へ一歩でも逃れ出すべき途を与えられ

ない。それでも彼等はまだましである。飯場へ行けば暖い米の飯もある。さかなもある。町へ降りれば安価な媚を売って、彼等を迎える酌婦も居る。銅山の会計から飯場頭へ渡す賃金が「前借」になるのをさえ構わなければ、彼等はそれ等の安価な「幸福」をあがなう事が出来るのである。その上、春夏秋冬にわたって同じ温度を保つ坑道（シキ）の空気は、慣れれば慣れるほど、柔かな肌ざわりを与えて、いつでも鉱夫を心地いい午睡に誘うのである。それ故に彼等はちょっと働いては午睡をし、又働いては午睡をする。そして、その日その日に必要な金高だけを稼いでしまえば、さっさと外へ出て行ってそれをたちまち酒と女に換えてしまう。つまり坑内の午睡と酒と女とは、惨憺たる鉱山生活にとって欠く可からざる天国なのである。かくて彼等の苦しい職業も、いつかは一種の水商売といった形に変って行くのである。

　それにくらべると北海道の山の中の土木工事に連れて行かれる人々の運命は、お話にならないほど暗憺たるものである。酒もない。女もない。酒と女とを買うべき金も無い。あるものはただ、北海道独特の荒涼たる風物である。峻烈なる気候である。粗悪を極めたる食物である。その上に威圧と虐待とがある。無報酬の酷使がある。

　一たいに人口の稀薄な北海道でも、ことに近頃になって道路とか鉄道とかの土木工事が新たにおこされるような場所は、必ずほとんど人跡もないくらいな、例えば国境を限る連山とか、落莫たる曠野の奥とかいう場所に限られている。従って交通の便は極めて悪く、出るにも入るにも、たいがい一本の通路による外はない。はるばると誘拐されて来た人々が、一どこう言う労働地へ追い込まれると、もうどうすることもできない。如何に帰りたくってもかえされない。ひそかに逃げ出そうとしても路は一本である。要所要所に見張がいて、逃亡者は苦もなく捕えられてしまう。

　しかし、いかに無智で愚鈍な者といえども、そういつまでも意気地なく酷使と虐待とに甘んじてはいない。といって、無論反抗するだけの力はない。わずかに残されたものはただ「逃亡」である。しかし、逃亡にもいのちがけの覚悟がいる。一度逃げ損なって捕ろうものなら、目もあてられないほどのうき目を見せられるからである。二度と逃げない為めのこらしめと、みんなに対する見せしめのために、多勢で撲る、蹴る、踏む、叩く、どうしても半殺しにせずにはおかない。中には実際死ぬのがある。死ねばもうそれまでである。死骸は何の手続もなく、供養もされずそのまま人知れずどこかの谷間に捨てられて、いつか忘れられてしまうのである。

　こういう極悪な出来事を常々可なりに見聞きしていながら、やはり、彼等は逃げる。逃げずにはいられなくなって逃げるのである。「此処でいつまで働いても、結局は荷馬車の馬のように、のたれ死にをしなければならない。同じ命を捨てるのなら、少しでも、逃げた方がまだしもだ。逃

げればもしもの僥倖を得られないとも限らない」。こう考えてやみにまぎれて逃げて行く。然し、事実において逃げおおせた者はほとんどない。第一に彼等は自分達のいる処は「北海道の山の中」というだけの莫然たる知識しか持っていない。連れて来られた時の路などは、覚えていない。それでも彼等は逃げるのである。しかし、要所要所に必ず見張りがいる。それは逃亡者のどうしても通らなければならないような所にばかり置いてある。常に鶴嘴をにぎって暮らす工夫の掌には、必ずきまった場所にまめが出来る。どんなに巧みに見張の関所を越そうとしても、彼等が必ず捕まるのは、皆このマメのためである。捕ったが最後、そこに万事が終る。

逃亡者の大多数は皆見張所の危険を知っている。だからどうにも仕方のない時は、山づたいに小さな裏道を逃げて行く。無論、ひそかに貯えた数日分の食糧を用意して逃げ出しはする。しかし、普通の途さえもろくに解らない彼等である。人跡稀なる北海道の山へ入って、踏み迷わずにはいない。山には熊もいる。獰猛な野犬もいる。それにかの怖ろしい山鳥の群が、いつ落人を襲わないとも限らない。こうして真のいのちがけで山を逃げて行く彼等も、いつか飢と、疲れと、思い設けぬ自然の災害に妨げられて、ついには死骸すらも見出されないような傷ましい運命に落ちて行くのである。

凡そ日本中で北海道の田舎ぐらい警察権の行き渡らないところはない。山の中の土木工事でいたるところに酷使や、虐待や詐欺や違約が行われているという事は充分承知していながら、微弱な警察力ではどうする事も出来ないのである。武器においても人数においても、到底彼等にかなわない。その上、いわゆる小頭とか大将とかいって、鉄棒や棍棒で直接労働者を監督している者共は、たいてい兇状持か前科者のいのち知らずばかりである。へたに手をつければいかなる報復を受けないとも限らない。だからとどのつまりは、見て見ぬ振りをしなければならないようになるのである。彼等、哀れな落人が偶然運好くどこかの村へたどりついて救いを巡査駐在所に求めても、ほとんど何の役にも立たない。いかに泣いて頼んでも、警官の保護の下に次の村まで落ち延びる事などは不可能である。逃亡者に「前借金踏倒し」という弱身がある以上、それを保護した事が「山」に知れれば、巡査までが残忍な復讐を受ける怖れがある。事実、うかうか保護を加えたために「山」のいのち知らずにいのちをとられた巡査もある。従って逃亡者が駐在所で受け得る保護の程度は、食物を与えられる事と、次の村までの間道を教えて貰うぐらいが関の山である……。

男の話には熱があった。かつてこれ等の悲惨な実例を根室や北見の国境附近で目撃した事があるというだけに、話をしてゆく一語一語に力がこもっていて、すっかり私の心を圧付けてしまった。私の頭の中に種々暴逆なものの形が烈しく往来した。そして、私は次第に苦しい興奮の渦が心

の底から湧上って来るのをどうする事もできなかった。
突然、労働者の二三が声をあげた。見ると親方が刃渡り五寸もありそうなナイフを逆手に持って、しきりに閃かして見せている。周囲の者は臆病らしい眼をして、一心に刃先の光を眺めては、めいめいに何か小声でつぶやいている。親方は静かにナイフをおろした。すると皆がそばに寄っていって、しきりにそれをいじり出した。ナイフには刃渡りと同じ長さの扇型をした銀色の柄がついている。その金属の扇が中央から二つに割れて両方へくるりと廻ると、残らず刃先を包んでしまう。扇の端に止めがあるので、開いた時も閉じた時も、少しも刃先がぐらつかない。彼はそれを開けたり閉じたりして説明していたが、やがて皆が見終ると、もう一度高く頭の上で振って見せた。そして、「威圧はこれで充分だ」という風な顔をして、満足らしく腹掛の丼におさめた。
その中に汽車はある駅に入った。すると親方は俄かに立上って、売店の横から出口の間をいったり来たりしはじめた。そして売店へ近附く労働者に一人一人深い注意を払った。もし彼等がその辺に少しながく立止れば、何とか注意を与えては追い返した。汽車が駅を離れると、又のそりと以前の席にかえってきた。皆の者にそれとかんづかれない程度において、彼等の逃走を警戒しなければならない。そこに仲買兼輸送係としての彼の苦心があるらしい。
「あなた、あれをごらんなさい。サイコロばくちがはじまりましたよ」
夏羽織の男はこういって、眼付で一群の中央を指した。見ると真中へんの通路を中心にした、四五人の者が地面の上に車座になっている。周囲の座席にいる仲間の者も、皆一様に眼をすえてその中心を見詰めている。時々、肘と肘との間から、茶碗を振る手附が見える。「そらっ」と云うかけ声が聞える。その度に皆の中から呻くような叫びが起る。もう彼等はいつの間にか夢中になっていた。
「おい。やるんなら気をつけてやれよ。いいか。へまな真似はしないでくれ」
親方がこっちから笑いながら怒鳴った。「大丈夫」とその中から高い声が答えた。
「ああ、駄目だ、駄目だ」
少しするとばくち仲間の一人が大声にどなって起ち上った。やっと十九か二十歳ぐらいな男である。やがて両手で尻の埃を払いながらのこのこと親方のそばに来たその男は、頭をかきながら何か小声でいっている。
「何だ。さっき上野であれだけ渡したじゃねえか。もうみんな摺っちまったんか。意気地のねえ野郎だなあ、……一体なら余分の小づかいは貸さない事になってるんだが、まあ一度ぐれえは大眼に見てやらあ」
親方が笑いながら五十銭銀貨を二枚渡すと、男はうやうやしく戴いて、すぐ無雑作に腹掛の丼に突込んだ。そして、慌てて引返した。

「おい」と親方が呼びかけた。
「名前は何とかいったっけなあ」
「……」男の声は聞えない。
「ああ、そうか」
親方はすぐ手帳を出して何か書き留めた。男はまた以前の仲間へかえっていってどっさりと尻を地面の上におろした。ばくちは依然として進んでいる。
「皆あれが前借になるんです。北海道へ着く時分には、怖しく高い利息をつけられてさぞかしびっくりするでしょうよ。ああして負けては借り、負けては借りていようものなら、とてもたまりませんね。」
夏羽織の男は微かに笑った。またまた二人金を借りに来た。親方は前と同じような事をいって金を渡して、やはり手帳につけた。すると一人の方は更に売店へ来て、林檎だの餡パンだのを買込んで、帰りがけにその幾つかを親方に与えた。親方は臆揚な態度でそれを受けた。……一種の賄賂である。「今のうちに親方の機嫌をとっておけば先へ行って悪くはしまい」すでにこんな用心をしている者もあるのである。
少しすると親方は窓ぎわへ行って、ずっと頭を外に出して先の方を眺めていた。が、突然、ばくち仲間の方に向き直って左手を上げた。そして太い声で「おーい」とどなった。しかし、勝負に夢中になっている人々からは何の答も無い。
「おい。野郎ども。よさねえか。停車場だぞ」
親方は、又、手をふった。やっと気がついてみんなが親方の方に向いてにやにやと笑った。
「おい。あんまり夢中になるなよ。見っともねえ」
「ハハハ、、、」
皆はだらしのない笑声でそれに答えた。すると一人が両手の中指と薬指とを井桁に組んで上げて見せた。また、皆が笑った。とうとう親方までが腹を抱えて笑い出した。私にはそれが何を意味するのか解らなかった。
汽車が停車場に入った。親方は前と同じようにのそりと出口の近所を歩き始めた。先刻から酌婦ばかりを眺めていた爺さんは、青い風呂敷包みを下げてこそこそと降りて行った。車が動き出すと親方はもとの座席へ還り、賭場は再び開始された。
「北海道へ行くまでに一人でも感づいて逃げ出したら、それがすぐみんなに影響して、逃亡者があとからあとから出ることになるんですからね。運ぶ間はあの親方も仲々骨が折れますよ」
夏羽織の男は煙草に火をつけながらまた話出した。
「ああして駅ごとに出入り口を警戒するばかしでなく、みんなの切符はちゃんと親方が握ってるんですからね。なかなか逃げても改札口を出られませんよ。道中で一等逃亡される怖れの多いのが青森と函館の連絡船の乗り降りだそうですけど、労働者の方ではまるで棚から牡丹餅の落ちて来

るような事を考えて先を急いでいるんですから、それ程心配しなくてもすむんだそうです。……あれで皆北海道へ行ったらさぞびっくりするでしょうよ。……向うへ行ったが最後、米の飯なんか死ぬまで喰えないんですからね。常食はせいぜい馬鈴薯が玉蜀黍の粉という所ですから実際病気になりますよ。それで病気になったらもうお仕舞です。無論医者には見せず、薬はくれず、その上少しながら引きでもしようものなら、損料借りの蒲団は取返される、食い物は減らされる、悪くされる、つまり二度と稼げるかどうか知れないものに何か貸したところで取り返せる見込みはありませんからね、お仕舞にはあの壁も屋根も餢筵で間に合せてある堀立小屋同然の工夫小屋の隅の方で、蒲団もなく、食物もなく、まるで病気のために死んだのか、飢死か凍死かわからないような死に方をするんです。死ねば死骸はどこかの谷か何かへ捨てられるんですからじつに気の毒なものです」

この話はある村まで運好く逃げて来た者の実話だそうである。その男は三人の朋輩と一しょに山へ逃げ込んで、さんざん路を迷った揚句、途中で皆を見失なったので、とうとう一人で幾日かを食うや食わずに歩いた。それが運好くもある村へ辿りつく事が出来たのである。しかし村端れのお寺の前まで来ると気がゆるんでばったりと倒れてしまった。それを住職が見つけて助けたのだそうである。一たん助けはしたものの寺でもそういつまでも隠してもおけず、と云ってそのまま逃がせばまた捕まるにきまっている。止むを得ず法衣を着せて、杖と数珠とを持たして出してやった。そのためその男だけは無事に網走の町まで逃げる事が出来たのである。

こんな話をしているうちに汽車は小山に着いた。親方は窓から半身を乗出させて何か探していたが、突然

「おーい。ここだ、ここだ」

とどなって手を振った。数人の労働者が詰襟の服を着た男につれられて、あたふたと窓の下まで走って来た。そして労働者だけはどやどやと前部の入口から入って来た。皆わしづかみにした手拭で熱そうに汗をふいている。

「今すぐこの箱を買切るから、そうすれば席は出来るから、それまで一寸どこへでも坐っていてくれ」

新参者の丁寧な挨拶に対して親方は鷹揚にこう答えた。窓の下に立っている詰襟の男も頻りにお世辞をいい始めた。親方はそれにも鷹揚な挨拶をした。そこへ後部の入口から先刻の若い腹心が車掌を伴れて入って来た。私の席の二列ほど後方で親方とその若い男と車掌との相談がはじまった。「いよいよこの箱を買切られて私達は追出されるのか」こんな事を考えて、私は注意深く三人の方を眺めた。「それじゃ皆様甚だ申しかねますが、ここからそこまでの方はどうぞ後の車にお乗りかえをねがいます」

車掌が手をひろげて座席の間を区ぎって見せた。幸い私の近所。通路をはさんだ二側八人分の座席はその区ぎりの

外にあった。で、私達はそのまま動かずにすんだけれど、乗換を要求された人々は不承不承に荷を持って出て行った。それが一とわたりすんだとき、親方はまた両手で区ぎりを示しながら、

「ここからこっちはみんな買い切ったんだからどうぞそのつもりで……」

と私達居残ったものの方に挨拶をした。みんなは黙って頭を下げた。窓の外の詰襟はまだお世辞をいいつづけた。やがて乗換駅の忙しさが拭き取ったように消えて汽車は動き出した。詰襟の男は夏帽子を取ってお辞儀をした。

「ああ、それからね。普通の弁当を電報で百五十だけ、宇都宮へ注文してくれたまえ……百五十。電報で。百五十だよ」

親方が窓から半身を乗出すようにして大声でどなった。詰襟が何か答えたと思ううちに見えなくなった。ばくちは再び開始された。汽車は関東平野の東北端を北へ北へと走って行く。沿線の稲田は果しもなく続いて、いたるところに青々とした心地好い浪を見せた。その間をつづって点々と浮ぶ雑木林の深緑が正午に近い夏の光をきらきらと返している。稲田の間には水車を踏む者がある。田の草をとる者がある。馬を追う人、肥料を運ぶ人、さては街道を走る乗合馬車から遠くの村の屋根の姿まで、すべてが久しぶりに田舎を見る私の心をすがすがしいものに洗いきよめた。汽車が雑木林に入る度に、緑の茂みの間を綴る撫子、女郎草、藤袴など早咲きの秋草を見るのも愉快であった。

鉄道線路の右側には何れもいく町かの間隔をおいて猪苗代水電、鬼怒川水電の高圧線が見える。櫓のように聳えた鉄の支柱が太い電線を何本もおもそうに差上げている。それが整然と列をなして緑の野を「東京へ！東京へ！」と走っている。……その時、私は、かつて鬼怒川水電の大工事の時にも、今目前に見るような労働者の誘拐が、行われたという話を思い出した。たとえそれは、可なりの大山脈が走る中であるとしても、日本の首府から僅か五十里の鬼怒川ですら烈しい酷使虐待が行われた。その時死んだり殺されたりした工夫の恨だけでさえ、工事完成後に水路の墜道が崩壊したり、取入れ口の水量が設計より不成績であったりするのは当然の事である、むしろ今日まで会社が潰れずにいるのが不思議なくらいだとまでもいわれている。それを思うと現在同車している人々の運命もはっきりと推量られる。よし幸にして殺されないにしたところで、根室北見あたりの冬は、怖しい寒さと吹雪とをもって、どの位彼等を苦しめるか解らない。その上、人間の食う物でないような粗食を強いられたり、ろくに防寒具も与えられないで追使われたとしたら、それだけでさえ命を縮めるに充分である。……私はどうかしてこの人々を救ってやりたい、何とかしてやりたいという考えがしみじみと心の底から湧上った。

その時、親方がまたのそりのそりとやって来て、売店の飾り窓のガラスにもたれて、にやにや笑いながら私達を見

降した。
「姐さん、さあ煙草の火を……」
こういってふた足ほど踏み出した彼は、酌婦達を覗き込むように身をかがめた。
「さあ、どうぞ……」
近くにいる年増の方が軽く答えて笑顔を見せた。笑いながら顔を近附けて巻煙草の先と先とを触れ合せた時、二人の指輪が光った。とくに親方の幅の広い平打が私の眼を引いた。男は軽くからかい始めた。女二人も心持よさそうに応じた。「親方」「親方」となれなれしくいう度に、男の顔にはおさえ切れない満足が溢れた。そのうちに親方は私の前にいる田舎出の青年の一人に、何のへだても無さそうに、話しかけた。
「君達は一たいどこまで行くんだい」
「二人とも阿仁の銀山まで行くんです」
「ふん、阿仁の銀山か。あすこは秋田かい。山形かい」
「どっちだかよく知りません」
「ハハハッ……気楽だなあ。何しに行くんだい。やっぱり稼ぎにかい」
「まあそうです。知ってる人が行っているもんですから」
「ふーン。何かしっかりした目的でもあるんかい」
「いいえ。別に大した目的もないんですが……まあ行って探せばいい仕事があるだろうと思うのです」
「二人とも目的なしか」
「ええ」
このとき親方は女の方を振り返って「すまないが一寸」と小声でいって手つきで席を求めた。年増の女は少しく横へ寄って座をゆずった。彼は僅かばかりの隅へむりに尻をのせてまたこちらへ話しかけた。
「阿仁か。あすこはもうそのうちに潰ぶれるんだろう。あんなところへ行ったって詰らないじゃないか。格別大した仕事も見附かりゃしないぜ」
「どうですか——」
「きっとだめだよ。受け合っとく……それよか。どうだ。ひとつ北海道へ行って見ないか」
私ははっとして二人を見た。青年は互に顔を見あわせて黙って笑った。
「行先は北見の国だ。北見は北海道でも北よりだから寒いにゃ一寸寒いが、寒いだけ金もうんととれるんだ。つぶれかけている銀山なんかへ行って、あてなしの仕事を見つけて歩くよりか余程いいぜ。第一、北海道へ行けゃ仕事はいくらでもあるんだから。それに物価は安いし手当はいいし……今、日本中で北海道ぐらい金のとれるところはないんだぜ。何しろみんなお上の事業だからなあ。じつに豪気なもんだ。内地なんかにいちゃ到底想像もつかないよ。その上、冬中は雪のおかげでどこでも仕事は中止同然だ。それでいて金はちゃんともらえるんだ。つまり冬四ヵ月……一年の三分の一は遊んで食って行けるというもんだ。そこが

北海道のありがたいところだよ。まああっちへ行って一年働いて見な。そのありがた味は一生忘れやしないから」
　親方は雄弁にいわゆる「北海道のありがた味」を説きはじめた。二人の青年は一脈の驚異と一脈の羨望とを、その田舎者らしい顔に浮かべながらも、不安な色を見せてその話に聞き入った。
「内地では北海道へ行くと凍死でもするように思うけどね。行って見りゃ格別な事もないんだ。つまり慣れりゃどこでも同じさ。何しろ冬になるとみんな毛皮の服を着るんだからね。ぽっ、ぽっ、ぽっ、として暖いぜ。」
　右手の男が親方の方へ乗出して何か小声でいった。
「何？　一たん家へ帰って出なおして来る。どうするんだい」
「北海道までの旅費など用意していませんから」
「郷里はどこなんだ」
「埼玉の粕壁在です」
「何もわざわざ郷里元なんかへ帰って出なおすにゃ及ばないよ。きまりゃ旅費は全部おれの方で持つに定ってらあな。その外にしきせもするし小づかい銭も渡すよ。……いよいよ行くときまりゃ、そんな着物じゃ駄目だから、あっちに置いてある股引腹掛に着かえるんだ……どうだ。ひとつ思い切って行こうじゃねえか」
　青年は笑いながら考えていたが、やがてそばの友達の方に向いて、二人でか何かこそこそと相談を始めた。私は烈しい不安に襲われながらじっと瞳を二人の上に注いだ。そしてときどきそっと、親方の方をぬすみ見ると、親方の顔には如何にも狡るそうな微笑が浮んでいる。
「ずいぶんたまらないわねえ。親方！」
　酌婦が突然声を出した。
「大きなお尻でそんなにぎゅうぎゅうと押して来ちゃ、暑くてやり切れやしないわ」
「ハハハ……全くだ」
「いけすかないねえ。お……暑い」
　親方の大きな肩をぴしゃりと叩いて席を立った女は、その叩いた扇子を拡げてぱたぱたと胸をあおぎ出した。男は扇の風の一部が襟元にさわるのをうれしそうに受けていたが、やがてのそりと尻を上げてぐっと尻を一ぱいに掛けてしまった。
「とうとうお尻のおかげでおん出されか。情けないねえ」
　女がいまいましそうにこういい捨てて、お爺さんがいた隅の席へ腰をおろすと、男はゆうゆうと体をねじ向けて、その様子を見ていた。そして太い声でわざと笑って、また、続けざまにからかった。しかしもう女はそれには取り合わないで懐鏡を出して、乱れた髪をかき上げた。それでもなおにやにや笑っていた親方はやがてまたこちらを向いた。
「どうだ。そっちの兄いもひとつ思い切って一しょに行く事にきめようじゃないか」

私から見て左の方にいる青年にも、こういって決心を促した。そしてさらに色々な条件を巧い言葉にくるんで二人の前に出した。阿仁も北海道も寒さは大したかわりはない。同じ他国で同じ寒さであるならば、金の多く取れる方へ行くべきである、たとえ一人の知人がいなくとも、こうして一たん自分が見込んだ以上、飽くまでもお前たちの世話はする……もし病気にでもなって稼げなくなった時は勤めた月日の長さに準じて半年分なり一年分なりの手当はやる。寒いところへつれて行くんだから、病気になったからといって捨てるようなむごい事はしない……。
「それにとにかく一度行って見て気に入らなけりゃ、すぐ帰りゃいいじゃねえか。帰りの金がうまく出来ないときにゃ俺が何とかするよ」
「ですが私などはあんまり丈夫でないもんですから、そうやたらに荒っぽい仕事は出来ないんですが……」
「二人ともか……」
「まあそうです」
「だけど学校へは行ったんだろう。尋常だけは」
「ええ。二人とも高等一年を途中で止めたのです」
「そうか。そんならちょうどいい。外の仕事なんか出来なくても、筆のきく者にはまた会計や帳つけの方もあるんだから……その方も実は四五人是非ほしいんだ」
二人はまたこそこそと相談し出した。それを見ている親方の顔には運よくも拾い物をしたという風なよろこびの色が浮んで来た。そして、勝ち誇ったもののように二三度煙草の煙を大きく吹いた。
「実際つれて行って頂いてもいいんですが、二人とも徴兵がまだなんです」
「え？ まだ検査前か。そいつは厄介だな。……一たいいくつなんだ」
「十九と二十歳です」
「ふうむ。一人は来年だな」と何か考えていた親方は、
「そんなことは何でもないよ。いまからでも寄留すればどこだって検査は受けられるんだから」
「寄留したところで採られれば帰って来なくちゃならないでしょう」
親方はすぐに返事をしなかった。最近の徴兵令に関する智識はあまりないらしい。
「ですから折角行ってもまた一年ぐらいで帰るようではね」
青年の一人がこんな事をいった。すると親方は慌ててそれをさえぎった。
「そんな事はないはずだ……阿仁へ行っても北海道へ行っても検査に通れば帰るんだろう。同じ帰るくらいなら北海道へ行ってもいいじゃねえか。それにあっちじゃ検査は大へんゆるいんだ。ちょっと裏からうまくやればどうでもなるからなあ。そんな事は万事おれにまかせておけばいいよ」

二人の心は余程動いたらしい。またこそこそと相談し合っては微かな笑を見せた。親方の顔には確信の色が見えて来た。そしてしばらく二人の様子を見ていたが、やがておさえきれない微笑を残して窓の側へ行った。また停車場が来たらしい。窓から首を突き出して前の方を眺めた彼は、前と同じく中央のばくちの仲間に合図をした。

汽車はある小さな駅に入って直ぐ駅を出た。親方は大分動揺しはじめた二人をそのままにしておいて中央のばくちの方へいってしまった。つまりこの種の誘拐者の秘訣である、一とわたり甘い刺戟を与えた後はちよっと手を引いてしばらく自然にまかせた方が、下手にしつっこく説いてきかせるよりは効果が多いと云う事を心得ているに違いない。二人はあいかわらずこそこそ話合っている。

もう私はじっとしていられなくなった。……狼は今や私の眼の前で自ら羊と称して公然と二匹の小羊を誘ったのだ。この瞬間が過ぎ去れば二人はこの一群の人々と同じ運命の中に追い込まれてもうどうする事も出来ないんだ。しらずしらずに羊は狼に近よって行く。それを取り返すのは今だ。今でなければもうだめだ。こう思った私は、そっと夏羽織の男にそのことを話した。だが彼は私の言葉を直ぐにはそれとうけがわなかった。

「まあもう少し様子を見た方がようござんすよ。うっかり手を出すと取り返しのつかない事になりますからね。……それに実をいうと誘拐する方も悪いに相違ありませんが、誘拐される方だって悪くないとはいえませんよ。全体もう少しよく考えれば欺されるわけはないんです」

「しかし、欺されるその愚さがかわいそうじゃありませんか。如何に無智な人達でも眼の前にいる以上、見殺しにするわけには行きませんからね」

「そういわれればその通りです。しかしまあ一度君自身あの仲間へ入ってごらんなさい。無智だの蒙昧だのというぐらいじゃないんです。あんまりわけがわからな過ぎて情けなくなりますよ。何しろ先祖代々奴隷の境涯に生きて来たんですから、その意気地なさ卑屈さは骨までしみとおっているんです。その上、純粋の無教育なんですからね。人間としての権利だの労働者としての自覚などと云う事は全然解らないんです。如何に虐げられても万事そういうものだと諦めてわけもなく屈服してしまうのです。ことに親分子分などという事になると因習の力強さは驚く程ですよ。それが親分らしくない親分に対しても同様な圧力を感じるんですからね、……あなた方から見ればどんな山の中でもみんながみんな、同じ虐待を受けるんですから、全部が残らず団結して反逆を企てればいいだろうのにとお思いになるでしょう。ところがどうしてもそれが出来ないんです。たまには反逆を企てる奴が出ないでも無いんですが又裏切る奴も出るんです。だから結局そんな事を企てた奴が、いいばかを見るんです。そこですきこのんでひどい目を見ようとする者なんかはなくなるんです。如何に無智な彼等で

も、それくらいの智恵はありますからね。そこがすなわち奴隷の奴隷たるゆえんなのです。……」

「しかし奴等が如何に奴隷として卑屈で利巧な立ちまわりというものの価値をしっている人間であるにしても、奴等を永久に奴隷の境涯においておくわけには行かないでしょう」

「それはそうでしょう。しかし直接御経験に成るとよくおわかりになりますが、私達が如何にそばからやきもきしたところで今のところでは結局藪蛇におわるだけなんです。労働者の救済という事は結局労働者自身で解決すべき問題です。今の日本のように労働者自身が無自覚の間は駄目ですね」

夏羽織の男はこういい終ると寂しい笑顔を見せてはたたはたと扇子を使った。成程彼の労働者に関する知識は、私より遥かに多いかもしれない。そのため頭からあきらめているのかも知れない。しかし私は無条件でそれを承認するわけにはゆかない。現在の日本の労働者は事実あまりに無智で無自覚だ。それについては何の異議もない。……労働問題の凡ては労働者自身の手に依って解決されるべきものであるかもしれない。理想的にいえばその通りである。しかし、労働者の全部に教育が行きわたるまで、労働者が自身で自身を救い得るようになるまで、問題をすてて置いていいのかしら。第一、「労働者誘拐」という当面のこの事件をどうする。この事件の中に包まれている、おそろしい罪悪をどうする。「詐欺」や「脅迫」やその他色々の犯罪は、彼等が目的地へ着いた後でなければ、法律的の事実としては表面に現われて来ない。今のところあるものは相互の間の任意の契約だけである。それが形式に於いて何等不正の跡が無い以上、法律の力ではどうする事も出来ない。誘拐者は巧みにこの間隙を利用するのだ。しかし、現在の私にとっては法規の不完全を憎むよりは、眼の前にいるこのあわれな人々をどうにかして助け出す事を考える方が遥かに急務だ。危険は刻々に迫っている。しかも、危いのはこの二人だけではない。百五十人の全部がそうだ。今のうちに救えば決して遅くは無い。私は皆の前に立って、凡ての真実を告げようか。そして、皆の者に一刻も早く、この危険な境涯から脱出する事を教えてやろうかしら。しかし、街頭と同じような汽車の中で公衆に向って救済の演説をするのは、救世軍そのままだ。私はあんな「神」や道徳を商売にして飯をくっている人々の行為に似た行為は、したくない。そんな安価な感激に動かされて自分の人格を傷つけるような態度は取りたくはない。しかし、斯うまで差し迫った場合、あるいはそれも止むを得ないかも知れない。そう思っても私にはそれが出来ないのだ。その上、公然立って現在進行しつつあるこの罪悪を、一つでも暴露しようものなら、必ず誘拐者一味の憤怒と迫害とを買うにきまっている。それで、最後に腕力で来られたら、親方一人の力に対してさえ私は一とたまりもなくつぶれてしまう。そうした

ら目的を達し得ないだけではない。どんなひどい目を見せられないとも限らない。しかしこのまま見殺しにする事はどうしても出来ないではないか。
私は、しばらくの間、黙ったまま夏羽織の男の顔を見つめていた。思い切って立つ可きか、それともなりゆきにまかすべきか。考えるとどうしても立たずにはいられない。私の心は次第次第に苦しくなって行った。そして、烈しい興奮の為めにすっかり顔は汗ばんでしまった。
「あの親方にしても、何もすきこのんでこんな職業をしているわけでは無いでしょうからね。ほかにもっといい商売があれば、その方へ行くんでしょうけど、やはり仕方なしにこんな事もしているんでしょう。だから一がいに親方だけを責めるわけには行きませんよ」
夏羽織の男はこういって寂しく微笑を洩しながら巻煙草を出して火をつけた。私は直ぐ後に言葉を返えした。
「それはいけません。如何に止むを得なくても、罪悪を犯してまで飯をくって行く必要がありますか。少くとも社会から見てそれが打ち捨てておけますか。あまりにも明白すぎるほど、明白な問題じゃありませんか」
「無論そうです。しかし、考えてごらんなさい皆の顔を一つ一つ見て行くと、どれも是も驚くほど無教育な実に愚鈍な顔ばかしです。それに見るからに手軽に欺されそうな、如何にも北海道の山の中でのたれ死をしそうな顔ばかしです。それに元来内地にいたところで一定の職業もなくごろごろしている、いわば人間の屑みたいなものですから、無報酬でも何でも北海道へ行って働いた方が社会全般から見ればむしろ労働能力の大きな経済になるともいえますからね」
「じゃ貴君は多少でも社会の為めになるなら、どんな罪悪が犯されても構わないというんですか」
「何もそうでは有りませんけれどね。今こうして多勢誘拐されてゆくのを妨げれば、あの親方が喰うに困ることになるでしょう。親方としてもしょうことなしにしている商売なんでしょうからね。つまり親方にこういう職業をさせる者がその奥にあるんです。しかも、そのまた奥にもそういう罪悪のもとがあるんです。つまり社会を根本的に改造しない限り、こういう罪悪は跡を絶ちませんよ。すべて罪悪のもとは社会自身の中にあるんですからね……」
こういい切ると彼はまた煙草の煙を吹いた。その顔にはあまり苦労をしたために生じた寂しいあきらめと消極的な道徳意識という風な弱々しい影が、動いては消えた。私は何となく気の毒な、禁じがたい寂寞の感じに打たれて、寂しく彼の顔を見つめた。
しかし、私はそのまま見過してはいられなくなった。私の道徳的意識が烈しく私を責める。私の心は見る見る苦しい渦の中へおちて行く。無論、社会は根本的に改造されなければならない。根本的に改革された時、これらの罪悪は始めて影を潜める。そんな解り切った事を首を長くして待

っている間に、これ等の人々はどしどし誘拐されて行く。一分待てば一分だけ、罪悪の餌になる人間の数は殖える。親方の背後に更に幾つも大きな罪悪の主体があるのはわかっている。それをことごとく倒さなければならないのは無論である。しかし、今この親方を倒せば、その主体と被害者との連鎖は切れる。それだけでも眼に見えて効果は生まれる。それをあえてなし得ないのは自分ながら余りに卑怯である。彼等が如何に無智であってもやはり同じ人間である。それをあえて罪悪の前に曝してその餌にして差支えないという道理はない。とくに私の眼の前にいるこんな無垢な青年をどうして見殺しに出来るものか。狼が羊の皮の下に隠れているのを知りながら、それを知らずに近附く羊のあるのを見て、その儘に出来るものか。自分の力の弱いために全部を助け出す事が出来ないとしても、せめて、この二人だけでも助け出したい。……

　こう思った時、もう我慢が出来なくなった。ついに思い切って前の二人に労働者誘拐の怖るべき事実を告げた。そして北海道行の如何に危険で、如何に無謀であるかを説いた。夏羽織の男までが私に口を添えた。火のように燃える二人の言葉から怖るべき罪悪の姿を説きあかすので、二人の青年は動揺し始めた。私達の言葉から引き出される烈しい不安が、二人の心を掻きむしってるらしい。二人は眼に苦しげな光を見せた。私達二人はさらに一そう力を籠めて、北海道行きの中止を勧めた。

　その時、突然、親方が急ぎ足でやって来たので四人はぴたりと話をよした。しかし、もう何かを感付いたらしい。うさんくさい眼色をして私達を見ていたが、やがて以前の席へ腰をおろしてまた青年達に話しかけた。話は無論先刻の続きである。彼はくり返しくり返し言葉巧みに「北海道の有難味」を説いた。その有難味は何と云っても一度それを味わった者で無ければ解らない。と云って大げさに笑った。

「おい。ちょっと二人の切符を見せて見な」とやがて彼は手を出した。いわれて二人は何気なく切符を渡した。すると親方は二枚を一しょにして裏返して見ていたが、

「二人とも行くと決ったらこの切符も買換えてもらおう。車掌にいいさえすればすぐだから……このまま無駄にしちゃ勿体ないからな」

　彼は切符を大きな左の手の中に握った。切符の赤い端が三角に小指の蔭から見えている。二人の顔はたちまち隠し切れない不安に包まれてきた。事実、親方はあたかも切符そのものの如く、もう二人の運命を握りかけている。「それを取り返すのは今のうちだ」こう思うと身内から込み上げてくる烈しいいら立ちをやっと我慢して、暫時、私は息を殺して二人を見つめた。

「ねえ。あなた。一たいどっちにしたらいいでしょうね」

　青年の一人はついに思案に余って私に問いかけた。暗い瞳には救いを求める光が溢れた。

親方ははっとして私を睨んだ。私も猛獣に近づいて来られたような怖れとともに、鋭く親方を見返した。二人の視線はぴたりと合って、しばらく、そのまま動かなかった。
「ほんとにどうしましょう」
もう私は返事をせずにはいられない。
「どうしてもおよしなさい。行かない方が安全です」
「行かない方が」
青年は私と親方とを等分に見較べて、依然として落着かない風である。
「無論行かない方が安全ですとも……今もお話した通りなんですから……阿仁へ……一たん阿仁へ行った上で、職が無かったら仕方がないから北海道へ行くのもいいでしょう。何も最初から無理に行く必要はありませんよ」
「無理に行く……一たい何が無理だ。北海道へ行けばこれこれの仕事がある。阿仁なんかよりずっといい。だから一しょに行かないかと、いうのが何が無理なんだ。あんなつぶれかけてる銀山なんかへ行くよりか、北海道の方がよっ程安全だ」
「しかし、何にも知らない北海道へ行くよりも、阿仁へ行った方が安全ですよ。知り人の居る所の方が、安心して行けますからね」
「何？、何が安心だ。一しょに北海道へ行けば、先々おれが引受けてやるって、先刻からいっているじゃねえか。万事は俺の腹にある。それが何で悪いんだ」
「しかし、あなたはこの汽車の中で初めて知り合いになっただけの、いわば見ず知らずの人でしょう。そういう人を手頼るよりも、前々から知っていた人を手頼って行く方が、順当だと思いますが。もしその人が駄目な時には、あらためてあなたの方にお願いしてもいいわけじゃありませんか」
「それじゃ貴様はこのおれを信用しないっていうんだな。俺がいつ貴様を欺した」
「何も信用しないの欺すのといってやしませんよ。唯、北海道に行くよりは阿仁へ行く方が順当だといってるだけです」
「生意気な理窟をこねるな。青二才め。……余計なところへ口なんか出しやあがって……ぜんたい貴様は何者だ。おれ達の相対の相談に、横っちょから詰らねえけちをつけやがると、そのままじゃおかねえぞ」
親方の顔には烈しい憤怒と狂暴性とが、はっきり姿を現して来た。あたかも骨を折って見つけた餌物を追い行く猛獣が、突然、思わざる小敵にその途をはばまれた如く、そして、阻まれてなおさら、毛をぶるぶると逆立て慄わす如く、彼はたちまち全身をおおうほどの怒に襲われた。
「何もけちなんかつけませんよ。ただこの方達にどうしたらいいかってきかれたから返事をしただけなんです」
「なまいきな口を叩くない……この二人が北海道へ行こう

が行くまいが、貴様に関係した事じゃねえ。……愚にもつかねえ面を突き出すよか、おとなしく隅へでも引っ込んでろい」

こういった親方はさながら鬼一と口といったような顔つきで私をにらんだ。私はもう何にも答えなかった。そして、しばらくの間、空しく眼を青年達の方に向けた。

二人は物に脅えた小鳥のように唯おどおどとして、落ちつきのない瞳を親方の顔に注いでいる。どろんと濁った眼の光や、栄養の悪そうな顔色の裏には、いかにも途方に暮れたらしい、落ちかかって来る運命に対して、どうする事も出来ないといった風な、心もとない影が見える。夏羽織の男は焼きつくような眼をあげて、親方の掌に握られた二枚の赤い切符を見つめていた。

「兎に角、北海道行きだけは、断然およしになった方がようござんすね。私はきっぱりいいます」

私は力強く言葉を切った。二人の青年の顔には俄かに深い恐怖が湧いた。それを見て取った親方はもうそのままではいられなかった。彼は突然立上った。そして、握りしめた両手を力一ぱい胸の上で組合せながらぐいと私の側へ来た。みんなが一度に親方の顔を見上げた。肉附きのいい大きな唇がかすかに慄えた。そして、今にも生血を吹きそうな怒れる瞳が、じりじりと私に焼付いてきた。にわかに私は呼吸がつまって来て、顔の筋肉が自分ながらかたくなって行くのを感じた。

「黙れ！　この糞ったれめ！」

突然怒りに燃えた声が私の耳を打った。二人の瞳はぴたりと合った。合った瞳はそのまま、じっと動かなかった。敵意の火花が烈しく私の上に飛び散って、親方の憎悪は見る見る火焔の如く私を包んだ。

全身の興奮に我を忘れた私は、いつか思いもかけず立ち上った。すると親方は一と足さがった。一と足さがった親方の顔に不気味なうすら笑いが動いた時、突如として鉄の如き拳が私へ飛んだ。私は偶然反射的にそれを避けた。その時、夏羽織の男も立ち上った。二人の青年も立ち上った。そして、三人が素早く私と親方との間に入った。一瞬間の出来事である。

たちまち車中が総立ちになった。どやどやと皆が私達の方へ来た。親方はおさえ切れない怒と憎しみの為めに、烈しく顔をふりながら、口汚く私を罵った。夏羽織の男はしっかりと親方の両手にすがって私の為めになだめた。しかし親方の罵る声はいよいよ募るばかりである。やがて、彼は、突然、腹かけの丼から右手の拳を抜いて大きく頭の上に振り上げた。拳の中には先刻のナイフが、扇型の鞘につつまれたまま不気味にきらきらと光っていた。

「こういうものがあるのを忘れたか。まぬけ」

親方は頭の上でなおもナイフを動かして見せた。すると夏羽織の男は力の限りその腕に縋りながら、私を振り返って遠くへ離れろと眼で指図した。この時不思議な冷たさに

身を浸されて、茫然と相手を眺めたこの私の頭に新しい考えがひらめいた。「自分一人の力だけでは到底かなうものではない。こうなっては車掌の力を借りるより外に仕方がない」

丁度いいことに、親方と私との位置は、何時の間にか変っていた。彼は前部の出入口の方に背中を向け、私はその反対に立っていた。それに気附くや否や、私はとっさのうちに踵を返した。そして、総立ちになった労働者の間を分けながら、一心不乱に後部の出入口へ急いだ。

「こん畜生奴！　おれが買切った場所を通ってどこへ行きやあがるんだ」

後から浴びせた親方の声は、群集のどよめきを圧して、車内一ぱいに鳴り響いた。私はそんな事には関り合わずに、次の車から次の車へと、ずんずん通りぬけて、遂に二ツ目の二等室の入口に立った。見るとそこに乗客専務がいた。やっと安心した私は、出来る限り心を落ち着けて扉を開けた。そして、私が丁寧に挨拶をして一寸室外の昇降口まで来てくれる事を求めた時、乗客専務はすぐそれに応じてくれた。

二人は向きあって車室の外に立った。汽車はまた雑木林の中に入った。折り重った緑の影がどこまでも続くのか、林は遠く両側に延びている。風にあおられるのか、汽車におびえるのか、林の緑はことごとく慌しく光の影を返している。林のおくには何の花か赤く見える。ところどころに小川の水が走るのが見える。……それが一せいに緑の地上から浮き上って、無数の色の縞になって横様に飛ぶ。

汽車の中まで木の葉の匂が流れ込む。緑の風が頬を吹払う。おかげで私の苦しいばかりの興奮は少しずつ落ちつきを取り返してきて、ようやく車掌に話しかけることができた。

私は自分ながらよくしゃべった。すべての出来事を一気に喋った私の言葉が一段落ついた時、乗客専務ははじめて口を開いた。しかし私の話を聞いて別段驚いた様子もない。ただいかにも困ったらしく、気の毒そうに少し首を傾けて私を見た。

「じつはそんな事件はここでも度々あるんです。何も今日だけに限ったわけでは無いんです。しかもいまのところそれを取締るだけの法規がないもんですから、どうする事も出来ないんです」

「適用すべき好い法規のない事は私もよく知っています。ですからなおさらあなたの力でそれを何とかして頂きたいんです」

「それは困りますね。いかに私でも乗客の法規に抵触していない行為までも立入るだけの権限は与えられておりませんからね」

「しかし、いくら法規が無いからといっても、このまま見殺しにするわけには行かないでしょう」

「いや。それは駄目です。法規がない以上どうする事も出

来ませんよ。実をいいますと、近頃は毎日この汽車で百人から二百人は必ず輸送されるんです。私達見慣れた者の眼から見ても、それは気の毒ですよ。見す見す欺されて行くんですからね。しかし、こっちで如何に地団駄を踏んで見たって手のつけようがないんです」
　乗客専務は温厚な顔に稍感傷的な影を浮べて、やり場のなさそうな瞳を室内の客に投げた。
「今度の輸送は大分大計画のようです。何しろ今日で殆ど一と月ぶっ続けにやっているんですからね」
「今日でもう一と月も……」
「ええ。これからもまだ続くでしょうよ」
「一日に百人乃至二百人。それで一ヵ月。もう四千五百人ぐらいは輸送されたわけですね」
「そう。全体でそれ位になりましょうね」
「それを政府万能な今の政府の力でも、どうする事も出来ないんですね」
「まあそうです」
　乗客専務の顔にはその時不愉快らしい表情が見えた。私は今が今まで一心におさえていた興奮と不愉快とが、一度に焔のように燃え上って、見る見る心一ぱいになるのをどうする事も出来なかった。
「つまり現在の政府は見す見す犯されようとしている罪悪を予防するだけの力が無いんですね。その上、政府自身の鉄道でもって却ってそれを幇助するんですね」
「幇助なんかはしませんよ。怪しからん」
「それなら何故先方まで親切に輸送してやるんです」
「それは皆同じ乗客だからです。運賃を払う以上は皆乗客じゃありませんか」
「それではどうして汽車の中で賭博を許すのです」
「賭博は許しませんよ」
「だって盛んにやってるじゃありませんか」
「御忠告は有難うございます。見附け次第どしどし検挙しますから」
　彼は如何にも憤然としたらしく、きっぱりと、いい放つと、腹立たしげに私を見つめた。双方の意志がこうまで喰い違った以上、もう私も後へは退けない。……折角の私の企が腕力の足らないために、先ずあの親方に突崩された。それを無理にも押し通そうとしてここまで来た。しかるに乗客専務の為めにまた無残に潰された。この一瞬の間にも二人の青年はどうなることか解らない。私の心は堪え難い怒と興奮の中へおちこんでしまった。
「一たい乗客専務というものは乗客の保護をするのが目的でしょう。それだのに今、現に二人の乗客が他の乗客からひどい目にあおうとしているのを、見殺しにしてもいいんですか」
「いいか悪いかそんな事は鉄道院へ行ってお話になったらいいでしょう」
　つっぱなすように答えた乗客専務は堪えがたい怒を無理

におさえているらしく、いらいらと二三度体をゆり動かした。そして、車外へ唾をぺっと吐いた。唾は白い絲となって横に飛んだ。二人はしばらく無言で立っていた。

そこへ前の車室の扉を開けて、先刻見た小才子らしい腹心の男が出て来た。男は私を見ると一寸逡巡したようだったが、わざと何気ない風を装って乗客専務に挨拶をした。

「お願いがございますんですが、一寸、こっちへ来て頂けませんかしら」

こういうと男は狡猾らしい眼色を見せた。乗客専務は不愉快そうな瞳を私に投げ返してから、列車の繋ぎ目の鉄板を渡って男のそばへ行った。男は何か小声でいうと、専務を誘って前の車室の扉の中へ入って行った。烈しい不安が私を襲った。私は扉の外から二人を見ていた。二人は二等室の中央を通り抜けて、もう一つ向うの扉を開けた。そして、そこに立止ってはじめて話をし始めた。遠くから見ているとガラス越しに二人の顎が動く。二人の顔に笑いが浮ぶ。私はそれがあの二人の青年の切符を買換えるための相談である事に気がついた。

「どうもそうに違いない」……私はもうじっとしてはいられなかった。私は慌てて扉を開けた。何事が起ったのかと不思議そうな乗客の間を分けて、いそいで前方の扉を開けた。扉を開けた時、私は乗客専務の手に二枚の赤い切符を見た。やはりそうである。確にさっき親方の手にあった二人の青年の切符である。もう駄目なのか。もう万事が終ろうとしているのか……。

「車掌さん。それですよ。先刻からお話している、二人の男の切符は、それなんです」

私は堪らなくなってこう叫んだ。叫びながらそのまま彼等のそばに寄った。しかし彼等は私を見ようとはしない。

「それですよ。先刻から私があんなにお願いしたのは、……」

私の声は恐らく慄えていたに違いない。私は呼吸の詰るような思いでもってこう叫んだ。すると専務も私を見た。顔には怒の影が消えて、いかにも困ったらしい色が見えた。

「それですよ。その二枚ですよ」

私はもうこれ以上言葉が出なかった。唯息を殺して乗客専務の返事を待った。相手は静かに私を見た。しかし何故か一語も与えない。

しばらく黙っている中に彼の顔は次第に苦しい心の動揺を現して来た。ちょっと首をまげて軽く溜息を吐いた。しかし腹心の若い男が丁寧な態度で返事を催した時、彼はとうとう承諾の旨を答えた。男は何度も恭しく頭を下げた。そして私には一語も云わずに、隠し切れない勝利の歓びをありありと顔に浮べながら、扉を開けてもと来た方へ帰って行った。車掌はちらりと私の顔をぬすみ見ながら、不愉快らしい顔付でさっさと二等室の中へ入っていった。私は茫然と車掌の後姿を硝子戸越しに見守りながら何時までも

そこに立っていた。
まもなく汽車は宇都宮の駅に入った。
私は仕方なしに汽車をおりた。一人プラットホームの人込を分けてぶらぶらと歩いた。だが気になるので自分が乗っていた車室の前まで帰っていった。窓越しに中を覗くと何となくどやどやしている。新にこの駅から乗込んだらしい労働者が十人ばかし出入口に立っている。そこへ乗客専務が来る。例の腹心の男が来る。突っ立った親方を中心にして皆ががやがやと話している。
見ると前の方から二人の酌婦が降りて来る。その後から夏羽織の男も降りて来る。うっかり忘れていた私の手籠が最後に窓から投げ出された。
「とうとう彼等に一車全部を買切られたんですよ。それで吾々一同あとの箱へ乗り換えです。実際いやになりますね」
こう云って苦笑を洩らした夏羽織の男は、重そうな信玄袋を地に置いて私の前に立った。二人の女は軽く挨拶をして私の前を過ぎて人混みに消えた。その時ふと窓の中から頭を出して私を見附けた親方は、窓框にわざと臂を突いて静かにあごを支えながら極端な軽蔑の表情を私に投げた。窓近くに居並んだ労働者達はじろじろと不思議そうに私を眺めた。車室の中には依然として先刻の二人の青年がいた……いよいよ誘拐されてしまったのか……私はこう思いながらじっと二人の横顔を眺めた。

「さあ、早く後の車へ乗換えましょう」
夏羽織の男はこういって私をせき立てた。だが、それ以上汽車に乗りつづける勇気を失った私は、そのまま宇都宮で途中下車をしてしまった。
（一九一八年三月二十五日執筆、一九一八年四月「雄弁」春期増刊「思想問題号」所収）

玩具の閃き

丹　潔

午砲は秋の街を驚かした。
灰汁のぬけたような涼しい風は蜻蛉を操っている。翅の切れた蜻蛉が街道に横仆って苦しそうにぴくぴく跳ねていると、風が馬糞の上に引き摺ってしまった。錆たやうな枯葉が一枚空中に舞い狂って黒いトタン屋根に落ちると、眠っていた白い猫が戯れ初めたが、街道へ枯葉が落ちて引き摺られてゆくので、何処までも追跳けた。
若い四五人の火夫が片肌ぬいて空地から機関室へ、何度となく石炭を重そうに運んでいるので、山のように積み上げた石炭が凹んで行く。機関室には大きな車が白い蒸気を吐いた狂人のように恐ろしいほど早く回転している。
赤い煙突を四方から幾本となく絹絲のように痩せた針線で引張ってある。風の吹くたびに煙突と針線とが唸り出すので街道を余念なく歩む人は驚いて思わず空を見上げる。

唸り声が烈しくなるといまにも倒れるかと思われる。意地の悪そうな機関部長は汚ない破れた油服のポケットへ手を押込めて、冬赤子が泣いて顔に皺の破れたような靴を穿いて厭々ながら左の手で綱を引いた。汽笛は苦しそうに泣いた。
戦場のように熱狂していた工場の機械の音は止んで、多くの男女工は雑話に耽りながら、そろそろ控室に陣取った。
また、涼しい風は匐うように街道を洗い初めた。塵埃は光のなかで実験された肺結核菌のように浮いている。処々の蕊を洗った光は夏の光と違って何となく軽いように思われる。
風呂敷包を抱えた五つくらいの品の好い男の子が街道に立って何物かをさがし出す様に四辺をみつめている。水兵の帽子は金魚の鰭のように動いている。街道を歩む人は彼の全身に視線を投げては頭を傾けて行く。彼の顔はいまにも泣き出しそうに曇って来た。彼は一寸も動かずに時計の針のようにくるくる廻った。すると垢ぬけた小綺麗なお女房さんが彼の傍へ来た。
『坊ちゃん如何したの。お母さんをさがしているの。』
『エエ』と、彼は点頭いた。
『どこまで一緒に来たの。』と、お女房さんはやさしく念を入れるように尋ねた。

『汽車や軍艦の本を買ってやるから一緒においでといって、ここまで来て、うしろを振り向くと急にお母ちゃんいなくなったの。』
『そう。それじゃ直に来るでしょうよ。』
彼女は安心したような顔付で歩き出したので、また彼は以前より一層烈しく曇ってきた。彼は一尺歩いては後を振りかえって見たが、見知らぬ人ばかりで自分の名を呼んでくれるものもなかった。彼は一町四方の地面を何度となく輪を画いて考え左右を見たが、母はみつからなかった。自動車は魔物のように叫びながら彼を飛ばさんばかりに通り過ぎた。飴屋は大きな太鼓を打いて子供を集めている。いつのまにか小さな屋台車を数珠のようにからんだので太鼓の姿が見えなくなってしまった。
子供は飴屋の太鼓の音を聞いて、我を忘れて屋台車に身を寄せた。丸く太った五十くらいのおやじが唐からのような赤い帽子をかぶって、ヴァイオリンを引きながら淫靡な流行歌を唄ったけれども、一人として飴をなめるものがないので竹切れのようなラッパを吹いて車を引いた。多くの子供は車を見送りながら、蜘蛛のように散って何処へとなく姿を消してしまったが、とりのこされた彼は、十間ぐらいのそのそ歩いては立ち止って四辺に目を配った。
空地の石炭山の下の蓆を多くの職工が取り巻いたかと思うと、赤銅色の職工が鼎のように取り組んだ。
『喧嘩！喧嘩。』と叫びながら飛んで行く魚屋の若衆もあれば『角力だ！角力だ！』と、眼をむいて走る学生もある。
彼は驚いて自転車や荷車を斜によけて、三十間ばかり夢中に走って安心したように後を振り向いた。彼は母と同い年くらいの女の姿が浮ぶと、追駈けては見るが、母ではなく他人なので病院から吐き出された患者のように力がぬけてそろそろ歩いた。こんなことが何度となくかさなったので、彼は風呂敷包を投げ出して火のつくように泣いた。頭を垂れたまま考えながら歩む人、紙幣をめくりつつ微笑を洩しながら歩む人もあれば、若い男が芸者に摺り寄って婀娜しい言葉を惜気もなく街道へ投げ捨て行く。彼等は子供に視線を投げては小股に刻む、子供は何物をも恐れないように益々大きな泣声が秋の空気を襤褸切れのようにずたずたに引き砕いた。彼を中心として磁石のように十数名が二重輪を画いた。けれど彼は未だ泣いている。その涙がいつのまにか風呂敷包をしぼるように重くした。
『そんなに泣いて呉れるな。一体如何したのだ。』と頭と足が睨み合うように曲った老人が眼に幾本となく線を走らしてやさしく言った。
子供は未だ火のつくように泣いている。群集は相互に顔を見合せて困ってしまったと、口には出さないが鼻や眼で物語った。
『泣いてはわからんよ。』と、また老人が頭を撫て言った。
子供は顔に手もあてずに風呂敷包を拾ってひしと抱きしめて魔物に憑われたかのように烈しく泣いた。

『ぼっちゃん。泣いちゃわからんよ。』
『あんまり泣いていると、鬼に食われるよ。』
『少ししずかにお泣き。』
『ぼうや。』
『好い子だね』
『水兵の帽子をかぶって泣くものがあるか。軍人じゃ。』
『立派な軍人になるのだろう。』
『あんまり泣きやがると、打ち殺すぞ。』
『あんなにがみがみいったってしかたがないよ。好い子だぼうや。』
いろいろの声色の矢が彼の肉体を射った。彼は未だ泣いている。指と指の隙間から涙がこぼれて毛孔を喰いながら追って行くように見える。
『この風呂敷はなんだ。一つ見てやろうか。』
老人は微笑を彼に浴せた。そうして杖を股にはさんで風呂敷包を引きぬいてほどきかけると、群集が首を長くのばすので、老人は弾性に富んだバネのようによろけながらほどいた。
『あんまりおすとあぶない。この子も俺も死ぬよ。』
老人が膝のうえでほどいて地面においた。新しい薫の袷が一枚折りめ正しく丸めてあった。その上に一通の手紙がしめってあった。表へは『皆様へ』と書いてあって、その少し下へ『御願い』と記してあるが、裏へは月日とあるだけで他に何も書いてなかった。

『おお手紙と着物。』と老人が言って頭を傾けた。
『開封してしまへ。』と職人が言うと、『かまうもんか、もしかすると捨児かも知れぬえから。』と、また誰かが合槌を打いた。
子供の泣き声は少しやんだが未だめそめそ泣いている。水兵の帽子は風のために旗のようにゆれていた。
『開けても好いで御座いましょうか。』
老人はすまないような顔をして手紙を持ったままじっとみつめて考えた。
『じいさん。早く開けろよ。』
『開けちゃえ。』
『ようだいぶるな。』
『開けないと打きなぐるぞ。』
『早く。』
群集はたかぶって罵言の矢を投げた。そうして二人を包んでいる群集は輪になったり多角形になったりした。
『おしちゃいけません。』と老人が口に手紙を啣えて踉蹌けながら杖をおとした。
『開けろよ。』と、また誰かが叫んだ、群集のなかから赤銅色の長い腕が手紙にふれたので老人は驚いて頭をふった。
『誰だい。手紙を取ろうとするのは、馬鹿にしなさんな。老人だと見て馬鹿にすると尚開けてやらないぞ。他人様の手紙を開封して善いものか悪いものか胸に手をあてて好く

考えて見るが好い。この手紙と風呂敷包とはいまこれから直に警察署へ持って行くのだ。誰がお前達の眼前であけてたまるものか、たわけものめが。』
老人は苦痛と貧困とで衰頽した顔に血潮がほと走って来た。
『おじいさん、そんないっこくなことを言わないで、すなおに開けたらどうだい。』と職人がやさしく言った。
『いったい他人様の手紙を開けて善いものか。悪いものか好く考えて御覧よ。』
『そんなのんきなことを言わないで早くしねえ。』
『まあ、静かにしろ。皆さんあけますよ。御立合の上ですよ。』
老人は力まかせに開封したので群集はつぼんだ。子供はまた狂人のように泣いた。
『なんだ。』
針のように細い老人の眼が果実のように大きくなった。群集の瞳は鏡のように座って手紙を睨みつけ耳の穴は老人の口と平行線を画いた。
『――みなさまにつつしんで申しあげます。この子の名は勇吉といいます。父は大工を職としておりましたが、あるおやしきをふしん最中あしばから落ちて五年まえに死にました。それから家運がかたむいて、おはずかしいながらその日の御飯にもこまるようになりました。わたくしは実家をはじめとして親類からもお金を少しずつめぐんでいただきましたが、それもとうとうかなわないようになりました。わたくしの内職が三度の御飯も二度もしくは一度にもありつくように骨を折りましたが、どうしても身体が悪いので三日も働くと二日ぐらいは必ずねるようになるのです。じつにこまりました。そんなわけでわたしは身体をなおしに実家へかえりますから、長くとは言いませんが少しのあいだこの子供をお世話して下さいませ。よく身体をなおしてまいりますれば、いまの三度ぶりぐらいは働くつもりで御座います。袷が一枚と自分がいつでも手からはなさない汽車のおもちゃを入れておきました。この手紙をお読みになったお方は因果とあきらめて、どうぞこの子供をつれて行って下さい。かさねかさねに御願いいたします。どうぞ自分の子供のようにかわいがってやって下さい。わたくしがまたこちらへまいりますれば、じきに受け取りにまいります。』
老人は読んで瞳をしめらした。いままで大きかった眼はもとのように細く線を引いた。群集は暫時の間だまって子供に視線を投げた。
『かわいそうに。おじいさんこの子を貰ってやんな。お前さんが読んだのだから仕方がないぜ。』と車夫が言った。
『皆さんの御立会で読んだのですから、皆さんと御相談いたしましょう。この捨児をこのままおいて逃げるわけにもまいりませんし、また、孤児院や育児院におあずけしてもだめですよ。いまの世の中にほんとの孤児院や育児院は御

座いませんよ。五歳や六歳の子供に物を売らして五尺何寸という大男が食べていくのですからね。皆さんも御承知の通り三十だいの男が二三人で子供を十五六人も監督をして物を売りに来るでしょう。やっとうきよ風にふかれた子供が、ろくに飯も食わずにひっつくどく家から家へと品物を売り歩いていると、往来では大人が髯をひねって待っているではありませんか。それで売れ行きが悪いと、拳骨が一つか二つぐらい光るうえに、飯が二椀ぐらいへるのですよ。〇〇は如何してこのような弱者をすくわないのでしょう。東も西もろくにわからない哀れむべき弱者を、たとえ大臣方の月給をさいてもこのような子供を救わなければなりませんよ。これから世の中にはこのような子供は沢山出来ますよ。皆さん。この子供の母親の心になって御覧なさいよ。この真昼に。』と、老人は眼をこすりながら言った。掌には涙がひらたく光った。

『おじいさん。お前さん世話してやんな。まあとにかく家へ連れて行って家の事情を聞いて見なよ。このくらいになっていれば、物心もわかっているだろう。それから私も大いに相談になります。私はこう言うところに住んで居りますから、今夜にでも是非おいで下さい。』

商人風の男が鞄から一枚の名刺を出して老人の手に翻えしたので老人は苦しい胸をおさえながら喜んだ。また、群集も多角形の微笑を浮べた。

『そうか。この袷と汽車の玩具があると、書いてあるが何処にあるのだろう』と、老人は手紙を袂に入れて袷を手にすると、処々ペンキのはげた一合の汽車の玩具が閃いた。

『ああ。汽車の玩具を入れておいた親心を考えて見れば尚更悲しくなる。坊やもう泣くのはおやめ。ほらお前のお友達がいるよ。坊やをよく遊ばしてくれるこの汽車を御覧。汽車は坊やのように泣かないよ。さあ。これからお母さんのところへつれて行ってやるよ。』

老人は掌で涙を切ったかと思うと、鼻を鳴らして子供の手を握った。群集はぬか雨にあったようにしめった。

磨ぎ澄んだ剃刀のような空には涙のような小さな雲が何処からとなくあらわれて傷をつけた。

一九一八年五月「民衆の為に」

馬鹿野郎！

中村星湖

　油照りに照りつけた真夏の日の夕暮の事であった。五十余りになる馬士の三吉は、豊田の別荘の普請場へ、そこで用いられる材木を朝から幾返しも馬力で運んで行ったが、暑さと、重さと、道の遠さと、回数の繁さとで、馬は云うまでもなく彼迄も、すっかり草臥れてしまって、もうまじまじするようなそんな時刻になっても、まだ予定だけの材木を運び切る事が出来なかった。

　けれど、あと一と返し行って来れば、兎に角その日の仕事は済むわけなので、そうすれば、帰りに親方の許へ寄って、送り帳へ捺して貰った判を見せて、その日だけの賃銀を受取る事が出来るわけだ。その事を考えながら、彼は咽喉が乾いたり腹が空いたりしているのを我慢して、ともすれば途中で突立とうとする馬をも励まして（馬ももう飲み食いのしたい時、ゆっくり休みたい時である事を彼はよく心得ていたので、ホイホイと声を掛けるか、そっと鬣のあたりを撫でてやるかだけにした）そして彼は豊田の、別荘地の、幾軒か並んだ貸家の取付きの家の前まで来た。

　すると運悪く、材木があまり重かった為めに、またその重荷を幾度も幾度も曳いて通った為めに、道の溝際のいくらか軟かい所に深く出来た轍の跡へ、一方の車輪がぎちりと音をたてて落ち込んでしまった。そしてどんな事をしても上がって来なかった。始めは彼はその車輪に両手を掛けて、全身の力を罩めて押してみた。次には、彼は手綱が千切れるか馬の首が伸び切るかと思う程曳っ張ってみた。次には板切れを見附けて車輪にかった。次には、痛々しいとは思ったが、鞭をあげてつづけ様に馬の臀を打った。馬はひどく苦しげに四足を踠いて走ろうとしたが、落ち込んだ車輪は一二寸位置を転じただけで、ますます深く土中へ喰い入ってしまった。

　そこへ、二軒目の貸家のなかから、そこの主人らしい男が現れた。もう夕食を済まして涼みにでも出たと見えて、白地の浴衣に団扇をぱたぱたさせながら、その人は暫く溝に架かった橋の上で馬士の働き振りを眺めていたが、急に声を掛けた。

『それはとても駄目だ。馬が疲れているらしいのに、もともと荷が重過るのだよ。うちの庭を貸してあげるから、すこし上荷を刎ねてみたら何うだ？』

　三吉は好い所へ気が付いてくれたと思った、彼は破れ帽子を取ってお辞儀をした。

『有りがとう御座います。では、どうぞ、そういう事にお願いします。』
そこで、彼は荷縄を解いて、長い角材を一梃ずつそこの庭へ担ぎ込んだ。一梃でも人間の肩はこたえるのに、これを三十梃も四十梃も馬はよく曳いて来たものだ、など考えながら。
やがて、彼はまたも曳っ張ったり押したりしてみたが、まだ重いと見えて、車輪は容易に上がらなかった。そこで、彼は今度は親切に言ってくれた人の庭にそう多く担ぎ込むのも悪い様な気がしたので、直ぐそこの溝の上へ、新たに取卸した材木を十梃程横たえた。
そんな事をして、ようように喰い入っていた車輪を引上げた時分には、もう物の色合も解らない程あたりは暗くなっていたが、でも軒灯の下に彳んでいる人の顔だけはその灯の光ではっきりと見る事が出来た、兵隊上りででもあるらしい、色の黒い厳つい顔で、短い口髭など生やしていたが、年はまだ若そうだった。昼間はこの近所の工場へでも勤める人らしかった。
『どうも旦那、有りがとう御座いました。材木はすぐに片付けますから。』
三吉は残りの材木を曳かせてずっと奥になっている普請場まで行き、すぐにまた道ばたに深い沢の出来て居る所まで馬力を曳き返したが、いよいよ卸した分を積み込む段になって考えた。

『これはまずいぞ、この狭い道ではとても車の向きを変えることは出来ない。と云って、向うの広場までむだ足をして引返して来るのも、こう遅くなってからでは癪にさわったわけだ。じゃ、仕方ない、ここの庭へ置いて貰った分だけはおれが肩で運んで、あとは訳を言って明日にして貰おう。』
彼は一梃一梃角材を肩に載せて運びはじめた。その時には、もうそこの主人らしい人は見えなかった。彼は、溝際の土がすこし軟かかった為に、とんだ目に逢ったと思った。こんな事では倍の賃銀を貰っても合わない様な気がした。体はいやが上に疲れ、腹はいやが上に空いて、汗は仕事着をしとどに濡らした。ようように他家の庭の分だけ片附けたので、彼は普請場わきの別荘の差配の許へ行って、まだあそこの溝の上に立てかけて置いたのもあるけれども、とわけを言って全部の受取の判を貰おうとした。
差配はそれはきまりでないからと言って、直には判を捺してくれなかった。
『でも、わしは嘘を言うわけじゃありません』と彼はいくらか、憤りを含んで言った。『まったく、ああいったわけで遅くなったからお願いするので……何なら、一緒にそこまで行って残りの分を見て下さい。』
それは面倒臭かったと見えて、差配はようよう判を捺してくれた。三吉は過分の恩恵に与ったように幾つもお辞儀をしてそこを出た。あたりは一層暗くなっていた。軒灯の

光の差さないあたりはまったく鼻を摘まれてもわからない程だった。その中を彼はいくらか元気づいて、フッフッと息を切らしながら馬のいる方へ急いで行った。

豊田商会の東京支店の重役を勤めて、やはりその別荘地に住っている島木彌彦は、別荘の御隠居と若奥様と彼の妻とが、その日三越だか白木屋だかへ買物に来たついでに東京の店に寄ったので、その人達と一緒にあるカフエで晩餐をすまして、郊外電車でそこまで来て、薄暗がりを彼がまっ先きに案内に立って、やっと別荘地の取付きの軒灯の光の射す所まで来ると、そこの道なかに、大きな荷車を後へにして駄馬が一頭にゅっと突立っていた。しかもその手綱は、側の板橋の杭に繋がれてあるので、一方の田圃になってる方を馬とすれすれに通るより外はなかった。

『アラ恐い！　こんな所へ繋ぎっぱなしにして何うしたんでしょう？』と彼の妻は叫び出した。

『ほんとに何処の間抜けだろう？』と言いながら、彼はまず橋の上に乗ると、御隠居も若奥様も彼の妻もそちらへ集まった。

『ほんとに何うしたんだろう？』と御隠居が苛立たしそうに言った。

島木は咄嗟に、ここの地面は、ここの道路は、すべて自分の主人の持物である事を考えた。他の人間ならば兎に角も、その主人の御隠居のお通りになるのに、しかもそのお店の一番々頭とも云うべき自分が付添っているのに、この有様は何事だ！　と思った。

馬がいまにも跳出しはしまいかと恐れているらしい婦人達を後にかばう様にして、色の白い細面の横顔を、そこの軒灯の光の中に浮き出させた彼は、すらりとした背の高い体を一層伸び上がらせるようにして、あたりの闇を見廻しながら大音声に叫び出した。

『オイッ　誰だ、こんな道のまん中に馬を繋いで置くのは？』

ちょうどそちらを向いて急いでいた三吉の耳に、それが割れ返る様に響いて来たので、小走りに走り出そうとしたが、いかにも体が疲れていたので、も一つは、いやに癪にさわる声をしやがるとも思ったので、前の通りの歩調を続けた。

彼がもくもくと薄暗がりを動き寄って行くのが、島木の目に止まると、その若い重役は一層威丈高になった。

『馬鹿野郎！　なんでこんな道なかへ馬を繋ぐのだ？　早くひッ張って行け！』

すると、その『馬鹿野郎！』が馬鹿に不快に一こく者の老馬士の脳天を打った。糞ッ！　と云う気持が彼の胸元へ込みあげて来た。おれはさっきから汗水たらして苦しんでいた。それを手前等は知るまい！　『何が馬鹿野郎だ？』と彼の方からも突懸かるような声を出した。

『馬鹿野郎！』と重役はおッ被せる様に再び叫んだ。『こ

んな道なかへ馬をつなぐ馬鹿が何処にある？』
『なにい？』といよいよ接近しながら、三吉も続けた。『どっちが馬鹿野郎だ？　道なかだから馬を繋ぐのだ。人の座敷へ馬を繋ぎでもしたらだが、道なかへ繋ぐのに何の仔細がある？』
　愚図々々吐かしたら擲り倒しもしかねない馬士気質が、（それは三吉の若い時分からの病気のようなものだったが）彼の魂をゆすりはじめた。過激の労働と飢渇とで濁り腐ったようになっていた彼の頭は、その時、火のように熱して来た。
　こちらは、島木は、近づいて来る馬士の狂人じみた見幕にいくらか恐れを抱いた。理窟はこちらに十分あると思ったが、横紙破りを対手にするのは損だと考えた。
『往来の邪魔になるではないか、サッサと曳いて行け！』
　三吉はそこに、橋の上に集まってこちらを睨めているらしい彼等を見向きもせずに、俯向いて橋の杭から手綱を解くと、その手綱の端が溝の水で濡れていたので、それを片手で摑んでピシャリピシャリと橋板に叩き着けた。それは時に取っての威嚇手段でもあった。
　島木は、それに慴えて誰よりもさきにそこから飛び降りた。女達もあわただしくそれに続いた。ややしばらく行ったが、島木はも一度叫んだ。
『馬鹿野郎！』
　それに対して、三吉も叫んだ。
『どっちが馬鹿野郎だ？』
　島木は腹を据えかねた。馬士を相手に喧嘩も面白くなかった……あの見幕ではどんな乱暴をするかも解らないと思ったので、逃げ出す様にして途中まで来は来たが『どっちが馬鹿野郎だ？』と悪態を返されると、きっと窮命しなければならない様な気がした。殊に御隠居の手前そうであった。彼は立止って振返った。すると彼の妻も怒りに堪えないらしい様子をして言った。
『あれ、きっと普請場へ出入の馬士ですよ。あんな者にあんなことを言われている者がありますか？』
　彼は急に力を得て奮然として引返した。その時、三吉は横鬢の一つも擲りつけてやりたいようだった対手が行ってしまったので、その腹いせに、片足を橋に踏ん掛けてやはり手綱の尻で、橋板をピシャリピシャリと打っていた。
　ふと誰か近づいて来たと思って顔を挙げると、つい今の喧嘩の相手だった。
『お前、豊田の普請場へ出入りする者だろうな？』
　この声は低くかったが厳かだった。
　三吉は体を起こして黙って居た。すると、また一人の女が来た。そして男の口真似のような事を金切り声で言った。
『お前、豊田の出入りだろう、私達は豊田の内の者だよ。よく覚えてお出で！』
　そして二人は『そら見たか！』と云う風に振返り振返り

行ってしまった。
『うむ、おれは豊田へ出入りの者だ、それが何うしたんだ？』と三吉は独語のように言った。『豊田の内の者？　ふむ、そんならなお結構だ！』とまでは言いかけたが、実は何が結構だか三吉自身にも解らなかった。
　かれ等の喧嘩を何事かと思って出て来た人、さっき材木を卸せとすすめてくれた人の顔を、再び軒灯の下に見出すと、彼はいい対手を見付けたと思って、いきなりその人に話し掛けた。
『旦那、今の人達を御存じですかい？』
『うむ、あれは豊田の御隠居や番頭さんらしかったな。』
『ねえ旦那そうじゃがんせんか、』と三吉は急にある不安を覚えはじめたが、その不安を何処かへ遮二無二押遣らうと努めた。『ねえ、あそこの普請場のことでこうして苦労してる人間だと見たら、御苦労だとか何んとか、やさしい言葉の一つも掛けてくれるのが今日です。それだのに、なる程、うっかり道なかへ馬を繋いだのはわるかろうが、頭から馬鹿野郎呼ばわりは、こちと等だって癪にさわりまさあ、ねえ？』
『うむ、そりゃそうだ。』と相手は答えた。『然し、むこうでは、お前が先刻からあんなに骨折った事を知らないのだから、ただ不注意で繋ぎっぱなしたのだと一途に思ってだろう』
『だって、旦那、だって、頭から馬鹿野郎呼ばわりはひどいですよ。』
　そういってから、三吉は三度目のお辞儀をその人にして、馬の手綱を取ってしおしおと歩き出した。次のように考えながら。
『あれがほんとに豊田の内の人達だとすると、明日からもう出入りをさせねえと来るかな？　それだと……』

一九一八年八月「早稲田文学」

空想の花

上司小剣

一

ふと眼の覚めた和三郎は、あたりをキョロキョロ見廻わした。何んだか余りに明るいので、脳の中にまで太陽の光りが滲み込むような気がした。

『一体何時だろう。』と、和三郎は先ず考えた。そうして、いつもならば、こういう折に屹度出る欠伸が、一向出ないのに気が付いた。無理に欠伸というものをしようとして、いっぱいに口を開いてみたが、どうしても欠伸は出ない。

一体欠伸というものは、無理な働きに疲れた脳へ溜る一種の毒瓦斯で、それが口や鼻の奥から漏れて来る為め、若しくは自然に漏らそうとする為めに起る生理上の動作だということを聞いていたが、して見ると、今こうやって口を開いても、欠伸が催して来ないのは、自分の頭に疲れと、それに伴う毒瓦斯との残っていない為めであろうか。と和三郎は考えた。

何んにしても、近頃にない清々した快い気持ちである。

『お作、…………お作。…………』と、和三郎は少し間をおきつつ、妻を呼んでみた。けれども返辞がない。

『忠一、…………忠一。…………』と、息子の名を呼んでみた。矢張り返辞がない。

『みんな聾になったのか。』と、和三郎は持ち前の皮肉な考えかたをして、今度は無意識にまた一つ欠伸をしようとして口を開きかけたが、矢張り毒瓦斯は出て来ない。

この間に一つ鉄砲の掃除をしておこうと思って、いつもの床の間の隅を探ぐりに行ったが、どうしたことか鉄砲が見当らない。

昨夜晩く帰って来て、あの猟銃をば確に此処へ置いた筈である。それが見えなくなったのは、どうしたものであろう。彼れは今までだと、こういう場合に、直ぐむらむらと肝癪を起して、家内中の人間の名を呼びつつ、怒鳴り立てるのであるが、今日はどうしたことか、其の肝癪が起らない。丁度欠伸が出なくなったと同じように、肝癪も起らないのである。額に青筋の浮ぶこともない。

和三郎は昨日の猟に一日を費してもまだ足りなくて、仲間の猟夫五六人とともに、向う山を狩り暮したことを覚えている。手を負わした牝鹿の池を渡って逃げたのを追い廻わし、暗くなってから撃った鉄砲の筒先きに、シュッシュッと火花が走るのを見て、甚だ壮観だと思った。そうして

日没までという規則に反いて、こんなことをしているのを、若し巡査に見咎められたら、大変なことになるであろうと考えて、少し怖くなって来たのをも覚えている。

到頭其の牝鹿を撃ちとめて、先ずはこの日の稼ぎも出来たと喜びながら、牝鹿の四足を藤蔓で結わえ、松の生木の枝を払ったので差し担いにして、寺家まで戻り、獲物を川へ浸して、石をおもしに流れ去らないようにと、自分が殊に気を付け、仲間に別れて川端を立ち去ってから、また後戻りして、藤蔓の端を杭に結び付けたことをも覚えている。それから帰って、台所の囲炉裡の側で飲んだ二合のおしきせが、どんなに可味かったであろう。

『待てよ。…………』と独言して、和三郎は漸く床の間の甚だ綺麗になっているのに気が付いた。恵比須さまが鯛を釣っている絵を描いた紙の掛けじが、先代このかた煤ばんで掛かっていたのに、それが何処へか取り外されて、其の代りには、いつかお寺で見た極楽天堂の画を、もっともっと美しく立派にしたようなのが掛かっている。前の三社よりはずッと大幅で、一目見ただけでも、身も心も春めいて、浮き立つような気がする。

こんな美事な掛けじは、兎ても俺の家なんぞにはなかった代物である。俺の家ばかりではない、世の中にこんな、たまらないような美しさをもった画があろうとは思わなかった。

そう思って、和三郎は、稍暫らく何事をも忘れて、じいッと其の画に見惚れていた。描いてある人物の一人々々に皆魂魄が籠っているようで、こッちで笑えば画の方でも笑い、こッちで喜べば画の方でも喜ぶという風に見える。そうしてこの画の世界には、楽しみということより外に何もない、哀しみということと怒りということとは、疾くに忘れてしまったという風な顔をしながら、働いているのか、遊んでいるのか、さっぱり見別けの付かぬ様子をしている。

ただもう、恍惚として灘の上酒に酔うたような気持ちで、和三郎は稍長いこと其の画を見詰めていた。

ついぞ掛けじとか画とかいうものに頓着したことのない和三郎であるが、この画ばかりには、妙に引き付けられて、床の間の前を立ち去ることが出来なかった。それで、ただもう、うーんと唸っていた。

二

何んという名の画家が、こんな見事な画を描いたものであろう、とそう思って、和三郎は見るともなしに落款を見ると、これはまたどうしたことか、『忠一画』としてある。忠一とは俺の息子だ。あいつが真逆こんな画を描く筈もない。裏の土塀へ消炭でかいた『へのへのもへの』の描さと、この画の見事さとは、もとより比べものにも何んにもならぬ。

しかし、よく見ると、この『忠一画』としてある。三字には、何処かに見覚えがある。いや見覚えどころではない、これは正しく忠一の手蹟だ。和三郎はこう思うと不思議さに混って、嬉しさが込み上げて来た。

あんまり画にばかり心を奪われていたので、今まで気が付かなかったが、床の間の掛けじのみではなく、家の内全体が見違えるほど綺麗になっている。自分が今此処で眼を覚ましたのだから自分の家だと思っているものの、これが外から入って来たのだったら、屹度他人の家へ間違えて入ったのだと思うであろう。間取りや何かが元のままであるから、今でもこうやって安心して居られるものの、しかしどうかすると、眠っていた間にこんな家へ運び込まれたのではないかと思われてならぬ。第一妻や子の名を呼んでも返辞のないのが不思議だ。

『お作、…………お作。…………』と、和三郎はまた少し声を高くして呼んでみた。

『はい、只今。…………』と、いう声が納戸の方でした。『はい、只今。…………』何んだ人を馬鹿にしている。そんな返辞は町の旦那衆の奥さんと呼ばれている女どもの口から出る返辞だ。この片田舎の猟夫の嬶が、『はい、只今…………』もないものだと、和三郎は思ったが、いつもならそんな場合に、屹度癇に障ってならないのが、今日の時別な晴々した心は、どうしても癪なぞというものを起させない。

けれども、其の『はい、只今。…………』がどうしても気にかかる。俺の嬶は、そんな芝居染みたことをする女でないのだが、今日は俺が時別に晴々と心持ちが好いように、嬶も少し浮かれ気味になっているのであろうか。そんなことをしていて、晩に買うお米とおしきせの二合とに差し支えはないのであろうか。昨日の獲物のあの牝鹿が、今日売れたら、割前が来るであろうが、そうでないと少し困る。矢っ張り、お作に遣り繰りをさせなければならない。

こんなことを考えている和三郎の耳へ、ふいと心持ちの好い音が入って来た。言い知れぬ快い響である。琴でもなければ、三味線でもない。勿論あの祝日に学校で醜い女教師が弾くオルガンなんぞではない。一体何んであろう。

和三郎は踊り出したいような気になって、ついふらふらと其の妙えなる音楽に操られつつ、納戸の方へ入って行った。音楽は納戸のあたりから聞えるのである。

見ると驚いた。納戸の中で、ゆったりと椅子に腰をおろして、得体の知れぬ楽器を弄んでいるのは、現在我が妻のお作であった。昨日まで、不如意な家政の切り廻わしと、女には過ぎた力仕事とに窶れ疲れて、健康に生れ付いた其の身体も方々に弛みが出来たらしく、幾ら姥桜でも、三十六にしては少し老け過ぎていると思っていたのに、それが急に若やいで、二十四五とも見えるほどになっている。

何んだか知らぬが、龍宮の乙姫さまのような扮装をし

で、手に持っているのは、琵琶でもなく、琴、三味線でもなく、変な形をした楽器である。

これがほんとうに、家のお作なのであろうか。お作の成れの果――ではない、生れ更わり――なのであろうか。と首を傾げながら、和三郎は恐る恐ると言ったような気味を少し混ぜて、試みに、

『お作。…………』と、呼んでみた。

『はい。』

楽器を弄ぶのを止めて、こう答えた声は、楽器の音にも勝るかと思わるるような美しい声で、調子は矢張り元のお作に違いないが、昨日までの濁み声とは、玉と瓦とほどの相違がある。

俺が鉄砲が見えなくなって、こんな琵琶みたいなものが出て来た。というようなことを考えつつ、和三郎は、お作が傍へ置いた楽器を見詰めていたが、何んだか怖いような気がして、手に取って見ることが出来なかった。

『お作。…………』と、和三郎はまた妻の名を呼んでみた。

『はい。』という金鈴のような声は、昨日まで紫色をしていた彼女の唇の、今日は真紅に燃ゆるような色になったのを漏れて出た。

『ねえ、あなた。…………』

和三郎はそれを聞くとまた喫驚した。そうしていよいよこれは芝居だわいと思った。昨日までは、『何んだい、お前さん。』と、噛み付きでもしそうにしながら言った其の同じ口から、幾ら唇の色が紅くなったとは言え、『ねえ、あなた。』はふざけ過ぎていると思わずにいられなかった。

『ねえ、あなた。…………わたしをお呼びになるのに、お作と呼び棄てはいけませんよ。わたしは構いませんけど、村の人が皆笑いますよ。さん附けてね、お作さん……とこう呼んで下さいましな、どうぞ。』

楽器なぞを弄あそばずとも、話声が其のまま音楽のようで、言葉が直ぐ詩であるとさえ思われた。

三

『お作、お作…………さん。…………俺の鉄砲はどうした。昨夜確かに床の間へ立てかけて置いたんだが。…………』と、和三郎は少しきまりわるい思いをしながら、妻に訊いてみた。

『あなた、どうかもう少し、お言葉を綺麗にして下さいましな。…………第一俺というようなことは、もう誰れも言うものがありません。わたしですから、俺という言葉の意味も解るのでございますが、ほかの人には解りません。どうぞね、わたしと仰ッしゃって下さいまし。…………俺なんぞと申す言葉は、百五十年も前にあったそうで、昔しの小説にはよく出てまいりますわね。』

つんと澄ましているのでもなく、お作の様子は何んとな

くキリッとして、気品が高い。これが昔しの郷士の末の零落した貧乏猟師の媾と思われようか。よしんば祖父時代の郷士に逆戻りしたとて、これだけの品のある妻は得られまい。――和三郎はただ訳もなくそんなことを考えた。しかし、俺は現に昨夜山狩りから戻って、二合のおしきせを飲んで寝る時まで、俺という言葉を使っていたのだ。それが今朝になって、俄に通用しない。そんな馬鹿々々しいことがあるものかと思いつつ、

『百五十年も前の言葉だ。…………じょうだん言っちゃいけない。俺は昨夜まで自分のことを俺と言ってたんだ。猟から帰って、牝鹿を一頭撃ちとめたことをお前にも話して喜ばしたじゃないか。』と、言ってみた。幾ら言葉を鋭くして、突ッかかるように言おうとしても、どういうものか、そんなけんどんな言葉は出ないで、優しみのある、情の籠った言葉になってしまう。成るほどこれでは、俺という言葉が似合わしからぬ。

『ほほほほほ。あんなことを。…………あなたは夢を見ていらッしゃる。ほほほほほ。』と、お作は笑って取り合わない。

『そうだ、俺は…………いやわたしは夢を見ているのかも知れない。何んだか先刻からちッとも様子が分らない。…………』

『わたしも、あなたの仰ッしゃることが、少しも分りませんわ。鉄砲…………だなんて、そんなものは、今の世に何処へ行ったッてありゃしませんわ。つい先頃まで、博物館に一梃ありましたけど、先祖の作った罪悪を思い出していけないということで、焼き棄ててしまいましたわ。……………そうそう、百科全書の中の画にありますね、あれで見るだけですよ。あれと、昔し東洋の或る国で使った煙管とをよく間違えますよ。』

『博物館だとか、百科全書だとか。猟師の女房がえらいことを言うようになったもんだね。お前はまだ博物館なんて、見たことがなかったじゃないか。第一遠い町へ行かなけれゃ、そんなものはありやしない。』と、和三郎はけげんな顔をした。

『…………町。…………ほほほほほ。』と、お作はまた笑って、『成るほど、百五十年も前には、そんなものがあったそうでございますね。人間が、うじゃうじゃと一つところへ集って、軒と軒をくっ付けて家を建てたのですね。それが町でございましょう…………それも図書館にある百科全書で見ましたわ。何でも其の時分の人間は、人間の生きているのに必要なものを拵えるのに骨折らないで、売って儲かるものを一生懸命になって作ったのだそうでございますね。当てもないのに、これを拵えたら屹度売れるだろう、儲かるだろうぐらいに思って、其の頃にはあった職工という特別の階級の人間を大勢働かして、わるい空気の中でせッせとやらしたものだそうでございますね。そんな無理なことから、自然に町というようなものが

出来て、波のような屋根瓦の下に、人間がうじゃうじゃと蠢めいていたのでございましょう。…………今の世の中には、もうそんなものはございませんよ。食べるものや着るものを作ることを打ちゃらかしといて、玩弄品や人形の着物や、人殺しの道具を拵えるのに夢中になるなんて、気狂いじみたことはありませんもの。ほほほほほ。』
『お前の言うことは、何んだか、さっぱり解らない。…………第一俺は、…………いやわしは、鉄砲がなくちゃ、今日から働くことが出来ない。…………じょうだんを言わないで、早く鉄砲を出して呉れ。』
『ほほほほほ。まだあんなことを、ほほほほほ。』と、お作はどうしても取り合わない。
『困るなァ。…………働かないじゃ食えないじゃないか。』
『働く。…………あなたはよく字書を探がさなけれゃ解らないようなことを仰ッしゃる。働くことと、遊ぶことが別になっていたのは、矢張り百五十年も前のことでございますよ。…………今じゃね、一年三百六十五日のうちで毎日一人が五時間ずつ、僅か十七日だけ働けば、――昔し風に言って――御覧なさい、あの綺麗な田や畑から食べるものが余るほど取れるんですよ。…………ついあなたの真似をして、働くなんていう昔しの言葉を使ってしまいましたけど。ほんの運動がてら、気に向いた時に一寸田や畑へ出さえすれゃ、もうそれで食物は十分に取れるんですもの。…………ですから大抵の人は、一日五時間十七日ぐらいじゃ働き足りないと言って、其の倍の二十四五日も一年に田畑へ出る割合いにやりますから、何処の家でも皆、食物が余り返っているじゃありませんか………………百五十年も前には、百姓という特別の人間が毎日暗いうちから、星の光る夕暮まで働いても――これこそほんとうに昔し流の働くという言葉ですわ――まだ食物が足りないで大騒動が起ったことがございますのね。それを考えると、まるで夢のようでございますわ。』と、お作は静かに静かに言った。
『うーん。…………』と、和三郎はただ唸っているだけである。

四

『お前が先刻鳴らしていた、其の変な形のものは、それゃ何んだろう。』と、和三郎はお作の傍に立てかけてある楽器を指さしつつ問うた。
『これでございますか。』と、お作はそれを取り上げて、『これは矢っ張り琴でございますよ。』と、言いながら、静かに歌うて、徐ろに弾いた。

　東の空のほのぼのと
　汝が世は白みそめにけり。
この暁のさまを見て、

運命をいかにうらなわん。
ことにさやけき紅の
光をはなつ明星や、
やがて処女となるまでの
汝がおいさきのしるべせよ。
朝風舞をまうごとく
遥かに雲の袖を吹き、
雛は寝覚におどろきて、
まずしののめを呼びにけり。

声の美しいこと、琴の音の妙えなること。和三郎はそぞろに感心して、また恍惚となってしもうた。

『いつの間に、お前はそんなにいい声になったのだ。……………其の歌をうたうことや、琴を弾くことを誰れに教わったんだい。』と、和三郎は不思議でたまらないという顔をして、妻の側へ摺り寄りつつ問うた。昨日までは変に日なたくさく、泥くさかった彼女が、今日は実に百花の精を集めて搾ったというような匂いがする。

歌といえば、地主に雇われて稲を扱きながら、頭から塵埃を被りつつ、『一つ小山の竹松さん、のう竹松さん。……………………』なぞと濁声でやっていたのが、あんな上品な歌をうたうようになった。何んにしてもこれはどうかしていると、和三郎は腕を組みつつ頻りに考えた。

『わたしは、これで、歌も琴も皆下手な方ですよ。皆さんはもっともっとお上手で、声もいいんですよ。それゃ聴いて御覧なさい。』と、お作は楽器をまた元のところに立てかけてこう言った。

『皆さんて、この辺の百姓の女房や娘が、皆歌をうたったり、琴を弾いたりするのかい。……………へーん。』と、和三郎は馬鹿々々しそうな顔をした。

『百姓？ほほほほ。……百五十年も前には、そんな特別の仕事をする人があったんでございますッてね。………徳川家康とかいう大将が言ったそうじゃございませんか、百姓は死なぬほどにして置け、ッて。……………田畑を作って年貢を納める為めに生れて来たような、其の時分の百姓というものは、農は国の本だとか、国の宝だとか言われながら、粗末なものを食べ、汚ないものを着ていつも鋤や鍬を握って、腰を屈めているものときまっていたのでございますね。身体を真ッ直ぐにして立つことと、暇のあることとは、百姓という者に取って分不相応のことだッたのでございましょう。成るほど、死なぬほどにして置けと大将に言われた通り、やっと生きているというだけだッたのでございましょう。…………けれども今日では、もうそんな百姓というような特別な人間はございませんの。百姓と言えば、世界中の人が皆んな百姓なのでございましょう。何んしろ先程申しました通り、一人がほんの少しばかり其の為めに身体を動かしさえすれば、食物は余りかえるのでございますもの。……………昔しの人は何故あんなに馬

鹿であったかと、それを考えると可笑しくなりますよ。働くなんて、御大層なことを言って、……………』

お作の話は、其の音楽にも劣らぬまでに美しく聞えるが、どうも和三郎の腑に落ちないことが多かった。

『どうも、俺…………いやわたしはよく分らない。しかしそれはまァ追々分るだろうから、後廻わしにしておいて、お前は一体其の歌や琴を誰れに習ったのだ。………‥……それからいろいろと物識りになってるが、一体いつの間にそんなことを覚えたのか、学校へでも入ったようだね。』と、和三郎はいぶかしく思いながらも、それを顔色には現わすことが出来ないで、矢張り晴々した調子で問うてみるより外はなかった。

『学校？…………』と、お作は却って不思議そうに首を傾けた。そうして漸く思い付いたという風で、『そうそう、学校というものがあったのですね。兵営とか学校とか監獄とか、あなたのお馴染な、いろいろのものの中で、それでも学校だけは、ついまだ五十年余り前まで、形だけでも残ってましたが、今では到頭それも無くなったのでございますよ。』と、さもさも面白そうに言った。何が面白いのか、和三郎には分らなかった。

『学校が無くちゃァ、仕様があるまいね。』と、和三郎は自分が眠っている間に、自分の家の内がスッカリ変って、建て直したように綺麗になったのを怪むとともに、世の中がまた家の内と同じように変っているのを想像して、驚くべきことが嘸多いであろうと思った。

『学校でなければ、人を教えることが出来ないと思っていた開けない時にでも、少しずつ学校の無用を唱えた人があったそうでございますね。詰まらないお荷物だとか、馬鹿々々しい鋳型だとか言って、学校を貶した人も少しはあったそうでございますが、初めは唯変人の言い草だと思われていたことが、いよいよほんとうになって来たんでございますよ。学校なんて窮屈な鋳型に嵌め込まれないで、人間はもっと楽々にしていながら、自由に物を覚えるようになったのでございますよ。…………何んしろ、一年三百六十五日の中で、食物を取る為めに入用なのはたッた二十日ばかりですもの。昔しのように活きている為めに心配したり、食うのに苦労したりすることは、決してないのでございますから、其の餘の三百四十日ばかりから眠る間を差し引いた残りというものは、善い智恵を磨き、分別を養い、芸事を覚え、快楽を味うのに使われるのでございます。わたしだって、誰れにも習わずに、これだけのことを覚えましたし、歌や琴も自然に会得するんでございますよ。忠一はまた画が好きで、あの床の間に掛けてありますあの軸物ね、あれはクラブの写生でございますが、あれくらいのものは直ぐ描くようになりましてございますよ。活きて行くということに少しも困難がないから、持って生れた才分は、誰れでも自由に表わすことが出来るんでございますもの。』

『うーん。…………』と、和三郎はただ唸っているばかりであった。

其処へ、軽い靴の音が聞えて、お伽話の王子みたいな、天鵞絨の服を着た忠一が、踊るような足つきで帰って来た。

五

あのまァ、始終ぬッたんぼうの忠一が、まるで貴公子のようになったのに、和三郎は暫し呆れていた。しかし襤褸と手鍋とを提げるのに余念もなかったお作が、『お作』と呼ぶには勿体ないまでに、奥方然として来たのに比べると、忠一の姿は丁度釣り合いが取れていた。

こんなに立派になって、何故下女も下男も置かないのかということを、和三郎は不図考えて、妻に問おうかと、よッぽど思ったけれど、滅多なことを言って、また笑われるのも厭やだと考えたので、黙って忠一の姿ばかり見詰めていた。

十七にもなって、行儀も何も知らず、よく悪い事ばかりする小僧だと思っていた忠一が、自分とお作とに向って、ちゃんと挨拶したのも、意外と言えば意外だが、其の装いと姿とに対しては、相当のことで、別に不思議ではなかった。これならあの見事な画も描ける筈だと、和三郎はスッカリ感心してしまった。そうして、なおも忠一の様子ばかりを見詰めていた。

『忠一さん、あなたわね、お父さんの御案内をして、少し外を歩いておいでなさい。今まで何処においでたんですか。』と、お作の忠一に物を言うさまが、極めて物静かで、優しく、慈愛が籠っているのに、和三郎はまた感心させられてしまった。そうして昨日まで、『おい忠公。』と、お作が呼ぶと、『なんでえ、おッかァ。』と、忠一の答えていたのを思い出して、何が何やら、夢に夢見るとはこんなことかと、総べてが分らなくなってしまった。

『僕ですか。図書館に居りました。百五十年ほど前の文教記録というものを読んでいますと、其の時分には教育会議とかいうものがあって、少しばかりの人が集って、人を教えることの筋道を相談したんですって、あんまり可笑しいから、皆んなで笑ったんですよ』と、忠一は無邪気な様子で母に言って、

『さァお父さん、まいりましょう。』と、和三郎を促した。『ああ、あなた、お寝衣のままじゃいけませんわ。』と、お作は忠一の後から外へ出ようとする和三郎に追い縋って、其の着衣を改めさした。

今まで気が付かなかったのを不思議に思って、和三郎は其の純白な、柔かな寝衣を見入った。そうして、それを脱ぐのが惜しまれてならなかった。毛織でもなさそうだし、絹物ではなし、得体の分らぬふっくりしたものに、身体を包まれていたのが、どうして今まで分からなかったかと思

っているうちに、いつか其の寝衣は、するすると身体から滑べり落ちて、其の代りには、如何にも外を歩くのに都合の好さそうな、身軽で温かなものを纏わされた。
『さァ、行っていらっしゃいまし。』と、お作は裏口まで送って出た。出入をするのに裏口の方が便利なのは、元のまま変りがなかった。
背戸に小溝があって、清らかな水のちょろちょろと流れているのも、また元のままであったが、其処に蹲まったようになっていた崩れかけた土塀は、拭い去った如く形を留めないで、其の跡らしく思わるるあたりには、石榴が美しく実を結んでいる。
小溝を跨ぐと、向うに土手があって、其の上で、子供等がよく紙鳶を揚げたのであるが、土手の芝草は綺麗に磨きをかけた如く光って、野菊ででもあろうか、小さな花が笑っているように咲き揃っている。
土手の前から小溝への間へかけては、帯のように細長い田であったが、今は畑に変って、果樹らしいものが、ずうっと植えられてある。しかし今は花も実も着けていない。
『此処は仕様のない痩土で、何を植えてもうまく行かないから、こんなことにしてあるんで、気候も此処は天然のままに打ちゃらかしてあるんです。……それでも、こうやって梨の樹を植えたら、一年に一度は実が生りますよ。』と、先きに立った忠一が、昨日に変る血色のよい手を振り振り指さし示した。

『こんなとこへ梨を植えて、実が生ったら、盗まれるだろうな。垣根でもして、入口の戸に錠をおろしとかなけれゃいけない。……一体何処の家で持っているんだ。』と、和三郎は細長い梨畑を見渡しながら言った。忠一はくすくす笑い出して、
『ほんとうにお父さんは、阿母さんの言った通り、字書でも引かなけれゃ解らないようなことを、よく仰ッしゃいますね。』と、まるで取り合わなかった。
『だって、そうじゃないか。垣根がなけれゃ、人が入って盗むだろう。垣根があったッて盗むだろうが、それでも垣根さえあれゃ幾らか安心というものだ。』と、和三郎は却って、忠一が矢張りとぼけたことを言うと思っていた。
『垣根？…………垣根？』と、忠一は稍暫らく考えていたが、どうしても思い出せない様子で、かくしから赤い表紙の小いさな字書を取り出して引き始めた。そうして莞爾と笑いながら、『人の通行を妨ぐる設備、…………と書いてありますね。塀とも柵とも言ったんでしょう。そんなものは、今の世にありませんよ。欲しいものは、何んでも勝手に取って、食べもすれば用いもする。それを拒むものはありません。昔しは垣根なんぞ拵えて、或る一人の人がいやに慾張ったから、自然にまたそれを欲しがるものが出て来たのでしょう。欲しがるのは自然で、垣根を拵えるのは無理なのでしょう。…………お父さん御覧なさい、何処の家だって、垣根なんていうものはありません

よ。』忠一が指さした方を見ると、成るほどそんなものは一つもなくて、家だけが美しく画のように、ぽつりぽつりと建っていた。『そうかなァ、欲しいものが皆自由に得られるから、盗むともいうことはなくなる。盗むことがなくなれば、垣根もいらないのか。』と、和三郎は首を傾げつつ独言をしたが、どうもよくは呑み込めなかった。

『そんなことを言うけど忠一、ドッサリあるものはいいが、数の尠いものは矢ッ張り大勢の人へ行き渡らないから、持っている人と持っていない人とが出来て、欲しがったり、盗んだりすることがありやしないか。…………黄金とか宝石とかいうものは。…………』

『ああ、あの昔しの野蛮人の玩弄品ですか。野蛮人はあんなキラキラ光るものを身体に着けて喜んでいたんだそうですが、今は博物館の棚の上で、塵埃まみれになってますよ。誰れがあんなもの欲しがるもんですか。…………昔しは数の尠ないものが貴重品だったんですね、随分変な話だ。今は数の多いものが貴重品で、つまり必要だから多く出来るという自然の掟に合ってるんですよ。昔の野蛮人は、随分自然の掟に外れたことをして、生きていたものと見えますね。…………人間同志が傷つけ合ったり、殺し合ったりしたのも、それが為めでしょう。…………』と、忠一は少しも生意気な風がなくて、しっとりと重味のある口調で言った。

『そうかね、俺には何んだか、解ったような解らないような気がしてるが、しかしあの梨畑は誰れが持ってるんだね。』と、和三郎はもう行き過ぎてしまった細長い梨畑の方を振りかえりつつ言った。

『誰れが持ってる？…………』と忠一はけげんな顔をした。

『誰れの所有地なんだ。』と、和三郎は重ねて訊いた。

『所有地？…………何んのことですか。…………』と、忠一はまた急いで字書を引き始めた。

六

いつの間にか和三郎は、いろいろの野菜や穀物類の、こぶこぶと勢いよく伸びたり、繁ったり、実ったりしている肥沃な田園の中に連れられて来ていた。

　引き込まれた水は、滑らかに流れ、野菜類は春のものも秋のものも皆一所になって、見ただけでもおいしそうに肥え育っていた。苺が紅く滴りそうになっているかと思えば、トマトがそれと色を競うようにして、枝もたわわに実っていた。こっちに筍が黄色い芽を出しているかと思えばあっちには蕈が巧みに栽培されていた。

『筍や松茸まで、畑に作るようになったのか。』と、和三郎は寧ろ嘆息するようにして言った。

『お父さん、雨が降って来たようですね。あんないいお天気でしたが、矢張り秋は空模様が変り易いんですね。』と忠

一は空を仰ぎながら言った。
『そうか、それは困ったなァ。傘を持って来れゃ好かった。』と言い言い、和三郎も空を仰いだが、成るほど一面に曇っていて、太陽の形は見えないようだが、雨の滴の落ちて来る様子は更らになかった。
『お父さん、大丈夫ですよ。此処に居れゃ濡れやしません。』と、忠一は微笑んでいる。
『雨が降っても、濡れない。………そんなことがあるのか。』
『ええ、この上が皆ガラス張りになっていますから。……………』
『なに、ガラス張りだ。………そんなことが、…………』と、和三郎は意外に思って、また空を仰いだが、成るほどそう思って見ると、上の方に靄のかかっているようなのが、ガラスなのであろう。それにしても、接ぎ目一つ見えなければ、棧や骨の現われていない、技術の巧みさには、まだ自分が欺かれているのではないかと思われた。
『お父さん、昔しの野蛮時代にも、これの極く小いさなのがあったんでしょう。ほら、何とか言ったんですね。』と、言い言い忠一はまたかくしから字書を取り出した。
『お父さんにお話しするには、一々古語の字引がいるんですから、面倒くさいや。』
こんなことを言って、忠一は字書を繰り披いていたが、やがて、大変な発見でもしたように、
『そうだそうだ。温室！温室！』と、叫んだ。そうして
『ねえお父さん、温室と言ったんでしょう。………此処は詰まり其の温室の大きなのですよ。この田も畑も皆大きな温室の内にあるんです。』と広い田園を見渡しながら言った。
『うーん。………』
『お父さん、百五十年も前に、或る一部の進んだ人によって唱えられていました集約農法というのが、立派に出来上って、追々とそれが改良されたんですよ。………農作の上に天候を心配するということは、随分長くやっていた人間の悩みだったんですが、こうなって見ると、全く昔しのことは馬鹿々々しいんですね。』
『うーん。………』
『御覧なさい、向うの方でやってるでしょう、若い男や女が、………ああやってあの丸いものを一つ動してさえいれば、田畑が耕されもするし、種を蒔くことも出来るし、草を取ることも出来るんです。これはもう百五十年も前に、フランスあたりでやっていたのを少し改良したばかりなんですが、蒸汽の力で鋤や種蒔き機械を動かしていたのが、電気の力に変っただけで、一層簡便になったのです。………詰まり大昔しの粗放耕作が集約農法に変ったので、同じ広さの地面から十倍以上、事によると百倍ぐらいの作物を収穫することが出来て、人は皆欲しいだけ

の食物を勝手に取った後は、牛や豚や雞の餌にしますし、ああやって、誰れにでも食後の運動がてら、耕作が出来るんですもの、労働とか分配の苦情とかいう、古語辞典を引かなければ解らないようなことは、全く大昔しの夢になったんです。』と忠一の話し振りはだんだん重々しく、お辞儀をして聴かなければならないもののようになった。

七

和三郎は忠一に連れられて、山川の岸へ出た。此処はよく猟に出た時獲物を浸けたところだ。けれども今は、そんな穢らわしい獣の死骸なんぞはなくて、澄み切った水が岸の小笹を洗うて流れている。

『少し寒くなった。』と和三郎は心もち身を震わしながら言った。

『そうでしょう、此処はもう、天然のままの気候ですから。…………温室の内じゃありません。…………………雨がやみました。』と、忠一は空を仰ぎつつ言った。

対岸から、若い女が大勢、いろいろの食物や食器らしいものを持って、橋を渡って来るのが見える。

『あれは何んだね、お寺で何んとか講でも初まるのか。』と、和三郎は其の女の群れを見詰めつつ言った。

『いいえ、昼飯の支度をするんでしょう。ああやって毎日気の向いた人だけが食事の用意をするんです。昔しのように、仕事と遊びとの区別がありませんから、何んでも気の向いた人間だけが好きなことをしていれゃ、それでいいんです。』と、忠一も其の女の群れを眺めていた。

『あんなに大勢で昼飯の仕度をするところを見ると、村の人が一っ処に集って、食事をするんだと見えるね。』

『そうです。あの大きな温室の内に花園がありますから、大抵其処へ食卓を並べて、皆んな一所にやります。………しかし気の向かないものは、自分の家で自分に拵えて食べたって無論構わないんです。総てが自由ですから、料理を拵える方も自由なら、食べる方も自由なんです。…………しかし、仕事と遊びとの区別がまるでないんですから、誰れか知ら拵えるものがあって、誰れか知らまた食べに来るものがあるんです。そうして拵える分量と食べる分量とが、大抵しっくり合うのも、妙じゃありませんか。』

『うーん。…………』と、和三郎はまた唸り出した。

『何んだか若い女ばかりだね。俺の知ってるのも居るのだろうが、まるで活々と様子が変ってるから、さっぱり分らない。』と、和三郎は橋を渡って来る女の人を、一人一人改める風にして言った。

『いいえ、この中には随分年を取った人も居るんですよ。あの玉菜の入った籠を提げてる人は、あれでもう五十ですが、二十歳ぐらいの人とそう変りません。』

『あの人が五十？…………』と、和三郎は今までのう

ちで一番驚いたような顔をした。

『生きて行くことに就いて、苦労というものをしないんですもの、顔に皺がよることなんぞありゃしません。……………心を痛めるともいうんでしょう、苦労という言葉は。………』と、忠一はまた字書を出しかけた。

其処へ、矢張り野菜の入った籠を提げた、十四五と見ゆる少女が橋を渡って来て、いきなり忠一に縋り付き、堅い堅い握手をしてにっこり笑うと、バタバタと無邪気に駈け去った。

『あれは何んだ。………』と、和三郎は少し眼を光らした。

『あれですか。あれは僕の恋人で、許嫁です。僕が二十五になって、あの人が二十四になったら、結婚するんです。』と、忠一は憚り気もなく言った。

『うーん。………』と、和三郎はまた唸った。そうして言いたいことがドッサリ胸に湧いて来たけれど、うっかり物を言うと、また恥を掻くと思って、ただ唸ってばかりいた。

それからまた二人は、滑らかな川端道を、ふらふらやって来ると、和三郎の眼には、今までまだ一度も見たことのない大きな樹木が、蒼い淵の上へ、一面に枝を張っていて、麗しい花が、いっぱい咲いていた。

『これは何んという花だね。眼の覚めるほど綺麗じゃないか。』と、和三郎は顧みて忠一に問うた。

『これは、空想の花というんです。………この花から現実という実が結びます。』忠一の答えは、ハッキリと、確かであった。——

一九一八年一二月「中央公論」

社会劇

牢から出た男（一幕）

平沢紫魂

登場人物

兄貴。姓名はあるに違い無いが、周囲の職工仲間の知識階級には尊敬の念で兄貴と呼ばれ、其下層階級には尊敬の意味で兄貴と呼ばれて通っている男である。高橋鉄工場の平職工。年齢は定っているに違いないが、ちょっと見ても、能く見ても、老けているようでもあり、若いようでもある男である。

高橋　兼次。高橋工場主の長男　二十七歳

吉　岡。兄貴の弟分の職工　三十歳

お　花。酒場の女　二十三歳

酒場の亭主。

酒場の小女。

がらッ八。浮浪人　三十八歳

破外套を着た荷揚人足。

大漁祝を着た漁師。

巡　査。

其　他。大勢

××××

煙突が林のように簇り聳えている東京府下南葛飾郡大島町。地続きの深川から流れて来る小名木川の河岸縁。高橋鉄工場の対岸にある大倉酒場が此物語の舞台である。冬の、寒い夜の八時頃。酔漢が例に依って怒鳴っている。一枚橋のような長いお粗末な食卓が、戦に負けた兵隊のように列を組んでいるのに向って、コップ酒を呷っている連中は総てで六名。古外套のぼろぼろしたのを縄で締め付けている荷揚人足、鍔広の茶色が黒になった中折帽子で耳迄隠して汚い手拭でそれを縛って置くえたいのわからない男、身長が間抜けて低い素足の男、背服を着た髯面の浮浪人のがらッ八。大漁祝を着た船頭風の男はたった一人片隅にふんばって、頻りと誰にでも話しかけるが随分のずぶ六なので誰も対手になる者が無い。正面にエビスビールの大看板が柱にかかっていて、其下には古樽を据え、其中の皿小鉢を小女ががちゃがちゃ洗っている、土間の真中にぶつぶつ煮え滾

っている肉豆腐の大鍋が、盛んな湯気を立てて温か相にいとっている。

× × × ×

幕の開いた時には頬冠をした一人の男ががらりと景気よく、入口の破れ障子を開けて吸い込まるように、入って来た。

小女『いらっしゃい。』

頬冠の男『一杯頼まあ』

小女『五銭と七銭と、どちらにします』

頬冠の男『五銭の酒に肉豆腐』

小女『五銭のお酒に肉豆腐。』唱歌のように唱えながら、皿の中にコップを入れて持って来て熱燗をした一升徳利を取上げて、コップの中へなみなみと酒を注ぐ。酒はコップに溢れて皿の中迄充満する。色の無いような薄い酒である。頬冠の男は堪らないように舌舐りして一口ぎゅうと飲み、さてずらりッと連中を見廻した。

馬鹿で無いよのお花さんと仇名されている縮毛のお花が酒で赤い顔をしながら奥の別間から舞台へ出て来た。其出合頭(であいがしら)、大漁祝を着た酔漢がふらふらと立上ってよろめき出した。

お花　男のような声で、酔漢の耳にも聞えるように怒鳴る。

『おいお前さん何処へ行くんだい。』

酔漢『俺の身体は俺の勝手だ、俺の身体は……』

お花『五月蠅(うるさ)いね、そら其方(そち)が開くよ。おい外がいいよ。お前さん便所へ行くんだろうがね。』

酔漢　お花に小突かれて、気がついたようにお花の顔を見たが、『へえへえ。』温和しく表障子を開けて外へ出た。月の光がうっすら忍び込む。寒い風がぴうと吹き込む。

お花　怒鳴る。『仕様無いね、開放しでさ。』傍にいた身長(せい)の低い男がそわそわ立上って障子を閉めてお花の顔色を伺った。お花は其男にチラリと金歯を現わして、ニコリと笑って見せた。

酔漢　表でがなっている。『……行先は我家でよ、べらぼうめ女郎が妻だろう。』

がらッ八　傍を通るお花の袂を突然掴んで、大声をあげ『お花さんお楽しみだねえ。』

お花　平気なもので、其男の顔を見ると、『あら八ちゃん来ていたのねえ。』

がらッ八『あんまり小さいので眼の中へ入ったんだろう。へん、ごろごろしないかい』

お花『止してお呉れよ。』取られた袂を引離して、『面白くも無い、男らしくも無いわよ。』

がらッ八『何だと、』

がちゃりと皿小鉢の打毀れる音がした。

お花『お前さん打ったね。』

がらッ八『打ったが什麼した。』
其処にいただけの人間はみんな立上った。奥の別間からものっそりと来た両人の人間がある。其一人は兄貴で、弟分の吉岡は兄貴の後に栗鼠のような眼をちらつかせている。
がらッ八　お花を突き倒して、其頭髪をきりきりと左手に捲きつけ、吃驚して喧嘩の両人を仲裁に飛び付こうとした人間達をぎろりッと眼をひんむいて睨みつけ
『やいッ』と怒鳴った。
『やい何奴でも俺の邪魔をして見ろ。ただは置かねえぞ。』
其剣幕のもの凄さに呑まれて、手出をする人間は一人も無い、がちゃんと又何やら毀れた。
お花『もっと打て、もっと打て、什麼するか見やがれ、あッ又打ちやがった。徳ちゃん、徳ちゃんてば、あ痛ッ』
お花は声を限りに兄貴の名前を呼んだが、兄貴は小動ぎもせず、腕組をしながら左の眼を細くして鼻の穴をふくらせ、面白相に女の擲られるのを見ている。
がらッ八『よくも俺の面に泥を塗りやがった。男の俺に赤恥かかせやがったなあ。』
喚く声に連れて、男の手が女の頬にぴんぴん鳴る。
お花『徳ちゃんてば徳ちゃん』
夢中になって叫びながら女は一生懸命で、やっとこさと男の手にしがみついた。其時奥から酒場のちびな亭主が飛んで来て、ものをも云わずがらッ八に飛びついた。男は不意を食ってたじたじと辟易ったが、忽ち鉄のような右の腕に力を籠めて亭主を突飛し、立直って来るを右足を上げて蹴飛した。其の機会に女は掴れた頭髪を引離して、ばたばたと逃げ出し、兄貴の姿が眼に入ると、其胸に犇と縋り付いた。
お花『お前さん妾はねねねねねねねねね』と、息を喘ませる。
兄貴『心配する事は無い』と落着き払って、『おい兄弟、そんなに怒るなよ。』
女を追掛けて来たがらッ八に笑いながら云う。
がらッ八　腕を振り上げながら『何だと』
兄貴『おちかづきに一杯飲もうよ、話はゆるゆるでも出来らあね。』
がらッ八『手前は何だな、何とか云う此奴の野郎だな、よくも馬鹿にしやがった。』
兄貴　其言葉には答えず、静かに
『俺は君の態度が気に入った。おい酒を注げ、お花酒を注げってんだ。』
お花『お前さんいいのかい、妾は此人に擲られたんだよ』
兄貴『いいって事よ、心配するな、ねえ君まあかけよう。』
がらッ八　じろりと兄貴を睨んだが、
『面白い、酒でも何でも飲もう、やい酒持って来い。』
『おい酒だとよ、酒だとよ、喧嘩はもうお仕舞かい』と直ぐ傍に突立っていた破れ外套を着た荷揚人足が、つまら

な相に、フフンとおひらかすように嘲笑った。続いて其所にいただけの人間がみんな声を揃えて嘲笑ったようにお花には思われた。

お花『お前さん笑っているんだよ、いいのかい、真実にいいのかい。』

兄貴『いいって事さ、おっとどっこい』と、酒場の亭主があたふたしながらコップを二ッ並べて、徳利から酒を注ごうとしたのを止めさせて、無理に女の手で酌をさせた。それから其奴を美味相に一口がぶりと飲んでから、女の首ッ玉に手を搦ませながら、『なあ兄弟、一人の女が両人の男と惚れ合ったからって悪いって法は無いや。』

『違いねえ、』と荷揚人足が又へへへら笑った。

兄貴『黙れ。』

其男をじろりと見たが、

『はははははは、』と笑って

『喧嘩は止そうよ、手前達と喧嘩したって初らねえや、俺等にゃ喧嘩の対手ってのがちゃんと定っているんだ。』

がらッ八　嚙みつくように、『喧嘩の対手ってのは誰の事だい。』

兄貴『それは勿論君の事じゃ無い。』と云いながら、豚の臓物の煮えた奴を眼の上に持ち上げて、凝乎とそれを見ていたが、土間にばしゃりと投げ捨て、『眼を開けて見ろ、世間の何所にも俺等の対手はいらあ。』

土間の片隅に蹲っていた半黒の尨犬がのそりと歩き出して兄貴の投げた臓物の御馳走にありついた。がらりと障子を開けて、景気よく飛び込んで来た客がある。

『金は無くとも有る振する』と、大漁祝を着た酔漢が片隅で何を思い出したのか、突然だらりと手を振って、ぐんやりした声でほざいた。

兄貴『惚れちゃいないが惚れた振する』酔漢の唄を直ぐ次いで女をぐいと引寄せ

『時に未だ名乗もしなかったが、俺は高橋鉄工場の高田って職人でさ、よろしく頼みますぜ。』と八に云った。

がらッ八　兄貴と女を挟んで腰かけていたが、其足には女の足が搦んでいた。女の髪の後毛がはらりはらりと顔に吸いつく。で今の喧嘩はケロリと忘れたように、赤黒くなった眼が笑って、『俺がらッ八ってんでさ、所定めぬ浮浪人でさあね。』

兄貴『お前さん製粉会社に出ていたって云うじゃないの。』

がらッ八『製粉にいた事もあらあな。』

兄貴『まあ一ッ』と、八に盃をさして、お花がそれに酌をするのを見ながら『まあ仲よく稼ぎやしょうよ。』と云ったが、突然『やい此野郎』と叫んだ。尨犬がいつの間にやら兄貴の膝に首を上げていたのである。兄貴が凝乎と犬の顔を見ると犬はばちくりばちくりと眼瞬きを初めた。『此野郎味をしめたな、そらッ』と肉を投げる。犬はのそりと行って御馳走にあずかった、食い終ると又兄貴の傍に来て、其顔色を伺った。

『此畜生、手前はストライキの廻し者のような奴だな、俺は厭だい。』
腕を振り上げ犬を擲りつけた、犬はすばやく身を退いて、ううんッと唸って、吠え出した。
『其所だ其所だ、もっと吠えろもっと吠えろ。感心だよ俺は手前が好きだ。それお骨折だ。』
又肉を放った、犬はそれを食って仕舞うと又のそりと兄貴の傍に来た。
兄貴は其犬の顔をじろじろ見ながら
『なあおい吉岡、此奴は工場の犬じゃ無いか。』
兄貴の腰巾摑のような弟分の吉岡は、兄貴と食卓を隔てて腰掛けていたが、どろんとした眼をしながら
吉岡『違わあな兄貴、工場の奴は金の鎖で縛ってよ、ちっとだって外へ出す事じゃ無いや。』
兄貴『フフン左様だろうよ、犬迄金で縛って置きやがらあ尤も世間へ出したら白昼盗賊の飼犬なら誰に噛みつくかわからねえからな、はははは』
吉岡『おい兄貴奥へ行こうよ』と、思い出したように云って、突然立上った。
兄貴『おかしな奴だな、此所で飲んだからって、金が余計かかるってわけでもあるまい。』
吉岡『人様に見られるからなあ。』
兄貴『何だと、此野郎いやに職人振やがったな。見られて恥しいって手前でもなかろうよ。』
吉岡『だがね。』
兄貴『何がだがねだ、職人だって人足だって立ん坊だってよ人間に変りが有るかよ。』
吉岡『実はね兄貴。若大将が時折酒場や何かを廻って歩くんだ。』
兄貴『何だと、』眼を凄く据えて、はったと吉岡を睨みつけた。
『若大将が什麼したってんだ。』
吉岡『何ね、そんなに怒らなくったっていいや兄貴。ただ見られちゃ面白く無いってだけの話さ』
兄貴『手前何だな、工場の犬になりやがったな。』
吉岡『そんなわけじゃ毛頭無い。』
兄貴『それじゃ何だってびくびくするんだい。べらぼうめ工場に居る中は金の威光でよ厭な奴にもへいへいしなくばならねえかも知れねえが、外へ出れば同じい人間様だ、世界中の何奴に向ったってへいこらする事があるかい、それに、若且つく奴又何だろう』と、眼を光らせて『こちとらの欠点を探して歩こうてんだろう、什麼するか見やがれ、此所へ来て見ろ、打のめしてやらあ。』
吉岡『兄貴左様じゃ無いんだよ。』
兄貴『何が什麼したと。』
吉岡『若大将はね、真実の労働者の涙を酌んでやろうと云う人なんだ。俺等の仲間に成ろうてんだぜ、俺等の仲間にならなきゃ、真実の労働者の気持も涙もわからねえと

云っているんだぜ。兄貴は未だ此土地に馴染まねえから知るまいが、若大将は金を持って来ては酒場の人間を喜ばせる事が度々あるんだ。』

兄貴『わかったよ』と吉岡の言葉を止めて、『それが彼奴(きやつ)等(ら)の手だ。欺されるなよ欺されるなよ、吠えつかれないようによ、豚の臓物を食わして置くんだ。手前もよっぽど馬鹿野郎だな』と言ってせせら笑った。

『高橋鉄工場の若旦那なら先刻来ていましたぜ』と云った人間がある。

吉岡『何だって、それは真実かね。』

『真実も嘘も無いやね、先刻喧嘩の真最中に障子の外から内側を覗いたのは確か若旦那に違いない。』と其男が云う。

兄貴『いいって事よ、そんな事は什麼でもいいや。なおい花ちゃん。』

お花　客の間で働いていたが、呼ばれたので兄貴の傍に来る。『あらお前さんがら公は？』

兄貴『何だいがら公ってのは、あゝ左様か、何処へ行ったんだろう。』『気がついて見るといつの間にやらがらッ八はいなくなっている、

お花『ずらかったんだわよ、』

食卓の上を探して、

『そら勘定も払ってあらあしない、あの野郎最初から文句つけて飲み倒すつもりでいやがったんだ。』

兄貴『いいって事よ、そんな事はたいした事じゃねえ。人間そんな気にもなるもんだよ、いいやな、俺が払って置くから。』

お花『お金なぞ什麼でもいいが、小癪に触らあね。』

がらりと障子が開いた。見ると、入って来たのは職工のような青服を着た高橋鉄工場主の長男兼次である。それと見た吉岡は吃驚して飛上ってへえへえへえと続けざまに頭を下げて、それから酔払って眼を据えている兄貴の顔を窃(そ)ッと見た。

兼次『今晩は』と、職人のするような野卑な作声で努めて云う。

『気の毒だが酒をつけて呉れ給え』とお花に命じ、吉岡の傍に腰掛けながら、『寒いね』と、誰にとも無く云った。

吉岡『もう十二月の声を聞いちゃ気候は嘘を吐きませんやね、若旦那、へえへえ』

と云っては頻りにぺこぺこする。

兼次『では其十二月の寒さを酒で暖めよう、あちらの人達にも御馳走してやってね』と、お酌をしたお花に云って盃を取上げ、ちびりと酒をすすった。

吉岡『へえへえ什麼も御馳走様、おっとっと、正宗ときちゃ堪らねえ。』と顔の造作を崩して愛嬌笑をした。

其顔を兄貴はじろりと見たが、食卓の下から足を延して吉岡の膝をうんと蹴つけた。『あ痛ッ』と吉岡は吃驚し

て、顔をしかめて兄貴を見た。顔の血の気が一時に消失せた。何かおっ初ると直覚した。

兄貴『馬鹿野郎。』

吉岡『へえ。』

兄貴『もう一度云って見ろ、正宗なんて酒はこちとらの飲む酒じゃ無いや。』

と怒鳴りつけた。

吉岡『へえ、』そらそろそろ初ったぞ、直ぐと若旦那の方へ雷様が鳴るんだと思ってそっと兼次の顔を盗み見ると、兼次は食卓の上に両手の指を組んで、其上に顔を俯向け着けて、いつでもするお禱りをしていた。兄貴も兼次をじろじろ見たが、フフンと嘲笑いながらもう吉岡にはおかまい無しに、兼次が顔をあげるのを待って斯様云った。

兄貴『若大将、お前さんは救世軍だね。』

兼次『左様じゃ無い。』

兄貴『それじゃヤソ坊主か。』

兼次『左様でも無い。』

兄貴『隠さなくったっていいやね、ヤソ坊主か救世軍に違い無い。』

兼次『どっちでもいい。』

兄貴『よかあ無い、』と声を尖らして

『俺は嘘吐大嫌だ。』

兼次『何でもね君の思った通りさ、救世軍だと思ったら救世軍にして置くさ、ヤソだと思ったらヤソにして置くさ。』

兄貴『して置くなんて生温い言葉は俺は大嫌だ。全体今ヤソ坊主の真似をしたじゃ無いか。』

兼次『神に禱ったのです、神はキリスト教ばかりにあるのでは無い。』と、きっぱりと云った。

兄貴『だからよ、其言葉からしてヤソ臭いじゃ無いか。全体神に祈ったって、笑わしゃがらあ、神なんて奴が此間違いだらけの世間にあるものかい。』

兼次『神は無いかも知れないね。』

兄貴『嘘吐奴、たった今神に祈ったと云ったじゃねえか。』

兼次『左様です、神はある人間にある無い人間は無い。』

兄貴『何だと、じゃ神はお前さんにはあるが、俺には無いってんだな。成る程、神は貧乏人にゃ無いが金持にはあるってんだな、此奴はうまい事を云いやがった。』

兼次『左様とは違います。』

兄貴『何だと、じゃ什麽云うわけだ。』

兼次『此世の中には貧乏人と金持との区別のあるわけは無いみんな同じい人間だ。』

兄貴『成る程、よくそんな事を云わあね、うまくごまかす為めになあ。』

兼次『神様はどんな人間も同じい眼をもって見ている。どんな人間でも神様に逢いさえすれば、神様は喜んで歓迎なさる。』

兄貴『立ん坊でも人足でも。』

兼次『左様です、盗賊でも人殺でも。』
兄貴『対手選ばずじゃまるでケコロの娼妓みたいなものだなあ神様って奴は、だがね金の無い奴だけは出直していらっしゃいて悪魔は云わあな、』と、兄貴は自分の言葉に感心して、
『はははははははは。』と笑った。
兼次　薄笑しながら、『女に惚れたとするね、左様すると其人間は惚れた女がある人間である。女に一生惚れる事の出来無い人間がある、左様すると其人は惚れた女の無い人間である、神様もそんなものだろうね。神様に惚れた人間には神様はあるが、神様に惚れる事の出来ない人間には神様は無い。』
兄貴『成る程』と、頷いて
『若大将。お前さんはみかけに依らないなかなかの世間師だね』と云って笑った。
吉岡もホッと吐息をして、兄貴と共に、眼尻を下げて笑った。
吉岡『若旦那、わっちはいつかあんたに聞いて見たいと思っていたんですがね、』とずる相な眼をしておべんちゃらを云う。『ねえ若旦那。貴郎は御大層なお身分でいらっしゃってさ、それで何だってこちとらの仲間に入って来なさるんですかね。へえへえ、そらあね、こちとらの為めを思って下さるって云う事だけはわかりやすがね。』
兼次『私は世の中と云う物に惚れているからさ、だから什麼かして世の中の為めになる事を計りたいと思う。』
吉岡『若旦那は大学校を卒業なさったんですってね。』
兼次『なあに途中で止して仕舞ったんだよ。石やコンクリートの建築術を習うよりも、人間の建築をして見たかったからね。』
吉岡『へえ。何の事ですね、其人間の建築って事は』
兼次『人間の魂を取囲んでいる貧乏や罪悪やを叩毀して、人間の住む真実の宅をこしらえてやる事だ。』
吉岡『そんな事は大学校じゃ教えないんですかい。』
兼次『それを習うには世の中って大学校が一番いいんだよ。』
吉岡『成る程、それで若旦那は酒場へ飲みに来たり工場で大鎚を、振ったりしているんですね。』
兼次『世の中のどんな事にもぶつかって見ねばならないのだ。どんな悪い事でもそれにぶつかって見なかったならば真実の事はわからない。』
兄貴　皮肉に『どんな、悪い事にもって若大将お前さん女郎買に行った事がありますかい。』
兼次『ある。』
兄貴『真実ですかい。』
兼次『私は男子にも女子の如くに貞操は守る可きものだと固く信じていた。併し、私は真実の人生をわかる為めには此尊い貞操を、涙を流して破って仕舞った。』
兄貴『そんなわからない話って無いや。厭だったら何も泣

いて迄、貞操を破るには当らねえや、やっぱり何よ、お前さんもちっくら当って見たかったんだね。』

兼次　暫時涙ぐましい顔をして兄貴の顔を見てから、『世間の人はみんな左様云うよ』殆ど咽ぶような声で

『私はいつもいつも苦い涙を飲まなきゃならないのだ。』

と云ったが

『はははははははは』と泣くように笑って

『世間には他人に惚れずに、他人に惚れさせようとする人間ばかりだから無理も無い。』

兄貴は兼次の言葉にもう倦きて仕舞った。それに兼次の色白なのっぺりしたお坊ちゃん顔がだんだんと気に食わなくなってきた。傍にいるお花が其お坊ちゃん面を凝乎と見て其言葉に、聞き惚れているようなのも癪に触った。で、とうとうねじくり出した。

兄貴『それは当前だね、惚れちゃ損をすると云うのは世間の通相場だ。女と両人で飲みに行ったら惚れた方がよ必然金を出さあ。』

兼次『然しね、金を出しても其金を出す事が幸福だったらいいでしょう。真実に惚れたならば金を出す位ちっとも損じゃ無い。ねえ、左様じゃあるまいか。』

兄貴『フフン』と嘲笑って

『厭になってから気がつくだろうよ。』

兼次『厭になぞならない程に惚れたらいいでしょう。仮令工場主が職工をすっかり可愛いがって、余計な給料を支払ったとしても、それが真実に職工を可愛いと思ってしたのなら……』

兄貴『八釜しい』と急に怒鳴って

『其次には、だから職工は一生懸命働けてんだろう。死ぬ程辛い労働を笑い乍らやれってんだろう。憚りながら其手は桑名の焼蛤だ。』

兼次『ええ』と、兄貴が何を云い出したのかわからなかった。

兄貴『ぐずぐず云わねいでも工場の金をみんな、職工に分けて見ろ。左様したら俺等は喜んでお前さんの話を聞かあ。自分の懐中ばかりしこたま暖めていやがってよ、惚れたも惚れられたも無いもんだ。』

吉岡　あたふたしながら『兄貴』と呼び『兄貴すっかり酔払ったな。』

兄貴『何云っていやがるんだ。犬ッ』と怒鳴って、突然吉岡を擲りつけ

『今に見ろ、工場でどんな騒動がもち上ると思いやがるんだい。』

吉岡　吃驚して

『兄貴、そんな事云って、悪いや。』

兄貴『黙れ』と吉岡を睨みつけ

『俺は真正直の人間だ。真実の事は真実と云うんだ、ちゃんと口火はついているんだ、今にダイナマイトが破裂するぞ。』

吉岡『ダイナマイト。』

兄貴『敵打をするんだ。白昼盗賊の奴等をぶっちめるんだ。』

と云って、あっと思う間もなく、兼次の頰をしたたか張りつけた。二度目に振上げた腕をお花がしっかりと縋り止める。

お花『お前さん何をするんだね、高橋工場の若旦那様じゃありませんか。』

人々は口々にがやがや叫び出した。

酒場の亭主は鉄砲玉のように表へ飛び出した。交番へ行く為めである。人々は兄貴を取囲んだ。

兄貴　ずらりとみんなを見渡して

『対手が金持だと見やがって、みんなで俺の邪魔をしやがるんだな。』

吉岡『兄貴頼むから勘弁して呉れ、俺は真実に頼むから。』

と、泣きたいような声で云って、兄貴の身体に縋りついた。兄貴はものをも云わず、吉岡の頰をびしゃりびしゃりと張りつけて居た。

其処へ酒場の亭主と同時に巡査が一人飛び込んで来た。兼次は情無相な顔をしてやや離れて兄貴の様子を見ていたが、巡査の剣の音に気がつくと、ずかずかと巡査の前に立ちはだかって

兼次『もう済みました。御苦労様です。』

巡査は兼次をよく知っていた。がやがや云い合う群衆の言葉に混って兼次と二言三言話し合うと、酒場を一渡り見廻し、兄貴の顔を気に止めて見たが、何事も云わずに兼次と共に表へ出た。

兼次　一度出たが又戻って来た。其顔は固く決心した厳粛の気が漲っている。其気魄と態度に魅せられて、群衆悉く兼次を見る。兼次は何か云いた相に群衆を見渡したが、思い返したように何事も云わず、表へ出ようとしたが、月の光を仰ぎ見て、昂奮後の落着いた声で

『おお清よらかの晩だ。』と立去る。

兄貴『ざま見やがれ、後難を怖がって逃げやがった。』と、兼次の後姿を見送って、勝誇ったように云う。

吉岡『兄貴お前全くひどい人だなあ。』

兄貴『手前は愚図だ。』と云って、吉岡の頰を力を籠めて、其くせ頰の近くへゆくとそっと力を抜いて打った。と、思うと優しい声で

『お花さん。』

お花『あらおかしな人だよ、さんづけは止しておくれよ。』

兄貴『お花酒持って来い。』

お花『もうお止しよ、十二時近くになるわ。』

兄貴『後生だからもう一杯飲まして呉れ。』

お花『あら馬鹿に優しくなったわね、じゃこれっきりですよ。』

吉岡『兄貴、此徳利に未だ余っているぜ。』

兄貴　吉岡の言葉には答えず、酌をしたお花の手を握っ

て、それから身体を引寄せて抱き占めて、小声で
『お花、俺と情死しようじゃないか。』
お花『いいわねえ。』
兄貴『俺とずらかろうじゃないか、全くの話だ。』
お花『あら』と云って、帳場を見た。其所には誰もいない。
『什麼したんだわよ、お前さん、馬鹿にめいったわね』
『おい此所へ置くぜ』と云って、夏帽を冠って、草鞋を履いた男が出て行った。
お花『毎度有難うさま』と云いながら立上る。
兄貴は両手を頭の後に組んで、額を食卓に押付けながら唸り出した。
吉岡『兄貴、おい什麼したんだい。』と、中腰になって、兄貴の背に手を置いた。
兄貴『ううん、淋しい淋しい』
お花『お前さん苦しいのかい。』と兄貴の傍へ寄って来た。
兄貴　ひょいと顔をあげて
『ああ堪らねいや、あ、堪らねいや。』
お花『什麼したんだわよ、全くお前さん。』
兄貴『淋しくって堪らん、ああ堪らん』
お花『何だって又そんな気持になったんだわよ、あらお前さん慄えているじゃないの。』
兄貴『此土地も俺はもうおさらばだ。』
お花『あらッ』と眼を丸くして
『お前さん、それは真実かい。』
兄貴『真実だとも。』と吐き出すような声で云って
『真実ならば什麼したい。』
お花　帳場を見てから
『真実ならばね、妾にも量見があるからさ』
酒場にはもう外の客は一人も居無い。一枚橋の様な長いお粗末な馬卓がだらし無い列を作って、淋しげに並んでいるだけである。小女は隅の方に腰かけて、こくりこくりと居眠りしていた。亭主は巡査を呼んで来てからは、兄貴を憚って店へ出て来ない。『お前さん真実に妾を連れて、逃げて呉れて、』とお花は小声で云った。
吉岡『兄貴頼まあ、そんな悪い量見出しなさるなよ。』と突然言葉を入れた。
兄貴『君にもいろいろお世話になったが、仕方無いや、職人厭だと思い初めちゃもうちっとも我慢出来ねえや。』
吉岡『じゃ真実に、什麼しても行くつもりかね。』
兄貴『お別れだ、さあ』と、吉岡に盃をさす。
吉岡　盃を受取って、『左様云えば職人厭な工場には全くいられねえ、だがね、一体何処へ行くつもりだね。』
兄貴『何処へ行くかわからねい。』と、しんみりと云ったが、
『ああ俺もすっかり浮浪人になって仕舞ったなあ。』
吉岡『兄貴』と呼んで、おずおずしたが、
『斯様云っちゃ怒られるかも知れないが、兄貴はすっか

り人間が違って仕舞ったね。』
兄貴『全くだ。』と常に無く声を沈ませ、『初めて君に逢った時分には未だ俺は世間知らずで君の方がよっぽど世間師だったぜ。』
吉岡『左様とも、其頃の兄貴の仕事振ってたら傍見一ッもせずに働いたもんだがね、酒や女は固より、藤八拳一ッ知らねえ変人』と云ったが、狽てて
『怒っちゃ厭だよ兄貴。』
兄貴『怒るものか、其通りだ。』
吉岡『それがこんなに変ったんだからね、それに不思議なのはあの温和しいお内儀さんに、何故別れたかって事だよ。』
お花『あらお前さん、お内儀さんがあるの。』
兄貴『ある、だが別れて仕舞ったい。』
お花　疑るような眼で兄貴を見て『何故又お内儀さんに別れて。』
兄貴『別れたのじゃ無い。逃げられたのだ。』
『ええ』と聞いている両人は吃驚した。
兄貴『媽にゃ逃げられた上でよ、フフン』と、いつものくせで嘲笑って
『其上に牢の中へ叩き込まれた。』
吉岡『何だって兄貴。』
兄貴『牢の中へ叩き込まれたって話よ』
吉岡『真実かい、それは兄貴。』
兄貴『御当人の俺が云っているんだ、まあ真実だろうよ。』
吉岡『へえ』と感嘆して
『そんな事、ちょっとも知らなかった。』
兄貴『誰が自分の耻を聞かせる奴があるものか。』
お花　兄貴に加勢でもするような語気で
『何だって又牢へ打込れたんだい。』
兄貴『ああ淋しくっていけねえ』と酒をぐいと呷って
『貧乏だからよ、貧乏だから媽は逃げやがる、逃げるのは無理も無い、今だって無理とは思っちゃいないが、さて癪に触らあ。』
吉岡『成る程』と頷く。お花は眼も放さずに兄貴の顔を見詰めている。
兄貴『媽に逃げられた其翌日だ、胸がむかむかしている所へ色の生白い現場員が、仕事の事で文句云いやがったんだ、赫ッとしてよ、其若造を其時持っていた大鎚で擲りつけたんだ。』
吉岡『成る程。』
兄貴『俺は後で牢獄の中で考えたんだが、俺が其奴を擲りつけたってのは其奴が生意気で、其上俺の胸がむかむかしていたって事ばかりじゃ無いんだ。
牢獄住居って事は、全く真実の事を考えるにはもって来いだ。』
吉岡『未だ外に原因(わけ)があるのかい。』
兄貴『大有りよ、第一に工場の中の設備いかねえや、あの

工場じゃ煙の逃げる所が無い。真黒な煙に包まれて見ろ。人間の心が荒々しくなるのは当然だ、それから其時丁度夏の真中だったが、すばらしい大物をやっていてよ、汗びっしょりで頭がくらくらしている時だ、人間頭のくらくらする程熱い思いをすれば、頭の調子の狂うのは当前よ。』
吉岡『成る程、此奴は理窟だ。』
兄貴『こんな工合によ、四方八方の原因からして俺は其奴をぶん擲ったんだ。それを俺ばかり牢へ打込むって法は無いべらぼうめ、貧乏で心がいらいらしてよ、頭の調子の狂う程辛い目に逢ってよ、真黒な煙に取捲かれて、其上に道理に合わねえ生意気な、人を圧迫する事をほざく若造が眼の前にいるんだ。其奴を打擲ったからって俺ばかり牢の中へ打込むって法は無いや。俺を牢に入れる前によ、貧乏をぶん縛って牢へ入れろ、熱と煙とをぶん縛れ、生意気に圧迫けやがる若造に牢獄の壁を舐めさせろ。』
お花『左様とも左様とも』
兄貴『間違いだらけの世間を真先に牢獄へ叩込め』と怒鳴って
『俺は世間を歩いてだんだん眼が開いたんだが、俺等が貧乏していなきゃならないって理窟は無いんだ。工場って所はよ、俺等を金儲の踏台にしていやがるんだ。俺等を食うや食わずの辛い目に逢わして置きながら、自分達はぬくぬくと遊んでいやがって、そら酒そら女と好勝手の事をしやがる。それで大威張でよ、当然で御座候って大きな顔をしていやがるんだ。』
吉岡『違いねえ。』
吉岡『××××××だ。』
お花『お前さん、それで其お内儀さんは何所へいるかわからない』と、敵意を持ったように、又懐し相に聞く。
兄貴『わかるものか。』
お花『で、今でも矢張可愛いと思って』
兄貴『可愛いともさ。』
お花『そんなにお前さんを苦しめた人でもかね、矢張お前さん惚れていたんだわね。』
兄貴『何の、俺を苦しめたのは嬶で無い。世間だ。左様だ。世間』
突然立上った。何と思ったか、ふらふらと歩いて入口の障子をがらりと開けた。月光が美しく流れ込んだ。
兄貴は青白い月の光を身体の半面に浴びて、裂けるような眼をして、対岸の髙橋鉄工場を睨みつけ。
『やい』と力一杯の声で怒鳴った。

（幕急に落つ）

赤毛の子

平沢紫魂

赤毛の頭の大きい女の子が、よちよち路傍で遊んでいた。時には同じ位の年の子に泣かされていた。

私は之れだけの事実を知っていた。私は其子を見ただけだ。其子に就いて考えた事は無い。それは当然の事である。其子は私の生活に尠しも関係無かったから。

所が、其子の母親は私と同じ町の生れであると云う事が偶然わかった。それが縁故となり、愛郷心が私等を結んで、私は其子の父母をして二階家を借らしめ私は其二階に住んで、食事洗濯其他の事を世話して貰う事になった。浅草へ行った帰りには、屹度菓子だの玩具だのを買って、土産に呉れる程の関係が私と其子の間に出来た。

赤毛の子はふうちゃんと呼ばれて今年五歳（いつつ）、其父親は床屋、母親は紡績の女工である。母親は其子の眠っている中に毎朝工場へ出勤した。夕暮其子が溝板をがたがた鳴らしながら、泣き出し相な顔をして待っていると、急足で帰る母親は定まってふうちゃんを抱き上げて、幾度も幾度も頬ずりしながら家の中へ入るを常とした。

昼間母親の居無いのに馴れたふうちゃんは、近所の子と遊んだり、父親が客の後に廻って、チャキチャキ其頭髪を刈っている足元で、淋しい顔をしてちらばっている毛を拾っていたりした。

『ふうちゃん、かあちゃんは』と聞くと眼をぱちぱちさせながら。

『かあちゃん、カイシャ』と、間の延びた返事をする。尠し低脳児なので普通の子よりも余程不明瞭な言葉である。時に依ると。

『ふうちゃん、かあちゃんは』聞くと、突然（いきなり）

『かあちゃん、ばかッ』と罵って、小さな手を振り上げて口を曲げどろんとした眼で睨む事がある。

去年私が帰郷した時、赤毛の子の母親の事を話したら、私の母は驚いて

『まあ左様かい、あの子はの利口な良い女の子だったがのし、可哀相に妻女（おかか）になっても紡績の女工しているかのし、生家（うち）が貧乏だすけいに、小さい時旅へ働きに行ったたって聞いていたがの、何でも生家（うち）へは音信不通だつよう』と云った。

私は東京へ帰ってから、赤毛の子の母親に私の母の言葉を話して

『お作さんは利口な良い女の子だったってね』と云って笑

うと、お作＝赤毛の子の母も薄笑して、
『でもね、尋常小学卒業する時は優等賞貰いましたわ。』
尋常小学卒業する時優等賞貰った子が、紡績の女工に売られて、惚れ合った男と世帯を持ったが、矢張工場へ出て働かねばならず、いずれ金が禍したのであろうが故郷の人人とは音信不通である。不幸な女の運命よと私は思った。
『此餓鬼は何だって馬鹿だッ』
床屋の店に貧しい百合の花の飾られた頃の晩だ、赤毛の子の父親は憎くって堪らないように我子を怒鳴りつけて、びしびしと其背中を打った。お作は急いで夫の手から我子を奪いとって。
『子供には罪が無いわよ』と、涙のたまった眼で夫を見た、それからふうちゃんを抱きしめ、其涙を拭ってやって、
『父ちゃんがかい、おおよしよし、父ちゃんはばかだねえ。』
『何の因果でこんな子が出来やがったんだろう。』
斯様父親は吐息のように云って、腕組をした。
『子供に何がわかるもんかね。ホラ赤いべいべでしょう之れはねふうちゃんのだよ』と云って、お作は絹絲のいくらか混った赤の勝った、新らしい縫いかけの布をふうちゃんに見せた、お作は其時白が鼠色になって所々破れた通い服を着ていた。
五分間の後には父親はケロリとして、笑いながら私にこんな事を云った。
『私達はもうどうせこんなやくざもんだからね、外に望みはありませんが、子供だけは人間らしくしたいと思いますさあ、それでお恥しいわけだが、之れを』と、お作を指して、『会社へやって、尠しでもまあ子供の為めにしてやろうと思っています。』
『まあ此子ったら、矢ッ張り新らしいのが好きなんだね、よしよし、早くこしらえてやろうねホホホホホホホ』と、此時お作はさも嬉しくって堪らないように声を立てて笑った。見るとしっかりと、ふうちゃんを抱きしめて、いつものように頭に頰をつけてお作は眼を閉じていた。
其慈愛の籠った顔！　私は女の美しさを其所に見出した。苦労にやつれてはいるがお作は娘時代には嘸かしと思われるような顔面である。笑うと深い笑窪が出来て、眦の長い眼、濃い地蔵眉、唯惜い事には髪の毛がふうちゃんのように赤い。
『お作さんはいい女だが、惜い事には髪の毛が赤い』私は我れ知らず斯様云った。
『まあ、お世辞を被仰って、』と、お作は笑ったが、
『髪の毛はこんなになって、ほんとに私口惜いんですよ、若い時には斯様じゃ無かったんですがね。』
『若い時には赤くない、じゃ什麼して赤くなったんだい、』と私は聞かざるを得ない。
『紡績の女工だもの当前ですわね。』

『え』と、私は不思議の眼を瞠って、
『それは又什麼したわけだ、』
『徹夜を平常しましたからね、』
『…………………………』

私ははッと思って言葉も出なかった。赤い髪、徹夜、紡績の女工、遺伝、赤毛の子、大きな頭、低脳児。赤毛の子は、不幸な運命を其母の職業からして得たのであったのだ。そして其父も母も、美しい衣類を其愚かな子に着せる事を、人間らしくする事だと思っているらしい。私は急いで二階の部屋に帰って書物を調べた。化学工場の事務員である私に、私の職業が如何に関係し、そしてそれが私の子孫に如何に影響するかを知りたい為めである。

馬を洗う

この一篇を恩師如是閑に捧ぐ

内藤辰雄

一

その一寸した女工と別れてからは、最早、他の私の心を惹くような女工は、此の工場に居なくなって了った。皆、豚のような女ばかりで埋った小工場だ。私は、時々、赤い灯の点った街、濃艶に化粧した女を眼に描いて、痴呆気になるまで其処へ入浸って見たい気分に襲われたが、貧乏な私は不自然な行為をしてじっと肉の衝動をがまんした。
「女郎というものは服装について一番神経質である、不思議にその眼は遊客の懐中や身分をまで見抜く」
斯んなことを知って居るので、軽蔑されるのが詰らないから、私はいっぺんだってKやAの誘いには乗らないのだった。
「これから、グングン雑誌に論文を書くように努めよう、

コンな社会組織を肯定すべきじゃない」と、私は心に誓った。

私等が、貧しい生活費の一部を割いて、四五人の同人で経営している其の雑誌は、K、E、といって、実に私等が階級観念を打破らんが為の生命の燃焼そのものに他ならなかった。けれども、文壇の人々は何を小癪なと言う風で、テンカラ見向きもしなかった。彼等の多くは、社会問題に触れることを怖れでもするように、詰らない駄作を許り発表した。

「欧露の人心を動乱させつつある、生活の不安や生命に対する戦慄を対岸の火災視して居られるだろうか！」

私等は陰鬱な顔をして、工場の休日に催す小さい会に集る度に、文壇に対する反抗的気勢を上げた。終りには、暗胆たる気を眉宇に帯んで、各自の工場や下宿にトボトボと帰るのであった。私等は、ハチキレンとする人間愛に立脚した人間悪への私等の反抗が、暖簾に腕押しをしているという様な事実に打突かる度に、失望と憤懣を得た。

或者は惨たる気分になって、浅草の銘酒屋あたりに惑溺した。私は一番の年長者で彼女等の生活はよく知っていた。それにほかの者よりは日給が少なかったので、どうも其処へは行く気にはなれなかった。

それに、私はほんのチョッピリだけれど、自分の周囲を愛することが、此の上なく好きな男だった。私は、先ず同じ荷造夫のKとAとから初めて、給仕、小使に及ぼした。KとAと私が作る荷物を搬んで行く馬も、其の仲間に入れてやった。

いつから会社の小使と仲好くなったか忘れたが、其の時分私は非常に小使と仲好くした。其の小使は最う爺さんと云ってもよい年齢であった。彼は、銀髪交りの頭の小さい、中脊の男であった。腰付が可くないのと、耳が遠いのが哀れであった。私はこの小使の性格に面白味を持った訳ではないし、何処が好きと云う訳でもなかった。が、彼の生にはこのさき長い月日も無いことだし、僅か煙草の一本や二本で無暗に彼を欣ばすことが出来るので、彼と仲好くすることを好んだ。私は小使に煙草を遣ってもそれはキット無駄には終らなかった。其の代りに私は小使から、他の職工が飲むことも出来ない事務所のお茶のお下りを貰った。すると又私が感激した。彼が××織物株式会社の印の法被を着て、荷造場の前を通ると、

「おい、小使さん」と、机の傍へ呼込む。労働服のポケットに手を突込んで、腰掛けた儘私がニコニコして差出す腕の先端には、必ず一本か、或は二本の煙草が握られてあった。その本数がない時には、小使は態々荷造小屋に茶瓶を携えて来て呉れた。そうしては事務員の太田に叱られた。

私は馬が荷物を持込んだり持って行ったりする度に、馬と顔をあわせることも一つの慰楽であった。馬は何時でも工場の空地に悄んぼり立った。而して桶に首を入れた。此方から其の様子を見て居ると、空地に鏡製のアーチが直ぐ

出来るのであった。
私は、フイと立上った。学校の運動会で行った障碍物競争のように、私は裏門を乗越して了った。AとKとは、事務員の誰かにめつかりはしまいかと心配して、私の出て行った方を見ていた。すると、私は一抱許りの青草を門の中に投込んで見せた。塀の上に鳥打帽子を覗けた。ダブダブの灰色のズボンを塀の肩に架けて下りた。
「畜生、又か？」というような不審な顔を仲間はした。
私は最早晩になっても女と会う必要が無くなったので、屹度野原を散歩した。私の工場の近くにはいい広野があった。各工場の終業汽笛が、夕焼空に滲入ると、広野は其の青い体の端に多くの黒と白のシミを乗せた。中心に唯一つの真白いシミを見せた。その白墨みたいなのはきまって私なのであった。
私はその女と別れてからは、そんな風にして其の一カ月許りを暮した。

それは晩夏の或る朝のことであった。其の朝も、昨日の朝と同じく、人間の暑さに対する詰らない防禦法を、冷笑するように睨付けていた。私と二人の仲間は、先端の光っている使い馴らした小金鎚を、荷造小舎の中で、無暗に上げ下げさしていた。三人の周囲には膳を並べた様な箱の行列があった。
コツン、コツン、コツン、コ、コ、コツン……。慌ただしく入乱れた小鉄鎚の音が止んだ。新参の私は、古くなった文字板とブラシュを持って彼方此方の箱の上に MARK を摺込んだ。AとKとは安煙草の煙を吐いていた。
其処からは工場の入口の一端が見えた。
ゴウオン、ゴウオン、と、魔物の唸るような声がしていた。空の明るみに比べて、其処はマア何という仄暗い穴なんだ。太陽の昇るのに逃げおくれた闇が這入り込むのに都合はよかった。工場いっぱいに厳然と構えている機械の周囲にまつわって居るのがそれだ。機械と機械の間に、時々蒼白い人間の顔が、ヒョイと浮ぶかと思うと直ぐ消えた。あとは仄暗い闇だ。長蛇に蜒った調革が、幾つも幾つも天井裏に消えて、未明に似た穴の中間に目眩しい廻転を見せている。其の辺からゴオーン、ゴーン、という物音が発生しているらしい。人間の声はチットも聞えない。
私は「朝の六時から夕の六時まで神経を摺り減らして腹一杯に疲労と飢餓を詰込んでいる職工の数は何の位居るだろうか」と考えた。中には指を機械に喰い切られたり。片腕を捥ぎ取られたりして、生血を見せることだろう。又は病気になって斃れたりする運命を握る者があることであろう！　荷造小屋の方を向いて空地の一端にパクリと口を開けた工場の入口、其処は実に悪そのものの入口であらねばならぬと私は思った。其処の眉は互に醜く詰め寄せて、其の先端には体一杯の力を集中し、二つの間隙に太い縦皺を作っていた。私は、同じい人間の或る一部、愚直で余りに善

良な或る一部が、何故に斯んな苦役を背負わねばならぬかということについて考えた。安楽椅子に悠々と腰を下して工場から来る報告を聞いている一人の人間を目に描いた。それに従属した卑屈な人間をも描いた。

「今に、見て居れ。俺達にも可能性がある！俺達は人間多数の要求を主張する！」

私は刻々として迫って来る時代の変転を思うて、或る場合には身命を賭さずには居られないであろうと、不安の境を彷徨するのであった。

暫くすると、工場の中は大分明るく成って行った。ボッボッ一人二人と事務員が見えだした。立派な服装で胡魔化していたけれど、彼等は、私等より十倍も滋養分を摂っている癖に、一人だって私等程満足な肉体を持っている者はなかった。若し私等が要求する如き、人類全体が心から労働を欣びだす時が来るとしたら、真先に同情してやらねばならぬのは彼等の群だ。現在営んでいる仕事が真人間のなすべき仕事で無いことに気が付かず、それが自分の一生の頁に汚辱の斑点をしめすことに想い到らない哀れなる人間共よ！

私はそれを見調べて居ると涙を流したくなった。猿が人間の衣装を着て歩く時の回想がマザマザと眼に映った。強いても裸体にして人間にしてやりたいが、それは私が一人の力では出来ない仕事であった。私は鼻の先でフンと笑い乍ら、いつでも一番出勤が遅い私等の係員の太田を待った。定刻より三十分、八時三十分になってもまだ来ぬので、私は小舎から飛出して見た。と、その瞳に見知らぬ女が喰付いた。

今、其の女は私の方へ徐々と歩いて来る。女は黒の事務服を着ている。洗晒した白地の浴衣の端がチョイチョイと黒い裾から現われる。少し汚れた麻の洋傘の先端が空地の石炭殼の敷詰められた中に落ちる。パチリと開いた女の賢こそうな眼が私の顔を見る。すぐに足元に落ちる。何かを思案し乍ら歩いて来るようだ。

私はこの工場に来てから初めてこんな女を見るので嬉しく且つ珍らしかった。ジット真正面から無遠慮に――こいつの心中を一目で見通してやれ――と言わぬ許りの顔をして見た。工場に私の目を惹くような女がいなかった際とて、ヒョッコリ現われた此の女に、私は自分の魂の全部を呉れて遣った。――此処を飛出して他処の工場に行こう、――と思っていた私は、其の考えを直ぐに撤廃した。其の瞬間、私は天がこの女を私に与えて呉れたのだと思った。殊に、彼女の貧しい家庭を想わせる服装を見ると、先ず念頭に置いた階級観念が薄らぐのを覚えた。私はツイ一カ月許り前に工場を退いてお嫁に行った石井という女事務員を思出した。

「石井のかわりだナ、然し石井の瞳より此の女の瞳の方が賢こい、全く、男の胸をグザと突刺す眼じゃないか。何人かの青年事務員は直ぐに彼女をマトにして了うだろう、其

の端に貧しい職工の俺も交るのか？」
私は地位の低い自分を可哀相だと思った。
私の思った通りに皆は彼女に目を着けた。
私は彼等のように上の階級という有利な武器をもって臨めなかった。彼女の好みそうな物を買って遣るだけの余裕を持って居なかった。服装や物質をもっては迚も叶わないので私は真心を込めて彼女を自分一人の心に愛した。
「若し皆が平等な生活をして居たらなァ！ 屹度、彼女は自分の方へ傾くんだが」
と私は自惚れて白熱の瞳を輝かした。
其の二、三日はどうかすると、釘を歪めて打込んだり、MARKを間違えて摺ったりする程、私は落着かなかった。然し、若しも彼女が此の工場に来なかったら、今迄のように下らない女や女郎のことでも思い出したであろうけれど、何だか私は首を延して待ち望んでいた、世界改造が実現されたような嬉しさに、女郎買なんか人間が為ることでないように思って、日を暮した。

二

その夜は、私は、珍らしくも晩くまで起きていた。其の訳は、K、E、の同人Rが、彼の論文の単行本になったものを届けて呉れたからだ。批判して見ると成程と共鳴する点が多かった。私は蚊帳の上部を破って電球を其の中に入れて、寝そべって読んでいた。
何処からともなく、竹の筒を抜けて出て来るような太い鼾が耳を打つ。鉛の感触に似た夜！ 血に肥った蚤や南京虫が手から、足腹、へとチクチク餌い廻って、機械の為にウマイ血も無くなっている皆を吸うている。
ドタン……ズ、ズ、ズ、ズウ……バタン……
ふと、斯んな異様な物音がするので、私はガバと上体を起した。魔物に襲われた恐怖を瞳に示した。私の視野に当って、死んだようなAの肉桂色の足が、フト、空に逆鉾立った。そして無意識に蒲団の上にバタンと落ちるのであった。
「此の奴夢でも見ているぞ」と、思って、寝言でも云いはしないかと聞き耳を立てていると、Kが私の足の上に彼の骨ばった足を搦んだ。試みに足をもってポンと刎ねて見ると、Kはゴロリと無感覚な寝返りをして此方に幅広の背を向けた。その背中に二つの灸点が押されてある。それが此の男の宿命を呪う二つの眼だろう!? 四辺は汗と黴の臭気が魔薬みたいに不快に鼻を目懸けて浸入して来る。彼方の汚れた蚊帳の中に微かに見えている肉の大きな塊が転々と転って他の一つに合しようとした。
「ムウ、ムウ、ン、ン――ン」
其処から誰かが寝言でも云うらしい呟声が聞えた。
私は、彼等が日中は自棄クソの交った陽気な男であるこ

とを知っている。休憩時間に工場の物蔭で工女と色話をしたり、垣根で追っ駈けくらをしたり、淫猥な歌を大きな声でうたって通ったりする。それが、夜になると似ても似つかない胸くその悪くなる死骸になるのだ。ジット見ているとAが性慾の衝動を夢に見だした。……こ…………が…………る。…………て浅間しい生物の本能をその一端に見せている。其処にはもう人間と獣の区別は無かった。

「斯んな生活が人間のするべき生活だろうか！　人間は地上の主宰者じゃないか！　ああ。これは恥辱じゃないか！」

　私は酢っぱい涙を飲んだ。私は海の底に似た真蒼な蚊帳の中に、大理石の如き、化粧した女とともに夜を日中より幸福に過す人間も居るのじゃないかと心に呟いた。そして彼等は本当の仕事を何一つして居ないじゃないか！「神は本当の仕事をしないものを寵愛する暴君だね」と、私は皮肉な格言を握ったのだった。

　私は暗い顔をしてまた打伏した。蝦蟇が物をたべる様に仄暗い電灯の下で本を見た。三十分――一時間――一時間半――夜は深更である。もう私は眠らないでは明日の仕事に困る程疲労を感じた。が、私は眠られない。

「倒れるなら倒れろ、悶え苦しみあがき死ぬ。死んだって俺の目的である人間の平等生活は実現させて見せるぞ！」

　私はヤケを起して腹に絞りだすような誓いをした。悲痛な面持ちでなおRの論説集を読んだ。私は絶間なく蚤に刺された。私は蒲団を正しくかけて居ることは出来なかった。身を転々と悶えて読んだ。

「Rの単行本が出た。グッグッしては居られない」と云う発奮のために、私は身を火のように燃やした。と、私はそれを読了すると、今まで夢のように忘れていた影像を、また眼に描くのであった。そして恋ということに関聯してNと、Nの恋した女などのことを考え耽った。

　Nは私より六つも年の若いヤット兵隊検査を不合格に終って来たばかりの男であった。が、彼は善い頭脳と、良い眼とで私の思想の申分無い先達になって呉れた。△△同盟会の全責任を、一人で背負って立った程の彼だから、又鋭る眼も他人と異って居ると私は思った。

　其の会が其の筋から解散を命ぜられると、彼は他の同志と孤立して了った。そして職工になって宣伝に努めたいと云って、十日許り前に私を訪ねて来たのだ。彼は其の時私を雑誌の上で知ったと云った。私が一見して革命思想家と肯ける丈の印象を残さずには置かなかった。Nは顔の中では一番深く眼をもって、私を思想の深みへ引張り込まずには済まさなかった。大きな池を新しい砂で埋めた程の広い額の下に、彼の奥深い眼はいつも水流にある黒耀石の如く光った。其の瞳へ普通人の四、五十人の瞳の持つ智慧を比べたって勝てる見込みは無い。体幹の矮小と少数の年歯は、天才と云うより他に私には許し様がなかった。私が何

が好きだと問うた時、彼は、
「何でも好きです、労働者でも女でも。……資本家が一番嫌いです」と微笑し乍ら云った。
「自然では？」
「自然では星が一番好きです。殊に、夏から秋に移りかけの時分の夜、星を眺めるのが一番好きです」
「星は崇高とか敬虔とかいった気分を呼起させますね」と私が合せた。

其の翌日も、翌日もNは私を訪ねて来た。私は彼と一緒に近くの工場に仕事をめつけに歩いた。

そのうちにNはスッカリ胸の中を曝け出した。恋愛問題やら友人の批評やらO氏やA氏の印象を、私の頭へ刻み付けて行った。

或る日のことである。Nは彼の初恋のことについて、私と話をしいしい帰って行った。
「僕は、その女をですね、三年の間恋し続けていました。女も僕を恋しているのです。それでも何方も胸を打開けないのです。到頭その女とは別れて了いました」
「何うしてです？　惚れたら惚れたと云やええじゃありませんか。惚れたんが事実だから仕方がない。また男が女に惚れるのは何も不思議のことァ無いじゃァありませんか、僕は惚れたら惚れたと云いますね」
「あなたは本当にそう云えますか？」
「云いますね、然し云えない場合もあります」
「……………………」
「それに僕はどうも、女も自分に惚れていることが判ると、直ぐ所有したくてならなくなるのです。僕はどうして皆が、女なら女に惚れた場合ですね、大勢の前で、――僕は君に惚れました――と云えないんだろうかと思って不思議でならんのです。人間はそうした正直な時代が来ねば駄目ですね」
「それが僕にゃ云えなかったんです」

Nは私にだいぶ饒舌らして置いて地上に眼を淋しげに落した。私はNをマジマジと見て、此の男は嘘を云う人間か、嘘を云わぬ人間か、試して見ようと思ったので、
「へえィ、あなたでも女に恋することがあるんですか、そんなに労働問題に没頭して居て――。酒は何うです、飲みますか？」と、一矢を酬いた。
「酒も飲みます。僕はコレデ一面にはなかなか貴族趣味を持って居る男ですよ。それから女郎買にも随分行っています。ええ、銀座辺りのカフエーでコーヒーを飲むが好きです。金さえあれば西洋料理店へビールを飲みに行きます、若い女の居る」
「へえィ、そうですか！　知らなかった。僕はあなたは酒や女は嫌いなんかと思った。夏の夜、西洋料理でビールを飲むのは可いですね、いつか、飲みに行きますか？」
「行きましょう。労働問題と云ったって、自分自身のソンナ要求を充す為に外ならんですからね。決して皆の為と云

っちゃいけない。自分自身の為であって同時に皆の為なんです。……なんですか？……いや……それは僕も誘惑されないことはありません。然しですね、労働運動に没頭して、生命の燃焼を見詰めることは、それ以上に私にとって幸福を覚えさせるんです。僕もこれで少し誇張する癖が有るだろうと思いますから、屹度あなたは僕に失望する時が来ますよ。僕はそんなにあなたの言うような偉い人間じゃありませんよ」

「否、其の心配はN君いりませんよ。僕は人間をそれほど偉大なものと思っていないから。人間は神様でない、人間には色んな醜悪な処もあれば、場合によっては嘘も云いますからね。然し僕よりかあなたは偉い。そりゃ本当です。僕の人格よりかあなたの人格は高い」

「僕はあなたに一つ感心していることがあるんです」と、Nは私の顔をジイッと見て云った。

「何んですか？」

「それはあなたが斯んな淋しい処に友達を離れてよく居られると云うことです。よく淋しくないと思う。その点であなたは偉いと思います」

「フフフ。僕は一寸も淋しかありません。それは一面体が強いせいでもありましょうがね。詰らない文士なんかと交って居るより、職工と貨船でも漕いでいる時の方が余ッ程愉快です。それに僕は此の辺の自然が好きなんです。僕は自然さえ見て居れば何も欲しかァありません」

私は××の電車の終点まで彼を見送って、彼に、サヨナラを云わせたのであった。

私は今Nのことを考えて居ると、今までの恋にNのような初心な心懸けがなかったので顔が赤くなった。何故自分は下司のする恋の行為に耽っていたのか!?——今度こそは誰に聞かしたって恥しからぬ恋の過程を作ろう——私は彼女の賢こそうな瞳を、読書と思索に疲れて瞳孔の散漫になった私の眼にくっつけた儘、石のように眠って了った。

三

女は私の期待していたように私を慰めては呉れなかった。私は彼女からもやはり高い所から見下された。終いになると私は彼女が憎くなった。が、自分の執着を彼女から取去ることは、容易に出来なかった。彼女の態度から推して見る、——最う駄目だ——と云う観念が持てるのに関らず、用もない事務所の方へ何度も何度も足を搬んだ。そんなことをしたって何んの効果も無いのはわかっている。然るに私は、笑う時の彼女、黙って簿記をつけている時の彼女、歩く姿、坐る姿、と、区別して、彼女のちょっとした挙動の端にも、若しや自分を察して呉れる何物かが潜んでいはしないかと気を注けた。黙って、或は、何かに小腹を立てて事務所から、彼女が出て来ようものなら、私は彼女

が男事務員の態度に腹を立てているのだと、内心ホクソ笑まずには居られなかった。誰の物にもならないのならそれが好い。――もっともだ、当然だ、お前はアイツラの淫猥な態度を許さないのだ――と、私は独合点に落ちた。ところが、直ぐその後で彼女が、
「ホ……」と、誰かに微笑をふり撒いて、何か嬉しかった印象を顔に残して出て来ると私は先刻考えたことが馬鹿らしくなって了った。彼女の穿いた草履で頭の上を踏まれるよりもこたえた。
　私は彼女が笑う時は何故か自分の係員の太田の笑顔を聯想する。それと云うのも彼女と太田がいつも笑合っていたからだ。
「あんなに太田のような根性のさもしい奴の傍に摺寄って、笑っている所を見ると、あの賢こそうな眼は物の表面許りしか動かないんだ。物の核心に喰い込む眼じゃァ無い。して見ると案外、古臭い道徳を鼻にかけたり、人間として自己省察はコレバカシも持たない女ではあるまいか？」と、彼女を疑った。
「俺は彼女を確に惘む。一歩進めば侮蔑している、申分ない女だとは思わない、もしも俺が彼女を得たとしてそれで満足するだろうか！　俺の生活が向上した際にも、否、否」
　私の理性は私にもすこし待って、モット好い女を得たら如何かと懇々と忠告するのであったけれど、私はそれに肯き乍らもいつも裏切る態度に出た。するとつねから私は肝高い男であったから耐らない。地上で二人を一番罪深い人間のように思い出す。人間は得手勝手な動物だ。で、私も彼女を一匹の毛虫に比べて、焼捨ててやりたいと呟いたりした。そして自分をも憎んで、誰か自分が偉いと肯ける人間が出て来て、醜い自分の頭のテッペンヘハンマーの一撃を与えて呉れるといいと思った。こんなに思い詰めて居る瞬間に死神が来て、
「いったい何方なんだ。死にたいのか？　生きたいのか？」と、問うたら、私はウッカリして、
「死にます、彼女と一緒なれば。――彼女をも殺して下されば」と、感情の激動に欺かれたかも解らない。
　なんべんもなんべんも私は荷造小舎の古机の上へ片肱をついて、仕事のアイマに彼女の姿を目に求めた。彼女の影像はどんなにか私を悩ました。私の鼻腔は大きく開閉して、太く、長い吐息が洩れ出た。けれどもKもAも知らなかった。
「ああ、階級！　皆は物質所有の差のために、男も女も、本当の愛を偽って了う。何故に愛に物質を附加さすのだ。而して、其の物質は何故に公平に分配されないんだ！　自然を見ればいい、彼は何人をも愛して呉れるじゃァないか！　人間にもその可能性はあるんだ。ただ多くの者が誤りたる思想の牢獄に投込まれているが為にそれは実現されないんだ」
　私はいきなり野原へ駈出して行って、真人間の叫びを上

げたかった。ある露西亜の物語の中にある主人公が罰と自責の念に堪え得られないで、地に伏して土を接吻したという心も解けた。

「神さま！」

私はＫとＡとに聞えないようにソッと神を呼んで見た。

「私は苦しくてなりません。苦しいです。私が彼女を恋したことが悪いのなら私を罰して下さい。また、彼女が私を恋させたのが悪いのでしたら、彼女をお罰しなさい。斯んなふうでは迚もやりきれません。彼女は平気だけれども私は気が狂いますよ。あなたは何が面白くって善良な青年にこんな苦痛を与えるのです？」

神は愚か人間すらもこれに答えなかった。ＫとＡとは居眠りをしているのだ。

「気が狂ったって俺が知るもんか。お前達の創り主が俺じゃァあるまいし、俺は知らない！ お前達は可能性を持っているじゃァないか。そんなに辛いのなら辛くないように仕組めばいいじゃァないか。よってたかってより好きな世の中にしたらよいじゃァないか」

と私の心の奥底で何物かが神の代言人のように答えた。

私はフイとこんな幻想を思い浮べた。

気の弱い神信心家が打続く災害と失恋の結果、狂人になって了って家を飛出した。彼は一本の物干竿を手に取って、自分の願いを叶えて呉れないと云って神でも叩落そうと、空中を振廻している。竿は空しく空気を切るのみだ。彼の髪は乱れて了った。彼の眼は金色になって了った。人間全体の苦悩が彼を突飛ばす。

私はジッとしてはいられなくなった。彼を突飛ばした責任を自分一人背負わねばならぬような気がした。私はそら怖しくなった。

「皆んな人間はそれぞれ苦痛な生活に生きているのだ。一人でも沢山の人間に、私は慰めの言葉を掛け、慰めの行為をしてやらねばならぬ」

私は涙腺のいたんで来るのを感じ乍ら、両手を労働服のポケットに突込んで

「小使のところへ行こう」と、淋しく呟いた。

小使は皺の沢山よった顔を事務員の食った食器に俯向けて、詰らない仕事だと自嘲するように水を流していた。私は、ヌッと彼の背後に突立った。ジイッと憫れ気に、その商品のレッテルのような法被の背中を見守った後、ポケットを探った。私は一本の煙草を取出して、肩越しに彼の鼻先へ覗けた。小使は吃驚して振返り、ショボショボした眼で私を見て笑った。其の眼は欣びに輝いた。私の眼も同時に輝いた。

「やァ、こりゃすみません！」

小使の凋びた唇はゆるやかに楕円形の皺を寄せた。其の中へ、フフフと私は微笑を注ぎ込んだ。

其処からは上層の長方形の大食卓越しに、事務所の半面部が私の視野に映じた。ギコチナキ机の角、椅子の角度が

太い直線を空中に描いている。洋装の事務員の眼が申合せたように一点に集る。其処に私は立っていたのだ。

そんなことには私は一寸も驚かなかった。彼等が職工には飲めまいと思って威張っている、食卓上の茶器に手をかけて、無頼漢の眼を私はギョロリと輝かした。私は可なり愉快になって来た。復讐の決行にともなう勝利感に体が、ゾクゾクした。

「こう暑くっちゃやりきれないな小使さん。年が老っちゃホネだね」

「もう斯うなっちゃァ、何をしたって駄目じゃ」

「ハッハッハッ」と、私は人もなげなる高笑を洩した。私は彼等に脅迫観念を注ぎ込んだ後、KとAとを見舞いに帰った。二人は何処かに仕事に行っていた。

私は毎夜のように彼女が住んで居るH町に夜の散歩に出掛けた。其処へ行くにはS橋を渡ってカナリ長く歩かねばならない。然しその辺の夜景色は好い。先ず、S橋は長ったらしい木橋である。土手には桜の古木が、恋に悩む私の胸の憂鬱を算で表して呉れるように、茂みを闇の中に幾つとなく拵えていた。其の両側には人家が拾い残されたように疎にある。人家の前には灯の影が落ちている。私は闇の土手に於て、彼女の影像を大事に守ることが出来た。その気分を詰らない俗歌にしたりした。時々私は其の暗闇の土手に於て、三人か五人か一団になった黒影を認めた。それはきまって工女を情婦にもった青年職工の群であった。黙ってコツコツ歩いている私へ、彼等は大きな声で肉慾を唆るような歌を投げ掛けた。一人の男がドンと一人の男の肩を突く。突かれた男は二三歩前を歩いて居る男の首っ玉へ噛付く、彼等は檻の猿の叫声を上げて、キャッキャ、ゲラゲラと笑い立てた。私をやり過しては又前と同じく歩いて騒いで行く。

私は滅多に会えぬ所で彼女に会ったなら、フイと人懐しい気分に襲われて、そっちから先に口を利いて呉れはしないかと思った。斯んなに其の町へ祈願をかけて出掛けたが、彼女は更に見当らない。一週間許りすると私は厭気がさして止めて了った。

彼女に会わずに帰る夜の感触を私は大事に胸に畳みこんでいる。S橋上に落した私の陰影は何時迄も私の忘れられない一つになった。

街を何時間となく彷徨いた私の着物には、ベトベト汗が附いていた。が、此処まで帰って来ると、S川を押渡って来る川風に直ぐ吸取られた。其処からは幾万の星が輝いて居る黝い空の肌が見えた。糊ばけで掃いたような雲が悠々と動くのが見えた。キラキラと星が敬虔そうに瞬きかけた。S川の流は永遠、無窮の神秘境に私の心を流した。斯うした自然の営む夜の進動の前には私は最も心の清い一人の青年だった。両岸の地上に点ぜられた幾つもの灯火の、

それは又何という哀れな瞬きぞ!
「人間として真に生甲斐のある生活をして行かねば嘘だ」
私は斯うした要求に身慄いした。大きく眼をクリムイた。グイグイと私の身を引緊める法悦が体感された。私は自分の今までの醜さを思うて、無駄なことばかりに動く自分の足を憎まずには居られなかった。が、其処を放れると同時に、眼で行人を見守ると同時に、私はまた会えなかった淋しさに、余計に彼女の影像を探求むる自分に相違なかった。
「モ一度引返して彷徨いたら会えるかも知れない」と、未練がましく立止った。

彼女が此の工場に初めて来たその前日、Nは私を訪れたのを最後に、私の斯んな悩みを知りもせず姿を見せては呉れなかった。チョイチョイ来て呉れていたRも、どんな用があるのか知らないが来ようとしない。私は、私が恋のために原稿を書くのを怠っているのを知っていて、私を寂しがらせようとしているのではないかと心配した。私は心中恥しく世間を憚るように此方からも会いには行かなかった。来る日も来る日も、双頬の肉の落ちるのが目に見えて来るまで、恋の圧石の下敷になって苦しんだ。

四

それは珍らしく仕事の少ない日であった。此の所ずうっと機械か人間か解らない程、廻転し続けていた私は、こうなると怠屈を感ぜずにはいられない。私はNが忘れて行った「労働者セリイヨオフ」を徒然に読んだ。が、又Aの女郎買話に釣込まれて行った。クスクス笑ったりした。Aは頭一面に大禿小禿を沢山持った男だが、そんな事は気がつかず盛んに××楼とやらへ通いつめていた。而してウマイことを云って工賃の前借をやった。最うオジサンになりかけたKは、話の腰を折って云った。
「仕事が忙しいのもナンダが、斯んなに閑散なのも何だか呆然していけねえ」
と、其の言葉が聞えでもしたように、ゴトンゴトンと地響をつたえて、門から山のように積まれた荷物の一部が覗いた。荷物車には疲果てた馬が一匹繋いである。
「あッ来た! 馬が来た!」
私は十年も別れていた父に訪ねられた程夢中になった。
「おい、馬が来たぞK君!」
私は斯う云って椅子から刎ね上って、二人の仲間には眼も呉れず、突然、小屋の釘から雨風に晒らされた麦藁帽子をひったくって、小躍りし乍ら空地に飛出した。私は馬の傍へ行った。
馬は人間が与えた苦役を大きな眼を開けて体感しているようであった。その眼の中には忍従の光りがキラキラして居った。それは私等の辿も及ばない深さにまで到達してい

た。馬は背中の菰の下に一面の埃をのせていた。痛々しく絞められた鉄具と梶棒の喰い込む所があかみを露出していた。馬は、腹へ一面ベトベトと汗を掻いて、折からの夕陽にそれを突出していた。鼻からは太い呼吸をふき出して、馬方が桶をのぞけてやると、直ぐ様それへ口を近づけた。馬はフウフウと出る自分の鼻息に、恐怖して飛上る藁をば、地上の最上の幸福を貰ったように貪り食った。

愚かなる此の動物を嗤い乍らも、私は彼の無慾なる此の態度、諦めの前には恥入りたくなった。人間の貪慾極ることよ！　人間はどうして歪み合わねば生きて行けないか？万物の霊長じゃないか！　けれども、私はまた馬をも憫まずにはいられなかった。彼は人間に自由を奪われてその代りに、ムゴタラシイ苦役を負担させられている。

「こらッ。兄弟、何故お前は人間に生れて来なかったんだ。人間は斯んなにムゴタラシクお前を苛めても、誰にも罰せられないんだ。ネイ、オイ、斯んな不届な行為が何処にある？……おまえはそんなに諦められるからいいが、私等は……」

私はジット馬の顔を見ていると、自分の分身が此処に立っているように思えた。そしてアンナ無慈悲な馬方に引廻されるのかと思うと、可哀相になって、ジットしては居られなくなった。

「私が愛してやらいで、誰がこの馬を愛してやろう！」

私は汗と埃で汚れている彼を洗い清めて、サッパリさしてやろうと思って、荷造小舎にバケツを取りに戻って来た。私は荷造場の手前の仮事務所の前を通った時、彼女がもうじき帰るであろうと思って、チラと其方を見た。職工より一時間早く帰る事務員は、殆んど帰り尽していた。幾つもの空席が其処にはあった。私は其瞬間、仄暗い室に椅子と人間を間違えたりした。フト、私の眼はカットなって燃えた。白刃に小児が手をだして居るように吃驚した。何を意味するのか、彼女は自分の机でも無い他人の机に行って、他人の椅子に腰掛けて、斜めに後ろを振返っていた。其処には下村が帰り仕度をし乍ら何か彼女に話しかけていた。彼女の机の前には太田があった。クソ落着きに陥ついて、肱を三角形に帳簿へつき、ペンを斜立させて急速に動かしていた。三人の中で一人だって数字以外の物を眼に入れて、その一日を送ったことがあるであろうか!?

「アイツラは死ぬ迄一度だって、馬や犬に愛を感ずることが出来るだろうか？　チットは俺のすることを見とけ！」

私はバケツにいっぱい汲込んだ水を空地に瀉し乍ら、胸一杯の不満と激昂をもって馬に近づいた。馬より外になんにも私の視野にはなくなった。私は箒を水にひたしては馬を掃いた。水を撒りかけては、サッ、サッ、と掃いた。いつの間にか製品仕上部の窓から、蒼白い顔が二つ三つ覗いて、不思議だという風に見ていた。私は注意していて呉れるのが嬉しくなって、彼等に微笑した。

馬は、ピイーン、ピイーンと尾で空間を切り、黄昏の感

触にヒョコリ、ヒョコリ、と、耳を動かしていた。
　私は、私の愛に対する感謝の表示としか思えなかった。
「おう、おう、馬！……」
　私は心で斯う彼の名を呼んだ後、接吻してやりたくなった。私はKとAと馬方が荷物を担ぎ初めたのを一瞥したが、箒を投出したくなかった。
「文句を云われたって恐れることは無い。場合に依っては喧嘩をしてやれ。私が怠けた責任は後で負担するのだ。君等が休んでいる時に私が働いて上げれば可い。今私は私の仕事をしているのだ」
　何分かが経って行った。
　私はカラになったバケツを地上に置いてニッコリした。私はマエカケを忘れて来たことに気付いて、泡をくって、荷造小屋に駈って行った。そんな急用な場合にも私は彼女を忘れ得ないのであった。私はハッと立竦んで了った。
　一層仄暗くなった闇の中に、彼女は何かの紙片を奪われまいとして上体を屈めていた。背中で曲線を描いて、艶に力んでいた。彼女の顫いつつある肩に、太田のペンを持っている片手が載っていた。と、彼女の乳を目懸けて今まさに太田の片手が忍び込もうとしていた。二人の頬と頬とは摺合わんばかりに接近して戦慄していた。
「ヘッヘッヘッ」
　太田はまたも何かを呑み込むように笑った後、彼女から残り惜気に手を退いて、真直ぐに体を直した。私はいやたらしい太田の反歯に襲い掛かられたような気がした。彼女の巧みに束ねた束髪が薄暗い空間に真黒い円を描いているのを見ると、私は心からソット長い手を出してそれを握りにかかりそうであった。
「階級の武器をもってフザケられて居るのじゃないか！　水野、早く出てお出で。いつかの様にムットした顔をして、こらッ！　ヨウヨ！　ウ！」
　太田は私を憫むように一瞥して、向うの自分の机へ去った。すると、彼女は又小さな紙片を太田に隠して読み出した。
「誰か艶書をやったのかナ」
　此の時の直感は私の眼に失望の色を浮べた。私は神経を針の如く尖らせ、歯と歯を喰い合せて、何かに追ッ駈けられるように馬の方へ駈って行った。私の顔は蒼ばんでブルブル打慄うた。今迄は優しく虔しく恋の芽生は培われていたが、明日からはキット醜い悪魔的な嫉妬心が現れて来るだろうと思うと空恐ろしかった。私の頭の一部は非常に神経が尖っているに係わらず、或一部には大きな洞穴が出来ていた。
　それから私は片手を馬の鬣に掛けて、首を傾げて馬の顔を覗込んだ。
「おお好し！　よし！」私は独語して馬を軽くユスッタ後荷物の下に肩を持って行った。

工場の中にはもう電灯が点ぜられて居った。其処から一俵の炭を重そうに引摺って小使が出て来た。私は荷物を担いで摺れちがった。けれども、私は気難しい顔をして一瞥したのみで、助けてやらなかった。いつもは仕事を他処に見てでも搬んでやるのであったけれど、そのときは小使の面上に、太田や彼女の影像が折重っているようで不快でならなかった。

私がやっと荷物を下して荷造小屋の方へ帰りかけた時、彼女は片手に洋傘をもって、アタフタと転げ出た。女の心持後ろにデッパッタ尻の曲線を、私は馬を何間か後ろに控えて睨み付けた。

「階級観念を持つ女等は地上から消え失せろ！　もう明日から出て来るな」

私は彼女の姿の見えなくなる迄睨み付けた。彼女の影が消えたと思うと、門衛詰所に現われた一人の男があった。

「おお！　Nだ！」

私はヅカヅカと其方に駈って行った。私は胸の鼓動の可なりに高いのを知った。何んなことを挨拶したか？――ただ、私は悦しさと悲しさとで夢中になっていたので解らなかった。

「N君！　僕今馬を洗うてやっていたんですよ！」

確かに斯う云ったこと丈は今も私は憶えている。

「仕事が終いになる 迄待って いましょう」と、Nは云った。

終業汽笛が鳴ると、私はNを紹介するツイデに此の物語をして聞かそうと思って、論文集を私に呉れたRの下宿へNと並んで歩いた。

――八・九・二一――

一九一九年一一月「我等」

放浪者富蔵

宮地嘉六

一

富蔵は七月末の或る朝、東京を立って、丁度土用に入ったばかりの真夏の日に照りつけられながら、仕事衣の青服を着て草鞋ばきのみじめな姿で、東海道を辿って行った。旅費と云っては東京を立つ際に友達から一円餞別を貰ったのがあったが、静岡の市街へ著いた時は二銭銅貨が一つあった。それで何を喰べようかと考えながら静岡の市中を見て通ったが、ふと道ばたの甘酒屋を見つけたので、それを一杯だけすすり込んだ。これがいよいよ最後の二銭だと思うと名残惜しいような心細さを感じた。一杯ぐらいの甘酒では腹に少しもこたえがなかった。それに、まずい甘酒だった。彼は其朝、江尻の木賃宿で朝を喰べたきりだったのである。

丁度午後二時頃で、市中はかんかん日が照りつけていた。街の商店は大抵は褐色の日覆をかけていた。日傘をさした子守や、担い商人の影法師が疎らに、ものうげに午さがりの乾ききった町筋を黒点になって動いていた。夏の真昼の静かな小市街の趣きであった。富蔵は空腹のせいか、歩いていると眼がぼうとなって来たので、何処かでひと憩みしたかったが、神社でも見つからない限りは憩むわけには行かなかった。

製茶機械をこしらえていた鉄工場が街の所々にあった。こんな土地で心から働いて見る気はなかったが、今はそんなことを云ってもいられないと、思い切って試しに其の一つに入って行った。使って貰いたいと頼んで見た。『今此処はひまでなあ、職人を減そうかと思ってるくらいだが、お前え何処から来たんだね。』と職長らしい男は富蔵の様子を見て云った。

『東京から来たんでございますが。』と富蔵はありのままを云った。

『あっちは今忙しいだろうになあ、何でまた出て来たのだい。』

『いえ、あっちも矢張不景気なんです。』と富蔵は云ったが、実は不景気の為めに東京を出て来たのでないので、幾分気まずかった。事実は此の職長の云う通り、東京の鉄工場はそれほど不景気ではなかったのだ。一人や二人の職人は何処の工場だって使い道のないほどに不景気な時節ではないのであった。唯彼の心がけが間違っているばかりに、

何処の工場でもおいそれと易く雇ってはくれなかったし、また、彼と云う男は、雇って貰うても長続きがしなかった。東京でも三田あたりの鉄工場は大抵一度はあたって見たし、石川島造船所にも入って働いて見たが直ぐいやになってやめてしまった。と云うよりもやめさされたのである。彼は怠惰者であった。工場と云う処がつくづく彼には厭やなのであった。然し窮すれば工場に身を売り込むより他に方法のないことはあまりに分りきっていた。それでいて彼は到る処で辛抱出来ないのである。直ぐ厭や気がさすのが癖である。いやだとなると一日でも忍んで働くことが出来ない性質だった。で前後の考えもなくやめてしまう。若くはやめさされることになるのだ。今度こそはどんなに厭やな工場へでも我慢して働かねばならぬと窮した果てにはそう思うのだが、いつも結果は同じであった。で工場でなしに何処か勤め口はないかと、東京にいる間いろいろ職業を探して見た。終日万年筆でも動かして、旋風機に吹かれながら、汗臭くならないような職業が望ましかったのだが、それは無論彼の空想であった。都会は彼のような労働者にペンを持たせるほど人材に窮してはいなかったのだ。
『矢張鉄工場に働くなら関西が好い。』と彼は思った。何処へ行ったとて大した変りはないのだが、病的な飽っぽい変質性の彼はそう思うと忽ち東京にいるのが厭になった。関西にいる時分は東京で働くなら一生職工で暮しても好いと思ったほどだったが、その幻影はすっかり亡びてしまっていたのだ。
で一先東京を落ちのびる気になったもその為めであった。仲間はとめたが誰が何と云っても其の通りにせずにいられないのが彼の癖であった。
『東京では何処の工場に働いていたんだねえ君は。』と苦労人らしい職長はいろいろそんなことを訊ねた。
『石川島にいました。』と富蔵は石川島と云う工場は大嫌いであったが、こんな場合は意気地なくひとりでそう云いたくなった。少しでも名のある、大きい工場に働いていたということは田舎へ行っては幅がきくので誇らしげな気持で云うのが彼等職工の常である。
『そんなら、此の少しさきへ清水てえ工場があるから、其処へ行って見るが好い。わしがそう云ったと云ってなあ……ひょっとすると都合好く行くかも知んねえ。まあ行って見るが好い。』と職長は云った。
『ありがとうございます。』富蔵は思ったよりも親切な人だと感じた。然し此の職長だって三日も一緒にいれば俺は癪にさわって屹度喧嘩をするかも知れぬ。と思うと此まま別れるのが仕合せのような気もした。こうした最初の親切をありがたく保存する為めには此の人に使われることを避けた方が安全だと思った。彼はお辞儀をして別れた。
其処から一町ばかり行くと、矢張同じ製茶機械をこしらえている鉄工場があった。富蔵は入って行った。気づまりな随分狭ぐるしい、きたない工場であった。彼はこんな工

場で三日でも働いて見る気はしなかったが、余儀なくされた気持で職長らしい男に会った。使ってくれと頼んでいる半面には、『俺はこんな土地までわざわざ来て旅費をこしらえる位なら、東京の町工場でいやでも働いた方がましだった』と考えたりした。『どうか雇うと云ってくれなきゃ好いが……』と思った。其癖、頭をひょこひょこ彼は下げて頼んだのである。

『旋盤師は今いらないが、お前え鍛冶場のさきてでもやって見る気はないかね。さきてが出来れゃ当分やって貰って好いがな、其の方なら今手がたりねえんだ……』と工場主は云った。

『さきてでもやります。じゃ其の方でもようございますから使っていただきましょう。』と彼は云った。兎に角何かかのがれることが出来ると思ったので。

『それじゃ、まあやって見るが好い。』と工場主は早速彼を雇ってくれた。富蔵は旋盤師だったが鍛冶場の仕事はまんざら覚えがないではなかったので、久しぶりにハンマを振って見たいような気もしたのだ。其の僅かの興味が起ったのは此の場合彼の為めには仕合せであった。

主人は彼を裏の鍛冶場の方へ引っ張って行った。其処は思ったよりも広い鍛冶場で、幾つかの火床は焔を上げていた。ハンマの響きと石炭の煙と、火花に照らされた沢山の黒い顔とがごたごたして忙しげに見えた。彼の大嫌いな、それは肺にひどく害をすると云うので大嫌いな生々しい泥炭の硫黄臭い煙が渦を巻いていて、直ぐに彼の喉へ舞い込んだ。職人達は皆すっぱだかでやっていた。田舎の小鉄工場で働く職工はみえもへちまもないだけにぶざまで、ズボンはかないでお尻をむき出しに、帆木綿の前掛一つで働いているのであった。まるで修羅場のようである。火床の焔を背景にして、汗みどろになって気負いながら職人達はハンマを振っている。今まで長い旅路を歩いて来た富蔵はさすがに最初は少し気おくれがした。まごまごしている自分が見すぼらしくて所在ない感じがした。此のまごまごすることは知らない工場へ飛び込んだ場合に最もいけないことだ。直ぐ素人か半ぱ職人位に見られてしまうのである。で、彼はなるだけ気を落ち著けた。

鍛冶場の職人達は、風変りの草鞋ばきの渡り者らしい、窶れた職人が一人舞い込んで来たのでそれぞれ振り向いた。其の目には軽蔑の色と、古顔らしく見せかけようとする傲慢さが宿って見えていた。渡り者と見ると、小僧までが生意気な口のききかたをしたがるものだ。

富蔵は内心思った。此処らの田舎の小っぽけな工場で働いている職人等の腕は、大抵知れたものだと云う気がした。彼は佐世保の工廠で十三の時、始めて見習職工になって、三四年鍛冶場の小僧で追い廻わされて育ったので、ハンマを振るくらいのことに大してひけを取らぬ積りだった。尤も長い間ハンマを振るようなことはなかったが、田

舎の鍛冶場で出来上ったお前達のぶざまなハンマの振り方とは違う筈だと云ったような自慢気さえも起っていた。

そうした自慢気でもなければ到底やって見る気にはなれなかったに違いない。

『おい、ちょいと、若いの、一つ叩いて貰おう……。』と大火床の前の横座(これは火作り師とも云う)が手招きした。で富蔵は直ぐあり合わせのハンマを取ってそれに応じた。

然し駄目だった。何故かと思うようにハンマは云うことを聞かなかった。それは五十里余も歩いて来て、而も空腹だったので、第一脚がふらついて其の為めに身体の方がハンマに負けて少しもきまらないのである。小僧の時分でさえ大場所では片腕でビュビュ振って見せて大人の職人と振りっくらをして負けなかったほどの、高が中っ頃のハンマが此処では、からきし思うように行かないのだ。しばらくやらないせいもあるが、振り卸すたんびに、あてびしの頭を打ちそこねて横座に気の毒で恥かしかった。横座もちょっと顔を顰めた。こいつは使えそうもないと直ぐ思ったらしい。他の大勢のさきて等まで嘲り半分に笑って、何か陰口を云い合っていた。

『あの調子じゃ今にカナシキをおっ砕いて人にけがさせらあ……。』

『しろうとだなあ。あの腰っぷりを見ろよ。』

『旋盤師だとよ……。』

『道理で……。』

あたりの奴らは聞えよがしにそんなことを云い合っていた。富蔵はすっかりてれ気味でぼうと目がくらんでしまっていた。

『チェッ、駄目だ……めんどう臭い。こんな処で鍛冶場のさきてをするよりは、乞食をしても歩いた方がましだ……。』と彼は急に気が変りかけたが、それでもまてまてと思案しいしい二時間あまり、まずいハンマを振って働いた。がとうとう投げてしまった。

『折角やらして貰いましたが、どうも長旅で疲れているもんですからうまく行きません。これでおひまを貰います。』彼は工場主へそう云った。

『そうかね、じゃ仕方がねえ、』と主人の方でも今は止めなかった。富蔵はざっと手や顔を洗って、他の職人達にもちょっと別れの挨拶をして鍛冶場を出た。皆は半ば嘲りながらも哀れむように彼の後姿を見送った。

『じゃまあ、道中を大事にしてねえ。まだ年も若えから何処へ行ったって働けねえ身体じゃねえからなあ。これは少しだけど今夜の宿賃にでもするが好い。』主人は五十銭玉を一つくれた。二時間ほど手伝った骨折り賃としては過ぎるので、彼はおし頂いて受けた。これだけあれば二日は歩けると思った。

二

彼は其の日の夕方、藤枝まで行きついた。少しでも多く歩いて置きたいので疲れを我慢して藤枝の先の小さな宿場までついた時は、もう日はすっかり暮れた。宿場の入口には川があって、橋の上には、色の黒い土地っ子らしい浴衣著の若い衆達が欄干にもたれて涼んでいた。通りかかった彼の姿をじろじろ見た。何処の国でも夏の夜の気分は同じだと云うなつかしい感じがした。

富蔵はわけもなく此の時、其れらの土地っ子の若い衆達が羨やましかった。彼等は自分の生れ故郷の涼しい橋の上で兄弟のように仲よしの友達同志と夏の夜を楽しんでいられるのだと思うと自分の身が悲しいほどうらめしいのであった、自分の故郷にも町の入口にはこうした橋があることを思い出した。自分はこうした橋の上で同じ年頃の仲よしの友達と夏の夜を楽しむことが出来たら、どんなに今幸福か知れないのにと思ったりした。此の宿場の町はずれの橋の上で自分も暫く若い衆達と涼んで見たい気がした。然し、此処は自分の故郷とは幾百里を隔てた旅の空の町の夏の夜であると思うと知らぬ旅路を行き暮れた心細さが犇々と感ぜられた。身体が疲れているせいもあるが、ひどくセンチメンタルな気持が胸にしみ出て来る。荒んだ心の奥の方に潜んでいる、生れつきの女性的な気持が物悲しい旅情を覚えさせるのであった。其の為めに橋の上に涼んでいた若い衆等にまで、わけもなく妙な不安をさえ感じた。彼等が若し気まぐれに何か悪口を浴びせはしないであろうか、

そして、少しでもそれに向って云い返したが最後、自分は袋叩きにされるであろう。と云うようなとてつもない不安、――ひとり旅の渡り者らしい臆病に帰った。

富蔵の少し先には二人づれの女の旅人が重そうに足を運んで歩いていた。二人共編笠を被っていたが、富蔵はその風つきに見覚があった。二三日前、沼津の木賃宿で一緒に泊り合せた法界屋の二人づれに違いないと思った。長い旅路を歩く間には追いついたり、追いつかれたりして、思わぬ処で一緒になるのは懐しいことだ。二人の女は脚絆をはいて、汗じみた大型の浴衣の裾を端折っている。一人はずっと年増の婆さんで、一人はまだ二十四五の女であることは沼津で見て彼は知っていた。草鞋の踵から絶えず後埃を揚げているので脚絆のふくら脛の上まで白くなっていた。何処まで行って宿を定める積りなのか、如何にも無理やりに足を運んでいるような腰つきであった。それはおかしく身体を振りながら行く。年増の方は風呂敷包みを背負っているが、若い方は月琴を背負って、其の下の腰の方に軽い風呂敷包みを巻きつけている。沼津で見た時は婆さんの方が月琴を背負っていたようであるが、何でも代りばんこにとっ替えるのらしい。婆さんの背負った包みは三味線の三つにしたものであった。富蔵は二人が行く処まで自分も行こうと心に思った。二人に追いつくのは何でもなかったが、彼は矢張後れて歩いて行った。沼津の宿では朝の立ち際に顔を見合っただけで、富蔵の方が一足先へ宿を出たの

である。其時口をきき合って置けば、今直ぐにも追いつい
て話しかけられるのだった。そして一緒に宿でも定められ
ることになればどんなに仕合せかしれないのだった。
　町はずれまで来ると、二人は軒行灯の懸っている木賃宿
の前で立ち止って相談し合う様子だった。そして年増の方
だけ家の中に入ってしまうと一人は道端に立っていた。其
の間に富蔵は追いついてしまった。法界屋の女は此の時富
蔵の姿にはじめて気づいたように編笠の中のむっちりした
顔を振り向けてなつかしげな表情をした。丸い顔が編笠の
赤い紐で括れている。富蔵もこれから先を歩く気になれな
かったので、立ち止って考える風をしたが、法界屋の方か
ら言葉をかけた。
『あんたはん、あの沼津で一緒だしたんやなあ。夙うに先
やろう思うたら……後だしたんやなあ。』とにっこりしな
がら、少しも人見知りをする風がないのが富蔵には嬉しか
った。
『え途中でまごまごしていたもんですから……』と富蔵も
淋しい笑顔で近寄って、『僕も此処らで泊りたいのですが、
此の家は泊めてくれないでしょうか。』と云って見た。
『わてらもなあ、痩せ我慢せんと藤枝の宿で泊めてもろう
たらこんなことになれしめへんのやが、ほんまにえらい目
に逢いましたんやわ。もう此処らで宿定めなんだら大分ま
た歩かんならん云いますさかい、あんたはんも一緒に此の
家に泊めて貰いまひょうやないかいな。今中へ入って掛け
合うてまんのや、待ちなはれ……。』と彼女は柔しく親切
にそう云った。
『どうかそう云うことにして貰えば幸いですが。』
　此の時、中から年増の方が出て来た。そしてこれも富蔵
を見ると人なつこそうな笑顔で『おや、あんたはん先やお
まへなんだか。沼津で一緒だしたんやなあ……。』と云っ
た。
『此の方もなあ、宿がほしいんやと……一緒に泊りまひょ
う云うてる処だんが――ほてどないだした話は。あてら泊
めて貰えるんだっかいな。』
『ああ話はついたんや――それはあんたはんもお困りだっ
しゃろ。一緒に入りまひょう。つれや云たらよろしいわ。
なあ、旅は道づれ世はなさけや……ほほほ。』と年増の方
もきさくな女であった。富蔵は思いがけない温かい人の情
にふれてほっとした。
　三人は一緒にその宿にはいった。草鞋をぬいで六畳の裏
座敷に通ったが、昔の飛脚宿で、拭きならされた柱や敷居
は、つやつやと古光を見せて、木賃宿にはもったいない程
さっぱりした家である。三人は交る代る五右衛門風呂へ入
って汗を洗い流してから、蚊やりの煙る縁側に寄って疲れ
た脚を伸べ合った。生き返ったような気持である。
『おう好え気持ち……。』年増も若い方もそう云って渋団
扇をつかいながら、ころりと腹ばいになった。月が出てい
たので縁先は明るかった。

間もなく宿のかみさんはお膳を運んで来た。三人は坐り直してめいめいのお膳についた。
『あたい、少しお酒を頂いて見ようか知らなんてな、おまはんもおやりんか。ちょっぴり頂いたら好う眠られて疲れが去るさかいなあ。』と年増は云った。
『よろしいなあ。少し飲みまほう。』と若い方も笑いながら蓮っ葉に云って同意した。
『おかみはん、お手数だすやろけど二合ほどつけておくんなはらんか。』と年増は宿のかみさんに命じた。
『はいはい。』宿のおかみは気軽に云った。
法界屋の二人の女はなかなか酒が好きらしかった。富蔵にも無理にすすめた。
『そない遠慮せんかてよろしい。心配しなはんな。ぐっとやんなはれ……きらいだっか……でも杯の持ち方がよろしいなあ、ほっほほ……。』
『あたいお酌してあげますわ。』と若い方。
二人の女達は好い気持にもう酔ってしまって、なかなかしゃべる。いろいろ富蔵に話しかけた。
『あんたはん、昨夜は何処へ泊りなはったんや。』
『江尻に泊りました。』
『ほたら、あてらと同じじゃなあ。』
『今日は静岡で道草をとったもんですから……。』
『さうだすやろう。男の足にしてはおそいわ。』
『青い服著てやはるが、あんたは、ほんまの鍛冶屋はんだっか。』と年増。
『え、機械の方です。』
『ほて東京から来なはったんだっか。』と若い方が云う。
『ええ！』
『ほて何処まで行きやはるのんだす。』と年増。
『神戸まで行こうと思うんです。』
『そんならまだまあ、随分歩かんなりまへんなあ。お国は何っちゃだす。』
『九州です。』
『まあえらい遠方から出てなはるのやなあ。九州云うたら長崎の方だっしゃろう。江戸長崎云うたらほんまに東の果てから西の果てやおまへんかいな。』と年増は富蔵の横顔をしみじみ眺めた。
『ちょっとも鍛冶屋はんのようにないわなあ。学生はん見たいな言葉つきやわ。』
『ほんまや、職工はんのようにないわ。ほて年はおいくつだす、まだまあ若いようながなあ。』
『あたいあてて見まほか、ほっほほ』と若い方も大分酔っぱらっている。それでも笑う時は手の甲を口にあてるだけが女らしくつつましい――彼女は湯からあがると薄くおしろいなど塗りつけて、髪を束ね直していた。
『まだまあ検査がやっと過ぎたばかりやろうな。背が大けえさかい一寸見ると、二十三四に見えるけど、よう顔を見てると幼ないところがあるわいな。日にやけていやはらな

んだら好え男はんやわ。濃いかっこう好え眉やなあ。男には惜しいような眉やなも。……』と年増は云った。富蔵は一寸嬉しいような恥かしいような、むずむずした気持だった。

『あなた方お二人は何処までおいでです。』富蔵も訊ねて見た。

『あてらは伊勢路へ行くのだす。あんたはんも伊勢路へ一緒に来なはらんかいな……。』

『何ぞあんたはんも芸ごとの覚えはおまへんか。あてらと一緒に法界屋になって歩いたら気楽でよろしいぜ。どないだす。ほっほほ』と若い方が云う。

『剣舞はいけますやろう。今時の若い人やさかい何ぞ芸のないことはないわ。あてらも、ほんまの法界屋でおまへんのやけど。止むに止まれぬわけがおましてなあ。ほっほほ。』と年増が云うと、若い方が横合から、

『嘘だっせ、止むに止まれぬ事情も何もおまへんね、芝居の地がたをして越後の方からずっと東京へ廻る筈のところを、前橋まで行くとなあ、一座の間に面白うないことが起って、ちりぢりになりましてなあ、そんで、あてら二人は東京見物をせんと気がすまんさかい云うてわざわざ浅草へちょっとお参りして、それから東海道を法界屋と洒落たんだす。帰る旅費はなし、これも一生の話の種やと思うて、こない姿になりましたんや。』

『わしの姿が目に立たば……の梅忠の道行きならよろしけどなあ。ほっほほ。』

二人共旅なれた気散じな女である。富蔵は何だか一緒に法界屋になって歩いて見たいような心持が動いた。

三

そうした妙な縁から其の法界屋の二人の女と熱田まで一緒に道づれになって歩いたが、途中随分世話になった。宿場宿場での宿賃も食料も二人が出してくれるので、遂には富蔵も法界屋の真似をして幾分でも途々の貰いを多くしてやらねばすまないような事になった。彼も最初の間は二人に隠して云わなかったが、実は踊り方は少しばかりやれたので、其のことを話すと、二人は非常に喜んだ。

『能ある鷹は爪かくす云うてな、どうもそうやろう思うたわいな。』

『そんなら一つ早速見せて貰いまほうか。』

『青服じゃ踊れませんよ。へへへ。』と富蔵は猫をぬいだ笑顔で云った。

『そたら、あたいの著替の浴衣を著せまほう、丈が短こうますしゃろか。何ならいっそ古著屋で安いのを買いなはらんかな。どうせ一枚のうては不自由やなあ』

『そうやなあ、古著屋ではでな柄の浴衣を一枚買うて進じまほう。その代り踊らなんだら聞かしめへんぜ、よろしか。ほほほ浜松までいんだら古著屋があるやろうから……。ほ

んまに思い切ってやって見なはれ、身を落してこそ、何やらと云いますやないか……。』
『え、やりますとも。こうなれば恥じが身を助けるわけです。大道でも客の座敷でも構いません。』と富蔵も急に調子づいてしまった。
『えらいこっちゃ。ほんまに思い切り好えわ。ほほほ。』年増も若い方も笑った。
其の晩は浜松に宿をとった。富蔵は町の古著屋で浴衣を買って貰った。それから青服は脱いでしまって、その浴衣に著替えた。
『丈も行きもよろしやないか。好え役者はんが出来たわいな。』
『ちょっと二つ三つさらえて見まほう。』と若い方は三味線をつないで、それから糸をも調子よく締めた。部屋は開け放しであったので泊り合せの旅商人や、宿のかみさんや、近所の娘子等は三味線の音を聞いて、座敷を覗きに来た。富蔵は先ず皮切りに梅にも春を踊って見た。――鍛冶屋に飛び込んでハンマを振るよりも、よっぽど此の方が確かそうで、調子よく踊った。法界屋の三味線の合の手が急所急所でぴったり足につく。
『ほんまに鍛冶屋はんには惜しいわいな。』と年増が云った。
『何ぞ軽いもの一つやんなはれ。』と引き手の若い方は云う。富蔵もすっかり調子に乗ってしまって、云われるままにかっぽれを踊った。
『こうなれば旅の恥はかきすてだ。』と彼は思った。彼の気持は全く二三年前に帰った。富蔵には案外そうした道楽じみた素質が多分に潜んでいた。呉にいる時分は土地の師匠について、ひと頃すっかり踊りにこった。端ものばかりでなく、戻り籠や千本桜や、そうした大物までやって見た。師匠に筋がよいとほめられたので、最初はそれほど身を打ち込んでやる気もなかったが、つい深入りしてしまったのだ。町には阪東派と岡村派との二つがあったので、春のおさらいには一流格の劇場を借りたりして師匠は自分の弟子等を世間に誇る為め大物ばかりやらせた。富蔵は戻り籠と千本桜の忠信をすすめられて二幕ほど出た。すっかり其の時は役者気取りで楽屋入りをした。師匠の岡村は上方芸者上りで亭主は遊び人だったが、なかなかはで好で、倅で顔見せの町廻りまでもやらせた。いよいよとなると弟子等の中には役の振り方が面白くないとか、えこひいきだとか、さんざんもめ返したが、それもやっと納まって初日は来たのであった。田舎には珍らしい踊大会と云うので人気を惹いた。小屋木戸口の一方には飾り樽が積まれて、『岡村連――』と書いてそろいの提灯が並んでとぼり、仲間や町の芸者連からは（富蔵丈へ）と書いたビラだの祝儀が贈られた。いかにも田舎の小都会のそうした催しらしく仰々しかった。初日の戻り籠では穀屋の息子が吾妻の与四郎になり、富蔵は難波の次郎作になった。大切りの千本桜では師

匠の娘が静で、忠信は床場の若い衆と富蔵とが一晩ずつ代り合ってやった。
『女の足とあなどって、思わず遅参、まっぺらまっぺら……。』
　道行きの場の忠信のせりふは、師匠仕込の成駒屋張りで富蔵はやったのだ。舞台には桜の花が咲き乱れている。『おうお待ちかねました忠信どの』で静はおもはゆげ。華やかな光りが二人の顔を白く浮き立たせた――かつらや衣裳は広島の衣裳屋からわざわざ借り寄せて、何もかも本式だった。其の為め尠なからぬ費用がかかった。おまけに仕事は二週間も休んだ。小屋代や、町廻りや俥賃や、衣裳の損料や、其の他飲み喰いしたり、何かと見えを張った其等の借金の為めに、一年半ほど富蔵は苦しんだのであった。彼はそれでこりこりした。だんだん踊りなどが馬鹿々々しくなった。白足袋をはいて畳附の駒下駄をはいて、月賦払いの光った着物をぞろりと著て、おつう芸人振って師匠の家へ出入している心持が自分ながら恥ずかしくなった。それに仕事の方の師匠からは、さんざん意見を喰わされたので、とうとう思い切ってやめてしまった。
　早熟な少年であっただけ彼は随分いろいろそうした道楽を経て来たのである。或る時は旅役者の一座に入ろうかと思った。芸者達の中に飛び込んで箱屋でも何でも構わずやって見ようかと思った。其の時分から富蔵は機械屋が嫌いであった。機械油に染って悪い空気を吸って、終日工場に閉じこまれて働くのがつくづくいやだった。
　ふりさけ見れば雲ならで、おのが羽こぼすしらはとや、雲が煙草の薄煙、輪になる梅に黄鳥も、まだ笹鳴の擦火打、石より堅い棒組に、角のとれたる息杖は、
　五枚銀杏に三つ銀杏、よい相方の戻り籠……
　そうした戻り籠の地や科白は、無趣味な工場生活をしていた其頃の富蔵にはなくてはならぬ詩であった。そうした文句を口すさむことなしには労働は更に堪えがたい苦痛だった。
　工場を怠け休みしては師匠の家に入りびたって、そうした踊りの地を聞いていると、彼は何とも云い知れぬロマンチックな詩情に浸たることが出来た。思うさま旅を歩いて放浪して見たいような、清々しい気持になった。籠舁のような気持で旅をして見たいのであった。東京へ行って昔の大江戸の名残を探ねて見たいような気持がするのだった。工場などに働くのがますます厭になった。のんきに知らない土地の名所々々を見ながら旅から旅で一生を暮して見たい気が其の時分からして仕方がなかった。そして彼は其の頃からだんだん憂欝になった。それは工場生活を厭う気持がますます嵩じた為めである――。然し旅を放浪するのは思ったほど気楽ではないことが今分ったのである。
『どう見ても舞台を踏んだ人の踊りに違いない。ほんまに隅には置かれへんわ。玄人やわあんたは。』
法界屋は云って笑った。

富蔵は浜松の町で最初皮きりをしたが、それからは宿場宿場の遊女屋などで踊った。毎日七八里平均歩いたが、貰いの多かった夜などは好い旅籠屋について、三人で飲み喰いした。もう自分ながら旅芸人らしい気持になってしまったようで、内心恥しくもあった。すいた同志の身のなり果てと間違えられて宿場の女郎衆に冷やかされるのもだんだん平気だった。
『おいらもあんな法界屋の身になりたいな……。』
『なったら好えわな。』
『なってくれる男がないわな、ほっほほ……。』
『ほっほほ……。』
『男の方が女よりも年が若いなあ。』
『それにしても、あの婆さんは何でついて歩くのかいなあ。』
『若い方の女の母親にしては、おかしいじゃないか。なあ。』
『なんぞそこにはわけがあろうわいな。ほっほほ。』
『ほっほほ。』
宿場の女郎達は格子窓の内側から通りを流して行く三人を見て聞えるように云った。そんな風に見られるのが富蔵には、いやなようで得意に似た気持さえした。
『さう見られても無理はおまへんて。ほほほほ……。』と宿についてから三人は笑った。
『それにしても、あの婆さんは何やろう云うてたわ。おまはんの母親か知らんて云うてたわいな。ほんまにすいた同志の法界屋にこんな婆さんは余計者に違いないわ。ほっほほ。』年増の方が云えば若い方も興に乗って無駄口をきくのであった。
熱田まで来て愈々別れる段になると、二人の法界屋はいろいろと富蔵に云い聞かせた。
『あんたもなあ、国にそんな妹はんがいはんのやったら、一ぺん顔を見せに行んでやんなはれや。さぞ逢いとうていやはるやろに、神戸へ著きやはったら、あっちゃでみっしり、ひと稼ぎして例え故郷には錦を飾らいでも、長いこと他国へ出ていはるのやさかい、見苦しうないだけに服装でもこさえて一ぺん行んでやんなはれ。それがよろしい。』と年増の方は云った。いろいろありがとうと富蔵も感謝した。今日別れると云う其の朝、木賃宿で朝飯をすますと、富蔵はノートを取り出して二人の横顔を写したりした。
『どれ、ちょっと見せなはれや、それがあての顔だっか。』と若い方が覗き込むと、
『これがおまはんの顔やな、よう似たるわ、こっちゃの方があての顔かいな。おほほ……器用なもんやなあ。』年増が云う。
『踊りもいけるし絵も描けるし、鍛冶屋もやれる。何でもかんでもやれるのに器用貧乏やなあ。ほほほ』と若い方が云う。
宿を立って、小一里も行ってから、三人は美濃路と伊勢

路の追分けでいよいよ別れた。
『そんなら気をつけなはれや。』と二人は云って、振り返り振り返り遠く小さくなって行った。
美濃路に入ってからも幾多の河や峠があって彼の行く手を困難にした。歩いても歩いても次から次に嶮しい山が聳えて立っていて、彼の思うような平易な路を与えようとはしなかった。彼はうんざりした。
神戸へ行きついたのはそれから六日目の夕方だった。熱田の宿で別れる時、法界屋に貰った餞別も彦根に著いた時はなくなっていたので。浴衣を宿賃の代りに宿に置いたりして矢張道中はつらい目を見た。鞋を買う銭もなくて、はだしで歩いたり古草鞋を拾ってはいたりした。寺々や、百姓家へ入って物貰い同様の真似をもした。夜は松並樹の下や、農家の厩の脇に寝た——。

四

神戸には彼の親方がいた。十四の時から機械職を仕込んで貰った師匠である。親方は長い間住んでいた呉の方を引きあげて、此年の春から神戸へ来ていた。然し彼は今、親方をたよって行く気はなかった。先ず兄でしの佐平に逢いたかった。師匠には呉にいる時分さんざん叱られたまま別れたきりなので、顔を合わせたくなかったのだ。が兄でしの佐平は師匠の家に宿しているので都合が悪かった。で翌朝まで待って造船所の門で逢うことにした。それにしては一夜を神戸の街でどうにかして明かさねばならなかった。宿賃はおろかパン一個買って喰べる金もなかった。然も此処まで来た上は、少しも心細くはないので、どんなにつらくとも明朝までの辛抱だと思った。彼はぶらぶらとあてもなく場末の町を歩きながら、家々の寝しずまるのを待った。然し町の軒下に寝るのは何となくいやで、若しか巡査に見咎められた場合の云いわけがめんどうだと考えたので海岸の方へと方向を変えた。造船所の附近に恰好な寝場所がありそうな気がするので、ぶらぶら其の方へと行くと、倉庫などの並んでいる寂びしい広場へ来た。其処には黒い物が沢山転がっているので、よく見るとそれは大きな鉄管であった。彼は此れ幸いと思って、早速其の一つに這い込もうとした。此の時、中から誰れか苦情を云った。
『おい、此処はいっぱいで、はいれやしないぜ……』弱々しいさびた声であった。富蔵はちょっと面喰らった気味で、丁度蟹が穴を間違えた時のような図で後へすざり出た。其処には彼のような年合が幾人も寝ていたのである。
『すみませんでした……。』と彼も一言云って戸惑いした。すると中の方で二三人が、くすくす笑った。それには女の声も交っているようだった。矢張り自分のような人間が、此処にも沢山いると思うと富蔵は心強い気がした。
『あっちの方にいくらも空いているのがあるぜ……』と一人が、また中からつけ足して云った。お互に顔は分らない

が其の声で親しみが通うた。
　富蔵はどうやら空いているらしい鉄管を捜し出したので、そっと中へ入った。幸い其処には莚が敷いてあった。
『こいつはうまいぞ……と。』思って、直ぐごろりと横になった。身体はくたくたに疲れていたので、何とも云えぬ好い心持だ。
　然し、ものの五分も経ったと思うと、ごそごそ一人の男が這い込んで来た。相手が出来て却って幸いだと富蔵は思った。じっとその黒い影の這い込むのを透し見た。
『チョッ、誰れだい、其処にころがってるのは、俺の寝場所にとって置いたのに……。すまねえけんど、どいてくんな。莚が敷いてある筈だ。』と其の黒い影が怒鳴った。富蔵はまたしても面喰った気味で起き上ってもじもじしながら、
『それはすみませんでした。どうも……。』とおとなしく詫びを云った。すると其の男は急にやさしくなって
『まあ好いから、そうやって寝ていな。俺あもう一つ莚を捜して来るからなあ。好いから寝ていな。』と云いながら、其の男は出て行ってしまった。が間もなく帰って来て、何処で捜し出したのか、莚をこてこて持ち込んだ。
『さあ、お前さんにもう一枚やろうよ。』と云って富蔵にも分けてくれた。
『ありがとう、どうもすみません。』
　互に顔ははっきり分らぬが、もう顔を見合う必要もないほど心の方が先に分り合った。二人は直ぐ鼾を立て、寝入ってしまった。夏の夜はすっかり更けた。時々巡査の靴音があたりに聞えては消えた。
　眼がさめた時は、もう朝日が高く昇っていた。昨夜の男はいつの間に起き出たのかいなくなっていた。富蔵はだるい身体を起して鉄管から這い出たが、あたりの光景は昨夜と全く別の場所のように変っていて、ドック人足や其の他の労働者等が右往左往していた。じりじりと照りつける朝日が海をぎらぎら光らせていた。造船所の方からは凄まじい鉄のうなりや、機械の騒音が空へどよもしていた。幾本かの大きい煙突の筒口はもくもく黒い煤煙を吐いている。彼は其の方へ歩いて行った。
　造船所の門口に来た彼は守衛に事情を話して、兄でしの佐平を呼び出して貰うことにした。就業中は面会出来ないのだが特に頼んで見た。すると守衛は彼が東京からとおしで歩いて来たと聞いて好奇心と同情とを持ったらしい。直ぐ小使を工場の方へやらせた。
『何日ぐらいかかったね。此の暑いさかりによく歩けたものだ。』と老門番は笑いながらいろいろ道中のことなど訊ねた。
　間もなく佐平はやって来た。機械油でべとべとになった仕事服の袖を高くまくり上げて帽子を横かぶりに被って、黒く汚れた手を拭き拭き門に立っている筈の富蔵を、やっと見つけた風で近づいて来て。

『いつ著いたのだ。何だ其のさまはよ。地獄から夜通しで来たのか――へっへへ。』佐平はいきなり冷かした。富蔵は嬉しくて顔がひき吊った。
『昨日の昼から何も俺は喰わない……お前そこらの店屋に顔はきかないか。何か喰わしてくれよ。』と富蔵は意気地なく喰いたいことから先に話した。佐平はそれを聞いてなおげらげら笑い出した。
『喰えよ。何でも俺がと云ったら店屋は喰わしてくれらあ。何だって歩いたりして来たんだ。昨夜著いたら何故尋ねて家へ来ねえんだ。そして昨夜はどこで泊ったのだい。』
『昨夜かい。そこの広場の鉄管に寝た。』
『馬鹿だなあ。』
『でもいきなり親方に逢うのは変だから……。』
『何故だ。何とも親方は思ってやしねえぜ。お前を此地へ呼び寄せたいと云っていたくらいだ。構わずこれから直ぐ行ってゆっくり休めよ。俺も五時にゃ帰るからよ。』
『此のざまで行けやしないや』
『好いてばよ。来て直ぐ逢わねえと却って変だぜ。』
『じゃ行こうかな……。』
　佐平は町の地図を地べたに書いたりして、親方の家を教えた。其処に他ので し等も三四人下宿しているのであった。
『皆と晩になれば逢えらあ。兎も角も前のパン屋で何か喰ってから行けよ。俺がと云えば好いから。』
『ああじゃ……。』
　就業中なので長く話していられなかったので二人は別れた。富蔵は直ぐ門の前のパン屋へ入って食パンをしこたま空腹につめ込んだ。味などはどうでも好いのであった。
　番地をたよりに町の路次を入って親方の家の木戸口まで行くと、彼はさすがに敷居の高い感じがした。家は二階家の三軒続きの長屋の端の方で、格子窓には目かくしの簾が下してあるきりで家の内には人の気配もないが、見覚えのある柱時計が入口から見えていた。彼は直ぐには入りかねて、まごまごしていたが、此の時、後方から、市場で買い物をして帰りらしい様子のおかみさんが、風呂敷包を両手に提げて、汗をかきながらやって来て、富蔵の姿を其処に見ると、うさん気に蚤取り眼で見やってから、ひどく驚いた風で、
『まあ、誰れかと思ったら、富さんじゃないの。おっほほほ。』と彼の日にやけた真黒い顔を見て先ず吹き出してしまった。富蔵はきまり悪そうに、にやにやしながら破れた麦わら帽子を脱いで挨拶をした。
『さっさとおはいりよ、なんだね、そんな処にまごまごしてさ、よそよそしい――まあ、そしていつ来たの、今……。』と問いも後や先に云って、野菜市場から提げて来た、かぼちゃや茄子の風呂敷包みを上り口に置いてから、取りあえず顔の汗を拭いた。相変らず束ね髪で、なりを構わぬ女である。

『東京からずっと来たもんですから……。』
『まあ此の暑い土用の最中に……。驚いちまうよ。お前さんにも。よくまあ来られたもんだねえ。さあ早く草鞋をぬいで井戸端で水でもかぶったが好いよ。其のまあやけた顔の色ったら……。』かみさんは さすがに 自分とこの弟子の変り果てた姿を心から憐れむように見て云った。
皆は工場へ出払っていなかったが、小さい女の子等は富蔵の顔をわざわざ井戸ばたへ見に来たりした。そして彼の黒い顔をおかしそうに覗いた。
『親方も工場ですか、身体の方は丈夫ですか。』
『あ、でもねえ矢張弱くって出たり出なかったりさ。此地へ来てから少しは丈夫になったようだけれど。』
かみさんの話では親方を始め佐平其の他の弟子等は、此処の造船所から特別の給金で買われて呼び寄せられたので、呉を引き揚げて来たとのことであった。
『お前さんだって呉にあのままいさえすれば一緒に来られたのだよ。そうすれば給金だって望み通りに取れたのにー。』などとかみさんは話した。呉にいた時分と違って一家の暮し向きも景気が好さそうであった。今の場合富蔵は給金の高い安いなどのことはさして感じなかった。兎も角どうかして仕事に就いて働けさえすれば好いと思った。それは親方が骨を折ってくれれば直ぐにも出来そうであるが、逢えば先ずひどい意見を喰わされるに定っていたので、逢うまでが気が気でない。

『お前さんお腹が空いているだろうから何にもないけれどお喰べ。また晩には何かこしらえましょうよ。』とおかみさんは、やっこ豆腐を買いに行ったりして、お膳ごしらえをしてくれた。彼は今し方食パンを喰べたばかりであるが云われるままにお膳についた。長い道中を喰うや喰わずで来たので自分ながら恥かしいほど喰い意地が強くなってしまっていたのだ。それに、お膳の上のやっこ豆腐を見ると、美濃の大垣へんを通った時のことが思い出されてたまらなかった。どこの茶店でも湧き出る吹き井の溜め桶の中の、水晶のような冷たい清水に絹こしや白滝そうめんを沈ませて売っていた。一生の願いだと云って茶店の主人に泣きついてその絹こしとそうめんを一口だけ喰べさせて貰いたいと思った。彼は今、その時のことを思い出すと、やっこ豆腐に特別の味を覚えて腹いっぱい喰べた。
こうして落ち著いて来たと云うと、昨日まで長い道中を歩いて東京から神戸へ著いたことが自分ながら夢のようでもあった。法界屋二人の情も夢のように淡く思い出された。よくも歩いて来られたと我れながら今更に感じた。
『お前さんは歩いて来たと云うが途々宿なんかどうしたの。少しぐらいはお金がなくちゃ来られやしないだろう。』かみさんは云った。
『え、東京を出る時は一円ばかりありましたが、静岡まで来るとなくなったんですよ。』
『一円ぐらいのお金でよくまあ思い立ってこられたもの

だ。で静岡からこっちはどうして来たのだえ。』
『静岡から此っちですか……。』富蔵の話はそこでちょっと詰った。

五

富蔵も佐平も須山親方がまだ佐世保の工廠にいた時分の弟子であった。親方には随分弟子が多かった。然し今はみんなちりぢりになってしまっていた。親方は佐世保の機械工場で長年勤めていたが、自分の立ち場が面白くないので三四年前呉の方へ来た。それから間もなく富蔵や佐平や其の他の弟子等も、親方の後を慕うて呉へやって来たのであるが、弟子等が想像して来た程に親方の境遇は呉ではよくなかった。それに親方は呉に来てからひどく身体が弱りかけて、工場の方は休みがちであった。其の為め一家のくらし向きも弟子等の目にはいたましいほどだった。もともと横須賀の工廠の出来たてからの古い職工なので上長の引き立てさえあったら好い地位に昇ることも出来たのだが、生一本で短慮なのが禍して、到る所の工場で調和が出来ず不遇だった。同じ年代の者はどんどん上長に取り入って、洋行をさせられたり、帰って来ると技師になったりした。横須賀の工廠から佐世保へ廻わったのも、仲間にどんどん追い越された不愉快からであった。然し佐世保でも同じようなそうした不愉快があって遂に居たたまらずに呉へやって来た。然し呉へ来てから一層親方の境遇は落目になってしまった。弟子等は親方をたよって来ながら却って親方からたよられるようなことになってしまった。弟子等は皆腕達者だったので、そのおかげで、須山の弟子、と云う評判で不遇ながらに親方は肩身は広かったようでもある。

然し親方の身体は其の頃全く使えなくなっていたので、とうとう呉の工廠をも自分から退くことになった。最初は佐世保から来た大勢の弟子をおもに賄ってやって、それによって一家のくらしを立てていた。かみさんは勝気な東京者で、昔は茶屋の仲居女もやった女だけに、そうした家業にかけては抜け目がなかった。娘のお清が丁度年頃ではあるし、其の為めに弟子等以外の下宿人もだんだん殖えて、一時はなかなか繁昌した。そうなると家中の支配者は何と云っても此のかみさんで、それにお清はかみさんの連れ子ではあり、親方の立ち場は家庭に於てもだんだんみじめで、かみさんにとっては、無用の亭主であり、娘の為めには、無用の父のようでもあった。

親方は先妻との間に出来た大きい長男や次男もいたが、どれもずぼら息子で、長男は仕立職人をしていたが図抜けた放蕩者で、其の為めかみさんの実の子でないだけに家の中の折合いが悪く、出入を禁ぜられていた。次男の鉄三は、これものんだくれの怠け者で、十年来の機械工でいながらまだひとっぱしの職人では通れず、親爺の弟子達にも恥かしいほどの下職工であった。それでぐれ出しては借金

をやりっぱなして行くえを晦まし、そしてはまた、ぬらりっとした姿で親爺に無心に来ると云うあんばいで、かみさんが第一に寄せつけなかった。親方も今は世間の手前きびしい勘当を云いつけた。親方はもともと長男仙太郎と一緒にする気で、かみさんの連れ子のお清を幼ない時分から我が子同様に育てたのであるが、そんなのらくら者と娘を添わせるほどなら……と云うかみさんの反対で内輪はひところ、もめ返えし長男もその為めに一層ぐれ出したのである。お清は瓜ざね顔のちょっとした色白の娘だった。すべてがかみさん仕込で、それに東京で生れて六つの時分まで下谷で育ったと云うので、当人は江戸っ子だと意張り返していた。若い下宿人等の間にあって、お清はそろそろ男を魅惑する術をも飲み込んだ。かみさんは、あたら娘ざかりを女中同様に扱き使うのは本意ではなかったが、下宿屋という家業が婿の選択に便利なところから、今しばらくの積りで仕方なくそうさせていた。かみさんは下宿人達の誰れもがお清に惚れていると思い込んでいた。それだけ一層下宿人達が彼女には扱い易かった、彼女は若い下宿人達に対しては如何にも母らしい調子で口をきく癖があった。すると下宿人等の誰れもが、少しでも此のかみさんにちやほやされると、自分だけが眼鏡に叶って選ばれてるもののように思った。かみさんは蔭でよくお清と二人で病み疲れている親方の悪口を吐き合った。

『あの調子で二年も三年も長曳かれちゃ、ほんとにたまりゃしない。どうにか片がついてくれなくっちゃ、私達の体の方が先へまいっちまうよ。』

『ほんとだわ……。』とお清も母親に合槌を打つのが常だった。婿を定めるにしてからが、病人の親方が邪魔だったので。

其の時分の下宿人中で最も毛色も異っていたのは佐藤と云う男と、富蔵の二人だった。佐藤は親方の弟子ではなかったが矢張機械工場の職工で、二十三四で、将来工廠の技手になる目的の男で、横須賀の海軍技手学校の試験を受ける準備の為めに熱心に夜学校などに通っていた。夜は晩くまで、英語の音読をしたり、代数の復習をやったりして有望らしく見せかけていた。職工にしては珍らしく物堅そうに、上品に行いすましていた。それに好男子でもあり、人物がおとなしいと云う所から、かみさんはやたらに此の男をほめた。その為め皆は此の男からしまいにはお清を物にされはしまいかと、めいめい不安を抱いていた。お清の方でも此の男にだけは口のきき方が異っていて、彼女は世の娘の常として、母親の見る目に間違いないと思い込んでいたのである。佐藤は工場から帰ると、かすりの着物に黒い兵児帯をしめて、すっかり学生らしい風をした。そして同じ下宿人仲間とは離れた形で交際もあまりしなかったし、他から話しかけられると、ひどく丁寧な言葉で答えた。それによって自分の人物を際立たせようとでもするように。何処までも好い児になろうとした。皆は此の男にすっかり

反感を抱いてしまった。
『何だい、生意気に高尚がって、すまし込んでやがら、職工の癖に、ふん……。』と陰で云い合った。
毎朝の食事の時は騒がしかった。細長な、低い、裁縫台が皆の共同膳で、ずらりと十人ばかりの者がそれに向い合って、あぐらや立て膝で陣取る。つるの附いたおみおつけの鍋が其上に二つほど毎朝置かれるのが定まりだった。皆は順を待ち合って自分勝手におつけを椀にすくう。なるたけ汁よりも身を多くすくいあげようとするのが癖であった。すべてがだらしがなく汁は吸い放題と云った風だ。労働者の下宿屋だけに大まかであった。杓子がてんてこ舞いの姿で、ひっきりなしに向きを変えている間に、お櫃の中は空になって底が鳴ると云う調子で、全く傍で見ていると、飯時の光景は市場のせりのようであった。然し佐藤だけは、いつも少し後れ目に坐って行儀よく上品に食事をした。
富蔵はそうした佐藤の人物とは異って、ひどくむっつりで、憂欝であった。彼の心持は誰れにも分らなかった。彼は怠け者で工場をよく欠勤して部屋に寝転んで、何か分らぬような本ばかり読んでいたので、かみさんも親方も困った怠け者だと云う風に思っていた。月末の下宿料さえ全部払えないので、親方は時々彼に意見した。
『そんなに工場を休んでばかりいてどうするんだ。なまじっか本なんか読むから仕事が厭やになるんだ。腕をきたえるのは若い間だ。今からお前がいくら学問したって、それで身を立てられやしねえ。職人が家の中で毎日ごろごろしているのが、一番見っともねえから、明日から出ろ……。』
親方は病みほうけて咳をしながら或る時はこっぴどく云った。そんな時富蔵は黙って聞いている他に仕方がなかったが或る時、唯一言彼は親方に云い過ぎをした。
『だって親方、職人なんてつまりません。腕をいくらきたえたって、一生懸命働いたって、親方のようになるんじゃつまりませんもの、私はつくづくそう思います。』と彼は思ったままを云ってしまってから、自分で言い過ぎたのに驚いた。
『何だと……生意気な……。俺がどうしたと云うんだ。え、親方のようになるんじゃつまりませんとは何のことだ。よくもそんなことを云やがった。さあ、家にゃ置かれえから何処か出て行け、もう手前のような野郎は弟子じゃねえぞ、何てものの云い方だ。俺あ皆手前の為めを思うて云ってるんだぞ……それに俺を馬鹿にしてやがる……手前のような怠け者を一日でも賄う下宿屋があるかどうか、直ぐ出て行け……。』親方は火のように怒って罵った。かみさんは詫びを云ってくれたが親方はどうしても承知しなかった。で彼は其の晩から親方の家を出て他の下宿屋へ移った。それから間もなく親方にも知らさないで、呉を立って東京へ行ってしまったのである……。
その為め彼は今更親方をたよって来る顔はないと思って

いたのだが、とうとうまたやって来たのである。彼は親方に逢ってどんな顔をされるかが不安でならなかった。

それにしてもお清がいないのはどうしたわけだろうと気になって、こうして窶れ果てた姿を彼女に見られたくもなかったが、彼女の影の見えぬのがひどく物足りなかった。

『呉の方でもうお嫁に行ったのだ。屹度そうに違いない。あの佐藤との仲はどうなったろう。』彼はそう思ったが、かみさんにそのことを訊ねるのも気がひけた。

やっこ豆腐で久しぶりに飯らしい飯を喰べてしまうと、富蔵は急に気が弛んで、長い間の旅の疲労を一時に覚え出した。

『また皆の帰るまで間があるから、涼しい三畳の方で一寝入りして身体を休めるが好いよ富さん……。』

彼はかみさんに云われるままに格子窓の所へ横になった。そして間もなく他愛もなく鼾をたてて寝入ってしまった。三四時間続けさまに寝た。かみさんは彼の腹の上に軽いかいまきをのせてやった。

六

午後五時の気笛が鳴ってしばらくすると、親方は三四人の者と工場から帰って来た。

『お客は寝てけつかる。』と皆は玄関際の三畳に寝ている富蔵の寝顔を覗いて笑いながら云った。親方も苦笑した。

佐平は工場の門で、一度富蔵と逢っていたので少しも驚かなかったが、他の者はひどく日にやけてやつれている富蔵の顔を珍らしそうに見た。

『もう起しても好いよ。随分寝たんだから……』とかみさんは云った。

富蔵はやっと起されて目をさました。何かまだ長い道中を歩いている夢でも見ていたらしく、すっかり寝ぼけて、家中を見まわしてから、やっと思いついたと云う顔で、親方を見ると早速その前へ行って挨拶を云った。

親方は案外富蔵にやさしく、いろいろ道中のことや、東京の工場の景気などを訊ねた。

『まあ若い時分のことだから、それでも好いようなものだが、お前えも少し気を入れ替えなくちゃいけねえぜ。それじゃ何処へ行ったって駄目だぞ、今時分からなまじっか学問なんかしたって、それで世の中に立てると思うのが間違いだ。それも仕事の方の役に立つ機械の方の学問なら好いけど、お前えのはわけのわからねえ方面違いの学問だからなあ。そんな方面違いの本を読んだりするからだんだん仕事の方が厭やになって、しまいにゃ、どっちつかずになってしまう。何でも一つ貫ぬけばまだ始末は好いが、お前えのように何でも生っかじりじゃ仕様がねえ。踊りをやっているかと思うと絵の方が好きになったり、絵の方を一生懸命やっているかと見れゃ文章の方を勉強する。そしてだんだん仕事の方はおるすにしてしまうんだ。これからは当分そ

んなものは思い切ってしまって、仕事の方をみっしりやるが好いぜ。今のうちだ。若えうちに腕っぷしを錬らねえと年を取ってからは追っつかねえ。いつまでも矢張半ば職人で頭は上りっこねえ……。』親方は懇々と彼に云い聞かせた。富蔵は俯向いて聞いていたが、今は『願い申します。』と富蔵は云ったがそう云っている自分の言葉が自分ながら、矢張り不安心であった。親方の世話で工場へ入るのは其の意味で彼には窮屈だった。然し今度こそは此処で一年や半年の辛抱なら出来そうにも思えた。丁度時計が十分螺旋を巻かれた時のように、今度は極度の難儀によって彼は心の螺旋が十分に巻きしめられているので、当分はどんな工場にでも辛抱が出来そうであった。それはこれまで度々経験したことだが、ひどい窮迫の後には必ず柔順な、別人の様に落ちついた辛抱強い人間に彼は帰るのである。自分でもそれを信じていたので、今度も当分はそうした気持が続きそうであった。

『ほんとに今度は辛抱しなよ富さん、家の鉄見たいに風来坊になっちゃおしまいだよ。お前さんの道楽は、酒や女にうつつをぬかすのと違ってまだまだ始末が好いけれど……。』とかみさんは継子の鉄三のことを引き合いに出した。親方はそれを聞くと不快そうな顔色をした。

　日が暮れてから佐平と富蔵は家を出て行った。富蔵は丈の短かい浴衣を借りて著て、二人は楠公神社の方へ行きながらいろいろの話をした。富蔵は東京の工場の状態や、あちらの職工の仕事の流儀の異っていることや、自分が働いていた石川島造船所のことなどを佐平に語って聞かせた。

『石川島なんて工場は旅から来た職人を虐める工場で、俺あ初めから癪にさわって仕様がなかった。第一に関西流の仕事のやりかたを頭から馬鹿にしやがって、俺あ随分手こずったよ。そんなに荒っぽくっていけねえの、だらしがねえのと文句ばかり云やがってな、それに、あそこの工場の組長や小頭なんて云う奴あ大抵あの造船所の株主のようなんだから、まるで自分の工場のような気組で機械油の使い方が乱暴だの、機械をぞんざいに使うのと、ケチな小言ばかり云あがってなあ、俺あ気が短けえからどんどん云いまくってやったんだ、すると組長や小頭の奴おっかながってあまり小言を云わなくなったが、間もなく解雇さ、それから俺あ芝の方の町工場で働いて見たんだけど、矢張面白くねえんで、とうとう東京がいやになって急に立つことにしたんだ。俺だって行く時分にゃ、労働傍ら勉強する気だったけど、行って見りゃ大学卒業生が安下宿屋の二階でごろごろして喰い詰めてる有様なんだよ、俺あそれを見てつくづく思ったよ。小学校もろくに行かねえ無学な自分が、なまじっか今頃から学問しようなんて、これゃ間違いだと思ったよ。俺あ二人ばかりそんな大学卒業生と知り合いになって、いろいろ話をして見たんだが、どれも同じようなことを云うんだ。これからは機械工業に限るから、君等はなまなか変った学問なんか志すのはよして、一生懸命機械の方

をやり給えって、そう云うんだ。奴等は英語も仏蘭西語も立派にしゃべるのに、其の方の仕事がねえんだと云うのさ、俺あそいつらを見てがっかりしたよ。矢張職工で一生暮すのが好いかなあと思ったよ。一生涯、職工するくらいなら東京なんて賃金の安い物価の高い処で暮すよりは関西の方が好いと思ったよ。矢張呉がいちばん俺達にゃ暮し好い処だ。俺あ東京へ行って見て始めて呉の有がた味が分った。娘っ子だって相手にしてくれるし、東京なんて処にいては職工じゃ女も相手にゃしないや。お話にならないよ。』

富蔵はそんなことを先ず佐平に話した、東京にいる間、労働者以外の人間の生活が常に強く富蔵の目を惹いた。皆な楽々と好い洋服を著たり帽子や金縁眼鏡をかけて、街を歩いているように思われた。いつも気取った風をして街をぶらついているようにばかり思えて一層自分の境遇が惨めに思われたのであった。佐平も久し振りで富蔵のそうした話を面白げに聞いた。二人はやがて楠公神社の裏手の氷屋へ入った。

『まあ、そんなことを、いつまでも云ってはいられねえぜ。お前が反抗すれゃ、世の中の方が先にお前えを見限ってしまうんだ。世の中はこれ以上どうにもなりっこねえから、結局お前の心持をもう少しどうかしなくちゃなんねえと、俺あ思うんだ。それじゃ東京の工場ばかりじゃねえ。何処へ行ったって勤まれやしねえ。』

『それじゃ俺はどういう風に心を入れ替えれば好いのだい。俺あ職工はもうこりこりだ。世の中がこれ以上どうにもなりっこねえなら、俺あ死んだがましだと思うぜ。』富蔵は云った。

『ふふん、だが何処へ行ったってよ、そうのんきに暮せる処はありやしねえ。これが世の中と云うもんだ。お前えはまだ世の中をよく知らねえんだよ。』と兄でしの佐平はおだやかに諭すように云った。

『よく知ったって知らねえたって苦痛は苦痛だろうじゃねえか、俺に云わせりゃ労働者に自覚がねえからだ。俺達は何故働き過ぎるほど働いて楽に生きられねえのか、お前えその理由は知っているだろうなあ。』と富蔵は佐平をつくづく見ながら云った。自分は東京にいる時分は労働問題の本も読んだし、○○主義者とも知り合いになって、世の中が間違っていることをちゃんと知っているのだぞと云いたげに富蔵は佐平を見やった。

『理由を知って、自覚したって仕方がねえのさ。お前えのように無鉄砲に飛び歩いたって仕様がねえだろう、なあ、此の世の中は気ままを云ったって通らねえんだ。気ままを通して生きて行かれりゃ偉えんだ。そりゃ偉え人間のすることよ。俺らは偉え人間の真似をしてはいられねえ。お前えだって……。』

『じゃ何もかもあきらめるのが好いのかい。』富蔵は佐平の云うことが深い意味に聞えて、ちょっと面喰った気味だった。

『自分はなるほどその偉え人間の真似をしているようでもある。偉え人間の真似をしながら一生迷い歩くのか知ら……。』と彼は思っても見たが、

『お前のように辛抱強く働くのがほんとうか。俺のようにいやいや運命に反抗する人間の心が真実か、そりゃ一概にゃ云えねえさ。』富蔵は暗に相手の分別臭いのを嘲笑うように云ったが、其の実相手のしっかりした、自分より二つ年上なのにも似ず、いかにも世の中を飲み込んでしまっているような落ち著きとが富蔵には侮りがたく思われた。

『ああ此の男の云うのがほんとうかも知れぬ、自分は世の中のことを十分弁えないで一生偉い人間の真似をして亡びて行く愚かな人間かも知れぬ……。』と心にしみじみ思った。富蔵には、丁度、東京から歩いて来た長い道中のように、人生の行路が思われるのである。長い道中には随分多くの峠があった。行く手に高い山が聳えているのを見ると、あの山の峠を越えさえすれば、今度こそは其の山の向うに平らなラクな道が続いていそうに思われて、それを楽みに足の痛みを忍んだのだ。然しそれは皆彼の空望だった、峠を越えれば、また次の山が前方に横たわっているのであった。丁度それは彼が人生に対する空想の破滅と同じであった。――到る処に苦しい労働の生活が彼を待っているのに矢張彼は楽な生活を空想しているのであった――目的地の神戸まで来るには来たが此処にも同じ生活の苦痛と過度の労働とが重苦しく横たわっているのであった。行っても行っても、其の前方には嶮しい人生の苦痛と倦怠と不満とがあるのである。それは果て知れず続いているのだった。どんなにあこがれ求めて一生放浪して歩いても、彼の気に入る処は何処にもないのであった。それは佐平の云う通りに、どんなに世の中を憎んだところで自分の精神の世界以外に何物も求めることの出来ないもののように始めて彼にも思われた。それにもかかわらず、もっと好い世の中が作られそうにばかり彼には思われるのだ。

知らない土地へ来た当分は、すべての物に対して新たな気持で接することが出来る。彼の色眼鏡が、其処には善良で親切な人間ばかりが住んでいるように思わせるのだ。人人の顔や町々の光景や土地の言葉や、物売の声や、すべてが詩であり音楽である。然しそうした幻影は一月二月と住んでいる間に亡びて消えてしまう。いやなこつこつした人間ばかりになってしまうのだ。そろそろ工場へ出るのが苦痛で、働くのが厭やになる。もうそうなれば最後だ、何処か変った土地へ行かなければ、到底そうした自分の心持を救う方法はないのであった。それが彼の病気なのだ。東へ行けば西の国の幻影の魔女がまたしてもさしまねく。

『早くおいで。そんな処にいないで、もう一度此方へお出で……。』そうした囁きが彼を誘惑する。彼の心は一も二もなくその魔女の声に誘われてしまうのだ。……

七

富蔵は親方の世話で間もなく工場へ出て働けるようになるにはなった。給金も相当に定めて貰ったし、最初の間は仕事も面白かった。その調子で行けばもう云い分はないのであったが、二月目にはもう厭気がさして来た。

『俺あもう、また此処が厭やになった。怠け休みをしては親方にすまないから、いっそ此の月の末に呉へ行く積りだ。お前承知していてくんな。』富蔵は佐平にだけ話した。

『俺あ無理に止めやしねえけんど、いくら呉だって行って直ぐ働けやしねえぜ、少しは用意して行かなきゃ寒空だあ。』と佐平は云った。

『なあに旅費さえあれゃ寒空なんか怖くも何ともないさ。あっちへ行きゃ皆がいるから。』

『そうは行かねえぞ、今年いっぱい此処で我慢しろよ。悪いことは云わねえから、来春になってからにしろよ。』

『いやとなれゃ俺あもう一日もいたくねえでなあ。』

『……』佐平もそれには多くは云わなかった。

富蔵はいやいやでやっと其の月の末まで其の造船所に働いた。彼は親方には無断で此の地を去る積りだった。然しいよいよ立つと云う日に町を歩いていると、妙に何となくもの悲しかった。自分と云う人間に対して悲しくなった。自分の気持と明るい町の色との不調和が哀愁を感ぜしめた。去る者は追わないと云ったような旅のつれなさがしみじみ感ぜられた。彼は山桐の安下駄を一足買って、それから酒場に入った。酔った気分で其まま波止場の方へ行って汽船に乗り込んだ。

彼はいろいろの旅人と共に薄ら寒い船中で一夜を明した。瀬戸内海の暗い航路を夜更けて渡る旅人は、皆一様に暗愁に澱んだ眼を閉じて、港々で吹き鳴らす汽笛の声に破られ易い夢路を辿るのだった。富蔵もうつらうつらした。琴平参詣者らしい爺婆の幾組、四国路辺から遥々奉公に出て、久し振りに親元へでも帰るらしい年若な女や、または一座の後を追うて行く田舎巡りの女優や、汽船はそうした旅客を暗い夜中の港々に揚げたり乗せたりした。そして翌朝の九時頃、呉の港へ著いた。彼は一年振りに呉の市街をなつかしく眺めた。

彼が最初此の開港場へやって来たのは、まだ十七位の時で、其の時分彼は早くも少年職工として珍らしいほどよい賃金を貰っていた。早くから旅を渡り歩くことになったのも、いやな国元の家庭の事情故であった。彼には此の呉の市街ほど思い出の多い土地はなかった。

『お前は何処へ行っても必らず此の土地を思い出さずにいられないのだ。そして遂には此の土地を慕うて必らず戻って来ずにはいられないのだ……。』

彼は去年の春、此の地を去る時、そうしたひそかな囁きを心に感じたことをふと思い出した。事実彼は今戻って来

たのである。
『此処はお前の安住を許すのだ。お前は数年間に覚えた職業を棄ててどうする。自分の身のほど知れ……。』港を囲む街はそう彼に云っているようにも見える。
『ほれ、あそこが造船所や、大きい工場やろう――。』
甲板の手摺に靠れながら、艀の来る間を彼方の海岸のどよもしに眼を向けていた青服の男は、傍なる若い女に云った。
『まあ、ほんまに大けな工場や、あの大層な煤煙……。』女も眼を上げて云った。女は自分の男を稼がせてくれる土地であることを信じて心強く思うらしかった。少し隔てて同じように手摺に靠れながら眺めていた富蔵は、此の時何気なく其の二人を見やった。男は此の汽船の船員かと思い違うような色のはげた著晒しの青服を著て、女の肩掛のようなものを頸に巻きつけて不精らしい風態をしているのである。全く晩秋に近い港の朝は寒かった。女はまだ二十歳前後の小柄であった。二人は昨夜どこか、名も知れぬ小さな途中の港から夜中に乗船した者で、昨夜はよっぴて薄暗い船室の隅っこに抱き合って何か頻りと小声で語り合っていた。落ちつく先のことが気になったのであろう、そして云うまでもなく恋仲か何かで何処からか駈落でもして来たのらしく富蔵には思われた。
然し二人は富蔵より遥かに幸福そうである。
どす黒い煤煙の渦巻き上る軍港の空に、重々しく呻き返す機関の轟きや作業の響きは、職を得たさに来た者には救いの音楽のように臓腸に頼もしく聞かれた、厭々ながらやって来た者には苛み懲らそうとする刑場のようにも見えた。兎に角、その、さかんな、物凄い、勇ましげに鳴る工場の響きは、此方が働く気になりさえすれば、明日からでも誰にでも働くことを許してくれそうである。小止みもなくエンジンの呼吸は生々と工場々々の屋根に見られた。
富蔵には、何よりも彼が以前働いていた工場の屋根がなつかしく目についた。赤黒く燻った煉瓦造りの屋根から真白いエキドスが、ポッポッとおどけるように吹き上っている。其の屋根の下では、今旧い仲間等が油にべとべとになった青服を著て、帽子を横冠りにかむって腕まくりをしてぐいぐい機械のハンドルを使っているのであろうと彼は思った。
波止場に幾台も、がた馬車が待ち構えていた。
彼は其の一台に乗った。馬車は喇叭の声を長くひいて海岸町を鈍く馳って行った。目に入るすべての光景は曽て見すてた町其の物であるが、彼にはしみじみなつかしかった。
四つ辻で馬車を下りて知った仲間の家へと、坂を登って行った。切り通しの赤土の新道路から、軍港町の全景が一目に見下される。白壁や、ペンキ塗の安建物がごたごたして無趣味な市街である。大都会から来て見ると、今更ながら、ひどく見ざめがした。然し今はどうしても一応身を落

ち著けなければならぬ土地であると思うと、強いて此の市街に対して謙遜な気持を持とうとした。此の小都市の特長、こうした新開地でなければ見出されない寛容と別様の詩趣とを見出そうと彼は心に努めた。それは先ず、東京あたりの生活に比べて、のんきであること、野菜や魚肉の豊富で安いこと、私娼や其の他の遊蕩場所の便利に出来ていること、娘っ子等の多くが早熟で手に入り易いこと、市民の大多数が労働者で低級である為めに自足の心を以て生活してゆけること、それらは此の新開地の特質であった。

仲間等は夜勤の番で、昼間は家に休んでいたので、富蔵は直ぐに逢うことが出来たが久しぶりに逢う楽しさを持って来た甲斐がないほど、彼等は案外富蔵を歓迎しなかった。富蔵は少しく張合ぬけがした。そればかりでなく、其等の仲間は一年ほど見なかった間に、惨ましい、不健康な顔色に変り果てていた。労働の過度から受けた衰弱の色が指の爪先にまで見られた。げっそりと肉の減った頸筋のあたりを見ると死の影をさえ想わせた。仲間等は富蔵に云った。

『さあ、今は工廠もひどくひまで職人をへらしているところだから、おいそれとは直ぐにには行かないぜ。それに此の筋は独り者は入れないと云う風だ。体格検査は厳重になるし、保証人もやかましくなったでなあ。』

仲間は富蔵の人物に同感を持っていなかった。それゆえ今は態よく避ける風であった。彼等は富蔵と云う人物が以前の工廠にいた時分から、技手や職工長に反抗して持てあまされ、仕事に対して不熱心であったことを思い出したのである。

更に或る仲間の一人を訪ねて見たが、矢張彼に対しては同じように快い顔をしなかった。

『君は一度国へでも帰って、それから出なおしたが好い。徴兵検査も間近だし、そうした方が好い。旅費ぐらいは皆仲間うちでどうにかならぬこともあるまい。そうするが好い。近頃は工廠に入るにも容易ではない。採用して貰うにしても、工場や職工長や志願書受附人へ賄賂を贈ってさえも、うまく行かないのだ。もう腕があったって仕事に易く取り附かれるような時勢じゃない……。』

富蔵はそれを聞いて失望した。仲間等の悲惨を憐れむ心と憐れまるる心とが一緒になって、彼はそれ以上どうしてくれと頼む気になれなかった。彼等は悲惨な勤勉家であった。富蔵の怠惰な放浪僻を心から蔑する風があった。そして彼等は自分達のような従順な勤勉な人間に富蔵がならない限りは、もう交る必要がないと云う風であった。こうした仲間に出逢って話をしていると初めの間は『お前達に俺の気持は分らないのだ……』、と云う気でいても、だんだん彼等の物がたい生活振や弱い意気地のない人生観やが尤もらしく聞えて富蔵は苦しく感じた。自分と云う人間のひどく間違っていることを見せつけられるようで心に暗い憂欝を覚えた。

実際、仲間等にとっては富蔵のような人間に一日でも滞在されるのは此の上もなく迷惑だったのだ。毎日過度な労働をも厭わず、終日終夜工場に埋もれて、一家の生活費を出来るだけきり詰めて、小金でも貯めながら、物堅く生きて行こうとしている彼等には、それは無理もなかった。

富蔵は唯一夜を、やっと気がねな思いをして仲間の家に泊めて貰った。そして其の夜の間にいろいろ考えた上、仲間が云う通り一先ず郷里へ帰る気になった。

『それが好い。一先ず国へ帰って、また出なおすが好い。徴兵検査でもすませてから、気を取り直して出て来るが好い……』仲間はそう云って、申し合いの上で、いくらかの旅費を富蔵に恵んだ。彼は態よく追われたのである。

八

郷里には三年ぶりだった。父の死んだ其の年一度帰っただけである。彼は一生故郷の親の家には帰らぬ決心で十三の時分に国を飛び出したのであった。父は度々旅先へ彼を探ねて来て、つれ帰ろうとした。然し富蔵は意地になってそれに応じなかった。

父は富蔵が幼年の時分に後妻に媚びる風があって、後妻の意を迎える為めに長男でさえある富蔵を無理やりに十歳の時から他人の家に奉公にやったりした。そうした記憶を富蔵は忘れることが出来なかった。その為め父思いの弱い気象を持ちながらも、彼は一種の憎悪と復讐の念とを父に対して棄て得なかった。

『もうこれほど俺が云うても聞きわけがないなら仕方がない。』と旅先に彼を迎えに来た父は 最後に 言葉少く云って一人寂しく帰り去った。そして、それから間もなく急病で父は死んだのである。富蔵は電報を手に取って驚いたが、其の時も国へ帰る気にはなれなかったけれども、師匠にやかましく云われて遂に帰国したが父の死に目に逢わなかった。彼は途々汽船の中でも絶えず父の顔を想像して寂びしく悲しかったけれど、郷里の家に帰り著いた時はわざと悲しくも何ともない様子をした。それがひどく叔父や叔母を驚かせた。彼の家はステーション際の小さな宿屋であったので、汽車から下りると直ぐに家が見えていた。いつになく店戸が下されて大戸の潜り戸から近所の人達が出はいりをしているさまを遠くから見た彼は、胸が重苦しくなって呼吸が詰まった。足がぶらぶらするほど悲しさがこみ上げたが、不思議にも家へ入る時は、げらげら笑顔を見せていた。これは富蔵自身も自分ながらどうしたはずみだか、後になってもはっきり分らないが、兎に角親類の人達に向って、げらげら笑いながら挨拶した。

『皆さんお世話さまでした。私はもっと早く帰る筈でございましたが、汽船の都合で思うように帰られなかったのです。へへへへ……。』と富蔵は今にも面白い旅の物語りでもやらかしそうに、皆にまんべんなくにこにこ顔で挨拶を

した。皆は不思議そうに富蔵を見た。確かに此の男は気が変になっているに相違ない。屹度悲しさのあまりに気が違って帰って来たのである……と善意に解すればそうも思われた。が叔父や叔母はその様子を見て目を怒らせていた。

『お前の帰りを待ちに待って、とうとう待ちきれず死んだ仏に対して何ごとぞ、其の笑い顔は……。』と叔父の目は云っていた。

『富さんかえ、ま……。』と叔母は後の句が涙でつまったように其のまま鼻をぐうっと云わせてわっと大声で富蔵の肩に泣きすがって、『仏はなあ、お前の、かえりを待ち疲れて死んで行ったぞよ、……。』これと彼の身体を揺ぶって泣き続けた。富蔵もそれに促がされて、始めて涙が流れ出した。

彼は自分の不孝の罪を顧みると父の死顔を覗きたくなかった。然し叔母に云われて、しょうことなしに仏の寝ている室へ行って、白布をとって一目覗いた。仏の傍には継母が眼を赤くして泣きじゃくっていた。富蔵を見ると何か恨みがましいことを云った。此の瞬間富蔵の頭にも或るものが閃めいた。

『そんなに泣いたって、お前さんは第二の亭主を持たずにいられないだろうよ。俺に恨みを云うことはない筈だ。』彼の頭にはちらとそんな思いが馳った。

次の部屋では親類の女達が白無垢の衣服をつけたり髪を結うたりしていた。そこには幼な馴染の叔父の娘もいた。白無垢姿の彼女のすんなりした姿が、悲しみに曇った富蔵の目に、ふと悩ましい情慾をそそった。

葬式がすんでから一週間目に、富蔵は再び旅へ立つと云い出した。

『何のことだ。長男に生れてそれですむのか。』と叔父はひどく彼を叱りつけた。

『これからが、めんどうなのだよ。まだまだそんなどころじゃない。これから親族会議をして、お前さんが遺産相続の手続きしたり、いろいろめんどうな問題が出て来るのだよ。』と叔母は先々のことを巨細に云い聞かせた。富蔵自身が踏み止ってしっかりしていないでは継母の親族側から勝手なことをされると云うことや、いつまでも旅の空をさまようことは思い止って、此のまま故郷に居著いて仏が安心するように早く嫁でもとるようにするがよいと云うことを、叔母はいろいろ彼の為めに云い聞かせた。然し富蔵は父の遺産がそれほどほしいとは思わなかった。唯旅の空が恋しかった。

継母側の親族と富蔵の叔父叔母其の他の近親の間には遺産分配について随分ごたごたした。富蔵は早くから家を飛び出して、好きで他国に暮していて親の死に目にも逢わなかったのだと云う風に継母側はあげつらえて、全部の遺産相続を否認した。富蔵側の親族はそれに対して相当の理由を云い張った。富蔵が十三の少年時代から家を飛び出したことには寧ろ同情すべきものがあって、他人さえもそれは

よく知っていることで、父の死に目に逢わなかったと云うことを楯に、法律上の遺産相続を否認する理由は成り立たぬと、云うことなどを街の叔父は穏かにしっかりした口調で富蔵の為めに述べた。

『俺だって、旅で暮すのは 一通りの 苦労では なかったのだ。』富蔵も一寸叔父の尻馬に乗って継母に云った。これには継母側も一本参ったようであったが、継母はそれにには負けてはいずこれだけの宿屋に仕上げて例え少々なりとも財産らしいものを作ったのも、私と良人とが精を出した為めで、其の間の苦労は富蔵には分らないのであるから、長男とは云い条、そう勝手なことをされては承知がならぬ、と勝気な女だけに目をつり上げ、口を尖がらせて自分の意見をペラペラとしゃべり立てた。こうして散々もめ返した結果、継母にも二人の娘の養育上のめんどうもあるからと云うので、遺産の七分通りを彼女の方へやることになった。そして富蔵は形がつくと、直ぐにまた呉の方へ行ってしまったのである。

其の後継母は或る伯楽と喰っ附き合って、大事なへそくりも絞られてしまった、という話を富蔵は旅にいて人伝に聞いただけである。異腹の妹の二人のこともあまり思い出して見ることもなかったが、三年ぶりに郷里の地をさして落ちて行く寂びしい身には、自分にも二人の妹があると云うことが、妙になつかしい感じが今更にした。今は其の妹等も継母の実家に戸籍を移して、表面は兄妹でなくなっていることも、旅先で取り寄せた戸籍謄本で彼には分っていた。早くから家を飛び出して、他国をほっつき廻っている彼が、如何なる悪者に変っていようも知れぬと、継母はそれを怖れて、いつの間にか無断で脱籍手続をしたものらしく、そう思うと富蔵も久し振りに帰国はしても妹等に逢うて見る気持も起らなかった。

素袷一枚著たままの姿で、手荷物一つあるではなく、旅費さえもやっとの思いで、内海通いの食事つきの汽船の三等室の隅っこに顫えながら三年ぶりの故郷のさまを想像に浮べたり、過ぎこし方を顧みたりした。

『何くそ……。俺を怖わがる奴は怖がるが好い。俺の行手は広いのだ。俺の考えは正しいのだ……。』と彼は自分自身を強く抱きしめるような心持で汽船の甲板から広やかな海原を眺めながら一人力んで見たりした。

九

故郷には其の翌日著いた。門司で汽船を乗り棄てて、それからは汽車で行った。故郷のステーション側には、今は人手に渡ってはいたが、家はもとのままで、〇〇屋と旅館の看板がかかっていた。彼はなるべく人に見られたくなかった。町にいる叔母の家はステーションから近かったが、彼は先ず在所の 叔母の方へと道をとって広い往還を辿った。乾いた田舎路が秋の日の下に白く続いていた。

在所の叔母夫婦は父の死後、富蔵の後見人として遺産の幾分を保管しているのであった。富蔵は旅先で窮して、仕送りを乞うたのも度々のことであったが叔母の亭主は一度もそれに応じてはくれなかった。

『お前には立派な職業があるのに何故そんなに窮しているのだ。親の遺産などあてにしないで、お前の力で少しは貯金でもしてさまざまの用意でもするが好い。』と其の都度後見者の叔父は手紙ではねつけた。彼はそれほどまでにして自分の父の遺産を保管してくれる叔母夫婦に理窟がましいことも云えなかったが、互に遠く隔てていることから多少其の真意に疑いを感じないでもなかった。其の金が自分の自由にさえなれば、東京にいて二年三年は好きな学問を勉強して見ることも出来たし、東海道を真夏の暑い盛りに辛い思いをして歩いたりせずにすんだのだと思うと、叔母夫婦に対して、多少の不満を彼は抱かずにいられなかった。

叔母の家は村でも相当の農家であった。ステーションから二里ほどある、山手に近い村だった。清い流れの河にそうて松並木の続く砂地の土堤を通って軈て古風な土橋を渡って土堤下の田圃道へ出ると、行く手にこんもり茂った雑木の森があって、其の間に村家が見えていた。此のあたりは里芋や大根や、柹、蜜柑の産地で、昔から城下の市場に毎朝送り出していた。見渡す限り稔りの好い稲田が黄金色をして続いていた。久しぶりにそうしたのんびりした故郷の田園を眺めると、今更に郷土のなつかしい味と、思い出深い情趣とをしんみりと感じた。真夏の日ざかりを餓えと疲労との苦悩に満ちた気持ちで東海道を通ったのはつい二月前のことである。故郷の田園の趣きの、どこやらが、憂き旅の道中の景色のそれに似ているような気持もしたが、矢張故郷の田園に違いはなかった。遠山の姿や松並木や、森やそれらは子供の時分に見馴れていたもので、やさしくゆたかな鷹揚な姿で彼に向って何等かをやさしく語っていた。

叔母一家の人達は彼の姿が入って来た時、最初の瞬間は全く見違えて悪叮寧に、おどおどしながら迎えたが、そして次の瞬間にはすっかり驚いた風だった。大勢の子供達が小かぶのような顔を富蔵に向けた。中には全く彼が何人だか知らない子もいた、彼が他国にいる間に叔母はやたらに子を生んでいたのである。それらの小さな子供の一人は、見知らぬ人間がこそこそ入って来たので怖れて逃げ出した、或る一人の子供は目を見張って、じっと見つめていた。泣きわめくのもあった。然し富蔵の姿を誰れよりも早く気づいたのは従妹であった。

『まあ……』と目を見張った。彼女は三四年見ぬ間にすっかり娘らしくなっていて縁側に近い処で糸車を廻していた。縁側には織機が置かれてあって、其処には長い間飼われている三毛猫が日向に眠っていた。蜜柑畑の方には鶏の影も見えた。あたりには堆肥の臭いがただようていた。厩の窓からは馬が物うげに顔を出していた。

叔母夫婦は野良へ出ているので姿は見えなかったが、間もなく背戸の方から老婆が出て来た。『お祖母さん富さんですよ。』と従妹が耳に口をおっつけて云ったので老婆はやっと気がついて

『富どんかい。』とたまげた調子で近づいた。それから子供に云いつけて野良の叔母へ知らせにやったりした。田舎の質素な生活より他に知らない老婆には富蔵の見すぼらしい姿は、それほど目立たぬらしかった。然し軈て野良から帰って来た叔母夫婦は、一目見て富蔵の旅先の生活のさまを早くも察したらしい。そして若しやよからぬ人間に変って帰って来たのではないかと、疑ぐり深い目を、それとなく富蔵の身辺に動かした。

叔母はさすがに女だけに、久しぶりの甥を見て涙ぐんでしまった。死んだ自分の兄の若い時分の姿を、富蔵によってそのまま見せられる気がして彼女は直ぐ涙が先になったらしい。

『お前の父親も其の通りじゃったぞよ。継母の為めに、家にいるのが、面白くのうて旅ばかり歩いていたが、私が此の家へかたづいて来てからも、旅でやつれては、ひょっくらやって来て難題ばかり私にかけたぞよ。お前までがそうなるとは思わなんだに……。』と叔母は涙ながらに云った。そう云われると富蔵は直ぐにむっとした。『私は難題を持ちかけに来たのではない。預けてある金を貰いに来たのだ。』と富蔵は腹ではそう思った。叔母の亭主もあまり好い顔を見せなかった。彼は最初から何となく気づまりであった。彼は町にいる叔母の亭主も嫌いであったが、此の叔母の亭主も心から嫌いであった。

それは富蔵がまだ幼い時分のことであるが、彼の父がステーションの側に宿屋を始めるについて大分此の家から金を借りたと云うことは、其の時分此の叔母の亭主が必ず月の始めに厳しい催促に押しかけて来たのでも富蔵は子供心に気づいていた。それゆえ此の男が手織縞の田舎臭い着物を勿体らしく著込んで、中折帽を冠って、モンペの襟巻に頤を埋めて入って来る姿を見ると其の頃富蔵は小さくなってしまった。そうした記憶がある為めに、今だに此の男には打ちとけた気持が持てないのであった。其頃父が頻りに言いわけをしている姿も、富蔵にはくやしく哀れであった。此の男は来る度に出された御馳走を甘そうに喰べてそのくせ澁い顔を見せて帰って行った。富蔵の父は自分の妹の縁家の借金が返えせない為めに、随分其の頃は悩んだ。そして此の叔母は兄の負債の為めに縁家で肩身が狭いと云っては、やって来て泣いた。気弱な少年の富蔵はそれ等の事情を子供ながらに知って堪えがたく寝ても起きても気になった。彼は奉公にやられた先でも、その事のみ気にして考えたのであった。

其の後、宿屋業がだんだん繁昌し出したので、父はやっと借金を返済したらしいが、どうにか家業が栄えて行く時分になって、富蔵の父は急に死んでしまったのである。

富蔵が好い感じを持ち得ない如く、叔母の亭主の方でも彼の人物を好まぬらしかった。叔母の亭主は富蔵から旅先の話を一通り聞いてから、自分の気に入りの長男を引き合いに出したりした。長男は去年の春、高等師範に入ったと云うことや、次男の正男は中学を今年卒業して今は兵学校に入る準備中であることなどを話した。富蔵はそう話を向けられると照れされる思いがして、ますます此の男がいやであった。

『妹等も久しぶりだで逢うてやらずば。お前の居どころを度々聞きに来よるがなあ、逢いたい逢いたい云うとるぞい。』と叔母は云った。叔母はさすがに肉親だけにやつれ果てて帰って来た彼に思いやりを持って、亭主ほどあまり彼が旅先の行いを突き込んで訊ねもしなかった。彼女はそれを心した。亭主にも心してくれるようにと目で云った。

『お墓まいりでも早くせずば、仏も気になるぞよ。仏を大事にせんと自分の身にも好えことがないものじゃぞよ。』と叔母はしみじみそう云った。

『叔母さん。私だってこれでいろいろ考えがあるんですよ。どうか今度だけはこんな姿で帰ったのを見のがして下さい。』と富蔵は亭主の姿の見えない時分に叔母に云った。自分でも自分の将来に大した自信もないのであったが、人の好い叔母にだけは、そう云って見たかった。

『お前もぐずぐずしてはおられんぞよ。あまり大きい望みを持たないでも、自分の職業を立派に磨いて、一人前の人間になっておくれでないと私も心配じゃから、学問がのうても、何か一つ出来さえすれゃ結構じゃから、』と叔母は彼の前途の大望などを殊更に問いもしなかった。

此の叔母の長男や次男が学校を卒業して立派に出世する頃には自分も何とか少しは気のきいた人間になりたいものと思った。彼は一生職工をして労働者で終る気はないのであった。非衛生的な工場に埋もれて、さんざん働き過ぎた果てに、身体を台なしにしてまでも、妻子の為めに無理な勤勉を強いられて生きる労働生活の晩年の悲惨を思うと、早く切り上げたかった。然しそれを早く切り上げるにはどうしたら好いか――彼は幾度もそれを企てては失敗したのである。そして絶望してはもとの職業に復したのである。然し直ぐにまた無謀な考えが起って、工場生活が厭わしくなるのである。どのように此の上、工場法などが改善されても、また如何に資本家工場主が職工待遇法を改めようとも、社会組織が此のままなら工場労働者は永久に被雇者的運命の下に鉄と機械と煤煙との毒瓦斯に亡びて行くであろう。彼は其の厭うべき毒瓦斯と、虐使の手から逃れたいのであった。

『自分のようなものは、もう日本の内地にいたとて駄目であろう。職工するにしても内地の工場では取る給金も知れたものだ。何処へ行ったところで大抵似たようなものだ。同じ労働するなら金のうんと取れる米国へでも行って見ようか。あちらに四五年もいればまとまった貯金が出来もし

ようし、其の傍ら本も読めるだろう――』と彼は考えたりした。従兄弟等に負けない為めには、内地にぐずぐずしていたのでは追いつくことは出来ぬと思った。更に遠い外国へでも行って見違えられるようになって帰りたいと思った。唯、遠い外国へ行くと云う其のことだけでも、親類の者等や仲間等の心を一掃し得られそうに彼は思うのだった。

そう考えると富蔵は叔母夫婦に預けてある金子の話を早く持ち出したかった。どんなことがあってもそれを受け取らねばならぬと思った。彼は毎日其の事を云い出す機会を心であせりながら待った。何故か妙に云い出しにくい感じがして、一日延びになった。

其の間に半月も過ぎてしまった。毎日ぶらぶらしているのも見苦しいと、叔母の亭主の手前もあるので、少しは馴れぬ百姓仕事の手伝いもした。小さい時分に鉄工場で大ハンマを振りなれていたので、大杵で米を搗いたりした。

叔母夫婦は既に富蔵が何を云い出す積りであるかを略ぼ感づいていた。夫婦は夜中皆が寝静まってから、其のことを相談しているのを富蔵は襖越しに聞いた。

『あれでなかなか一筋縄ではいきませんぞな。あの目の光が私は気になります。悪い者にでも此の上ならねばよいが。何とか早く話をつけた方がよいと思いますぞな、そうせんと、あれはいつまでも居据って行にません。どんなことを腹では考えているか分りゃしませんから、一通りわけを話したがようござんす。』と叔母は小声で亭主に云っていた。亭主は黙って聞いていた。

一日二日して或る晩のこと叔母の亭主の方から富蔵に直接話しかけた。例の気むづかしいねちねちした口調で考え考え亭主は云った。叔母も其のそばに坐って、吊ランプの下でボロをつづりながら聞いていた。

『それは、どの道お前のお父さんからの物を預っているじゃけえ。わしがいつまでも預かっとるわけには行かぬが、今のようなお前の有様では渡してもお前の為になるまいと思うのじゃが……亡父の遺言もあることじゃし、お前が家でも持つことになってから渡すのがわしの任務じゃでなあ、お前は相当に働きさえすれば、そんなに金に困ることはあるまいと思うが、一体どうしたわけじゃろうなあ。機械の仕事は金がよくとれるちうがどうもおかしいじゃないか。長年働いていた者が身体一つで帰って来るようじゃ意気地がない。そんなことじゃ金を渡したって、直ぐになくしてしまうに定っとる。何か道楽があるに違いないと、わしゃ見ぬいとるのじゃが……』と亭主は云った。

『別に道楽と云ってありませんが。私は少し勉強したいのです。それに実は亜米利加へ行きたいと思うので、是非其の金がほしいのです。叔父さんはまだ二十になったばかりの私に金を溜めろとばかり云わないで、大いに奮発して立派な人間になれと何故云って下さらぬのです。』と富蔵は屹度なって云った。

『それゃ奮発して立派な者になれば結構じゃが、職工なら金でも溜めるより仕方があるまいがの。今から学問を勉強するちゅうて何を勉強する気か知らんが、そんな謀叛気を起すよりは腕に覚えた仕事をおとなしくやるが好えさ。いざ病気にでもなったらどうするんじゃ。そこをよう考えるが好え。実はあの預った金も私の手もとには今ないのじゃて。然しそれゃお前だって承知してくれにゃいかん。つまりがお前のお父さんも若い時分は随分此の家に厄介をかけているのじゃでなあ。』

『それはよく子供の時分から聞いて知っております。然しこちらの借金は全部父が生きているうちにお返ししたようにも聞いていますが。』

『それゃ元金だけは返済になっちょるが、利子は一文も取りはしなんだのじゃから、利子のない貸金が世界の何処にあるものかね。』と亭主は皮肉まじりに云った。

『それにしてもお預けしてある金を勝手にしてよいと云うことはございますまい。』と富蔵は 持ち前の 感情が頭を抬げて来たので、少し目色を変えた。

『お前さんは自分の長男や次男を俺の引き合いに出して、俺を辱かしめて置きながら、父の遺産を勝手に流用して、俺の目的と奮発心を妨げるとは何のことだ。俺はそんなことでは承知しないぞ。』と富蔵は頑とした考えになった。

叔母は針の手をちょっと止めて富蔵の目色をちらと見た。そして良人にも目で何か云った。

『そう目の色を変えて云うほどのことはあるまい。此の三四年来米は不作続きじゃし、蜜柑は風でやられるし、大勢の子供は学校へやっているしするので、私の家もちょっと手もとが苦しくなったんでなあ。まあ。そう云うわけで田地や畑地を抵当にして金を貸りるのも世間態が悪いもんじゃから、つい手をつけたのじゃが、考えて見てくれるが好い。お前の父親などはもっとひどい人じゃったでなあ。』と亭主はあくどく富蔵の父のことを持ち出した。

『よろしいです。父の借金の利子はいくらほどになるか存じませんが、精算して頂きましょう。私はどうあっても今金子が入用です。旅先から病気で金が入るから送って下さいと云ってさえも、応じて貰えないような後見者を私は持つ用はないのです。』富蔵の声は少し荒立った。叔母はいよいよ不安らしい顔をしながら間に口を入れた。

『あなた。もうお止しなさろうよ。そして明日にも新田の伯父さんに相談して用立て貰うて、此の人に渡してやって下さい、私や此の人の目つきが恐ろしうござんす。どうぞ、そして下さい。此の人の風呂敷包には、それゃ恐ろしい物が入っております。私はそれを見てびっくりしました。あんな物を持って歩く人間になったかと思うと空恐しうござんす。此の人は父親の若い時分とは性質が異います。』と叔母は亭主にふるえ声で云って、それから富蔵に向い、

『もう二三日お待ちねえ。そしたらお金は皆お前さんにち

ゃんと渡すから大人しく出て行っておくれ。其の代り、もうどうぞ、二度と此処の家の敷居を跨がないように、好いかえ頼むぞよ……。』叔母は今は涙一粒流しもせずにひどく、よそよそしい落ちついた調子で云った。

『……』富蔵はそれには一言も云わずに黙っていたが、それならそれでもよいと心に思った。

『俺は長い間他国をうろついては来たが、まだこれと云う悪事を一度も働いた覚えはない。唯俺は我がままなのだ。その我がままを立てとおして来ただけだ。その為めに此のように窮したのだ。それは俺には何でもないことだ。当然のことなのだ。何もそう怖がらずともよい……。』と富蔵は叔母に対して思った。

翌朝次男の正男が蜜柑畑の向うの隠居屋に、それとなく富蔵を誘い出して云った。

『昨夜母の云ったことは気にしないようにねえ。好いかい。母は唯のあの通り善良な物がたいだけの女だから。君は君の目的の為めに思うさまやるが好い。僕はそれを祈るよ――』と従弟はしんみりと云った。それから彼は自分の描いたいろいろの水彩画などを富蔵に見せたりした。

十

それから二日経って富蔵は預けてあった金子の全部を受け取って叔母の家を去った。尤も其の全部の金額の内から百円だけは父の昔の借金の利息や数十日間、厄介になった償いとして其の場で叔母の亭主に差し出した。亭主はそれを受け取った。

『これで此の家には用はない……』と富蔵は心に思った。そして飄然と出て行った――。

それきりで彼の行方は分らなかった――十幾年過ぎてしまった今になっても郷里の人々には何の便りもないのである。ただ誰かの話では富蔵と云う名が、都会の新聞記事の中にあったのを見たと云うことであるが、それは多分同姓名の人ちがいであろうと云っていた。

一九二〇年一月「解放」

坑夫の夢

新井紀一

一

一体誰れが首唱者なのか、俺は知らない。が、坑内の空気は、この四五日と云うもの滅っ切り変って来た。今まで平静に澱んでた水が急に或る方法の下に動き出したように、退屈疲労とそれから来る或る種の平和とに永らくの間どんよりと曇っていた坑夫達の眼が、急に眠りから覚めたようにぎらぎら耀き出して来た。

坑道を掘穿し鉱石を採取する為めの鶴嘴の音と鎚の音、それらに交って時々響くダイナマイトの爆音がふっと物忘れでもしたかのように途切れることがある。と、真暗な坑内の所々には監視人の眼を掠めては、ぎらぎら光る眼が何処から集まるともなく集まって来る。そして声をひそませて耳から耳に何事か囁く。黒い影が真暗な中に黙々と動く。

「駄目々々、始めからそんな大きな事を要求したってどうして容れられるもんか」と、或る影が云う。

「何故駄目なんだ、始めからそんな小さな事を云っててどうなるいッ、いつの日が来たって此の坑から出られやしないぞ！」と、他の影が云う。

「なんでもいいからやれやれ！成るべく楽をして成るべく多く金を儲けて、早く此の地獄を抜け出す工風をしないでどうなるんだ。手前達ちゃ娑婆の風に当りたかァねえのかッ」と、第三の影が云う。声を潜ませ乍らも、自然高く大きくなって反響がぐわんぐわんと坑内に拡がってゆく。

彼等の声が途切れると其の刹那、深海の底にでも投げ込まれるような、無気味な静けさが四辺を領する。ポタリポタリ垂れる天井からの水滴が、皆の熱した昂奮を滅入らすように心の中に喰い込む。流石に熱し切った彼等も、其の瞬間ふっと自分自身を顧みる。——

俺は茲に集まってる十幾つかの黒い影を眺めやりながら、彼等が各々に自分達の過去を顧みて甘い追想に、或は苦い痛々しい思出に耽ってる事を知った。天井から落ちる水滴と、坑道の片側を流れてる小流のせせらぎとは、益々深く各々の追想を過去へ過去へと溯らせる。

——親達はまだ生きてるだろうか、あの頃まだぴんぴんしていたんだから屹度丈夫で居るに違いない。だが一体俺の事をどう思ってるだろう？心配してるだろうか、それとも（あんな野郎が何処かへ消えて失せたので清々した）と

でも思ってるだろうか？

俺の眼にはまざまざと年寄った親父の姿、お袋のしょぼしょぼした眼と曲りかけた腰、それからいつも人を責めるような眼で見る弟の悧しげな、何処か煙ったいような小面憎い顔が浮んで来た。

（そうだ、もう五年になる。……俊次も既う来年は検査だ。いい若者になったろう。俺が飛び出した時にゃまだ青っ洟を垂らした小僧っ子だったが……）俺はこう思い乍ら指を折って数えていた。胸の底からは何かしら熱い塊がもかもかと込み上げて来た。瞼が熱くなったかと思ったら、暗い坑道内は更に靄がかかって、入り乱れていた黒い影も何もみんなこの中に呑まれてしまった。

親父にも逢いたいがお袋にも逢って、せめて此の世にまだ生きて此所でこうして働いて居ると云う事位知らせてやりたいものだ。もういいお爺さんお婆さんになっただろうに……いや、それとも既う……いやいや、そんな事はない、なって耐るもんか。だが俺の為にどんなに肩身を狭くして居る事だろう。

俺の眼には五年前の秋、K川が長雨の為め氾濫して堤防が欠潰した時の、物凄い光景が描かれた。同時にSの顔が――血に染まった青醒めたSの顔がにょっきりと、渦巻いて流れるK川の濁流を背景にして現われた。そのSに対して更にもう一人他の青年が現われた。青年は手に鋤を握って顔を真青にし、唇をぶるぶる顫わしていた。凝乎と見ているど、その青年はまぎれもない俺自身であった。――俺の胸には五年前の血が甦って俺の全身を流れ始めた。其の時のSに対する憤怒、永い間Sの一家に虐げられて来た俺の家の者全体の怨みが、勃然として俺の胸に爆発した。

Sの家はA村唯一の豪農であった。俺の家はSの家の田畑を借りて、其の日其の日をどうにか送ってゆく小百姓に過ぎなかった。俺の胸に積まれたS一家に対する怨みは、決して小作米取り立ての厳酷に過ぎる一事ばかりではなかった。又期限の来たのを機会に、俺の家で借りてる土地を取り上げて、俺の家とはまるで仇敵のような間柄のYにそれを貸し与えようと云う噂を聞いた許りでもなかった。それは余り何処にも有り経れた問題であるが、其の怨恨の根本は矢張りN子と云う一人の女であった。N子は俺とは許婚で而かも従妹の間柄であった。が、分限者のSの家からN子を所望して来た時、彼女も彼女の父も其れを斥ける丈の力がなかった。水呑百姓の俺と、それから分限者のSとを天秤にかけて見る迄もなく、又人間の魂を足蹴にして約束を無視し、侮蔑する方がどれ丈の報償に値いするかを考えても見ず、目前の利益に眩惑されて俺との約束を取り消して了ったのであった。

「おい村が水浸しになろうかなるまいかと云う時に何をぼんやりしているんだい？手前のような奴がうろうろしてると却て他の者の邪魔になる許りだ。腑抜け！こんなぼんやりだからこそ、ウッフフフ……」

Sは眼に侮蔑の色を浮べながら俺を頭から嘲笑しかけたのだ。

親父の名代に一村総出の取り締りに出て来たSの傲然とした態度は、見るから胸糞が悪かった。そこへ持って来て例のN子の一件がいつも俺の胸に蟠っていたのだ。併かも俺が胸に受けた其の生々しい傷を、胸の奥深く秘して置くものをSは錐のような言葉でもって突っ衝いてほじくり出したのだ。

「なにをッ」と、叫んだ時には、俺は持ってた鋤でSの頭を蹴りつけたのだ。Sはぐうとも云わずに其処へ打っ倒れて了った。頭から頬へかけて血が泉のように湧き出して来て、見る見る真赤に染めて了った。

(態ァ見やがれ!)という汪然とした痛快味がひしゃひしゃに傷けられ、踏みづけられていた俺の欝憤をすっぽりと洗い清めて呉れた。が、俺は暫く呆然として其処に突っ立ったままSの頭から湧き出して来る血を眺めていた。其の時の頭の中はまるで空っぽであった。自分の現在犯した行為に対する反省もなければSに対する怨恨も、またN子の薄情を怒る妬心も、何もなかった。

頭を傷けられると同時に、Sの唇からは「うーむ」と云う苦痛に耐えようとする唸きが、体中の筋肉の中から絞り出すように波を打たして出て来た。Sの血にばかり気を取られていた俺の頭は、其の時茫乎として気が遠くなるのを感じた。俺はよろよろと蹣跚く足を、Sの起き上ろうとするらしい努力を双腕に籠めて(うーむ)と唸った声に、ハッとして踏みしめた。同時に、俺は悚然として自分自身の現在の地位を顧みた。我に返ったのだ

俺は本能的に前後を見廻した。切れかけた堤の上には土塊を担ぐ者、丸太を運ぶ者、また石塊を搬出する者が、刻々に増す水にばかり気を取られて息を切らしてるのが、薮影を通してチラチラと見られた。

(誰れもまだ気が付かないらしい)俺は僅かの希望を其処へつないで咄嗟に軀体を低めた。そしてするすると堤を下ると、犬のような敏捷さで人々の居る方とは反対の側に駈け出した。俺は萱株と云わず、竹薮と云わず、蔭を蔭をと択んで人々の眼を避けた。一歩駆け始めると全身に漲る恐怖は倍加して、俺を止度もなく駆けさせた。自分の走る足音は(そうではない)と打ち消す傍から、(そら追っかけて来るぞ!それ直ぐ後ろだ!)と、云う風に俺の心を脅やかした。俺は後ろを振返るのが恐しかった。息が切れて苦しくて走れなくなっても、俺の頭の中は絶えず或る眼に見えないものに追われて走っていた。

俺が一寸した木の根っこに跪いて打っ倒れたのは、もう現場から三四里は充分走った処であった。俺は(少し息を休めなければ……)と其の時思った。が、後ろを振返る事は矢張り恐しくて出来なかった。俺は人目を避けて山へ山へと走り込んだ。

「おい、目玉（俺の呼名）は居ねえのか！うんともすんとも云わねえんじゃねえか、先っきまで何んだかんだ一番強そうな事を言ってたによ。どうするんだいッ。まさか考げえる訳けじゃあるめえなァ」

過去の追想に耽っていた俺の頭は、この声にピンと現在に返った。それは宮川の声らしかった。

「莫迦を云え！誰れがそんな裏を掻くような事をするもんか。今ちっと許り考え事をしてたんだ！」俺は声に応じてこう云った。

宮川は一寸見た処では三十位にも見え、又四十にも五十にも老けて見える妙な男であった。が、平常彼がする身の上話から推測して三十五六と云う処らしかった。彼はなんでも十五六年前にT聯隊に入営して、十日と経たない内に脱営して此のA鉱山に逃げ込み、坑夫生活をしているのであった。

（もう五六年で俺も公然に娑婆の風に当れるんだ。今の内はまだうっかり外へ出られねえが、四十過ぎりゃ兵隊の籍はなくなるんだからなァ）とはいつもの彼の口癖であった。心易くなるにつれて俺もいつか彼や、其の他の者に対して自分の素状を打ち明けて了ったのだった。そして彼のそうした述懐に対してはいつも（じゃ俺と恰度似たような身の上だなァ、俺もあと五六年すりゃ大概公然の身になるんだ。十年以上経過するからなァ……だがあのSの野郎がその時死んじまったか、それとも助ったか少しも容子が分らねえんだ）と、俺も隠さず打ち明けていた。

「考え事っていつかの話のN子とか云う女っ子の事でも思い出したんだろう。馬鹿野郎、いい加減に諦めろい！今頃はもう三匹も四匹も餓鬼を放り出して……フン、いい婆さんになってらァ」

暗闇で無論解りはしなかったが、こう云った宮川の顔を想像する事が出来た。嘲笑ともつかず、励ましともつかず、こう云った後で眼を細くしてにやにや笑う宮川の顔が眼に見えるようだった。

「まァさ、お互いにこんな真暗な坑の中にもぐらみたいに一生居るのが本望じゃねえのは解り切ってらァ、なァ、だから、娑婆の風に公然に当る事の出来る時期が来るまでに少しは纏った金も握りてえじゃねえか、だがそれにゃ今のままじゃ兎ても望めねえって事よ。幾ら稼いだって此の山を一歩出りゃ通用する事の出来ねえ切符ばかり渡して、現金は一文だって呉れやしねえ。その切符をあの秋山みたいに小千両も貯めて（もし故郷へ帰りますから金に換えて下さい）と云ったって、あの通りなんだかんだご託を並べて、金も換えて呉れなけりゃ山を出しても呉れねえ、で、とどのつまりはあんな死に方になるようになっちまったんだ。」

こう云った宮川の言葉に今まで忘れていた秋山の死に態が歴然と頭に蘇って来た。それはダイナマイトが爆発する時遂い逃げ遅れてやられたので、どれが鼻だか眼だか見分

けのつかないような無惨な死に方であった。が、そんな事は日として一件や二件ない事はないのだが、秋山のような真面目に勤めてうんと金を残し山を出る時の来るのをばかり待ってた者に対しては全く気の毒であった。

（現金で渡して呉れさえすりゃ秋山だって疾うに山を抜け出したろうし、あの金に引かれていて到頭殺されちまったんだ。つまり会社が秋山を殺したようなものだ）こう思うと、この山へ入ったが最後死ぬまで出る事の出来ないようになってる制度が、もう一刻も我慢の出来ない程呪わしくなって来た。

「全く秋山も浮かばれねえだろう。此の制度はどうしても会社に迫って改革しなけりゃならねえ」

出来るだけ潜め潜めしていたつもりの声が、いつか大きくなって周囲の岩壁に反響したのに俺はハッとして首をすくめた。同時に前の方で誰れやら「叱ッ」と云う者があった。

「で、若し会社の方で鼻もひっかけねえような態度に出たらどうする？……第一それから決めてかからなけりゃ何時になったっておさまりがつかねえや」

前の方でひょいと首を突き出した黒い影があったと思ったら、それは宮川の声であった。

「そうなったらなんだ。俺はあの滅法界もねえ程の俺達の頭銭をはねて、ぶくぶく肥った飯場頭を〇〇〇ちまう。それから事務所でも何んでも片っ端から〇〇〇〇〇〇だ。俺達にゃこうこの通り筋金入りの腕があるんだ」

宮川はつづいてこう云い乍らぴしゃぴしゃ自分の腕を捲くし上げて叩いたらしかった。

「フン、俺にゃ鶴嘴があらァ」第二の黒い影が言った。

「へえ、お手前もののダイナマイトもなあ……」と第三の影が云った。

「叱ッ」——

誰れやら声をひそめて、いきり立った一群の黒い影を叱った。皆んな黙り込んで了った。再びポタンポタンと云う水滴の音が聞え始めた。小流のせせらぎがひそひそと人の囁きのように、秘めやかな調を立てて流れた。不安に充ちた空気があたり一体を取り罩めた。皆んなの胸に打ってる心臓の鼓動までが聞える程静かになった。途端、ぴしゃっぴしゃっと云うわらじを踏む足音が遂い近くに迫って来た。黒い影は一斉に立ち上った。そして足音を忍ばせて反対の坑道にすうっと散らばって了った。

二

俺は悲愴な感激に胸を顫わせ乍らそうっと山を下りつつあった。道でもないような道を択んでは嶮しい崖を辷ったり、つまずいたりし乍ら、只無暗に麓に急いだ。が、時々立ち止っては耳をすまし、また眼を四方に配った。冷たい氷の塊のような月が、峭立した山の間から覗いていた。譃

練所の煙突から絶えず吐いてる赤黄色い重そうな煙が、時時月の面を掠めては冴々としたその面を病んだように曇らして了う。いつも見る景色であるが、草という草、木という木の一本もない、赤茶けた此の附近全体の禿山は、全く荒涼たるものであった。

俺はふと足を止めて麓の谷に作られた細長い人間の町を見遣った。病んだような艶のない月光に照らし出されたその町は、まるで人の地腐に吹き出た腫物のように黒々と地上にこびりついていた。あの中には何百という人間の生命が巣喰って、お互いに責め合い喰い合いして、より優越の自分を築き上げようとして、藻掻き合ってるのだ。

(ふむ可愛想なものだ、奴等は今どんな事が此の町に持ち上るか知らずに寝ていやがるのだ。間誤々々すりゃ生命までなくなす者が出来るだろうに……)

俺は(ふむ)と云って鼻を鳴らし立ち上った。その時風の工合で精練所の煙が妖魔のように俺の面前に手をひろげ、頭から掴みかかるように襲うて来た。硫黄の匂がむーッと俺の鼻をふさいで咳入らせた。

俺はズボンのポケットに手を突込んだ。そして或る物をしっかり握りしめた。長さ四寸許りの太筆の軸のようなものの存在を確めた時、俺の胸はピリンと躍った。俺は俺に与えられた任務を思った。

(皆んな俺の敢行しようとする任務の結果を首を長くして待ってる事だろう―)俺は益々足を早めた。乳色のような幕の中にボヤッと姿を隠していた目ざす建物は、だんだん黒く大きくはっきりと姿を現わして来た。俺の胸は益々躍った。

俺は飯場頭の家が〇〇された処の光景を眼に描いた。大きな爆音と同時に、火焔がぼっと揚り、ガラガラッミシミシッと地響を打たして崩れる処の光景がまざまざと眼に見えた。人々の泣き喚くであろう、その声までが手に取って聞えるようだった。

(態ァ見やがれ、長い間……時が来たのだ。泣け!喚け!くたばる奴はくたばっちまえ!手前達が………………この胸がおさまらねえのだ。俺の任務はな、…………………………知らねえが、何千と云う俺達の仲間に取っては神様も同じなのだ。此の山…………………仲間を〇〇してやるのだ。自由と幸福とを与えてやるのだ。昨日まで〇〇〇〇〇〇〇生緩るい事はこっちからたった今願い下げにしてやらァ、時間も短縮して呉れなくたって好いや、賃金の増額もどっちだって勝手にしろい飯場だって其のままそっとして置け!………………)

こんな事を思ってる内に俺はいつか厳重に柵の囲らされた頭の家敷内に入っていた。が、どこからどうして入ったか少しも知らなかった。俺はポケットから例の丸い棒を取り出した。そして椽の下に穴を掘ってそれをさし込み、二尺許りの〇〇をつけて火をつけた。俺は坑内でやる時のように跡をも見ずに駆け出した。が、俺はいきなりどしん

と厳重な板塀に打つかって了った。俺はハッとした。(茲へ来る時に一体何処から入ったろう?)と思い乍ら、くるくる塀について廻り走った。が、何処まで走っても高い手も届きそうもない塀がついて廻って、出口らしいものは指一本出す隙さえなかった。俺は気が気ではなかった。いつ何時ドッカーンと来るか知れないと思うと、気ばかり焦って胸の呼吸さえ苦しくなって来た。額からは、又脇の下からは冷汗がじっとりと流れ出て、口の中はからからにひっついていた。

(息が苦しい!導火線はもう燃え切る頃だ!燃え切ったが最後、俺はもう……アアどうしたら好いのだ。今……今……アア何んにも知らないでやられる者は幸福だ。俺は……俺は……アア何んと云う残酷さだ!)

「オイッ、どうしたんだ!」

強く揺さぶって誰れか俺を起す者があった。俺はハッと眼を覚まして了った。布団の中で暴れたと見え、布団皮はビリビリに裂けて胸から背にかけてじっとりと油汗をかいていた。

——一九一九・一二・六——

一九二〇年一月「黒煙」

国境の夜(四節)

秋田雨雀

人物

大野三四郎　開墾者
覆面者　主人の影
アンリシカアイヌ
大野ゆき　大野の妻
みどり　長女
二郎　次男
五郎　三男
其他旅行者、其妻及び幼児

場所

北海道、十勝平原の一部

舞台左手は、雪に蓋われた原野の一部。遠く雪に包まれた国境の連山が見える。幾条かの橇道が国境の方へ光ってひかれている。右手は大野家農園家屋の内部、正面及び左手に小さなガラス窓がつ

いている。正面の左手に表に出る戸がついている、右手に戸があって、他の室へ通ずる、室の構造は粗末であるが、頑丈そうである。正面及び左手のガラス窓からは太い氷柱が剣の様に垂れている。
室の中央には大きな囲炉裡があって、火が盛んに燃えて、鍵にかかった大きな鉄罐には、湯が盛んに沸騰している。正面の窓に近くテイブルと椅子があり、それに近く大きなランプが吊されている。テイブルの上には帳簿が三四册載っている。右手の戸の傍に小形の金庫が置かれている。すべて第一期の北海道成功者の生活を想い出させる。

第一節

（幕の上った瞬間に、主人を除く他の四人は、囲炉裡を囲んで葛湯を飲んでいる。主人はテーブルに向って書き物をしている。年にしては若々しい顔の主人の妻は、三人の子供達に葛湯を拵えてやっている。）

娘　（葛湯のコップを持ったまま）お母さん外はひどい嵐ですね！　それに雪も降ってると見えて、ガラス戸にあんなに雪が……。

母　（葛湯を拵えながら一寸顔を上げて）まあ！　この分じゃ、また網走線が不通になるかも知れないね。私は二十年も其余も北海道にいるけれども、今年のような雪は一度も見たことがないよ。

娘　でも、お父さん昨日帰って来てよかったのね。今夜のような晩だったら何んなに心配でしょうね。

母　ああ、ほんとにいいことをしたね。二郎にあげようか？五郎さんはもうお止めにするんですよ。

三男　うむ、あたいにもう一杯！

母　然うか、それじゃ、二郎さん、五郎に半分だけおあげ。

次男　己らいやだ……五郎にも拵えてやればいいんだよ。お母さん。

母　いやな子だね、お前はもう一杯飲んでしまったんじゃないか、五郎には半分しきゃやらないんだから、お前の半分だけやったらいいじゃないの、いい子だから。

次男　己らいやだ、姉さんのを分けてやればいいんだ。

長女　（笑いながら）いやな子！　それじゃ五郎には姉さんのをあげようね。さあ、コップをお出し。そうら、これでいいだろう？

（三男は黙ってコップを受取って甘そうに啜る。）

母　（次男に新しく出来た葛湯を渡す）さあ、これを飲んだら、みんな温和しく寝るんですよ、（主人に）あなたも一杯あがりませんか？　葛湯を飲むと身体が温まりますよ、こんな晩は早く寝てしまおうじゃありませんか？

主人　（テイブルに対ったまま）うむ、ひどい風だな。私

は昨日帰っていいことをした。子供等を早く寝かした方がいい。私はもう少し書き物がある。湯をどんどん沸かして置いて呉れ。

母　書き物は明日の朝になすったって、いいじゃありませんか、こんな寒い晩になさらなくたって。

主人　然うしてはいられないんだ。お天気になったら、明日にもまた札幌へ行って来なければならない。

娘　お父さん、また道庁へいらっしゃるの？　この間の用がまだ済まないんですか？

主人　ああ、まだ済まない。然し、もう直きだ、何しろ相手は無教育な奴等ばかりだから話にならんのだ。

母　でも、余り面倒なことには関係なさらない方が好うございますよ。相手が解らない人間ほど怖いじゃありませんか？

娘　お母さん、ほんとうよ、あの人達、停車場で私に逢うと、いつでも、高い声で悪口なんか言うんですもの、私ほんとにいやになってしまうわ！

主人　（怒気を含んで）　あいつ等は、そんなことでもしなければ私に対抗が出来ないんだ……何しろ裁判には敗けているし、登記ももう済んでいるのだから、乱暴でもするより他に仕様がないのだ。

母　でもそんな人間を相手にいつまでもごたごたするのはほんとにいやじゃありませんか？　銭金には代えられませんからね。私もこんないやな思いをして、いつまでもこんな寒いところにいるのはいやですよ。人に怨みを受けるのは一郎やみどりの出世の妨げにもなるじゃありませんか？

主人　（弁解らしく）　お前達には解らないんだ。今に何も彼も解決するのだ。この事件が解決さえすれば、私もこの農園を管理人に任せて、札幌か東京で暮すつもりだ。然うなれば、みどりにも充分勉強させるし、一郎とも毎日逢えるのだ。

娘　お父さんは、いつでも然んなことばかり仰有って、一度も実行したことがないんだもの。私お父さんを信用しないわ。

主人　（笑いながら）　信用出来なかったら信用しないでもいいさ。今にお父さんが何んなことをするか見ているがいい。お父さんは、お前達の生れない前から此方へ来て、それからというものは寝る眼も寝ずに働いて来たのだ。お父さんの此方へ来た時は、この辺は一面の大森林で、山手に少しばかりアイヌの部落があったきりだ。お父さんと、お父さんと一緒に来た人達が、土地を払下げて森を切払ってその後に豆を蒔いたのだ。一番最初に豆の収穫のあった時の喜びは今でも忘れられない。あの土佐の百姓達の来たのはそれからずっと後の事さ。その頃お父さん達は、馬鈴薯と豆だけを食べて暮したもんだ、その頃の事を考えるとまるで夢のようだ。

二郎　（突然に）　お父さん、其頃熊がいた？

主人　ああ、いたとも、家の牧場の入口のポプラのあるところに、大きな楡の樹があったが、お父さんはあの辺で熊に逢ったことがある、いい塩梅にお父さんはあのアンリシカと一緒にいたので、アンリシカはその熊と取組みあって、マキリで殺してしまった。それからアンリシカはお父さんの家へ来るようになったのだ。

二郎　お父さん、アンリシカは幾つになるの？

主人　さあ、幾つになるかお父さんにも解らない。アイヌは自分の年を忘れてしまうものだから。

母　ほんとにあのアイヌはいつでも同じような顔をしていますね。私が初めてここへ来た時も、やっぱりあんなような髯むしゃな顔をしていましたね。

娘　然う、お母さん？　アイヌは一寸見ると怖そうだけれども、みんな温和しいものね。

主人　然うだ、アイヌ人は内地人よりもずっと温和しい。そしてみんな恩を知っている。（ある連想から）あの土佐人のような恩知らずは一人もいない。お父さんは土佐人の村のことで何れだけ骨を折ってやったか知れない。それをみんな忘れてしまって、お父さんの開墾した土地を自分達のものだと言い張るのだ、（弁解らしく）それや、土佐人の払下げた土地もあったにはあったが、途中でやりきれないで、全部引払って内地へ帰ったのだ。そこでお父さんは正式の手続きを踏んで、莫大の資金を下してその土地を開墾したのだ。開墾が出来て収穫のある頃になったらまた帰って来て、お父さんの土地を自分達のものだと言い張るのだ。幾ら道理を分けて聞かしてやっても納得しないのだ。お父さんは若い時から他人に恩を売らない代りには、他人の世話にもならないで暮して来たのだ。それはお父さんの哲学で、同時にお父さんの道徳なのだ。つまりお父さんは他人の生活に立入らない代りには、他人に、お父さんの生活に一歩も立入らせないのだ。

三男　（突然）お母さん、眠い！

主人　寝かしておやり、二郎ももう眠いだろう。早く寝かしておやり。

母　え。さあ、みんな寝よう。二郎も一緒にお休み。

二郎　お母さんまだ寝ないの？

母　お母さんも寝るよ。さあ、寝かしてあげよう。

主人　よく温まって寝ろよ。風邪を引かせないようにした方がいい。みんなもう一遍火に当って寝ろ。

（二人の子供は両手を開いて囲炉裡にあたる。子供等の顔は赤く輝いて、満足と幸福を表わしている。家族の間に温い沈黙がつづく。）

主人　さあ、二人とも此方へ来い。頬片が温まったかな。（主人は、鬚の濃い顔を、二人の子供等の顔に触れて見る）おお、よしよし、これじゃ朝まで温かいぞ、さあ、寝ろ。

（二人の子供は主人に対って御辞儀をする。）

主人　おやすみ！　温かにして寝かしておやり。

（二人は母につれられて、右手の戸から隣室に行く。主人は再びテイブルに対って仕事を初める、娘は炉に木をついだり、鉄罐の湯を見たりしている。）

娘　お父さん葛湯を一杯あげましょうか？

主人　うむ、一杯もらおうか？　お父さんのは極く濃くしてお呉れ。今年の葛はよく出来たから、兄さんのところへも送ってやろうね。

娘　（葛湯を造りながら）　え、お父さん、兄さんのところからお音信があって？

主人　先月の初めに一回あった。来年の春になったら、お前をよこして呉れと言って来た。

娘　（喜ばしげに）　然う、ほんとう、お父さん！　お父さん、来年はきっと私を出してくださるでしょう。

主人　ああ、いいとも、お父さんも来年の夏までには東京へ出るつもりだ。お父さんはこれから東京へ出てほんとうに働くつもりだ。

娘　然う、お父さんまだ働くの？

主人　働くとも、人間は死ぬまで働くべきものだ。お父さんも最初はこんなところで働くつもりじゃなかったのだ。お父さんも一郎のように東京で学問をするつもりだった。然しお父さんには一郎のように金をつづけて呉れる人がなかった。お父さんは子供の頃、人間というものは正直に働きさえすれば、幸福が一人手で来るものだとばかり信じていた。然し正直はいつでも金のあるもののために敗ける、金のあるものは学問や力を買うことが出来る。だが正直は何も買うことが出来ない。そこでお父さんは金のないお前達のお祖父さんを怨めしく思った、そしてお父さんは東京を飛び出したのだ。もしお父さんが、ここで働かなかったら、一郎やお前に学問をさせることも出来なかったし、お前達とこうして暮すことも出来なかったのだ。

娘　（葛湯を主人のテイブルのところへ持って行ってやる）ですけれども、お父さん金というものは、そんなに尊いものでしょうか？

主人　（葛湯を啜る）　それやお父さんだって、唯だ金を儲けるのが目的で働いて来たのじゃない、お父さんはお父さんを苦しめた世間に復讐するために働いて来たのだ。

娘　然しお父さん、然んな生活はお父さんにとって、ほんとうに楽しい生活でしたか？　お父さんのような生活は苦しいいやな生活じゃありませんか？

主人　それは勿論、楽しい生活じゃなかったかも知れない、然しお父さんにとっては仕方のない生活だったのだ、第一楽しいか、楽しくないか、お父さんには考える余裕もなかったのだから。

娘　それじゃつまらないわ、人間は何んなに苦しんでいても、自分の生活を考えて生きて行けさえすればやっぱり幸福じゃないでしょうか？

主人　それはお前達から考えることで、お父さんにとって

は斯うして生きて来るより仕方がなかったんだ。お前にはまだ解らないことだ。

娘　然し、お父さん、お父さんに意味のある生活でも、私達につまらない生活であることもあるでしょう？

主人　（真面目に）それはあるかも知れない、然し私は今までお前達の幸福を考えないで生きて来たことは一度だってないつもりだ。私は私の生活のために生きて来たことは一度もないつもりだ。お前達の幸福のためにお前達を苦しめたことは一度もないつもりだ。お前達の幸福のためにお父さんは働いて来たのだ。

（この瞬間に遠く犬の吠える声がする、主人と娘は暫く沈黙のままでいる。）

母　（戸を静かに開けて入る）大変犬が吠えていますね、この寒さは何うです！　みいさんも、もうお休み、（主人に）あなたも、お休みになったらいかがです？

主人　（帳簿を閉じる）ああ、そうしよう、手がかじかんで仕様がない、（立って炉の傍に来る、坐って両手を火の上に翳す）未だ吹いてるようだな。いつまで吹くつもりだろう？

母　やっぱり犬が吠えてる。戸締りをさせましょう、みいさんもよくあたってお休み。

主人　私は表の方を締めるから、お前は裏の方を締めて呉れ。

（主人は表の戸を開けて見る。吹雪が顔を打つので、顔をしかめながら強く戸を閉めて鍵をかう。）

ひどい吹雪だ！　明日は道がなくなってしまうかも知れない。さあ、早く締めて寝よう。

（母は主人から鍵を受取って右手の戸から入る。娘は室の整理を初める。コップを棚の上に載せたりする。主人は火箸で火を叩く。火花が散る。）

娘　（神経質に）お父さん、誰か来たんじゃありませんか？　人の足音のようよ。

主人　（耳を澄して）然んなことないだろう、こんな吹雪の夜、誰が歩いてるもんかね？

娘　いいえ、お父さん、ほんとうよ……何んだか人の呼吸づかいもするようよ、ほら話声がするじゃありませんか？

主人　（無頓着に）こんな晩に旅をするなんて、随分乱暴な人間もあったものだ……さあ、よくあたっておいで。

（主人は再びテイブルに向う。）

第二節

（やがて二人の旅行者が全身雪に包まれて左手から現われる。夫婦らしく女の方は四五歳の子供を背負っている。女は家の壁に触わると同時に、そのまま力なく壁にもたれ蹲んでしまう。）

男　（戸を叩く）もしもし、一寸お頼み申します……。

娘　（鋭敏に）お父さん、誰か戸を叩いていますよ……開

けてあげましょうか？

主人 （本能的に） 黙っておいで！

男 （戸を叩く） もしもし、一寸お頼み申します。

娘 大変疲れているようですよ、もし入れてやらなかったら凍え死んでしまうかも知れませんよ……ね、お父さん、元気のない声じゃありませんか……お父さん開けてやりましょうよ。

男 （戸を叩く） もしもしお頼み申します……一寸でよろしいのですから……。

母 （戸を開けて入る） あなた、誰か戸を叩いてるじゃありませんか……何とか言ってるようですよ……。

主人 （以前よりもっと冷静に） こんな晩に出歩いてる奴があるものか……じっとしておいで。開けなかったら何処かへ行くだろう。

母 それじゃあんまり可哀相です……開けてやりましょうよ。

主人 余計なことをするものじゃない！ 何んな人間だか知れたもんじゃない。いいからお前達は寝ておいで。

女 （ひょろひょろと立上り、壁に顔をぴったりつけて慄えながら） もしもし、ここを一寸開けてくださいませんか……吹雪で難渋しているものです……つかれて、お腹がすいて……それに子供が、子供が……。

母 （無意識的に壁の方へ寄って、女の言葉を聴く） つかれてお腹がすいているんですって……。

娘 お母さん、子供をつれてるんでしょうか？ さあ、開けてあげましょうよ。

主人 （次第に病的な冷酷さを増す） 余計なことをするもんじゃない！ お前達は寝てしまえ、声をたてないようにしておいで！

男 私達は何んにも怪しいものじゃありません……今朝帯広から来たのですが、途中で雪に降られて死にそうになってるんです……二里ばかり先方からお宅の灯火ばかりをあてにして来たものです……他に一軒も家がないのですから……ここを開けてくださらなければ凍えて死んでしまうばかりです……。

母 ……二里ばかり先方から家の灯火をあてにして来たんですって。

主人 声を立てるなというのに。

男 （戸を指で触りながら） 何うか何んとか言ってくださいませんか……あなた方の一言で私達親子三人の生命が助かるんですから……ここからあなた方の立っているところがよく見えるんです……奥さま、何うかその明るいところへ一寸でもいいから入れて下さいませんか……お嬢さん、何うかお父さんにお願いして、ここを開けていただくようにしてくださいませんか……。

（主人は本能的にランプを消す。）

女 （男の言葉に勇気を得て、立上りながら） ほんの一寸でようございますから……この子供の雪を解かしてやる

だけでいいですから……この子はもう呼吸を引きとりそうになっているのです……何うせ死ぬものにしても温い火の傍で死なせたいと思います……その温い囲炉裡の傍へ一寸でも置いてくだされば、そのまま眼を落してもあきらめがつきます……。

娘　お父さん……お父さん……お父さんはなぜ灯火を消してしまったんです……。

（主人は沈黙をつづける。）

母　あなた、何うしたのです……この人達はあなたの敵なのでしょうか？　平生のあなたとは何うしても思えません……あなたはあの人達の言うことが聞えないんですか……。

（主人は身動もしない。）

男　あなた方のお話なさる声だけははっきり聞えています……ああ懐かしい声です……私達は一日人間の声を聞かなかったので……その声を聞くだけでも私達の身体が温ります……もうここの鍵を外してくだすったのでしょうか？

（二人の男女は戸の方へ寄って力を併せて戸を押している。）

（家の中で娘の泣声がする、主人は石のように黙している。）

男　（指で戸を引掻く）　やっぱり鍵がかかっている……何うしてここを開けてくださらないのでしょう……ここをただ一尺ほど開けてくださりさえすればいいのです……私達は明日の朝、皆様のお眼覚めにならない内にここを立ってしまうのです……少しもご迷惑をおかけしないつもりです……。

女　私共を入れてくださるのが然んなに厄介でございましたら、この子供だけでよろしうございます……私共はこの軒で眠っていてもよろしいのです……何うか、この子供の顔を見てやってください……。

（家の中は暗く冷い、そして娘のすすり泣のほか何の答えもない。）

仕方がありません、ここを立って行きましょう……ここにこうしている間によっぽど歩けるでしょう……さあ、行きましょう……。

男　（力のない声で）　ああ、仕方がない、また歩くことにしよう……（急に思い返えして）然しもう一遍、お願いして見よう、あんまり残念だ……あんなに温い火が燃えているんだ……もしもしあんまり未練らしくて、自分に自分で腹が立つような気持もいたしますが、この子供に死なれてしまえば、私共は死んだも同様です……明日から私達は何にが楽しみで生きて行きましょう……何うかここを開けて、この子を温めてやってください……もしいよいよここを開けてくださらないなら其訳を一寸聞かしてください……そうしてくださりさえすれば、私達は喜んで帰って行きましょう……何とかたった一言云って

ください……。

女　何うか奥さま、奥さまにもお子さんがおありのようです……子供の可愛いことはよく御存じの筈です……奥さま、何うか一言何とか仰有ってください……さあ、これがお別れです……。

（室の中で娘が戸の方へ突進する気配がする、然し主人はそれを制止する、誰も何とも言わない。）

男　（全く絶望して）じゃ、仕方がありません……この子供のために元気を出して歩くことにしましょう。

女　一寸でも軒下へ置いていただいた御礼を申上げます……もし私共親子の死骸がお眼にとまるようなことでもありましたら、犬に喰われないようなところへ埋めて置いてくださいまし……。

男　（歩きながら）馬鹿なことを言うもんじゃない……然んなことは何んのたしになるものか……さあ、行こう……。

（二人は殆んど雪の中に埋もれるような姿で、家の後ろ方に去る。）

（家の中の人は長い間沈黙をつづけている。）

母　（ランプに火を点ずる）とうとう行ってしまった！

（主人は二度と笑うことの出来ないほどの緊縮した表情をしてテイブルに腰をかけている。）

（娘は戸に近く両手を眼にあてて立っている。）

（三人とも顔を合せることが出来ない。）

（外は益々荒れている。）

主人　（厳格に）みんな寝てしまえ、私はこれから仕事をしなければならない。お前達はいつでも他人の生活のために苦しめられている。私は他人の生活を妨げない代りには、他人のために自分の生活を妨げられるのもいやだ！

娘　（突然）お父さん！　これがお父さんの哲学なの！（半ば泣きながら）つまらない、ほんとにつまらない哲学です……獣でももっといい哲学を持っています……お父さんの哲学は石ころの哲学です……。

母　（娘の傍へ行く）これ、お前はお父さんに何を言うのです？　お前は何うかしたの？

主人　（強いて笑いながら）その子は少し昂奮しているようだ。気を落ちつけさせて寝かしてやらなくちゃいけない。

母　みいさん、さあ、寝よう。お前は今晩何うかしているよ。気を落ちつけなくちゃいけませんよ。さあ、お母さんと一緒に寝ようね。

（母は娘を瞞しながら右手の戸から去る。主人は二人の去った後、炉に木をついだり、鉄罎に水をさしたりして再びテイブルに対う。）

アンリシカ　（戸の外から）ニシパ、ニシパ寝たか？

主人　（仕事をしながら）アンリシカ？

アンリシカ　う、う、そんだてや、ニシパ寝たか？

主人　今寝るところだ。お前は今時分何処へ行って来たのだ？

アンリシカ　余り寒いて、己ら内から温まるべいて思って。ニシパ、寒い晩でないか？　アイヌはお神酒ないと死んでしまうてや。

主人　お前幾ら飲むつもりだ？　先刻飲んで行ったばかりじゃないか？　朝になってから、また飲んだ方がいいだろう？

アンリシカ　然んでないてや……たった一杯呉れろよ……ニシパ可哀相でないか、今シヤモ二人死んでいたてや、ニシパ知ってるか？

主人　（無意識的に立上る）　死んだ？　誰が何処で？

アンリシカ　あの橋のとこで、ここから見えてや……シヤモのメノコ子供を背負っていたてや。不憫でないか？何してここさ入らないかさ？　シヤモ賢しくても、やっぱり馬鹿だてや！

主人　（無言のまま戸を開いて）　さあ、お入り、アンリシカ、それはほんとうか？

アンリシカ　（アッシの上に雪が一寸ほども積っている。手に徳利を持っている）アイヌは偽を言わないてや……ニシパ御神酒一杯呉れろ！

主人　（無言のままアイヌの顔を見ている）　死んだのはいつの話だ？

アンリシカ　今のことだてや、たった今の話だてや……ニシパ御神酒一杯呉れろ！

（主人は無言のまま、アイヌから徳利を受け取り、炉傍の樽から酒を注いでやる。アイヌはそれを嬉しそうに眺めている。）

アンリシカ　（幾度も御辞儀をしながら）　ニシパ、難有いてや、難有いてや……ニシパ、おやすみ、また朝に来るてや。

主人　もう行くのか？　さようなら、おやすみ？

（主人はアイヌの去った後、不安そうに戸を締める、鍵をかい、それから炉の火をいけ、ランプを消して右手に去る、舞台全く暗くなる。）

第三節

（舞台が再び明くなった時、覆面した一人の男が、鉱山なぞに用いるガラスランプのようなものを携えて室の真中に立っている。主人は右の戸を開いて室に入って来る。二人は短い間沈黙のままで相対している。覆面者の眼が異様に光っている。）

主人　（鋭い声で）　お前は誰だ？

覆面者　（太い力のある声で）　お前は誰だ？

主人　己はここの家の主人だ、お前は一体誰の許可を受け

て己れの家へ入って来たのだ？

覆面者　誰の許可も受けはしない、己れは己れの衝動で入って来たのだ！

主人　一体何しに己れの家へ入って来たのだ？

覆面者　何しに入って来たか、己れによく解らないのだ。然し己れのこれからやる仕事で大抵見当がつくだろう。

主人　（怒りを無理に圧えて）他人の家へ無断で入って来て、妙な事を言う奴だ……一体お前は何だ？

覆面者　己れは盗賊だ！

主人　（怖れと怒りの入り乱れた語調で）盗賊？……よし、盗賊が己れの家へ何しに来たのだ？

覆面者　盗賊は何しに他人の家へ入って来るか、大抵想像がつきそうなものだ、盗賊に入られたら、盗賊に入られた時の覚悟をするがいい。

主人　お前は一体何が欲しいんだ？

覆面者　己れは己れにないものは何んでも欲しい。自分になくて、他人の持っているものほど余計に欲しいのだ。それはお前の方がよっぽど好く知ってる筈だ！

主人　妙なことをいう奴だ。己れは盗賊なぞを怖れる人間じゃない。己れは若い時から身体を鍛えて来ている。盗賊の一人や二人は何んとも思っていない。

覆面者　なるほど、いい度胸だ。それ位の度胸がなければ盗賊は出来ない筈だ。

主人　（怒りを含んだ声で）盗賊？　己れはいつ盗賊をした？

覆面者　然んなことは自分に聞いて見るがいい。夜が更ける、仕事が晩くなる、問答は後廻わしにしよう、（語調を変える）さあ、お前の持っている有ったけの金を出せ！一文でも隠すと承知しないぞ。

主人　お前は己れを金持だと思っているのか？　己れにも幾らかの金はあるが、それは皆な己れの事業に使う金で銀行に預けてあるのだ。己れは己れの事業で百人以上の人間を食べさせて行かなければならない。折角だが手元には金が一文もない。

覆面者　然んなことで欺される己れじゃない。己れが盗賊に入る時はちゃんと目星をつけて置くのだ。

主人　幾ら何んと言われても、ないものは仕方がない。見ればお前は多少教育のある人間らしいが、覆面して、夜夜中人の家へ押入り強盗に入らないでも、幾らでも話の仕様もあろうというもんじゃないか？

覆面者　生意気なことを言うな！　話の仕様があるようなら、盗賊には入らない。己れはお前に説法されるような盗賊じゃない。お前はこの前の火曜日に銀行預金を二千円引き出してある筈だ。それから昨日お前は札幌から郵便貯金を三百円持って来た筈だ。さあその金を一文も残さず己れに渡して呉れ。

主人　（覆面者の顔を凝視して）なるほど、然ういわれると、然うに違いない。然しあの金は己れの使う金じゃな

い、この月末に肥料会社へ払わなければならない金だ、あれを持って行かれては己れは困ってしまう、何うかそれだけは免して呉れ。

覆面者　然んなら改めて金を引出して来たらいいじゃないか、けちなことを言う奴だ。

主人　(力なく)　けちなことを言うんじゃない、己れは正直なことを言ってるのだ。

覆面者　然しそんなことは己れの知ったことじゃない。そんなことを一々聞いていた日には盗賊は出来やしない。ぐずぐず言わないで、二千三百円の金を綺麗にここへ並べて出すがいい。

主人　今も言う通り、それでは己れも困ってしまうのだ。その代り、其内幾らかはお前にあげよう。何うかそれで温和しく帰って呉れ。

覆面者　己れはお前に金を借りに来たんじゃない、盗賊に来たのだ。さあ、渡さなければこれだぞ？　例えお前達のようなものでも、金より生命の尊いことは知ってるだろう。さあ、綺麗さっぱりと渡すがいい！

(覆面者は主人の眼の前にピストルを突きつける、主人の顔は次第に蒼白くなる。)

何うだ？　これでも人間の生命より金が大事か？　お前の返事一つでこの指が動くんだぞ、この指を御覧！

主人　(顔をピストルから背けて)　お前に然ういわれると一言もない。己れは若い時から色々不幸な生活をして来た人間だ、そしてこの四五年になって、ようよう人間らしい気持になったところだ。何うか己れを嚇すのだけは止して呉れ。

覆面者　然んなら、金を渡すか！

主人　さあ！

覆面者　(ピストルを延べて)　渡さなければこれだぞ！

主人　(涙を流して)　よし、己れも男だ。未練らしいことはしない。金は確かにこの金庫に入っている。ピストルを延べるのはよして呉れ。己れも年をとったら弱くなった。決して抵抗しないから其処で待って呉れ。

覆面者　よし、それなら、ピストルを向けるのだけはよしてやろう。さあ早く出せ。

(主人は手をぶるぶる震わせながら金庫を開いて金を引き出す。)

主人　さあ、これを全部お前に呉れてやる。妻や子供が知ったら何んなに悲しむか知れない。余り騒がないように温和しく帰って呉れ。

覆面者　それは己れの勝手だ。己れはお前のところへ金を貰いに来たのじゃない、取りに来たのだ。

主人　それはよく解っている。兎に角己れはこんなことを家族の者に知らせたくないのだ。己れは今まで他人のために自分の生活を掻き乱されないで暮して来た。それは己れのたった一つの誇りであった。

覆面者　ふむ。お前は自分の生活を掻き乱されないために、

何十人、何百人の生活を掻き乱しているか知れない。そんなことはお前だって知ってる筈だ。

主人　己れは他人の生活を掻き乱したことはない……己れは他人の生活を掻き乱すことを大きな罪悪だと思っている。

覆面者　それは当前の話だ。然んなことは、お前が犬猫同様に使っている作男の方がよっぽどよく知っている、そしてちゃんと実行している。お前の知ってるのは理屈だけだ、そしてお前の生活はいつでも其反対だ。

主人　(自分を忘れて)　何んだと、お前は己れの哲学をひっくり返えそうというのだな？　己れの哲学は理屈から生れて来たものじゃない。己れの哲学は五十年間の実行から生れて来たのだ。己れの血と汗から生れて来たものだ。お前のような盗賊に破られるようなものじゃない。

覆面者　破られるか破られないか、見ているがいい、(ポケットから一筋の麻縄を出して主人に示す)　ここに一筋の縄がある、己れは今この縄をお前に渡すから、己れの言う通りにするのだ。もし己れの言う通りにしなければ、己れはすぐお前を射殺してしまう。さあ、この縄を受取れ！

主人　(躊躇しながら)　縄を持って何うするのだ！

覆面者　兎に角縄を持てばいいのだ、そして己れの言う通りにするんだ。

主人　(渋々縄を受取る)　いやな気持の縄だ……いやなべたべたしたものがついてる。

覆面者　血が着いているんだ。

主人　(縄を投げ出す)　血？

覆面者　(ピストルを向ける)　縄を持たないか！

主人　(震えながら、再び縄を手に持つ)　早く命令して呉れ……時間のかかるほど己は苦しむばかりだ。

覆面者　蟲のいいことを言うな。盗人猛々しいとはお前のような奴のことを言うのだ。

主人　何方が盗賊だ？

覆面者　何方が盗賊だか、考えて見るがいい。

主人　己れは気狂になりそうだ、お前は己れに何んの怨みがあってこんなことをするのだ？　己れは今までこんな侮辱を受けたことがない。一体己は何うすればいいのだ？

覆面者　騒ぐな！　さあ、縄でお前の子供達の首を締めるのだ、(右手の戸を指示す)あすこでお前の子供達はいい心持で眠っている。眠っている内に締めるのだけは免してやる。盗賊にも情けのあることを知るがいい。

主人　(がたがた震えて来る)　耻しい話だが、己れはもう元気がなくなってしまった。己れ今は立っていることも出来ないほどだ。そんな無理なことは言わないで、温和しく帰って呉れ。

覆面者　お前はがたがた震えている。お前の顔をお前に見せてやりたい……さあ、何んの彼のと時が経つ、早く其

縄でお前の子供達の首を絞めろ！

主人　何うか、それだけは免して呉れ……己れはこの一本の縄を持つことさえようようのことなのだ……何うして己の子供の首が締められるものか？

覆面者　いつまで、ぐずぐずしているのだ、さあ早くしないか？

主人　何うかそれだけは免して呉れ。己は今まで他人に頭を下げて免しを請うたことのない人間だ……もし必要ならば、己れは己れの持っているものは何んでもお前にやる……子供等を締め殺すなんてことはてんで考えもされないことだ……どうか、それだけは免して呉れ！

覆面者　然うだろう。殺せないのは当然だ、それじゃ、お前はこの灯火を持って戸口に立っていろ。もし一歩でも動くと承知しないぞ！

主人　お前は己の子供を殺すつもりか？……己れは何うしてそれを見ていられよう……どうか免して呉れ！

覆面者　さあ、灯火を持たないか？　此方へ来い！　歩かないと射殺すぞ！　しっかり持て、そんな顔をして己れを見るな！　この戸の蔭にお前の妻とお前の子供が眠っているのだ。温い臥床の中で眠りながら死ぬ子供は何れだけ幸福か知れない。

（主人は、夢遊病者のように覆面者のピストルに導かれて、右手の戸の前に立つ。主人は殆んど知覚を失なった人のようにぼんやり立っている。）

（覆面者は静かに戸を開いて室の中に入る。戸は開いたままである。）

（やがて、子供等の悲鳴を上げる声と床をうつ音がする。）

娘の声　……あれい……お父さん……早く来て……人殺し……あ、あ、……あ、あ――あ……。

（母の声と子供の声が入乱れて聞える。物を打つ音。圧迫する音。物の摺合う音。器物の破れる音。）

主人　待て！お父さんは今直ぐに行く！

覆面者の声　そこを一歩でも動くと承知しないぞ！

主人　（燈火を投げ捨てる）　撃つなら撃て！

（主人は燈火を投げ捨てて隣室に突進する。）

（ピストルの音。）

（主人の呻く声。）

（舞台は全く暗い。）

（長い間。）

第　四　節

（舞台が少し明くなった時、表の戸を打つ音がする。）

（正面と左手のガラス戸から朝日が射し込む。）

アンリシカ　ニシパ、いつまで寝てるんだべい？　ニシパの家さお日様晩く照らすだか？

主人　（荒々しく戸を開く、そして怖そうに周囲を見廻す）やっぱり、もとのままだ……（戸に手をかけたまま隣室の方を見廻わす）やっぱり、みんな生きている……ああ何んて夜だったんだ！

アンリシカ　（戸を叩く）　ニシパ、何してるんだべ？　こご開けて呉れろてや。ニシパの家、お日様笑ってるべいてや。

主人　（戸を開いてやる。日光が明るく差し込む）　アンリシカ？　よく来て呉れた。（アンリシカの手を堅く握る）

アンリシカ　（主人の顔を凝視して）　ニシパ今日何うしたか？　青い顔をしていてや。

主人　アンリシカ、火があるか見て呉れ。

アンリシカ　（炉の火を掻き廻しながら）　火うんとあるてや。

主人　然うか、火をどっさり燃して呉れ。

（アンリシカは囲炉裡に木をつぐ。やがて火が燃え上る。）

主人　アンリシカ、よく火にあたって、己れと一緒に行って呉れないか？

アンリシカ　ニシパ、何処さ行くんだべいや？

主人　己れと一緒に昨夜死人のあったところへ行くんだ。あの人達は新しい雪の下になって死んでるだろう……よく温まって呉れ。

アンリシカ　ニシパ、今日何うかしたか？「シャモの心は二つある」ってほんとだてや。アイヌの心はいつでも一つだ。駄目だてや。駄目だてや！

主人　（アイヌの毛深い手を堅く握る）　アンリシカ、お前は幸福な人間だ！　お前こそほんとの人間なのだ！

（主人はアイヌをだきかかえるようにしていつまでも離さない。）

——幕——

一九二〇年一〇月「新小説」

眼

金子洋文

一

　午前の十一時頃であった。
「今日は仕事はよしだ」と言って、写真屋の主人が座敷にはいって来た。そして奥さんに酒を命じた。
「何うしたのだ」と、私は彼の蒼白く緊張した顔を見あげて言った。
「今、いやな眼を見た、一寸顔をあげてと言ったら、客がびっくりしたように天井を見たのだ、光線のせいだったろう、その眼が、あの時の男の眼とそっくりなのだ、十年振りで××のいやな日のことを思い出した。」
　酒が出るまで彼は無言でいた、私も無言でいた、外をながれている冷たい曇日の光が、私に不安をおこさせた。

二

（彼が話したことをそのままに書く）
　晴れた夜であった。
　眼にうつるものは、広漠とした雪の原と、蒼白い月のかかっている、深い、大きな空であった。その眺望は戦につかれている彼の心に、甘い、やわらかな感情をよびおこした、けれ共、彼はそのここちよさを味わうことが出来なかった、彼はある使命を持っていた、彼の心は暗く、さみしく、厳粛なものにみたされていた。
　食糧が欠乏したため、三十余名捕虜を銃殺することにきまったのは、その前夜であった、それは上官の一言できまった、そして二十人の味方と十人の捕虜が一団となって、三つの別々の途に向って出発した。
「何処へ行くのです。」と、捕虜がたずねた。
「隣村へ行くのです。」その答はやさしかった。
　途々味方の人々は沢山の冗談を言った、しかし、捕虜は一人も笑わなかった。
　三十人の靴の音が、雪の上でなった。その音は異様な不安を凡ての人に与えた、人々は美しい夜の空を見なかった。そして今は誰も語るものがなかった、もう嘘を言うことが、味方の人間にも恐しかった。
　幾哩歩いたろう、彼には非常に短かい時間のように思われた。
　突然、恐しい沈黙が破られた。一間ばかりはなれた前方で、「アー」と後尾のながい、呻くようなためいきを、彼

はきいた。と、一人の捕虜が雪の上に跪いて神の名を呼んだ。

列は忽ち崩れた、神の名を呼ぶかなしい声が、十名の捕虜の口から洩れた、それは、あわれにも恐しい人間のうめき声であった。

「打てッ、打てッ」と、

次の瞬間、彼は、狼狽した軍曹の命令を後方にきいた、銃砲がとどろいた、白煙がパアッと舞い上った、そして十名の血にまみれた死骸が、神を呼ぶ声をのこして、雪の上に横わった。

この恐しい瞬間、彼は、自分の殺した捕虜が、美しい空に両手をのべて、神の名を呼んだかなしい眼を見た。

（一九二一年一一月四日）

一九二一年一二月「種蒔く人」

雄阿寒おろし

神近市子

叔父はその時丁度帰る仕度をしていたそうです。内地から連れて来た若い雇男と二人して刈り集めた萱を二疋の馬につけるように束を造りにかかって居りました。

太陽はもう釧路の平原の向うに舂づき、あたりの落葉樹の並木は、一本一本が黄金色の光線を反映して、宛かも荒野の中の唯一の装飾ででもあるように、神々しく美しく輝いているのでありました。その時叔父が立ち働いていたのは北海道の脊髄と云わるる石狩山脈が東に伸びて雄阿寒、雌阿寒の連峰となり南に流れて平野に入ろうとするあたりで、その辺はまだ斧鉞の入らない所謂北海道の処女林の幾百年と樹齢を数える大木が昼まだほの暗く立ち並ぶところでありました。

もうすぐに釣瓶落しにやって来る冬の暴虐を予示するように、頭の髄迄ズーンとさせる突風が突然平野を渡って来て、背後の林にぶつかりました。

『ゴーッ！』と云う林の悲鳴が聞えました。

『雄阿寒颪だな。』叔父はこう呟きました。丁度その途端古い白樺の根元で犬達と走り廻って戯けていた八つと十の男の子が、

『ワーッ！』と云う驚愕の声を上げて叔父の方に駆け出して参りました。四疋の犬は遽にひとしく吠え出して、白樺の木の右手にある下萌えの木の茂みに向って四疋四様に戦闘の姿勢をとりました。

叔父は急いで背中の銃を下ろして、犬の後方から叢の中を覗いました。叔父はオヤジ（熊）が餌を尋ねてこの辺迄立ち廻ったのだと考えたのでありました。

『怪しい者ではありません。どうかその犬を押えて下さい。』叢の中からこう云う青年らしい声が聞えて来ました。

『あなたは何です。』叔父は犬を制し乍らこう尋ねました。

『……………』叔父の問には答えずに、声の主は叢の中から叔父の前に姿を現わしました。若い、土方らしい服装が袖も胴も無残に裂け破れたものを着て、手や顔が傷だらけで血が滲んでいましたが、体格の立派な憂鬱な表情を持った青年でありました。

『あなたは何です。』叔父は再びこう訊ねました。

『脱走者です。あっちの鉄道工事をしているところから逃げて来たのです。かくまって下さい。お願いです。』

その男は明るみの中に出ることを恐れるもののように林の端に立ったまま、どこか慌しく云うのでありました。

瞬間、ホンの瞬間のことではあったそうですが、叔父は人間としての怖しい試錬に逢ったそうです。その男をかくまってやることについて、叔父自身の覚悟には少しの躊躇するところもなかったのですが、その結果として起って来るかも知れない事についての予想が叔父の心を強く打ったのでありました。叔父は四人の幼い者と愛する妻との上を気遣ったのでありました。それはこの種の脱走者をかくまった事がこの附近の鉄道工事に従事している下請人達に知れようものなら、叔父は彼等から残忍で執拗な復讐を覚悟しなくてはならないからでありました。

然し、それはホンの一寸の間のことでした。そこらには別に怪しいと思われる人の影もなく、あたりの耕地の人々も遠くの方で忙しく立働いている丈けで茲に何事が起ったか気付きそうにもないことを見極めると、叔父は少し大胆になれました。直ぐに叔父はその青年に命じました。

『少しの間、そこを出て来てはいけませんよ。今そっちに馬を引いて行きますからね。』

一旦その男を助けようと決心して了うと、叔父の頭には場合に必要な機智が群るように起って来るのでした。叔父は冷静な落着を持って帰る仕度を整えました。

即ち、一旦馬に積みかけた枯草の束を今一度下ろし、その馬の背に若者をのせました。そしてどの方角からも中にいる人が見えないように、一杯枯草を積み上げました。こうして仕度が出来ると時を移さず、二人の小供は雇男が追う馬の上に載せ、四疋の犬に前後を警戒させて、林を越え川を渉り乍ら家路に向ったのでありました。

一行が家につくと、叔父の一家には異常な緊張と沈黙とが家族の者を支配しました。叔父の一家には異常な緊張と沈黙とが家族の者を支配しました。物に弁えのない極く幼い者の外には、高い声を立てるものもありません。誰も彼も一人の人の生命――いや自分達の生命に迄影響を及ぼすかも知れない事件の前に立って、極度の興奮の為めに低い声で話したのでありました。

食事がすむと、凡ての家族が中の間に集りました。こうした片辺な土地に暮す家族にとっては、夕食後の団欒は可成り大きな楽しみの一です。平生でも大抵の夜は家族がそこに集って一時間なり二時間なりの時間が費されるのでありましたが、特にその夜は家族の一人一人の心にそこに相集まる事によって一の大きな力と信頼とを得ようとする、無意識の希望が燃えているのでありました。叔父の養親に当る老人は、叔母を促して中の間に切ってある炉に盛んに薪を燃させました。

『こう云う時には火をドンドン燃すことだ。火の柱は極く陽気なもので、魔を払うからな。』老人は叔母の手から赤ん坊をとり乍らこう云いました。

叔父は子供等に見守られ乍ら、セッセと武器の手入をしました。二梃の銃、一梃の短銃、それに短刀の類がありました。特にその中の短銃は叔父が官途に愛想をつかして北海道に移住した時、親しい軍人から送られたもので、ブラ

ウニング式の優秀な武器でありました。

武器の手入れが了ると、叔父も老人も何となく慌しかった心が少し落着くように感ずるのでありました。武器は老人が短銃を用い、叔父と雇男とが銃を使用する事に相談で極りました。老人はもの慣れた容子で短刀の一つをとって抜き放ち、刃先を改めて懐中に呑みました。その事によって老人は遽に昔の元気を復活し、急に一寸ほども背丈が伸びたようで周囲の者には頼もしく感じられたそうです。

日がスッカリ暮れて了うと、叔父は老人と相談の結果、気の利いた雇男の与作を窃かに裏口から送り出しました。

『鉄砲を持って行くか？無い方がよいかも知れないな。石川さんにも松田さんにも、明後日あたり町に行きますから、お買物でもありましたらそう云って下さいって、そう云ったが好いだろう。』叔父はこう意を含めて与作を送り出しました。これは偵察の為めでありました。使に托して、今夜附近の耕地に有る家に変った人の出入はなかったかそれを見究めさせ、序に脱走者についての風評なども探らせようとする叔父の心算でありました。与作の保護には、叔父は敏捷なグレイホンドを一疋伴わせました。三歳になったばかりの漆黒猟犬は、神の如くに聰き風の如くに疾駆する、この平原の帝王でありました。与作は棍棒を打ち振ってエドワードを指揮しながら、深い闇の中に消えて行きました。

与作を送り出すと、叔父は庭場に下りて犬を一疋一疋順に撫で乍ら、久しいことそこに蹲って居りました。

『皆しっかりしろよ、な、』こう云い乍ら。叔父は平生犬が好きで、この辺としても可成りに多数飼っている方でしたが、扨こうして意外な事に出逢うて見ると、犬を持っている為めに非常に心丈夫に感ずるのでありました。

七時、八時、九時と秋の夜も段々更けて行きました。けれど子供達に至る迄仲々床に入る事はいたしません。皆がいつ迄も中の間で一緒に声を潜めて話し乍ら与作が帰るのを待ちました。その間は長いことでありました。

とうとう犬が呻り出しました。続いて二声三声彼等は声高く吠え立てました。戸外からは暗を縫うて聞き慣れた与作の口笛が聞えて来ました。更に土を踏む草履の足音も聞えて来ました。遙かに後れたエドワードを呼び立てているものと見えて、高く低いその口笛が平原を向うに水のように流れて行きました。晴々としたその元気な口笛を聞いていると、何事の異常もなかったことが想像されて、感じ易い叔母は涙さえ浮べているのでありました。大人は誰れも安心の吐息をつきました。

『与作かい？』叔父は待ち兼ねて、与作がまだ戸を叩かぬうちに戸の前に立ちました。

『只今帰りました。遅なりました。』与作の若い声が戸外で答えました。

叔父は戸を細目にあけて与作とエドワードとを家に入れました。

『寒かっただろう。もっと火の方によりな。』

『与作、こっちにお出で、今お茶をあげるからね。』

『与作に僕のビスケットをやりましょう。』叔父の長男が突然分けて貰っていたビスケットを与作の方に差出しました。今夜は誰も彼も、人を愛しても愛し足りないような不思議に劇しい魂の目覚めを覚えているのでありました。

『変りはないだろう。』叔父は与作が落ちつくのをまって訊ねました。

『何にも変りはありません。向うの耕地も半分ほど歩いて見ましたが、変った様子もありません。エドワードは野鼠ばかり追っかけて戯け切って居ります。人っ子一人通ることではありません。』

『石川さんや松田さんは？』

『皆寄って来ました。念の為林さんや上田さんにも寄って見ましたが、話も出やしません。上田さんではこっちから脱走者があったそうですと云いましたら、へえって驚いていなすったっけ。』与作の話を聞いていると叔父はよろこびと安堵との為めに与作の手を押し頂きたいと思うほどでありました。一旦決心して脱走者をかくまいはしたものの万一それが発見されたら？その時の危険の予想が可哀想にも叔父の心を深く暗くしたのでありました。

『では、あの人を茲に連れて来ても好いでしょうね。』叔父は老人にこう相談しました。脱走者は万一の時を慮って、一寸目立たないところにある枯草の小屋にかくまってあったのでありました。

『好いだろうね。然し要慎の為めにはエドワードと外にブチでも外に放しといたが好いだろう。』どこ迄も用心深い老人がこう発議しました。叔父が二疋の犬を賺して外に放っているうちに与作に導かれて脱走者が入って参りました。

『さあ、こっちにお入りなさい。小屋は寒かったでしょう。』叔父はこう声をかけ乍ら、始めて少し落着いた気持をもってその人を眺めたのでした。そして気の毒な脱走者が今極度のよろこびと興奮との為めに、木の葉のように身体を慄わせていることに気づきました。

北海道の中でもまだ開けない北部北海道には、一体に貧しい移住民対手の商人の集団が、海岸や海つづきの低地などに相集って造えた小さな部落がそここに散在します。こうした部落の海岸に四月末の解氷期から九月迄の間に、突然船腹を真赤に塗った奇怪な小型の汽船が汽笛を鳴らして入って来ることがございます。汽船と云うものが入ったことのない土地でありますから、始めのうちは移住民達は走り出てそれを見に集まったものです。すると、汽船からは二百、三百と云う数の様々の服装をした貧しそうな人達が下されて、雪の上を素足でブルブル震え乍ら（或る者は浴衣がけのまま）武装した人相の悪い少数の人達にどなられ乍ら上陸いたします。

この人達は誘拐者によって凡ゆる手段で誘拐されて、北

部北海道の鉄道工事に働く為めに送られて来た気の毒な人達であります。この人達はそこに着くとその儘、鉄の棒をはめた、唯だ一つしか入口のない小屋に入れられて、外からピーンと錠をかけられて了うのでございます。そして翌日から朝は夜明けから小屋を引出されてその附近に行われている鉄道の工事に追い使われ、粗末な、犬でも顔をそむけるような食物を宛てがわれ、日暮れには又火も充分なく夜の道具もないその小屋に、家畜でさえこんなにはあしらわれはしまいと云う様にして投げ込まれるのであります。実際彼等は家畜以上には見られていない丈けでなく、その待遇の不条理と残酷とを意識すると云う理由にならない理由の為めに、この地方の奴隷所有者から、あらゆる悪意と敵意とをもって待遇されているのであります。そして反抗と逃走とを防ぐ為めにはピストルがあり棍棒があり笞があり、更に死でさえも平気で使用されるのでありました。

彼等には日給と云うものは定められてありますけれど、不当に高価な食料や草鞋代などに貪り取られるので、実際には十銭の金も手にしたことはないのであります。そして粗食と過労とで身体のつづく限り追い使われ、一旦肉体が衰えると植民地の暴君等の為めに軌道下に生埋になったり高い崖から不意に突落されたりして、その生命をなくすのでありました。

こんな話が一時伝わったことがありました。落石の測候所に、一人の脱走者が投じて来たことがありました。脱走者は東京で医学を修業していたのですが学資に窮するところから甘言に乗せられて植民地の誘拐者の毒手に陥ったのでありました。その地に着いた學生は、労働に慣れない為めに半月もすると両肩をスッカリ痛めて了いました。けれど鬼のような奴隷所有者達は休息のためには寸暇も与えません。学生は破れて石榴のようになった肉の上に担い棒をかついで土を運ばなくてはなりません。死ぬほどの苦しみに堪えかねて、彼は死を賭して逃れ測候所に投じたのでありました。

翌日になると、使用者達は雪の上の足跡を辿って来て測候所に脱走者の引渡しを要求しました。所長は涙をのんで脱走者を彼等の手に返さなくてはなりませんでした。以前同じような出来事の為めに、『生命知らず』と称する無頼漢にとり巻かれ、脱走者をかくまった所員は遂に彼等の毒手に斃れたのでありました。

所長は脱走者に事情を告げました。悄然として死の宣告を聞いた学生は、もう運命の前に反抗しようと云う気力も余してはいない風でありました。

『あなたもここにいられる他の人も少しも恨みには思いません。然し帰って行っても私はどうせ殺されるのです。私は何度もそんな場合を目撃したのですから。それよりもどうか私をここで死なせて下さい。』そう云って彼は所長の卓上に並べてあった研究用のストリキネーを仰いでそこに倒れて了ったのでありました。

叔父の家では自分達の家に投じて来た若者も、同じ鉄道工事の場所から脱して来たのだとは、一見して誰も推測していたのでありました。叔父は若者の興奮の様子を見ると尚更に心を撲たれました。

『今近所をこの人に見せたけれど、別に怪しい風もないから安心おしなさい。君は実に運が強いのですよ。もっとこっちに来て茶でもおあがんなさい。』

叔父は今始めて灯下の下で落着いて脱走者を観察することが出来ました。疲労と睡眠の不足との為めに瘠せやつれては居りましたが、骨格の立派な、顔立に温和な落着をもった好ましい若者でありました。幾日も森林の間をさまよっていたものと見えて、着物は無残に破れ裂け、手足を痛めているようすでしたが、然もその若々しい元気に満ちた気性は少しもたじろいではいないようすでありました。家族の者は凡てそれをうれしく見たことでありました。

『お腹は減りませんか。ご飯を仕度させましょうか。』叔父はこう訊ねました。

『遠慮は少しもいりませんからね、気をユックリと落着けてここに二三日おいでなさい。その間に大抵様子が分るでしょうから。』老人も側から口を出しました。

『君、明日もそれから明後日も僕のところに泊り給え。』古い絵本などを展げてみていた次男が、脱走者の方を振り返り乍らこう云いました。皆がそれに笑い出しました。

脱走者は死ぬ思いをして虎口を脱して来て、ここで思いがけない一家の者から暖い待遇をうけて、他で見るのもいじらしいほど喜んで、興奮の余り一言も口には出せないのでありました。漸ようの思いで、

『今後生きている限り、今日の御好意は忘れません。』と云う意味の感謝を口にしたほどでありました。

その一時的の発作が静まるのを待って、叔父は又訊ねました。

『あなたは何歳になられたのです。』

『二十四になりました。』

『東京ですか。そして又どうしてこの恐ろしい北海道の土方などになられたのです。この辺では、鉄道のレールは下に人を埋めなくては軋ると云う位多くの人が悪辣な下受人達の犠牲になって死んで、殆んど生埋同然の目に逢っているのです。こんな怕ろしいところにどうして来たんです。』

『それをチッとも知らずに来たのです。』脱走者は今更に生命を脅されでもするように、身慄いを始めて暫時止めませんでした。

『四月の事でした。東京で少し失敗したことがあって、どこか地方にでも暫時行って帰り度いと考えていると北海道行の人夫が要ると云う広告を見ましたので、いろいろ話を聞くと甘い話なので、慣れないことは止したが好いと止めた人があったのを無理にやって来たのです。五月に室蘭について、あすこから汽船で来ました。』

『例の船腹を赤く塗った人喰船でしょう。』老人は静かに点

頭きました。

『あれをこの地方では人喰船と云っていますよ。あの船で一遍この沖を渡って来られると、もう諸君は滅多に生きて内地に帰られることは出来ないのです。一体それと云うのが……』

『お祖父さん、僕いつかあの船を見たでしょう。』今度は長男が古い画本の中から首をつき出して叫びました。

『そうだ、あれもこの春先であったのう。こうと、あれは馬鈴薯を下ろす頃だったから矢張り五月だったかな。やあ因縁不可思議の事だ、わし達はあなたが送られる時、その船がこの沖を通って行くのを見ましたよ、その時も白昼公然と極悪事が営まれるのを不思議に感じたことでしたが、あなたの運命がまだ盛んでこうして無事に脱れて来られたのだ。そして我々のところに投じて来られたのも深い因縁だ。打ちくつろいで身体を養ってこの先の旅にお立ちなさい。』老人が不思議なめぐり合わせに興奮して語れば、脱走者も更に打寛いで、『送られた』以後の事情をボツボツと物語るのでありました。

　彼の一行が上げられたのは、型通りの僻村の部落でした。そこから二里ばかり歩いて行ってバラック式の小屋に入れられ、翌日から十三時間の不断の労働に就かされたのでありました。室蘭以後は待遇が変ったことによってうすうす感づいていた怖ろしい運命が、今目の前に形になって現われたのを見ると、犠牲者達は二日ばかりは飯に手を出す者はなかった位でありました。そして一度は二人一度は三人逃げ出そうとして失敗して、怖ろしい殺され様をして死にました。それ以来、それ迄いくらか希望をもって楽観していた者も、パタッと希望を捨てて了いました。

『そして諦めたと云うのか自暴になったというのか、皆だまって働いています。』こう云うと、その男は又劇しく涙を流しました。聞いていた家族の者は、言葉の返しようがないのでありました。皆が危険を冒してその男をかくまったことを、今では替え難い幸福にこそ思え、ツイ少しさっき迄、いくらか当惑した不安な感をもっていたのは今ではもう跡もないのでありました。

『そしてあなたはどうして脱走ができたのです。よく大胆にやれましたね。』叔父が最後に尋ねた事は家族の者が最初から聞きたがっていたところでありました。ヒソヒソと話していた者も話を止めて了って、皆が一の耳、一の眼になって、脱走者の方を向き返りました。

　戸外では又雄阿寒颪がひどく荒れました。エドワードが誘われたように遠吠に吠えました。

『ホンの一寸した思付が役に立ったのです。私共は――連が一人あったのですが、山に逃げ込むと直ぐに樹に登って了ったのです。そして一昼夜その儘動かずにいたのです。奴等はそれに気が付かないで、私共が村に出るか鉄道に乗るかするだろうと思って、飲食店だとか停車場だとかばかり警戒しているのでしょう。ホンの一寸の気転だったので

すが、こうしてここ迄落ちのびたのです。』こう冒頭して、彼はその時のことをポツリポツリと話しました。

彼とその連とは五日ほど前の夕方、一寸した隙を見たので運んでいた土をそこに投り出して山を目がけて逃げ出したのでありました。併し附いていた監督がそれに気付いたのは大して遅くはなかったと見えて、二十間も走ったかと思ううちに、彼等の後方でピストルの音を聞きました。そして十人ばかりの者がバラバラと後を追っかけて参りました。

然し幸いなことに、山に入ると間もなく日がトップリと暮れて了いました。追手の者も事情に慣れない脱走者は山中で熊に襲われるか、幸に遁れても一週間か十日のうちに鉄道のある方に立ち廻って沿線に警戒している手先の者に捕って送り帰されるのが常なので、強いては追わなかったと見えて近づいて来る様子もありませんでした。二人は直ぐに手頃の樹に登って了いました。

そして二昼夜をその儘樹の上で暮し二日目の夕方樹を下りて、仕事場の側に一週間も前から準備して盗んで置いた着物と弁当の南瓜を固めて入れて置いたバケツとを窃にとり出しました。そして服装とお腹とを造えて網走の方角と思われる方に歩き出しました。

『そして連はどうしたのです。追手にでも逢ったのですか。』叔父は慌しく再び尋ねました。脱走者は微笑しました。

『ところが今朝でした。咽喉が乾いて仕方がないので、連の者を置いて谷に水を呑みに出かけたのです。すると方角を失って、どうしても以前のところに出られないのです。マゴマゴしているうちに耕地が見えましたので、危険だとは思ったが出て見たのです。』脱走者はそこに来ると何とも云えない表情をして急に話を切りました。彼は又今更に自分の運の尽きなかったことを寧ろ不思議として既往と現在とを思い較べている様子でありました。

『連の人も食物を充分に持って居られたのなら、或は逃げ了せられるでしょう。あなたももう大抵大丈夫です。然しまだ危険区域を出ては居られません。ここから南の方に四里ばかりあるところにも矢張り鉄道工事をやっていますが、奴等はどうも連絡をもっているらしいから油断はできません。極く秘密にここで二三日身体を造えて釧路に御出なさい。あすこに私の懇意な役人で信用できる人があるから、あすこからどうかして船ででも内地の方に行かれる事に取計って貰いましょう。』

そしてその夜は脱走者は久し振に暖かい床の中で故郷の夢を見乍ら眠ったのでした。時計が二時を打つと家族の者も始めて安心して床に就きました。

脱走者は三日ほど叔父の家に止って四日目の朝早く充分の食料をつけて出立しました。彼は鉄道の沿線をさけて、半分山道を辿って釧路に出ようとするのでした。

老人が養老の為めに蓄えていた蓄財の中から旅費にも余

る丈けの金額を割いて送りました。叔父は若い頃着古した背広と外套とを送って、若者の服装をスッカリ替えさせました。黎明の薄光の中を雇男に送られて振返り勝に行く若者を見送った時、叔父の一家の者は口にも言葉にも云い現わせない幸福と勝利の感を経験したのでありました。生命の危険をさえ冒して他人を愛した時、愛は始めて劇しく燃え立ったのでありました。叔父はよろこびの余り、老人の手を取り子供達を胸にかい抱きました………

* * *

久し振で買物その他の用向の為めに上京した叔父が、この話を私にいたしました。が、私には到底それは事実だとは信じられませんでした。

『そんな事をいつか亜米利加人が、移住時代の事を書いたもので読んだように思うけれど、それがこの日本の而も北海道のように内地同様に考えられているところで行われていようとは私には一寸信じられませんね。』私は叔父がどの点からでもそんな戯談を云う人ではないとは知っていたのですが、それでもどうもその儘には受取れませんでした。すると叔父も大してそれを気にする風もなくこう云うのでした。

『いや、その方が真個だよ。殊に東京のように警察権が好い意味にも悪い意味にも盛んに使用されて、警察力の威力を為政者が見得にしているところでは、そんな事実は想像出来ないのが却って尤もだ。けれど想像できるにしろ出来ないにしろ事実は事実なんだよ。維新以来急激に輸入された欧州文明が今頃北海道あたり迄浸潤しようとしてあの混雑をやっているのだ。

『僕等はまるで無政府無警察で暮しているのだ。実際三里に一人、五里に一人いる巡査が北海道あたりに流れて来る「生命知らず」の人達を相手に何が出来るものかね。而も名義丈は立派に警察があって生命と財産とを保護していることになっているから、移住民同志で相互扶助的な団体を造えてその団体力でその種の悪事を牽制すると云うこともできないのだ。』叔父はこう云って何かツクヅク溜息をついて居りましたが、更に又こう申しました。

『俺はどうもこの近代文明にどうも気に喰わないところがあると考えていたが、この頃になってヤッとそのどこに欠陥があるかということが分って来た。人の生命を浅草紙でも使うように粗雑に扱って平気でいられるのは矢張り近代文明の悪い感化の一だよ。その点から云えば中世紀文明はその要素がまだ精神的のものであった丈け、まだその感化なども近代文明ほどに毒々しくはなかったようだ。丁度戦争の惨虐が増した程度に他の方面でも物質文明は多数の人間を器械視し同時に虐待している。ヒョットしたら俺達はもっと野蛮でもっと非文明であって好いのかも知れないよ。

『そこで思い出すが、何かで読んだ事がある。メキシコは欧羅巴人が始めて侵入した時は実は不思議な文明を楽しんでいた相だよ。土民は富の程度が大抵平均して、住居なども同じように庭園を抱えて、清潔な気持のよいものであったそうだ。ところで欧羅巴の文明が這入って行くとどうだ。今のあの混沌とした有様だ。実際俺は今の人達が文明が智識だと騒いでいるものには大して人間の生活を高めるものはないと見ているよ。政治はどうだ、教育はどうだ、産業はどうだ、改革を要することばかりではないか。俺は近代文明は決して支持するに及ばないと堅く信仰を立てているよ。』

私はいつも向う見ずで、時代に余り流行らないことを云って平気なこの叔父が大好きで厶います。私はこの小説を読んで下さる皆さんにも私のようにこんな叔父がおありなれば好いと考えます。……

一九二二年一月「種蒔く人」

光を掲ぐる者

荒畑寒村

秋の末であった。擂鉢の底のようなAの鉱山町には、霧のような氷雨がさびしく降りそそいで居た。

Kは、坑夫の間の同志なるSと、Mとの援助を得て、この鉱山に働く坑夫の間に、労働組合の組織と社会主義の思想とを宣伝に来たのである。

A鉱山は、何処の鉱山もそうであったが、未曽有な不景気の為に大打撃を受けて、坑夫の解雇された者も少なからぬ数であった。いま残って居る者とても、賃金の大削減を受けた為に、辛うじて露命をつなぐだけの稼ぎしか出来なかった。従って坑夫等の意気は頗ぶる銷沈して居た。彼等は、いつ解雇の悲惨な運命に接するかも知れないと思い、いつ賃銀削減の恐ろしい魔手に掴まれるかも知れぬと気遣う一方では、絶えず文字通りの飢餓のために苦しめられて、オドオドし切って居た。彼等は何処の山も不景気なのを知って居たから、A鉱山を去ることも出来ない事情に在

った。そして昔の農奴のように此の山に縛りつけられて、全く彼等を見捨て去ったかの如き観があった。

Kはそう云う状態の中へ入って来たのである。SやMは、その運動に対する熱心と、主義に対する狂熱的な信念とにかけては、Kが知れる限りの最も真摯な、最も犠牲的精神に富んだ同志であった。然し不幸にして、ここの山でKが知って居る同志と云っては、僅かにこの二人に過ぎなかった。それに猶お悪いことはKはまだ一度も会った事はないのだがSやMの仲間で、年も若く、頭もよく、そして最も活動的だったYと云う坑夫がつい先頃、坑内で作業中に脚に重傷を負うたために、今日のK等の宣伝運動を手伝うことが出来ないことだった。

「困ったなァ、Yが達者でさえ居て呉れれば、方々の部屋を駈けずり廻って、大勢あつめて呉れるんだがなァ。」

K等が町から、坑夫部屋の散在する山の方へ歩いて往く途すがら、Sは彼自身の無力の為に、折角Tから伝道に来て呉れたKを満足させる事の出来ないのを、羞じでもするようにこう云った。

Sは真摯な、熱心な同志ではあったが、その性質はどっちかと云うと寧ろ内気な、温和な方であったが、Mの方はそれとは反対に、激烈で性急で、常に戦闘的であった。彼はSの嗟嘆を遮ぎるようにして言った。

「構うことがあるものか、Yを引っ張り出せばいいじゃないか。Yは脚の怪我ぐらいにヘコたれて、俺達の運動を等閑にするような人間じゃないよ。今夜、Kさんが来て路傍演説をやるのだ、俺達にはお前の腕貸しが要る。仲間を集めたり、本を売ったり、話をしたりする上に、どうしてもお前の腕貸しをして貰わなくちゃならねえ。今夜は大切な晩なんだ。この山に俺達の同志と、労働組合を作る大切な折なんだ。こう云って見ろ、Yは足を曳きながらでも出て来るョ。彼奴に知らせなかったら、それこそ却って怨まれなくちゃならねえぜ。」

「そりゃ解ってるョ。然しあの足じゃ、到底長い道は歩けそうもないじゃないか。」

「俺がそれを知らねえとでも、お前は思ってるのか。」Mは噛みつくように怒鳴った。

「そんなこたァ、今更云う迄もねえじゃねえか。だが、今夜は彼奴が居なくちゃとても手が足りねえのだ。ナーニ、そう云や屹と出て来るョ。Kさんが演説をするんだと云って見ろ、屹と飛んで来らァ、奴はいつもKさんの書いたものを読んで、どうかして一度Kさんの演説が聞きたいと、平素から口癖のように云って居たじゃねえか。」

やがてK等は町を出はずれて周囲に坑夫部屋の散在して居る、坑口近くの広場へ来た。その時はもう、冷めたい氷雨の煙って居る中に、夕闇が忍ぶように押し寄せて居た。広場の中央には何に使用されるのか解らなかったが、誰も住んで居ない一軒の古小舎が立っていた。彼等はその軒下

に入って、僅に雨を凌ごうとした。SとMとは、携えて来た棒を広場の地面へ立てて、それへカンテラを結びつけた。そしてKの持って来た小冊子の中から、一番価の安いものを選び出して居た。こんな天気の悪い晩には集まって来る者も少かろうし、よしまた集まったところで事実、其日其日の暮しにも困って居る坑夫に取っては、十銭以上の金を出して書物を買うと云うことは、殆んど望まれない事であったからである。

Kは外套の襟を立てて、氷雨の顔を打つのを防いだ。然し、彼の古い中折帽は、縁からボトボト滴が垂れる程、雨でグズグズに濡れて居た。彼は辺りを見まわした。広場は荒廃した墓場のように、陰惨な影を漂わせて居た。周囲の平家作りの坑夫部屋には、ところどころ灯影のもれて居るのもあるが、彼が数年前の夏、このA鉱山へ初めて遊説に来た折り見た所のような、賑やかな唄や、烈しい騒ぎはその何処からももれて来なかった。

「これは思ったよりも酷い。これじゃA鉱山は、まるで死んでしまったようなものだ。あの快活な、剛健な、地底の子供達はいま何処へ往ってしまったんだ。」

Kは心の裡にそう思いながら、再び寥廓たる周囲の光景を眺めやった。四年前の夏！　黄色い大きな月はやはり此の広場の上に高く輝やいて居た。精錬所の大煙突から立ち上る火の色をした煤煙は、空の方へ往って渦巻のように拡がった。坑夫部屋からは、野蛮なしかし快活な騒ぎが絶えず湧き起って、広場を越した街路には男や女の群れが往ったり来たりして居た。硫黄くさい風が水のように流れる町の上には、幼稚な調子の銀笛のひびきが漂って、それがまた彼の胸に甘い哀愁をそそった。

それに較べれば、今は何という静寂、何という沈黙だろう。彼がいま目撃しているA鉱山は、今日彼が町に入るまで、旧い記憶を辿って描いて居たA鉱山に比すれば、まるで死物であった。廃址であった。そしてKは彼がいま近つも一人の同志も存しない労働者町に、初めて宣伝に入った時に経験したような、便りなさと心細さとを感ぜざるを得なかった。……然し此時、彼の瞑想は突然、Mの荒っぽい声で破られた。

「オイS、ここはいいから、お前、方々の部屋を廻って仲間を駆り集めて来て呉れ。そうしてYも引っ張り出して来て呉んねえ。」

Sは黙って、広場を越えた街路の向う側に散在する、坑夫部屋の方へ歩き出した。と、Mは再び彼の背後から呼びかけた。

「だけどなア、Yが若し出られないようだったら、無理に引っ張り出すにゃ及ばないぜ、出て来られなきゃ俺達だけでやるから。」

「よ――し。」Sの声が夕闇の中から聞えた。そしてMは、カンテラの火を雨のために消されまいとして、いろいろにそれを蔽う工夫をして居た。

「Y君は酷く怪我をして居るって云うじゃないか、こんな晩に出て来ちゃよかあるまいがなア。」

Kが心配そうにこう云うと、Mは非難するような調子で云い返した。

「あなただって、こんな晩に喋べるのはよかありませんや。だけど、今夜はこの山に組合が拵えられるか、そこ迄往かなくても、たとえ僅かでも同志が出来るか、と云う大切な折なんです。Yが達者でさえ居て呉れたら今頃は立派な組合も出来たろうし、社会主義の同志も……。」

Mは突然、その言葉を断ち切って、坑口の方から街路を下って来た一群の黒い影に叫んだ。

「オーイ、今夜はTから来たKさんが、これから此処で演説をされるんだ。労働者の団結と、社会主義の話をされるんだ。皆な来て聞けやイ。」

黒い影の群れは立ち停った。が、暫らくそこへ立ち止まった儘、聞こうか聞くまいかと思案して居るように、すぐこっちへはやって来なかった。と、其の中から一人の声が起った。

「そんな話を聞いたって始まらねえや、俺たちゃア、食うや食わずで居るんじゃねえか。」

それに対して、大勢の高笑いする声も起った。Mはすぐカッとしたような調子で、

「だからヨ、Kさんの話を聞いた上で、もし解らねえ事があったら、質問すりゃいいじゃねえか。俺達はいま全く食うや食わずの惨めな境界に居るんだ。だが、この山を持って居るFはTで贅沢な暮しをして居るじゃねえか。貧乏して居るのは、俺達のような労働者ばかりなんだ。資本家は労働者が貧乏して居る時だって、贅沢な暮しをして居るんだぜ。Kさんは今夜、その訳を話して呉れるんだ。そうして、如何すれば労働者が、こんな惨めな境界から脱れて、働らいて居る者が貧乏して、遊んで居る奴が贅沢をして居るような不公平な世の中を、もっといい世の中に改める事が出来るか、その筋道を説いて聞かせようって云うんだ。」

Mは熱狂したように、闇の中へ向って叫んだ。カンテラの火が冷めたい風にゆらめく度毎に、彼の頑丈な横顔は闇の中に赤く照し出されては、また消えてしまった。黒い影の群れからは、坑内で仕事をして居た服装の儘の労働者が二三人、妙にハニかむような態度で広場の方へ寄って来た。しかし、他の群れは何事か話しながら、街路を下ってしまった。

「オイ、皆なもっとこっちへ寄って呉れ。いまSが方々の部屋を廻って居るから、もうじき皆なやって来らア。それにYも、きっと出て来るに違ねえから。」

「Yが出て来るって？ 今朝、足がバカに痛むって寝て居るゼ。」

「こんな晩に出て来ちゃ、後でまた体に障るだろう。」

Mは坑夫等の言葉が、彼の所置を非難でもするかのように取った。

「Kさんだって、こんな湿っぽい晩に、こんな野天で演説するんだぜ。俺だって、Yがこんな晩に出て来るのはよくない事は知って居るヨ。然し、今夜は俺達にとって大切な折なんだ。今夜、Yを引っ張り出さなかったらそれこそ後でYが、却って怒るっ位いなものだ。この山の坑夫が皆な団結すれば、俺達が皆な社会主義を信じて、その目的に突進……。」

Mの言葉は、坑夫の一人があげた叫びに断ち切られた。

「ヤア、Yが来た、来た。」

Kは街路の方を眺めた。Sと一緒に連れ立って、両方の足を重そうに繃帯した中脊の一青年が、杖にすがって悩まし気に歩いて来た。Kは、彼がカンテラの火光の照す範囲内に入って来た時ジッと彼の容貌を熟視した。彼は二十四五の若者で、すべての容子が彼と同輩の坑夫から異なった所はなかったが、只だその容貌だけは、他の幾百の坑夫と異なっていた。それは実にSやMのそれとさえも異なれる、悩ましい且つ悲痛な堅忍の表情を深く刻める、人なつこい顔であった。彼の容貌には、多くの坑夫の容貌を醜悪にして居る労苦の痕跡は認められなかったが、然しその額や口の囲りの浅い皺は、如何にも不撓不屈の精神を以て耐え忍べる、霊魂と肉体との無限の苦悶を語って余りがあった。

「君がY君ですか。僕はKです。」

KはYの空いて居る方の手を握って、自ら紹介した。

「僕等は今夜、坑夫諸君の団結と、社会主義の思想とを宣伝しようとして居るのですが、君に腕貸しをして貰えるのは何より愉快です。」

Yは何と答えていいか解らないと云ったような表情を顔に浮べて、黙って熱心に握手した。然し、KはYの顔が、彼の信頼的な語調に対する喜悦に依て、輝やいて居るのを認めた。

「君の足の怪我はどうです。君が僕等の宣伝を援けて呉れるのは嬉しいけれど、傷に障りはしないか、それを心配して居るんです。一体、どうしてそんな怪我を したんですか。」

「つまり、完全な機械を据えつけて、熟練した職工に操縦させるには、余計金がかかるものですから、鉱山主が不完全な機械を、不熟練な職工に 操縦さして 居る 結果なんです。」

Yは、まるで他人のことのように、極めて冷静な調子で話した。

「僕等の働いて居る鉱山の、最下層の坑道のシャフト（竪坑）の底には、いつでも水が溜って居るのです。この水は坑道全部から流れ込むので、絶えず蒸汽ポンプで汲み出して居るんです。で、シャフトの底の水は、そのポンプから吐き出される蒸汽の為に、グラグラ煮えくり返って居る位いです。

ある日、僕等は七人して、ケージ（吊籠）で降って往き

ました。その時、シャフトの頂上で機械を操縦して居た男が、誤まってケーブル（鉄索）を緩めたもんですから堪りません。ケージはシャフトの底に落ち込んじまったんです。そして、僕は曳上げられるまで、踝の上まで浸る位いの熱湯の中に立って居たものですから、それでこんな大火傷をしたんです。然しナニ、もう大分いいんですから、どうか心配なさらないで下さい。」

彼はそう語り終ると、寂しそうな笑いを浮べた。そして「僕は失敬して腰をかけさせて貰います。」と、Kに会釈しながら、小舎の縁側に腰を降した。既にカンテラの周囲に集まって来た多くの坑夫等は、今更のように好奇心に燃ゆる眼を輝やかして、Yの物語りに耳を傾むけて居た。

「それじゃ、こんな晩に出て来るのは悪かったなア。」

Kが心配そうにこう云うと、Yは再びその悲痛な微笑を浮べた。

「然しあなただって、こんな晩に演説なんかするのは、余り体によかないでしょう。Sから聞いた所では、あなたは今日、Nから山越しにこの町へ入って来たんだって云うじゃありませんか。そんな疲れた体で、こんな冷めたい雨の晩に演説なんかされるのは、決してよかアありませんヤ。然し、Kさん、光を掲げる者は……。」

彼は急にその言葉を断ち切った。それは恰かも、頭の中の半作りの考えを完成できなかったようであった。

「今夜はどうかして、たとえ僅かでもいいから、シッカリした同志を作りたいものです。そうして、芽ばえのような物でもいいから、本当に戦闘的な労働組合を拵えたいものです。僕の足の火傷ももう大分いい方ですし、それにすっかり癒った所で、二度と鉱山で働らくことは出来なくなってしまいましたから、これからは宣伝の為に働らく時間も出来たと云うものです。」

Kは彼が、「二度と鉱山で働らけなくなった」と云ったのに、いささか驚ろかされた。彼は暗い深いシャフトの底でふたたびケージの降される迄、煮えくり返る熱湯の中へ立って居た為に、二度と働らけなくなったと云うYの怪我を想像して見た。そうして、赤剝げになった肌へ障られたように激しい痛みを神経に感じた。

「会社は君の今後の生活を保証して居るんですか。だって君の怪我は、会社が熟練した職工を雇って居なかった結果じゃありませんか。」

Kはふたたび、Yの顔に悲痛な微笑の浮ぶのを見た。それと同時に、彼の背後に苦々しげな憤怒の叫びを聞いた。彼は驚いて後をふり向いた。そこには、SやMの駆り集めて来た坑夫等が、既にやや大きな群衆を作って居た。

「会社だって？　ナンの人！　あんな鬼のような奴等が、一文の銭だって出すものか。Yの今日までの療治にだって、其日暮しの仲間が無けなしの銭を集めて居るのに、会社は鐚一文の見舞もよこしやしねえんだ。」

偉大な体格をした男は、そう云ってまたSと前の続きら

しい話しをし出した。Kはふたたび、Yの方へ向いた。
「で、君と一緒に居た六人も、やはり君のような大火傷をしたのかネ。」
「いいえ、外の者は別に怪我はしませんでした。奴等はシャフトの壁に飛びついて、何でも構わず手当り次第に掴まえたんです。ですから、熱湯の中へ落ちることは免がれました。」
「じゃ何故、君もそこへ飛びつかなかったんです。」
「だって、安全灯を落す訳には往きませんでしたもの。若し安全灯を落して、辺りがまっ暗になってしまったら、それこそ外の者は掴まえ所を見出す事が出来やしません。その時、安全灯を持って居たのは僕だったんですから。」
　Yは自分のした事が、当然極まる事ででもあったように、何の感情も現わさず、冷静に話して居た。だが、まだKには、彼の云う意味がハッキリとは呑み込めなかった。
「数人で一緒に働らきにシャフトを降る時は、一人が安全灯を持って往くんです。僕等がシャフトの底に落ちた時、もし灯りがなかろうものなら、それこそ一人として、大火傷をしないでは居られなかったに違いないんです。だから、安全灯を持って居た僕は、どうしてもそれを落す事はできなかったんです。そして、安全灯を落さないではシャフトの壁に飛びつく事は出来ないでしょう。」
　Kはしばらく黙って居た。彼は息が詰るように感じた。彼はその双眼に、血のような熱い湯が漲ぎって来るのを感じた。そうして又、炎の潮のような感情が、彼の身うちに溢れ出したのを感じた。
「Kさん、もう始めましょうか。切角集まった者が、散ってしまうといけませんから。」
　Sは彼の肩越しに、囁くようにして云った。
「よし、始めよう！」
　Kはカンテラの灯を背に負うようにして、一歩前へ踏み出した。彼の声は、初めはやや震え且つカスれて居たが、議論の進むに従ってだんだん力と熱とが加わって来た。彼の一語一語は、熱情の瀑布そのものの如く、冷めたい氷雨の降りそそぐ、闇の広場の上に拡がって往った。彼が資本主義の社会制度を論じ、労働者搾取の経済組織を論じ、その之れが圧制と桎梏より解放される手段として、労働者の政治的及び経済的団結を説くに及んで、彼は熱情の高潮に達した。彼はカンテラの貧しい火光に照されて、闇の中に浮べる多くの顔が、熱心に彼の演説に聞き恍れ、貪ぼるが如く彼の言葉を吸い込んで居るのを見た。彼は自分でも、その演説が聴衆の上に深刻なる効果を及ぼして居ることを知った。彼はまた、この氷雨にも拘わらず、聴衆の数がだんだん増大し、膨脹して往くことを認めた。然し、彼のすべての考えを貫ぬいて、只だ一つの言葉が絶えず脳裡を走りつつあった。
　光を掲ぐる者！

（一九二二年四月『前衛』）

或る機械

細井和喜蔵

昨日まで調子よく廻わっていたウォータア・マングルが、どこの工合いかまた狂い出しました。

此の機械は、左右二本の柱から成る頑丈なベットに、直径三呎もある図太いロオラアが、三本縦列して取り付き、それを廻わすのに是れ亦素敵に巨きな歯車があります。直径が人間の身長ほどもあって、アームは股たぶらより太く、ピッチは三吋もあるのです。驚く可き巨大な歯車です。其の巨きな歯車が、回転する音ったらありません。思わず足が竦んでしまいます。高く積みあげられた、分厚い煉瓦の外部から是れを聴く時、ライオンの唸りよりも怖ろしく聞こえます。全速度で運転している夜業の折などに、一丁も隔った処で佇ち停まると、恰も地震の揺り返しのような地響きがしています。

此の機械は、黒い袴の少女達が織り上げた布を、ロオラアに咬ませて圧し潰し、布の表面を滑かにして光沢を出す機械です。力織機で織り上げた布を拡大鏡で検ると、其の経糸と緯糸の交叉された態が、宛ら莚の如く荒っぽく醜くありますが、一度此のウォータア・マングルに掛けると、アート・ペエパみたいに美しく滑かにならされます。

あの時のことを思い出すと、身顫いし寒気を催します。あれ以来、私の多少の幸福も、全く葬られてしまったのです。何んという怖ろしい、忌わしい出来事でしょう。私は、怪物のような、ウォータア・マングルを、呪咀わないではいられません。

一体、何所の誰人が、何時の頃あんな怖ろしい物を拵えたのでしょう。拵えねばならぬ必要が、果してあったでしょうか？　「発明史」というような本を調べれば、屹度ウオータア・マングルを発明した人の名前を載せて居るでしょう。私は其の人を怨みます。恨まないではいられません。あんな機械を発明さえしてくれなかったら、十年以前の私も、今日の私も、些とも変わらないのです。噫！　あの憎む可き機械は、多くも無い私の幸福を、奪ってしまいました。

併し、こんな愚痴をこぼしてみたって仕方がありません。機械は「機械とは、運動を制限し、天然勢力をして一定の仕事を為さしむる装置にして、抵抗性を有する物体の、組み合わせなり。」ちょう定義に基づき、鉄や革や木の組んだ、魂の無い無生物なんですから。鋳物や材木を相手

どって、文句言ってみたところで、野暮な話し、矢っ張り是れを拵えた、創造者が悪いと考えるより、心の持ちようがない訳です。憎たらしき発明家よ！　私は、発明家とは人道の、平和の幸福の叛逆者だと言います。発明家なかりせば、私等のような第四階級の発生もなく、人類は斯程まで不幸に陥らなかったであろうにと思います。殊に、凡ての作業機械の原動機となる、スチイム・エンジンやタアビン、ダイナモなどを発明した者こそ、一倍罪を負わせなければなりません。原動機さえなければ、リチァアド・アークライトが紡績機械を作っても、大丈夫、運転する気遣いはなくて済んだでしょうし、其の他凡ゆる作業機械は、是れを発明する人が現われなかったに相違ありません。

私は、じいっと左の手を凝視めます。そうすると、何だか遠い遠い不幸の国へ伴れて行かれるような心持ちになって、泣き度いような悲しさが、胸のあたりから込みあがって来るのを覚えます。……悲しみは交流電気の如きダイヤグラムとなって、始め低く漸次高く、最高頂よりまた漸次低く下がってゆきます。そうした一循環の悲しみのポーズが経ぎると、今度は怒りのダイヤグラムが、前と同じような形ちに画かれます。最初低く中で高く、終りに元の低さに復す。その怒りのポーズが済むと、三度悲しみの線図が、無窮に進展する宇宙の空間に向かって画かれるのです。若し万物を支配する神が、宇宙のどこかに在るとするなれば、其の神の玉座から人間の頭に向けて一本の線が引かれて居り、如何に数奇な運命も、奔放な生活を為る者も、結局は其のラインより、多少いりくりするくらいなもので、線を中心として空間に、悲怒のダイヤグラムをつくって行くに過ぎないでしょう。少くとも私等第四階級はですよ、喜楽などには、あんまり縁遠いです。

私の腕はありません。肩の部分から切れてまるっきり無いのです。袂がダラリと垂れ下がって、見っともないったらありません。私が十五六で、まだ「バンドル掛け」という少年労働者だった頃、工場の風呂番が片手無しの不具者でした。私等は五六人の仲間と一緒に、

「風呂番の手無し
それでも嫁別嬪
一ト晩貸せや……」

と歌って得意になったものでした。今考えると、随分非道いことを言ったものだと後悔します。

それはもう一ト昔、十年も以前の話しですが、梳棉機という輪転機のような機械が、高速度で廻わって居りました。大体紡績機は多くロオラアを用いていますが、其機械も表面針の筵から成る二個の大円筒が、間隙僅か一千分の何時ちょう、密接した位置に取り付かって居りました。風呂番の手無しがまだ不具でなかった時、五千余人も居る女工の裡で、織姫とさえうたわれた工場一の評判娘に恋して、想い成らなかった口惜しさに、梳棉機で自殺を企てたのです。ところが拍子よく、腕を一本引っ

掻き捲った丈けで、体は別条なかったのです。此の生命懸けての恋に感動して、工場一の美女織姫が決心して、片輪の嫁になったのです。全く作り話のようなローマンスですが、事実なのです。とにかく風呂番の、手無しのかみさんは美人でした。

まだ其の他にも、いろんな工場で負傷した片輪がありましたが、どの人も余り見いいものではありませんでした。工場で犠牲になった気の毒な、同情せねばならぬ人々であるのに、そうした不具者達は少年の私の眼に同情どころか或る反感をさえ起こさせるのでした。おそらく、是れは私許りではなく、凡ての、不具者ならざる者に共通な心理でしょう。

動物の片輪は、草木や器物などの片輪に較べて全く醜いではありませんか。それは動物が、自然から与えられた体の一部分を欠損することが、草木や器物の、一部分の欠損よりか不自然だからです。

風呂番の片手無しを余所事として冷やかした数年の後には、私にお鉢が廻わって来たのです。醜い同情されぬ、寧ろ世間から邪魔物扱いにされねばならぬ、片輪に自分がなってしまいました。

併し風呂番の手無しのように、片手を落としても恋した女が得られるなら、まだしもですが、私のは風呂番の場合と全然正反対な行き方になったのですから、より一層みじめであり、機械を作り出した文明を呪うのです。私は、幸福とはどんなものだかよく存じませんが、それでも私の過去に幸福と名づけられるようなものが多少でもあったとすれば、恋した女と同棲したよろこびです。工場は不平に満ち満ちていました。永年忠実そのもののように働いても、些とも上の奴の眼には止まらず、後から入社った碌に仕事も出来ぬ青二才が、学校の免状の力でドシドシ昇進しました。十年以上も同じ工場に勤めた私が、二円の日給は取れません。上下半期のボーナスは五十円が関の山、しかも五十円のボーナスのお蔭で組長ちょう態のいい階級を授けられ、人より余計に働かされたり、人に文句を言わされたりせねばなりませんでした。工場の門を潜ったが最後、私の体は私の所有ではなく、怖ろしく不合理な権力の手脚として、人格を変換せねばなりませんでした。其所では、自由だとか、個性だとかいったものは絶対に必要がなく、反って大層邪魔になるのでした。凡ゆる人間を標準化して、其の労働は機械的動作でした。かくして万人を同一の鋳型に嵌めてしまわねば、製品の統一が欠けて、大量製産が成り立ちませんでした。

私は工場が厭でした。毎日毎日泣き度い思いで通いました。

少しも変化のない、機械そのものの定義のような労働に、ヘトヘトに疲れた私は、読書も運動も慰安とはなりません。といって、将棋も好まず、浪花節や八木節を唸ることもできませんでした。また昼の不幸をアルコールによっ

て忘れようとする程の、卑怯な心も有ちませんでした。
私は唯一トつ残されたる慰安として、肉を求めました。といっても、多くの女の肌を次々へと漁り歩くには、時間もなく、金もなく、良心も亦許しません。余りにそれは貧弱過ぎる私でした。

恋した女工と一緒になって、其の女一人を守り立てているに過ぎません。ただ劇烈に女の肌に近づくことを楽しみとして居りました。肝心な成長期から、永い年月、冷たい不衛生な工場の、敷石の上に暮らした女は、幸い姙娠の可能性を欠くようになっていましたから。

私は、凡そ肉と名のつくものは、何でも好きでした。豚でも馬でも、牛ならなお更らのこと、工場の帰路、最下等の切り混ぜ肉を三十銭許し買って帰り、飯のお副食に葱と煮て喰っては、妻と早く寝ることでした。

私等の社会に新婚なんていう言葉は一向適わしくありませんが、でも新婚当時は「幸福とはこんなものか。」と思いました。階下で火を焚くので、煙たくって涙の出る労働下宿の二階に、南京虫や蚤虱の攻撃を受けて、マシン油と人間の脂で、一種形容し難い悪臭のする綿の寄った煎餅蒲団に、野郎同志が喰っ着き合って寝た独身者が、同じような運命をたどって女工寄宿舎に、熟しきった女同志が、雑魚寝して居ったその一人と、少々恋し合って夫婦になり、新しい寝具の上に横たわった折には、不平も何も打ち忘れてしまい、工場のことなど眼中に置かぬ私でした。永い事虐げられた腹いせに、こんな幸福が訪ずれてくれた。私は上役を見ても、工場長に遭っても、唯もう感謝し度いような気になりました。

「今私が言ったこと、気にせんようにして下さい。あんな厭なことは言い度くないが、上から喧しく小言が来るので、仕方なく言ったんです。」

女に、そっと人目を憚って私語きました。私は整反部の組長でしたから、女工が疵の有る反物を誤魔化して納めたりすれば、一応召喚して、説諭せねばならぬ役目を負わされて居りました。紡織工場はよく女のできる処なのですが、そんな人を叱ったりする役目だったので、とんと私には女工が惚れてくれません。そんなことに頓着しませんでしたが、其の女に限って、表向き説諭した後から、言い訳けするのでした。私は其の女が好きだったのです。そして将来苦楽を倶にしたいなどと空想していました。

「妾叱られてもいいわ、度々あなたの顔が見られるから。」

女は以外なことを言いました。私はもうすっかり女の意中が分かったような気がして、女の廻わして居る台にぶら垂げられた運転袋のなかへ、恋文を書いて入れて置きました。二三日経つと女の織った布へ、返事の手紙が捲き込まれて整反部へやって来ました。二人は間もなく一軒の長屋に住むようになりました。それが私の捨てられた併し未だ

りません。

ウォータア・マングルの調子が損ねると、屹度取り扱い者が負傷します。私が覚えてからでも、是れで怪我した職工が十三人です。

其の日も常よりか調子が悪く、思うように布が仕上がりませんでした。私は、螺子を弛めてロオラアとロオラアの間隙を調節し、種々と加減していました。もう大丈夫と思った頃、暫らく空運転を掛けてみ、愈よ布を咬ませるという瞬間です。回転して居るロオラアの間へ長く接続した布の一端を、手で持って行って素早く挿むのです。私は数多のガイド・ロオラアを経た布の一端を左手で掴み、ロオラアに挿入する動作を行おうとしました。其の時流石老練な私も、どうした機みか布と一緒に指を喰わせてしまったのです。私はどんな風にしてやられたのか、薩張り覚えませんでした。パリパリッ……と音がして、――多分骨の折れひしゃげてゆく音でしょう。気味悪い液体が顔へ飛びかかり、ヒヤッとしたっきりしか記憶に残っていません。呀ッと思った刹那には既に気絶したのでしょう。気がついて見ると、私は白いベットの上に載っかっていました。そうして看護婦が側で雑誌か何か読んでいるのでした。妙な処だと思うと、左の肩の辺がズキズキ痛むのです。痛みは段々劇しくなって疼きに変わってゆきます……。ヒョッと見ると、先刻まで工場で仕事して居った私の腕が、全く影も形も無いのです。けれども意識はまだ明瞭りしませんでしたから、別に驚きもせず、夢のように茫然りして居りました。

妻がやって来ました。

「あんた、こんなになってしまって、どうするの。本統に不自由で仕様がないわよ。」妻は、大根でも切ったような腕の株たを撫でて泣きました。私もそれまで悲しくなかったのに、妻が感傷的な声で忍び泣くのを聞いて、急に悲しくなりました。

「私がこんな手無しになったら、お前は愛想つかして、おってけぼり喰わせるだろうなあ。」

妻は大声あげて劇しく長い間泣き続けました。

「あんたは、妾がそんな薄情者だと思っているのね。妾は、そんなに思われるのなら、いっそあなたのようになってしまった方がいいわよ。」

こう言って、私の胸の上に顔すりつけ、容易に泣き止みませんでした。

「会社のお医者では治りが遅いから、此所へ入れるように皆が骨折ってくれたのですよ。願書に千人判ついて、工場長に願ったのです。」

「フウン……此所は一体どこだい。」

「まあ、あんなこと言って。浅草の楽山堂だわよ。」
「あんまり楽にもないね。」
「呑気な病人、でもそんなことが喋舌れるようになっていいわ。」
妻は毎晩見舞ってくれました。工場からは、同胞が同情金を募って贈りました。

どこから働く力か、自からの修繕力は緩慢なようで速かでした。一ヵ月もすると病院の内部をブラブラ歩いて見たくなりました。外科専門の此の病院には、私と等しく運命づけられた不幸な人々が多勢居りました。入院患者の約半数くらいは、くしき文明の犠牲者でした。そうして其の亦半数は私の兄弟分で、貴い体の一部を機械様の人身御供に捧げた人でした。
「私は、造船所でクレインの下敷きになりました。」
「私は、硫酸ぶっかぶったのです。」
「私は、電気に感電しました。」
「私は電車に弾ね飛ばされたのです。」
「私は汽車の連結手ですが、これで二回目の入院です。」
それらの病友は皆、軽いので腕一本くらいはやられているのでした。夜々中に、血まみれた半死半生の怪我人を搬んで来ました。「片輪の伴れは大勢ある。私許りじゃない。」私は、こんなに思って、力強い味方ができたように考えるのでした。

五十年以前は、こんな怪我人が果して幾割りあったであろうか。それを考える時、世が文明になればなる程、貧乏人は不幸になることを何人でも考えられるでしょう。
私の創口に慨いた妻の泪は、悲しき記憶に残るのみです。三ヵ月目に退院して帰ってみれば、僅かの道具なども売り払ってしまわれ、妻の姿は見えませんでした。左の腕とともに、唯一とつの幸福はもぎとられました。哀れにもむごたらしい思い出です。
私が仕事に出るようになると、其のウォータア・マングルで亦また一人やられました。今度は右手を咬まれたのです。私が機械の前部に佇って、ウドンのようにロオラアが吐き出す布を覗て居ると、布の中程が紅く染まって、何だか薄くよれよれになった変な物がはみ出ました。訝しく思った私は、すぐ台の後へ廻わってみると驚くではありませんか、一人の同胞がロオラの処でモジャモジャしているのです。「やられたなッ」という衝動が、私の頸から足の爪先へ伝わり、ガクンとしました。其の時にどんな工合にして外したか皆目覚えませんが、無我夢中でプウレイに掛って居るベルトを外し、運転を停止めました。私の胸はエンヂンのエクゾオスト程劇しい動悸がしていました。
「おおい、皆来た来た!」すぐ側で、フォールディング・マシンだとか、シャアリンダ・マシンだとかいう機械を廻わしている連中を呼びました。声に応じて七八人の仲間

は、ウォータア・マングルの側へ駈けつけましたが、孰れもポカンとして、此の椿事の前に素早く、為す可き手段を考える余裕ある程の人物はありませんでした。私も狼狽えていました。それに片手だものだから自由が利かず、其の同胞をロオラアの間から外し出すには、十分間以上も費しました。漸くのことで梃子やスッパナを持って来、ロオラアをコゼ上げて腕を抜き出した時には、同胞は紫色の顔して口からは泡吹いていました。そうして胸の辺から、上半身一面は血糊で塗らくらし、紙のように薄くひしゃげられた腕からは、糸みたいな長い白筋が二三本たれさがって居りました。

私も多分そんな風になって、やられたのでしょう。

それから暫らく経つと、今度は女工が、髪の毛を一本残らず捲りとられました。いやもう、可憫そう過ぎてお話しになりません。

「私がこんなことを申しあげるのは、寔に差し出ガ間しい次第ですが、あのウォータア・マングルで余りよく怪我しますから、何とか方法を構じて戴き度くあります。」

或る日、思い切って私は事務所へ乗り込み、工場長に渡りました。すると工場長の言い分はこうなんです。

「機械は君、わざわざ人の処まで行って、喰い付きゃしないで。負傷するなあ本人の不注意だ。やる可からざる部分へ手など触れるからだよ。」

此の真理を穿ったご挨拶には、二の句が出ませんでした。工場長の理法でゆくと、負傷は過失でなくわざとです。

私は、布の厚さより一寸でも厚い、一千分の十吋以上の厚みあるものがロオラアに触れた場合、自動的に機械の運転を停止させるオートマチック・ストッピング・アッタチメントを考案していたのでしたが、言うて効なきを覚り諦めました。そして、「若し今度工場長がウォータア・マングルの側へ、偉そうな顔してやって来たら、ロオラアの間へ突っ込んでやろう」と決心しました。

今朝から狂い出したウォータア・マングルは、血に飢えた猛獣のような声をあげて、又誰かを喰おうとしているようです。

あれ、向うに工場長の姿が見えます。

（一九二二年五月『種蒔く人』）

ある体操教師の死

藤森成吉

木尾先生は、或る山国の地方の中学教師だった、教師と云っても体操科の――一生をそれで終ったのである。

然し生徒達は、誰も先生の本名を呼ぶ者はなかった。みんなペッカア（啄木鳥）と云う符号で呼んだ。

その奇妙な綽名は、あきらかに容貌に拠っていたらしかった、先生は割合顔が小さく細長く頬がやせッこけていた、そのせいか、口の部分が丁度犬や狐のそれのように突口形をしていた、その特徴は、先生が口を開いてまさに物を云おうとするとき殊に著るしかった、一たい武人型の吶弁家だった、その為めしゃべる前には、まるで風船へ気体をつめでもするように予め口へ風を含んだ。その力の入れかたが、恐るべき印象批評の生徒達に、――犬だの狐だのと云う愚劣な名前を遥かに超越した――針のように鋭いその名詞を暗示させたらしい。

が、由来については、ちがった説を持して下らない者もなくはなかった、その生徒達は、ペッカアではなく、ほんとはペッガアなのだ、と云った。先生は此の学校へ来てから、もう二十年近くもなりながら、いつもまるで乞食のように貧乏している、さてこそペッガアと云われるようになったのだ、……

そう云う異説を抱いている生徒は、先生の後代の生徒に多かった、どっちがほんとうにしろ、それに由って見ても、先生の綽名が如何に古く永続的なもので、同時に先生の単調な教師生活が如何に長く、又乏しいものであったかが窺われた。

先生はどの生徒からも馬鹿にされた。

一つには、それは先生の頗るあがらない風采から来ていた。あの突口のほか、先生はいつも質素なジャンギリ頭で、くりくり円い眼つきをして、薄い茶色のショボショボ髭を生やしていた、いつも日にあたっているので、全体に真黒にやけてはいたが、元來貧血性らしいその顔色は青黒かった、身体も鍛えられてはいたが、痩せて一向肉がなかった、そこへ服装なぞは少しも構わずに、始終まるで軍人でも着るようなごしごしたカアキイ色の詰め襟を着ていた。

そう云う風采に加えて、先生には何の学問の背景もなかった、先生は高等師範出身ではなく、体操教習所を卒業してすぐ赴任したのだった、――従って幾年勤めても、給料は職員じゅうで一番低かった。

そんなすべての原因が、敏感な生徒達の軽侮感を唆っ

た、そこへいけなかったのは、先生の善良性と真面目だった。

先生は、まるで生真面目と厳格と熱心そのもののようだった、赴任の当時は殊に甚しかった、時間は一時間必らずキッチリ、どうかすればベルが鳴っても、まだ教練をつづけた、制服を厳重に生徒に守らせた、どうしてもやむを得ない事情もなく和服なぞを着て出席する者はもちろん、ゲートルのボタン一ツはずれていても、すぐ鉛筆を舐めて操行点へ印しをつけた、乱暴な生徒達のなかには、制服を着て足だけ下駄を穿いて学校へ来る者が幾人もあった、それは学校の禁制の一つだったが、そう云う者を見ると、先生は時間中わざと靴の者だけ休ませて、下駄の者を跣足にさせて、学校の門前へ連れて行った、そこから町の方へ向って二丁ばかりも一面ぶっかきの小石を敷きつめた道路の上を、号令で駈け足させた、一遍どころか、二度でも三度でも駈けさせた、自分は一列のあとへくっついて、どんなにみんなが痛がろうと、決して列のそとへ脱けさせなかった。

流石に傍で眺めている外の生徒達もそれには同情した、そしてクラス挙ってストライキを起して、次の時間に運動場へ来なかったりした。

一口に云えば、その旧い精神によって自分が教え込まれたと同じように、先生はあくまでも生徒を厳格に、規律的に、軍隊式に叩きあげるつもりだったが、厳格にすればするほど、生徒達は先生の云うことをきかなくなった、先生はその口をとんがらせ、大きな声を更に大きくしてどなりつけた、が、生徒達はびくともしなかった。

先生は、とうとう生徒達の一番頑固な巖に似た奴を選って、いく度も直接の手段に訴えた、——頬を掌ではたきつけたのだ——と、生徒達はますます手強くなって、ほとんど全校連合で先生に抵抗し出した、眼の前で綽名を云って罵り返すのはもとより、先生が少しでも向うの方を向いていると、——たとえば生徒の横隊から離れて行こうとしてそびらを向けでもすると、忽ち生徒達は足もとから石を拾い取って先生の背中へ投げつけた、うまくぶっつかると、みんなワアッとはやし立てた。

どんなにその時先生が憤っても、犯人なぞは見つからなかった、先生が怒り立てれば立つほど、生徒達はよけい面白がった、そしてその事が学校の外の職員や校長の耳へ入った時、先生は反って生徒に対する態度を非難され出した。

当時まだ三十前の先生に取って、此の教訓はしんから身にこたえた、それ以来、先生の生徒に対するやり口は次第に柔かくなった、が、今度は生徒の方で、先生に対する反抗をつづけた、みんなが例の綽名で呼び、又どの級もどの時間も先生をおもちゃにした、切角上級の生徒が卒業しても、次に入って来る何も知らない生徒達が、すぐに先輩達の態度を見ならって引きついだ。

それはまるで全校の慣習のようになった、が、先生の方

では、生地とその年まで受けて来た教育とはもう変えようがなかった、先生は相変らず正直に、生真面目一方に振舞った、そして生徒達の軽蔑や不人望を恢復しようと考えれば考えるだけ、あせればあせるほど、ただ一層忠実に自分の職務を尽すより外ないと思った。

生徒達から云えば、が、単調な体操なぞを本気になってやる気はなかった、勉強は、もう外の学課だけでもいい加減疲れていた、体操の時間位は、せめて気らくにのんきに遊びたかった、そう云う気もちで遊ばせてくれるような先生こそ、彼等に取っては良教師だった、所謂規帳面な良体操教師ほど、彼等に取って面倒くさいイヤなものはなかった。

「体操なんず、一体何の役に立つだい、そんなものを、誰が糞真面目になってやらづい」

が、木尾先生には、そう生徒の呼吸はわからなかった。わかっても、そんなずぼらな生徒達の気もちに従うには、心があまり真面目すぎた、自分の神聖な教練に従わないのは、まだ生徒達の年が若くて考えがないのと、もう一つは自分のほんとうの熱心が足りないからだ、今はたとえどんなでも、学校を出てからきっと自分に感謝するだろう、……と先生は思った。

軍隊式の教練ばかりでなく、器械体操の時でも何でも、先生はまず自分からやって見せた、鉄棒へつかまってクルクル廻ること一つでも、先生は自分で「模範を示さ」ないことはなかった、棚の上へも真先きに攀じのぼれば、木馬も第一に跳び越した、その他棒でも遊動木でも――。

さすがに熱心だけあって、そう云う技芸は何一つ出来ないものはなかった。もしどうかして手際でも悪ければ、先生は何遍でも『模範的』になるまでやりなおした、自分がそうであるとおり、生徒達にも出来なければ何度でもやり返させた、腕自慢で、内々見せたくてたまらないでいるような生徒は、そんな時ひどく得意になったり賞められたりした、が、どうしても尻が重くて鉄棒へあがれない者や、又は身体がぎごちなくて木馬を飛び越せない者やは、半分死ぬような思いをした。

そしてますます体操と……同時に先生を嫌いになった。

まるで運動の天才でもあるように、苟くも体育と名のつくようなことは、先生は何でも生徒に先立ってやった、丁度その時分、その中学のある町はずれの小さな湖水で、冬の氷の張ったあいだスケーティングがはやり始めたが、と先生はすぐに練習し出した、乏しいあいだから、厚いジャケツを買ったり、アメリカ最新のスケートを取り寄せたり、その道の熟練家をわざわざ東京から呼び寄せたりして、何もかも本式に習った、どんな寒い日でも、それどころか雪がどんどん降っていて、湖水の上には鳥の子一羽いないような風雪の日でも、学校から帰るとすぐ湖水へ行った、ころんで或る時は運悪く前歯を二本折った事さえあったが、少しもひるまず、やがて先生は、その県の中でも一

人として右に出る者はないようなスケーティングの名人になった、なおローラアの方もやれば、同僚の英語の教師に翻訳をたのんでその遊戯一切に関する本さえ作った。
それにつづいて、夏その冷たい湖水で中学生達の水泳が始まるようになった、と、それまで水では鉄鎚だった彼が、自分の半分も年下の少年達の中に交って、又一生懸命水泳法の練習を始めた、そして間もなく若い者を追い越して、立派な一個の水泳教師になった。それからは、毎年その直径一里ばかりの湖水の横断競泳を中学で行うことに定めて、その時は先登でみんなを励ました。
その後、マラソン競走にも先生はひどく精神を罩めた、それはもう四十幾つの彼の晩年だったが、一種のおどろくべき努力と決心で、相変らず中学生と一緒に走った、やっぱり湖水のまわりを一週するのだったが、そのかなり長い距離を始終生徒の先きへ立った。
それは決して、所謂世間の名誉欲に動かされてした事ではなかった、所謂運動の興味でもなかった、何か、もうそう云ったものを遙かに超越した或るものがあった、普通の気取ったランナアとはちがって走る時も、先生はまた上衣を脱いでシャツ一枚になり、古びて磨り切れたズボンとゲエトルを附けて、まるで郵便集配人のように駈けた。
おかしい事は、その時いつでもズボンのバンドへ煙草入れを引ッかけている事だった、謹厳とでも云うほどの態度で、授業中なぞは勿論煙のケの字も口にしなかったが、然し先生は、本職の体操のほかに人生最大のたのしみでもあるように、ひどく煙草を好いていた、そのズボン以上に年代ものらしい無雑作な鰐皮の煙草入れの中には、いつも安煙草の粉が一杯詰っていた、あれほど真面目な授業の時でさえそれだけは先生の肌身を離さなかった、歩いたり飛んだりすると、そのたんぴ固い煙草入れがガチャガチャ音を立てた、それは先生の綽名と同じ程度に、生徒のあいだに有名だった。
「また煙草入れと一緒に飛んでやァがる」
先生の腰に、まるで小さな悪魔のように躍り且つ喚いている黒い物を見るたんび、生徒達は苦笑した、元来愛想と云ったものは一つも生れついていない先生に、それだけが思いがけなく愛嬌になった、何か先生の気に入らないことがあって、――たとえば、生徒が隣同志話しでもしているのを見つけた時――いきなり生徒の傍へ寄って行って、並んでいる生徒の頭と頭をいやと云うほど鉢合わせをさせるようなことは、先生には決して珍らしくなかった、が、そんな時でも、まるで煙草の煙でもぶッつかったようにブーンと恐ろしい安煙草の匂いが先生の全身から襲いかかると、生徒達はなぜか腹を立てられなかった、むしろその煙草泌みた先生の黒い唇や、指先きや胸やが、えたいの知れない不思議ななつかしみさえ感じさせた――。
そう云うスケーティングや水泳やランニングは、兵式体操とはちがって少年に特有な興味を多量に含んでいた為

め、先生がそれに熱中することは、生徒達にも気受けがよかった、生徒達の中にも、その先生の熱心に惹かされて、しんから耽るものが何十人となくあった、先生の不評判は、それに依ってかなり恢復された、が、そう云う遊戯へと同じ程度に注がれる学課への忠実がやっぱりいつまでも生徒達の心を反撥させた。

「ほかの学課をあれだけ真面目にやって貰やア、よっぽど力が附くがなあ」

「まるで時勢を知っていなくて話にならねえ」

そういう不満が始終生徒達にあった。

生徒は先生の誠実を知りながら、反って嫌悪したのだった、先生の方も、又自分の努力の為めに絶えず苦しんだ、然し、その努力や苦しみに依って自分をも生徒をも少しも益せずに、反って傷つけ合っていようとは夢にも知らなかった。

が、若い生徒達より、先生の苦しみの結果の方が早く来た、その二十年近くの自分を惜まない努力の為めに、いつか彼は精根をすっかり使い切った、まだ、四十幾つの働き盛りにかかりながら、先生はやがて妙に頭がぼんやりし始めた、何も深いことが考えられず、又目に見えて気力が衰えた、が、それよりいけなかったのは、彼の体力が失って来たことだった。

自分でも不思議な位、身体が弱くなった、あれほど技術で練った彼のどこもかもが、何とも云えないほど、不自由に、ぎごちなく、又退儀になった、授業にも次第に身が入らなくなり、然もたった一時間の授業でも死ぬほど疲れた。

「なんだが、此の頃ペッカアは一向気がなくなったじゃアねえか、そうしていやに隠居臭くなって、へえちっと耄けたかな」

そう云う生徒達の言葉どおり、先生はあきらかに老耄し出した、その顔や手には著るしく皺が寄り、容貌の様子は、まるで六十の老人のように年寄りじみて来た。

或る秋の日の午後のことだった、先生はいつものとおり一隊の上級生徒を引き連れて、広い運動場の片隅へ行って跳躍台を据えつけた、そしてまず跳躍の模範を示すつもりで、生徒を台の前方の両側へ二列に並ばせておいて、真中へ出て行った。

向うへ据えた木製の厳丈な跳躍台は、その時わずか三段きりだった、外の箱台は、ただ横へ積み重ねてあった、——それは何より明らかに先生の衰弱を語っていた、以前には、その全体の七段を重ねても先生はあたかも兎のように、らくらく身軽に跳び越したものだった。

「いいかい、さアよくみんな見て!」

云いながら、やがて先生は腰の煙草入れをガチャつかせて、生徒の前を脱兎のように駈け出した、そして台の前で両腕をのばして、ポンと両手をつくと、手際よく身体を浮かせて踏み切り板から足を離したが、一息に飛び越すかと思いのほか、ベタリと台の上へ馬乗りになった。

「……」
生徒達はみんなおどろかされた、今まで何十度となく先生の跳ぶところを見ていながら、そんな失敗は彼等は初めてだった、が、それよりおどろかされたのは、台の上へまるで子供のように坐りながら、先生がひどく苦しそうに息を切っていることだった。
「先生、どうしただい」
思いがけない先生の失敗に手を叩いたものもあったが、あんまり様子がおかしいので生徒達はきいた。
「いや、今のはしくじったから、もとイ」
先生はしばらくして台を滑りおりて、わざと何のこともなかったように戻って来た、そしてみんなの真中へ出て、やや青味を帯びた顔をしながら又駈け出した。
「いち――ニイ……三ッ」
大声で号令をかけながら、先生は再び台へ手を突いて、身体全体を宙へ跳ねあげさせた、今度は、先生の身体はハズンだ毬のようにあがった、が、力の衰えて来た両腕は、全身の平均を、支えるに足りなかった、台を越すかと思うと、まるで巧みな柔道の手で何者かに投げられたように、先生は顔を砂の中へ突っこみながらもんどりを打ってころがった。
異様な先生の堕ちぶりに、生徒達はすぐと飛んで行った、先生は砂だらけになったままで、やっと砂場から起きあがって来た、そのみじめな姿を見て、今度は笑う生徒は誰もいなかった。
「どこも何んともなかったかい」
相変らずその地方特有のぶっきら棒な言葉づかいで、が、生徒らしい情味でみんながたずねた。
「怪我はない」
ひどく面目なさそうにはにかんで、先生はシャツの砂を払った、その手には少しも力がなかった、払って了うと、又黙ってスタアトのところへ帰って行こうとした。
「先生、又やるだかい」
生徒はたずねた。
「ああ、もう一遍」
先生は悄然として答えた。
「そりゃアよした方がいい、げえ(甲斐)もねえ」
みんなは異口同音に引きとめた、が、先生はきかずに、ほとんど必死に似た色を眉間のあいだへ浮ばせて、三度スタアトの方へ戻って行った。
生徒達は、何か凄い拳闘でも見せつけられるような気がした、そして片唾を飲んだ、先生は前より更に青ざめた顔つきをして駈り出した、「コト、コト……」腰の烟草入れが、それにつれて鳴り始めた。
「一、二、三ン……」
かすれた声と一緒に、旗でも飜るように平びったく又先生の身体は宙へ浮いた。
「えいッ――」

その瞬間、ほとんど云い合わせたように、生徒達は背後から一斉に声をかけた、それは我知らず皆んなの口から出た、もし黙っていたら、今度は先生の身体はツンのめるか、横倒しになってへたばって了いそうな危惧が、すべての少年の心に感じられたのだった。

多分その不意の声に依ってだろう、あぶなく空中で挫けようとした先生の身体は、まるで煎餅のようにヘナヘナと舞って、ほとんど音もなく台の向うへ消えた、みんなが走って行って見た時、先生は蛙のように砂の上に坐っていた――。

それから間もなく、先生は……嘗て滅多に休んだことのない学校を休み出した、つづいて一年間学校へ姿を見せなかった、永年の疲れがドッと一時に出て、もう学校へ歩いて来る気力さえもなくなってしまったのだった。

お蔭で上級の生徒達は、下の級は、外の体操教師が受け持っていたので――一年のあいだ体操をやらずに済んだ、先生の病気を気の毒がるより、その為め、みんなはひどく喜ばされた、いッそ此のまんま死んじまやアいい、そんな言葉がみんなの口から出た、が、一年欠課のあと、先生は免職になった。

然し、先生の身体はそのあいだにかなり恢復して来た、久しく見えなかった先生の姿が、再び学校や運動場の中で見出された、先生は如何にも昔自分の教えた学校がなつかしいように、時々そうやって学校へ来ては、あちこち見廻ったり、昔の先生と話したり、又保養と気まぎらせのように、いろんな学校の用事を手伝ったりした、が、先生の顔や身体は以前より更に痩せて骨立っていた。頭もいよいよぼんやりして来たらしく、前には滅多に見せなかった笑い顔を、痴呆かなぞのようにふんだんに見せた、ものの云いぶりも益々下手になって、吃ったりつかえたりばかりした。

それから後、先生の身体は又ぶり返す一方だった、又一年の後、とうとう先生の家族は、住み慣れたその中学のある町を去って、隣りの県の生家へ帰って行った、そして間もなく、先生は妻君とまだ若い二人の子供を残して死んで了った。

以前の中学校へ訃報が報されて来た時、職員達は僅かな香奠を集めて、弔辞と一緒にその貧乏な遺族へ送ってやった、生徒達のあいだにも醵金の議が起った、なくなったと聞いて見ると、前の苛酷の記憶はそれとして、兎に角熱心な真面目な、無愛想ではあったが公平だった先生の面影が、みんなの頭へ浮んで来た、中には、余計な金なんぞ出す必要はないと、反対を唱える者も幾人かあったが、かなり手間取ってやっと若干の金が集められた。

「ベッカアも可愛想なことをした、さんざん台を跳び越したりして、あげくのはてに命まで飛び越しちまった、でもあの人のことだで、今ン頃地獄へ行って体操をやっているか」

そう云う噂が、しばらく生徒達の戯談に残った。

（一九二二年六月）

死滅する村

小川未明

村の人達の中で、幾人、東の空を昇る太陽を手を合せて拝んだ者があったか知れなかった。

その時、町の教会へ行っている娘が、太陽を拝むことなんかは、野蛮だと言って嗤った。村の人々は、町へ行くたびによく塔の如く頂きの尖って、青空に聳える三角形の建物を見た時に、ここに集る若い男女は、外国人からいろいろの新しき知識を授かるのだと思った。

古い伝統的の考えから、コスモポリタンの思想には、たとえ心の一部では共鳴しても、遽かに信じ切れないある蟠りを村の人々は、基督教に対して持っていた。それで、知識をば尊敬しても、感情から彼等に深くは馴染まなかった。

この村の一人の娘が、太陽を拝むことを野蛮だと言って嗤った時、年寄は、顔の色を変えたのであった。

「なにが野蛮なんだ。お前達はじめ、お天道様の御恩を受

けているくせに、有難いとは思わねえのか。」

娘の言ったことを聞いた、その老人はこう言って娘に詰問したのである。

　すると、娘は、ますます笑った。

「太陽は、火の珠なんですよ。決して神様やなんかではありません。私達の住んでいる地球のようなものが燃えているのです。この私達の地球もずっと前には、やはり太陽のように燃えていたのです。それを拝むなんて野蛮じゃなくって？　先生がおっしゃったわ。硝子で天井を張って、その上で火をどんどん燃やしたと同じことだって。」

　年寄は、ちょうど火のように真赤になって怒った。

「なんだ。硝子で屋根を葺いて、上で火を燃やせば、お天道様なんていらないって？　外国から来た宣教師が言ったって？　なに、馬鹿をぬかしやがるだ。それで、穀物ができると思うか。」

　この老人の口から、この話が広くもないこの村中に、いつとなしに広まった時、村の人々は知識についてはどうであっても、この年寄の言うことを正しいとした。そして、毎朝、家の戸口に立って、東の空を仰いで太陽を拝む者は、それがために信仰を変えなかった。

「なにを小癪な、あの阿魔が言いやがるか。」

　少し年をとった者は、町の教会へ行く、その小娘の、村では、一番ハイカラらしく見られた後姿を指して冷笑った。

それはかりでない。その後町へ行って、あの尖った三角形の建物を見る時に、あすこで、外国の宣教師がそんなことを教えて、小娘達を徒らに年寄に反抗させる、つまらぬ生意気を教えているのかと、曽ては虚心で教会堂を眺めた者にさえ、一種毒々しい眼付で睨むようにさしたのであった。が、しかし、その小娘も、この宣教師について旅へ行ってしまい、年月が経つにつれて村人には、もはやこの種の新しい知識に対する反感も失せてしまった。

　ちょうど、その頃であった。村には、青年によって新しい事件が醸された。

　大工の伜であったが、父親について仕事をしているのでなかった。「お前さんに、あんないい伜があるとは知らなかった。なんで、家に置いて手助けをさせなさらん。」と、途で遇った人が、大工に向ってたずねたほど、伜は、早くから親の傍を離れて、旅で流浪して来た。

「うちの伜にも困ります。親の言うことは聞きません。」と、人の好い大工は、眩しそうな目付をして相手の顔を見て、もう大分髪のうすくなった頭を右手でつるりと撫でた。

　南風の吹く日であった。村の中の寺で、その伜が、旅で見たいろいろの珍しい話をするから村の男達に集ってくれというのであった。

　村の男達は、大工の伜が、どんな話をするだろうという好奇心に駆られて、その時刻に寺へと出かけた。中には、

伜の顔をはじめて見るような人もあった。また、ずっと子供の時分の伜を知っているだけの人もあった。
　伜の他に、旅から来た友達だという二三の若者も加わった。
　その話というのは、決して、面白い、また、おかしい話でもなかった。その中の背の低い黒い色の洋服を着ていた小柄の男は、工女の話をした。
　毎年、至る所の村々へ勧誘員が入り込んで来て、金銭で親達を誘惑して、その手から娘を奪って行く、そして、その娘がどんな風になって行くかということ、工場で、負傷した時のこと、病気した時のこと、そして、なにゆえにこうしたあるまじき事実が社会に存在するかについて語った。また、他の一人の青年は、各地の小作人と地主との事情を報告した。
　最後に、大工の伜が起った。彼の頭は、髪の毛が蓬のように延びていた。もう、日が暗くなったので、ランプの他に所々蠟燭などを点けていた。
　春であったが、北国は、まだうす寒かった。殊に、ガランとした御堂の中は、空気は暗くなると共に底気味の悪いほど冷たかった。しかし、人々は、唾を呑み込んで、火影に揺れる、今起った大工の伜の顔に見入って黙っていた。
「みなさん、私達の村は、亡びかかっているのに気付きませんか。少し学問のある者や、また、どうかこうか暮しのつきそうな者は、みんな長い間、住み慣れた村を見捨て、もっと景気の好さそうな旅へと移転するじゃありませんか。それはなんのためですか？
　みなさん、私達の村の中で、あの大きな屋敷を構えた金持や、地主の二三軒を除いて、明日の生活の心配なしに暮らし得るものがありますか。夏は、夏で働いて、冬は、冬で仕事や、内職や夜業までして、それでも暮らして行けないとはどういうわけでしょうか？
　みなさん、昔は、恐らく、こんなことはなかったでしょう。もっと、私達の家々にも余裕があったのです。
　これからは、一日ましに長閑になります。花は咲きます。鳥も鳴きます。さまざまの草が芽を出します。自然は、このように公平です。地の上に住む、すべての生物に慈愛の眼を向けるのです。しかし、私達人間は、お互に、同じように、この自然に対してさえ楽しむことができないのでありませんか。
　みなさん、なぜそのことについて考えないのですか。昔は、もっと楽であったものを。世の中が文明になったにもかかわらず、ますます生活は、反対に苦しくなって行く。なぜその矛盾については考えないのですか。
　それはかりならいいが、このお互に困っている者同志が嫉妬したり、反目したり、中傷し合ったりして、少しでも、地主や、金持の愛顧に預りたいとしている。そんな無智なことがありますか。
　みなさん！　今は、目が醒めなければならない時なので

す。それでなければ、私達の村は、もう亡びてしまうのです……。」

こう、彼は言った。みんなは黙って聞いていた。そして、毎日、生活の苦しいのは知っていたが、誰も、いままで自分達の村はもう亡びてしまうというようなことは考えなかった。

今日のことは、すべて、この村の人々にとっては、空前といっていい衝撃であった。

暗い、星晴れのした大空の下を、道を歩いて帰って行く彼等は、口々に只溜息と共に心の動揺をわずかに短い言葉で洩らすばかりであった。

秋は、いつもよりか早く、この寒村に襲来した。もう、大工の伜は、とっくにこの地には止まっていなかったが、主義の宣伝からして、ある地方で収監されたというような噂が村に伝わったのであった。

人々は、あの髪の毛の延びた青年の面影を空に描いた。そして、一種悲壮な感じを身に覚えたのであった。なぜなら青年の言ったことは、前に、太陽を火の塊りだと言い、そして、太陽を拝む者を嗤った娘の言ったことと違って、なにか魂に感ずるなにものかがあったからだ。

「そうだ。一年中休みなしに働いていて食っていけないというのは、間違っていることだ。どうしたって、働いている俺達にばかり、罪があるとは思えないこった。」

村の年寄にもこういう疑問が起った。

「大工のうちの伜も、とうとう牢へ入ったというじゃねえか。」

「お上の御尋者だということを聞いていたが、満更言うことが間違っているとは思えねえだ。こう暮し向きが苦しくっちゃ、お前、今年のような不作が、来年もつづいて見ねえ、なんで一揆が起らねえことがあるもんけい。」

「それはそうと、あの伜なんかの仲間は、金持の金をみんな困っているもんに分けてやるって、いうんじゃねえかい。」

「そうかな。俺、あとで聞いたこったが、あの伜めが帰っていた間は、地主さん家では、火でも付けられねかって、毎晩、厳重に見張りをさしたそうだぜ。」

「村の者が見張りをしたけい。」

「なんでも、町から頼まれたそうだが。」

「捕まって牢へ行ったと聞かしたら、安心さしやったろうの？」

「だが、また牢から出てくべえの。そして、俺達の村がこんなに困っていると知ったら、いつ大風の吹く時に、火を付けまいもんでもねえ。今年のように不作でも、半分も自分のものになんねえのだからな。」

この貧しい村は、やがて秋から、雪の降る冬に入って行って、そして、冬になると一層空は暗く、生活は陰気になったのであった。

村には、数十軒の家があった。大抵どの家も貧しかっ

た。貧しいうちにもいろいろあった。そして小作の傍いろいろの副業をする者もあった。また、借地もなく、みずから耕す土地を有たずに、ただ他人に頼まれて、今日は、あちらの家へ行き、明日は、こちらの家へ来て、力役をしてわずかに糊口を凌ぐ者もあった。

大工の伜が言ったように、灰色の空の下に固まった、この貧しい村が、いつか廃滅に帰するか知れなかったけれど、そして、その一軒、一軒の生活は異っていたけれど、中にはまた思わぬような成功を夢見ている者がないでもなかった。そして、それも、畢竟、破滅に向って急ぐ前の一つの現象であったかも知れない。

「なあに、俺の事業が成功をすれば、この村の者は、みんな、俺がいい給金を出して使ってやるぞ。」と、その男は言った。

村の人達は、中には、その時を心のうちで期待する者もあった。また、ある者は、

「そんな山師が、昔から当ったためしはない。」と言って、冷笑った。

どうやら、その男の言ったことも、今では立消えになりそうな気がせられた。それば かりではなく、この秋頃から、その男の姿を見たものがなかった。

十歳ばかりになる男の子が、ひとり、ぼんやりとして、雪道の上に立っていた。子供の目付は遠くの鬱陶しい雪のかかった森を見ると、おのずから瞼が垂れ下がるような、限りない悲しさに鎖されるのであった。

「正治や、お父さんはどうした？ まだ留守かな。」と言って、うしろから来た男が、大きな荒っぽい掌で、小さな頭を撫でたのであった。

子供は、びっくりして、うしろを振り向いた。すると、頭から黒のモジリを被った、大きな皺の寄った顔が眼に映った。その顔は子供には親しいものであった。

「うん、まだ帰らない。」と、子供は答えた。

「いつ帰って来るか、まだ分んねえのか。」と、その年取った男は訊いた。

「いつ帰って来るんだやら……もう帰って来ないって、お母さんが言った。」と、子供の顔は、暗くなった。

すると、その男は、声を立てて笑った。

「馬鹿、なんで帰って来ねえことがあるもんか。きっと待っていると帰って来るだ。じきに春になるだもの。」と、その男は言った。

男は、あちらへ歩いて行った。男の言った言葉は、別にこの子供を慰める気ではなかったらしいが、むしろ自身に向って言ったようにも思われたが、もうじきに春になるということは、どんなにこの子供に、活々とした気持を呼び起したろう。

子供の眼は、遽かに輝いた。彼の心は、もう、花の咲いた大野原の中に躍っていた。そして、ささやかな流れを飛び越えて、蝶の後を追っていた。

ある夜、正治の家に泊った男があった。男は、黒い石のようなものを紙に包んだのを持っていた。夜遅くなるまで、その男と正治の父親とは話をしていた。ちょうどうす紅い花瓣のような蛾が、いくつも外から飛び込んで来て、ランプの蓋に、張り付けたように止まっていた。二人は、ひそひそと真面目に、小声で話をしていると思うと、大きな声を立てて愉快そうに笑った。そして、最後には、酒を飲みはじめた。正治の母親は、幾度となく暗い道を歩いて、酒屋へ行って来たか知れなかった。

「F河の上流だそうだ。まるで、黒光りのする洞穴の中へ入ったように、両側に石炭がある。それは、無限にあるそうだ。そこを通行したものはあったが、いままで誰も、石だとばかり思って石炭だと知ったものがなかった。会社を組織して掘り出しても、また発掘権を富豪に譲っても、どちらにしても大したものだ……。」

父親は、正治の母親に語った。

その後、父親は、すべての仕事を捨てて、その方に力をいれた。そして、家を空けることが多かった。

東京から、いよいよ技師を迎えるというまでには、どんなにいろいろのことがあったろう。

「技師さえ請け合ってくれりゃ、その横浜の会社というのは、全く買い取る腹は充分あるんです。兎に角、技師を寄越すのですから……まあ、うんと技師の機嫌を取って置く必要がありますね。」

石炭を紙に包んで持って来た男は、この日も父親といっしょに、技師の乗っている汽車が、町の停車場に着く時刻を待ちながら言った。

「人力車のきかない所は、三里、まあこれが骨ですね。どうしても技師に歩いてもらわなければならぬ。」と、正治の父親は、頭を傾げながら言った。

「仕方がありません。技師なんていうものは、平常山道を歩きつけているから、そう苦にもいたしますまい。」と、石炭の話を持って来た男が言った。

「F河の上流へは、私は、まだ行って見ないが、この間途中まで行ったけれど、なかなか嶮岨な道でありませんか。」と、父親は、思い出したように答えた。

「まあ、帰る時には、一等の旅館へ泊めて、懇ろにしてやるんですね。」

「そうしなければならない。」

「往復の旅費は、いったい、どちらで持つのでしょうね。」と、その顔の浅黒い男が言った。

「どういうことになっているか、訊いて見るのですね。まあ、起るか、倒れるか、やりかかったことですから、物にしなけりゃなりません。私は、二百五十円だけ、借りて来ました。」と、正治の父親は相手に打ち明けた。

「私共も、今年の作は、投げ出してしまって、春からこの方にかかっています。それで、会社が買わなくても、脈が深いという保証が付けば、資金の出し手は、いくらもあり

ます。株を募集してもいいのです。そして、発掘をはじめれば、どんどん金を掘り出すようなものです。」と、色の浅黒い男は、白い前歯を現わして笑った。
「ぜひ、そうしなけれゃならん。この村の者もみんな困りきっている。小作をしても、出稼ぎをしても、親子四人の者が食って行けないのです。石炭でも掘れるようになれば、みんなその方に使ってやります。」と、正治の父親は、肩を聳かして言った。
「もうかれこれ、三時半になりますぜ。汽車は四時五十分に着くでしょう。もうそろそろ出かけましょう。」と、相手の男は帯の間から、時計を出して見ながら言った。
日暮方、二人はぶつぶつと言いながら、町の方から帰って来た。技師はその汽車で来なかったのだ。
「ああ言って、書いて来たものを、来ない訳はあるまい。」
「だって、そんなような人は、汽車から下りなかったようだ。私は、プラットホームから目を他へ放さずに、出る人をじっと見守っていた。」
「じゃ、やはり来なかったのかなあ。」
二人は、しばらく落胆したように、また憤慨したように見られたのであった。
技師は、その日より二三日遅れて来た。そして、F河の上流へ視察に行ったのである。技師は横浜に帰った。返答をこちらでは期待していた。すると、手紙が来た。
一、土地不便にして、石炭を目的地に運び出すに容易ならざること。二、品質不良なるものが良好なるものより多きこと。三、鉱脈の浅きこと。
これらの個条を挙げて、兎に角、買収の意志なしと言って断って来た。
みんなは落胆した。しかし、春から夏にかけて騒いだ、労力を空しくしてしまう決断は付かなかった。正治の父親は石炭を持って来た、色の浅黒い男と諸方に活動をはじめたのであった。そのうちに、冬となった。
日に、幾回となく、橇はこの部落を横切って、あちらへと行くので、家の前を橇を曳いて行く男の掛声が起った。
「ホイショ、ソレ、ヨイコラ。」
橇は、雪の上を滑って行った。中には、この寒空に、素裸になって太い綱を肩にかけて、前こごみになって曳いて行く男もあった。その男の体の皮膚の色は赤銅色をしていた。刺すような冷たい風が吹いたけれど、男の体は汗で濡れていた。そして手拭で鉢巻をした額際からは、大粒な汗の雫が滴っていた。
「ホイショ、ヤレコラ。」
呻くように、また吼えるように、赤銅色の男は、後に鉄のような腕を廻して、太い綱を握って、雪の山を上ったり下ったりした。屋根の上から、また、木の上から落された雪は、いくつかの丘を平野の間に造っていたのであった。そして、その坂を下りる時に、橇は波を切って進む蒸汽のように、雪を左右にはね飛ばした。

赤銅色の男は、人間とは思われなかったように、野獣を思わせた。橇の上に乗っている人は、黒い外套を目深に被って、その眼は、茫漠とした、雪の押し黙った平野を見ようともせずに、じっと前を見詰めていた。さながら、喪心した人のように、憂愁を帯びた眼は、物を見るのでなく、虚空を睨んでいたのであった。

その人は、どこへ、こうして橇に乗って行くか知らなかった。ただ、橇の過ぎた跡は、雪の上が研ぎ澄まされたようにちょうど鏡の面のように光っていた。雲切れのした空が、その上に映るかとさえ思われたのであった。

正治は、父が、橇に乗って、どこかから帰って来はしないかと、戸口に立って、あてなく待っていたが、ついに父は帰らなかった。そのうちに、冬も、だんだん終りに近づいたのであった。

雪と、雨まじりの霙とが降るようになった。木の枝の上に溜っていた雪が、水気を含んで人の知らぬ間に、野原の中では、枝から滑り落ちていた。廂からは、音を立てて大きな雪の塊りが落ちた。日のうすく射した日には、その奇態な灰色の影が、窓の障子の面に映ったりした。

暖気が加わると、一体に、雪の上はきしんだ。そして、旅人の草鞋の音が、家の中にいても、はっきりと耳につくようになった。

もう、春が来るのだ。毎日、南の方が明るくなって、国境の山を越えて、なまあたたかな風が吹いた。

「今年は、どうだろう？　自分達の上に、仕合せがあるだろうか？」と、みんなは、そう心の中で思うたのであった。

「お父さんは、帰って来なさらないか知らん。」と、正治は毎日、晩方になると思った。

「春になると、帰って来る。」と、いつか、村の男が言った。その言葉を正治は信じているのだ。

母と子は、さびしくランプの下で夕飯を終った。そして寝に就く前に、いろいろとたよりない空想に時を過すのであった。

一頃のように、吹雪もしなければ、こうして起きていても、いくらかは暖かになったようだ。ランプの火影さえ、なんとなく嬉しそうに鳴って燃えている。

しかし、それは、空想だった。隣家では、黍を挽いている臼の音がしている。米ばかりを食べられないので、ああして黍の粉を造って、それを粥にして食べるのであった。

「お母さん、こんどのあの足音はお父さんらしいね。」と、正治は外を通る足音に耳を澄ましながら、母に言った。

母は、ぼんやりとして、沈んだ顔付をしてなにか考えているらしかった。それで、口の中で、かすかに返事をしたばかりであった。

草鞋の音は、遠くから、だんだん近づいて来た。そして、すぐ家の戸口で、ピシャ、ピシャと一際音高く鳴った。この時、正治の胸は轟いた。今にも、その足が、戸口

に跳り込むような気がしたからだった。
　しかし、折角近づいた足音は、また、遠ざかってしまった。正治は、捕えた小鳥を、手の中から逃がしてしまったように、がっかりしたのである。
　それからは、来る足音も、来る足音もみんな前を空しく遠り過ぎて、行ってしまった。外は全く暗くなった。足音は杜絶えた。そして、あたりはしんとしてしまった。外の雪が静かに、冷たくなったように、空気は刃金のように冷たかった。この時、まだ隣家では粉を挽く臼の音がしていたのであった。
　隣家の主人は、雪が降って、外の仕事がなくなってから、行商をして歩いていた。
　主人は、箱の中に、幾何の蠟燭と紙や筆などを収めていた。そして、町に遠い、部落から部落を廻っていた。性質の好い五十に近い男であったが、昔のように快活に笑うことも少なくなった。末の娘がもう長い間床に就いていた。そのことはどんなに彼の心を傷めたか知れなかった。
　娘は、まだ十二か十三の年頃であったが、長い間床に就いていて、髪の毛は抜けてうすくなっていた。そして、骨と皮ばかりに瘦せていたけれど、頬の色だけが、巴旦杏の熟したように、いつ見ても美しかった。仰向いて、両手を胸のあたりに組んで、大きな黒い眼を見張って、天井板を見詰めている様子は、どうしても蠟細工の人形を思わせずには置かなかった。

　医者は、町から十日目毎に、見舞って来る位のものであった。医者の来たことは、その家の前に黒い橇が止っているので分った。
「歩いて来てくんなされやいいものを、橇になんか乗って来なさるので、金がかかって困ります。それも助かるものならいいのですけれど、雪の消える時分まで、請合われないとお医者さんはおっしゃるのです。」と、隣家の主人は、鼻を詰らして見舞を言ったのであった。
　主人にすれば、毎日、四里、五里の道を歩いているので、医者が町から、十四五町足らずの所を橇に乗って来るのは贅沢に感じたのも無理はなかった。そして主人が行商をして得る一日の利益というものも、橇に払う代金には足らなかったのであった。
　しとしとと降っていた霙は、いつしか乾いた雪に変った。ぽたり、ぽたりと雪の降るのを見ると、まだ春は、遠い所にあった。
　正治は、あちらから頭巾を目深に被って、杖をついて来る、もう年寄に近い女を見た。
「また、あの小母さんがやって来た。」と、彼は口のうちで言いながら、急いで、家の内に入ってそのことを母親に告げた。
　母親は、暗い顔付をした。そして、なんとなく当惑したような様子に見られた。この時、戸口で雪を払うつつましやかな音がして、頭巾を被った女は家の内に入って来た。

「まだ、お帰んなさいませんか。」と、女は言った。多くの言葉を混えないうちに、はや女はその声に不機嫌を現わしていた。
「どうしたんですか、まだたよりがありません。」と、正治の母親は、女の顔をも見ずに、伏目になって、言訳らしく言ったのである。
「たよりもないって、まさか死になされたのでもありますまい。もう金を返して下さる期限の来ていることは、どこにいらしても分る筈ですのに。」と、頭巾を被った女は言った。
「左様でございますとも。」
「まだ、先月の利息も、もらわないのです。今日は、利息だけでも頂いて行かなければ、私だって、他に、金の入るところはなし、暮らしていけません。この雪の中、町からここまで、こうやってたびたびやって来るのは、容易でありません。先達ては、帰りに二度も転びました。いくら相手が女だといって、いつも来るたびに、いい加減なことを言われては約束もなんにもあったものでありません。」と、頭巾を被った女は、怨み言を述べ立てた。
　母親は、項垂れて聞いていた。そして、相手の言い終るのを待って、
「いいえ、決して、そんな訳ではありませんが、山の方が思わしくいかなかったもので、御迷惑をかけましたような訳で、しかし、もう、今日にも帰って来るかと、そればかり待っているのでございます。」と、母親は言った。
　頭巾を被った女は、色白の顔を半分あらわしていた。
「私は、なにも山をあてにしてお貸し申した訳でなし、期日までに返してもらえばいいのです。別に、あり余る金で、人様にお貸しをするのではなし、ひとり者の暮らしに、少しばかり死んだ夫から譲られた金を頼りにしていますものを、利息も、もらえなくては、私は、どうしてこの先暮らしていかれます。今日は先月分の利息だけでもいただかなければ、帰られません。」
　正治の母親は、町から、雪道を歩いてやって来た、この女に同情せずにはいられなかった。
　この頭巾を被った女は、ある軍人の未亡人であった。その軍人は、生前は、この女房を虐待したのである。軍人は、酒飲みで、その上一通りでない癇癪持であって、ちょっとしたことにも腹を立て、ひどく女房を叱った。だから、女房は、心に思ったことも主人の前では言えなかった。ただなにか言って叱られることを怖れたからだ。それで、人形のように黙って服従していた。軍人は、戦争のはじまった時に召集された。そして、戦死を遂げたのであった。そのために、未亡人は下賜金があった。彼女は、後の半生をこの金を頼りに生活すべく残された。
　正治の父親は、ある人の紹介で、この未亡人から、いつかの二百五十円を借り受けた。未亡人はその金を銀行へ預けて置いたのでは、思うように利子が取れなかったから、

常にいい借り手があったらばと思っていた。ついその金を正治の父親に貸したのであった。
頭巾を被った女は、三日にあげず、町から金の催足にやって来た。正治は、その姿を雪の上に見出だすと、また、あの女がやって来て、母親を苦しめるのかと小さな燃えるような瞳で睨んだ。
ある時、頭巾を被った女は、正治の家に来て土間へ杖を投げ出して、自分は土の上に坐って泣いた。
「私みたいな不幸な女があろうか。夫には死に別れ、他に頼る者はなし、全くひとり身なのに、わずかばかりの金をなくしてしまったら、この先どうして暮らして行こう？」
女は、ほんとうに、身も、世もないように慟哭した。
「けっして、私共は、あなたからお借り申した金は倒しはいたしません。どうか、そういってお腹を立てずに下さいまし。」と、正治の母親も泣いたのであった。
頭巾を被った女は、とぼとぼと町の方へ雪道を歩いて帰っていった。その時、村は、もう晩方近くなって、餌を欲しがっている烏が家々の附近に降りて啼いていた。
「大工の伜が、帰った様子はないかね。」
ある日、巡査が村に入って来て、その近所の人を捉えて聞いていた。
「知りませんね。」と、その人は答えた。
巡査が男と立話をしているので、なにか珍しいことでも起ったのかと、人々が、雪道を歩いてその傍に寄って来た。
「なあ、大工の伜は、帰んないだろうな。お前は知んねえか。」と、巡査に、最初尋ねられた男は、他の男を顧みて言った。
「帰んねえだろう。俺、見やしねえもの。」その男は答えた。
「あんな者が村におると、平和を乱していかん。」と、巡査は言って、去ってしまった。
その後で、村の人々は、立って巡査の後姿を見送りながら話をしていた。
「この頃、大工さあを見ねえが、どうしたろうな。」と、その伜の父親のことを噂していた。「そうだな。ちっとも顔を見ねえなあ、信州へ出稼ぎするって、いつか言っていたから、行ったんでねえか。」
「旅は、景気がいいかなあ。」
「お前、こっちにいては、仕事なんかあろう筈がねえだもの。」
「いつか、大工の伜が言ったが、俺達の村はなくなってしまうかも知んねえぞ。春になれば仕事が忙しくなるだが、いくら働いても食っていけんには、仕方がねえからな。」
「去年は、絹糸が安かったから、俺、桑を作って、手間代だけ食い込んじまった。年貢が下がらないし、金を借りたって肥料には金がかかるし、それに去年なんか、桑の出来は好かったが、絲が下落したとかで、桑の値まで下がって

しまう。こんな馬鹿々々しいことはありゃしない。」
みんなは、口々に生活の苦しくなって行くことをつぶやきながら散ってしまった。しかし、もう春が近づいていることは分った。雪はだんだんに低く、消えつつあった。今まで、圃も、田も、また小さな林も、みんな幾尺となく積った、雪の下になっていたが、少し雪が少なくなると、だんだん下から木の枝などがあらわれて来た。路傍の柳の木の枝にも、赤い芽の色が、日にまして鮮かになって行った。

河水は灝々と音を立てて流れるようになった。小鳥は、群をなして、晩方の雲切れのした、飴色の空を遠く飛んで行くのが見られた。春は、また、すべての草や、木や、人間を暖めるべく、この寒村にやって来た。

しかし、村の人達は、このなつかしい春に深い恵みと喜びとを感ずるにつけ、いつか大工の伜が言ったように、苦しみなしに、春に対して笑うことができるだろうか？　と疑わないであろうか。

冬の間、死んだように、黙り込んでいた村にも、そこ、ここに、笑い声が聞えるようになった。もう雪は、そんなに降らなかった。

「人が死んでいる。」

こういう声が、村の道の上で聞かれた。そして、あちらの村外れの方へ、沢山人が駆け出して行った。

「どこの者だ。」

村の人は、道でない、雪の野原の中へ入って行った。そこに、黒いものが倒れていたからだ。いつの間にか、野原の中は、人の群で黒くなった。

「久三郎じゃねえか。」

「久三郎だ。」

村の人々は、こう言った。

この男は、四五年前、妻を失った。息子は昨年の春、鉄道省に勤めていて、機関車に触れて死んだ。それ以来、ひとり寂しい生活を送っていた。無口の久三郎は、郵便配達夫になった。しばらく、その職をつとめていたが、二月ばかり前に、山の麓に親類があると言って、家を閉めて出かけた。留守の間、雪はその小さな屋根に小山のように積った。

「久三郎は、なにをしているだろう。」と、近所の人々は、その屋根を見ながら噂をしていた。

「この雪じゃ、家が潰れてしまうに。」と、人々は言った。そして、二人、三人、近所の人々が久三郎の屋根の雪を降してやったのであった。

屍は、半分腐爛していた。眼や、鼻のあたりを烏が啄いた痕があった。

「狐にでも、だまされて、こんな野原の中に来て、吹雪倒れをしたのではなかろうか。」と、一人が言った。

「なに、ここまで来て死ぬ奴もねえもんだ。腹が減ってのめったんだろう。」と、他の一人が言った。

「なんにしても、可哀そうなことをしたな。」
「女房が死んでから、鬱いでいたものなあ。」
「また、春にでもなれば、いいことがあったろうに。」
各自に、村人は、屍を取り巻いて話をした。子供等は、もう、春が来るので、元気であった。なにか珍しい、面白いことでもあるように傍に寄って来て、わいわい言っていた。

この日も、雲切れがして、入日の西の方の空は、なつかしげに明るく、飴色がかっていた。梢は、黒く、光沢を帯んで、すがすがしそうに、暮れて行く空の下で、背伸びをしていた。足元の雪が、だんだん消えて、一日ましに幹があらわれて来るからだ。

烏は、しきりに啼いていた。村からは、青い煙が上っていた。やがて、人々は、その屍を家の方へ運んで行った。野原の中は、ふたたび寂寞に返った。そして、この暮方の一瞬間、雪のはてしない野原と、物悲しそうな空とが落ち合った所で抱き合うように接吻した。それから、だんだん暗くなって行った。

夜になると、相変らず、嵐の音が凄まじかった。

一九二三年二月「中央公論」

火事の夜まで

今野賢三

一しきり吹雪がパッと二人を包んだ。
——涙ぐみながら、心から微笑んでいるちよ子の顔がおれの眼の前にある。
歯をガタガタさせながらからからだをすぼめて、ひしとより添うて、顔見合せて立止った二人をまた、パッと吹雪が襲うた。
警察から此処まで来る（五六町の間）ちよ子が、疲れ切っていながらも、うわごとでも言うように、のべつにしゃべったことを書く前に、ちよ子とおれとの仲を一寸ことわっておかねばならぬ。
おれは新聞配達夫なのだ。
○○新聞の拡張のために東北の此の小さな町に来ている。
拡張に駈けまわっている間に、ふと、ちよ子の家を知っ

た。家と言ったところが名ばかりで、馬小屋よりちっとばかり体裁がいいのだ。正直に書く。それは晩秋の或る一日である。ちよ子が世間に内密で、淫売をやっていることを知って……。

が、ちよ子の身の上を知ってからのおれは、遊ぼう――という気持どころの話ではなくなった。

ちよ子の母はある寺に飯炊きとなっていた。弟は、ある商店に奉公にやってあるのだが、どうやら肺病になっているらしいのを、すぐに引取って療養も出来ず、その商店に秘してそのままにしてあるというのであった。

おれはついに夫婦の約束をした。それは此の冬を迎えてからだ、軽卒だ、と笑うものは笑うがいい。どんな困難も引受けるだけの、誰もが前にもなんの恥るところもない、立派な決心をしたのだから……。

それから暫く後の或る日――。

おれはその馬小屋のような家でも、新婚のよろこびをたたえて、仲間と共にほんの形ばかりの式をあげた。そしてみんな安酒でたわいなく酔払った。夜遅くまで騒ぎちらした。隣り近所へはなにも知らせないから、そのらんちき騒ぎも、ただ、「あんな女のところへ来て酔払うなんて……」と眉をひそめさせたことだろうと思う……。その夜――。

その夜を！　おれはどうして忘れられるか！　なるほど、ちよ子は淫売として警察から睨まれていたことをおれは知らないこともなかった。

が、なにごとだ。

仲間の帰ったあとで、おれたち二人の寝入りばなを、警官に踏み込まれた。

ちよ子の挙動がいけなかった。あわてて逃げようとしたのだ、それはわかっている。ちよ子は単純な考えより出来ない女だ。あまりの不意打ちに面喰ってあわてたまでに過ぎないのだ。おれにはその場でそうハッキリわかった。ところが同じ人間でありながら、警官には、やましいところがあるから逃げようとした。ずるいもの――と見えたのだ。

そしてちよ子は、その場から、あの寒い夜を、ブルブル震えながら警察に引立てられたのだ。おれの弁解なんて、てんでとりあげられなかった。おれは警察までくっついて行って、喧嘩口調になって、署長にまで面会を求めたが誰一人とりあってくれなかった。顔を蒼くして、あわれみを求めるようにふりかえってじいっとおれを見詰めたちよ子の眼をあたまにのこして、世間がすっかり寝しずまった夜中を、しょんぼりと警察を出たおれの心持は！

翌日ちよ子が一週間の拘留を言いわたされたことを知ったものの、その不法に対して戦うだけの、ちからのない自分に腹を立てるだけだった。それでもおれは、ちよ子を一刻も早く警察から出してやりたい一心に、ただ一人で、も

がきあせった。しまいに、仲間を駈けまわって訴えた。が、仲間は「金があったらなんとかなるだろう！」と言うだけにすぎなかった。泣き寝入りになって了うことはたまらないことだった。と言って、やっぱり、泣き寝入りになるより仕方がなかった。おれの心は熱した。呪わしさに熱した。

昼は家のなかでもがいてばかりいた。

配達に出ると、新聞のとっていない家にまでぼんやり、投り込んで歩いて、あとで気がついてその新聞をとりもどしたりした。朝日のゆくところへ、報知を投り込むなどのヘマが、幾度もくりかえされた。

夜は――他人とすれ違うと、なんとなく後ろぐらい気持になったりしながら、野良犬のように警察のまわりをうろついた。

此処が監房かな？　と思われるあたりをそれとなく眺めて、口笛を鳴らして見たりした。

そして待ち遠しい一週間は過ぎた……。

――吹雪の晴れ間に、ちよ子は油気のないほつれた髪を掻きあげる。顔はまったくやつれた。それでなくとも痩せているのに……。

おれを見詰めているうちに、その眼はますます潤んで来るように見える。それでも、口元の微笑だけは崩さない。

……ハアハア息を切りながら、ちよ子のしゃべったのはこうである。

（警察に行きさえすれば、すぐに尋問がはじまって、あかりがたって、あの巡査を、それ見ろ！　と見かえしてやることが出来ると、ほら……途中から、そう思うようになって……。警察の門を入る頃はあたしの心もよっぽどおちついていたのさ……。安々とすぐに帰れるものとばかり思っちゃったの。そうなんだよ、ねえ。心ではちっとも悪いことはないんだから……。

すると、すぐにあたしをしらべるどころか、おどかすようにして、留置所へだまって入れっちまったのさ。

それから一時間以上も、じりじりと待ったけれど、誰一人呼び出しに来ないじゃないか！　あたし、最う……情けなくなっちゃってね。廊下の高い天井に、薄暗い電気がたった一つぶら下っているばかりなんだろう……そして、外から、ピーンと戸が閉められてあるんだからね。

それでも、はじめ、留置所へ入れられる時は自分ながら感心するくらい、気強くなっていたのさ。まったく、おかしいくらい平気だったの……。

だけど……しまいに、やりきれなくなっちゃった。

コト、コトという靴の音を聴いているとたまらなくなってねえ……あんた！

やっと、部長さんか、誰かが近づいて来たんだな――

と、思って、ほっとして身体をシャンとして顔をあげると、なんのこった。便所へ反れて行った靴音だったの。それは、生れてはじめて、泣くにも泣かれない心持であったのさ……。

夜明けが近くなった時、腋下から冷々と寒さが泌み込んだものねえ。

あたし、ぶるっぶるっ震えて、そうしているうちに、ねえ、どうしても這い上ることの出来ないような、暗い穴の中へでも、ほうり込まれているような気がしちゃったの。ねえ、どうなるんだろう？　と思うと、心配でたまらなくなっちゃったのさ。

……そして……しまいに、あたし、泣いた！

だけど、あたし、それァ新米の巡査だからなにもわからないんだろう。夜が明けるときっと、署長さんがしらべてくれる、そうするとわけなくゆるされる……馬鹿だったの。ほんとに腹が立ってならない……。

口髭をひねりながら、あの助平ったらしい眼で、あたしをじろじろ見てさ。

あんまり威張るものじゃないよ——と、怒鳴ってやりたかったの。ほんとに癪にさわる面ったらなかった。

それでも、あたしは、あの新米さんが間違いだろうから、すぐ帰ってもかまいませんか、と、おとなしく言ってやった、その実、それァ、まったく、すぐに帰れるものとばかり思っていたのさ。だから、まァ、あたしもあたしよ。すぐ立って出ようとすると、いきなり、あの、いけ好かない署長もやっぱり、あの巡査と同じ仲間だと思ったら、最うおさえようとしても涙が出て、……そして、あたしのがれっこないと思っちゃったの……。

「おまえにやましいところがなければ、逃げる必要がないじゃないか。どんなに偽を言っても、金を取って、あの男を客にしたことはわかっている」こう言ってあたしを責めたのさ。あたしが、幾ら夫婦になったのだと言っても、

「なにをごまかすかッ！」とおどしつけて、そしてとうとう一週間の拘留にしっちゃった、あたし、口惜しくて口惜しくて、ほんとうに！　あたしたちは、同じ人間でありながら結婚することも出来ないのかと思ったらね。あたし、どんなに情けなかったか知れない。

あたりまえに、夫婦になったから寝たというだけなのに、なぜ悪いのか、あたしには、どうしてもわからない。あんたわかる？　悪いことか知ら？　ねえ、どこが悪いの？　どうして悪いの？……それも、みんな貧乏だからだ、——と、あたし思ったの。

だけど、あたし、憎たらしかった。あの署長も、あの巡査もみんな……。

……ねえ、そして、あたし、署長に泣いて喰ってかかったのさ。

けれども、いくら言っても駄目だった。泣いて喰ってかかった時は、あたし夢中になっていたの。殺すんなら殺し

てくれッという心持だったのさ……。
それで、あんまり腹が立って、なんとかして、仕返しをしてやりたかったの。ねえ。あたし、留置所のなかで泣きながら考えた……そして、うまいこと思いついたの。
それは、死んでも警察の弁当は喰うまいと決心をしたの。どんなに苦しくっても、どんなに、どんなに辛くっても、弁当は口にしまいと、ねえ。
すると、はじめ、あたしをなだめたり、すかしたりしてねえ。子供みたいに……しまいに、怒鳴りつけたの。それでも口を結んで、眼を瞑って、あたし顔をあげないでだまった。
あんた、あんた、それは、ずいぶん、ずいぶん苦しかってよ。
そして、あたし、しまいになぐられたの。
だけど、不思議ねえ、なぐられればかえって、強くなってゆくような気がした。巡査たちが、手古摺っているのを見るのがなによりも気持がよかった。ざまァ見ろッと笑ってやりたかった。なぐった時なんか、あたしぐっと巡査を睨みつけてやったものさ。可笑しかってよ。その巡査が一寸面喰ったような顔をしたのが……。
ほんとうに、あたし、その時は、自分ながらすごいと思うほど、強つい心持であったのさ。
……けど、……ねえ、あんた。三日まではがまんしたの。三日まではがまんしたけど、とうとう、あたし敗けちゃった。あんまりお腹が空いて、水ばかり飲んでいてもがまんしきれなくなって、四日目から喰べちゃった。あんた、そうして敗けたのは口惜しい。あれまでがまんしながら……あたし、それを思うと口惜しくてならない。なんていロ惜しいことだろう！ ほんとうに残念だ。ねえ。こんな口惜しいことはありゃしない。いっそ、死にたかった、あんたにはすまないけど、彼奴等の見ている前で死んだら、どんなに気持がいいだろうと思ったの、どんなに！ どんなに……）
ちよ子の眼は涙でいっぱいになった。おれはその眼をだまって見入った。おれの感情はぶるぶると震えた。いろんな気持がいっぱいになって、なんにも言えなくなってしまった、だまって、ちからを込めて、ちよ子の手を握ったのだ……。その瞬間、おれたちの心持がぴったりと触れ合ったのを、あきらかに感じた。そして心のなかで、あたたかに抱き合ったのだ。

——のし板のすきから粉吹雪が吹き込む。家のなかを時時、粉雪まじりの冷たい風がながれる。天井裏からも時々チラチラと冷たいものが洩れてくる。
……ちよ子は警察からもどってから、風邪の気味で寝ている。
それにおれは、ちよ子の弟の三次郎を引取ることをも考えねばならない。肺病だとわかっていながら、どうしてう

っちゃっておくことが出来よう！。
　おれが囲炉裡に両手をかざしてそのことを考えていると、寝ているちよ子が不意におれを呼んだ。
　何気なくふりかえると、なにかを射るようにひかっている、ちよ子の眼に出ッくわした。
「あんた、あたし考えれば考えるほど、憎たらしくなってくるの！　ほんとうに……」
　ぼうと熱して汗ばんでいる顔は、それでなくとも昂奮が波打っているように見える。
　今の、そのちよ子の言葉で、おれはギクリと胸を刺されたような気がした。
　おれの胸にも、今までかつて経験したことのない、はげしいいきどおりが、今更に刻々燃えて来るのが感じられる。家のなかが、上下左右に、動揺して見えるほどある苦しい感情が昂まって来た。それは、なにかに、自分のからだぐるみ叩きつけたい気持だ。
　おれの返事がないので、ちよ子は蒲団のなかに顔をうずめるようにして、こんどは静に眼を瞑った。
　おれがはじめて、此の、ちよ子の家に入った時の感じがあたまに浮んで来た。家のなかの掃除が小ぎれいにゆきとどいてはいたが、囲炉裡にちょっぴりとしか、炭をつがないのが、妙におれは気になって無駄口をたたいていながら、そのことにたえず心持がつかまっていた。そして、ちよ子が炭をつぐとき、一かけか二かけかを大事そうに数えて入れるように見えた。おれはその手もとを見つめながら、
「なんていしみったれだ！」と思った。
　が、今になってわかって見ると、それは貞操ととっかえっこする炭の一かけらでも、貧乏に打ひしがれたちよ子にとっては、どんなに尊いものであったか知れなかったのだ。
　ちよ子が淫売をしていた――という、そのことを思って見るさえ、今日はまた不思議に、おれはたまらない気持になって来る。
「なにもかも狂い出して了えッ！」
　こう怒鳴って見たい気持だ。
　ふと、ちよ子が眼を開いた。
「ねえ、あんた、弟もどうかしなければいけない……お母さんだって、早く家へ連れて来たいんだけどもねえ……」
　ほっと溜息をからませるように言った。そしておれの顔をまじまじと見まもった。
　充分におれに気をかねて、やっと言った言葉だとおれによくわかった。
「おれもそのことを考えていたのだよ……。」
　軽くこう応じて、おれは囲炉裡のなかへ眼を落した。
　三次郎、母親――おれの収入は限られている……こう思うと、見る見るおれの心持は暗くなった。果しない暗さのなかを、ただわけもなくもがくような苦痛を感じて来た。

……そして、感情だけが、いたずらに燃えて来る。
「なんてい世の中だッ！」
思わずこう叫び散らしたくなる。

その日から四五日後――。新聞を入れた袋を小わきにかい込んで、おれは夕暮れの町に飛出した。
手足の冷たさが、あたまのしんまでぴいいんと突き透るような気がする。往来は鉄板のように固く、そしてなめらかに凍っている、そのうえに、まんべんなく雪がかぶさる。その雪を蹴散らすようにして、おれはトットッと駈ける。
……知らず知らずにからだにぬくもりが出てくる。雪のなかに晒している面や耳がポッポッとほてってくる。
ふと――その背から、たてがみ、眉毛まで真白にして、時々フーと白い息を吐いて、首をふかく垂れたまま黙々と歩く駄馬がおれの眼に入った。
あえぎあえぎ生きている、駄馬のような生活をしている人間が、そこにも、ここにも、到るところにうごめいているのがおれのあたまに見えて来た。おれは今更に、足を止めてしみじみと駄馬を見送った。
――ちよ子のかりそめの風邪が、最う肋膜になっている。
「もしや肺病になりやしないか？」
こうした予感が、どうしておれのあたまにはたらかずにいよう。

「拘留されたのが原因だ！」
ハッキリそうわかっている。
そのようにわかっていながら、おれはどうすることが出来るというのか！
うしろから「あぶねいッ！」と叫ばれてハッとわれにかえった。箱橇を押して来た俥夫の声である。
その箱橇がつばめのようにおれのかたわらをすり抜けてゆく。
雪はまんべんなく鼻や口を塞ぐ。
町には最うまばらに灯がはいった。
人の心を圧しつぶすように蔽いかぶさっている夕暮の空が、刻々、薄暗さを濃くする。
右に、左に、ぼんぼんと新聞を投り込みながらおれは駈ける。
……ふと、おれのあたまに、あくまで警察の弁当を喰うまいとした、ちよ子のいじらしい姿が見えてくる。署長に喰ってかかった場面や、なぐられてもだまりこくった姿や――、想像のなかに明瞭に浮んでくる。
「ちよ子は偉かった！」
おれはこう思う。そして、肺病になったら？……。
おれの胸は熱して、痛くなって来た。
「ちよ子ッ！」
おれの心で力いっぱいこう叫ぶ。
かたわらの大きな呉服屋が眼に入る。するとおれは機械

のように左手で新聞をピーッとこきあげてから、右手はひとりでにその新聞をポンと店へ投り込んでいた……。

真黒な夜の空を、がむしゃらに吹き荒れる風に載せられて飛ぶ雪が恐しい力で襲いかかるように紙窓を叩きつける。

おれは囲炉裡の傍にうずくまって、煤けたランプの下に憂鬱な自分の心持を凝視めていた。……すると一しきり、此のちっぽけな家までかっさらってゆくような烈しい風が煽り立って、ワアッとわめきながら遠くへ駈け去った。

ちよ子の寝息がかたわらにある……。

それは丁度、水の底から表面の渦巻を仰ぐように、今まで自分の眼に映って来た。「世の中」というものをあたまのなかに描き出して見る。するとなにかしら明瞭にわかって来たような気がする。

ちよ子が寝返りを打ったので、思わずわれにかえってその顔を見る。その額から、頬骨の出ているあたりに、なんとも言えない、若い女と思われない生活の疲れが浮き出て見える。

母や弟とわかれわかれになるまで、ちよ子はどんなに生活の辛さをなめて来たことか。

……可愛いらしく結ばれた口元にだけ、多少害われない若さがただよって見える。その油気のない、バサバサな髪を見るように、からだは最う、荒み果てている。それを思うことはおれにとってたまらないことである。そうして、ふみにじられたからだを、おれは今、自分のものとして抱いている。いたわっている。

――そしてちよ子は今、自分によって幾分か生活の疲れを休めているのだ。充分に安息をあたえなければならない。その時！　肋膜になっている。

何という事だ！

「最うこうしちゃァいられない！」

何事かしずにいられないというせっぱつまった気持が湧いてくる……。

おれはそうした、目茶苦茶に燃えてくる感情を圧さえて、なにかしら、苦痛を呑み込むようにとにかく眼を瞑った。

ゴーッと家のまわりをとりまいて流れてゆく風の隙をくぐって、ふと、おれの耳に半鐘の鳴るのが聞えて来た。

犬がどっかでしきりに吼え立てる。

「ハテナ？」

と思って、耳を澄ましているうち、二三ヵ所で一時に半鐘を叩きはじめた。

「火事だ！　火事だ！」

誰ともなく外でわめいたものがある。

近所で、戸をガタピシさせながら、あわてて飛び出す気勢がする。波止場の方の工場の汽笛が、獣が悲しそうにうめき声を発するように鳴り出した。

「ちよ子火事だ！」
先ず、ゆり起しておいて、すばやく家の外に飛び出して見た。
不思議におれの胸は高鳴る……。空の半ばは最う火事の反映で明るくなっている。雪はチラチラと頬にふりかかる。
見える。火が見える。十町ばかりはなれた、黒い人家の屋根の一角を染めて、黒煙りのなかから焔の舌がチロチロと吐き出されている。
ゴーッと風が煽り立って、雪で眼や口がふさがれる。それでもかまわず、おれは延びあがって、なおも火の手のあがっている方を見つめる。
雪のなかをまろぶように駈けてゆく人の影がある。
家のなかではちよ子がしきりにおれを呼びたてる。
おれの心持は何んという変になっていることだろう。
大きな家が焔に化して、焼け落ちる様が、非常に美しいものに思い描かれてくる。胸の鼓動はますます高鳴る。
……おれはいきなり、ものをも言わず家のなかに引返して、あわててマントをさがした。
「此処は大丈夫だ、一寸見て来るからな……」
こうちよ子に言葉をかけるといっしょに、おれの身体は最う家の外に出ていた。
遠く仰ぐと、火はますます広がってゆくようである。焔の舌がたけり狂うように雪空を舐めまわすのが、刻々明瞭になってくる。「阿鼻叫喚！」こうした言葉ですぐ想像されるような場面がおれの眼にさながらに見えてくる。
おれは駈け出した。雪の路をまろぶように駈け出した。
半鐘はますますはげしく叩かれる。警笛はしっきりなしに、悲しくうめくように鳴らされている。雪のなかを飛ぶようにあちこちから人々が駆け出している。
おれの心のどっかで叫ぶ。
「もっと燃えてくれ！　もっと燃えてくれッ！」と……。
なにもかも焼き払われたならどんなに快い気持だろうと思いながら、おれはひた走った……。

（一九二三年三月「種蒔く人」）

特種事件と支社長

山田清三郎

一

「山中君、え、え、えらい事っちゃ。誰れか宿直の記者はいやへんか。今な、俺が会下山下まで福原帰りの客を送って行ったんや、すると、あの脳病院の門が開いていて中が何だかがやがや騒いでいるらしかったので、そっと這入って様子をみてたんや、と、びっくりしたやないか、あの殺人狂の入汐二郎がな、今檻を破って逃げ出したというので、警察へ届けるやら、追跡隊をつくるやら、それはえらい騒ぎやな。で急いで知らしに来たのやが宿直の記者はいやへんか。」

午前三時頃であった。私達六七人の配達人等が、新聞電車で、大阪から来た朝刊を折っていると、そこへ顔馴染の車夫の留吉が飛込んで来て、息せき乍らこういった。

「えい、ほんまかい？」

皆の者は、期せずして新聞の折る手をやめた。事実だったら、大変だという気が、一瞬間、一同の者を沈黙に導いた。

「嘘もほんまもあるものか、嘘だと思うのなら、M脳病院へ電話をかけてきいとくれ、え、信用しなけれゃ、俺あ乙新聞の方へ知らしてやるぜ。」

留吉は、一寸真顔になって、言葉に針をふくめていった。

「そう怒るない、誰も嘘やといわへんが、それでは岡田さんを起すさかい、君は一寸そこに待っていておくれ。」

私は、二階の編集室に上って行った。宿直の記者の岡田は、寝台の上に、胸を露わにはだけて眠っている。

「岡田さん、岡田さん、ちょっと起きとくなはれ、えらい特種事件が降って湧いたのや、ちょっと起きとくなはれ。」

二三度呼ばわっても、中々眼を醒まさないので、今度は、身体をゆすぶって叫んだ。

「岡田さん、岡田さん！」

やっと、眼を醒ました岡田は、折角の安眠を妨げられた不快を、顔色に表し乍ら、

「何や、今頃、何に用や。」

と、不足らしくぶつぶついった。

私は、一寸癪に障ったので、知らしてやるまいかと思った。若し彼の宿直の夜に、こうした事件を、他の新聞社が知って、この大阪甲新聞だけ気付かずにいたら、それこそ彼の落度であり、同時に、この支社全体の恥辱であり、滋

いては、日本一の大新聞と称している、大阪甲新聞その者の失態になるのではないかと思うと、一層の事、いつも何事にかけても競争敵の、大阪乙新聞の支社に知らしてやって、岡田を酷い目にあわしてやろうかとも思った。若し岡田が、この事件を知らずに過ごしたら、軽くて減俸、重ければ地方の通信員か何かに左遷せられることは、免れないのであった。

併し、そこには、いつの間にか、我々配達人にまで、いつとはなしに植付けられた、乙新聞に対する敵慨心が働いて、矢張りそうすることを許さなかった。

「何やどころの騒ぎやおへん、今、丸三帳場の留公が飛込んで来て、つい先刻、M脳病院の入汐二郎が、檻を破って逃げたというのや、早速出かけて行ったらどうだす。」

「えい、嘘やないやろな。」

これには、岡田も驚いたらしかった。

「いや、そうか、これゃ失敬、留吉がいたら待たして置いておくれ、では早速その車で出かけるさかいに。」

私に続いて、岡田も、すっかり支度をととのえて二階から降りて来た。

「留公、どうもすまなんだな。よく知らしてくれたな。では早速一丁やって貰おう。」

意気昂然として岡田はいった。

「それから、皆に一寸頼んで置くが、誰れか一人支社長を呼びに行っておくれ、そして脳病院に行った都合で、ひょっとすると号外が出るようになるかも知れへんさかい、朝刊は早く配って帰っておくれ。」

如何にも、場慣れした新聞記者らしい態度で、我々配達人達に注意すると、岡田は、早速留吉の車に打ち乗った。

「では一走り行ってくるよ。」

留吉は、威勢のよい言葉を残すと、梶棒を鷲掴みにして駆け出して行った。

「な、ほんまやったらえらいことやな。」

「なんせ物騒な奴の事やさかい、又何人人を斬ったり殺したりするやわからへんが。」

「気狂いやのに、ようまあ檻を破って逃げたもんやな。」

「病院もうかうかしてたもんやないか。何ぼ入汐に力があるというたて、マサカ檻を破ることは出来へんぜ。」

岡田が出て行くと、皆の者は、入汐二郎のことに就いて、種々噂をし乍ら新聞を折っていた。やがて、新聞が折れてしまうと、夫々配達に出かけて行った。一人の者は、岡田が頼んで行ったように、支社から二三丁離れた、支社長の家に、非常を告げに飛んで行った。私も続いて配達に出かけた。

二

それは二三ヵ月前のことであった。

神戸市中には、殆んど、毎日のように、殺人の犯罪が行

われた。

きょうは、××町の路傍で女学生が殺された。きのうは、〇〇神社の境内で、年増芸者が倒れていた。いや一昨日は場末の町で、子守娘が斬られた。という具合に、新聞に、血なまぐさい記事の絶えたことはなかった。そして、その犯罪が、昼と夜との区別なく、何れも戸外で行われ、又その被害者が、必ず女に限っているという点で、その犯人が、必ず同一人であるということは容易に想像出来たのであったが、犯罪の目的や、犯人がどういったものであるかということは、専門家でも、中々鑑定がつかなかった。

市民の戦慄は、いうまでもなかった。中にも、婦人の恐怖は一方でなかった。一時は、神戸市中の通行人に、女の影を絶つという位で、生徒の通学を差止めた、女学校も一二ではなかった。

けれども、やがて新聞紙は、警察官の活動に依って、其の殺人犯の捕えられたことを一斉に報じた。それに依ると、犯人は入汐二郎といって、もと神戸××学校に居った秀才で、精神錯乱のために、退学を命ぜられた、青年であるということであった。

彼は学校を出されてから、最近まで、近郊の自宅に居って、時々乱暴を働くために、座敷牢のような一室に押込められていたのであったが、いつの間にか、家人の監視の隙を窺って飛出したのであった。

彼が、何らの目的もなく、衝動の儘に、殺人をやるということは、犯罪が、常に、行あたりばったりに、処構わず行われたということで明であるが、何故、被害者が女に限られていたかということは、世間から、頗る興味ある問題として観られていた。

精神鑑定に従った、専門の学者の間にも、いろいろ議論が行われたようであったが、誰れ一人として、ハッキリとした断案を下す者はなかった。唯入汐二郎が、最初発狂した原因が、何か、強度の失恋の悲しみか、その他、女に関するものであろうということだけは、想像出来るのであった。

それは兎に角として、入汐二郎は、この時、始めて、M脳病院に収容せられることになったのであった。

勿論、こうした危険人物のことであるから、単なる、通り一遍の精神病者と、その取扱の違うのはいうまでもなかった。彼は、彼のために、特に設けられた、厳重な鉄柵をめぐらした檻に収容せられて、昼夜、間断なき監視の下に置かれることになったのであった。

市民は、やっと、胸を撫で下した。婦人は、始めて、救われたような心地になることが出来たのであった――。

その危険な殺人狂が、深夜、檻を破ってM脳病院を逃げ出したというのである。市民にとっては、虎を市中に放ったことよりも物騒であり、新聞社にとっては、まさに大いなる特種事件といわねばならない――。

三

外は、どんよりと曇っていてた。市中は、まだ深い眠りの底に息づいている。生ぬるい風が、時々、すっと頬をかすめて行く。私は、配達をし乍らも、あまりいい気持ではなかった。何だか、路の隅の暗がりなどに、入汐二郎が、息を殺して、人の足音を待っているように思われて、急いで、駆け出す気にもなれなかった。入汐は、男には、決して危害を加えるものでないということを思い出し乍らも、何となく、足が竦んで仕方がなかった。殊に私の配達区域は、山の手の淋しい処で、入汐が、年増芸者を胴斬りにしたという〇〇神社に近いので、一層、心を脅かされるのであった。

併しそのうちに、段々夜が明けて来た。そして、いつの間にか、路に人通りの数が増してくるに従って、私の恐怖も、すっかり消えて仕舞っていた。と、その代りに、今度は、何も知らずに歩いている通行の人々に、入汐の逃走を知らしてやりたくて仕方がなかった。

「今朝、殺人狂の入汐が、M脳病院の檻を破って、逃げたのだすえ、えらいことだんなあ。」とでもいって、対手の驚く様子が見たかった。又一つには、こうした非常事件を逸早く知っていることを示して、人々を感心さしてやりたいような子供らしい慾望もあった。

配達から帰ってくると、もう他の者はすっかり揃っていて、てんでにねじ鉢巻などをやって威勢のいい姿をしていた。瞬間、私は愈々号外が出るのだなと思った。

「山中、馬鹿におそかったやないか。さっき岡田さんが帰って来て、本社に電話をかけると、本社では、兎に角神戸市内だけ号外を出すというのや、八時半に神戸駅着の汽車に、号外を積み込むそうや。」

「留公がうまいことをしよってな。今支社長から十円札を貰うたんやぜ、留公の奴ニコニコしやがってな、山中君にもよろしくいってくれといったぜ。さっき、君に一寸苦い顔を見せたので気まりが悪いやろ。」

「おい支社長の奴、俺が呼びに行くとどてら姿でやって来て、それは上機嫌や。いつもの仏頂面もどこへやら、今ここへ来て『いや諸者！　どうも今日は御苦労さんだね。』なんていうてな、ニコニコしていやがるんや、何でもあとから御馳走するとかいう話だぜ。」

配達から一等後れて帰った私の顔を見ると、皆の者は、口々に殺到して、新らしい事実を私に告げるのであった。

やがて八時半は来た。

駅へ行った者が号外を持って帰って来ると、私達は、それを鷲掴みにすると、支社を中心に、蜘蛛の子を散らすように八方へと飛ぶのであった。

朝からの、けたたましい号外の鈴の音が、市民の眠気をさましたことはいうまでもないが——殺人狂脱檻逃走——

の初号活字と、――全市再び不安に襲わる――という小標題のついた号外がいかに神戸市民を驚かし、全市を震撼さしたかは玆に説明するまでもないであろう。

ぴっしょり汗に濡れ乍ら、私は号外の配達から帰って来ると、この非常事件を、競争敵の大阪乙新聞は固より、肝心のお膝下で発行せられる、神戸A新聞、神戸B新聞をも出し抜いて、逸早く全市に報道した歓びで、支社の中は、お祭騒ぎのような賑かさであった。支社長の奮発で、我々配達人を始め、小使、給仕にも、親子丼に、小量の酒が振る舞われた。

「こんな愉快な号外配達はなかったな。俺ら乙新聞の支社の前で、暫く鈴を振って躍ってやったのや。すると宿直の記者のSという、あの小生意気なハイカラな奴が出て来てな、号外を見るなり颯と顔色を変えやがって、『甲新聞はどうして知ったのやろ。』と、首をひねっていたよ。俺ら『ざま見やがれ』といって逃げてやった。こんな号外なら毎日出てもええなあ。」

「A新聞の奴もびっくりしたらしいよ。小使が俺から号外を受取ると、早速編集室へ飛込んで行ったっけ。今頃は口惜しがっているやろな。」

「俺は号外を配り乍ら後をふり返るとな、長屋の連中が一塊りになって、一枚の号外を見ながら騒いでいるのや。俺も今まで随分号外を配ったが、これ程人をびっくりさしたことはないな。」

私達は、きょうの号外が、まるで自分等の手柄ででもあるかのように、得々としてこんなことを語り合った。二階の編集室からも、時々、どっと笑声が洩れて来た。

四

私が眼を醒ましたのは、三時前であった。

朝は、二時過ぎには起きるので、私達配達人等は、午睡するのが常であった。きょうは、朝の号外で疲れたものか、まだ他の者はみなすやすや眠っていた。

二階の編集室には、しっきりなしに、電話の鈴が鳴っていた。又、大阪の本社へ通信する記者の声も、手にとるようにきこえていた。

「天気予報、西の風晴、但少雨あり。」

「期米相場、一節……二節……三節……入津米……石――お次は社会部へ願います。――」

こういう調子で、いかにも、夕刊締切前の忙しさを示していた。殺人狂脱檻後の詳報も、盛に通信せられていた。

丁度、時計が三時を打った時であった。二階の編集室は、俄かに大騒ぎを始め出した。

それはこういうわけであった。

本社から命令が来て、入汐二郎の脱檻の状況や、警察の捜査方針というようなことは、もう沢山であるから、どういう方向に逃げたか、どうした方面に潜伏しているかとい

うことを具体的に知りたい、そしてそれを是非夕刊に掲載したいから、今夕刊の締切を特に二十分間延ばした。その間に何とかして貰いたいというのであった。

殺人狂が、いかなる方向に逃げたか、市内に潜伏しているか、或は山へでも隠れたのか、彼の逃走後の行衛に就ては、支社でも、八方へ記者を飛ばしてあるのであったが、まだどの記者からも、電話も、電報も来ないのであった。編集室の、狼狽したのも無理はなかった。支社長は、せめて通信員からでも、何かの消息を得られたらと思ったので、二階の二個の電話は固より、階下の配達部の電話をも使って、管内の要所要所の通信員に、及ぶかぎり電話をかけてみたのであったが、一として、これという手掛りを得ることは出来なかった。

その裡に、特に締切を延ばされた二十分間は、何の用捨もなく経過してしまったのであった。

もうあとは朝刊である。今まで騒々しかった編集室も、あきらめた後の一息ついた形で、静かになった。表の通りを、金魚売の懶い声が通って行った。

それから、十分とは経たない時であった。支社の門口に一台の自動車がとまったかと思うと、わっとばかりに喚声があがった。何ごとだろうと、私は思わず飛び出した。とそれは意外にも神戸A新聞の自動車で、中には赤鉢巻をした、六七人の配達人がめいめい号外を握り乍ら立っていた。ハッと思った私は、素早く路傍に散らばっている号外を拾ってみた。超特別初号とでも名づくべき大きな活字の――殺人狂捕わる――という標題が、私の視覚を刺激した。

「万歳！」

「神戸A新聞万歳！」

「万歳！」

A新聞の自動車は、こうした歓声を残すと、その号外をまき散らし乍ら走って行った。

私はその号外をもって、二階の編集室に駆け込んだ。

「支社長、こんな号外です。」

私はでっぷり肥った支社長の眼の前に、恐る恐るその号外をつきつけた。

「仕舞った！」

一瞬彼は呻くように吐き出した。

「岡田、とうとう復讐せられた。」

彼は、傍らの席の岡田に対し、その号外を差出し乍ら、いまいましそうに叫んだ。支社長から号外を受取った岡田の手先も、わなわなと顫えていた。

其日の甲新聞の夕刊は、一つの事件に、読者の注意を集中するという、甲新聞独特の華手な編集振で、社会面は、その殆んど全面を費して、入汐二郎逃走の記事が掲げられていた。彼が脱檻に至るまでの経路、監視人が、うかっと鍵をはずしたまま、便所に行った隙を窺って逃げだした巧智に長けたやり方、或は脳病院長や警察当局の談というよ

うな事が、何れも誇張された、挑発的な筆致で並べ立ててあったが、午前二時半に至って、山伝いに逃げた彼が、明石の近くで捕えられたことに就ては、固より一字も書かれていないのは当然であった。

常に、甲新聞と唯一の競争敵である大阪乙新聞の夕刊には、欄外ではあったが、可なり詳しく彼が捕えられたことが報ぜられてあった。

私は新聞社の仕事というものは、すべて、こんなものだろうと思った。けさ、若しあの留公が知らしに来てくれなかったら、甲新聞も、また矢張り他の各新聞と同じように、号外を出すことは出来なかったかも知れない。ヨシ号外は出したにしたところで、正午前になって、警察廻りの記者が始めて知ってからの事だ。全くけさの特種で他社を出し抜いた事は、偶然の功名に過ぎなかった。しかし余りに有頂天になった為めか、捕えられたという事に就ては、土地のA新聞に完膚なきまでに恥辱を与えられ、大阪乙新聞にも、夕刊紙上に於て、明かに復讐せられたことを思うと、若しけさ留公が来た時、私が岡田の不機嫌につむじを曲げて、他新聞に知らしていたら、それこそ甲新聞は、この事件に就ては、全く散々な醜態を演じたかも知れないのであった。

私は夕刊を折り終って、元気なく配達に出ようとする時であった。支社長が、二階から降りてくるのにぶっ突かった。けさの上機嫌の顔色はどこへやら、彼は、いつもの仏頂面を一層しかめていて、まるで、苦虫をかみつぶしたように見えた。併し、私はそれを見ても、別に、いつものような不快の念は起らなかった。

否寧ろこの事件のために、朝早くからたたき起されて出社し、心の中では、ひそかに本社からの臨時功労手当の額などを算え乍ら、有頂天になって、配達人等にまで御馳走をしたりなんかしていた彼が、結局に於いて、斯うした失敗を演ずるの結果となり、賞与どころの騒ぎではなく、却からず自分のポケットマネーを失った上に、今度は、反対に本社から譴責でもされかねまじき立場になったことを思うと、私は何だか、彼を憎めないような気がした。

そして、私は思わず夕刊を持ったまま門口に佇んで、赤い夕陽を背に浴び乍ら、悄然と帰って行く、支社長の大きい図体の後姿を、暫く、ぼんやりと見送って居たのであった。

種蒔き雑記

―亀戸の殉難者を哀悼するために　第一冊―

（本大系編集部註――第一冊しか刊行されなかった）

平沢君の靴

一

九月三日の夜。
平沢君が夜警から帰って来たのは十時近い刻限であった。そして暫く休んで話しているところへ正服巡査が五六人来た。
「済まんが一寸警察まで来て下さい。」
「はい。」
と、彼は静かに答えて立ち上ると、おとなしくついて行った。

二

四日の朝。
自分は三四人の巡査が荷車に石油と薪を積んでひいて行くのと出遭った。その内友人の丸山君を通じて顔馴染の清一巡査がいたので二人は言葉を交わした。
「石油と薪を積んで何処へ行くのです。」
「殺した人間を焼きに行くのだよ。」
「殺した人間……。」
「昨夜は人殺しで徹夜までさせられちゃった。三百二十人も殺した。外国人が亀戸管内に視察に来るので、今日急いで焼いてしまうのだよ。」
「皆鮮人ですか。」
「いや、中には七八人社会主義者もはいっているよ。」
「主義者も……。」
「つくづく巡査の商売が厭になった。」
「そんなに大勢の人間を何処で殺したんです。」
「小松川へ行く方だ。」
自分の胸の内は前夜拘引された平沢君のことで一っぱいだった。主義者が七八人も殺されているなら平沢君もその内にはいっているような気がした。
自分は清一巡査からきいた場所に足を運びながら、また考えなおした。

平沢君は平素から警察から睨まれている。しかし震災後平沢君は懸命に友人のつぶれた家の片付に手伝ったり、浅草の煙草専売局で不明となった友人の義妹を探しまわったり、町内の夜警に出たりしている。それに巡査と一緒に出て行った時も、おとなしくついて行ったし、万事要領のいい男だから、めったなことはあるまい。殺された七八人の主義者の中には平沢君ははいっていまい――そうであってくれればいいな、と自分は考えたりした。

清一巡査に教えられた場所に行った時、自分は大勢の町内の人々が、とりどりの顔をして立っているのを見た。そこは大島町八丁目の大島鋳物工場横の蓮田を埋立てた場所であった。そこに二三人の鮮人、支那人らしい死骸が投げ出されていた。

自分は一眼見てその凄惨な有様に度胆をぬかれてしまった。自分の眼はどす黒い血の色や、灰色の死人の顔を見て、一時にくらむような気がした。涙が出て仕方がなかった。

自分は平沢は殺されてしまった、と考えた。自分はその悲惨な場面をながく見つめていることが出来なかった。

その時私はいつも平沢君のはいていた一足の靴が寂しそうに地上にころげているのを見た。

「平沢君は殺された。」

自分はこう信じてしまった。

三

その日のことを自分は平沢君の細君に話さなかった。

翌日の正午頃、自分は細君と相談して、手拭、紙などを持って警察署に出掛けて行った。

自分は亀戸署の高木高等係と会った。が高木氏の言うことは意外であった。

「平沢君は三日の晩に帰したよ。」

自分はその答えに対して何事も返えす言葉がなかった。今は一点疑いを入れる余地がなかった。自分は無言で呪わしい警察の門を出た。(主として八島京一氏の供述によってしるす)

三日間の平沢君の行動

九月一日一時半頃。平沢君は倒壊した自家の前を声をかけて通った。それからすぐ引返して来て三時頃まで金品取出しに手伝ってくれました。

二日午前八時頃自分は平沢君の宅を訪ね、同道で夕方まで妹をたずねまわりました。上野の西郷銅像前で斎藤敏雄君に会いました。

その夜、平沢君宅前の城東電車道に蒲団など持ち出して夜宿しました。隣家の浅野氏その他近所の人々も一緒であったのです。

三日は朝から夕方まで潰れた自分の家の荷物引出しに手伝ってくれました。夕食後夜警に出て九時半頃帰宅してそのまま正服巡査達に連れて行かれたのです。その時は警官も平沢も至極温順でした。
そんなわけで平沢君が不穏な演説をしたという言い分は全く出鱈目です。自分と一緒でない時間は、妻君や隣家の浅野氏などよく知っている筈です。（正岡高一氏の供述から。聴取人、弁護士、松谷与二郎、山崎今朝彌）

騎兵第十三聯隊の紙片

（川合義虎君の死とお母さん）

一

九月一日の朝。
（労働組合）編集のために山岸さんと一緒に麻布新堀町に出掛けたのですが、山岸さんが無事帰ったのに義虎は夜になっても帰って来ないのです。私と定子（義虎の妹）は真赤な東京の空を眺めながら（義虎は死んだのじゃないかしら）と、思いながら、恐しい一夜を明かしたのです。
翌日の正午頃義虎が無事に帰って来た時の私達親娘の欣びはどんなであったでしょう。そして義虎が、上野附近の潰れた家の下から、三人の幼児を救い出して（五歳に三歳に生れて間もない赤ん坊の三人、お母さんだけはどうしても救い出すことが出来ず、悲鳴をききながら火に追いかけられて逃げのびたそうです）上野まで逃げのびた話をきいた時、私は全く感動してしまいました。そしてミルクまで買って赤ん坊に与えた、あの子の優しい心がうれしくてうれしくて涙が出て仕方がありませんでした。
義虎は全く親切なやさしい心を持った子供であったのです。それを何故おかみでは殺さなければならなかったのでしょう。義虎は三人の幼児を救いました。それだのにおかみの手で殺されました。私は口惜しくて仕方がありません。

二

義虎が亀戸署に連れて行かれたのは三日夜の十時過ぎでした。五日朝に私等親娘は故郷の新潟に帰りましたが、義虎のことが気になって気になって仕方がないので二十一日故郷を去って東京へ出て来ました。
三日ほどたって私は亀戸署の高等係に面会するため出かけて行きました。
高等係の室には顔を知っている安島、北見その他の刑事がいて、肉鍋や酒罎が用意されていました。そして私が義虎の安否をたずねると、北見刑事が、

「義虎は八日に帰したよ。」
「義虎は小使（ママ）を持っていた筈ですが、何うなっているか御存じありませんか。」
すると、突然安島刑事が私に向って言ったのです。
「俺の娼になれ。」
「あなた達は義虎の行衛を知っているのでしょう。知らせて下さい。」
「義虎は今頃大杉の処へ行って相談でもしているだろう。」
と空嘯いている安島の放言を聞いて私は何うしていいかわかりませんでした。私の胸は悲しみと、たよりなさで一っぱいでした。私は獣のようなそれ等の人々を憎々しく思いながら、そのまま亀戸署を出ました。

三

それから二日おいて警視庁の大西高等係が私の家にやって来ました。
「川合はどうした。」
「あなたこそ知っているでしょう。」
「俺は川合達を引張って行ったのでないからわからない。」
その後亀戸署の小林、稲垣両刑事が来ました。
「まだ川合から何の沙汰もないか。」
「ありません、かくさないで知らせて下さい。」
「僕達にはわからない、田舎でもまわり歩いているだろう。」
その後大西が白々しい顔をして二度ばかりやって来ました。もうその時は義虎達が殺されたという噂が私の耳へもはいっていたので、私は大西の顔を見る度に無念でなりませんでした。自分等の手で義虎達を殺しておきながら、よく図々しく私の所へなど来られたものだ。露ほどの情もない鬼のような人達だと思いました。

四

亀戸事件が新聞に発表された前日、私は亀戸署に出頭を命ぜられたのです。そして署長から義虎が殺されたことを申渡された時、私の心はまるで狂ってしまいました。私は泣きながら署長に喰ってかかりました。
「幾度も幾度も義虎の行先をたずねたのに何故嘘ばっかり言って騙していたのですか。」
「この際だから、何分……今言った通りだ。」
「義虎が殺された上は私は生きている望みがありません。今日は私もおかみの手で殺してもらいましょう。」
「罪もない者を殺すわけにはいかない。」
「私の子はどんな罪で殺されたのです。どんな罪で……。」
署長は答えませんでした。私は声をあげて泣きくずれてしまったのです。
「義虎を殺したのは誰ですか。」

「名は判らないが騎兵第十三連隊の人だ。そこへ行けば殺した人が判る筈だ。」
そして私が忘れないように、紙片に「第十三連隊」とかいて渡してよこしました。
「死体は渡してあげる。」
「しいたいとは何のことですか。」
「骨のことだ。」
私はこれ以上きいていることが出来ませんでした。何もかも悲しく辛らく、この世が真暗闇のように思われました。私は（第十三連隊）と書いた紙片を、ぎっしり掌中に握りしめて、泣きながら亀戸署を出ました。（主として河合たま氏の供述からしるす）

拘引されるまでの川合君の行動

九月一日の朝、川合君は山岸君と一緒に、雑誌（労働組合）編集のため麻布新堀町にある労働組合社に出かけて行った。地震後二人は急いで自家へ引返したが途中混雑のため二人はいつかはなればなれになってしまった。

川合君は上野方面に進路をとった。が上野附近の倒潰した家の下から（助けてくれ）と女の悲鳴が聞えて来るので馳け寄ったが、子供三人だけ助けることが出来たが、火のために母親を助けている暇がなかった。そのまま子供を背負って上野公園まで逃げのびた。そして途中ミルク三箇とビスケットを買って幼児等に与えた。（その内一箇だけは自家に持ち帰って今も残っている）

その夜は幼児三名と上野の森であかしたが母親や妹のことが心配なので翌朝附近の避難民に事情を打ちあけて幼児の保護をたのみ、幼児のとりすがるのを涙ながら振りはなして正午頃自家に戻って来た。

その夜夜警に出たが鮮人と間違われて自警団らしいものに殴打され、亀戸署に検束されたが翌日（三日）帰って来た。そして殴られたため胸が痛いと言っていた。

午前中私の家で色々な手伝いをし、午後、友人の宅を見舞い、午後五時頃自宅に帰って頭痛がすると言って横になっていた。十時頃山岸、鈴木君等と交代して夜警に出かけようとした時、どかどかと検束隊が押かけて来た。

「貴様は誰かッ。」
「川合義虎です。」同君はおだやかに答えた。
「皆警察へ来い。行かぬかッ。」
かくして、山岸実司、鈴木直一、川合義虎、近藤広造、加藤高寿、北島吉蔵の六君が検束せられて行った。（川崎甚一氏の供述から。聴取人、弁護士、布施辰治、黒田寿男）

おとなしい鈴木直一さん

（検束に来た人々）

鈴木さんは十二年の五月茨城のある炭坑から上京して八月十日頃まで私宅にいました。

温順な人で私達に親切にしてくれましたし、田舎から出たばかりなので東京に少しも馴れていませんでした。だから騒いだり、乱暴するようなことは絶対ありません。

地震の日午後四時頃鈴木さんは心配して私の出先をたずねてくれました。そしてその夜は私達と一緒に平井方に泊り、蒲団や米を肩にのせて運んでくれました。

二日は鮮人の騒ぎで鈴木さんは一睡もせず夜警に出ました。

三日も夜警に出ました。そして山岸さんと二人で交代に帰って来たところへ検束隊がどかどかとはいって来たのです。蜂須賀、北見両刑事、巡査部長、外に巡査数名です。土足のままで二階へ上りこんで皆をたたきおこしました。そして六人を連れて行ったのです。

私の家にいたために（私の家は南葛労働組合の本部であったのです）何も罪のない鈴木さんまで殺されたかと思うと気の毒でなりません。（河合たま氏の供述から。聴取人、弁護士、田坂貞雄、吉田三市郎）

鮮人へ同情して

（山岸、近藤両君の追懐）

一

九月一日山岸実司君は雑誌編集のため河合君と一緒に麻布に出かけ地震に会った。のがれてその日の午後四時頃吾嬬町の川崎甚一方に着いた。

二日は方々の友を見舞い、帰って倒壊した川崎宅の荷物片付けに手伝った。

三日も同じ。そしてその夜拘引されたのである。

山岸実司君は至極活溌な人であるが情にもあつい人である。決して乱暴するような人ではなかった。

二

近藤君は九月一日午後四時頃川崎君の所にやって来て九時頃までいた。その夜は勤務先の藤崎石鹸工場に行って泊った。

二日は川崎方の荷物片付けに手伝いその夜はそこへ泊った。

三日も同じ。午後一時頃工場に行き三時頃帰って来た。そして夕食をすまして工場の帰途河合方に寄ったために不運にも殺されてしまった。

近藤君は一度自警団から殺されかけて藤崎の工場主から

助けられた。それは鮮人虐殺を目撃して同情の言葉を発したためであった。（佐々木節氏の供述から。聴取人、細野三千雄、三輪寿壮）

北島君と蜂須賀刑事

一

八月三十一日夕刻、亀戸町広瀬自転車製作所では突然全職工の半数以上の百八十名を解雇する旨発表された。

解雇された人々は工場内に集って相談した。多くの人の希望は賃率を下げられても働きたいとのことであった。その交渉委員に国府庄作、北島吉蔵、私の三人が選ばれた。九月一日三人は大手町の技師長（吉川時蔵）宅に出掛けて行った。そこで社長と会った。そして二人の対談が過ぎて私が社長と交渉している時に例の地震が来た。

「来て下さい。」と云う声が二階からきこえて来た。北島君はすぐ駈けあがって行った。そこで暫く手伝ってから北島君は亀戸に引返した。

工場の倉庫がつぶれてその余波で近所の家も半潰れになった。人々は工場前の赤門寺の境内に避難していた。そして北島君や女の人達が甲斐甲斐しく炊き出しに取りかかっていた。北島君や杉浦君が工場と交渉して避難民に炊き出しすることを承諾させたのであった。

二

私は北島君が蜂須賀高等係と言い争いをしたということをきいた。蜂須賀は警戒のため前日から広瀬工場に来ていたが地震と一緒に赤門寺の境内に逃げて、何もせずに呆然としていたのであった。北島君は大事な時に傍観している彼の無能と無誠実を責めたらしかった。その怨恨のために彼はむざむざ殺されたのかも知れない。

殺された噂をきいたのは五日であった。しかしその時は何うしても信ずることが出来なかった。が、九月八日天神橋通りの小島一郎さんに行った時、世間話のうちに、

「この間の晩、第一小学校で朝鮮人が軍隊の手で殺されていたが、なに、行って見たら朝鮮人でなくて日本人なのに驚いちゃった。傍にいた巡査がね、こいつら六人は皆社会主義者で充分調べた結果やっつけたのだ、と言うのさ。全くぞっとしたよ。」

と言うのを聞いて、自分は北島君は本当に殺されたのだと思った。

十月十五日夕刻、私は工場長に会見して北島君の手当を交渉した。社長の妻は言った。

「九月の五日にね、蜂須賀という刑事が来てね、北島は四

日の晩にやっつけたから手当はやる必要はない。もう交渉にも来ない。と小声で主人に話して行きました。」

私は心の内で（畜生ッ）と思った。（主として庵沢義夫氏の供述からしるす）

附記。地震当時に於ける北島君の行動は炊き出しのため一緒に働いた一婦人が川崎甚一君に言った一言でいきています。（北島さんが殺される位なら世の中の善い人は皆殺されねばなりませんでしょう）

夫の残して行った賃金

（加藤高寿君の妻女と二刑事）

一

加藤が検束された翌日（四日）私は亀戸署を訪ねました。警察署にはいる前安島高等係とばったり会ったので私はすぐたずねました。

「加藤は何処にいるでしょうか。」

「本庁（警視庁）へ行っている。」

「本庁ですって、本庁は焼失してなくなっているではありませんか。」

「いや、たしかに本庁に行ってる筈だ。」

と、彼は苦しそうに言いすてたまますっさと行ってしまいました。

私はそのまま帰宅しました。当時はまだ警察の内外は非常に雑踏していたので、安島の出鱈目な返事をきいて、警察へはいって行く気がしなくなったのです。そこで私は翌日の五日再び亀戸署をたずねて行きました。

刑事の室へはいって行った時安島は眠っていました。私は彼をおこして訊ねました。

「好加減なことを言わず正直に教えて下さい。加藤は何処にいます。警視庁は焼けているではありませんか。」

「お前達は平素俺達が訪ねて行くといい顔をしないからこんなことになったのだ。」

安島は寝ぼけた眼を開いて突然こんなことを言い出しました。が、加藤は組合員でしたが、組合の方へも不出席勝で私の宅に刑事など一度も来たことがなかったのです。二言、三言交わした後で、

「面倒なことはきかないでくれ。」と言い残してさっさと室を出て行きました。私は呆然として暫くの間椅子に腰かけていましたが、六時を過ぎた頃一人の刑事がはいって来て、今のところ返事の仕様がないから、帰ってくれと言うのでした。

二十七日、加藤の郷里から電報が来て、すぐ帰って来いと言って来たので私は罹災者の旅行証明書をもらうために亀戸署に出かけて行きました。蜂須賀高等係に会って加藤

のことをたずねると、
「三日の晩に検束して来たがその晩のうちに帰してしまったよ。平沢計七と一緒に大阪に行ってるとのことだ。」との返事です。
「寒くなったから着物を差入れさして下さい。」
「僕が加藤君を見た時は、外套を着ていたようだったから寒い筈はないよ。そんなに加藤のことばかり心配してないで、別の亭主をもったら何うだ。いくらでも代りを世話してやるよ。」
「それ所ではありません。」
「ああ、加藤君が帰って来るんだったけな、うっかりしていた。加藤君が帰ったら僕は叱られるだろう。」と笑い出したので、私はもうそのことにふれず罹災者の証明書をもらい（加藤の居所がわかったら、私が郷里に帰ったと言ってください）とたのんで帰りました。
加藤が殺されたことを知ったのは十月十日に、東京朝日記者の千輝克巳さんが宇都宮まで私を訪ねて来た時でした。
十月十五日、私は加藤が生前勤めていた大正鉄板鍍金合資会社に賃金の残りをとりに行きました。事務所の人から、
「加藤さんは口数の少ない温厚な人であった。勤めて以来無欠勤でここの模範職工でしたがね。え、え、性行の点ならいつでも私の方で証明してあげますよ。」とやさしく言われた時、私の胸は一っぱいでした。私は加藤が生前働いた賃金を堅く手に握りしめ泣きながら工場を去りました。
（加藤高寿君の妻女たみさんの供述からしるす）

拘引されるまでの加藤君の行動

八月三十一日夜勤から帰って九月一日震災当時まで臥床していた。震災のため家屋がつぶれ夫婦はその下敷きとなったが漸くはい出して生命は助かった。その日は潰れた家から荷物を引出し、また近所へ見舞いに行って過ごし、家前の空地で河合君の母や妹と一緒にあかした。
二日は終日荷物の引き出しにかかり夜は夜警に出かけて行った。
三日跡片付けをなし、近所の知人を見舞い、他所の跡片付けに手伝った。私が川合さんの家に避難したので加藤は夜具類を持って来た。夜警の交代あるまで加藤は階下の四畳半に臥していたが、十時近く人々と一緒に拘引されて行った。（加藤君の妻女の供述から。聴取人、弁護士、片山、三輪寿壮、細野三千雄）

骨

（吉村光治君の実兄と森亀戸署長）

一

九月十五日頃光治が殺されたらしい風説を聞いた。十月十日いよいよそれが事実となって新聞に発表されたので私は亀戸警察に出かけて署長にその実否をたずねた。

「事実です。遺族の方がわからないので今まで通知しなかったのです。」

そんな馬鹿なことはない、と私は言った。巡査が光治の家や私の家を知っている筈だ。それに拘引された後も若い者だと物騒だと言うので父が三度まで来ている。そして一度目と三度目には（帰した。途中でうろうろしているだろう）鼻先であしらわれ、二度目の時は怒鳴りつけられて帰って来ている。――私はこのことを話して処置の不当を署長に向ってなじった。

「殺したのは私の責任です。巡査にそう言わせたのも私の命令です。」と署長は泣かんばかりに詫びた。

「骨を伺うしてくれる。」と私は言った。

「骨は荒川放水路の四ッ木橋の少し下流で焼いたから自由にひろって下さい。」

「あすこには機関銃が据付けてあって朝鮮人が数百人殺されたことは周知のことだから誰の骨かわかるものですか。」

明日（十一日）午前九時までに署に来てくれ、その場所へ案内するからと言うので、その日は別れた。

二

私は労働組合の者ではないが、他の殺された人の遺骨のことも考えられたので南葛労働組合の本部に出掛けて行った。そして翌日皆で警察署に骨拾いに行くことにした。

翌日は無駄であった。今骨のことで本庁に聞きに行っている。明日（十三日）来いとのことであった。

皆は力ぬけがして引かえした。どうせわからない骨を拾ってみたところで仕方がないとあきらめたのだ。

それから後私は警察から光治の徽章と帽子をさげてもらった。徽章というのは震災当時光治等が災害事故防止調査会というものをおこして、道案内、配水、夜警に働いた章である。弟光治の骨は荒川辺の寒い風に今でもさらされていることだろう。（南喜一氏の供述より、聴取人、東海林民蔵）

鮮人とあやまられて

（殺された佐藤欣治君）

九月二日私達は災害防止調査会というものを組織して、給水、道案内、夜警等に尽力した。佐藤欣治君もその内の一人であった。

佐藤君が鮮人と見違われて（佐藤君は色白く丈高く一見鮮人に見違われ易い）拘引されたことをきいたのは九月三日の午後であった。

私達は配給米の交渉で役場へ行く途中、香取神社境内の軍隊の本部に寄って見た。すると佐藤君が多数の鮮人と一緒に縛られていた。

私達はすぐ軍隊に対して佐藤君のことを話した。すると役場から証明を持って来ると釈放するという。そこで役場へ行くと、証明がなくたって君達が証明すりゃ充分じゃないか、との答えだ。その意味を伝えて軍隊と再交渉すると、今調べ中だ、わかったらすぐ帰すと言うので私達は安心して帰った。

が、佐藤君は遂に帰って来なかった。光治の二人を心配して亀戸署に父をやったが、駄目だった。そしてやがて新聞に発表になったのである。亀戸署長は革命歌をうたったり乱暴して殺されたと言っているが、そんな馬鹿なことがあるべき筈がない。詭弁に過ぎない。光治も佐藤もそんな馬鹿なことをする人間ではない。（南喜一、南巌両氏の供述から。聴取人、牧野充安）

地獄の亀戸署

一

九月十八日芝浦に荷揚の仕事があることがわかったので、失業者救済の意味で総同盟で掲示することにした。その掲示文を相談するために出井君に行く途中で亀戸十三間通りで安島刑事と会った。そのことを話したら同刑事も結構なことだと賛成された。

（会員にして職を求むるものは三田四国町労働総同盟本部に来れ成るべく朝六時半まで、南葛労働会本部）

こうした掲示文を河合君の門前と葬儀屋の横へ（承諾を得て）はった。

用事から帰って来る途中湯屋の前で蜂須賀刑事に会った。

「今君を探していた所だ。河合の門前にはった掲示を軍隊から注意された。君に少し聞きたいことがあるから署まで来てくれ。」

私は署へ同行した。掲示については安島刑事の同意を得たことを話した。暫く待っているところへ安島と北見の両刑事が帰って来た。

両刑事とも酔っぱらっていた。蜂須賀はそこへはいって来た警部に向って（冷酒があるがのまないか）と言った。その警部はよろこんで飲んだ。

安島と北見は私に向って言った。

「貴様等は平素資本主義が悪いとか革命とか言っている

が、こんな時にやらなけりゃ駄目じゃないか。」
そこへ伊藤巡査部長が（お手伝えしようか）と言って五六人の制服巡査を連れてはいって来た。
「こいつは誰だ。」
「此奴は共産党の残党だ。」
と安島が答えるや否や伊藤は突然私の左の頬を殴りつけた。
「今度のことは貴様等の仕事だろう。俺は今度焼出されてプロになった。プロとプロと力競べをやろう。」と、矢鱈に打ちつづけた。
「藤沼は南葛労働会の理事だから折檻せぬが好いだろう。」と傍にいた稲垣刑事が注意したが、伊藤は、
「こんな奴が理事だから碌なことが出来ぬ。」と言ってまた殴った。そしてついて来た五六人の制服巡査も手伝って私を腰掛から突き倒した。
私の口から血が流れて来た。
「ここでやっては仕様がない。彼方へ持って行ってくれ。」と、安島が二度ばかり言った。
それから私は外へ引張り出された。
「大丈夫だ。外にも一人待たしてある。」
井戸から水をくみあげるポンプの音が、先ず私の耳にはいって来た。そして暫くたってから、私は横わっている上から水をぶっかけられていた。

私はまだ充分正気づいていなかった。ひどく大勢の手足で殴られたり蹴られたりしたことは覚えているが、その他のことはまるで不明であった。そのまま私は留置場に運ばれて行った。
留置場にいる間私はいろいろ物凄いことをきいた。平沢、久保等が殺された事も、村田が銃剣で両手をさされた事もきいた。床板には柔道の先生が刺殺された時の跡が歴然と残っていた。
十月十三日頃署長に呼び出された。
「病気で欠勤していたので何も知らなかったが、何うしてここへ来た。」非常に丁寧にたずねられた。私は事情を話した。
その翌日私は漸く地獄の亀戸署を解放された。（藤沼栄四郎氏（四十三歳）の供述から。聴取人、弁護士、細野三千雄、三輪寿壮）

二

身の危険を感じたので、私は九月三日亀戸署に保護を願い出でた。自分のいた室は奥二階の広い室で、行った当日は二十人位全部鮮人の人であったが、四日ぞくぞく増して忽ち百十名以上の大人数になり足を伸ばすことさえ出来なくなった。
四日朝便所に行ったら、入口の所に兵士が立番をしてい

て其処に七八人の死骸や〇〇〇〇〇〇に莚をかけてあった。また横手の演武場には血をあびた鮮人が三百人位縛されていたし、その外の軒下に五六十人の支那人が悲しそうな顔をして座っていた。

四日夜は凄惨と不安にみちていた。銃声がぽんぽん聞えて翌朝までつづいた。しんとして物音一つ聞えない。ただ一人の鮮人が哀しい声をあげて泣いていた。

「自分が殺されるのは国に妻子をおいて来た罪だろうか、私の貯金は何うなるだろう。」

この怨言は寂しく、悲しく、聞くに忍びがたいものであった。

翌日立番の巡査が言った。

「昨夕は鮮人十六名日本人七八名殺された。鮮人ばかり殺すのでない。悪いことをすれば日本人も殺す。おとなしくしていて悪いことをしなければ殺されないぞ。」

その時ふと私は（南葛労働組合の河合）という言葉をききつけた。三人ばかりの巡査が立話をしているのだ。（やられたな）と私は急に自分の身がおそろしくなった。

五日便所へ行く道で日本人らしい三十五六歳の男が二人裸にされて手を縛されているのを見た。一人は頭に傷があり、一人は半死半生の状態であった。

その夜また数十人殺された。銃と剣で。

「いやな音だね、ズブウと言うよ。」

窓からのぞいて見た老巡査が妙なアクセントで他の二人の巡査に話していた。（立花春吉氏の供述より。松谷法律事務所に於て）

II

評論

新しき世界の爲めの新しき芸術

大杉栄

一

去年の夏、本間久雄君が早稲田文学で『民衆芸術の意義及び価値』を発表して以来、此の民衆芸術と云う問題が、僕の眼に触れただけでも、今日まで十余名の人々によってあちこちで論ぜられている。其の都度僕は、一つは民衆と云う事をいつも議論の生命とし対象としている僕自身の立場から、もう一つは誰れ一人として本当の民衆芸術と云う問題の真髄を摑えている人のないらしいのに対する遺憾から、是非とも其の御仲間入りをしたいとは思いながらも、遂に其の意を果たす事が出来なかった。

　もう丸一年にもなる。文壇のいつもの例に拠ると、もう此の問題も消えて無くなる頃である。それでなくとも、民衆にはまるで無関心な、若しくはロメン・ロオランの云ったように、民衆を少しも軽蔑しないと云う事を却って軽蔑のたねにする、即ち其の膏汗で自分等の力を養ってくれた親の田舎臭いのを恥じる、成上り者共の多い文壇の事である。五人や十人の、篤志なしかし無邪気な、或は新しきもの好きの、或は又物識りぶりや見え坊の先生等が、其の一角で少々立ち騒いで見たところで、殆んど何んの跡かたも残さずに過ぎ去られて了うに違いない。

　しかし僕は、飽くまでも此の問題は、いつものような文壇の流行品扱いを避けさせたい。民衆芸術は、ロメン・ロオランの云ったように、流行品ではない、ディレタント等の遊びではない。又、新しき社会の、其の感情の、其の思想の、已むに已まれぬ表現であると共に、老い傾いた旧い社会に対する其の闘争の機関である、ばかりではない。ロメン・ロオランが起草した、民衆劇場建設の檄にもあるように、此の問題は実に、民衆にとっても亦芸術にとっても、死ぬか生きるかの大問題である。

　大げさな事を云う、と笑ってはいけない。殊に、今まで何んの彼のと、我物顔に民衆芸術を説いていた人達には、単に闘争の機関と云っただけでも既にしかめっ面をしなければならない怪しからぬ事のように聞えるのであろうが、更に生きるか死ぬかの大問題だなどと云えば、きっと途方もない大げさな物の云いかたに聞えるに違いない。しかしこれが大げさに響かないようにならなければ、民衆芸術の本当の意義や価値は分らないのだ。

二

ロメン・ロオランは、前世紀の末年から現世紀にかけて、非常な勢いで拡まった民衆芸術の大運動に就いて、次ぎの二つの事実を記して置きたいと云って、民衆が急に芸術の中に勢力を得て来た事と、民衆芸術と云う総名の下に集まる諸説の極めて紛々たる事とを挙げている。

『現に、民衆劇の代表者と云われる人々の間に、全く相反する二派がある、其の一派は、今日有るがままの劇を、何劇でも構わず、民衆に与えようとする。他の一派は、此の新勢力たる民衆から、芸術の新しい一様式、即ち新劇を造り出させようとする。一は劇を信じ、他は民衆に望みを抱く。』

此の『諸説』は、日本ではまだ或る理由から、さほど明瞭には『紛々』としてもいないが、若し民衆芸術に就いての議論がもっと盛んになり、或は其の議論の実行が現われるようになれば、どれほど『紛々』として来るか分らない。今日でも、既に其の萌芽は十分にある。芸術を信ずるものと、民衆に望みを抱くものと、其の中間をぶらついているものと、いろいろある。

民衆即ち People と云う言葉は、最初本間久雄君によって、平民労働者と解釈された。本間君が主として其の人の説に拠ったエレン・ケイは、『休養的教養論』の最初に『八時間の労働と八時間の睡眠と云う事と共に八時間の休養と云う正当な要求を其の旗印としている群衆』と云って、明かに平民労働者を其の休養的教養の対象としている。ロメン・ロオランの民衆即ち People が平民労働者である事は後に明かになるであろう。然るに、此の People は民衆ではない、平民労働者ではない、謂わゆる民衆劇即ち People's Theatre の People's は一般的 (general) とか普遍的 (universal) とかの意味で、アメリカなどでは People をそう云う事が沢山ある、と云い出した人さえある。アメリカ帰りの語学者山田嘉吉君及び其の細君の山田わか子君の如きそれである。しかしこんな場合には、アメリカ通とか語学通とか云う事それ自身が間違いのもとである。石坂養平君の如きも、矢張りそんなような意味で、『民衆芸術家としての中村星湖』を論じている。

次には、民衆と云う文字と芸術と云う文字との間にはいるべき前置詞に就いての問題である。本間久雄君はそれを『の為めの』即ち for と解釈した。中村星湖君はそれを、『から出た』即ちフランス語の de part と解釈した。又、富田砕花君は『の所有する』即ち of と解釈しているらしい。しかしこれは、嘗つて本当の意味の民主政治を、民衆によって民衆の為めに造られ而して民衆の所有する政府、即ち Government by the people, for the people and of the people と云ったように、先きの三君のを合せて、民衆によって民衆の為めに造られ而して民衆の所有する芸

術、即ち Art by the people, for the people and of the people　と云わなければ精確ではないのだ。そして其の中の『民衆によって』若しくは『民衆から出た』と云うのが最も肝心である事は勿論である。田中純君は正しく云う。

『民衆自らの造り出した芸術は、それ自身民衆の為めの芸術であり、民衆の所有する芸術であり得る。真実に十分に民衆の為めの芸術と云い得るものは、民衆自らの産み出した芸術であらねばならない。』

幸いに、日本にはまだ、『今日有るがままの劇を、何劇でも構わず、平民に与える』と云う民衆芸術論はない。ただ実際方面では、時に平民労働者の為めに催すと云う従来の演芸会は、総て此の種のものであった。又、若し島村抱月君が、多少そう云う風に臭わしているように、其の芸術座の演劇が民衆芸術であるなどと敢て云うならば、それは矢張り殆んど此の種のものである。

三

僕は先きに、民衆芸術論は日本ではまだ、或る理由からさほど明瞭に紛々としていない、と云った。其の理由と云うのは、民衆芸術論の謂わゆる提唱者等が、まだ本当に民衆的精神を持っていない事、従って又今日の芸術に対する民衆的憤懣を持っていない事である。斯くして、彼等の議論は極めて微温である。曖昧である。曖昧微温な民衆側の議論は非民衆側の直截熱烈な議論を誘なわない。

嘗つて僕は、歴史を一貫する、そして今日では、資本家階級と労働者階級との形式によって現わされている、彼の『征服の事実』を説いて、

『敏感と聡明とを誇ると共に、個人の権威の至上を叫ぶ文芸の徒よ。諸君の敏感と聡明とが、此の征服の事実と、及びそれに対する反抗とに触れない限り、諸君の芸術は遊びである、戯れである。吾々の日常生活にまで圧迫して来る此の事実の重さを忘れしめんとする、あきらめである、組織的瞞着の有力なる一分子である。

『吾々をして徒らに恍惚たらしめる静的美は、もはや吾々とは没交渉である。吾々はエクスタシイと同時にアントウジアスムを生ぜしる動的美に憧れたい。吾々の要求する文芸は此の征服の事実に対する憎悪美と反抗美との創造的文芸である。』

と云った。そして更に、此の憎悪と反抗とによる『生の拡充』を説いて、

『生の拡充の中に生の至上の美を見る僕は、此の憎悪と此の反抗との中にのみ、今日生の至上の美を見る。征服の事実が其の絶頂に達した今日に於ては、階調はもはや美ではない。美はただ乱調にある。階調は偽りである。真はただ乱調にある。

『事実の上に立脚すると云う日本の此頃の文芸が、なぜ社会の根本事実たる、しかも今日其の絶頂に達した、此の征

服の事実に触れないのか。近代の生の悩みの根本に触れないのか。』

と云った。僕の此の芸術論は明白な民衆芸術論であったのである。僕の要求する芸術は、ロメン・ロオランの謂わゆる、新しき世界の為めの新しき芸術であったのである。然るに、第一に此の芸術論に反対したものは、実に今回の民衆芸術論の最初の提唱者、本間久雄君其人であったのだ。本間久雄君は憎悪に美はないと云った、反抗に美はないと云った。

フランスでの民衆芸術の提唱者、ロメン・ロオランはさすがに分っている。ロオランは云う。

『強暴と云う事は決して芸術のつき物ではない。人間の良心が、それに衝突してそしてそれを打破って行かなければならない、不正不義のつき物である。芸術は闘争を絶滅する事を目的とするものではない。芸術の目的は、生を豊富にし、力強くし、更に大きく更に善くする事にある。されば、若し愛と結合とが其の目的であるとすれば、憎悪は或る時期までは恐らくは其の武器である。セント・アントワヌ郊外の一労働者が、一切の憎悪は悪であると云う事を切りに説いて聞かせた一講演者に云った。「憎悪は善である。憎悪は正義である。被圧制者をして圧制者に反抗して起たしめるのは此の憎悪である。私は或る男が他の人々を圧倒しているのを見れば、私は其の事を憤慨する。其の男を憎む。そして憤慨し憎悪する自分が正しいのだと思う。」 悪を憎まないものは、又、善をも愛せないものである。不正不義を見てそれと闘う気を起さないものは、全然芸術家でもなければ、又、全然人間でもない。』

憎悪や反抗に美があるかないかの問題などはどうでもいい。しかし此憎悪や反抗に与しないものは『全然芸術家でもなければ、又全然人間でもない』のだ。此の本間君の思想は、其後二ヵ年間に、どれほどの進歩があったかは知らない。しかし兎に角、此の本間君が、日本に於ける民衆芸術論の最初の提唱者であったのだ。

四

本間久雄君は、何事にも篤志なしかし無邪気な学者である。だから君は、エレン・ケイの『休養的教養論』を一読して、至極殊勝な篤志を起したものの、却って安成貞雄君に散々遣っつけられたように、へまな民衆芸術論の説きかたをしたのである。

エレン・ケイの論旨は、要するに、スエデンの青年社会民主党に対して、

『ひまな時間を増やす事の為めに闘うと共に、其のひまな時間の悪用されないように休養的教養を獲得しなければならない。

『何事に於ても旧社会より、より善き新社会を造る責任を帯びている青年等の間に、又其の青年等によって、階級戦

争（class war）と共に、絶えず教養戦争（culture war）をも営ませなければならない。』

と勧告したものである。娯楽にも善し悪しがある。肉体上及び精神上の更新を齎らさない娯楽は有害である。休養的教養（recreative culture）とは、先ず諸種の快楽を識別する能力を意味し、次ぎに更に新しき力を齎らす生産的な快楽を選んで、不生産的な快楽を斥ける意志を意味する。そしてエレン・ケイは猶続けて云う。

『いずれの階級に於ても、大多数の人々は空虚な快楽に耽っている。しかし、斯くの如きは、他のいずれの階級に於ても労働者階級に於けるほど甚だしい危険はない。なぜなら、劣等な快楽によって精神上に傷害を蒙むるのは、いずれの階級のいずれの個人にも等しく有害である事は勿論であるが、其の掌中に共同団体の近い将来の諸問題を握っている第四級民が甚だしく此の傷害を蒙むるのは、共同団体の全体にとって、又其の将来にとって、更に遙かに有害である。

『労働者階級は、其の仕事の為めの力を強大にする為めに有らゆる手段を、快楽の手段をすらも用いなければならない。

『されば、労働者等が現に持っている僅かな余暇が、又彼等が獲得せんと欲しているそれ以上の余暇が、値打のない娯楽で費されているか、若しくは本当の休養即ち肉体上及び精神上の力の更新の為めに使われているか、と云う事は最も重大な一問題である。』

エレン・ケイの此の勧告に対しては、いかにつむじ曲りの社会民主党と雖も、然らば女史も亦其の謂わゆる教養戦争と共に階級戦争をも鼓吹せよ、と云う外には、黙って傾聴する外はあるまい。又、若し本間君が単にこれだけの紹介にとどめたならば、安成君からあんな意地の悪い妙な質問を受けなくても済んだのであろう。

エレン・ケイは、本間君が云ったようには『要するに彼等労働者には惨めさと醜くさとがあるばかりである』とは云っていない。『慈母のような温情』を以て、此の『惨めさと醜くさとを人一倍深く感じ、そして人一倍深く憐れんでいる』と云う程でもない。『其処には、人間と人間とが互いに抱き合うような情味や、人間としての生の享楽など云う事は薬にしたくもない』とも云っていないようだ。それほど醜い『蛮人』に、どうして、『人類全体の直接の将来』などが握られていよう。又、どうして握らせて置かれよう。

又、エレン・ケイは、本間君が云ったようには、専門的な予備知識を持たなければ了解されない謂わゆる高級芸術とを並立させてはいない。『民衆の為めとは、労働者階級の人々の為めと云う意味であるから、其の芸術は、彼等労働者にもよく鑑賞され、理解されるほど、通俗的な、普遍的な、非専門的なものでなければならない』とも云っていない。こんな誤解され易い、又誤解する方が尤もな、余計

な事は云っていない。

これを要するに、エレン・ケイはただ、ロメン・ロオランの民衆芸術論の要旨を紹介して、それに、『其の一語も残さずに賛成し』更に、其の一方面の休養的教養を力説して、現在の民衆の娯楽物を批評したにとどまる。そして、此の休養的教養を力説した事が、何事にも精神的で個人的で且つ謂わゆる温健な、エレン・ケイの特徴なのである。従って、本間久雄君のように、此の方面からのみしかも極くまずく民衆芸術を説くとなると、頗る妙なものが出来上るわけだ。

五

然らば、エレン・ケイが『其の一語も残さずに賛成した』と云う、ロメン・ロオランの民衆芸術論の要旨はどんなものか。ロオランの民衆芸術論は主として民衆劇論である。以下出来るだけロオラン自身の言葉によって、其の要旨を述べる。

今や、旧社会は其の繁栄の絶頂を超えて、既に老朽の坂を降りつつある。或は既に瀕死の状態にあるものと見ていい。そして其の廃墟の上に、民衆の新しき社会が将に勃興せんとしつつある。

此の新勃興階級はそれ自身の芸術を持たなければならない。其の思想と感情との已むに已まれぬ表白としての、其の若い溌剌とした生命力の発現としての、そして又、老い傾いた旧い社会に対する戦闘の機関としての、新しき芸術を持たなければならない。民衆によって民衆の為めに作られた芸術を持たなければならない。新しき世界の為めに新しき芸術を持たなければならない。若し此の芸術が出来なければ生きた芸術はない。過去のミイラが眠っている、一種の墓地のような、博物館があるばかりだ。

少しも党派心のない、無限な、永遠な、普遍な、民衆芸術と云うような事を云う人がある。これは貴い夢想である。将来の世代は、若しそれが出来、幾世紀かの後にはそれを実現するだろう。しかし今のところは、永遠を現在の瞬間に置いて、今日の時代と共に生きる事を努めなければならない。芸術は其の時代の渇望と引離される事は出来ない。民衆芸術は、民衆の苦痛と、其の希望と、その闘争とを相倶にしなければならない。

如何なる美も、如何なる偉大も、青春や生命の代わりをすることは出来ない。諸君の芸術は老人の芸術である。吾々が、吾々の晩年に吾々の任務を果たし、吾々の共同行為の義務を尽した後に、公平無私の芸術や、ゲエテの晴朗や、純粋の美を望むのは、善い事でもあり自然の事でもある。それは人生の旅の至上の理想であり究竟である。しかし、其処へ行くだけの功績もなしに、余りに早く其処に到達する人々や民族は、悲しむべきものである。それ等の人々やそれ等の民族には、其の晴朗は、無感覚即ち死の前兆に過

ぎない。生は不断の更新である。闘争である。有らゆる苦難のある闘争の方が、諸君の美わしい死よりも善いのだ。
静穏な時代や芸術は如何にも望ましい仕合である。しかし其の時代が乱れている時には、其の国民が闘っている時には、其の国民に味方して闘い、其の国民を奮起せしめ、其の国民の行くべき道をさえぎっている無知を打破り、偏見を斥けて行くのが、芸術の目的である。
シルレルは既に、一七九八年に、其の『ワルレンスタインの戦』の上場の際に云っている。
『今其の幕を開きつつある此の新時代は、詩人にも旧い道を去らせて、諸君をして紳士閥生活の狭い範囲から、吾々が今奮闘努力しつつある此の崇高な時代に相応しい、もっと高貴な劇に移らせようとしている。なぜなら、独り大きな題目のみが人間の奥深い臓腑を揺り動かす事の出来るものである。今、現実そのものが詩になっている。そして人人が人類の大利益たる主権と自由との為め闘っている。此の厳粛な時期に際して、芸術も亦、鬼神を喚び起す其の劇の上に、更に大胆な飛躍を試みる事が出来るのだ。芸術は此の飛躍を試みる事が出来るばかりではない。此の実生活の劇の前に赤恥をかいて消えて失くなる事を望まないならば、是非ともそれを試みなければならないのだ。』
若し芸術が此の時代に応ずる事が出来なければ、芸術は少なくとも生きた芸術は消滅しなければならない。又、此の新芸術を創る事の出来ない民衆は、其の新勃興階級たる運命をも放棄しなければならない。斯くして民衆芸術の問題は、民衆にとっても、又芸術にとっても、実に死ぬか生きるかの問題である。
民衆にも二種の民衆がある。其の一つは、貧窮から遁れ出て、直ちに紳士閥に心を惹かれ、紳士閥に吸収されて了ったものである。もう一つは、此の仕合な兄弟に見棄てられて、其の貧困のどん底に蠢いているものである。紳士閥の政策は、此の後者を絶滅させ、前者を同化させる事にある。そして吾々自身の政策は、即ち吾々の芸術的であると共に社会的な理想は、此の二種の民衆を融合させて、民衆自体に其の階級的自覚を与える事にある。
若し民衆が第二の紳士閥となって、それと同じように其の享楽は粗雑であり、其の道徳は偽善であり、そして紳士閥と同じような愚鈍な無感覚なものになるのなら、吾々はもう民衆の事などを心配しない。声ばかり高くて空っぽな芸術や、屍骸のような人類を生き延びさす事は、吾々にはどうでもいい事なのだ。
しかし吾々は民衆の若い生命力を信ずるものである。又人類の道徳的及び社会的の革命を信ずるものである。
此の民衆芸術に対する吾々の信仰、即ちパリの遊人等の惰弱なお上品に対して、集合的生活を表明し種族の更生を準備し促進する頑丈な男性的の芸術を建設せんとする、此の熱烈な信仰は、吾々の青年時代の最も純潔な、且つ最も健全な力の一つであった。吾々は決して此の信仰を失わな

い。

六

ロメン・ロオランの民衆芸術論の要旨はこれで尽きる。しかしこれは要するに理想である。信仰である。此の理想や信仰の実現される前に、『民衆によって』と云うよりも寧ろ『民衆の為めの』芸術が産まれなければなるまい。

今や芸術は利己主義と混乱とに悩まされている。少数の人々が芸術を其の特権としている。民衆は芸術から遠ざけられている。国民中の最も数の多い、そして最も活力のある部分が、芸術の中に何等の表現をも持っていない。斯くして思想は甚だしく貧弱となり、芸術の為めには重大な危険が迫っている。

芸術を或る一階級の独占的享楽として了うのは、此の芸術を奪われた階級の人々をして、やがて芸術を憎悪せしめ且つ破壊せしめる事に導くものである。

芸術を救う為めには、芸術に生命の門戸を開かなければならない。有らゆる人々を其処に容れなければならない。平民にも発言権を与えなければならない。

しかし生は死と結びつく事は出来ない。過去の芸術は既に四分の三以上死んだものである。過去の芸術は生には何んの役にも立たない。却って往々生を害う恐れすらある。健全な生の必須条件は、生の新しくなるに従って、絶えず新しくなる芸術の出来る事である。

何ものもただ、其の生れた場所と時代とにのみ、善いものである。善や美が絶対的存在であるとか、又は永遠的観念であるとかは信ずる事が出来る。しかし、其の表現は人心の様式によって変わる。選ばれた人々にとっての美も、民衆にとっては醜であり、又選ばれた人々の欲望と同じ正当の権利を持っている民衆の欲望に応じない事もある。二十世紀の民衆に過去の世紀の貴族的社会の芸術や思想を強いる事は出来ない。

紳士閥の批評家は屢々云う。民衆は自分の階級よりも上の階級のものを主人公とした小説や脚本でなければ喜ばない。富裕な社会の描写は民衆をして自分自身の貧困の倦圧を忘れさせるものであると。なるほど、民衆が半睡眠状態にある間は或はそうであるかも知れない。しかし、其の人格の感情が目覚め其の市民としての品位を自覚するようになれば、民衆は斯くの如き従僕芸術に恥じなければならない。そして又、民衆を尊敬する人達の義務は、斯くの如き芸術から民衆を救い出す事にある。

民衆は紳士閥芸術の残り物を集めるよりも、もっと遥かにいい、しなければならない事を持っている。現在の芸術のお客を増やす事を努めなくてもいい。吾々は現在の芸術の為めに働いているのではない。吾々は芸術の善と民衆の善と云う事だけを考えればいいのだ。そして、現在の一般の芸術的教養を普及さす事が、此の芸術の善又は民衆の善

にになるなどと考えるのは、余りに傲慢な楽天観であらねばならない。

吾々の目的とするところは、平民の善ばかりでない。又芸術の善である。芸術は人間の魂の偉大さを現わすものである。人間の魂の有らゆる創造の中で、しかも此の創造があって始めて生命に値打がつくのであるが、吾々は芸術を限りなく崇拝するものである。

吾々は血の気のない芸術に生気を与え、其の痩せ衰えた胸を太らせて、民衆の力と健康とを其の中にとり入れさせようと云うのだ。吾々は人間の魂の栄誉を民衆の為めに使おうと云うのではない。民衆を吾々と一緒に、此の栄誉の為めに働かせようと云うのだ。

此の意味での民衆芸術は、其の第一条件として、それが娯楽である事である。民衆芸術は、先ず民衆の為めになるものであると共に、一日の労働に疲れた労働者の為めの肉体上及び精神上の休養でなければならない。

なまけ者の理知にすら往々多くの害悪を及ぼすデカダン芸術の最後の所産を民衆に与える事は出来ない。又、選ばれた人々の苦痛や煩悶や疑惑は、其の人々自身が保管して置くがいい。民衆には、民衆自身の苦痛や煩悶や疑惑が、其の分前以上にある。それ以上に増やす要はない。少数の或る人々が、『鼬鼠が卵を吸うように憂欝を吸う』事が好きだからと云って、此の貴族共の知識的禁欲主義を民衆に強いる事は出来ない。腐った木の上に出た大きな苔のような、誘惑的な、しかし一切の行為を殺す夢想によって害毒された、選ばれた人々の病的な感情の複雑さを平民に強いる事は出来ない。よし吾々が其の病気を吾々自身の中に養う事にどれほどの満足を感じても、吾々の其の病気を民衆に感染させてはならない。吾々よりも更に健全な、更に値打のある種族をつくる事に努めなければならないのだ。

民衆は猛烈な芝居が好きだ。しかし其の猛烈は、実生活の上でもそうだが舞台の上でも、民衆が自分を其の人になぞらえて見ているヒイロオを破滅させて了ってはいけない。民衆は自分自身はどれほど諦らめどれほど気落ちしていても、其の夢想の人物の為めには非常に楽観的なものである。悲しい結末になっては堪らない。最後に善が勝つと云う、皆んなの心の奥底に持っている衷心からの確信が、芝居の中で証明されなければならない。これは民衆の心が無邪気なせいではない。却って其の健全な為めである。民衆の此の確信には道理がある。此の確信は、生活に必須の一つの力であり、又進歩の法則でもある。

然らば、民衆には、散々人を泣かせて置いて、遂に目出度し目出度しで終るメロドラマでなければいけないと云うのか。決してそうではない。斯う云う粗雑な虚偽は、アルコオルと同じように、民衆を無気力にする催眠剤である。麻酔剤である。吾々が芸術に持たせたいと思う娯楽の力は、精神的元気を犠牲にするものであってはならない。次ぎに民衆芸術は元気の源でなければならない。元気を

弱らしたり凹ましたりする事を避けなければならないと云う義務は全く消極的のものである。従って此の義務には、必然に、其の反対の、即ち元気を得させ又強めさせる、と云う積極的の方面がある。民衆芸術は、民衆を休息させつつ、更に翌日の活動に適せしめるようにしなければならない。

第三に、民衆芸術は理知の為めの光明でなければならない。民衆を其の目的地にまっすぐに導いて、途々自分の周囲をよく見る事を教えなければならない。暗い蔭と襞と妖怪とに充ち満ちた人間の恐ろしい脳髄の中に、光りを拡げなければならない。労働者は其の肉体は動いているが、其の思想は大抵休んでいる。此の思想を働かせる事が肝心なのだ。そして、少しでも其の思想を働かせる事が出来て来ると、それは労働者にとって快楽にさえなるのだ。しかし民衆をただ考えさせ働かせる状態に置くだけでとどめなければならない。如何に考え如何に導くべきかを教えてはいけない。労働者をして有らゆる物事を、人間や自分自身を、明かに観察し明かに審判する事を覚えさせなければならない。

歓喜と元気と理知と、これが民衆芸術の主なる条件である。其他の諸条件は自然と備わって来る。そしてお説法やお談義は、折角芸術を好きなものまで嫌いにさせて了う、手段としても極めて拙劣な非芸術的のものである。

又、此の種の民衆芸術は、近代の謂わゆる社会劇とも違う。たとえば平民を最もよく理解し、又最もよく愛した現代人トルストイは、あれほど厳しく其の傲慢を圧えていたのにも拘らず、使徒と云う其の使命と自分の信仰を他人に強いなければやまない強い欲望と、及び其の芸術上のレアリズムの要求とは『暗の力』などでは其の非常な慈悲心よりも余程強かった。斯くの如き作物は、民衆の為めには、有益と云うよりも却って気落ちさせるものである。要するに、此の『暗の力』や又は『織工』の如き作物は、貧窮の長い絶叫か若しくは悲嘆話しで、其の杞憂や絶望は、既に余りに生活の為めに苦しめられている貧民に元気をつけるとか慰安を与えるとか云うよりも、寧ろ富者の良心を覚醒させる為めのものである。或は又、せいぜい、貧民の中の少数の、選ばれた人々の為めのものである。

七

しかし、此の主として『民衆の為めの』芸術が民衆に享楽されるようになるには、又彼の本当に『民衆の』芸術が生れるようになるには、先ず其の『民衆』が必要である。『嘗って』とイタリイの革命家マヂニイは云った。当時彼れはまだ若くて、其の生涯を文学に貢献するつもりでいたのだ。『嘗って私は斯う思った。芸術がある為めには、先ず国民が無ければならないと。当時のイタリイには其のいずれもなかったのだ。祖国もなく自由もない吾々は、芸術

を持つ事も出来なかった。されば吾々は先ず、「吾々は祖国を持つ事が出来るだろうか」と云う問題に献身して、此の祖国を建設する事に努めなければならなかったのだ。斯くてイタリイの芸術は吾々の墳墓の上に栄えるのだ。』

吾々も矢張り云おう。諸君は民衆芸術を欲するのか。然らば、先ず民衆そのものを持つ事から始めよ。其の芸術を娯しむ事の出来る自由な精神を持っている民衆を。容赦のない労働や貧窮に蹂みにじられないひまのある民衆を。有らゆる迷信や、右党若しくは左党の狂信に惑わされない民衆を。自分の主人たる、そして目下行われつつある闘争の勝利者たる民衆を。ファウストは云った。

『始めに行為あり』と。

斯くてロメン・ロオランは、其の民衆芸術の当然の結論として、芸術的運動と共に、と云うよりも寧ろそれに先きだって、社会的運動に従わなければならないと断言した。

然るに、翻って我が日本での民衆芸術論を見るに、此の点に於て果してどれ程の用意があり又覚悟があるか。少なくとも又、果して此の点に考え及んだ事すらあるか。

猶ロメン・ロオランは、其の民衆芸術論を労働論で結んでいると共に、其の芸術論をも生活論で終らせている。彼れは云う。

『私は劇が好きだ。劇は多くの人々を同じ情緒の下に置いて友愛的に結合させる。劇は、皆んなが其の詩人の想像の中に活動と熱情とを飲みに来る事の出来る、大きな食卓のようなものだ。しかし私は劇を迷信してはいない。劇は、貧しいそして不安な生活が、其の思想に対する避難所を夢想の中に求める、と云う事を前提とするものである。若し吾々がもっと幸福でもっと自由であったら、劇の必要はない筈である。生活そのものが吾々の光栄ある観物になる筈である。理想の幸福は吾々がそれに進むに従って益々遠ざかって行く。従って吾々は遂に達する事は出来ない。しかし、人間の努力が芸術の範囲を益々狭めて生活の範囲を益々広めて行くと云う事は、若しくは芸術を閉ざされた世界即ち想像の世界としないで、生活そのものの装飾とするようになると云う事は、敢て云える。幸福なそして自由な民衆には、もう劇などの必要がなくなって、お祭が必要になる。生活そのものが其の立派な観物になる。民衆の為めに此の民衆祭を来させる準備をしなければならない。』

近代の最大の芸術家たるワグネルも、若い率直さで、敢て斯う云っている。

『若し吾々が生を持ったら、芸術なぞは要らなくなるのだ。芸術は、丁度生の終るところで始まる。生が吾々に何んにも与えなくなった時に、吾々は芸術品によって「私は斯くの如く望む」と叫ぶのだ。本当に幸福な人がどうして芸術をやろうなどと云う考えを持つ事が出来るのか私には分らない。……芸術は吾々の無力の告白である。……芸術は一つの渇想に過ぎない。……私の若さや健康を再び見る為めには、自然を娯しむ為めには、限りなく私を愛する女

の為めには、美しい子供の為めには、私は私の全芸術を与える。さあ、私の全芸術を今此処へ出す。其の残りの物を私にくれ。』

若し吾々が『此の残り物』の僅かでも不仕合な人々に与える事が出来たら、生に少しの喜びでも与える事が出来たら、よしそれが芸術を犠牲にしてでも、吾々はそれを悔まない。

（一九一七年一〇月「早稲田文学」）

民衆芸術の出発点とその目標

加藤一夫

一

昨年の上半期に於てなした自分の民衆芸術の提唱に対し、かなり多くの人々の批評を辱のうしたのにも拘わらず、杜生憎自分はその六七月頃から出版事業の計画をしたり、杜翁全集刊行の準備をなすに忙しかった為めに、その都度一々これに答える事が出来なかった事を残念に思う。しかし民衆芸術論はもうあれで尽きたのでない。否、今後益々多く論ぜられ、且つ実行の運びに至らねばならない。自分は今生活上に少しの小康を得たので、今一度諸氏の批評に答え、且つ自分の意のあるところをもっと明かにして置こうと思う。

民衆芸術論は勿論、昨年に至って始めて行われたのでない。数年前からして既に或る一部の人々によって、論議されて居た。しかしそれが単なる研究だとか解説だとかでなくて、主張となって現われたのは、恐らく昨年であったろう。で、自分は先ず、それまでにも漠然として論じられて居た民衆芸術に対して、民衆芸術々々とちょいちょい論じられて居るが、一体その民衆とは何であるのか。民衆芸術は誰によって主張せられ創作されるのか。と云う意味の問題を提出して、民衆芸術はアリストクラティックな階級から出ないのは勿論、無自覚なる第三階級第四階級からも出ないと云う事、それはただ、真の人間性に自覚した者、即ち自分の謂ゆる真の民衆の間からのみ起り得ると云う事、勿論その自覚せる民衆は主として第三第四階級のうちより起るべきであるが、必ずしもそこからのみ起るときまった事はない。アリストクラシイの中からでも起り得ると云う事、かくて真の民衆とは、現在の何れの階級にも属しない様な、一種特別な人間たち、即ち自分の謂ゆる新興人民の謂であり、民衆芸術とはそれ等の人々の芸術であると云う

ことを云って置いた。

自分は更に進んで、斯うした新興人民、即ち真の人間性に目ざめるとは何う云う事であるかと云う事を論じて、それは特に人間が本質的にデモクラティックなものであると云う事を自覚するところから出発すべきであると云って置いた。

ところが、自分の謂ゆる民衆の解釈が在来の観念と余りに懸け離れて居たために端なくも民衆の解釈に対する議論が沸騰し、大部分の意見は自分の「民衆」概念を不当とした。そして、若し「民衆」が自分の云う様なものであり、民衆芸術が、そうした自覚せる人間の芸術であって、イズムでも何でもないのなら、それは在来の芸術と別に変った事のないもの、従って特に民衆芸術などと称すべきでないと云った。自分の民衆芸術に対する非難は要するに此の二点に簡約されると思う。

成程、これは表面上ちょっと見たところでは左様も思える。しかしながら、自分の主張の本当の核心が何処に在るかを洞観し得る人があるならば、そんな非難はされない筈である。だが、それも無理のないところは在る。こうした考えを起した最初の源因は自分に在ったとも云える節はある。では、その最初の源因とは何であるか。

それは、自分が民衆芸術論の出発点をもって民衆の解決それ自身に在るとした事である。勿論、ある一面に於てはそうである。少くとも昨年以前までの日本の民衆芸術論に於てはそれを決定める必要があった。だが、今にして思うと、民衆の解釈は寧ろ、民衆芸術の出発点ではなくて、その到達点である。否、恐らく到達点と云うものはないであろうが、民衆芸術の内容の問題である。従ってこれから新に開拓して行くべき未蹤の目標であると云えるし、多くの評家は、民衆の解決が民衆芸術の出発点であり、寧ろそれは既定の事実でなければならぬ様に思い、今頃民衆とは何であるかなど詮議して居る様では、民衆芸術の前途も遼遠だと云わねばならぬと云う様に云って居る。成程民衆芸術の前途が尚遼遠であるのには相違ないが、それが遼遠であるのは「民衆」そのものが既定の事実でなくて、永遠に開拓され開発さるべき未知の世界だからである。従って民衆とは何であるかを定めるのは民衆芸術の出発点でなくて寧ろ今後の問題である。

それ故に、自分が民衆芸術の先決問題として「民衆」の概念を定めようとしたのは、少くとも或る一面に於て誤って居た。そしてそれがために自分の民衆芸術論が特に民衆芸術と称するには及ばぬと云う様な感じを諸氏の心に感ぜしめたに相違ない。しかし此の事は又後で云う事にする。

二

では、民衆芸術の出発点は果して何処に在るか。少くとも民衆芸術を提唱しなければならぬ動機は何処に在るか。

自分はそれに答えて曰おう。民衆芸術を要求する理由が即ち民衆芸術の出発点であると。
そうだ。民衆芸術の何であるかは、まだ問うを要せぬ。だが、吾々は民衆の芸術を要求する。
　過去に於ても、生のための芸術を説くものはあった。また、芸術のための芸術を説くものもあった。そして吾々はその何れをも否定しようとはせぬ。何故なれば、これは人間本然の要求から考えて見て、決して排斥せらるべきものでないからである。生のための芸術を説くものも、芸術のための芸術を拒否すべきでない。遊戯が生活の一部分をなす事を許すならば、遊戯も生のために存するものと云わねばならぬ。それと同様に、美のために美を創造する事も、芸術のために芸術を創造する事も、矢張り生のためであると云う事が明である。また、芸術のための芸術を説くものも生のための芸術を拒否すべきでない。何となれば、生そのものが芸術と背馳する謂われはないからである。けれど吾々が、民衆の芸術を語るのは、そうした何れの心からも云うのでない。生のためだとか、芸術のためだとか云う心にはまだ余裕がある。隙間がある。少くとも自覚した人間の心は、自己と芸術とを別々のものの様に考えて芸術にのぞむような生温るいものを許さなくなった。彼等には叫ばずには居られぬ要求がある。訴えずには居られぬ嘆きがある。生を賭してまでも突進せずには居られぬ憧憬がある。そうした自覚に立って居るものはまだまだ少ないかも知れぬ。けれど、或る一つの大きな雰囲気が、今や段々と拡がりゆき、濃くなりゆきつつ、全世界を掩おうとして居る。人類の歴史は、たといその終局の目的は何であると定める事が出来ないとしても、それが或る大きな流れとなって、澎湃として押しよせて居ることは確である。何時の時代にも時代に応じた人類的精神が形造られずには居られなかった。そしてその精神は、甘いロマンティックな憧憬で満足の出来て居た事があった。針の尖きに悪魔が何疋とまれるかと云った様な閑日月のある議論を戦わして居ることの出来る時代もあった。星や菫に甘い悲哀を寄せ、淡い嘆きを顕う事をもって幸福と感ずる事の出来る時代もあった。或はまた、一度びそれ等のものの空疎な幻影であるのを看破った時には、現実の醜悪に全く臣従する事に於て悲愴なる慰めを感じて居る事の出来る時代もあった。夫等は凡て、全人類の心のトンネルを通って流れゆく大きな生命の、その時々の相であって、その時にはそれでよかったのである。だが、生命は今や、その過程を通り越してしまった。そして新しい大きな心に目ざめた。抑圧されたものはその抑圧の重荷を撥ねのけようとし、不当な権利や利益を貪られて居るものは、これを自己に取戻そうとし、誤れる階級観念はこれを打破しようとし、誤れる社会組織はこれを革めようとし、そして万人が均しく人間としての真の生活を享楽しようとする。
　茲に民衆芸術は生れるのである。茲に新興人民の新しい

芸術が要求されるのである。民衆芸術は彼等の口である。彼等の手である。足である。彼等の動作である。生活である。而ち新興人民の正当なる要求である。彼等の新しい思想や感情の具体的表現である。新しい創造の世界の象徴的表現である。新しい眼をもって見たる社会批評である。人生批評である。

三

既に新しい雰囲気が生じて居る。既に新しい人民が生れて居る。表現なしには生活と云うもののない人間には、そこにまた新しい芸術が生れねばならぬ。斯くして民衆の芸術は生れる。

これを芸術の方面から見ると、彼等は最早、徒らに官能の繊細を誇り、阿片や珈琲や煙草の毒気に浸った神経の奇怪なる活動を誇示する様な芸術を排斥する。美しい、しかし空虚な文字の排列や、夢の様な情調の魅惑を斥ける。直接の生活と関係のない、呑気なノラクラ小説を読んだり作ったりする余裕がない。理智のトリックにかけ、お話上手の餌にかけて人を迷わす様な芸術を拒否する。現実ばなれのした空虚なロマンティックな芸術も排すれば、現実に征服されきった意気地なしの芸術をも斥ける。彼等は先ず生くる事のために努力する戦闘の芸術を要求する。血をもって叫ぶ痛切なる要求を表白する。そして正当なる地位を各個人個人に要求する。自己の本然の姿を開発し、それを如実に実現しようとする。一歩は一歩と新しい真の世界を発見し創造してゆく。

こうしたところから民衆の芸術は出立する。こうした芸術を要求して居る人間は今や世界の何処にも存在して居る筈である。そして益々多くなろうとして居る筈である。

民衆の芸術はこうした不満から生れるのである。そして自己本然の実相に照応する真の個人と生活とを創造せんとする欲求であり、そうしたものの新しき酒を盛らんとする新しき革袋である。

自分はこれを初めからもっと明かに云うべきであった。しかし、それを明かに云わないで、直に民衆の解釈に行ったのは、これを既に明瞭な事実だと思って居たら、又最初の事実として云わなくても、自分の民衆芸術論には自然と此の事が示されて居るから、故らに云う必要がないと思ったからである。けれど、自分の民衆芸術論が余りに多く誤解されて居るに於てはこれを明かにして置かねばならぬ。

しかしながら、これは民衆芸術の出立点であって、民衆芸術そのものでない。民衆芸術を育む土壌であり光線であって、民衆の芸術の内容そのものでない。

人間の生活は要するに、永遠の自己開放である。おやみなき自由への行進である。衷に秘んで居る力と生命と心と

何等の阻止なく、如実に生き得る時に実現されるものである。それが人間の真の生活である。然るに人間はこれを十分に獲得して居ない。十分に自己のものとしていない。長い歴史は因襲によってこれを妨げた。人間自身のうちにある或る巧利的な分子や臆病性が我自ら自分の自由を抑圧した。自ら不自由の殻を造っては、やがてまたその不自由の殻を破ろうとする。かくして自分自身は幾度か見失われ、損われ、そしてまたこれを発見するために血の汗を流し流血をすら見るのである。

そして今や、人類が歴史あって以来最も鋭敏に此の不自由の縛を自覚し、此の桎梏の悩みを感じ、そして万人一様にその真の自己に生きようとする欲求に燃え立って居る。自分が人間性に目ざめた個人と云ったのはこれを云ったのである。

そこで、民衆芸術とは一体何を目指し、何を創造せんとするのであるか。

此の見失われたる人間性を、否、自己を、此の傷けられ損われたる自己を、そしてその個人の形成する真個の社会を、発達せしめんとする努力であり、創造せんとする欲求である。そしてこれは決して一朝一夕の業ではない。

四

真の人間性、真の自己、今までも自分が幾度か云った様に、それは決して一つの定りたる型でない。それは日と共に成長し、時と共に創造され行くものである。汲めども汲めども尽きざる真理の源泉であり、掘れども掘れども窮まるところのない永久の坑道である。

それ故に、今日の社会及び個人の生活に、抑圧の重荷を負い、不自由の縛めに悩まされ、不当の権利を貪られて居る人間の間から起った新興の人民も、結局、その目標とするところは之等の不合理な生活から脱して、真の人間になろうとすることより外はない。即ち真の自己に生きようとすることより外はない。即ち自分の謂ゆる真の民衆になろうとする事に外ならぬ。そして彼等の要求する芸術も亦、そうした真の人間、真の自己の、思想、感情、生活を表現したものであり、そうした新しい眼より視た新しい批評であるのは云うまでもない。

即ち、民衆とは既定の事実でなくて、新興人民の今後進んで行こうとする過程の事であり、進路の事である。これ民衆の解釈が民衆芸術の出発点でなくて、寧ろその目標である所以である。

夫故に「民衆」は何であるかと云う事は寧ろ論議さるべきでなくて、今後、民衆芸術それ自身が表現すべき芸術の

内容であるべきである。それは決して此処に見よ彼処に見よと云う様な固定せる概念でない、不断に流れてやまざる永久の新しい世界であり、永久未蹤の地である。自分が、民衆芸術はイズムでなく、凡ゆる真なる芸術は民衆芸術であると云ったのは此の意味に於てである。ただ、今後の民衆芸術は今日までのそれと同様でなく、新しい形相と精神とを備えたものでなければならぬと云うことを附け加え置くべきであったのである。少くとも誰にでも自分の意のあるところを解る様に説明するのには……。

最後に自分は、尚一つ附け加えて置かねばならぬ。それは、自分が、真の人間性は本質的にデモクラティックであると云った事である。この事も亦多くの人に誤解と迄は行かなくとも少くとも十分の諒解を与えさせてないのは確かである。

自分が真の人間性がデモクラティックであると云ったのは、直ちにもって江口氏などの大雑把な頭で考える様に、真の人間性に目ざめるとは「人類的愛」に目ざめると云う事ではない。自分はそんな事は云わなかった。デモクラティックであると云う事の説明としては「自己は他の一切と有機的に依繋する全一である」とは云ったが「人類的愛」に目ざめよなどとは云わない。また、川路氏が云った様に、デモクラティックであると云う事をもって単に「人間の相関的方面ばかりを重大視」したのではない。自分は云って居る。「かくてその本質に於て絶対に自由である自己は同時に又デモクラティックな存在である」と。自分が人間の相関的関係と云ったのは寧ろその半面である。他面では絶対の自由を肯定して居る。のみならず、川路氏の批評に対する抗議として、自分はもっと大胆な事を云って置いた筈である。即ち真の民衆芸術はデモクラシイなしでも存在して居る。真の人間は、即ち真の自己は人間性だとか、民主主義だとか、自由だとか、そんなものからすら束縛されてはならぬ。人間が遂にデモクラシイなど云う思想や生活を束縛だと感じる時が来ないとも限らぬ。と云った意味のことを云って置いた筈である。

人間がデモクラティックであると云うのは一種の法則である。ただ法則である。自分はそれをもって他動的な「人類愛」など云う重荷を人間に負わそうとしたのでない。又、此の法則以外に他の何等の法則がないと云ったのでもない。

要するに「民衆」の意義は民衆芸術の今後の成長や発展と共に益々新にせられ深められ拡められるものでなければならぬ。民衆芸術の具体的内容とならねばならぬ。

（一九一九年二月）

『労働問題』自序

平沢計七
（発表名　平沢紫魂）

『労働問題』の著者は、日本の労働団体友愛会の幹部として、日本の労働運動の陣頭に立っている者であるが、彼は間違って彼の愛している祖国の手で打砕かるるか、間違って彼の愛している民衆の手で打砕かるるか、どっちにしても愉快な死様をする男である。けれども彼は日本の労働運動がどの様に展開して行くかを知らぬ。彼は唯日本の労働問題を知っている。彼は生粋の筋肉労働者である。彼は彼が見て味って感じた事を其儘発表したに過ぎぬ。『労働問題』に現れた労働者は、哀れで悲惨で無智なのが多い。彼が熱望しているような巨人は、其強い意志のカケラさえ現して呉れぬ。彼は幾度か筆を曲げて巨人の出現を書こうとした。併し真実の前には彼の熱望は煙の如く消滅せねばならなかった。

（一九一九年六月）

民主的文芸の本質と使命

白鳥省吾

一　貴族主義より民主々義へ

民主主義（デモクラシー）は単に政治的の言葉ではない、其れは一般的観念で、人間の活動のあらゆる領域に於ける行為を決定する。即ち教育、宗教、哲学、芸術の各部の成長に影響するものである。

これを社会的に言わば、貴族主義（アリストクラシイ）は形式に於て因襲的であり、内容は排他的であり、発達の点は保守的である。一方、民主主義は其の形式に於て非因襲的にして殆んど定形というべきものなく、内容は包括的であり、思想に於て進歩的である。故に貴族的芸術は、先ず、形式に於て尊厳がなければならぬ。習慣に依って規定された衣服を着ねばならぬ。伝統に依って強いて保たれる良き形の標準によって価値を決定される、甚しく外面的であり、而も「高尚なる様式」の範囲内では完全で、権威ある因襲によって其の古典的の完成の中に固定する。

上流社会の人々が、教養の趣味の中に粗野な言葉を避けるように、貴族的芸術は粗野な人間を避ける事によって上

品を保つ。従って其の題材は排他的である。王侯貴人のみが其の芸術の人物となり又、場面を与えられる。貴公子から貴婦人へ流るる情熱が抒情詩となる。優雅な行為の騎士と貴婦人は叙事や劇詩的行為の範囲を組成する。普通の人間は演劇の中に道化者たり、また、嘲笑の的として現われるかも知れぬが、決して独立した運命を有し興味を持って入っては来ぬのである。例えば沙翁劇を見ても、運命は帝王と貴族とのみに与えられている。

生活に対しても貴族主義は常に保守的の態度を持続する、過去の恩恵によって存在する、其の力と特権とは公私の相続によって推定される、父の意志は子の履歴を支配する、老人の経験は青年の創造的本能を束縛する、貴族主義は新思想の侵入を拒む、そして何物をも疑わない、何物をも望まない、永久に制限の中に安定している。その芸術は過去の中に黄金時代を描く、封建時代に属する物、君主の尊厳を嘆美する。

民主的芸術は形式に於て絶えず流動し、変化し、題材に於て其の範囲が極めて複雑に、思想に於て自由に拡充され進歩するものである。

其の特色の一つは、『自由』である、即ち自由とは形式と題材とを束縛なしに選び、個性の真率なる表現を可能ならしめる、経験と予言との自由は、表現のより高いより真率なる方法にまで容易に行進せしめる。他の一つの主なる特色は『個性主義』である。人民の間より起れる芸術は、その主なる特徴として人間の無限なる種類を有する、民主的芸術の一つの努力は各個人を役立たすにある、各自をして、人間の自然にまで一致するように発言せしむるのである。生活の凡ての事実の承認は、其の表現方法は原始的直截でなければならぬ。凡ての真の写実は個人的要素、個人主義的なる観察と解釈を要する、其故に民主的芸術の形式は単純で流動的で変化がある。固定された「善き形式」の代りに、無数の意味の庶民的な方法が起る。今や形の不規則は内容の要目で支配される。

ラスキンはゴシック建築に就て曰く、『若し一部分が常に他の部分に対応するならば、それは確かに悪い建築である。不規則を更に更に顕著ならしめて変化を更に更に大ならしむるものこそ善い建築である』と。絵画に於ける形式の不完全、音楽に於ける調子外ずれの音、詩に於ける粗野な章句は、個性の意味である限り許さるべきである。個性の真率は形式を支配する、尊大な芸術的因襲は其前に何物でもない。

民主主義の第三の特色は『平等』である、平等は排他的な包含には反対する、民主的哲学は最も普通な自然の事物、最も普通な生活の出来事の隠れたる本質を現わして、其の神聖を証明するものである。総括する光が宇宙の物象を普ねく照らして、愛と同情とは事物の中に普ねく現われる神聖を理解する。人間や自然の中の何物でも詩ならざるはない。博大な心と洞察力を持てる詩人のみ事物の外部の

底なる精髄に透徹するのである。
此の卓越せる思想によって、各自各人が世界の分類表のなかに各々の意味と位置とを与えられた。全般と、閑却したものとの承認は避くべからざることとなった。

民主的の特色は真実から起る、真実は実在のなかの人間の絶対を承認する、予言的の眼は各個人のなかに朧ろながら神々と英雄達の顕示を見る、真実の愛は嘲笑と否定とを棄てる、上流社会と下層社会とは同様に彼等の特殊の題目を賦与する。然し在来の反動として下層社会を高調するに過ぎて、上流社会を余りに閑却してもならない。

ゲーテは上流社会は、詩に対して何等の題料をも供給しないものだと言った、サイモンズも『夜会服と舞踏衣を着けた人達が、芸術の王国に入ることは至難なことである』と言っている。しかし民主的芸術は、上流社会を拒否するものでない、舞踏をする社会も、優雅の特有の点を有して、草刈人が鎌を振る壮大な身振りや、鍛冶屋が灼熱した鉄を打つ強靱な筋骨の動きの示すと同様の美と懐しさがある。故に貴族主義の旧き題目も閑却されてはならない、英雄の勇壮なる行為は尚お雄々しく残されねばならない、只、これまでと解釈の相違を来している、英雄の神の如き高き雄々しい行為を認めると共に、彼も亦普通の全体の一人であるのである。更に凡ての人間生活に接触する懐かしい人々を見失ってはならない。耕作し鍛冶する英雄、機織り或は台所に働く女丈夫、運命によく耐え忍び、凡ての悲劇的苦痛を大胆に苦しむ其れ等の現象を我等の力限り嘆美しよう。エマーソンは『我々の天才に負う所は、凡俗の者の幕を挙げて、ジプシイや行商人の群のなかに存在する神性を吾等に示すにある』と言った。

其の弁明を未来にまで予期するは、民主主義の特色である、今の所では民主主義の社会的理想は実現されずにある、『新世界』は広大なる成長と無比なる成功にまで運命づけられてある。ホイットマンは亜米利加の為めに『地上の凡ての過去の政治を無意味ならしむる光輝と壮大』とを声明した。

汝、心意と有徳の地球よ、——汝、新しい実に新しい精神的の世界よ、
現在は汝を所持しない、——汝の如き斯かる広大な発達に対して
汝の如き斯かる無雙の飛翔、汝の如き斯かる同胞に対して、
未来のみ汝を所持し汝を所持し得るであろう。

此の約束の中に大胆に進歩の先駆者は進んで、過去から彼に加われるものを承認する、而も自由な相続として、理想の決勝点の方に喜んで前進する、偉大にして幸運なる或物に向って行進する。黄金時代は二十世紀の何処かに横わっている、常に彼方に『飛翔する完全』がある、詩人の讃歌するは今まで成されたる進歩に非らずして、今後成さるるべき発達である。若し過去を眺むるとすれば単なる追懐に

あらずして予言に地盤を与える為めである。シェレーは過去に失望して現在に安んぜず、遥か遠方の未来に理想世界を描いて、民主的精神に全き形を与えた。ウイリアム・モリスは過去を夢みたりとは云え、而も眼を理想国の上に注ぎ、理想の社会組織、理想の協力を思った。

　或る程度に於て各個人に遠方の未来なる見事な幻影が来た、個人の独立、善の意志、慈愛、僚友、それらが法則となり実行される時が来た。民族の歓喜と独立とが来る、希望と予期との態度は新理想の形成を鼓舞する、そして新芸術の形をとって現われる。

　貴族的芸術は典型的であり、凡俗の特質を排除して古い見本を捜すものである、民主的芸術は個性的であり現実である。個人的見解を認め、凡俗の特質を意味を以て叙する、前者は美しき物に統一を与え、後者はそれを拡大し雑多にする、一は追懐的で静的、他は予想的で動的、一は与えられたものを調和し、他は来るべきものを暗示する、一の特徴は絶望であり、他は勝利と歓喜である、一は限定され、他は自由である。

二　民主的芸術家の群

　独り文芸のみならず、これを音楽の歴史に見るに、バハよりワグネルまで、形式に関しては解放の特色を示している、そして又、音楽の範囲を詩的概念の包含にまで展開したものである。

　ベルリオース、シューベルト、シューマン、リスト及びワグネルはクラシックに対するロマンテックへの争闘を示すものである。その努力は詩と美術との題材と様式とを包括して、音楽の領域を拡大せんとしたのである。中でもベルリオースとワグネルとは音楽界に於けると同様に、政治上の革命家であった、ベルリオースは彼の最初の音楽的成功を、革命の銃丸が彼の窓のほとりに雨下した時に書いた作曲によって得た。後には巴里の群衆と共に其の武器を把って防戦に従事した。其の頃、ワグネルは「政治上の危険人物」としてサクソニーから追放された、そして無政府主義の一代表者として知られて居た。音楽に於ける代表的民主主義者として見らるべきワグネルは詩的天賦と音楽の才能を併せ有して、生活と芸術とを改造すべく努力した、先ず総括する劇曲を組成して、現代生活の広大に溢れる複雑な関係を表現し、第二には交響楽の法則には面白からざる而もその原動力に於て劇的で現実的な音楽を作曲した。

　絵画も相似たる発達を有する、其の歴史も人間の個性賦与と題材の包含を増して特色を示して来る。久しいこと無能にも中世の教会の神聖な題材のみを取扱うことによって満されて居たが、一方に於て生活の非宗教化の結果、宗教の懐疑説の結果に依り、一方に科学的智識の増進に依り、恐怖とか天罰とかは放擲され、その空隙を充たすに生活の無限にして愛すべき形を有する人と自然との間のロマンテ

ックの理論で定められたものを以てした。斯くて十九世紀の始めに於てロマンテックの機運が、教会の制限と幾らも変らなかったアカデミーの法則と衒学とから画家を自由にした。千八百三十年派は真率と個人的見地とを以て自然に面し立てるものである。ジャン・フランソア・ミレーは山水の興趣に人道の霊感を加え、肖像としての一農夫は一帝王と同等の価値あることを明言した、千八百三十年派の機運より一層進めたのは彼である、彼は因襲的な芸術の羈絆から脱却して、カンヅスの上に地から生えた実際の男女を自由に描いた。彼等の粗野な輪廓、而も其の動作の活力、骨の折れる大地の上に彼等の運命を大胆に面する男女を描いた。

私は茲に欧米の文学を通じて民主的精神の発生の径路を簡単に辿ろうと思う。

普通の人間の位置がどう取扱われて居たかに就いて、現在と過去との文学を対照して見ると、最も説明し易く思われる。即ち希臘の詩人によって少数の英雄のみが尊敬された、アガメノンと共にエージァン海を航したる数千人のうち、僅か数人のみがミルドンの群から抜んでている。希臘劇に於ては、英雄の行動を威厳づける為に、神々と人間達とが混同されている。ユーリピデスは最初、写実主義の気味を帯びたが、彼の革新は確立される機会なく、久しい後まで他国に影響することがなかった。中世紀を通じて英雄のみが詩的嘆美の題目として続いた、シャーレマンと彼の貴族との頌歌は全欧洲に歌われた、騎士らしい冒険は小説の題材となった。ユーリピデスに暗示された民主的思想は、事実に於てチョーサー以前には生れなかった。カンタベリー物語が地方色に触れたる血や肉を表わし、水車番や農夫や、若しくは水車や野を忘れずに描いたことにチョーサーの特色がある。セークスピアは概ね貴族的であった、所謂『凡ての情熱の王』たる彼は、一度も普通の男女に運命を与えなかった。運命は帝王や貴族のみに与えられた、而も十六世紀の通俗文学と冒険小説には、明らかに写実主義があり、演劇の上には芸術の民衆化の傾向があった、道徳劇とか幕間狂言は俗向の特色があった、とはいえ此の傾向は英国に於て演劇以上には進まなかった。

羅典の文明が一般を支配するに及んで、十七世紀と十八世紀を通じて民主的表明の徴候が無くなった、十八世紀の英国芸術は全く貴族的であった、作家は人民を無視して偉人を歌った、然し良心の覚醒は此の世紀の満足を苦しめ始めた。ポープは或る章句に於て歌った。

倘お吾等の凡ての嘆美を君主が壟断すべきものか
起て、真実の詩人よ、ロッスの人間を歌え。

ロッスは彼の住める土地である、即ち普通の人間、爵位なき人間も記述すべき価値があり、此の世紀の通例であった物を除外する事が無くなったのである。クーパーに於て其の広き同情は貧しき者、卑しき者を包んだ、卑しき人なる彼自身は平凡を愛して、彼の庭園に彼の兎に喜びを見出

し、愛らしからぬ胡瓜の蔓にも楽しさを得た。ロバート・バーンスは、普通の世界に含まれてる思想と感情とを、永遠に詩的題材として発見し闡明した。此の見解を有したるバーンスは偉大と言わねばならない、彼は生物の不朽な差別を認めたる、文学上の最初でありまた真の民主主義者であった。

此の新精神はウォーター・スコットに於ても明らかに見られる。彼は貴族主義を推奨し、其のアボッツフォールドが旧き封建の剣光と黄金との時代たるを望み、彼の作物には愛の中に溶けたる夢と幻像とがある。而も其の同情に於て広く寛大であった、彼はあらゆる人に親戚であるかの如く話したと伝えられている。

仏蘭西革命の非常な時期に於て、同胞の精神が普ねく行き亙った、社会的の貴族主義の滅亡と共に『人道』の時代が目覚めた、英国の革命詩人は自由の復興の情熱に与みした、バイロンは動乱と破壊との多感熾烈の精神を発揮した、キーツは憧憬の優しい情緒を以てした、シェレーは愛の統治に対する情熱を寄せた。

恐らくは他の誰にも優って、ウォーヅヲースは一般の世界の感情を歌った、『おお優しい読者よ、汝は各事物に一つの物語を発見するであろう』と歌う。最もありふれた出来事、最も卑賤な物、最も平凡な人間の、これまで認められなかった魅力を顕わすのが彼の最大の使命であった。ウォーヅヲースは社会革命の時代に漲れる詩的感情の典型を示した。

民主主義の一進歩は工業の勃興につれて深さと広さとを加えて来た、工業の新しい地位は、詩に意味深き題材を与えた、労働の題材、普通の人間の英雄的性格を示した。

デッケンス、サッカレー、ジョーヂ・エリオット、ラスキン、カーライル、ブラウニング、モリスの作品は、人道に対して熱誠であった其の時代を立派に証明する。カーライルの語中には灼熱せる情熱がある、彼はいう、『私に敬うべきは労働する粗野な歪める手である、而も其の中には此の地上の王権の如き、才能ある徳と、不壊なる尊厳とが横わっている、また敬すべきは単純にして聡明、櫛風沐雨の素朴なる顔である、これこそ生ける人間らしい男の顔である、おお然し更に汝の粗野に対して敬し、そして吾等は汝を愛すると共に同情せねばならない、苛酷にされる兄弟よ、吾等の為めに汝の背はかくも屈し、吾等の為めに汝の真直な手足は不恰好になった、汝は吾等の徴兵であった、その上に運命は落ち、吾等の戦争を代り戦ってかくも傷いた、汝の中に神の創造せる姿が横わっているのであるが、それが伸びることとなく、上皮に覆われて労働の附著と損傷とで立たねばならない、そして汝の肉体は霊魂のごとく自由を知って居ない、而も働き続け働き続ける、汝は汝の任務にある、誰でもそれを脱れない、日々の麵麭の為めに放棄し得ずに働く。』

工業組合の精神は同時代に於て盛んになった、ジョーヂ

・エリオットの小説中には、英国の社会生活の卓抜な特色ある描写がある、エリオットの多年住んでたヌネートンは丁度工業中心の地方であった。

十九世紀の詩人に於ては多少の例外はあっても、孰れも幾分か此の機運に動かされている、同胞の精神は先駆する文学者の作物を染めた。ブラウニングも亦典型的なる英国の民主主義者であると言っていい、彼はバーンスのように普通人に親しく触れたとは思われぬが、然し彼の作物は民主的哲学を含み民主的形式を呈している。

翻って亜米利加を見るに、亜米利加は甚しく工業的で自由なる労働によって契約された民主主義の国である。其の文学が純粋に最も充実して民主主義の色調を有することは当然のことでなければならない。

民主主義は彼等にとって単なる文学的題材でなくして生活そのものであった、思想の習慣であり、行動の出発点であった。

エマーソン、トロー、ローウェル、ホイットマンは亜米利加の生めるものである、それは近代の土から生れたもので他の如何なる時代にも産出せぬ人々である、彼等は民主的の時代に関聯して、其の社会的環境から意味を見出した。

エマーソンとトローとは各々彼等の自身の行き方で、独立した自己中心の人間の理論を示した、ローウェルはスコラ哲学者の洞察と精細とで、生命は分離されてあるもので星の如く独り高く単一で、而も愛によって輝き人間をして光の如くならしむる民主主義の意味を説いた。ホイットマンは彼の個性を歴史的径路の効果に結び附けて、彼自身を典型的な完全な個性、最初の無条件な絶対の主権者なる普通人として示した、彼は個性の至高を説き、而も他の凡ての個性、大自然と「聖なる精神」と関聯し一致するものとした、彼の思想は最も進歩せる哲学と宗教との見地を含んで居た、他の凡ての人々に優って歓喜の詩人であった、彼の歓喜は高く昇り、濶く飛翔した、彼の誠実はかくも絶対で、世界魂と各人の魂との良き意志を大胆に歌った偉大を有する、そして未来の不可見の世界に彼の詩を送った。

斯かる系統と過去の母胎から、現代の亜米利加に於てホレース・トラウベルは生れた。英吉利に於てエドワード・カアペンターが生れた。民主主義は芸術上の進歩を示すものであり新しい時代の芸術の必須条件である。民主主義は芸術の一流派にあらずして、更に高く今後の芸術全体の上を掩う先駆する思想である事は歴史がこれを証明した。

三　民主的精神の高調

文芸上の民主主義――これを我国の現状に就て少しく論じて見たい。我国に於てはこの思潮は一両年来、詩壇もしくは評論界に於て、著しく其の色彩を鮮やかにして来た、然しそれを推奨するものも、それを非難するものも、肝心な要点を逸して居るように思われる、即ち弁難の鉾を向け

る人々には、民主主義其物の本質を見ずして、只在来の民主的傾向の作品なりと称せられるものから民主主義の全部を覗わんとするものが多い。であるから何時まで経っても認容することの出来ない相互の並行線は此処から生れる。

成程、現在のわが民主主義詩人の作品は未完成という感じを与える、中には民衆に対して深い感動もなくして理窟を並べるのみに見えるものもあるが、至純な人々の作品にも未完成という感じのするものが多い、然し私はそれらの作品に対して、在来の象徴派とか貴族主義の作品よりは遥かに好感を持つ、何となれば、その人々の進まんとする方向には、正しい指針があり確実な根底がある、少くとも在来の詩人の行き方はいかにも糟粕の綜合で、成長の行き止りであるのに反して、民主主義の詩人は輝やかしい前途と成長を持ち、彼等は本当に人類の生命の核心に徹しようとしている。真実と真剣さがある。

民主主義の思潮は、単なる新しい物好みからでなしに、真の人類の全体としての根底への自覚である。民主主義詩人は我国に於ては、思想が露骨に出て居て何等恍惚の感動がないということを攻撃される。然し思想が明らさまに出ているとか、背景をなして居るとか、孰れにしても、価値の優劣はそこからは出て来ない、思想を露骨に歌うのも純粋な感動である場合があり、思想が奥底に揺曳して形象を見せないらしく而も何等の深い感動のない場合がある、要はその所有する感動の本質にある、思想の本質にある。

私から見れば、本当に立派な思想を持った人であるならば、単なる自己逸楽的の作品や狭小な個人主義的の作品が生れようがないのである。単なる象徴詩や狭い享楽的作品に甘んずる彼等には、人類全体としての立派な思想を欠いているのである。我国の詩人が如何に狭小な個人主義に偏して、文明にも民衆にも何等連絡なく、自分一人の享楽に恐悦がって居たかは、思い半ばに過ぐるものがあろう。それは民衆と永久に握手することのない固陋な立場に立って居るのである。

勿論芸術は功利的なもののみでは不可ない。少くとも、そういう効果を主眼としたところから生れるものでない。然し社会の一人として本当の感動に徹すれば、勢いそうした人類全体の事を根底とするに至る。始めの感動（病的なものや稀薄な抒情的詠嘆）のみでは満足出来ない或物が生じてくる。それらは表面的なもので、人間としてはもっと考えねばならない本質的なもののあるのに気附く。自然と内から湧く力によって表現されるものが、民衆芸術となる。人類の全体の一人として考察することが深ければ深いだけ、広ければ広いだけそうした思想の根は――輝やかしい枝葉をつける。即ち詩を所有する。感動は自然と生れる。民衆的の感動がそうした心の行き方から生れる。この意味からして、最初に（詩作の場合に）民衆の為めにと言った風に故意に心を働かせずとも、効果に於て同一なる民衆的作品を生むのである。

民主主義詩人は人類の結合を、正義を説く、それは彼等にとって独創の内容を有する発見であり歓喜である。彼等は其の喜びに叫ぶ。叫ばずに居られないのである、その点から一見思想が露骨に出ている場合もあろう、然しそれは、他の詩人が夕映の美や都会のノクターンの美を嘆美すると均しく恍惚の感動であるのである。此の場合に此の民主主義詩人の思想的の詩を咎むべきであろうか、静かな詠嘆も詩である、先頭に立って叫ぶものの如く叫ぶものも詩である。一見粗雑に見えても、新味に溢れてる時はその叫びは詩である。

然るに世間でよく見るように、平凡なる人は可なりありふれたことも、一大発見のごとく叫ぶ時がある。これは第三者から見ると片腹痛いことである。然しかかる類の詩人は論外とすべきであろう。更に民衆芸術が一種の通俗芸術だとして、鋒先を向ける人がある。然し民衆芸術には民衆のために叫び、民衆の理解を求める要素があるとしても、その因って来ることを考えねばならない。人、若しくは芸術家が、一般人の水準を生活の標的とするならば、此処に何の希望も憧憬も無くなるであろう。民主主義の詩人も亦、現在の民衆其の物よりは、より高い豊かな標的に向って歌う。其処に民衆芸術として何等矛盾はないのである。元来詩は今までのよりは、もっと判りやすくて然るべきものなのである、今までのものは平明な（寧ろ平凡な）内容を小六カ敷歌ったもの、綺麗に飜めたものが多い。然し深遠なことを平明に歌うのが詩だ、それは毫も不自然ではなく、寧ろ『自然』の姿なのである。当然の事なのである。況や『自然』は優れた詩人に対してつねに平明にものを言う。人々はこの平明を粗雑と誤解してはいけない、詩人は又、粗雑を平明であると寛容してはいけない、その批判は只作者の敬虔な心に待つ外はない。

此の点よりして、民主主義の詩は、安価なる現代の民衆讃美ではないのである、然し生来、民衆を母胎として、要素を其処から齎らすのである。

私はそういう見地から真の国民的詩人を翹望する、詩人は其の国民の伝統に根ざして、最も善きものを生かし、国民の正しい感情、意志、欲求を歌うべきものである。故に現在の民衆に現存せるものを、必らずしも肯定出来ない限り、現在の民衆を最上とし主眼として歌うようなことはしない。表現の言葉にも正しい考察を要する、その民衆の湮没し去りたる古代によき要素を探究して生かす場合もあろうし、更に他国によき影響を呼び求むる場合もあろう、現在のみでなくして未来を予言することを含む、国民の第二歩を啓示するものである。自分自身としての、又、国民としての第二歩を啓示するものである。

そして、一般の民衆は多くの場合、芸術家よりは鈍感であり、表現の力を欠いている、然しそれは侮蔑の意味ではない、表現の力はないかも知れないが、社会の諸機関としての他の能力を所有しているからである。詩人はいうまで

もなく感動に於て表現に於て一般人よりも優れているを要する。即ち詩人は一般の不可見のものを（思想的に官能的に）見、感ずる点で超人であるべきである。最も普遍的で個性的となり得るのである。故に芸術は如何なる場合に於ても優秀な個性の所産であり、先駆者の所有する所のものである。民衆のよき理解者であると共に、民衆の第二の生活を暗示する資格は茲から生れる。

民主主義詩人は民衆の魂の代言者である。凡ての人に共通の尊さがあるかも知れない、然し凡ての人は芸術家ではない、表現の能力を持つものではない、それは選ばれたもののみ所有する。優れた芸術に表現すると云うことは、中々容易なことでない、芸術家それ自身に於てすら、専心に感動の白熱することとなくしては、表現という明確な形を与えられずに、中途で感動が消える、作なくして、もう一歩立ち入って言えば、深い感動もなくして、『歌わざる詩人』『描かざる画家』などと言っているのは、元来が芸術家の能力なき苦しい弁解である場合が多い。民衆の多くは此の『歌わざる詩人』『描かざる画家』である、よき表現はやはり優秀な個性に待つ。表現の熱情を有して其れに徹する人のみ芸術家である。

故に民主主義の詩人と雖も、優秀な個性を叫ぶ点に於て、今迄の芸術家と一歩も譲るものでない、只その根底に於て根本的な相違があるのである。エマーソンの所謂『吾々に何等かの精神的関係を有し、吾々の生活が此の人の為めに何等かの説明を得る人でなくてはならない、即ち自分では其の考えていることを旨く言表わすことが出来ぬ場合に、爰に一人の人があって、其の性格か挙動などで、丁度自分が考えながら而も言うことの出来ない疑問を解決して呉れるような人』が民主主義の芸術家の一要素であり、同時に、ヨハネス・フォルケルトの『芸術が自余の文明価値と交渉を没却し、而して只に自己の情緒によりて自分を養わんと務むるものであったら、それこそ文明の本質に反し、人類の精神生活の本質に反する者で、芸術は自ら堕落して文明生活の附庸国或は附属物となる』という説も首肯し得るであろう、更に進んで、芸術家は、偉大な文明価値の貢献者、人間努力の創造的一員なりと自覚すべく、人間の精神的の作業の真中に内在するという確信にまで徹底すべきである。

民主主義は人生の永遠の方針の確立を叫び、万人の幸福を求める、人間として若しくは芸術家として、新しい的確な思想である。芸術家、就中、詩人が民衆の一人として深い愛をもって其れに臨み、民衆から題材を得、表現の平明を期するようになったという事は、確かに詩の一進歩である。新しい覚醒である。勿論今迄の芸術にも、人類的の愛を歌ったものもあろう、民衆を題材としたものもあろう、平明なものもあろう、その点で民主的傾向の作物と認め得るものがあったのであるが、無意識的であったものが幾分意識的になり、朦朧であったものが明確な形を持ち、混合

したものが純粋になり、民衆の核心に徹しようとする努力は尊いものでなければならない。在来のあらゆる主義の推移を見てもそうである。譬えば浪漫主義から写実主義、写実主義から自然主義への径路にしても、数理的に、もしくは赤、青等の原色のように、鮮やかな区分は不可能であるが、その所有する一部分が高調される時に、他の新しい主義を生ずる、斯るが故に、今日の如き場合に於ても、新しい主義として殊更に民主主義を主張する必要がある、その主張はその方向に内容的に広さと深さを加えてゆくことは必要である。故に、かく明確に民主主義の提唱される事は、進んだよい芸術を生む為めに必要なる新運動である。私は民主主義の見地から個性を説き、先駆者を説いたが、殊にこの民主的文芸はある意味に於て宗教と一致する。

一宗の開基を見よ、それらは矢張、その時代の民衆の魂の代言者である、それらはよく民衆を導いたのである、低い民衆は始めそれらに石を投じたであろう、基督、日蓮、その他の偉人は、民衆より高く、しかもよく民衆を導いたのである、只、宗教家は説教する、然し、芸術家は絶対の感動を主とする、それだけ表現の差がある。

民主主義詩人、必らずしも民衆の低い意味での理解をのみ求めはしない、かかる詩人は生活に於て表現に於て、一宗の開基たる心掛けがなくてはならない。万人の幸福のために、永遠の方針の為めに生きなくてはならない。

この点からしても、民主主義の芸術は、通俗芸術でないことがよく解る、平俗凡俗その儘では常に芸術は存しない、而して又、在来の詩は、文明にも、よき伝統にも無智である気儘な個人主義に陥り易く、何等生命が通って居ないものもある。宗教上から例をひいて言わば、かかる芸術の恍惚境は、お稲荷さんや何とかの淫祠の類の信者の、小さい法悦と大差は無い、其処に自己満足はあっても、文明や人類に没交渉なものである、高い意味での芸術がありようがない、詩に於ても感動を考察なしに無条件に認容していい訳はない。

在来の芸術家、殊に我国の詩人は、悪い意味で自分の優越を感じ過ぎたのである、その優秀たるや根本的誤謬を持って居た、前にも一言したように非常に狭小な個人主義であったのである、時間的に何等文明に確とした連絡もなければ、空間的に一般民衆とあまりに交渉なさ過ぎる並行線であったのだ、それは大きい間違いでなければならない、民主主義詩人は一面、高い芸術家であって、極めて民衆に近く民衆の到達を待つものである、民衆の群の一人であり、民衆の渇仰の的となる資格の人でなくてはならない。

新文芸の建設は此の真の民主主義の礎の上に立てらるべきである、現状のみを見て石を投ずるを止めよ、曙の雲はまだ暗い、真の民主的文芸は将に生るるであろう。

（一九一九年七月）

社会的文学に就て

馬場孤蝶

一

藤井君。

度々寄稿の御約束をして置きながら、何時もその期になると御違約に及んで何とも申訳がありません。

今度もぐずぐずして居ると、何うやらそれになりそうです。私は此の暮程忙がしい目に合うことはありません。畢竟何の雑誌も大きくなったのと、雑誌の数が多くなったのとで、何んな原稿でも頁を埋め無ければならなくなった結果、よくよく困まって私どものところへまでも頼みに来るのだろうと思われます。

そう察して見ると、ムゲに断ってしまうのも如何にも気の毒なような気がして、頼みに来たものは残らず引受けてしまいましたので、まだ約束をはたし得無い方が、雑誌で三軒、新聞で二軒ありますし、それに、引続いて引受けて居る仕事が二つ程ある訳なんです。

斯ういう風になって来ては、唯紙へ字を書いて渡すだけの仕事しきゃして居無いような気がします。

そのなかで、兎に角御約束だけははたし度いと思って、此の通り筆は動かして居るのですが、何一つ善い考と云っては浮んで来ません。俗語に『上顎と下顎とぶつかり放題にしゃべる』というのがありますが、私の今の場合は、紙へ筆がぶつかり放題に書くとでも云わなければなりません。

二

社会的文学とか、労働文学というようなものの出でることを世間では要求して居るようですし、又実際そう云うものが出るのが、吾々に取っても望ましいのですが、そういう文学を作ることになると、外国の作家の先天的位置の有利であることを、私どもはつくづく羨しく思います。これは、私が申し上げるまでも無く実際やってごらんなすった方々が善く御存知あろうと存じます。

第一に、材料の点で、日本の作家は余程損をして居ります。

ゾラの『巴里』のような『ジャアミナル』のような材料はとても日本では見つけられ得られません(そういう事を書く自由があるか何うかは別問題として置きます)。ゴルキイの『仲間』の如き材料も当分日本には出て来無いかも知れず、アルツィバアシェフの『セヴィヨロフ』の材料な

どは、全く形が日本には無いのです。
で、社会的文学、労働文学というようなものは、日本では何うしても、外国のような大仕掛けなミリタントなものには直ぐはなるまいと思われます。若しそうだとすれば、少くとも此のところ当分は、自覚した社会の一角とか、自覚した労働者の一部というよりは、自覚せざる社会の哀れさ、自覚せざる労働者の状態をば如実に描いて、その間に彼等の行くべき路、吾々の行くべき路が暗示されるというようなものが、多く出るべきであろうと思われます。そして、芸術品としては、そういうのに、纒まった良い作が出ようかと思われます。

そういう種類のものになると、唯だ外間から理想的に人物をこしらえ上げて書いたのでは、モノになりません。是非とも、労働者とか、社会の下層とかに少くともかなり密接な関係のある人の手からで無くては、そういう種類の作品の良い物は出て来る気遣いは先ず無いと見て宜しいでしょう。もっと、遠慮無く云いますれば、下層の生活を体験した人が一番そういう作品を作るのに適して居るのではありますが、そこが甚だ六つかしいところで、唯貧乏人でありさえすれば、貧乏人のことが善く書けるかというに決してそうは参りません。一言にしますと、書けるだけの眼識があり、手腕があって、そして、その人が貧民の中から出て来無ければならぬというのですから、そこが甚だ面倒なところであります。

然かし、一方から見ますれば、小説、劇というようなものは、人生の観戦記でありまして、何うしても、傍から人生の戦を描写することになるか、或いは後になって自分の経て来た戦の模様を話述することになるか、此の二つであろうと考えられます。

そうして見ますと、その記述者は当の戦に加わって居た者で無くとも、自分が目前に加わって居る戦のことを書かずとも宜しい訳になると思います。反って傍観者の方が十分な観察をとげ得られ、過ぎ去った戦の事を記す方が、その戦の真意義を把握することができるということになります。

で、此に若し始めは貧民の中から出て来た人で、作家になった後で、貧民との接触が余程薄くなったにしても、その人の筆からは、最早貧乏生活の真の描写は期待されぬという訳には必ずしも行くまいと思われます。

又、労働者であった者が、作家になって、その人の生活が最早労働者の生活で無くなったとしても、その人にして作家としての真天分がある者であったら、その筆から、労働者の真生活、真利害が描かれたものが出て来るべき筈であると考えられます。

此区別は十分立てて置いて貰らい度いと思います。つまり、芸術品を見る場合には、その中の思想、事象、技巧というものを主として、その価値を判断すべきであって、その作家の一時的の生活、境遇ということは何うでも

宜しいということにして貰らい度いのです。
もう少し順序を立て、もう少し長く書き度いのですが、御約束が今日の夕方までというのであって、今がもうやがてその時刻だと思うので、残念ながらこれで擱筆します。
この次ぎには、責めてもう少し考だけでも何とか纏まったものをさし上げる積りで居ます。（十二月十一日夕）

（一九二〇年一月「黒煙」）

思想家に訴う

とうとう黙って居れぬ時が来た。
それは資本主義や帝国主義に呪われたロシアの民衆が、更らに自然の敵し難い災禍に魅せられ、草や木とともに涸死しようとしている。
我々はこうした運命も共産主義の破綻に起因したものだと云うブルジョア的な考で、この問題を黙殺することが出来ようか。君主政治の光栄の日に、ブルジョア共和政治の光栄の日に、嘗て饑饉はなかったろうか。これは主義や思想の問題ではない。生きるためにパンを求むる人間の問題だ。そして我々の叫びは常にパンの略取ではなかったか。
ロシア人の苦しみは昨日や今日の歴史ではない。一世紀も前から殆ど生血を吸われるほど、よぼよぼになるまで鞭打れたこの民衆が、やがて七年の間、外敵と内争に劇しく戦い、その上こうした不可抗力との最後の試練を思うと、我々はどうしていいのか。革命苦はブルジョア治下の生存苦より更らに悲痛な事実を何日か我々も知る時代があるだろう。
そして我々は何をしたか。コルチャックやセミョーノフなどの、今では見る蔭もない反革命者のために、飽まで貪慾な財閥のために、軍閥のために、我々は何をなしたか。我々はこの凡ての罪悪の前に、恰度ヨーロッパの主義者達が、こん度の戦争に反逆したように、瞑目しはしなかったか。
とうとう黙って居れぬ時が来た。
我々はまたしても、このままで、他所ごとのように、無産階級のために戦ってくれた人達のために、又現に戦いつつある人達のために、世界革命の先駆者のために、他人であらねばならぬか。
誰が赤色ロシアは我々の光であると言わなかったか。そう言った我々の言葉はかりそめの言葉であったか。無産者のためにパンを叫んだのも、みんなかりそめの叫びであったか。これからさき無産者は誰れを信ずればいいのか。

とうとう黙って居れぬ時が来た。
労働者には労働者の任務があり、農民には農民の任務があり、兵士には兵士の任務があるならば、思想の労働者たる思想家にも又思想家の任務があらねばならぬ。
思想家よ、汝の行動と汝の叫びによって、溺死せんとする同胞に、パンと医薬を与えしめよ。
汝、思想家よ、汝の叫びが常に空虚の悲哀を血と汗の持主たる永遠の奴隷に与うるに過ぎないものならば、
さらば、汚れたる歴史の屈服者よ、永遠の瞑想家よ、敗惨者よ、さらば、机上の思想家よ、汝が永劫の墓に眠れ！

（一九二一年一〇月「種蒔く人」創刊号）

宣言

嘗て人間は神を造った。今や人間は神を殺した。造られたものの運命は知るべきである。
現代に神はいない。しかも神の変形はいたるところに充満する。神は殺されるべきである。殺すものは僕たちである。是認するものは敵である。二つの陣営が相対するこの状態の続く限り人間は人間の敵である。この間に妥協の道はない。然りか否かである。真理か否かである。
真理は絶対的である。故に僕たちは他人のいわない真理をいう。人間は人間に対して狼である。国土と人種とはその問うところでない。真理の光の下に、結合と分離とが生ずる。
見よ。僕たちは現代の真理のために戦う。僕たちは生活の主である。生活を否定するものは、遂に現代の人間でない。僕たちは生活のために革命の真理を擁護する。種蒔く人はここに於て起つ——世界の同志と共に！

種蒔き社

（一九二一年一〇月「種蒔く人」創刊号）

編集後記

創刊に際して僕たちは内外執筆家、同士並に各方面の諸氏の声援を感謝するものである。僕たちは雑誌にかけては全くの素人であった。
「種蒔く人」という小冊が今年二月土崎港に印刷されたことがある。そして、それが第三インターナショナルの研究とも、又主義的文芸ものともつかぬ色彩を帯んだものであったが、三号をもって打切った。これらの小冊は今全部売

切になっている。
「種蒔く人」は僕たちと主義を同うするものの寄稿通信を歓迎する。そしてとくに地方の実際生活を知り又団体との聯絡を計るために地方欄を設けた。
「種蒔く人」を広く読ませることは凡ゆる意味に於て種蒔くものである。「種蒔く人」の仲間の仲間は「種蒔く人」の仲間である。
宮島資夫の「比叡の雪」の一部が「民衆」五月号に掲載されたことがある。こんどその後篇とともに、その全篇を発表することにした。尚お同君は次号のため小説執筆中である。
海外の本誌々友は大分ロシアの大会から帰った様子である。目下滞仏中の林倭衛の通信とともに、一段の色彩を添えることであろう。
種蒔き社はその事業の一つとして、海外の世界主義的傾向の文芸ものを飜訳することにしている。そして最初の事業として、正俊、孝丸はアンリ・バルビュスの「光」及び「地獄」の飜訳に着手した。尚お吉江孤雁はバルビュスから依頼された「砲火」の飜訳を種蒔き社に委任した。
松本淳三の「刃に刺されて」は五反田で国粋会の徒党に刺された時の実感である。
沼田流人の小説は馬場孤蝶の紹介によるものである。
種蒔き社は「水曜会パンフレット」及び「無産社リフレット」等の注文に応ずる。

種蒔き社にこん度、独、仏、エスペラントの研究会を開いた。
大資本家が倒れて、空が赤ににじんだ。
来月は労働貴族ゴムパス到来の意義ある月だ。

（一九二一年一〇月「種蒔く人」創刊号）

労働文学の主張

宮島資夫

一

技巧と内容とは不可分の物であると云う。これは当然すぎるほど当然の事である。然し曽てある技巧派と称する人々は、内容派の無内容の事を笑った。そして如何に自分等のような技巧派の作品が、技巧に於て優れていて、然も内容も内容派と更に劣らないではないかと云うような事を云っていた。
私は今ここで、直ぐに之れ等の言葉の是非善悪を論じよ

うとするのではない。然しこの技巧派の人々が云った言葉をよく読んで見たならば、そこにこの人々の創作に対する態度が明らかに内容よりも先ず技巧に重きを置いていると云う事が判るであろう。そして之れはまた之等の技巧派の人々が人生に対する場合に於ても、彼等は或る事象を、純なる一個の人間として感得しようとはしないで、常に或る芸術的対照としてのみ、観照している事を証明している。即ち、技巧の為めの内容であるが如き、彼等にあっては、芸術の為めの人生である。

曽て将来の文学は、如何なる文学が盛んになるかと云う問に対して、菊池君は社会主義文学が盛んになるだろうと答えたと云う。菊池君の事はしばらく措くが、若しこの菊池君の回答に刺戟されて、将来栄ゆべき文学は社会主義文学であるから、と云うので、或る人がその人は何の内面的な必然性もないのに社会主義文学の創作に志したとしたら何うであろう。之れは明かに、その人の功利的観念に芸術を隷属させたものであり、従ってその人の人生を、強て社会主義的にへし曲げたものである。つまらない事は云うまでもない。

私は何故こんな事を云い出したのだろう。云うまでもないが、私は私が芸術家である前に、先ず人間として生きなければならない、と云う信条を持っているからだ。私が人間として美しいものを真に美しいと感じそして之れを表現しようと志した場合には私の感じた程度に於てその美しさは表現されて来なければならない。その時はじめて、内容が技巧となってくるのである。然しながら技巧を先にするものの態度から云えば、彼等はより深くより強く感ずる前に、より美しく、より真実らしく表現しようと云う要求に、常に動かされているのである。彼等は事物の真実に徹しようと努めるより、寧ろ如何に事象を自己の幻影にふさわしからしめ、そして如何に彼等の有する技巧によって、容易く表現せらるべきかの妥協点を求めているのである。若し彼等にして、彼等の云う如く唯美派にしろ耽美派にしろ、その他或いは何々にしろ、彼等が表現を試みた対象に、曽て沈潜し没頭し、陶酔し燃焼して、その要求する内的発動の力に従って彼等が之れを表現したのであったならば、それは当然技巧派の作品とは云われまいし、恐らくは彼等自身もその名に甘んじはしなかったであろう。誠に彼等が、自ら技巧派の名に甘んずるように、彼等の芸術が無内容であり、上っすべりのしたものであり、御座なりである点に於ては堕落した帝展の絵と共に取扱わるべき種類のものであって、以てブルジョアの眼を楽しましめ、以て子女の情を慰める事は出来るかも知れないが……之を以て真正の芸術とも、また真に芸術を求むる人の態度とも云えないのである。

二

然し私はここで、何もこんな技巧派の芸を攻撃するのが目的ではなかったのである。私の云いたく、又た考えたい事は、何故にこう云う薄っぺらな、御座なりな、造花の如き芸術が流行するかと云う事に就てである。之を実社会に又た思想界に就て見るのに、四五年この方社会問題が、凡ゆる方面に凄じい勢で火の手を揚げて来た。五六年前までは、それは単に思想問題の一部として、社会にも、論壇にも、その一隅に押し込められて、世間からはただひねくれ物の、のた言位にしか扱われていなかった此の問題が、今日では厳然たる事実となって現れて来た。曽ては社会問題など云う事は、競馬馬の大小ほどにも念頭になかった政治家も宗教家も相場師も、今日では自己に直接関係する利害として、兎にも角にも之れを検討しなければならなくなって来た。そしてこの要求に応ずべく、凡ゆる新聞雑誌は、その論壇の大半を割いて社会問題に関する論評を歓迎した。そして又た、今迄沈黙を余儀なくせられていた人々は、好機到れりとして、平素の蘊蓄を傾けた。斯くて社会問題は燎原の火の如く、論壇に拡がって行ったのである。そしてその傍に、労働文学なる文学が、憐れげに極めて微々たる存在を漸く示す事が出来たのである。

　社会問題の論ぜられる事は、誠に疾風の如く速かに拡がって行った。然しながら結局それは問題であった。之れが盛んになった原因には、之れを賛成して高調するものも、密かに非難しつつも時代に遅れざらんが為めに追従するものも、或いは之を機として名を為そうと試みたものも、或いは又た知識的遊戯として弄ぼうとしたものも、その他色々の要素はあったであろうが結局それは問題である。知識の対象である。彼等の人生から離れていた、それ丈けに、問題は単に問題として直ちに拡がって行ったのである。然しながら之れと共に生れた文学は、幼稚なりと雖も芸術である。芸術はその要素として之れを実感に訴え、共鳴を要求する。今まで知識の対象としたり、知ったかぶりの種としたり、或いは論の上に非難の与え得べき点を発見すべく攻究していたブルジョアのインテリゲンチァも、お先っ走りの子女達も、学者も金持も、それが問題であり、離れていた限りに於ては之れを許し、之を迎えさえしていたが、一度び惨鼻悽愴な労働階級の生活状態を見せつけられ、彼等の有する反逆的思想感情、爆発せんとする憎悪と憤懣の念等を実感としてまざまざと目前に突きつけられた時に、彼等は眼を背けざるを得なかった。そして、一言にして非芸術的だと云って斥けてしまった。尤もの事である。そしてこの間の消息を事実の上に感知している新聞雑誌の経営者も、その巻頭言に或いはその論壇に、時代思潮の先駆者らしく勇敢な言論を掲載しているに似合わず、同じく労働文学を非芸術的として斥けている。

　斯くの如くにして、理論としては或る程度まで受け入れられた社会問題も労働問題も、実感として突き詰めなければならなくなった時に、需要者は卒然として之に背いたの

である。流血、革命、暴動、反逆、と云うような物凄い字も、それが他国の問題であり、理論の上の言葉であった限りは許されていたのであるが、斯る文学を思想感情の内容とし、実感として有する芸術に接した時、彼等は明かに不快な戦慄を感ずるに違ない。誠に実感こそは欺き難い正直な直接の感じである、そして更に事実として目前に押し寄せて来る之等の問題を凝視するに堪えなくなった彼等は、安価で小綺麗な手触りの好い芸術の中に避難所を発見した。技巧派文学流行の理由を、私は斯る所に発見するのである。尚お又た近頃流行の宗教思想蔓延の理由も、矢張り斯る所にあるのではないかと思う。即ち、知識的遊戯の対象であった社会問題が、問題の範囲を事実の中に拡張して来て遂には如何なる事変が起らないとも予測しかねなくなった時、彼等ブルジョアは戦慄した。そして、人の真似事の僅かな慈善托鉢を行う事によって、かすかに自己を満足させているのではないかと思われる。宗教こそは、この世に於て最も峻烈な奉仕を要するものであるのに、彼等はそれを弄んでいるに過ぎないのだ。技巧派文学の流行も、安価な宗教思想の流行も凡てそれをブルジョアの逃避所として見る時に、私はその理由を明かに理解する事が出来る。そして凡ゆる雑誌の購読者の多数がブルジョアである限り、雑誌発行が営利事業である限り、読書界の風潮がこの方面に進むのも、之れ亦もっともの次第である。

　そして斯る風潮の時代にあって、この風潮に反してその存在を主張する労働文学が一般から歓迎されないのも、文壇に於て傍流であり末流である事も、之れ亦た余儀なき当然の事であろう。

三

労働文学は非芸術的だと云う。それも如何にも尤もだ。早い話が今日ブルジョアの生活を彩り光沢を与えている一切の美というものは抑も何なのだ。彼等の宏壮な邸宅燦爛たる美服、街頭を走る自動車、それ等凡ての美しく華かな物は何によって出来たか。又た彼等が以て善とする服従の義務、雇主に対する尊敬奉仕、之れ等の事は何を労働者に要求するものか。真に自覚したプロレタリアの眼にはブルジョアの子女が得意気にひらめかす緋縮緬の裳は、己が奪われたる血液の塊であり、その宏壮な邸宅は削られたる骨であり、矢のように走る自動車は、奪われ行く自己の生命の影とも映ずるに違いない。彼等被掠奪階級の者に取っては、今日存在するブルジョア文明のよって以って美にする所は凡て醜であり、善となす所は凡て悪である、彼等の意欲する所は、凡て之等の醜を破り悪を壊し新たなる美と善を建設しようと努めているのである。此の精神を精神としこの血肉を血肉としている作家の作品が、ブルジョア及びその幇間者流の眼に非芸術的として映ずるのは、無理もない事である。

然しながら誤解するな、今日のプロレタリアは美を愛しない、又た善を斥けると。――試みに彼等が自然に対した場合を見ろ。彼等の多くが自然に対したとき、如何に烈しくその美に打たれ如何にそれを讃美し渇仰するかは、彼等の生活を真によく知るものこそ知る事実である。人の世に於ける美しきものの凡てを奪われて了った彼等は、その漂泊の途上に於てたまたま優しく美しい自然に接したとき、そこに偽りのない慰藉と生命とを求めるのだ。彼等が自然の美を讃えるのは、慰み半分や道楽半分の事ではない。虐げられ、傷けられたる自己を慰めいたわる生命の対象として、それに臨んでいるのである。そしてこの精神は、やがて、自己と同じく働き悩む者に対する同情となり、そして自己の幸福を求むる心と共に亦た同じく悩む者の慰藉と幸福を欲している彼等は、自己の服従も欲しないと共に、他人の服従をも欲しない。ただ万人平等に、苦痛を共に悩み、快楽を共に楽しもうと欲しているばかりである。労働運動に対して、種々様々な理論や、定義が与えられようとも、その根本の精神に於ては、之れ以外に出でないと私は信じているのである。

之れに反してブルジョアの善とは何だ。彼等の道徳の根柢は要するに他人を自己に隷属せしめんとする事である。彼等はその位地境遇に応じて、余儀なく自己も他に服従しているものの、その終局の目的とする所は出来得べくんば一切を自己に隷属せしめんとする要求より他に出でないではないか。そしてその従順に、自己に隷属した者を彼等は善と呼ぶのである。又その美とする所は何であるか、それは前にも云う如く、彼等が貪慾飽くなき、掠奪の結果を他にひけらかす事に過ぎないのである。そこに個性の尊重もなく愛他的精神もない。斯る心事、斯る現象に、何の感激すべき高貴なる芸術的精神があろうか。

成る程今日のブルジョアは、その長き年月の掠奪と搾取の結果によって、飽満し堪能し、外見は悠然と美しきが如く、時としては慈愛の念に溢れたようにさえ見ゆるものがある。然しながら彼等の有する資本主義的精神の根柢は、被支配被掠奪階級の根絶を許さない。彼等は常にその美しき外見の下に掠奪の爪牙を磨く悪魔である。その生活に於ては掠奪にのみ依る依他的でありながら、自己自身は常に他をして自己の権力下に虐げんとする卑むべき利己主義である。そこに何の美があり、斯る境地に生れた芸術に、何の尊重すべき点があるであろうか。

今日のプロレタリアの多数は、その外見に於て、醜悪であり、無智であり、鈍感であり、賤劣であるかも知れない。然しながら、彼等は来るべき社会に於て、自己自身の幸福のみを希ってはいないのである。彼等は自己が脱した苦痛を他人に施そうとは思っていない。彼等の欲している所は、万人の為の万人の幸福である。彼等は今日自己と同じき階級に属する大多数の人類から、人間的自覚を失うまでにその生命を搾取した反対階級の存在を呪っている。そし

て之れ等の階級的区別の消滅の為めに努力してはいるが、而も彼等はそれでも、将来に於てその反対階級を自己の支配下に置こうとは思っていない。ただ彼等をも自己と同じく各自の要求する労働に従事せしむる、同列の人たらん事を要求しているばかりである。そこでは他人の膏血を搾取して、自己の衣を染める事は許されないが、自己自らの力によって各人が、各自に美しく生くる事を欲している世界である。今日のプロレタリアは長い年月の間だ搾取され圧迫されて来た為めに、餓え疲れ、そしてその眼は怨恨と憎悪の念に燃えている。然も、それでもなお且つ、彼等はその目標に於ては全人類の幸福を、常に心に抱いているのだ。ブルジョアが依他的な癖に利己的であると反して、之れは純粋自立を欲すると共に愛他の念に燃えている。何れが美にして何れが、高貴であるかは云わなくとも判り切った事である。

斯るプロレタリアの精神とする、今日の労働文学はまだ尚幼稚なものであるかも知れないが、その抱懐する精神は遙かにブルジョア文学よりも優れて高貴なものであると云う誇りは確かに持ち得るのである。そして一般から歓迎されなかろうと、文壇で傍流扱いされようとも、そんな事は何うでも好いのだ。我々は我々の生命の為めに我々の芸術の為めに、飽くまで苦闘を続けて行きさえすれば好いのである。掠奪を象徴する如き美衣を讃美する軽薄な文学を斥けろ、飽満が齎した廃頽を表す美貌に憧れるような、下劣な文学を葬ってしまえ。そして鮮血を盛った胸の中から、日に焦けた額に輝くその眼から、更に高貴な更に優雅な精神を発揮しろ、それが私の来るべき文学に対する要求である。

四

然しながらまた芸術の道は、難中至難の鍛錬忍苦の道である、私が斯くの如き要求を持ち、斯くの如き主張を如何に主張しようとも、私の生んだ芸術が、読者にそれだけの感銘を与え得ない場合には、それは私の内容が、それだけで充実していなかった事を証明する。私の精神内容が、より深くより強くプロレタリアとして真実に生きれば生きる程、私の表現の方法が、自然主義的であろうが、ネオロマンテックであろうが、そんな事はどうでも好いのだ、読者に夫れ丈け強く深い感銘を与え得るようになるであろう。私は私の内容が、充実して自ら産出された芸術でない限り手法や文字の使い方によって、思想に媚びた作品の産出を自己自ら排斥する。それは丁度、技巧派が技巧に媚びた作品を製作するのと同じ結果になるであろう。そして私は、私の内容をより深く進める事にさえ努力すれば好いのである。偉大なる精神の所有者として、まだ下劣な作品を発表した試しはない。苦しくても、効果の挙る日が遅くとも自己に忠実ならんが為めには外に進むべき道はないようであ

る。

徒らに労働文学を振り廻す前に我々は自分自身がどの位真実に、プロレタリアとして生活しているかを先ず考えるべきではなかろうか、真の芸術家たる前に、人間として真実に生きなければならないように、真の労働作家たる前に、真のプロレタリアとして生きなければならない。労働文学と称せられたる文学の中には、真に作者の強い要求から生れた物と云うよりも、僅かな社会主義的知識をひけらかすのに急であったり、強いて労働文学者らしく装わんが為めであったりする、実感の伴なわない作品も可なりあったようである。こう云う作品は、菊池君の回答に刺戟されて創作した社会主義的作物の如くに不快であり無価値である。若し夫れ労働文学を卑むべき意味に於て売物にしたり、之れを以て強て異を立てて文壇に乗出す機縁としようなど心得る、仮面的作家があったならば、之れこそ労働運動を喰物にする労働ブローカーと等しなみに軽蔑すべく唾棄すべき代物である。

一時は中々盛んであった、雑誌の上の社会問題もだんだん下火になって来て主義者も論者も篩にかけられる時が来たようだ。労働作家の人気も漸く薄らごうとして行く時どんな人が真に心からの要求として、ここに止り、これを目がけて進んでくるかは中々興味のある見物である。

一九二二年一月「解放」

宣言一つ

有島武郎

思想と実生活とが融合した、そこから生ずる現象——その現象はいつでも人間生活の統一を最も純粋な形に持ち来たすものであるが——として最近に日本に於いて、最も注意せらるべきものは、社会問題の、問題として又解決としての運動が、所謂学者若しくは思想家の手を離れて、労働者そのものの手に移ろうとしつつある事だ。ここで私のいう労働者とは、社会問題の最も重要な位置を占むべき労働問題の対象たる第四階級と称せられる人々をいうのだ。第四階級の中特に都会に生活している人々をいうのだ。

若し私の考える所が間違っていなかったら、私が前述した意味の労働者は、従来学者若しくは思想家に自分達を支配すべき或る特権を許していた。学者若しくは思想家の学説なりが労働者の運命を向上的方向に導いて行ってくれるものであるとの、謂わば迷信を持っていた。而してそれは一見そう見えたに違いない。何故ならば、実行に先立って議論が戦わされねばならぬ時期にあっては、労働者は極端に口下手であったからである。彼等は知らず識らず代弁者

にたよることを余儀なくされた。単に余儀なくされたばかりでなく、それにたよることを最上無二の方法であるとさえ信じていた。学者も思想家も、労働者の先達であり、指導者であるとの誇らしげな無内容な態度から、多少の覚醒はし出して来て、代弁者に過ぎないとの自覚にまでは達しても、なお労働問題の根柢的解決は自分等の手で成就さるべきものだとの覚悟を持っていないではない。労働者はこの覚悟に或る魔術的暗示を受けていた。然しながらこの迷信からの解放は今成就されんとしつつあるように見える。

労働者は人間の生活の改造が、生活に根ざしを持った実行の外でしかないことを知りはじめた。その生活といい、実行といい、それは学者や思想家には全く欠けたものであって、問題解決の当体たる自分達のみが持っているのだと気付きはじめた。自分達の現在目前の生活そのままが唯一の思想であるといえばいえるし、又唯一の力であるといえばいえると気付きはじめた。かくして思慮深い労働者は、自分達の運命を、自分達の生活とは異なった生活をしながら、而かも自分達の身の上について彼れ是れいう所の人々の手に託する習慣を破ろうとしている。彼等は所謂社会運動家、社会学者の動く所には猜疑の眼を向ける。公けにそれをしないまでも、その心の奥にはかかる態度が動くようになっている。その動き方はまだ幽かだ。それ故世人一般は固よりのこと、一番早くその事実に気付かねばならぬ学者思想家達自身すら、心付かずにいるように見える。然し心付かなかったら、これは大きな誤謬だといわなければならない。その動き方は未だ幽かであろうとも、その方向に労働者の動きはじめたということは、それは日本に取っては最近に勃発した如何なる事実よりも重大な事実だ。何故なら、それは当然起らねばならなかったことが起りはじめたからだ。如何なる詭弁も拒むことの出来ない事実の成り行きがそのなるべき道筋を辿りはじめたからだ。国家の権威も学問の威光も、これを遮り停めることは出来ないだろう。在来の生活様式がこの事実によってどれ程の混乱に陥ろうとも、それだといって、当然現わるべくして現われ出たこの事実をもみ消すことはもう出来ないだろう。

嘗て河上肇氏と始めて対面した時（これから述べる話柄は個人的なものだから、ここに公言するのは或は失当かも知れないが、ここでは普通の礼儀をしばらく顧みないことにする）氏の言葉の中に「現代に於いて哲学とか芸術とかにかかわりを持ち、殊に自分が哲学者であるとか、芸術家であるとかいうことに誇りをさえ持っている人に対しては自分は侮蔑を感じないではいられない。彼等は現代が如何なる時代であるかを知らないでいる。知っていながら哲学や芸術に没頭しているとすれば、彼等は現代から取り残された、過去に属する無能者である。彼等が若し『自分達は何事も出来ないから哲学や芸術をいじくっている。どうかそっと邪魔にならない所に自分達をいさしてくれ』というのなら、それは許されない限りでもない。然しながら、彼

等が十分の自覚と自信を以って哲学なり、芸術なりにたずさわっていると主張するなら、彼等は全く自分の立場を知らないものだ」という意味を云われたのを記憶する。私はその時、素直に氏の言葉を受取ることが出来なかった。而してこういう意味の言葉を以って答えた。

「若し哲学者なり芸術家なりが過去に属する低能者なら、労働者の生活をしていない学者思想家も亦同様だ。それは要するに五十歩百歩の差に過ぎない」この私の言葉に対して河上氏はいった。「それはそうだ。だから私は社会問題研究者として敢えて最上の生活にあるとは思わない。私は矢張り何者にか申し訳をしながら自分の仕事に従事しているのだ。……私は元来芸術に対しては深い愛着を持っている。芸術上の仕事をしたら自分としては嘸ぞ愉快だろうと思うことさえある。然しながら自分の内部的要求は私をして違った道を採らしている」と。これでここに必要な二人の会話の大体はほぼ尽きているのだが、その後又河上氏に対面した時、氏は笑いながら「或る人は私が火燵にあたりながら物をいっていると評するそうだが、全くそれに違いない。あなたもストーヴにあたりながら物をいってる方だろう」と云われたので、私もそれを全く首肯した。河上氏にはこの会話の当時既に私とは異なった考えを持っていられたのだろうが、その時頃の私の考えは今の私の考えとは大分相違したものだった。今若し河上氏があの言葉を発せられたら、私はやはり首肯したではあろうけれども、或る異なった意味に於いて首肯したに違いない。今なら私は河上氏の言葉をこう解する「河上氏も私も程度の差こそあれ、第四階級とは全く異なった圏内に生きている人間だという点に於いては全く同一だ。河上氏がそうである如く、殊に私は第四階級とは何等の接触点をも持ち得ぬのだ。私が第四階級の人々に対して何等かの暗示を与え得たと考えたら、それは私の謬見であるし、第四階級の人が私の言葉から何等かの影響を被ったと想感したら、それは第四階級の人の誤算である。第四階級以外の生活と思想とによって育ち上がった私達は、要するに第四階級以外の人々に対してのみ交渉を持つことが出来るのだ。ストーヴにあたりながら物をいっているどころではない。全く物などはいっていないのだ」と。

私自身などは物の数にも足らない。例えばクロポトキンのような立ち優れた人の言説を考えて見てもそうだ。縦令いクロポトキンの所説が労働者の覚醒と第四階級の世界的勃興とにどれ程の力があったにせよ、クロポトキンが労働者そのものでない以上、彼れは労働者を活き、労働者を考え、労働者を働くことが出来なかったのだ。彼れが第四階級に与えたと思われるものは第四階級が与えることなしに始めから持っていたものに過ぎなかった。いつかは第四階級はそれを発揮すべきであったのだ。それが未熟の中にクロポトキンによって発揮せられたとすれば、それは却って悪い結果であるかも知れないのだ。第四階級者はクロポト

キンなしにもいつかは動き行くべき所に動いて行くであろうから。而してその動き方の方が遙かに堅実で自然であろうから。労働者はクロポトキン、マルクスのような思想家をもう必要とはしていないのだ。却ってそれらのものなしに行くことが彼等の独自性と本能力とをより完全に発揮することになるかも知れないのだ。

それなら例えばクロポトキン、マルクス達の主もな功績は何処にあるかといえば、私の信ずるところによれば、クロポトキンが属していた（クロポトキン自身はそうであることを厭ったであろうけれども、彼れが誕生の必然として属せずにいられなかった）第四階級以外の階級者に対して、或る観念と覚悟とを与えたという点にある。マルクスの資本論でもそうだ。労働者と資本論との間に何んのかかわりがあろうか。思想家としてのマルクスの功績は、マルクス同様資本王国の建設に成る大学でも卒業した階級の人々が翫味して自分達の立場に対して観念の眼を閉じる為めであるという点に於いて最も著るしいものだ。第四階級者はかかるものの存在なしにでも進むところに進んで行きつつあるのだ。

今後第四階級者にも資本王国の余慶が均霑されて、労働者がクロポトキン、マルクス其の他の深奥な生活原理を理解して来るかも知れない。而してそこから一つの革命が成熟されるかも知れない。然しそんなものが起ったら、私はその革命の本質を疑わずにはいられない。仏国革命が民衆のための革命として勃発したにもかかわらず、ルーソーやヴォルテールなどの思想が縁になって起った革命であっただけに、その結果は第三階級者の利益に帰して、実際の民衆即ち第四階級は以前のままの状態で今日まで取り残されてしまった。現在の露西亜の現状を見てもこの憾みはあるように見える。

彼等は民衆を基礎として最後の革命を起したと称しているけれども、露西亜に於ける民衆の大多数なる農民は、その恩恵から除外され、若しくはその恩恵に対して風馬牛であるか、敵意を持ってさえいるように報告されている。真個の第四階級から発しない思想若しくは動機によって成就された改造運動は、当初の目的以外の所に行って停止するの外はないだろう。それと同じように、現在の思想家や学者の所説に刺戟された一つの運動が起ったとしても、而してその運動を起す人が自ら第四階級に属すると主張した処がその人は実際に於いて、第四階級と現在の支配階級との私生子に過ぎないだろう。

兎も角も第四階級が自分自身の間に於いて考え、動こうとし出して来たという現象は、思想家や学者に熟慮すべき一つの大きな問題を提供している。それを十分に考えて見ることなしに、自ら指導者、啓発者、煽動家、頭領を以って任ずる人々は多少笑止な立場に身を置かねばなるまい。第四階級は他階級からの憐憫、同情、好意を返却し始めた。かかる態度を拒否するのも促進するのも一に繋かって第四

階級自身の意志にある。

私は第四階級以外の階級に生まれ、育ち、教育を受けた。だから私は第四階級に対しては無縁の衆生の一人である。私は新興階級者になることが絶対に出来ないから、ならして貰おうとは思わない。第四階級の為めに弁解し、立論し、運動する、そんな馬鹿げ切った虚偽も出来ない。今後私の生活が如何様に変ろうとも、私は結局在来の支配階級者の所産であるに相違ないことは、黒人種がいくら石鹸で洗い立てられても、黒人種たるを失わないのと同様であるだろう。従って私の仕事は第四階級者以外の人々に訴える仕事として始終する外はあるまい。世に労働文芸というようなものが主張されている。又それを弁護し、力説する評論家がいる。彼等は第四階級以外の階級者が発明した文字と、構想と、表現法とを以って、漫然と労働者の生活なるものを描く。彼等は第四階級以外の階級者が発明した論理と、思想と、検察法とを以って、文芸的作品に臨み、労働文芸と然らざるものとを選り分ける。私はそうした態度を採ることは断じて出来ない。

若し階級争闘というものが現代生活の核心をなすものであって、それがそのアルファでありオメガであるならば、私の以上の言説は正当になされた言説であると信じている。どんな偉い学者であれ、思想家であれ、運動家であれ、頭領であれ、第四階級的な労働者たることなしに、第四階級に何者をか寄与すると思ったら、それは明らかに僭上沙汰である。第四階級はその人達の無駄な努力によってかき乱されるの外はあるまい。

（一九二二年一月「改造」）

階級芸術の問題

片上伸

一

第四階級の芸術ということが頻りに言われる。プロレタリヤートの芸術が新たに興るであろう、また興らなければならないということが頻りに言われる。しかしプロレタリヤートの芸術とは何であるか。それの発生創造は何を必須の条件とするか。またこれと現在乃至従来の芸術との関係は如何。

第四階級の新興は既に事実である。またそれが、自己内発の力に拠ろうとして、自己以外の階級から生れ来たものの指導的勢力を忌避するまでになっていることも事実であ

る。第四階級の力が、やがて、晩かれ早かれ、自己内発の新文化を創造するであろうことも疑う余地はない。自余の階級から生れたものの「指導」や「助勢」や「声援」やをまたずとも、自己に必要な新生活新文化をそれ自からの力によって創造せずにはおかないであろうということも、ある意味では考えられる。而してその新文化は、必ず新らしい芸術を生み出だすであろうということも疑いない。以上は或いは事実であり、或いはまた事実に基く合理的な予望である。

しかし、どうひいき眼に見ても、第四階級の自己内発の力が生み出だした新文化の事実はまだない。第四階級の自己内発の力が生み出だした新芸術の事実はまだ殆どない。第四階級の芸術というものも、今では殆ど全く予望であるに過ぎぬ。殆どというのは、その事実が、ともかくも絶無ではないからである。即ち今日のところでは、過去現在の芸術上の事実と、将来の文化の方向を定める階級争闘の事実とに基いて、次ぎに来るべき芸術上の新面目を予望するに過ぎない。またわずかに最近のロシヤに於ける第四階級所産の芸術の事実によって、将来の新芸術の特兆を考占するに過ぎない。即ちこの場合に於ける予望は、将来の文化を支配すべき階級争闘の意義に拠って、過去現在の芸術上の事実を批評するところから成り立つ。

二

昔から、謂わゆる第四階級出身の芸術家が絶無であったわけでもない。またそれ等の芸術家が自己に属する階級の生活を題材としたことも少くはない。而して、その芸術の鑑賞者が、第四階級のうちに絶無であったわけでもない。題材として、作者として、また鑑賞者として、第四階級に属するものがこれまで芸術に全く没交渉であったというわけではない。しかし、事実上第四階級に属するものが、作者であり、鑑賞者であったのは、いつでも例外であって、多くの場合に於いて、第四階級に属するものは、例外として作者ではあり得ても、鑑賞者は殆ど全く自余の階級に属するものであった。随ってまた、彼等第四階級に属するものの生活が、題材として用いられたのは、寧ろ多く哀憐同情の眼を以て取り扱われた結果であって、人道主義的傾向を出でなかった。第四階級の芸術が新らしく言われるのは、そんな例外を例外として発生せしめる生活全体の組織を否定し、人道主義的作風の発生を是認するような生活全体の組織を打破しようとする志に基く。芸術の上で階級の区別が立てられたのは、階級的区別を標示する言葉の用いられたのは、必ずしも第四階級もしくはプロレタリヤートの芸術に始まるものではないが、しかし貴族的とか平民的とかいうような言葉は、決して今日のプロレタリヤートと

いう言葉のような、重大な特殊な意味で芸術を区別する力を有してはいなかった。王侯貴族の特権階級の間に発生した芸術、富者市民の間に発生した芸術、孰れもそれぞれその間に階級的の区別はあるが、しかしそれ等は引きくるめてプロレタリヤートの芸術に対すべき特殊の有閑所有階級の芸術と見られる。特殊の有閑所有階級の間に発生した芸術が、自然に生長発達して、その特殊の発生条件の範囲内で試み得る殆どあらゆる芸術の様式傾向を経過して来たものと見られる。クラシシズムといい、ロマンティシズムといい、リヤリズム乃至ナチュラリズムといい、もしくはシムボリズムというさまざまの芸術上の様式傾向も、とにかく特殊有閑所有階級の儼存し、勢力を揮うていることをそれの発生条件としていることに於いては一つである。この点から見て、プロレタリヤートの芸術は、この発生条件を否定し打破して、全く別種の自由な環境のうちに生れることを予想する。少くとも、従来の芸術の発生を可能ならしめたさまざまの社会的事情乃至条件を否定し、それ等に反抗するところから生れることを予想し得る。プロレタリヤートの芸術が、先ずその最初の表現の様式傾向として、反抗的、破壊的、呪詛的の形式内容を以て生れて来るであろうかどうかは、にわかに予断しがたいところもある。それはとにかく、プロレタリヤートの芸術が、それ自からの自由な様式傾向を有するであろうこと、それ自からのクラシズシムと称すべきものを生み、それ自からのロマンティシズムもしくはリヤリズム乃至シムボリズムと称すべきものを生み出だすであろうということは、必ずしも予想を許さぬことでない。或いはそれ等のものは全く別の名目で呼ばれるでもあろう。しかしそれ等の名目でこれまで呼ばれて来たさまざまの芸術上の様式傾向の精神に生命のあるかぎり、芸術発生の条件に与えられた自由が、プロレタリヤート芸術の世界に於いて、それ等の生命を真に徹底せしめもしくは甦らしめるであろうことは予想せられる。プロレタリヤートの芸術は、その究極の意義に於いて、単に階級的反感や争闘の意志を表現するというところにのみ止まるものではあり得ない。特殊の階級のみが所有し、特殊の階級のみが芸術の創作鑑賞を能くするような社会事情の下に発生した不自由の芸術を、一切の人間のものであり得るような社会に甦らしめようとする意味に於いて、即ちその創作と鑑賞とに真の自由を、全人間的自由を恢復せしめるための意味に於いて、その究極の意義では一階級のためという制限に拘泥している必要のなくなるべきものである。

三

よき芸術は、階級の区別に拘らず価値があるという説は、一応尤もである。しかし、前段で、プロレタリヤートの芸術が、その究極の意義では一階級のためという制限に拘泥する必要のなくなるものであると言ったのは、凡ての

よき芸術の前に階級の区別がその鑑賞の妨げとならないという説を裏書きすることには必ずしもならない。時殊有閑所有階級の間に発生した芸術で、尚且つよきものと見られ得るのは、真の自由な芸術の成立の条件としては不自由不合理な条件の下に在ってさえ、尚且つ誠実の力を表現し得た逞しい天才の光りによる。しかしその事実は、芸術が、その発生と成立の社会的条件を、もとのままに不自由不合理なものとして打ちゃって置いてもよいということを意味しない。プロレタリヤートの階級に属する人々も、社会組織が一変せられ、物質上の生活が合理的に営まれる時代が来たら、随ってさまざまの不合理と矛盾とが生活を脅かさない時代が来たら、ひろく一般的に過去の芸術のうちから逞ましい天才の光りを探求することも出来るであろう。少数の独占していたものの中に、自分に貴きもののあることを発見するでもあろう。人間が、いかに不合理の生活に馴れ、それを平気で、あたりまえなこととして生きていたとはいえ、それがいかに久しい間に亙っていたとはいえ、全くその心が暗黒であったわけではなく、全く無感覚になっていたわけでもなかったということを、知ることもあるであろう。不自然不合理の中にさえ、尚且つ魂の光りのあったということを見出して、過去の天才の心をいたみ、哀れみ、また貴く思うでもあろう。丁度それは、今の不自然不合理な生活の中に浮沈するプロレタリヤートに対して、ブルジョワジーの芸術家が、暗黒の中にも人間の魂の光りの消えうせていないことを見出して、その虐げられたものの心をいたみ、哀れみ、また貴くも思うのに似ているであろう。こういう時の来ることも、全く予想されないことでもない。少くとも予想することが不合理だとは言えない。しかし、プロレタリヤートの芸術が、あくまでも芸術の発生成立の条件を、自由な合理的な社会組織の中に置くかぎり、プロレタリヤートにとって、ブルジョワジーの芸術は、その発生成立の条件は勿論、その内容形式ともに不自由なもの、即ち真の心の要求に呼応し得ないものであることを免れない。プロレタリヤートは、自己の心の要求に呼応し得ない芸術を否定し排斥する。随って、この否定と排斥とを予想して、自己の立ち場を宣明し、ブルジョワジーの芸術であることを自から告白し、それの如何ともしがたきことを言いその先天的な境遇に立てこもって、何ものにか申わけのないような心持ちでブルジョワジーに媚える芸術を作るほかはないと言うのも、たしかに時節柄一つの態度であり、覚悟であろう（有島武郎氏「宣言一つ」『改造』一月号）。この謂わゆる宣言（私はこの言葉のものものしさを好まない）は、正直でないとはいえない。可なり緊張したまじめな心持ちから出ていることも察せられる。しかし、大変用心深い、手まわしのよいものだという感じも何処からとなく起って来る。有島氏がブルジョワジーの階級に属する人であるのは今更のことである。また氏の作品が、わけてもブルジョワジーの趣味好尚に媚えるたぐいの

ものであることも、ほぼ世間の認めている事実であろう。しかしもしこう言えば、今の芸術の創作者で、厳密に見てブルジョワジーの階級に属していない人が何程あろう。また少くとも、ブルジョワジーの支配の下にある社会に鑑賞者を有し、その社会事情の下に自己の芸術を成立させていない人は絶無である。この点では、ひとり有島氏だけがブルジョワジーでありまたひとり有島氏の作品だけがブルジョワジーに愬える力しか有たないというわけではない。しかし、勿論そういう仲間の大勢いるということが、この際有島氏を安心せしめ、自己の立ち場に一種のうしろめたさを感ぜしめずにすむわけでないことも明らかである。ひとり有島氏ばかりがブルジュイでないのに、いち早く自分の立ち場を明らかにしようとしたのは、ある正直さと、まじめさと、一種の自衛上の神経質とをそこに見ることが出来るとともに、ものの考えかた、寧ろ生きかたの、インテレクチュアルな特質傾向を示している。議論としては筋が立っていないではない。前提が正しければ結論も正しからざるを得ない形になっている。自分がブルジュイであることは黒人の皮膚の黒いようにどうとも今更しがたいことである。それ故自分の芸術はブルジュイにのみ愬える。プロレタリヤートの生活とは、全く没交渉である。両者の間には截然たる区別があって、その多少の交渉に生ずるものは要するに私生児に過ぎない。故に第四階級のことには一切かかわらないがよい。それにかかわって何等かの寄与があり得ると考えるのは僣上の沙汰である。――氏の考えの要点はこうである。

いかにもはっきりしている。簡単明瞭だ。こういう風に考えてしまえば、凡ては明らかで、自分の立ち場ははっきりして、きまりがついて、少しもあとに問題が残っていないように見える。少し興奮しているような調子で、言うべきだけのことは言ってのけたというような気味である。

しかし、これだけで果たして問題は片づいてしまったのであろうか。少くとも、有島氏の心の中の、氏のいうところの「実情」は、これだけで割りきれない何ものをもあとに残していないであろうか。

四

ブルジョワジーとプロレタリヤートとの二階級の対立から、芸術にもこの二つの対立を予想することを説いて「思想的の立場」から言うのだと有島氏は言っている。事実の上ではこの両者の間に幾多の複雑な紆余曲折があり、交渉があるにしても、思想的にはこの両者は相対抗すると見るべきだというのである。その通りだ。ただこの場合、氏自からが明らかにブルジョワジーの芸術を否定して、即ち平たく言えば究極の理想として実現せらるべき要求の具体的な形として、方向として、力説主張するのでなく、プロレタリ

ヤートの芸術はやがて興るに相違なく、また興るべき理由のあることをも是認しているらしいのに、而かも自分とは没交渉で、どちらからも手出しをすべきものでないという意味を明言している。即ちやがて興るべき新らしい力のあることは認めながら、自分はその新らしい力とはどこまでも交渉することを避けて、寧ろ避けることを自己の道徳と信じて、在来の、即ちやがて否定せられ、破壊せらるべきものと自から知っている世界に止まり生きるほかはない、またそれでよいと明言している。

而してその理由としては「その（新）文化の出現を信ずるものにして、身自からがその文化を生むべき生活と異った生活をしていることを発見したものは」「無思慮にも自分の埒を越えて差し出たこと」をしてはいけないからと言うのである（『東京朝日』所載、「広津氏に答う」）

果たしてそうであろうか。氏の言う如く、「身自からが新文化を生むべき生活と異った生活をしていることを発見したものは、」いつでも「自分の思想的立ち場を納得して謹んでその立場にあることを以て満足しなければならない」であろうか。氏はロシヤの革命の現状も、その紛乱不幸も、つまりインテリゲンチャの差し出たおせっかいな運動、即ち「誤って無思慮にも自分の埒を越えて差し出た事を」したために、「純粋なるべき思想の世界を、不必要なる差出口を以て溷濁し、何等かの意味に於て実際上の事の進捗をも阻碍する結果」になったものと見ているようである。ロシヤのインテリゲンチャの革命運動に於ける功過に就いては、いろいろの批評があり得るが、氏の如き簡単な片面的な見かたは到底成り立たない。氏のこの見かたには、ロシヤに於ける反動保守派の批評家の口吻が多分にある。私ももとよりロシヤのインテリゲンチャの多くの失敗と過誤とに眼を蔽うものではない。しかしながら農民でなく、労働者でないインテリゲンチャの仕事が全く無益有害であったとは考えない。これを事実の問題として、人はよく有島氏の言うが如く、新生活打開の運動の興るに際して、自己の埒内に謹んで行儀よく納まっていることが出来るであろうか。さまでに冷静に、さまでに自己防衛の神経をのみ働かせていられるであろうか。さまでに「危険」を感じて一切の動揺、要求、主張、興奮を抑塞していられるであろうか。いかに「ブルジョワジーの生活に浸潤しきった人間である」にしても、そのために心の髄まで硬化していないかぎり、狐の如き怜悧な本能で自分を救おうとすることにのみ急でないかぎり、自分の心の興奮をまで、一定の埒内に謹ませて置けるものであろうか。人は各気質を異にするとはいうものの、この辺の有島氏の考えかたは、あまりに論理的、理智的であって、それ等の考察を自己の情感の底に温めていない憾みがある。少くとも、進んで新生活に参ずる力なしとして、退いて旧生活を守ろうとする場合、新生活を否定しないものであるかぎり、そこに、自己の心情の矛盾に対して平かなり得ない心持ちの動くべきではないか。

私はインテリゲンチャが、新文化建設の指導者を以て任ずべきであるというものでは必ずしもない。しかしながら、指導者を以て自から任ずべきでないということは、直ちにその新文化建設に没交渉無興味で、全く手出しをしてはならない、それは自他にとって危険であるということに落ち着くであろうか。少くとも、そこに不安と、多少の心の悩みとはあり得ないであろうか。一方から言えば有島氏は思い切りがよいとも言える。また一方から言えば、理を立てて、その理の中に、自分を守ることに巧みであるとも言える。氏自から言う如く、氏の言うところは傲慢でも謙遜でもないであろう。ただ理づめで自分の心持ちを片づけている点が、氏の言うところを浅くし、平たくし、乾いたものにし、尤ものようでいて、真に心から受け入れさせる力のないものとしているだけである。

氏は自から、思想の特色を広津氏に説いて、思想の一特色が飛躍的であり、社会主義の思想が迫害の中にも説かれ、時期に先んじて早く説かれたこの思想が、無益でも徒労でもなかったことを言い「何故ならば、かくばかり純粋な人の心の趨向がなかったならば、社会政策も温情主義も人間の心には起り得なかったであろうから」（『東京朝日』「広津氏に答う」）と言っている。この考えからすると、社会主義思想の先達が説いたところを以て、氏は社会運動のために有害とも無益とも考えてはいないようだ。而してまた、凡ての社会主義思想家が、悉くプロレタリヤートから出でたものでもなかったということは、氏の恐らくは夙に知るところであらねばならぬ。それでも尚、彼等は自分と没交渉な、後の世に興るべき新階級のために、無用の差出口をすることなく、退いてブルジョワジーの埒内に謹み甘んじているべきであったと言うであろうか。それともまたブルジョワジーをして後に来たる自家の亡滅を覚悟せしめるだけの効果はあったというであろうか。而してその後の場合に於いて、それは、謹んで自分がその立場にあることに満足しているよりも、間接的にでも、その骨折の無益でなかったということを認めないであろうか。「悔い改めた貴族」、自分の立場、ブルジュイであるというその立場の不自然不合理を発見して、しかもその生得の身分教養を全く取りかえることも出来ないながら、出来るだけその不自然不合理を排除し、否定し、その否定を主張力説し、その精神で生きその精神で後に興るプロレタリヤートのために力を尽そうとした人々を、有島氏は何と見るであろうか。それは自他にとって無益有害であった、彼等はそういう差出がましい危険を冒すことなく、自分の生得の立ち場に謹んで満足しておるべきであったと言うであろうか。氏の論は、どうしても氏をしてこう言わしめねばならない筈である。自己の眼前の安全、自家の現在を守るために、かくの如き明白簡単な推理によって自己の在来の立ち場を固守しようとしなかった彼等は、有島氏の眼には愚かな哀れむべきものに過ぎなく見えるであろうか。

私は氏にプロレタリヤートに化身せよというのでもなければ、本質的に氏にとって不可能なプロレタリヤートの芸術を作ることに努力せよというのでもない。氏が自分のブルジュイであることを認めながら、而もそれに満足し甘んじているというのを不思議に思うのである。氏の芸術は、少くとも、あの「宣言」とともに、プロレタリヤートの興ろうとするのを認め、自己のブルジュイであるのを認めたものの、不安と寂寞と苦悩との表現に移るべきであろう。「仕方がないから自分はこれでいい」と言って「甘んじたり」「満足したり」していられそうな筈はないように思うのである。氏の書いただけでは、これから後の氏の態度も、ただブルジョワジーを相手にするということだけしか分らないが、それがもし氏の如きブルジュイの寂寞と苦悩との愬えであることを意味するなら、氏の芸術は在来のものより一層生きて来る。一層切実なものになって来る。それが氏の言うが如くプロレタリヤートと全く没交渉であるか否かは姑く別としても、今の時代に於ける氏の芸術の存在が、氏自から無関心でいられないと言明しているところの時代との関係に於いて、はじめて切実なものとなって来る。しかし、氏の文章からは、この予想推測を肯定するに足るような気分も口吻も見られないようである。

五

プロレタリヤートの芸術もしくは謂わゆる階級芸術に就いては、今から十年ほど前のロシヤ文壇でも論ぜられたことがある。その当時の論は、インテリゲンチャの思想傾向任務の論に関連して、労働者出身のカリーニン、ユシュケーヰッチ（小説家のユシュケーヰッチとは別人）などの間に行われたものである。この当時の論は、寧ろ、主としてプロレタリヤートを題材とする芸術の問題であったようだが、ただその間に、プロレタリヤートの芸術と称せられるものが、多く傾向的であり、プロレタリヤートの自覚が、その争闘意識が、明確であればあるほど、その思想が煽動的時事評論的の内容を盛りがちであることを説いている。煽動的時事評論的の内容を盛りがちであることを説いている。プロレタリヤートの自覚科学的であればあるほど、その争闘に何等かの意味で接触するものをして、争闘の何れかの側に立たしめずにはおかない。この態度の明確は、争闘のため、論争のため、煽動のためには必要であり、力を加えるものであるが、芸術の創造のためには不利である。しかしながら、階級争闘は今のプロレタリヤートの意識の中心であって、プロレタリヤートの芸術には、この争闘の意識がおのずから表現せられずにはいない。しかし、芸術の創造は、その心理的本質から、その構成の上から、全人間的の把握を必須の条件とする。勿論芸術がある時代に多少階級的の色彩を帯びることはあろう。しかしその場合に於いてもそれは芸術家がその階級的色彩のあるものを全人間的であるとして把握する幻像から生ずる結果である。いかなる場合に於いても、芸術

の創造には、この人間的幻像が必要である。而かもプロレタリヤートは、旧来の社会思想に対するその厳粛な合理的な分析解析の力によって、この全人間的幻像を破壊する。而してプロレタリヤートの科学的理知的な争闘意識から、新らしい全人間的幻像を芸術の上に把握することは非常に困難であるというような意味が説いてある。これはユシュケーキッチの論の中の一節であるが、要するにこれ等の論からも、プロレタリヤート芸術の本質に就いては殆ど何等の適確な理解を得られないといってよい。プロレタリヤートの争闘意識の鎮り和らいだのちでなければ、ポレミックな気分から一層自由な気分に成長した後でなければ、即ち主として理知的科学的の争闘意識から情緒の魂の世界に新らしい生活の安定を見出だし得た後でなければ、プロレタリヤートの芸術が真に生れては来ないであろうということのほか、殆ど論のすべてては、プロレタリヤートを題材とすることとの困難を説いたものである。而してその場合その芸術の作者は必ずしもプロレタリヤート自からでないらしく見られる。その辺もこの頃の論ではまだ曖昧である。

六

これをロシヤの文学に就いて見ると、凡そ十九世紀の末期に於いて、ロシヤ文学のとるべき道は二つあった。一つは人生のさまざまな方面、先人の観察し表現しなかった方面を、多角的に題材として摂り来りたることである。また他の一つは、新らしい形式の創造である。題材としての人生の方面は既に取り扱われたものであるにせよ、それを一層全的気分の上に生かし、一層特殊な綜合の形に於いて再現することである。十九世紀末から二十世紀革命以前の文学は、ほぼこの二途を辿って来たものと見られる。人生のどん底を描き、文明の欺きを去って、自然に近い生活の間に、大胆に、誇らしく生きるものの姿を描いたゴーリキーのロマンティシズム、現状に甘んじて自己を守ることに専念するロシヤのフィリスティニズムに対する反抗の精神から、自伝的作品のうちにその革命的気魄を歌ったゴーリキーのリヤリズム、或いは軍隊の生活を、或いは黒海の漁夫の生活を、或いは曲馬師の生活を、明確精細に描いたクープリンの色彩豊かなるリヤリズム、真実な明らかな情趣に富める眼を以て、亡びゆくドゥヲリャンストヲ(貴族階級)の運命のおかしさ哀れさを、うるおいとやさしみとのこもれる筆を以て描いたアレクセイ・トルストイのリヤリズム、性と死との問題を取り扱ったアルツィバーシェフ、悪の詩人ソログーブ、魂の秘密、その闇のくまぐまを歌ったアンドリェーエフ、これ等は何れもみな、人生探求の道に於いて、何等かの新方面、新眼角をとらえようとしたものである。

芸術の上に新形式を創造しようとする運動の中にあって、文字通りの人生の縮図を描いたチェーホフは、たしか

にその先駆と見てよい。繊細、簡浄、集注的の筆致、そこには細心な精選がある。精力の極度の経済がある。即ちそれは象徴的となる、描写の努力を極度に少くして、表現の結果を極度に多くしようとするものである。その作品では事実の変化や内面生活の複雑さ深さよりも、刹那の一光景のうちに宝玉の如き人生の詩を見る。細部の捕捉しがたき味いが、綜合的な全的な味いを以て現わされる。気分が重んぜられ、言葉の洗練が重大事となる。翻訳すべからざる音楽、内面律が生れる。この傾向は、一切の題材をその一切の特徴から表現しようとするようになる。また随って個性的特殊の表現をつとめる、技巧の新を追い、表現の独創を求める。未来派もその傾向に立つ、凡ての古きものに対する憎悪は、この技巧派の特色である。旧来の語根を結び合せた新語が作られる。それは必ずしも奇矯で不可解なものとのみ貶することは出来ない。

表現の技巧の緊縮洗練は、最も根本的な気分、綜合的な気分の表現に向って集注せられる。創作は作者と読者との協力によって、その効果を生むというアイヘンワリドの説は、この技巧派に於いて殊に真である。普遍的綜合的な根本的な気分の表現は、外面の差別的細叙を必要としなくなる。人生の型、偶然一時的でない永遠のもの、全的なものが表現せられる。アンドリェーエフの劇の如きがそれである。

その技巧と形式との洗練が、内容を圧し、それに打ち克って、幻奇な、繊細な、捕捉しがたい気分の中に沈湎しようとするのに対して、人生の新事実に呼応する魂のこだまを求めて来たのが、世界大戦前後のロシヤ文学界に於ける実状であった。ロシヤでは、文学上の転機と社会生活の転機とが、ほぼ前後してその気運の芽生えを現わして来た。過去の人生の綜合を、新に分析批判しようとする要求、過去の生活の間にあって随所に表現せられていた腐敗と、自棄と、姑息の満足と、亡滅の悲哀と、破壊のうめきとを一時に天日の下に露出して、それを掃蕩しようとする颶風が即ち内的外的の革命が、殆ど一時に到った。旧来の文化の破壊、多くの生命の蹂躙、智力生活の世界的放浪、ロシヤ革命の結果は先ずそういう方面に現われた。

七

革命後プロレタリヤートの世界となったロシヤの芸術方面の生活は、今のところ、渾沌として不安不定の状態に在るというのが恐らくは事実であろう。ロシヤの現状は、勿論芸術方面の繁栄に好都合なものであり得ないに相違ない。而かも、出版事業の極めて困難な現在のロシヤに於いて、千九百十八年から千九百二十年に至る間に、出版せられた純文芸方面の書籍（詩歌、小説、劇、児童文学、文芸批評、文芸史、芸術論、の各種を含み、古典乃至既刊をも含む）は、三百六十五種、その中純文学上の作品が三百三

種で、その過半は詩集である。而してその詩の作者には、多くの新らしき労働者があり、その名の知られているものだけでも三十名内外に上る（ヤシュチェンコ教授主宰の雑誌『ルースカヤ・クニーガ』及びアメリカの『サイエット・ラシャ』誌の記事による）。また実際詩を作った凡ての人々がその作品を公表しているのでないという事情をも考えて見ると、事実に於いて現在のロシヤに新出せるプロレタリヤートの詩人は可なり夥しいものと想像することが出来る。それ等の詩人は結合して、既に先ずモスクワ詩人組合が成り立ち、更に全ロシヤ詩人組合も成立している。四五の機関雑誌も出ている。これ等の詩人の作は、もとより殆どロシヤ国外に出でないのであるから、私の知るところは、主としてベルリン、パリ、ソフィヤなどの各地でロシヤ人によって刊行せられている雑誌新聞の断片的な転載の材料によったものに過ぎないが、その詩の殆ど凡てが、破壊的、復讐的、階級憎悪的でなく、日常の労働の讃美であり、労働者の文化的意義の高唱であり、不思議な光りと科学的奇蹟に充ちている都会生活や工場を愛する心の表現である。都会は人間の勝利と解放とへの偉大なる橋梁であり、幸福な新生活の鋳造せられる巨大な火床である。新時代の曙光は都会から来る。工場も今は掠奪搾取の場所でなく、そこには労働の律があり、巨大な機械の生命の音楽がある。労役は新生す。そこには生活と日光と奮闘努力への力強き召呼がある。自己の鉄腕の誇りがある。集合共力への信頼がある。――こういう心持ちが歌ってある。中んずくゲラーシモフ、ポレターエフなどの作が代表的と見てよい。

これ等のプロレタリヤート詩人の作を通して見られる芸術上の特色は、それが著しく客観的であり、現実的であり、明確であるということである。空想的な、繊細な過敏な神経と官能との所産である捕捉しがたい気分の表現、それに伴う技巧の洗練彫琢、そういう傾向は全く見ることが出来ない。その傾向の末流につきものであった複雑、曖昧、病的頽廃的神秘的な一切のものは、ここに見ることが出来ない。それ等に代るものは簡素、明晰、而して、健康充実の感である。形よりも内容である。ロシヤ文学発達の上から見ると、この事実は明らかに十九世紀末から二十世紀へかけての主観的病的神秘的象徴主義の傾向に対する反動である。即ちリヤリズムの精神への回帰である。具体的の事象を離れて、一般普遍的抽象的なものの本質を表現しようとした、病的な繊細過敏な技巧に対する反抗として、客観的な、適確な現実生活の価値の創造である。これはまた、ロシヤ文学の伝統として見られているロシヤ・リヤリズムの創始者プーシュキンへの復帰であるとも謂われる。実際革命前のロシヤの詩には、極端な個性別意識、差別意識から、自我中心的な不可解な傾向が著しかった。明晰を特色とする新らしいプロレタリヤートの詩は、それに対して集合的、協力的、建築的であるといえる。また極端な個性別傾

向が、自己を限界し、孤独に耽ろうとするところから、無力な女性的な神経過敏に陥ったのに対して、プロレタリヤートの新詩は、男性的・健闘的、開放的であるといえる。これ等は、その多くのプロレタリヤート新詩人の作の幼稚未熟に拘らず、明らかに見ることの出来る著しき共通の特色である。

プロレタリヤートの芸術として、現在のロシヤの新詩人の作は、今のところ恐らく世界に於ける唯一のものであろう。これ等のプロレタリヤートの文学者には、別に小説、劇の作もあるというが、それ等は全く伝えられていない。これ等の文学者が、果たして将来のロシヤ文学のたしかな基礎となるであろうか、プロレタリヤート芸術として代表的なものであるか否か、それ等のことは今は言うことが出来ない。しかし、少くとも、これ等の純然たるプロレタリヤート芸術が、単に革命と、プロレタリヤートの支配とから、偶然突発的に発生したものでないということは、これまでに説き来たったところによって、自のずから明らかであろう。即ちこの新芸術の特色が、可なり大胆に、明快に、革命以前のロシヤ文学の傾向を否定し、排斥し、破壊しているものであることは、明らかにこれを観ることが出来る。而してこの新詩の特色は、在来の諸詩人、たとえばイャチェスラウ・イワーノフ、マヤコーフスキーその他の上に、既にその著しい影響を与えているという（最近までモスクワにあった詩人、評論家イリヤ・ゲオルギェイッ・エレンブルグの『ルースカヤ・クニーガ』九号の論文による）。以上の事実は、プロレタリヤートの芸術が、その発生成立の条件を社会階級の争闘の結果に見出すとともに、その芸術としての特色は、やはりあくまでも芸術そのものの自然且つ当然な変遷発達の結果として創造せられるということを語っているものではないか。

八

プロレタリヤートの世界は、ロシヤに於いても勿論まだそれ自身一つのハオスであるであろう。随って、プロレタリヤートの芸術が、十分な意に於いてその創造と鑑賞との条件を具備していないことも明らかである。これを外面的の社会事情から観ても、かくの如き時期に於いて創造せられるプロレタリヤートの新芸術が、その形に於いて恐らくは最も簡単であり、印刷刊行の便宜も従って得やすく、創造と鑑賞とに於いても比較的多くの条件を要求しない詩歌の形に於いて、先ず第一の先声を発するということは、極めて自然なことであるとせねばならぬ。また更に、これを心理的方面から考えても、現在のロシヤのプロレタリヤートは、自己の新らしき生活の意義乃至価値の獲得に、今さらの如き喜悦と感激とを感じたでもあろう。この新生活の感激が、先ず抒情の詩となり、新生活高唱の凱歌となって、表現せられるであろうことは、これまた極めて自然な

ことであるとせねばならぬ。そこに何の階級的憎悪がある。そこに何の時代への迎合がある。凡ては純真な魂のよろこびであり、新生のうぶ声である。詩は実にいつでも人間の真の言葉である。言葉の中の言葉である。未だ恐らくは渾沌として、昏くさまよえる如きロシヤの民衆の心の底から、かすかに響きあつまれるものが、これ等の新詩歌でないとは誰が言い張れよう。而してこの新詩歌が、階級争闘意識の険しさ以外、全く独自の新心境を歌い、ロシヤ文学自然の成長のあとに従っているという事実、自由な風格を孕み芽ぐんでいるという事実、それはたまたま、ロシヤに於いてのみ有り得ることとは必ずしも言えない。この事実は、漫然とプロレタリヤートの芸術を説くにまさって、幾多の実際的な厳粛な暗示を含んではいないか。プロレタリヤートの芸術は実に在来の芸術を破壊する。しかしその破壊は、少くとも新らしい自由なすなおな創造の芽生えの形に於いて成し遂げられる。芸術はいつでも創造である。創造なくして芸術の更新はあり得ない。創造なくして旧芸術の破壊はあり得ない。

日本のプロレタリヤートが生み出だす新芸術が如何なるものであるか、それは今は分らない。しかし、少くとも、その新芸術以前の芸術への反抗、それからの甦生という意味が、芸術そのものの本質内容や形式の上から見て、自然に現われているものであらねばならぬということは、ほぼ推察して誤りでない。そこで問題は、プロレタリヤートの支配の時期の如何を問わず、プロレタリヤート文化の発生成立の時期の早晩如何を問わず、日本現在の芸術の内容形式の文芸史的批判に向う。

日本現在の芸術、殊に文学の事実については、二年来折にふれて批評を試みた。ロシヤ文学に於ける程ではなくともやはりある意味で技巧第一、寧ろ小ブルジョワジー気分を要求し、発生せしめ、感興を寄せるであろう程度の、智巧的な手うすな内容を、いかに手うすな内容でも、この技巧の冴えではこれまでに読ませるというのを自慢にしているといってもいい程の、技巧第一の傾向が、それ以上に動きもならず今の文学の気運をどんよりと、鈍く、しかしながら温柔に、停滞爛熟せしめている。このうすぐもりの空はなかなか霽れない。大抵のものがそれにまきこまれてしまう。繰りかえしていうが、どこまでも、その気分に於いて、小ブルジョワジー的である。この気風の上に、忽ちにしてプロレタリヤートの支配が来、忽ちにしてプロレタリヤートの芸術が発生しようとは考えられない。少くとも、日本の芸術は、プロレタリヤートの芸術の生れる前に、今一層小ブルジョワジー気分を臆面なく跋扈跳梁せしめるか、そうでなければ、自分のブルジョワジーの生活を、否定する心持ちから生ずる矛盾のうちに、多くの内争を苦悶と葛藤とを経験すべきであろう。

「雷が鳴ると、百姓は十字を切る」

ロシヤの有名な諺である。雷はまだ鳴らない。しかし、

いつかは鳴る。必ず鳴る。私たちの前には、これから実に幾多の内外の葛藤が生ずるであろう。プロレタリヤート芸術の主張も、その雷鳴の予感に外ならない。

（一九二三年二月）

芸術運動に於ける共同戦線

「種蒔く人」社説

小牧近江

　芸術運動に共同戦線なるものがあるか。僕らは思う。明かにある。そして、また、なければならない。現に最近日本の文壇の問題になった階級意識の主張は観方によっては明かに期せずして一致した共同戦線の運用であった。おそらく、多くの運動が当分守勢的立場にあるなかに、最近の芸術運動ほど、ともかくも攻勢的態度を示めしているものがない。といって、僕らが冷静にその運動の今日までの効果を考える時、まだまだ、かりそめにも楽観を許されない。否々、より以上の緊張と精力をもって、更らに更らに反逆精神と階級闘争の眼覚めを深刻に、且つ、普遍的にしなければならない時代にある。それを今日忘却する時は、常に不安と絶望の眼をもって報いられた芸術運動の幻滅を告白することになる。

　秩序ある新社会の建設を目的とするための芸術運動は本質的にどれだけ有効なものであるか、随分危ぶまれて来たことは事実である。少くも、昨日のように、芸術家であるがために、あまりに個人的ファンティジィに流れたような傾向のあった時、一般の主義者が、芸術運動に対して、悲観の嘆声をもらしたことは、むしろ当然なことであったと云える。しかし、芸術家は遂に多くありふれた芸術家であるために、そして、また、それ以上に実際運動が出来得ないとの断定のもとに、新秩序の建設運動には到底大なる役割を期待することが出来ぬという一部の批難に対して、僕たちは何等の抗議なしに居るわけには行かない。僕らは如何に芸術家の運動が頼み甲斐のないものに見做されようとも、之を総攻勢の一部隊として見るとき、自覚せる芸術家の動員は共同戦線という作戦上の見地からして、必ずしも無効なものでないと信ずるからである。

　といって、僕らは世界の芸術家たちの無関心に近かった過去の態度に対してまでも必ずしも執拗に抗弁するものではない。例えば、過去に於ける多くの芸術家は芸術家の世界のみに生きようとして来たことや、また、芸術家の唯一の使命は個人個人の自覚を促すことそれであるとのみ思っ

て来たことなどはその最も批難の的になったところのものであることを否定せぬ。ことに、第二の場合、即ち個人の開発そのものにあまりに期待を持つということは、その人自身がそれ程に思わないでいても、事実、知らず知らずの間に、ブルジョアジィの最も得意とするありふれた武器――レオルミズムの弁と結果に於て、全然同様の危険におちいる恐れがある。このいわゆるオポルチュニズムこそ、確かに、共産主義者たちの主張する運動の直接の障害であったに相違ない。

「窮極より手段そのものが貴重である」とはロマン・ロオランの対アンリ・バルビュス第一公開書の一句であるが、僕らはそのことを認める。それであるがために、僕らは貴重なる手段として、何よりも先ず一日も早き現制度の倒壊を主張するものである。それによって、初めて個人の完全なる自覚を得ることが出来るであろう。与えられたる社会、与えられたる制度そのものに成長した個人が、（以下一二九字削除）

しからば、その破壊のために芸術家は何を為すべきや芸術家の（以下一六六字削除）芸術家の第二の任務は、ブルジョアジィの代弁者であるところのブルジョア芸術家を葬ることである。プロレタリア芸術家の第三の任務は、プロレタリア芸術の右傾分子――ブルジョア・パシフィスト、リベラリストなど――の仮面を剝ぐことである。そして、これらの任務を遂行するためには（以下一二二字削除）そして、それがためには、個人個人の気紛な単独行為や、また、芸術家であるがためのファンタジィが許されなくなる。ここに於て初めて、芸術運動にも社会主義運動と同様に、組織ある共同戦線の必要がなくてならぬものとなり、やがて、それが更らに、社会運動と戦線をともにするために、より大なる輪廓を有する共同戦線を形成しなければならぬ必然に到着する。

以上の事実から見て、最近ロマン・ロオランとアンリ・バルビュスとの間に取交わされたポレミック（ママ）は、共同戦線の今や実質的に効果をなけようとして今日の場合に於て真の悲しい現象であると思う。そして、その場合を今日の如き日本の現状に於て想像する時、僕らは例え日本に於ても早晩惹起す可き問題にもせよ、今日自由と平等の論争をなすことは頗る危険なことだと思う。現に僕らの今日為している第四階級の運動も他の国のそれに比してまだまだブルジョア思想には充分に肉薄していない。自由と平等はある形式になって早晩分離するものであるかも知れない。しかし、その論戦をなすためのほんとうの資格を得るために、先ずもって、今日一日も早きあるものの出現のためのに（ママ）追撃しつつある第四階級運動のための共同戦線の実を今少しく挙げよう。

（一九二二年六月「種蒔く人」）

文芸運動と労働運動

平林初之輔

一

明治以来の文芸運動は流派（スクール）と流派との間の運動であった。それは単に個々人の性質、趣味、河上博士の所謂『型』（改造五月号参照）によって相集る群（グループ）と群との争いであった。論争点は主として描写の様式、文体、せいぜいのところで芸術価値の見方、人生観の相違にとどまった。

最近に起らんとしている階級芸術の運動は、少くもその本質に於ては階級闘争の一現象、階級闘争の局部戦、階級戦線の一部面に於ける争闘でなければならぬ。従ってこれは単なる文学運動、紙上の運動としては解決の見込みがない。階級戦の主力なるブルジョアとプロレタリヤの決勝によりてのみ解決されるものである。

かくの如く文芸運動の意味を局限することは文学者にとりては不満であるかも知れない。文芸に一生を捧げている人達にとっては文芸運動は一切であり、絶対であって、階級闘争の一小部分の戦線を分担するというだけに止まらぬという人があるかも知れない。然しながらそういう人々は階級芸術の意義を遂に理会し得ず、調子に浮かされて吾知らずその運動の中へ飛びこんでいる周章者に他ならぬのだ。そういう人々は今の内に、けちくさい、あまり見栄えもしない階級戦の隅っこの方に陣どる代りに、『階級』というような窮屈な鎖はかなぐりすてて、芸術そのものの晴れの舞台へ出ずべきだ。

如何なる運動にも不純分子が集る如く、階級芸術の運動にも不純分子が寄ってたかってそれを利用し、くいものにしようとする。階級文芸の旗じるしの下にかくれてこそ泥をはたらこうとする者がある。かくてはじめの中は階級芸術の問題は無名作家と流行作家との争いのように見られていた。土田杏村氏が『新潮』二月号に書かれた議論の如きはそれである。実際、社会主義運動の中に、働くことのきらいなごろつきや、食いたおしやがまじりこむと同じように、階級芸術運動の中にも、文芸のいろはもわきまえない連中が、糞真面目な月給取商売はいやだからというので、あわよくば流行作家になりすまそうというどえらい野心を抱いて飛びこんだもののあったことは事実である。プロレタリヤの運動としての文芸運動はまずこういう人々の虫のよい野心に対して答うるところがなければならぬ。プロレタリヤの文芸運動は流行作家の悪口をいう運動でもなければ、新進無名作家を引きたてたり擁護したりする運動でも

ない。無名と有名、流行と非流行とは問うところでない。それは階級戦である。

次にプロレタリヤの文芸運動は文芸運動であるよりも先ずプロレタリヤの運動であることを念頭におかねばならぬ。だからその綱領は文芸上の綱領ではなくて、プロレタリヤそのものの綱領でなければならぬ。プロレタリヤの解放――それがプロレタリヤ文芸運動の唯一の綱領である。それ以外のものを求めるものもまたプロレタリヤ文芸運動の陣営を去って『階級』の『上』に赴くべきだ。文芸の争いの奥に階級の争いを認むるもののみ、影法師のうしろに実体を、枝葉の下に根幹を認むるもののみが階級芸術運動の戦士となり得るのである。

階級闘争の決勝戦はただ本隊の衝突によりてのみ決せられる。文芸運動はこのプロレタリヤ大衆の運動と協調連絡を有しなければ全然無効である。大衆と離れた運動はただ徒労であるか或は邪魔になるだけのものである。自ら階級文芸運動の戦士を以て任ずる人々にして往々これを理会しない為めに、葦原将軍式の笑うべき誤解をしている人がある。論敵や流行作家を緘口せしめることが何等かの絶対的意義を有しているかのように彼等は思いこんでいる。併しながら、局部の些々たる勝利から全線の勝敗が逆賭されないと同じく、そんなことはいうに足りない。文芸家が凡てプロレタリヤの軍門に降るとしても、依然としてプロレタリヤの文芸運動は継続される、一層の熱心をもって、ブルジョア階級がたおれるまで。

要するにプロレタリヤの文芸運動はそれ自身に絶対意義を有するものではない。そんな相対的意義しかない運動では張り合いがないと思う人は、絶対運動に携るがよい。そして神でも射とめるがいい。太陽でも吹き落すがいい。

プロレタリヤの文芸運動は単なる観念と観念との戦いではない。その背後に利害と利害とが睨みあい、権力と権力とが対峙している。だからその運動は観念の一起一伏でけりがつくものではない。それは長期にわたる、あまり華々しくないしかも困難に満ちた運動である。万人歓呼の裡に決勝線に入るマラソン競争ではなくて、雪と険路と窮乏と寒気とのシベリヤ旅行のようなものである。そしてマラソン競争のように勝っても褒美が貰えるわけではなく、途中で行き倒れるかも知れない運動である、――尤も最近マラソン競争で死人ができて急に教育家が騒ぎはじめたようだが――。その報酬はただ無産階級の解放があるのみだ。この困難に辟易し、この忍耐に怖じけづく人々は、プロレタリヤ文芸運動の行列を去って、紅白の幔幕でめぐらした運動会場に赴くがいい、そこにはすぐに喝采してくれる群衆がいる。おまけに子女もいる。

プロレタリヤ文芸運動は気質や趣味で決せられるものではない。況んや一時の酔興でこれにまじらるべきものではない。前途は険難だ。光明の此方に、闇黒と茨と鉄条網がある。しかもあまり栄えない運動だ。決勝力をもたない、

一種の補助運動牽制運動だ。この運動にたずさわる人はあまりに自己の役割を過大視してはならない。
　しかし大衆運動の一部、圧迫されたものの運動の一員としてたとい隅っこの一部分でも、或は前衛隊の一員でもを分担することは光輝あることではないか。時に後者たり得るならばこれ以上生き甲斐のある仕事はまたとないではないか。不可能な大望を抱き、幻想を夢みるよりは可能な一事を実行する方に余程意味と価値とがある。

（一九二二年六月「種蒔く人」）

コムレードの芸術

青野季吉

一

　フランス大革命の当時、サンクロット（革命家）たちはお互に、『シトワイヤン』（市民）と呼び交していた。その頃、シトワイヤン某！　と呼びかけることは、双方の心にどんなに誇らかな、自由な、親しい気持を与えたかは、想像するに難くない。自分たちは自由のために、万人の平等のために、そしてフランス共和国のために、お互に一個の自由な市民の権利をもって戦っているのだ、という気持が『シトワイヤン』という言葉から直射的に、彼等の心に伝わって来たに相違ない。
　ロマン・ローランの革命三部劇の『狼』のなかに、フランスの将軍がプロシャの間諜から、旧式に『将軍さま』と呼びかけられて、『馬鹿！　市民と呼べ！』と叱り飛ばした場面があった。大勢の共和国軍人のなかで、プロシャの捕虜間諜の口からでも、将軍さまなどと呼ばれることは、面目と自尊心を傷けられることのように思って、言下に『シトワイヤン！』と呼べと怒鳴りつけたのは、よくその頃の革命家の気持を表していると思う。
　シトワイヤンという言葉が、それほどの感激をもって使われたのは、自分だちは誰も彼も、フランス新共和国の自由な、平等な、一個の市民だという誇りが、彼等の心の基調をなしていたからでその使徒としての自分たちの生活価値の感情も加って、一層そこに意味が生じたものであろう。この気持は、『市民』という言葉も示す通りに、一個の独立な、自由な個人としての自分という気持である。飽までも平等な市民としての権利を有った自分——個人という気持である。フランス革命が万人の自由、万人の平等、親愛を合言葉として戦われながら、本質に於て、近代ブル

ジョアの革命だった所以も、このなかによく看てとることが出来る。

『明治維新の大業』が今日までも日本のブルジョアに深い伝統的の感激を残しているのと同じに、フランスのブルジョアにとって、フランス大革命はとうてい忘れられぬ伝統の泉である。今日でもシトワイヤンという気持は、彼等の思想や感情の根柢から離れない。ロマン・ローランの『世界の市民』の提唱なども、革命当時の国民主義が、世界主義的の色彩を帯びた異いがあるだけで、『市民』——全き権利に立つ個人という気持は、ブルジョア革命からの伝統的なものである。

大革命後のフランス文化がやはりこの個人の文化だったことは、革命後ヌーボー・レジームによる新文化、新芸術のために、予言的な気を吐いたスタエル夫人の著書などに明白に表われている。事実、近代ブルジョア文学、芸術は、シトワイヤンの芸術、個人の文学であると言ってよい。——ポール・クローデル氏は、日本の或る会合の席上で、近代フランス文学者たちは、誰も彼も、『惨酷なまでに冷やかな』態度を持ちつづけて来たと、不満の語気を洩した。これは近代フランス文学が、飽まで個人の文学だったその基調に、不満を抱いた言葉でなければならぬ。——その流れをくんだ日本のブルジョア文学も、どんなイズムの別はあっても、この近代ブルジョアの伝統は、遺憾なく行きわたっている。

二

もちろん近代文学の歴史のうちには、この『個人』の文学たる伝統を脱却しようとしたものも、尠くない。トルストイとか、カーペンターとか言った人たちが、それである。しかし、トルストイの場合では、それは近代文学の否定に終ってしまった。文学、芸術の全的否定に終ってしまった。というのは、そう云う『個人』の伝統的文化の基礎をなす社会構成が、背負い切れぬ疑問となったからである。この基礎的事実に疑義が生じた場合、その上に建築された伝統の文学の否定にまで赴くのは、決して無理でなく、寧ろ正直すぎた事である。トルストイの歩んだ道は、近代文学の『個人』の文学たる伝統的約束を、逆に、証明しているものである。

シトワイヤンがコムレードに変った。

世界ブルジョア革命の先達をなしたフランス革命が、シトワイヤンの文化の先達となったものなら、世界プロレタリア革命の先達をなしたロシア革命は、コムレードの文化の先達をなすものでなければならぬ。フランス革命を準備し、フランス革命によって更に準備されたものが、『個人』の文化——芸術なら、ロシア革命を準備し、ロシア革命によって更に準備されるものは、コムレードの文化——芸術でなければならぬ。それはまことに、人類の、世界

の、メタモルフォーズである。

各国の無産階級は早くから、お互に『コムレード』と呼び交していた。それはいかに彼等の心に信愛と、そして搾取されつつある現実感を呼び起したか知れない。コムインターンやソヴィエットで、お互に『コムレード』と呼びかけることは、いかに誇らかな、創造者としての気持を起させるか知れない。勲章と燕尾服の国では、集りの席上で、『淑女紳士諸君！』と呼びかける。ところで、労働服と健康の世界では、『コムレード！』『ゲノッセン！』と呼びかける。その気持は、シトワイヤンと呼ばれた時とは、年月の距りよりは、ずっと大きな距りがある。

三

コムレードの気持が、どんなに革命的なものであるか、全然新らしきものであるかは、ゾンバルト教授が、その名著『十九世紀の社会運動』中の有名な『原始と傾向』の章のなかに、巧みによく摑んで書いている。ここでは、それを借りて、説明の助けとしよう。

教授は言う。

『近代社会運動の特質をなしている諸観念が、どうして発生したかを了解するためには、われわれは次のことを想起しなければならない。即ちわれわれのいま研究せんとする大衆プロレタリアは、徐々に形成されたものではなくて、一挙に現在の状態へ投げ込まれたものだということである。全く過去の歴史が数百万の人間の前に霧散してしまったかのようである。実際、大工場での労働者の集中は、都会及び工業中心地へのその集中と同様に、資本主義の必然の条件である。この集中は何を意味するか？ 互に何の関係もない人類の大衆が、もろもろの異った地方、諸国から押寄せて来て一定の地点に集められる。そして、どうにかして喰って生きて行けと命ぜられる。これは過去との全き分離、故郷・家族・慣習との、あらゆる関係の絶縁である。この大衆の目からは、過去にその理想となっていたものは消散する。ここに人のあまり重視しない大切な意味がある。

『この無産者の大衆の営む可き生活が、全然新らしい生活だということを、人は忘却している。然らば、その全く新らしい生活とは何であるか？ 大衆の棲むバラックの中、大工場の中に、大集会の中に、大娯楽場の中において、神と人とから見捨てられた孤独の、荒廃の無産者は、不幸なその友と接触して、新らたなる感情を得、新らしい偉大な組織の一員となる。新らしい社会がそこに形成され始め、この新社会は、近代の生産技術の賜物として、共産主義的な色彩を焼き付けられる。孤独荒廃の労働者生活の痕跡が消えかかるにしたがって、この新らしい気持が、展開し生長し確立する。場末の屋根裏が空虚になればなるほど、共同集合の新中心が魅惑的になり、孤立荒廃せる自個が、新

らしい人間になった事を感ずる。「個人」が消滅して、その代りに「コムレード」が現われる。階級の集団、共同労働の慣習、共同の享楽が生長する。プロレタリヤの心理はここにある。』

ゾンバルト教授は、そう云う具合に、プロレタリヤの全然新らしい生活、プロレタリヤの、コムレードの心理への発展を説いたが、これは、教授も言う通りに、人の十分な注意を怠る点である。

四

コムレードの気持には、全然、個人の、尠くともシトワイヤンというような意味の『個人』または自分独りというような意味の『個人』の気持はない。そこに『個』があっても、『仲間』を『個』とするほどの、最早や、『個』をもって言い表わされない伝統的の気持を離れたものである。『仲間』、『兄弟』といえば十分な意味に於て、『個』が生きているというほどの意味での『個』である。この意味は実に、プロレタリヤの生活の基調であり、ブルジョアの生活の基調となっているシトワイヤン、全く権利を有つ個人の心持と、劃歴史的の対照をなすものである。コムレードの文化――芸術が、シトワイヤンの文化――芸術と、劃歴史的の対照をなす特色の一つは、確かにこの点になければならぬと私は確信する。――雑誌『我等』(十二年一月号)に訳載された一露人の『無産階級の倫理』中の『個と社会』の一節は、僕の立言を、更に、組織的によく説明している。

今日の日本の文壇のいわゆる大家連は、労働問題などを材料にとり入れ、所謂それを『内容的価値』として、大いに時代がろうとしている。中には、労働者が資本家の令嬢に、毒付く場面などを描いて、大いに労働者ひいきを見せびらかして、いい気持になっている者も見受ける。そんなものが屑きれほどの価値もないことは、明白だが、それでも『労働者小説』となって通用する文壇である。こう云う人だちの労働階級は、ラクダのシャツの上に法被を着けた労働階級である。シトワイヤンの仮装行列の労働者である。

プロレタリヤは、怨嗟にも、反抗にも、享楽にも、歓喜にも、生にも、死にも、コムレードの気持である。『個』の全体としてのコムレードが、泣いて戦うのである。歓んで踊るのである。この気持を解せないで、この気持によってものを観ないで、『個人主義者』の労働者を泣かせたり、怒らせたりしたところで、出目人形ほどの価値もない。

われわれの要望する、そして、日本の荊棘の土の上に、既に、芽を吹いている無産階級の芸術は、コムレードの劃歴史的の生活気分を基調とした芸術である。コムレードの芸術である。(完)

(一九二二年一〇月「芸術戦線」)

階級闘争と芸術運動

青野季吉

一

僕だちの戦いは、ある新奇なイズムのための戦いや、あるグループの価値意識のための戦いではない。断じてそうではないのだ。僕だちの戦いは、階級のための戦いだ。無産階級解放のための戦いだ。階級戦争だ。

この一つのことが尤も大切だ。これを忘れたら、無産階級の芸術運動などは、意義をなさなくなる。

僕だちの戦いは勝利の戦いだ。それは歴史の進行が証明している。だが、歴史はまた、僕だちの道が、荊棘の道であることを教えている。僕だちの荊棘の道が、長い里程であることを教えている。

僕だちの戦いは、階級の戦いだ。だから無産階級の全階級的解放まで、僕だちの戦いは戦われるのだ。僕だちの戦いの中に、何らかの小さな完成を求めたり、何らかのまとまった渾一を求めたりするのは、ブルジョアの筆法だ。無産階級のダイヤレックな道徳ではない。

労働運動も、ひと頃のように、活気がないではないかとか、プロレタリヤ芸術運動も、この頃は、いささか草臥れたではないかとか言うようなことを、平気で言っているブルジョアを見受ける。こう言う連中は、労働運動やプロレタリヤ芸術運動と、在来のイズム運動などとを、ごっちゃにしているのだ。それが階級解放の長き戦いだと言うことが分っていないのだ。

表面の運動が休んだように観える時は、地下運動が醗酵している時だ。支配階級が手足を伸してホッと一呼吸している時は、被支配階級の戦闘力が満潮に達しつつある時だ。旧き戦いの段落、新らしい戦いの準備、階級闘争は、一刻の休止もない。それは歴史の命令だ。それが、われわれを照らす「光り」なのだ。

無産階級の芸術運動は、階級の全的解放のための戦いだ。階級の解放を見るまで、戦は或は表面に、或は地下に、一刻の休止もないのだ。芸術の名によって、ブルジョアからこっそり背負わされた「芸術」の亡霊に祟たられて、階級の全的解放の戦いだという一事を忘れる者があったとしたら、それは既にブルジョアの陣営に投じられたものだ。裏切者だ。

二

プロレタリヤの芸術家も、忿怒や反抗や破壊だけでなしに、モット労働階級の人間性を描かなくては、芸術でないと嘯いたことには、プロレタリヤの芸術家と自称する者がそんなことを言って、思い上っている。

（七九字削除）

それは労働階級の人間性の力強い示現ではないか。生きて燃え上った人間性ではないか。（四一字削除）い。

その意味に於て、今日、日本の無産階級の芸術は、階級闘争線上の、忿怒、（五字削除）の表現より外にないのだ。それが深いこと、それが強いこと、それが唯一の価値の標準だ。

「芸術」や「永遠」の美果を探し求める連中は、未来の博物館で仕事をせよ。強き人間性の燃焼の焼け棒っくいの中から、「芸術」や「永遠」を捜して来い。

その忿怒、（六字削除）表現が、いかなる形を執って来るかは、それこそ個人によってさまざまに異る。それは問題ではない。僕だちは、その中に、階級の全的解放戦を覩ればよいのだ。階級運動の強き示現を覩ればよいのだ。全階級的なものを覩ればよいのだ。

いかなる事があっても、「芸術」という亡霊に悩まされてはならぬ。階級解放のための忿怒の念、（六字削除）行進の歌、それであることが、すべてだ。僕だちの戦いが階級の戦いだということ、尤も強く支持す可き一事と云ったのは、これがためだ。

（七〇字削除）だ。それが彼によって代表されたプロレタリヤのすべてなのだ。その中に「永遠の宗教」をつぎはぎしたのは教会だ。その中に「美」や「詩」を見たのは、草臥れ切ったワイルドの徒だ。

三

プロレタリヤ批評家、芸術家は、芸術を宣伝の道具に使う。芸術の冒瀆者だ。そう云って青筋を立てる。僕だちは何故、芸術を宣伝に使っていけないか、その論理がわからない。

「永遠」や「芸術」などの目つぶしを喰っている連中は、自分たちは何かしら自由な、独立な立場にあって、尊貴なもののために奉仕していると思い込んでいる。しかし、そう思い込んでいることそのことが、ブルジョア支配——一切の階級対峙の社会の教化に囚われているのだと云うことを知らない。階級対峙の現実を、美しいヴェールでつつんで見せまいとする支配階級のカルトから生れたのは成績優良の子だと云うことを知らない。彼等は、それに気がつかず、革命力の前に背骨を見せている事において、無意識に、支配階級の宣伝をやっているではないか。彼等の思想も芸術もまた宣伝に過ぎぬと云うことは、宣伝を恐ろしい冒瀆のように嫌っている彼等にとって、何と云う皮肉だ。

彼等が無意識にやっていることを、無産階級の批評家や

芸術家は、意識的にやっているに過ぎぬのだ。無意識にやる宣伝は芸術で、意識的にやる宣伝は非芸術だと云う理論がどうして立つか、僕にはわからない。（一二六字削除）る。それは明らかに宣伝と云ってよい。僕だちは、それを意識的にやる。宣伝と云う一角から見て、僕たちとブルジョア批評家、芸術家と思うところは、意識的と無意識的との違いだけだ。

僕だちは宣伝であることを、寧ろ名誉とするのだ。ただその宣伝が本統に無産階級の動的生命から生れて、広く全階級に亙るものであって欲しい、それが無産階級の階級的進行と歩調を合せたものであって欲しい、そう念ずるばかりだ。

僕だちの戦いは、徹頭徹尾、階級的の戦いだからだ。

四

階級闘争のためなら、（一九字削除）芸術をすてよ、そんな事を言って、大いに得意になっているブルジョア批評家を見る。

階級闘争が、全線に進んで来たればこそ、ブルジョア、カルトの浸潤している、ありとあらゆる社会層に於て、戦わねばならぬのだ。（二三一字削除）だ。

それが政治でも、それが芸術でも、あるいはまたそれが宗教でも、いやしくもブルジョア支配の確立を保証する分野であれば、大衆の心の一斉がそこに釣られている分野であれば、われわれはそこに出で戦わねばならない。われわれはそこに、支配階級の詐術を暴露し、新興階級の歴史的使命の「光り」を、遍ねからしめねばならぬ。その全社会的な闘争をおいて、社会の片隅によせられる階級闘争を知らぬのだ。

五

僕だちのプロレタリヤの芸術運動は、一九二二年において、激しい戦いの口火を切った。僕だちの戦いは、年を一つ加えて更に、熾烈とならなければならぬ。そして、階級闘争としての真使命をいよいよ、鮮やかに発揚し、階級闘争としての実際的効果をあげなくてはならぬ。

（一九二三年二月「種蒔く人」）

文壇の政党化を難ず

前田河　広一郎

文壇の政党化は、昨年から引続いての病的な現象である。批評に藉口して、他人のカリカチュウアをえがき、中傷的慢罵を弄んで、したり顔をしている徒輩は、わずかに九牛の一毛に過ぎない。一般読者には何の興味もない、楽屋落ちのだじゃれ、甘言、牽制運動などをやって、紙上の制限選挙に犬馬の労を厭わない連中の多かったのも、畢竟、文壇の政党化の瘍腫の臭汁に過ぎない。文壇は化して一種のパンデモニアムになっている。病今や膏肓に入らんとして居る。

文芸学術と、政党政治とは全然相容れない、二の別要素である。若し、批評家や作家にして、自分の政治的本能を満足させたいとならば、宜しく実際政治に割込んで投票買収なり何なりするがよい。しかし、一旦、文筆上の仕事に関与する上は、そこに寸毫の不純な懸引もあってはならない。創作と批評と——厳然として、この二途のみが、真の文芸向上の為に与えられたる手段である。一歩を誤り、みだりに文字を駆使して、自分の主義主張、または個人関係の相容れざる批評家、作家に対して、何等根拠のない中傷讒誣をこれ試みるようなことがあったとすれば、それは批評家、創作家としての本質的な職能を忘れた邪道である。ましてや、徒党を組み、機関雑誌により、街路に、飲食店に、紙上に、愚にもつかぬ悪宣伝をやったり、直接行動に出たり、書店と結托して子分抜擢をやったりするにおいては、本来の理想と向背することも甚しいといわねばならない。何が血迷うて、こんな悪現象が起ったろう。——『文芸春秋』の編輯主任菊池寛君は、最近同誌上において『プロレタリア作家が没落した今、本誌を出すのも張合いがない』というような意味の歎息を漏していた、と記憶する。この一言、簡なりといえども、よく文壇政党化の表裏を照明して居るものというべきである。

プロレタリア系の批評作家が頭をもたげて、無産階級の自覚をもって、(勿論、中には随分とヨタ分子も雑居して居ったが)厳密に、既成作家の発表する作物を批評し、検討し、そこに文芸思想の当体としての作物が、ただに時代思想の先駆者たらざるのみならず、大体において思想上の落伍者であったことを、痛烈に指摘し、糾弾したことに対して、被批評者たる既成作家の一部者が、いさぎよく自己の非を告白する勇気だもなく、在来の出版関係、編輯者関係を悪用し、雑誌に、新聞に、あるいは裏面の暗中飛躍に、ひたすら自分達の地位を擁護せんとした、狼狽と恐怖

のコメディは、何人といえども忘れることの出来ぬ事実であった。

プロレタリアの自覚をもった批評家作家にとっては、その批評に、何等政党的な悪画策はなかったのである。ただ、僕達は、真理の為に戦って来たのだ。その指摘に、糺弾に、宣言に、一般民衆の思想精神の啓蒙上のかぎを握って居るべき文学者が、平明なる社会的事実にさえも覚めず、偏に芸術至上のアブソリューティズムを夢み、現実を夢想化し、あるいは卑怯にもそれから回避し、または邪悪なる思想をもってそれを毒せんとした事実の、仮借なき暴露をこそしたが、何等私人対私人の悪罵を弄したことはなかったのだ。尤も、一部プロレタリア系統の作物を早呑み込みした出版物の間には、批評と喧嘩ととりちがえ、辛味に麻痺した味覚を無理にも刺戟しようと試みた向もあったが、それは僕達の責任外である。根本的な動機において、そこには政党味はなかったのである。

僕達は、夢みている文人墨客肌の文筆徒輩者のすべてに、頭は如何ほどパルナサスの峰に居ろうとエル・ドラドを想望しようと、足は依然として資本主義文明の地域にあり、作品としての市場価値は一定の対消費者関係に制肘され、経済関係は他の万般の労役とひとしく資本主義制度の支配下をのがれられないことを述べ、個人、家族、団体、国家の外に、『社会』の発見を促した上に、しりぞいて彼等の自決を待ったのである。

思想の別はいい。主義の相違はいい。作物や批評の基調がどんなに僕達と融和せぬものであっても差支えはない。しかし、論議に窮した余り、思想上にはたと当惑した余り、作物発表の途を邀せらるるをおそるるの余り、否、一般民衆が自分達のこしらえた古臭い名声を唾棄すべきを憂慮するの余り、そこに堂々の対陣を張らずに、窮余の一途として慢罵、譏誣をこととし、あまつさえ徒党をくんで親分子分的な愚劣な陣笠運動を開始し、プロレタリアの自覚覚醒の動機の那辺にあるやも究めずして、単に文壇占領運動の如き誤謬を、一般社会に知らしめたことは、憎んでもなお余りある所業といわねばならない。雑誌『文芸春秋』の発刊の動機が、今漸く一年を閲せんとして、一菊池寛君の『鼻っ張り』に過ぎなかったことは、その既刊誌数を塗沫した、でたらめ千万な、何等拠る処の主義主張なき、悪筆のヨタによっても判明する。しかして、菊池君の著した『我が文芸陣』なる論集(?)が、徒に個人関係の議論に低下し、すこしも、君一流の常識道徳を支持する作物の弁護にも、より以上のシンセーアな理想に対する努力の片鱗をも示さないことは、頗る遺憾である。

しかも、『文芸春秋』といい、『我が文芸陣』といい、醜悪な文壇の政党閥化の所産として、まだ正直な方である。その根底には、来らんとする民衆思想に、利己的に触角を働かした、類似反動主義のうごめいているのを見る外、何も求むべきものはないのだ。ただ、ここに留意すべ

きことは、このクランニズムが、往々にして、プロレタリア系批評家作家と気持を同じうした人々をもとらえて、その一去一退に、さながら全般面に、小うるさい影を落すことである。主義は大勢である、私人好誼の関係に何のはばむところあるべきではない。だが、それによって全体を速断されることは迷惑である。

一国の文化に、民衆の思想に、何等か積極的に働きかくべき要素が、文壇とその製作物とに潜在するとすれば、僕は、断然この種の無駄事をよして、それによって徒費する冗精力を、作物の上に、批評の上にそそいでもらいたい。よし、そんなことを幾年つづけたところが、みおを浸して進犯する波浪は防げない。しかも、もとを洗えば、等しく平の文筆業従業者ではないか、そして、この自覚は僕達の能不能の範疇を、かなりくっきり引いてくれるではないか。

プロレタリア系の文学は、決して震災が見舞い、一菊池寛が雑誌を弄び、一里見弴が慢罵をし、特権擁護思想に凝り固まった雑誌記者が紙でこしらえた門戸を閉したところが、滅びはしない。況んや日和見主義の雑評家達が、どんなに騒いだところがのびる、のびる、のびる一方だ。

正直――それがすべてを救う。

（一九二三年六月）

III 詩・短歌・俳句

殺戮の殿堂

白鳥省吾

人々よ心して歩み入れよ、
静かに湛えられた悲痛な魂の
夢を光を
かき擾すことなく魚のように歩めよ。

この遊就館のなかの砲弾の破片や
世界各国と日本とのあらゆる大砲や小銃、
鈍重にして残忍な微笑は
何物の手でも温めることも柔げることも出来ずに
その天性を時代より時代へ
場面より場面へ転々として血みどろに転び果てて、
さながら運命の洞窟に止まったように
凝然と動かずに居る。

私は又、古くからの名匠の鍛えた刀剣の数々や
見事な甲冑や敵の分捕品の他に、
明治の戦史が生んだ数多い将軍の肖像が
壁間に列んでいるのを見る。
遠い死の圏外から
彩色された美々しい軍服と厳しい顔は、
蛇のぬけ殻のように力なく飾られて光る。
私は又手足を失って皇后陛下から義手義足を賜わったと
　いう士卒の
小形の写真が無数に並んでいるのを見る、
その人々は今どうしている？
そして戦争はどんな影響をその家族に与えたろう？
ただ御国の為に戦えよ
命を鴻毛よりも軽しとせよ、と
ああ出征より戦場へ困苦へ……
そして故郷からの手紙、陣中の無聊、罪悪、
戦友の最後、敵陣の奪取、泥のような疲労……
それらの血と涙と歓喜との限りない経験の展開よ、埋没
よ。

温かい家庭の団欒の、若い妻、老いた親、なつかしい兄
　弟姉妹と幼児、
私は此の士卒達の背景としてそれらを思う。
そして見ざる榴散弾も
轟きつつ空に吼えつつ何物をも弾ね飛ばした。
止みがたい人類の欲求の
永遠に血みどろに聞こえくる世界の勝鬨よ、硝煙の匂い

よ、
進軍喇叭よ。
おお殺戮の殿堂に
あらゆる傷つける魂は折りかさなりて、
静かな冬の日の空気は死のように澄んでいる
そして何事も無い。

五月、苦悩の日

——世界大戦第五年の春

富田砕花

五月!
あらゆるものはのびをした、
そして一斉に生き生きと呼吸を初めた、
木の梢には樹の葉、
草の根からまた茎からは草の葉
みんな一生懸命の生の営みである。
空には鳥の歌
地にはあらゆる生きものの運動、
充分な眠りから目覚めたものの潑剌さをもって、
新しく生れたものの喜悦をもって。
何故なれば人間だけが、
被敵物(かぶりもの)を跳ね除けることをしないで
白日の下を狂い、舞い、さまよい、
あるものは黯々として歎くことをつづけるのか。

五月!
五月の微風が君の頰を愛撫するとき、
何故なれば君の唇は綻ばぬか、
君の額(ひたい)はいたずらに曇るだけで、
瞳は力なげに、死魚のそれのようではないか。

君よ、
そう性急(せっかち)に責めるのをしばらく待って呉れ、
吾々の苦悩は負うべくあまりに大きく重い、
吾々が闘わねばならぬ闘いは無限だ、
きのう弓弦のように張りを見せていた心は
吾々の知らぬ間に、腐れた布片(ぬのきれ)のようになってしまった。
吾々の力はどこへ逃げて行ったのか、
吾々にはいま憑(つ)き物が落ちたような放心だけが残ってい
る。

ああ、五月!

蒼空の太陽、
そしてあらゆるものの活溌な呼吸、
――だがここにそれらからは全く除かれている者、
吾々！

拠るところを失ったものは
祈禱る力さえ奪われたものは如何すればいいのだ、
神よ！
と、思い余っての叫びも
けむりのように答えはなく、砂のうえにそそがれた水の
　ように消えようとする、
溺れるものは一本の藁屑にさえすがるという、
吾々は何を掴もうとするのだ？

君らよ、（殊に宗教と社会運動の名に於いての教導者た
　ちよ）
吾々は君らによって責められるに先立って、
教えてもらわなくてはならないのだ、
導いてもらわなくてはならないのだ、
吾々はいますべてを喪ったものだ、
吾々は人間の世界のこの『現実』をまえにして、
一切がわからなくなって昏倒せんばかりだ。

噫、
五月！
あらゆるもののうえにそそぐよろこびの光も、
人間の世界は与り知るよしもない真昼ながらの闇黒だ。

或る淫売婦におくる詩

山村暮鳥

女よ
おんみは此の世のはてに立っている
おんみの道はつきている
おんみはそれをしっている
いまこそおんみはその美しかった肉体を大地にかえす時
　だ
静かにその目をとじて一切を忘れねばならぬ
おんみはいま何を考え（ママ）ているか
おんみの無智の尊とさよ
おんみのくるしみ
それが世界の苦みであると知れ
ああそのくるしみによって人間は赦される
おんみは人間を救った
おんみもそれですくわれた

どんなことでもおんみをおもえばなんでもなくなる
おんみが夜々うす暗い街角に饑えつかれて小猫のように
　たたずんでいた時
それをみて石を投げつけたものは誰か
あの野獣のような人達をなぐさむるために
年頃のその芳醇な肉体を
ああ何の憎しみもなく人々のするがままにまかせた
歯を喰いしばった刹那の淫楽
此の忍耐は立派である
何というきよらかな霊魂をおんみはもつのか
おんみは彼等の罪によって汚れない
彼等を憐め
その罪によっておんみを苦め
その罪によっておんみを滅ぼす
彼等はそれとも知らないのだ
彼等はおのが手を洗うことをすら知らないのだ
泥濘の中にて彼等のためにやさしくひらいた花のおんみ
どんなことでもつぶさに見たおんみ
うつくしいことみにくいこと
おんみはすべてをしりつくした
おんみの仕事はもう何一つ残っていない
晴々とした心をおもち
自由であれ
寛大であれ

ひとしれずながしたなみだによって
みよ神々しいまでに澄んだその瞳
聖母摩利亜のような崇高さ
おんみの前では自分の頭はおのずから垂れる
おんみは光りかがやいているようだ
ああ地獄のゆりよ
おんみの行為は此の世をきよめた
おんみは人間の重荷をひとりで背負い
人々のかわりをつとめた
それだのに捨てられたのだ
ああ正しい
いたましい地獄の白百合
猫よ
おんみはこれから何処へ行こうとするのか
おんみの道はつきている
おんみの肉体は腐りはじめた
大地よ
自分はなんにも言わない
此の接吻を真実のためにうけてくれ
ああ何でもしっている大地
そして女よ
曽て彼等の讃美のまっただ中に立ちながら
ひとときのやすらかさもなかった
おんみを蛆虫はいま待っているのだ

あらゆるものに永遠の生をあたえ
あらゆるものをきよむる大地
此の大地を信ぜよ
人間の罪の犠牲としておんみは死んでくださるか
自分はおんみを拝んでいる
彼等はなんにもしらないのだ
わかりましたか
そして吾等の骨肉よ
いま一どこちらを向いて
おんみのあとにのこる世界をよくみておくれ

ローザ・ルクセンブルグ嬢を懐う

正富汪洋

ローザ、貴嬢が銃殺されたことは、
私自身が身体の一部分を斬られたよりも
悲しく、惜しい、実に悼ましい。
ローザ、貴嬢の一生は尊かった、
貧しい小商人の娘に生れた貴嬢は、
自（みずから）、自を立派な学者に、戦い手に、
社会主義者に、改革家にしました。

ローザ、貴嬢は、何という立派な顔の持主か、
高尚で、ひきしまってて、そして女らしい、
私は、貴嬢の顔に、深い愛着をもつ者です。

ローザ、あなたを懐うて、
私は今も泣いて居るのです、
美しいもの、正しいものの
暗愚狂暴なものの手に殺される不合理を。
ローザ、私の眼には、獄中の
あなたの有様が、映る、うつる。
石のように堅いベッドの上、
街灯の反射が、掛蒲団に落ちる時、
蒲団の上に、動いたあなたの白い手。

ローザ、あなたの其の手は、
まあ、どんなに、力強い論文を
書いたことでしょう、そして書物を。
ローザ、あなたの其のやさしい眼は、
まあ、どんなに多くの弱いものに、
憐みを注ぎ掛けたでしょう。

ローザ、貴嬢は、獄中まで引込まれた
戦争の掠奪物の一つである

ルーマニヤ産の野牛が、
虐待せられるのに対して
その眼に涙を溜めたというじゃありませんか。

ローザ、あなたの見よい口、
それが、まあ、どんなに、不正義に対して、
熱烈な気を吐いたでしょう。
まことに貴嬢の云われた通り、
私達は、道徳の泥海、
瘋狂院の中に、在るものです。

ローザ、あなたは詩人であった、
監獄の浴室で、瀕死の蝶を視て、
これを監房に持ち帰り、
いたわって、いたわって、
窓から逃したあなたの愛。

監房の中に飛込んで来て、
唸り廻る一つの蜂に、
生命の歓喜を感じた貴嬢。

革命は薔薇の水では
洗礼されないと嘲る言葉を、
不十分だとして、ボルシェヴィキの

テロリズム政治を、
いましめた、心やさしいあなた。

九カ月間、歩き親しんだ
獄舎内の敷石小路に、
離別（わかれ）を惜んで
他の獄舎に、かわりたくないと思ったあなた。

監獄近く来て啼く白頭翁（ブラウマイセ）鳥に
心を動かしたあなた
鳥の物語が解ると云った
やさしい静な貴嬢。

人が唯、正しく見まもりさえすれば、
深夜の暗（やみ）は、天鵞絨（ビロウド）のように、
柔かで、美しいと、哀しい
悟った言葉を残したあなた。

フーゴー・ウォルフの音楽を、
心から味った其の耳、
獄舎近くの公園の
黒楊の風に鳴るのを
じっと聴いたあなたのその耳。
ローザ、ローザ、おお、ローザ、

いくら、あなたを恋しがっても、
また此の世に来はしない。
でも、ローザ、でも、ローザ、
貴嬢は死なない、貴嬢は死なない。

五月祭の朝

百田宗治

今日は五月一日だ、
五月祭の朝だ、
空はほがらかに晴れ、
大気はおだやかな海のように澄んでいる、
飛び散る一片の雲もない、
——近くの小学校で生徒達の唄う声がきこえる。

今日は五月祭の行われる日だ、
世界の労働者達が
結束して示威運動を行う日だ、
彼等が幾度か血で血を洗い、
同胞の生命を犠牲にした購いを求める日だ、
額に汗するものの
正当の権利を叫ぶ日だ——。
(私は知っている、彼等と彼等が楯つくものとの間のいたましい紛糾の爆発を、
相せめぎ合うこの地上の階級と階級の戦いを、
おそらく永遠に停止されないであろう是れらの避けがたい軋轢を、
自由と正しい権利への希求の声を、
地上に平等であるべき生活権の最後の保証を!
あらゆる圧制よりの生存の解放の叫びを!
……用意されたものと用意されたものとの避けがたい争闘の過程を、
あらゆる計画と、予定と、巧妙を極めた運動と、駆引と、圧迫とさまざまの非常手段を。
オオ、あらゆる都市の広場は彼等の群で埋められ
彼等の様々の服装と個々の叫びで一杯になり、
うちふられる旗が天空を掩うのを……)
——彼等の妻や子供もまた彼等の後にあって叫ぶ——
あらゆる工場、あらゆる軍機製造所、あらゆる紡績工場、
今日一切の生産と供給の機関はこの一日停止され、

彼等のデモンストラシオンは至るところの大道に充ち溢れる、
彼等は歌う「自由」と「労働」の歌を、「見よ、われらの産業運動（インダストリエルムウブマン）の威力を！」と。

アアそして遂に一切の都市の秩序と保護に任ぜられた警官隊又は軍隊との衝突！
それらの縄張への侵入、
熱狂と熱狂との後先きもない燃焼、
発射される短銃——それを奪いとろうとする群集の叫喚
彼等の一人は無照準に射出された弾丸の犠牲となって斃れ
他の一人はその下になって踏みにじられる。

……今日は五月一日だ、
五月祭の行われる朝だ、
空はほがらかに晴れ、
大気はおだやかな海のように澄んでいる、
動く一片の雲もない、
——近くの小学校で生徒達の唄う声がきこえる。

疲れたるものの心理

壺井繁治

疲れたのか、
生きながらミイラとなったのか、
おお、誰か
俺の胸から、
この腐った心臓を掴み出して、
それを真昼の大地にぶちつけてくれ、
力一ぱいぶちつけてくれ、
……ぱっと飛び散る血潮、青黒い血潮——
それをぺろぺろとなめる蛇の舌……おお、その瞬間——
面白いではないか、面白いではないか

疲れたのか、
生きながらミイラとなったのか、
おお、何か闇よ、
迫って来い、
渦巻となって、旋風となって——
そして、お前の力強い両腕で、

俺を抱いて、抱いて、抱きつぶしてくれ、
まるで画家がチューブから絵具をしぼり出すように、
俺の心臓をへし出してくれ、
そしたら、何処からか
怪しげな鴉が飛んで来て、
俺の心臓をついばむにちがいない、
面白いではないか、面白いではないか！

紙　屑

僕の頭は
この世から遮断された暗い屋根裏だ
紙屑が
一ぱいつまっていて
いつもがさがさ
音を立てている
痩せ衰えた鼠が一匹
また騒ぎだした
あいつ
生れながら
気が狂ってるんだな

『どん底で歌う』I

根岸正吉

我は労働者よ

廻せ！　廻せ！
廻したくば何程（いくら）でも廻せ。
如何に汝が廻すとも
機械の前に我等立たずば、
一寸の布も編まれぬであろう。
一尺の絲も紡がれぬであろう。
絲の一管（ひとくだ）さえ巻かれぬであろう。

我は労働者よ。
何も知らず。――只此事を外にしては、
されど
我が知れる此事はいとも貴し。

我は『力』なる労働者の一人なり。

げにこそ
労働者は力なり。
我等が皆目醒むる時
為さんとし成らざるなき強き力なり。

織　工

――此一顆を大杉栄氏に呈す――

彼は真の技術者にてありき。
軀幹偉大に筋骨たくましく
色浅黒き男なり。
其眼を見よ。
何物かを求めて止まぬ
いずこにか何かを認めし其眼を見よ。

彼の父は放蕩の織工なりき
彼の母は優しき心の美しき容の織工なりき。
帝都の郊外なる海近き
同じ工場に働く内に
若い血は若い血を呼んで
人も羨む美しき恋に落ちぬ。
彼は生れぬ先からの織工なりき。

物心覚えてより工場に入り
六時より六時、五時より七時、
織機の前に立ちて
一杼一杼と緯をつむ。

彼は真の技術家にてありき。
経絲の切れし時の外機械を停むる事なし。
彼は
運転中杼を替え得る程に
然く熟練せり。
彼が機台の前に立つとき
不思議と経さえ切れず。

彼は今齢三十五。
長年の細き絲を繰れると
運転中の機械を見守れるとに
視力乱され物定かに見えず。

彼は明を失いてより
保繕工として優れたる技能を表わせり。
眼は見えずとも
彼は
耳で聴きわけ、手で探り当て
機械の保繕に妙を得たり。

彼に見出されぬ故障はあらざりき。
彼に繕われぬ機台は曽てあらざりき。

彼は読む事能わず、書く事能わず。
議論する事は尚更好まず。
彼は無智な労働者よ。何も知らず。
されど彼は知る。
労働者は『力』なる事を。
如何なる強敵をも引き倒さねば止まぬ
『力』なる事を。

彼は『力』なる労働者の一人なり。
真に
彼は幾度か罷工の主謀者たりき。
勇敢なる戦闘者なりき。
都に来りては闘い田舎に隠れてはたくらみ
幾度も
よく戦いよく勝てり又よく破れたり。

過ぐる日の帝都なる
紡織界に於ける総同盟罷工に破れてより
職を失いてさすらいの途に上る
企業家は挙って彼を恐れ彼を忌む。
官憲は到る処に彼を追害す。

彼は今職に就く事能わず。
都にも将た田舎にも。

技術者、彼、『力』なる労働者、彼、
両手をポケットに突込みし儘、
街々をさまよい歩く。
何を索めてや、何を訪ねてや。

須賀爺

須賀爺の面の憎さよ。
あの
額に寄する残忍の皺よ。
冷酷のまなざしよ。
憎らしき窪よ頬っぺたの穴よ。

須賀爺の面の憎くさよ。
今日も赤緯絲をたぐりしと叱りし。
解雇するぞとおどかせし。
そんなに叱るなよ。罵しるなよ。
おれは慣れないのだ。
機台の前に立つさえ怖いのだ。
あの杼の音筬打つ音にも驚くのだよ。

須賀爺の面の憎くさよ
おれのみが憎むのではない。
みんなだ。
時計が十二時を打っても機械が止まっても
汽笛の鳴らぬ間は
飯食いにやらぬと出口に立ち塞がる。
あの面の憎くさよ。

血!

血よ血よ
我は慾りす真紅の血
ほの温きなまぐさき血を

血なり血なり
赤き色赤き水なんするものぞ
血が一切を解決す。

叫ぶともわめくとも
血を見ねば　血を恐れては
終に空虚よ。

『どん底で歌う』II

伊藤公敬

日は照れり

弱き者あくまで弱く、
強き者あくまで強し。

弱き者あくまで虐げられ、
強き者あくまで虐たぐ。

真に考うる者なく、
真に省る者もなく
真に叫ぶ者なし。

日は照れり
われ等が解放のあかつきの
よろこびの如く
はた、われ等が熱情の燃ゆるが如く
自由の大空に

日は照れり。

空腹

砂ほこり捲き立つ中に、
わきめもふらず、一日働きたる後の空腹
矢来際の、南京蕎麦の暖きにおいはすれど
鉄弓に、大福の桃色うまげなれど、
さて、その一つをだに買うによしなし。

ふところ手のさもしき己れの姿、
河岸添いの通りを眺むれば
船渠の職工の帰りゆくひと群
さては、笑いさんざめく女事務員の袴の群
終業の汽笛のひびきおちこちにすれど
われいまだ帰るあたわず。

さびしきはいずこもおなじゆうぐれ
おお方の人ら帰りて、馬の嘶も聴えず、
仲仕らの地を掻く熊手の音のみ高く
航路標識所の灯台はかがやきそめぬ。

妻に破棄されたる詩の続篇

そう子供を泣かすな、妻よ、
おとなしきこの子供を、
ぐっしょりと濡れたる襁褓のつめたく、
子供の股の赤くただれたるを、妻よ、そなたはよく知れるにあらずや、
さばさばと、乾きたるむつきは炬燵にあたたまれるに、
妻よ、そなたはわれに愛なきが如く、
あわれなるこの子にもまた愛なきか。
労働はつらし、危うし、ことに波止場仕事の危うさよ！
ひねもす、雪の中に働き疲れて家に帰れば
朝飯の茶碗はそのままに、
いまだ洗いもせず流しにころがり
ゆうべより箒を入れざる座敷には塵うず高し。

足は赤く腫れ上りて痛痒く、つめたく、
いっときも早く洗いてくつろがんとおもえども、
炬燵より蛍火の如き火種を掻きさがして
しかして、火をおこさざれば洗足の湯もなし。

落ちつけば、寒さと空腹は堪え難し、

いまにしてようよう朝なすべき仕事に妻はかかり、
ややしばし、まてども食事のけはいさらになし、
『妻よ、妻よ、そう子供を泣かすなよ』

少しあたたまらんと炬燵に入りて莨（たばこ）に火をつくれば、
泣ける子をわれに与えて妻はいずこかへ出でゆけり、
涙にて顔にひびせん子のあわれさに、小唄など歌いて見
　たれど、
いつか泣きやめばこそ、ややぬくもりし身のいとしけれ
ど、
子を抱きて月の夜の雪の街路に出でにけれ。

右ひだりうたいあるけば、
わが腕を揺籠とこそ、すやすやと眠るいとしさ、
路の上の雪踏みにじり、
いまこそと、いきどおれどもせんなく、
ああ涙子の面にこおりて落つる。

群衆の中に

萩原恭次郎

群衆の中に一人ぼつねん立っている
其は立ちん坊より淋しい心である
樹の実が樹に在るような静謐さにて
満たせない心は群衆の中に目をつむっている！

私のふところには
白紙一枚ないけれ共
飢餓から来る脅迫！
失業から来る白銀の冷嘲
そは口火つけられしダイナモの如きものしずかに燃えゆ
き
しずかに笑いは真の怒りに変る！

ああ　かすかにも遠く爆音をきく時に
われらの目はかっと見開かる！

ラスコーリニコフ

殺到した群集！

闇の底に泥靴は鳴った！

●●二階へ！

――道路は争議団の

職工の手と旗が渦まいている！

ピストルの発射があった！

扉の

内部では

ドヲッ！

CCCCCCCCCC――群衆の叫号！

ボギー列車は巨大な胴体をもって中央停車場へ走った！

●赤

●灯

不安なレール――音響！

【窓】――窓●窓●窓●窓

●●●●●●●●●●

窓●

●窓

●窓

鉛貨よりも青っ白い空気●●流動する空気

戦慄する動脈

突走する血液

●斧！

VAG WNG

●●●●●●●●●●●●●Eiiiii ――― EEii

Eiiiii～～～～CEiiii

Eii●●●●

ド・ド・ド・ド・ド・●●

●首

RRRRRRRR

開いた手！ VVVVVV

足！●●露出された蒼黒い臓腑

――壁へ！

――戸棚へ！

――天上へ跳ね上った血液

――脳

EiiiiiiiiiiVAG. WNG●●●AA！ ア！ ワー

●●●●●●●●●●

●●●断崖
　梯子段
　の急速なる破滅！
血をふくんで蒼ざめた恐怖！
〰〰〰〰刑事課の自動車は走った！

ア！
　ア！
　●
　　ア！

ウワハ！

剱付鉄砲の兵士
駆け出した警官
●●ベルの音響
崩れる群集――自動車、自動車、自動車
十字街の時計は
〰〰〰〰赤い指針で一時二十七分！

BWO　BVVDC

群集●群集●群集●群集●群集…群集●●●●

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

争議の翌日

賀川豊彦

雨ふる日
さみだれの
小溝の流
渦巻きし
濁れる水に
小笹おち
吸われるように
流され行くを
じっと　眺めいる
自分の心
激動の心
同盟罷工の翌日――
何とはなしに
涙ぐまるるよ
おお　小笹の運命よ
小笹の運命よ、

（近江八幡にて大電争議の翌日）

選挙の後

悲しき日よ
街に出て
号外くばりに
会ったばかりに
凡ての努力が
無効であると知った——

今井博士が
落ちた——
声を嗄らして
叫んだ幾十日
凡てそれが
無効であったのだ——

貧民と
労働者は
救われない！

乾き切った
貧民窟の街路に
無意味に下駄が鳴るよ——
私は大阪を呪う
日本を……

大阪に
煙はあがっても
自由は
あがらない！

ああ暗い
日本は暗い！

大阪の煙は
無意味に立ちのぼる

浴泉の恋

——「戦争の追憶」のうちより——

白鳥省吾

広野のなかを私達のゆく柳並木が春雨に煙って

町から町へ燕のように軽い憧れの
少年の旅であった、
その路を走る鉄道馬車のどれにも
満州の野から送られた傷病兵が
白い帽子に赤十字の印しで一杯に乗っていた。

ああ彼等は砲火と悪疫とあらゆる惨苦とから解放されて
程遠からぬ温泉村に急ぐのであった
そこは山ふところで水の流れ美しく
七つの湯のあるユートピアだ。

私は聴いた
それらの若い兵士達が
後に村の処女や浴みする人妻と
数限りないいろいろの恋のあったことを……
ああ思っても見給え
戦争に荒さみきった傷き疲れた肉体と霊魂とが
優しい自然と人間の微笑に囲まれて
おのずから温められ柔らげられたことを
そして埋れた真と美とを取りかえして
人間の原始にたち帰り
花の咲くように恋ごころの目ざめたことを。

おお私は一切の非難を許して
あの美しい風景を舞台としての
埋れた数限りない恋物語を一つ一つ聴きたく思う
人間の永遠を優しい涙をもって思い浮べる。

一月

百田宗治

荒涼として凍りついた平原に
私は或る呼び交す声を聞く……

長い余韻を引いて、
それは氷と色褪せた枯草の背から
暁の遠い雛声のように響いて来る。

——何処にか私は流れ出す水の音を聞く、
呟きに似た生れ出る声を……
然し野は寂莫（じゃくまく）と氷に充されている、
下し風が吹き捲くる、
万物はその下に死果てている。

一人の年取った農夫が歩いている。

耳傾け、歩調を鈍めて
凍風のなかに何事か
耳澄ましている。

荒涼として凍りついた平原に
私は或る呼び交す声を聞く。——

エロシェンコに送る

加藤一夫

エロシェンコ君　愛するエロシェンコ君
もう君は浦塩に著いたろうか
兇暴な悪魔の爪が　思いがけもなく君を掴んで
暗く　冷たい　留置場にかっさらって行ってから
そして　そこで
鋭い爪で　君の肉を傷つけ　君のしいたる眼をこねあけ
尖鋭なる君の霊魂を　かきむしり出してから
ああもう幾許の日が経ち　夜が逝ったろう
あの日　乱暴な悪鬼どもが君の寓居を襲った日
君は僕の家に訪ねて来た
僕の家の縁側に腰かけて　僕の家人達と無邪気な世間話
をして帰って行った
その後へ　僕は小田原から帰って来たのだ
「さっきエロシェンコさんがいらっしゃいました」
「ああそうか　それは残念だった」
僕達はこんな話をした
そしてその後で　その夜の八時頃に
新聞の夕刊が君の追放を報じたのだ
ああ僕は　僕の妻は　どんなに驚いた事だろう
僕のところから帰ると　君は直ぐにやられたのだ
鬼どもがどんな乱暴な事をしようとも　僕は何も云うまい
それは彼等としてあたりまえの事なのだ
僕はただ　君の驚愕と悲痛とを思う
ただそれを思う　それを思う

あの夜僕は　君を見に行こうかと思ったが
折悪しく来客があった　加うるに
夕刊は簡単に　君がつれて行かれた事を報じて居た
僕はやめた　そしてもう　行っても無駄な事を知った
僕等のような不逞漢には　絶対に会わさないと云う事を
知った
僕はただ　想像で君の苦痛をわかった
初めて君が　僕の家にやって来た時

僕等は豚鍋をつついて食った
やがてニヒリストの辻が来て
僕等はビールを飲んだ
君は殆んど飲まなかった
その頃の君は　宗教的な詩人だった
如何にもロシア人らしい敬虔な詩人だった
僕等は君の信仰を打ちこわそうとした
君がとっつかれて居る幽霊を退治しようとした
僕はあとで　あの時の僕の議論があまりに無慈悲であった事を悟った
暫らくの間　僕の頭はあの時の事を悔いる心で一ぱいだった
今もその時の事を思うと　僕の胸は痛む
故国を失って漂浪の旅にある君だ
僅かに思想と芸術と信仰とで　その友を求めて居た君だ
それだのに　それだのに
僕の言葉は余りに峻烈であった
だが君よ　僕は今はじめて君に打ち明ける
僕はあの時　君を軽んずる気は毫もなかった
いや　僕の霊は君に対する愛と敬とで一ぱいであった
清水のように澄みわたった
君の至醇な霊に
女のように柔さしい美しい声に
民族的感情や　個人的障壁から自由にされた
誰とでも直きに抱擁し誰にでも直きに融合しそうな
そのわだかまりのない君の心情に——
君は飽くまでもロシア人であった
それで居て君は
生れながらのコスモポリタンだった
それから後　君の思想はだんだんと変って行った
君は君の友を　日本の青年のうちにも見出した　而も多くは
革命の炎に燃ゆる熱情の子の間に
君を愛し　君を尊敬し　君に親しむ僕の心は変らなかった
いや、一層に深くなりまさって行った
君が僕の友人の一人であると云う事が
僕の心のうちの一つの宝だった
だが　君はもう居ない
永遠に君は　再び日本の土を踏まないだろう
さて　君はもう浦塩に著いたろうか
船の中の監禁は何うだったたろうか？
でも　兎に角無事だったろうか？
そして浦塩では？
そこで君は　無事で居るだろうか　無事で

ああ君よ　われわれ日本の友はみな
君の無事を祈って居る事を覚えて居て呉れ

ああワシリイ・エロシェンコ
君に一つの贈物がある
小さな心の贈物だ
君が追放命令を受けた事を知った時
君が乱暴な鬼どもにかっさらわれた事を知った時
田舎に居る僕の読者の一人が
彼は貧しい労働者らしい――僕もまだ彼には会わないのだ

その僕の未見の友が
苦しい労働の報酬のうちから
一円の金を節約して
日本を去る君の旅費のうちの一部にと
僕を通して君に贈って来たのだ
この時　君はもう　敦賀の港を立って居た

そこで　この金は
彼からの註文もあったので
君もその一員であった革命運動の資金に加えた
君にはただ　彼の心を贈る
君よ　君には此の　労働者の微意が
何を語るかがわかる筈だ

せめても君が　悲痛な心を慰めて呉れ
（一九二一・六・一八日）

『種蒔く人』創刊号の詩　八篇

炎の海

福田正夫

炎の海より、
湧き立つ熱き潮。

騒乱の都会の
呻吟の声がきこえる。

熱苦の人々よ、
ああ、虐げられる生活よ。

胸に唯涼風の海を、
うかべても炎が見える。

涙の如き汗を浮べて、
都会は炎の海となる。

深淵

深淵の中から
私は大空を見出でる。

暗い暗い星の夜の、
高く明るい月と、
輝くいちめんの輝き。

大空よ、
私の胸も暗い、
しかし異常の高さに、
生きようともがいて、
生の一点へ、
私の心は憧憬(あこが)れる。

低風の街から

空は深く黒く、
あらしの脚は早く、
都会の上を蔽う。

低風が暑く来た、
眠っている者すら、
いらだたしく眼を見はって、
あらしの中に、
同化しそうになる。

雨か、風か、
それらの険しい風光が、
しずかにしずかに、
低風の街をつつんでいる。

種蒔き車(民謡)

種蒔き車を
引き出して、
黒種、赤種、ふり散らせ。

胸の中から
泌み出した、
悩みは苦の種、生の種、
辛い、この生の
血のしずく。

生えろ、血の種、赤い種、
燃えろ、苦の種、黒い種。

街には暑い日が燃える、
胸には真赤な血がうめく。

白鳥省吾

爛れた眼

おお地の癌たる
炭坑の上、
秋の日の空は
あまりに青く
あまりに快き魔睡のいろ。
丘に立つ巨大なる数本の煙突の黒煙も
ただ鮮やかに
照る空を流れ
平地を尋ね這う炭坑町は
徒らに瘡蓋のごとく錆びて
もの静かな昼。

坑内を出て来たばかりの十六七の少女が
低くむさぐるしき長屋の前に立っている、
無心であるか深き疲れか
湿っぽい黒木綿の坑内着を短く着て
石炭の粉に汚ごれた四肢と顔も露わに
その眼の縁は赤く爛れている。

おお美しく清らかであるべき少女の眼も
その魂もその肉体の各部分も
ひどく傷められていることが判る
(坑内で働く人は眼を悪くするというその地下なる数千の
男女の一人よ)
おお不運に選ばれた此等の人々に
世の誰が共同の責任を感ずるであろう。

人生は流れゆく
爛れたる少女の眼にその姿に
秋の日はあまりに明るく痛ましい、
おお事実こそ限りなき哀訴であるが
炭坑町そのものすら
いかにも他所他所しげに静かである。

刄に刺されて

松本淳三

たえがたい　痛み
おお…………………
心がまける　心が弱る

（……やられたなあ！）

渇いた口に
のみこむ唾
そっと開いた
——眼にかすむ夜空の星

（ああ……やられたなあ）

…………………
かすかにかすかにかすかに兇徒の歓声

血を越えてゆく

われら　血を越えてゆく
はらからが流したる
くろき血をぞ　越えて尚ゆく

おそろしき権力は
ゆくてをふさぎ
するどき刃は
たえず頭上にひらめけども

あらしの如く
泉のごとく
石をおしわけ　春　芽をふく草の
力に似て
彼岸を遠く
たのみ且つ信じ

ああ　われら血を越え
たゆまずゆく
はらからに続き　また
はらからを後に率いて——

月を仰いで

落ちてくれ
遠い　地平の
冬の月よ！
私はお前の微笑が嫌いだ
皮肉そうな光が嫌いだ
そして如何にも悲哀を含んだ
そのわざとらしい吐息がきらいだ

お前の光で
あのがらんとした寄宿舎の窓に
ついだまされる工女は夜通し
遠い母親のことを思い出し
お前の吐息で
あの人のいい老ぼれた立ん坊は
公園のかたいベンチに
しみじみ寒さと　切ない空腹を骨に感じる！

——が
お前は暖かな倶楽部の二階で
カルタをいじり　酒を呑んでる

華族の若い道楽息子の
きゃしゃな手先に
（しぼったカーテンの窓を透して）
また、小鳥のような女優と一緒に
やわらかい自動車の坐席にうずもれ
今！　あかるい街路を馳走してゆく
男のつややかな横顔に
たえず微笑を惜しまないのに
ああ——明日を待つ
死刑囚の涙と祈り……ざんげの小窓に
お前はつめたい微笑(えみ)をもたらす！

思え！
（ここに二つの——得意と絶望
　また幸福と不仕合せ
　それらが同時に　地上にあって当然だろうか？
　それが神の意志(こころ)であろうか？……）
遠い地平の
冬の月よ！
皮肉な微笑、つめたい吐息の
あの石灰のかたまりよ！

おちてくれ
一刻も早くおちてくれ

私はお前を見るのも嫌いだ
否！私はお前を呪って居るのだ！

戦争はよくない

武者小路実篤

俺は殺されることが
嫌いだから
人殺しに反対する、
従って戦争に反対する、
自分の殺されることの
好きな人間、
自分の愛するものの
殺されることのすきな人間、
かかる人間のみ戦争を
讃美することが出来る、
その他の人間は
戦争に反対する。
他人は殺されてもいいと云う人間は
自分は殺されてもいいと云う人間だ、
人間が人間を殺していいと云うことは
決してあり得ない。
だから自分は戦争に反対する。
戦争はよくないものだ。
このことを本当に知らないものよ、
お前は戦争で
殺されることを
甘受出来るか。
想像力のよわいものよ。
戦争はよしなくならないものにせよ、
俺は戦争に反対する。
戦争をよきものとは断じて思うことは出来ない。

（二一・一・一〇、三一）

杜鵑

木下杢太郎

その頃われは漸く生活の不安に目を瞠りつ。わが日々の順俗の営みに憤懣の情を発しつ。かたえには昔の唄耳に悲しきシテエルの島を瞻てはあれども、生活の改造の要求はわが心を鞭ちたりき。

青き夜は、窓越しに、静かに
卓布の角にさした。牡丹花
音なく落ち、杯の緑酒、微に光れる時
室の一隅の黒衣の人の群は
もはや胡散くさき偸視をもやめ
声は段々に高まる……
Syndicarisme……
革命……実行の前の考察……
一度は血だ……

牡丹花、五月朔日、
湿りたる梧桐に揺るる雨後の月光は
たった今聴いたばかりの投節の、こころ忍ばせ、
眼をつぶり、しめやかに
歌うたう老女の姿……ふと見ゆ……
昔の世……長き橋……岸辺の柳……

青き夜の薄荷酒
いや更に澄みゆくを……　牡丹花、
またも散り……
一度は血だ……

自由思想……理性の闘争……
人々の声あららかに、且つ鳴らす麦酒の杯。

薄荷酒、また牡丹花、
すさみゆくわが心……　青葉の空に
啼きすぐるほととぎす。

先駆者

中山啓

この瞬間世界は
尊い持物の一つを
失おうとしているのだ
革命をバイロンの熱で叫び出し
ホーマの調で
勝鬨をあげようとした君が
あわれ囚われとなって
虐政者の鉞の下に坐っている

君の晴れた瞳も華かな笑声も
もう再び俺達の手に
帰って来ないのだ
地を離れて——遥かに遥かに

あの蒼穹の彼方へ距りゆくのだ
歎いても泣いても
魂は再び帰って来ないのだ！

昔から幾千の思想家が磔にせられ
幾万の改革者が烙き殺されたことか
そしてその血潮が
深く溢れて湖とよどみ
堤の切れるしばし前の
凄い沈静を保っている――

ああ世界は
偉大な生殖をなさんがために
惨ましい陣痛をなめている――
虐政者は自分が溺れる
湖の血を増さんがために
尊い反抗者を殺そうとしているのだ
馬鹿な悲劇だ――

見ておれ
もうしばらくすれば堤が切れる
そして血潮が洪水を起して
燐火を燃やしつつ
怨霊の叫喚と共に圧制者に押しよせる

もう遅い！　逃れようとても
溺れかかる虐政家の手足に
べっとりと血が粘り
殺された者の毛髪が藻のように絡みつく

振りあげた鉞の下に
あの世の扉が開く
中は咲き乱れた花園――
恍惚の楽が満ちている

君よ
安らかにその扉を押して
静かな世界に入りたまえ
天上から不思議な韻律が響いて来る
――そしてそれが
群衆の哀愁と縺れて
君の死を讃美しているようだ

鉞が光った
僕は静かに黙禱しよう――

雪の線路を歩いて

後藤謙太郎

貧しさの為に俺は歩けり
ひとすじの道　雪の線路を俺は歩けり
貧しさの為に歩ける俺には
火を吐きて　煙を挙げて
罵る如く　汽笛を鳴らして
走りゆくあの汽車が憎し
文明の利器なれども俺には憎し
ひもじさの為に疲れて歩ける俺には
それ食えがしに汽車の窓より
殻の弁当を投げつくる人の心が憎し

とりわけて今　村を追われて歩ける俺には
スチームに温められて
安らかに旅する人の心はなお憎し
われ等が汗にてなりし
秋の収穫を取り去る代りに
彼の怖ろしき文明の病毒を運び来る

あの汽車は
毒蛇のごとくたまらなく憎し

毒蛇のごとくたまらなく憎きはあの汽車
野獣の呪いのごとく　夜も日も唸りて
若き男女の幾群を
ああ痛ましき都会の工場に送り出す
たまらなく憎きはあの汽車

（五行伏字）
貧しさの為に歩ける俺には
村を追われて歩ける俺には
ひとすじの道　雪の線路を歩ける俺には
文明の利器なれどもたまらなく憎し

真鍮粉、その他

松倉米吉

わが握る槌の柄減りて光りけり職工やめんといくたび思いし

鑢(やすり)する吾が手の下に真鍮粉は光りきらめき散りたまりけり

みっしりと働くべく職を求めしにはからずも吾に病いありけり

冬の日は工場の窓にあたたかし懶(なま)くる心みじんあらなく

夜仕事をひとり休みて出でにけり夕べの街はいまだ明るし

工場の夕食ののちのさびしきに弁当箱の錆おとしつつ

昼休みになればおのずと火を囲めどいまだ親しまぬ吾等なりけり

裏街の朝のたゆけく軒かげに羅宇屋はひとり火をおこしおり

くだちゆく夜しみじみと母上があかぎれに塗る薬は匂う

冬の日の傾きかかる街なかにつくづく歩き疲れたりけり
（職を求めに出て）

夕さりて広場の駅に灯は点り堤の汽車は街に入りにけり

今日の身のひもじさこらえ忘られず図書館に居て汗ぬぐうかも

図書館のかんかんと昼の明るさに人々は皆腹たらいて居けん

此の職にたけて帰るはいつならん夕べさびしく汗の冷えつる

残り居てひとり道具をかたづける窓辺あかるく夕やけにけり

轆轤(ろくろ)ふむ手先ははやも暮れかかりうち焦ちつつ独りさび

しも

今は言（こと）かよわぬ母よこの月の給料（かね）は得て来て吾は持てるを（母は死に給う）

しげしげと医師にこの顔見すえられつつわが貧しさを明しけるかも

仕事やや手には馴れたりまんま昼街のどこかに油蟬なく

かなしもよともに死なめと言いてよる妹（いも）にかそかに白粉におう

浪吉は吾の体を警察にすがらむと行きぬなぜに自ら命を断ちえぬ

（一九二〇年刊『松倉米吉歌集』より）

土岐善麿

その他

せめてわが自由になるものを自由にせん、自由になるものの二つ三つを。

火を放て火をはなてとし、まっさきにたいまつを振るこころよろしさ。（群集心理、以下三首とも）

行けゆけとひとり叫べば、闇大路おなじき方へみな行きはしる。

砕けしはがらすにかあらん、群集のかくて慰むるこころは悲し。

何を今求むとならず、ただ遂にものに倦みたる怖しさなれ。

うち連れていでし散歩のそのままに遂にかえらず悼むすべなし（震災時の作「友の惨死」、次の一首も同じ）

うしろより声をもかけず殺したるその卑怯さを語りつぐべし

（一九一八年『緑の地平』その他より）

西村陽吉

身辺触目

言わねばならぬ言葉の強さ！
そをはじめて知りたる、
「パンの略取」かな。

ときおりに「日本」という言葉がある、
その日本に
生れし我かな。

働かねばならず、
働けばいそがわし、
憤ろしく仕事を見入る。

茫として、
機械のごとくこの身ひとつが、
次から次えと廻れり、忙しさ。

四五人の女工が隅にかたまりて、
弁当食いぬ、
昼の工場。

わが前に、まじめに語るつつましき、
若き職工を
哀しみにけり。

ほっとして、門を出でたる
心かなし、
そこの工場はまだ仕事をやめず。

（一九一六年七月刊行、歌集「都市居住者」より）

三谷敬六

労働者の群より

このあした起たんとすれば生活の重きかなしみこうべを圧す

とのぐもり貧民窟の電線のゆさゆさゆれて地震ゆりにけり

かの友が肺の病いにかかりたる借間などおもう雨暗き日は

寝足らざるあたま狂わんとす石ころのうえにても暫し横たわらしめ

ごろごろところがるトロのおとこそは悲しかりけり赤き入日に

ねがえりをうつほんのわずかの眼覚めにも思わるるなり苦しき生活

ばたんと鉄の扉とざす造兵の窓にうつれる冬の落日

（雑誌「詩歌」一九一七年七月号）

我が働ける砲兵工廠にて歌う

広田健次

鍛鉄の火花ぞはしる真っ陽なか夾竹桃はあけを傾く

唯ひとつ油庫の戸口の坩堝より白きあさがお陽にし照らえる

入陽赤し真裸男かたまりて叫びあらがう風呂場の戸口

ともすれば我が眼をうばいしらべ革暗みにくらく波うちながら

よごれ疲れ皆ひそとして仕事すや窓ゆ流るる秋陽がなかに

入陽満つ窓かけの下にうずくまり家畜の如く哀しこころは

つかれては驚きもなししらべ革風切るかたえ眠りよろめき

真陽照らす鋳鉄のなか青錆にまみれし男かがまりいるも

（同上、一九一八年十月号）

工場の歌

佐柳破葉

工場の壁にひっそり職工の浅黄の服の干されたる見ゆ

しばらくの昼のやすみを職工は工場の壁にひなたぼこする

汗まみれのほてりし顔を水道によせて水のみ女工よあわれ

日に一度工場をいでてひなたぼこするということがただ

にうれしく

（同上）

激せし心

花田世大

百姓のあわれさよ、みじめさよ、
くらげの如く
うごめきて生く。

「労働者ではないか、しっかりしろ」
と言い、友の肩をば
打ちて涙す。

老いてなお鍬をとるときわれよりも
熱心をもつ
尊き母よ。

ね小便、どもりの薬、こんなものを
売っても、生きて
ゆけるかと思う。

小学校を卒えたる日より
荷馬車挽の父をたすけて
今に到れり。

百姓は百姓の食うものがあると
言われて、くわっと
激せしこころ。

かなしみは別にありけり、
ボロを着て働くことは
かなしみならず。

過激なることを口にして
さびしくも
身より焔ののぼるが如し。

金属と身の温りをとりやりする――
活字ひろいの
雪の夜仕事。

「労働団」というようなものを組織して
われら農夫の
為すことあらん。

（一九一九年九月刊行、歌集「是々非々」より）

伊藤公敬

波止場人足

汗のシャツ脱げば
背中に鉄錆が、こびりついてる
労働ののち。

ポケットの、燐寸も汗にぬれそぼち
一本の煙草
吸うによしなし。

たくましき労働者、われも
ふりかざす、手鈎のひかる
波止場のまひる。

群がれる、波止場稼ぎの
ボロ服が、
船ぞ見ゆると、どよめく夕べ。

「吾等が日！
五月一日」この国のおきては
赤き旗を禁ぜり。（吾等の日）

ロシアの、
流浪の民もいならびて
バンザイを叫ぶ、泣きたくなれり。（戦捷祝賀）

ロシアには革命起る。
春の雨
日本の山は青みたるかも。（露国革命）

赤き旗、高くかかげしいく万の
民衆ぞ見ゆ、
ペトログラード。（同）

（一九二〇年五月刊行、歌集「どん底で歌う」より）

西川百子

無産者

粥に水を増せば足らんという如き温情主義に唖して来よ
一人の叫ぶものなし、同盟罷工（ストライキ）の止まんとする夜、蒸々（むし）

と暑し。（二首、温情主義者へ）

月謝滞納、貧しき者を除名する学校の掲示眺むるも秋

富豪の子の外ここに入るなかれ、資産階級（キャピタリスト）の大学の門

（二首、大学の門を潜りて）

むっつりと来てペンを執りむっつりと去る時我の低き靴音

数知らず他人（ひと）の自殺の記事書きしわが死ぬ時のいかにかあらん

烈しく、叱らんとして口をつぐめり、薄給に骨立ちし顔

（三首、生活）

物凄き声にてありき、闇黒（くらやみ）の街をゆすりし群集の叫び

またしても群集の前に迫りたるわが軍隊の由々しさ思う

じりじりと陛下の赤子肺を病む如く痩せたり、成金の前に（三首、米暴動を憶う）

（一九二〇年二月刊行、歌集「無産者」より）

女工の歌

里井柳枝

町へ行けば女工女工とうしろ指ささるるもつらし我も人の子

汽笛なる皆われがちに食堂へ三分間にひるげかきこむ

ストライキはいるもつらしはいらねば仲間はずれにさるる苦しさ

行李より貯金の通帳とり出し帰る日思いひとりほほえむ

部長室のむつかし顔見るがつらし頭痛をしのび工場へ行くも

（雑誌「心の花」一九二二年二月号）

石川島造船所にて

高野藤太郎

夕されば油の匂い機械の音つかれはてたる心に悲し

昼休み若き女工は工場の空地につどい石けりをする

或時はのろい或いはうとみたる工場かせぎもややなれにけり

石炭をかつぐ人夫と我が妻にうちあけたれば涙ぐみたり

今日も亦人夫殺しの雨しとど晴れ間も見せず降りつづくなり

（同上、七月号）

『現代国語歌選』より

後藤史郎

カアンカアンと造船所の槌の音が下田の港にひびき渡る冬

バカボンド！　思うだけでも血が躍るたった一人の母さえなけりゃ

森田草一

久しぶりに出会った友はなつかしさの消えないうちに金借せという

伊藤公敬

明日というたよりない日をたのしみに夢おおい子は世に生きている

さびしさのやり場に困りたずねゆくおなじ心の友達の家

徳田英夫

金がなければ生きられぬ世が呪わしい働かねば生きられぬ世が早く来い

俺達が汗水たらして作った米を寝ていて食う奴遊んでい

て食う奴

秋田 としみつ

親もある、妻もある、この恐ろしいくわだてがじっとく
じける夜辺

（一九二二年刊『現代国語歌選』より）

宮林菫哉

戦うなど迷惑なことなり雲雀

どうのさばっても知れたものをのさばりたがる暑し

秋晴るる人に歯車まわるのみ

反逆のこころ腐ちゆき草萌ゆる

赤き日のそれ押せやれ押せ麦摺機

すっ裸になれぬみじめな人なるかな

貧乏もだんだんと焚火しているよ

南無食わにゃおれぬと焚火しているよ

年貢おさめて薬礼だけ儲かりしかな

春日照りこぼるる労働者の布団（以上句集「冬の土」より）

冬田沿革吾れまでに幾人を経ぬ

水仙の匂う世の何わが所有

水仙の平和に汝が目さましたり

杉売りしにも税の世やかげろえり

吹くは北風正直ゆえの重罪なるかな

よくよくながらの小作に何というすげなさぞ

地主の番頭の目なしをにくみうらみ

まけて貰えぬ不作を妻となげいて小作

小作は不運なこととして不作の俵あみ

大きなこえもたて得ない小作のくらし

年貢おさめに来てくれるお客さまぞ

冬至鴉なかいでなろかなきにけり

てまえんとこ何故餅つかないか知ってる

いくさの形見のさくらは咲きまま子なるかな
汗まるけの職工達に風よ吹け
扇つかい行くきょうは休みの職工よ
炎天とめどころなし監督がなんだ
青すだれ食うにこまらぬ人らかも
西瓜そまつなくいようの都市居住者か
ちから草植に出て女工昇給す
職工また一人冷え腹にて休み
秋の夜の親も旋盤工にて
やなぎ散るくそやけの職工二人
霜月のあいつもこいつも人である
冬の夜のみんな近う寄ってくれ
鉄砲かたげて化けて来た蛙です
行った思って見やあせと慰問袋に凝ります

（以上、句集「薊」より）

罷業の朝

山上正義

罷業の朝をなつくわが子なればしみじみと抱く
罷業あけての朝暾（あさひ）つめたく植字盤の埃
解放されこの広場は夕の雪となりけり
鉄窓の君に書けば月のひた冴ゆるよ
夜業雨に更（ふ）くるを炉火凝視（みつ）めて黙（もだ）す親子なり

（『種蒔く人』創刊号）

解説

小田切秀雄

第二次大戦後になってはじめて発表されえた石川啄木の『呼子と口笛』序詩は、明治四三―四年の大逆事件いらいの大弾圧による社会主義運動「冬の時代」の凍結のなかで、日本の若い革命的インテリゲンチャの情熱と苦悩とを、日本近代文学史にその類の少い性質の美しさでうたっている。啄木は天皇制検閲を考慮して『呼子と口笛』の発表のさいにこれを削ったのであった。

暗き、暗き曠野にも似たる
わが頭脳の中に、
時として、電のほとばしる如く
革命の思想はひらめけども——

あわれ、あわれ
かの壮快なる雷鳴は遂に聞え来らず。

我は知る、
その電(いなずま)に照し出さるる
新しき世界の姿を。
其処にては、物みなそのところを得べし。

されど、そは常に一瞬にして消え去るなり、
しかして、かの壮快なる雷鳴は遂に聞え来らず。

暗き、暗き曠野にも似たる
わが頭脳の中(なか)に、
時として、雷のほとばしる如く
革命の思想はひらめけども——

啄木がこれを書いた明治四四年（一九一一年）七月は、「冬の時代」がはじまって約一年という時であった。大体、大正四年（一九一五年）ごろまで続くこの「冬の時代」については、くわしくは序巻の解説で述べるが、江口渙が『文学的半生記』の第二部（昭和二八年九月号から『新日本文学』で回想しているのを引くと、「幸徳事件から第一次世界大戦がおわるまでの前後およそ十年にまたがる時期は、日本人の思想にとって、文字通りきびしさのかぎりをつくした冬だった。人はこの時代を堅氷の時代ともいい、また、氷河時代ともいう。社会思想に関する本が本屋の店先から、全国的に一掃されただけではない。当時熊本の五高にいた私が、直接この眼で見たところによっても、生徒監が寄宿舎の各室ごと

に点検して歩いて社会主義の本を生徒の本だなからてあたりしだいに没収したし、警察官は五高生の下宿を一けん一けんたずねては、危険思想にかんする本をもっているかどうかをしらべて歩いた。また、高等学校の校友会雑誌のようなものでさえ、発行ごとに二部ずつ内務省に届け出ろといういきびしい達示があり、新しい検閲制度が確立されたのもじつにこのときであった」、というような時代で、熊本のような地方では一層ひどかったにしても、中央でもこの時期には社会主義運動・労働者運動は全く手も足も出ない状態に追いこまれ、幸徳秋水や堺利彦らが大逆事件のときに殺されずにすんだのはかれらがその以前からほかの事件で獄中にいたからに過ぎなかった。荒畑寒村も回想しているように、「大逆事件の結果、従来の社会主義出版物は悉く禁止となり、活動的な同志は全国にわたって獄に投ぜられ、新聞雑誌は発行を許されず、同志の集会言論の自由は悉く奪われ、甚しきは家を逐われ、職業を奪われ、親戚知己との関係を絶たれ、社会主義運動は一時全く跡を絶てるが如き状を呈した」(『日本社会主義運動史』)。そして社会主義的な動向だけでなく、さらに自然主義文学をふくめて近代的・民主主義的な思想と運動との一部は全面的な抑圧のもとにおかれ、「冬」の凍結は時代をおおった。

石川啄木は、このような条件のなかで大逆事件の意味をしっかりと受けとり、革命的な立場にまで進み出たのであった。かれがさまざまな困難をおかしてつくった大逆事件の記録『ウ・ナロード・シリーズ』(序巻に収む)は、この巻におさめた亀戸事件の記録『種蒔き雑記』*や、さらに後年の小林多喜二『一九二八・三・一五』や戦後の松川事件に関する広津和郎・宇野浩二の文章などとともに、日本の文学者がその文学者としての立場からの綿密な調査・記録・証言によって、闇黒の権力にたいする強烈なプロテストに進み出たこと、それは記録文学としてきわめて鮮烈なすぐれたものになりえたこと、そういう伝統が近代いらいの日本文学のなかにあること、これらのことを示している。

だが、「冬の時代」の啄木は『ウ・ナロード・シリーズ』を発表することはできず、前掲の詩でも

革命の思想はひらめけども——
そは常に一瞬にして消え去るなり、としている。しかも、かれはそれを放棄することはできず、もう一度「革命の思想はひらめけども——」とくりかえしてその詩を結んでいるのだ。『はてしなき議論の後』の

……………………

されど、なお、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて
〝V NAROD!〟と叫び出ずるものなし。

という結び方も、それに対応する。そして実際に、「革命の思想」はもはやウ・ナロードの行為と結びつくことができなくなり、堺利彦の回想によれば、「大逆事件の後、私は私自身および周囲の人々の生活の為、売文社という『文章代作』の営業を始めた。売文社はその頃、在京同志が集合する唯一の中心であった。少数の同志は折々売文社に茶話会を開いて居たが、その思想上には何等ハッキリした傾向がなかった。片山氏（片山潜のこと）はこれより先、電車のストライキ事件に関連して六カ月の禁錮に処せられたが、その出獄後は何らの運動をも為し得ざること売文社の連中と同様であった」（『堺利彦全集』第六巻、『日本社会主義運動に於ける無政府主義の役割』）。

啄木はこの時代的・人間的な苦悩を自己の主題とすることにたえた詩人であっただけに、「革命の思想」を実際にナロードに結びつけてゆく具体的方法の創意に進み出、土岐善麿（当時は哀果と号した）をかたらって雑誌『樹木と果実』の創刊を計画した。短歌雑誌という衣裳をまとって「冬」の寒気をしのぎながら、結氷を破ってウ・ナロードの運動に着手しようとしたのである。この計画は啄木の病没のために実現しなかったが、啄木全集の書簡篇の晩年の部分はこの雑誌の計画だけにとどまらず、冬の時代をつきつけてゆくための模索と苦悩と追及とに満ちている。

結氷を破る具体的な仕事に進み出たのは、大杉栄と荒畑寒村とであった。大正元年一〇月に創刊された雑誌『近代思想』がそれである。この雑誌についても、くわしくは序巻の解説で述べるが、堺利彦の次のような叙述はこれの創刊事情をものがたっている。「私の記憶に依れば、当時私は、運動上の事について、暫らく時機を待つより外に方法がないと考え、又そう云っていた。所が、大杉氏、荒畑氏の如き年少気鋭の同志は、『時機を待つ』に堪えず、自ら進んで『時機を作る』べきだと考え、又そう主張した。その主張の実行が即ち月刊雑誌『近代思想』であった。この時機論の中に、無政府主義者大杉氏の唯物史観に対する批評があった」(『日本社会主義運動に於ける無政府主義の役割』)。社会主義者たちは追いつめられた場所で態度決定を迫られ、歴史のひそめている可能性の評価において二つに割れたのである。少数の個人の力ではどうする可能性もないのだからやがて時機が来るまで待とうという堺利彦ら売文社グループと、それに甘んじえずして闘争のエネルギーと創意とによって歴史の可能性をひきだすべく進み出た大杉たち若い世代とのちがいは、唯物史観と無政府主義とのちがいとして片付けられるものではない。宿命論的決定論への傾斜をもった堺の「唯物史観」にたいして、大杉と荒畑の無政府主義は歴史の可能性の評価に関してははるかに革命的であり、かれらのはじめた雑誌は時代の結氷を破る革命的な流れをしだいにひろげ強めていったのであった。この『近代思想』とやがて堺が発行するようになった雑誌『へちまの花』(堺自身の説明によれば、「売文社の営業的機関として、兼ねては文芸的娯楽として、小雑誌『へちまの花』を発行し多少はそこに社会主義的色彩をも示した」)とをくらべるなら、どちらが大きな歴史的・人民的な意義を持っているかは明らかである。堺の場合にはその閲歴からして大杉たち若い世代よりも一層動き出しにくい条件にあったことは事実だが、だからといって「時機を待つ」というかれの態度が本当に唯物史観的なやり方だったということにはならぬ。堺の唯物史観にこういう側面が伴っていたこと、従って革命的な立場はかえって無政府主義者のなかに見出されるにい

たったこと、これが「冬の時代」の実情であった。——この巻におさめた宮島資夫の中篇『坑夫』*をはじめとして、大正期の労働文学のすぐれた作品がまずアナーキズムの影響から生れて来たこと、それらの作品内容そのものもアナーキスティックな色彩を強く示していることは、こうした事情によるものである。

『近代思想』は、後年の無政府主義が絶望的な一揆主義やテロリズムに走ったにたいして、思想・文学の雑誌として出発し慎重な計算によって弾圧の網の目をくぐりながら大正三年九月まで続刊した。雑誌の題名からも知られるように、内面的・自我主義的な形においてではあるがブルジョア民主主義的自由への要求を確認し固執し、これと社会的・人民的な闘争とを結びつけてゆこうとしたものであって、つまり無政府主義として自己を思想的に深化させつつきわめて生き生きとした柔軟な仕方で知識人と労働者との間に革命的なイデオロギー戦線を形成していったのであった。それは具体的には、前記の『樹木と果実』の計画が土岐と西村陽吉とを中心の『生活と芸術』という雑誌（大正二年九月創刊）となって実現したことに現れ、また大杉・荒畑を中心にサンジカリズムの公開的な研究会が毎月開かれるようになったこと、さらに『近代思想』誌上および討論会等によって本間久雄や島村抱月や岩野泡鳴や上司小剣や伊庭孝との交流と相互批判が行われるようになったこと、等に現れている。ことに、この雑誌にのった大杉の評論や荒畑の小説は文学的にすぐれており、佐藤緑葉や荒川義英や山本飼山や安成二郎やの進歩的な作品を次々と発表していったばかりでなく（これらは序巻に収録）、宮島資夫や宮地嘉六やの作家的才能をひきだすことになった点でもきわめて大きな文学的意義をもっている。なお、大正三年九月の廃刊は、大杉たちがさらに進み出て労働運動のための機関として月刊『平民新聞』を刊行するためであったが、これは創刊号から発売禁止の連続でわずか六号でつぶれ、四年一〇月からは『近代思想』再刊という形に戻っている。さすがに時期尚早だったわけだが、右のような性質の『平民新聞』の刊行

を試みるところにまで力を蓄積してきてはいたのである。再刊の『近代思想』は思想・文学の雑誌であるより政治的な主張や批判の多いはげしい雑誌となったため発禁の連続で、四号でつぶれた。大正五年一月であった。

『プロレタリア文学大系』の第一巻はこの大正五年（一九一六年）一月から同一二年（一九二三年）一二月までを範囲とする。作品でいえば、『坑夫』から『種蒔き雑記』までである（『種蒔き雑記』は大正一三年一月二〇日発行であるが、雑誌『種蒔く人』の最後の号に当るのでこの巻に収めた）。文学史的にいえば労働文学・民衆芸術の時期から『種蒔く人』の時期までということになる。従来のプロレタリア文学史観では、日本のプロレタリア文学の歴史は大正一〇年一〇月の東京刊行の『種蒔く人』からはじまり、それ以前はプロレタリア文学の「前史」と見なされていた。このような文学史観が確立したのはナップ時代であってその最も極端な例はナップが一九三〇年（昭和五年）のハリコフ会議に提出した報告『プロレタリア革命作家国際大会に於ける日本プロレタリア文学運動についての報告』（『ナップ』三一年七月号に発表。本大系第五巻に収録）に見ることができる。勝本清一郎と藤森成吉とで書いたこの報告では、共産主義文学のみがプロレタリア文学でそれ以外は真正のプロレタリア文学としてはみとめられぬという立場から、ナップ成立以前の全時代を「前史」のなかに追いこんでいる。さすがにこのような区分の仕方は広く行われはしなかったが、これへの公然たる批判がナップ系からは一度も現れなかったことによっても知られるように、共産主義文学すなわちプロレタリア文学という考え方は、プロレタリア文学運動内においてのナップの勝利いらい一種の固定観念になっており、従って文学史観においても、マルクス主義・共産主義が文学観念と文学運動との方向を規定しはじめた種蒔く人の時期をもって、プロレタリア文学の本史の最初の時期とするという考え方が大体妥当なものとされてきたのであ

る。ハリコフ会議への報告での「潔癖な」規定に歴史的な幅をもたせることによって文学史区分を歴史の現実に適応させようとしたのだ。このような考え方にわたしも長い間従ってきており、戦後まもなく中野重治との共編で刊行しはじめた『プロレタリア文学発達史資料』（八雲書店刊）でもそのような歴史区分を採用した。だが、プロレタリア文学すなわち共産主義文学というナップ時代の見解は、こんにち根本的な再検討が必要であって、ナップによる共産主義文学運動のなしとげたきわめて高い歴史的また芸術的な達成にかかわらず、その文学運動がやがて急激に解体し挫折し全面的に屈折してしまったことの原因の一部は、右のような見解の支配ということにある。プロレタリア文学運動をもっぱら共産主義文学運動として展開しようとしたことは、中国東北（満州）への侵略をはじめた絶対主義権力の新たな弾圧にさいして共産主義文学者とその運動を全く孤立的な抵抗に追いやることになり、組織的な抵抗をいちじるしく困難ならしめた。小林多喜二や宮本顕治や蔵原惟人や西沢隆二（ぬやま・ひろし）等ごく少数の文学者は共産主義者としての自己を貫くことができたが、その圧倒的な大部分は転向し文学運動組織は急激に解体に向ったのである。弾圧が転向を伴うのはしぜんだが、圧倒的な転向が行われ組織そのものが解体し去るということは、たんに個々の人の勇気のあるなしによって説明しうるものではない。個々の人の共産主義者としての勇気のあるなしによって説明が終るなら、そこからは、勇気をもてという教訓か勇気をもたなかった者への倫理的非難しか出て来ない。もちろん、一般に文学は反倫理という形をとった場合さえふくめて倫理と深く相かかわっており、共産主義文学者の場合にとくに倫理的問題は大きな意味をもつが、それだけに転向したプロレタリア文学者たちの苦悩や傷手は深刻だったわけで、倫理的な教訓や非難だけで片づけてしまうにはあまりにも貴重な文学史的体験であった。そしてこのことは、昭和初年の日本の共産主義運動全体にほぼ正確に対応する、運動の展開の仕方においても挫折の理由においても。非転向を貫いた共産主義指導者の数はきわめてわずかであり、昭和九年のプ

ロレタリア文学運動解体のしばらく後には共産党そのものも中央部を失ってしまったのである。
日本のプロレタリア文学運動が挫折した原因のうちの一番基礎的なものは、もっぱら共産主義的プロレタリアートだけの文学運動として自己を規定して、プロレタリアート以外の小市民や農民等の被抑圧諸階級・層のそれぞれの生活的また思想的・文学的な要求と結び合い支え合う代りに、それらをすべてはらいのけて孤立したことにある。天皇制絶対主義のもとでは、農民も小市民もそれぞれに民主的自由と生活の向上とを求めて苦しんでおり、コミンテルンの三二年テーゼになって明確にされたように当時の日本のプロレタリアートの戦略目標はブルジョア民主主義革命ということにならねばならなかった。日本の場合のブルジョアジーの独自な性格と比重からして、それは「社会主義革命への強行的転化の傾向をもつ」という規定を伴ったブルジョア民主主義革命であるが、ブルジョアジーの権力にたいする社会主義革命（プロレタリア革命）とはちがって革命の戦列はプロレタリアートだけでなく被抑圧人民全体の戦列として構成されねばならず、共産主義的プロレタリアートはその全線を前衛として組織し推進せねばならぬ。このことは、プロレタリア文学運動においても同様であって、共産主義文学者は民主主義的自由を求めるすべての被抑圧諸階級・層のさまざまな生活的・文学的要求を支え・引き出し・発展させつつその前衛的部分として活動すべきだったのだ。そしてその文学運動は、人民的革命的文学運動ないし民主主義文学運動として展開されるのが合理的だった。このことは、共産主義文学者が自己の独自性や独自なグループ活動をしてはならぬということを意味しはしない。ちょうどその反対に、自己の独自性と独自なグループ活動を、右のような広汎な文学運動の全面的展開と推進に責任をもつというこ とのなかで実現してゆくべきだったのだ。——ところが、明治以来の小市民的な文壇文学にたいしては、ソヴエトやヨーロッパのプロレタリア文学運動においての観念を移植適用して「ブルジョア文学」と規定してしまうことによって敵にまわしてしまい、農民主義的な農民作家にたいしてもこれを反動的

と規定することによって攻撃を加え、また文戦派（労農芸術家連盟）の作家たちにたいしては、その政治的立場が社会民主主義だという理由によって「裏切者」扱いをし、無政府主義者や自由主義者やヒューマニストにたいしても否定的ないし拒否的な態度が一般的であった。プロレタリア文学運動が革命的なプロレタリアートだけの文学運動になって孤立していったというのはこのことをいうが、現実には、まず明治以来の日本近代文学は、近代的民主主義的な人間の自由を求めた小市民インテリゲンチャが、絶対主義体制の重圧のためにやむなく自己封鎖的な文壇文学を形成し、そのなかで自己の人間的自由への要求を屈折した仕方で充足させようとしたのであって、「ブルジョア文学」として全般に敵にまわすべき筋合いのものではなかったし、また社会民主主義や無政府主義の立場に立つ文学者にたいしても、かれが労働者と人民との生活とその要求に密着して文学上の仕事を進めていた限りではこれを正当に評価し支え合うことが必要であり、政治的な立場の相違は相違として処理しつつ提携を進めることが必要であって全般に敵とすべきものではなかった。このことは、必ずしも共産主義や社会民主主義のように明確な政治的立場をとらぬ人民的な作家、ないし労働者作家にたいする態度についても同様である。このようにプロレタリア文学運動は、敵にまわしてはならぬものまでをすべて敵にまわした。ごく少数のいわゆる「同伴者作家」にたいしてさえ宮本顕治の『同伴者作家』（一九三一年の『思想』に発表。河出書房版『現代文学論大系』の第四巻『プロレタリア文学』篇に収む）などがやや慎重な態度を示していただけで、一般的にはきわめて便宜的な見下した態度をとっていた。

こうした誤りは、文学運動が挫折しはじめてから事実によって証明されはじめた。挫折する以前にもたとえば横光利一はプロレタリア文学のがわからはつねにブルジョア作家として攻撃されながら、実はプロレタリア作家の希望に応じて当時の非合法下の共産党員を自分のところにかくまい資金をも提供しており、こうした例はほかにもすくなくなかった。かれらは、小市民的立場からではあるがやはり民主

主義的・人間的な自由を求めていたのであって、共産主義への深い期待を寄せていたことは横光利一の長篇『上海』や川端康成の当時の評論（小林多喜二が殺されたときの文章などにとくに著しい）等からも知られる通りである。ところでプロレタリア文学運動の挫折がはじまり、雑誌中心の運動形態に分散しはじめたとき、ナップ系の作家は文戦派の作家とすこしずつ一緒に仕事をするようになり、さらに中日戦争以後の弾圧強化のなかでは、プロレタリア文学系の作家で抵抗の意志をひそめた者は、文壇作家のうちの芸術的抵抗派ともいうべき傾向の作家たちと甚だ近い場所に立たされたのであった。そして、明治いらいの日本近代文学の全体にたいしても従来のようにブルジョア文学と規定することで黙殺し去ることをやめて、近代日本の作家がそれぞれ小市民的なワクをもちながらそのなかでどのように自由をもとめて苦しんできたか、その努力のなかからどれだけの貴重なものがつくりだされどこで屈折したか、これらを具体的に明らかにしうるようになってきた。中野重治は早くから『啄木に関する断片』（第二巻に収む）や『郷土望景詩に現れた憤怒』（第二巻に収む）・『芥川氏のことなど』（いずれも『芸術に関する走り書的覚え書』に収む）等を書いて、日本のプロレタリア文学者のなかでは日本近代文学遺産の正当な評価に進み出ることのできた異例の人の一人であったが（ほかに『敗北の文学』を書いた宮本顕治と『明治文学と無産階級』を書いた蔵原惟人がいるくらいで、一般にはプロレタリア文学運動の時代には日本においてだけでなく世界的にも古典の全体にたいして立入った評価がほとんど行われていなかった。）、戦争下には『斎藤茂吉ノオト』や『暗夜行路雑談』のような見事な日本近代文学評価を示すにいたったのである。ほかにも宮本百合子の『婦人と文学』をはじめとして、かつての、いわゆる「ブルジョア文学」にたいしてそのふくむ人民的また民主主義的な側面の照明をふくめた立入った芸術的評価を行い、そのことで戦争権力の抑圧への間接的な抵抗を示した評論や研究が少なからず書かれるようになった。「ブルジョア文学」とか「ブルジョア作家」とかいう規定が中日戦争のころからしだい

に使われなくなったのは、検閲への考慮だけからではなかったのである。

——以上すべてのような事情からして、日本のプロレタリア文学運動においての「プロレタリア文学」という名称・自己規定そのものがこんにち再検討をせまられているのである。プロレタリア文学という名称は、戦前の日本の天皇制絶対主義の下では「革命」ということばが公然とは使えなかったために、つまり革命文学ないし革命的文学と呼ぼうとすれば合法面では××文学ないし××的文学というふうに伏字にせねばならなかったために、その代りとしてプロレタリアという新鮮な外国語を冠することになったという面があり、また、西欧では革命的ということばは共産主義者だけでなく支配体制の進歩的変革をのぞむすべての立場のひとを包括する広い規定なのに、天皇制下の日本ではプロレタリアという語を冠した方がかえって包括的になるという関係があった。こうした意味では「プロレタリア文学」という名称が使われたのもしぜんであったが、プロレタリア文芸連盟・プロレタリア芸術連盟・プロレタリア作家同盟等という自己規定の基礎には、第二巻の解説で平野謙があとづけているように、青野季吉の「目的意識論」の前後から日本のプロレタリア文学運動がしだいにマルクス主義文学＝共産主義的プロレタリアートの文学として自己を形成していった筋道がよこたわっており、プロレタリア文学という自己規定が運動解体のときまで変らずに掲げられた真の理由であった。従ってプロレタリア文学という名称は大正末年から昭和九年ごろまでのプロレタリア文学運動それ自体と運命をともにすべき歴史的名称であって、その当時でも、運動の展開の仕方がブルジョア文学にたいするプロレタリア文学という観念的対置を脱して天皇制絶対主義下の現実により密着した形態に進みえていたら、名称自体もべつのものになったはずである。従って、プロレタリア文学運動の成立以前および運動解体後の日本の人民的・革命的文学(名称としては「人民文学」ないし「民主主義文学」ないし「進歩的文学」)の長い歴史のすべてを「プロレタリア文学大系」として包括するのは厳密にいえば妥当でない。プロレタリア文学運動の

さかんだった約一〇年間だけについていっても、共産主義の作家だけでなく政治的には社会民主主義や無政府主義の立場に立っていた作家、または政治的立場を明確にしていない作家等にも、人民的・革命的な芸術に属するものとして高く評価するにあたいするものがあり、生活と自由とのための芸術的なたたかいや努力は存分に評価せねばならぬのである。プロレタリア文学という形をとっていないという理由だけでこれを低く評価したり黙殺したりすることは合理的でない。(この大系では、スペースの関係から十分にはゆかぬが合理的な処理が意図されている)。

だが、「プロレタリア文学大系」という題名は、明治いらいの日本の人民的・革命的文学の歴史をプロレタリア文学によって代表させているという意味では合理的である。プロレタリア文学こそは、近代いらいの日本の文学史の上で天皇制絶対主義の権力およびブルジョアジー・地主の社会的抑圧にたいして最も革命的にたたかった文学であり、それがどれだけ豊富な芸術的達成にまで至ったかは、この大系に収めた諸作品そのものが具体的にあかし立てている通りだ。プロレタリア文学はその運動を共産主義文学者だけの運動として孤立的に展開するに至ったという点ではソヴエトとヨーロッパのプロレタリア的な文学運動と文学観念との移植であったが、そしてこれは日本の昭和初年の共産主義運動全体に伴っていた性格であったが、そういう性格を伴いつつも日本の共産主義運動が労働者階級と人民の力を飛躍的に成長させ、こんにちの日本の平和勢力の歴史的な地盤を切りひらいたのであったように、プロレタリア文学運動もその移植的な制約の側面のために一〇年間ほどで解体しながらも、日本の人民的・革命的文学を飛躍的に発展させ、日本の人民と文学にとって従来になかった全く新しい可能性を豊富につくりだし、ことに共産主義文学の国際的水準での開花をもたらしたのであった。

――ところで、この第一巻は日本の人民的・革命的文学の歴史のうち大正五年から『種蒔く人』廃刊までの八年間を範囲としており、八年間の内部では労働文学・民衆芸術を中心とする約五年間と『種蒔

く人』を中心としてプロレタリア文学運動への発展がはじまる約三年間とにわかれるが、『種蒔く人』はともかくとして労働文学と民衆芸術は従来不当に低く評価されてきたといわねばならぬ。これは、『文芸戦線』の時代に入ってまもなく共産主義的プロレタリアート文学のみが積極的な文学でそれ以外はすべて反動的ないし消極的なものに過ぎぬというふうに文学運動が進んでいったために、大正初年の非組織的な労働者生活のなかから出てきた労働文学の作家たち（宮島資夫は坑夫・土工、宮地嘉六は旋盤工、新井紀一は砲兵工廠の職工、内藤辰雄は車力、吉田金重は大工等々）はこうした新しい動きについてゆくことができず、ついてゆくことも自分の独自の道をきりひらいてゆくこともできなかったのはかれら自身の作家的な責任でもあるが、これらの作家を正当に評価し支え発展させずにその後のプロレタリア文学運動が進んでしまったのは、文学運動そのものにも歴史的な責任がある。このことは、第一巻に収録したかぎりの作品からも知られる通りで、これだけの芸術的才能が労働者階級のなかから生れ育っていたのに、プロレタリア文学の時代に入るとともにこれらの作家の大部分は文学を去るか宮地のように私小説作家になっていってしまったのである。労働文学の作家がそうなったばかりでなく、前記したようにプロレタリア文学運動は共産主義文学のみに関心を集中していったために共産主義的でなかった労働文学の作家は不当に低く評価されまたは黙殺されたのである。ナップのメガネをかけていたために、これらの作家の仕事の歴史的また芸術的な達成を正当に評価することができなかったのだ。わたし自身も、長い間プロレタリア文学の歴史に関心をもってきながら『種蒔く人』以前の作品にはどれだけも関心を向けないできた。むかし『坑夫』を読んだときも、その強烈な芸術的な力にひきつけられながら、主人公である労働者の反逆のアナーキーで絶望的なのに不満をもって、高く評価することをしなかった。わたしの場合眼のウッパリはこういう状態にまでなっていたのである。だが、この作品は、絶対主義下の資本秩序の網の目のなかで、網の目の権威を信じないところにまで成長してきた労働者階級

の人間的エネルギーが、まだ自己の解放の道をつかみえないために個人的な反逆のなかで自己を破滅させてゆく経過を力づよく描きだした作品であって、労働文学の文学的成立を力強く告知した一つの記念碑である。同様の事情は、宮地嘉六の『放浪者富蔵』*についても見ることができる。この小説の主人公は、右のような秩序の網の目に批判的になっているためにどの職場にも安住することができず、渡りの職工として東海道を働きながらくだってゆくが、この遍歴は、自己の解放の道を求めて遍歴しはじめた大正中期労働者階級の人間的表現の一つである。やや性質はちがうが、平沢計七の『創作・労働問題』の序文の「……労働者は、哀れで悲惨で無知なのが多い。彼（作家としての平沢）が熱望しているような巨人は、其強い意志のカケラさえ現して呉れぬ。彼は幾度か筆を曲げて巨人の出現を書こうとした。併し真実の前には彼の熱望は煙の如く消滅せねばならなかった」という注目すべきことばも同じ現実に別の角度から触れたために生命をもっていることばであった。そして、内藤辰雄の『馬を洗う』*の場合などは、素朴な、あまりにも素朴な青年労働者の生活的自己表現であるが、ここには労働者階級自身の手によって生みだされる新しい文学の一つの確かな基礎がつくりだされている。——このように、労働文学は共産主義文学の代表的な作品の場合のような思想的・芸術的な高さには達していないにしても、貴重な文学遺産の一群として評価するにたえるものであり、従来のような不当な評価は訂正してゆかねばならぬ性質のものである。なお、『種蒔く人』の場合にも、従来はともすればプロレタリア文学運動のその後の方向との歴史的関係においてのみ評価され、プロレタリア文学運動が失っていった広い統一戦線的な規模やそれに対応する思想的・文学的関心の多様性にたいする十分な評価は行われないできた。『種蒔く人』の文学運動形態はたんにプロレタリア文学運動の端緒になったという面からだけでなく、それ自体としてこんにち再検討・再評価にあたいするものである。

『坑夫』を書いた宮島資夫は、明治三十八・九年にかけて刊行された日本最初の社会主義的文学雑誌『火鞭』の影響を早いころからうけていた人物であり（宮島没後に出たその自伝『遍歴』にくわしい）、明治の社会主義文学と大正の労働文学との歴史的関連を示しているが、直接には大杉栄たちの『近代思想』の影響下に作家的出発をもった。かれの最初の作で書きおろしであったこの中篇は、大杉と堺利彦との序文をつけて近代思想社から出版されたが、ただちに発売禁止となって紙型まで押えられ、当時どのていどまで流布したものかはいまはわからない。わたしはこの解説を書く直前まで原本をさがしたがついに手に入らず、宮島家にのこっている『新興文学全集』版の伏字のうめられているのをテキストとし、大正九年七月刊の宮島の小説集『恨なき殺人』におさめられている版によって校合した。『坑夫』は、この『恨なき殺人』によって、はじめて一般の眼にふれるようになったのである。ゴーリキーの『チェルカッシュ』に近いところのあるこの『坑夫』は、『近代思想』や『生活と芸術』等にのった人民的ないし社会主義的傾向の作品にくらべて、その主題においても素材においても形象性においても規模においても一つの明らかな飛躍的成長を示しており、「労働文学」の名にふさわしい新しい実体が形成されていることを示した。そして宮島と同居していたこともある宮地嘉六はすでに大正四年から短篇を発表しはじめているが、宮島に続いて『煤煙の臭い』・『騒擾後』・『或る職工の手記』等の力作を発表して労働文学の確固たる存在を示した。新井紀一は『怒れる高村軍曹』と『友を売る』が代表作で、前者は新井の反軍主義小説の系列を、後者は労働者の生活とその運動とを描いた小説の系列をそれぞれ代表しており、とくに『友を売る』がすぐれているのでこの巻に収録したかったが、頁数の関係から不可能になったので後者の系列に属する『坑夫の夢』*を収めた。この小説は、雑誌『黒煙』――小川未明の周囲に集った青年たちがやがて藤井真澄を中心に創刊した労働文学の雑誌でこの時期の最も注目すべきグループの一つであった――を芸術的に代表するものの一つで一般の読者には手にしがたいし、この小

説のために『黒煙』が警視庁からおどかされたということもあるので採録したのである。なお、馬場孤蝶の『社会的文芸に就て』*はこの雑誌に寄稿したものであるが、馬場をはじめ自由主義的な文学者で労働文学・民衆芸術に支持を送ったひとびとがあり、それらのひとの多くは『種蒔く人』の協力者として名をつらねているが、そうした動向を示すものの一つとして収録した。

ところで、民衆芸術の流れもやはり大正五年八月号『早稲田文学』に出た本間久雄の『民衆芸術の意義及び価値』あたりから一般的な関心をひきはじめ、翌年六月大杉栄によるロマン・ローランの『民衆芸術論』訳刊から一つの動向として注目されはじめた。この動向は労働文学の流れと共にしだいにラジカルな方向をとっていったが、この巻におさめた大杉栄の評論はこの動向の中心となったものである。大杉栄夫人で大杉とともに憲兵に殺された伊藤野枝の『転機』*は、足尾の鉱毒事件で広く知られるに至った谷中村の後年の現実を踏査記録ふうに書いたものだが、大杉の全集の別巻として出た伊藤野枝全集一巻のうちにおさめられたかなりの量の小説を代表する作品がこれである。作品としてはやや退屈なところもあるが、序巻との関係もありいろいろと興味深い問題をふくんでいるのでここに収めることにした。

この時代にはまた、江口渙や小川未明や上司小剣のような作家が労働者階級と社会主義とに近づいてきて芸術的にすぐれた活動を示すようになり、『労働者誘拐』*や『死滅する村』*はその代表的作品である。丹潔のような新人がたくさん出てきたのもこの時期になってからの特色であった。なお、収録の個個の作品や動向についてのべたいことが多いが、巻末の年表のうちの中段(『文学運動及び関係事件』)を参照されたい。

一九一六年（大正五年）

作品（『』内は発表誌・紙、刊は単行本）

彼と社会（小川未明）『早稲田文学』1

俄地主（上司小剣）『新日本』1

『貧乏と恋と』（安成二郎）実業之世界社刊1

『農民の言葉』（福田正夫の第一詩集）南郊堂刊1

ベルグソンとソレル（大杉栄）『早稲田文学』1

麵麭以上の欲求（土岐哀果）『生活と芸術』1

『坑夫』（宮島資夫）近代思想社刊1
ただちに発禁となり、紙型まで押収さる。宮島は警視庁へ抗議に行く。二〇年（大正九年）七月刊の宮島の創作集『恨なき殺人』に収めて削除版を公刊。

文学運動および関係事件

一月、山川均が五年間の沈黙を破って売文社に入り、『新社会』に執筆し始め、以後別に雑誌『中外』に無名氏の匿名で民本主義者・吉野作造、大山郁夫、室伏高信たちに対して批判的主張をなす。同時に青山菊栄も『新社会』に筆を取り始む。

同月、第二次『近代思想』は前年からの内紛によって廃刊となった。だが『平民講演』はなお牛込の芸術倶楽部で四五月頃まで続いた。荒畑寒村はこの時以来大杉栄と遠ざかることになった。

同月、五日夜社会主義座談が売文社楼上にあり、講演者安成貞雄『夢と革命』を報告す。出席者は伊庭孝、高畠素之、斎藤兼次郎、五十里幸太郎たち外七八名。

政治的および社会的事件

一月、カール・リープクネヒト、戦争に協力するドイツ社会民主党の裏切行為を非難し、『スペルタカス団』を結成す。

同月、吉野作造『中央公論』に『憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず』という長論文を発表して以後、「民本主義」は論壇の中心問題となる。

二月、ベルンに於て国際社会主義委員会開く。

四月、荒畑寒村・山川均たちはトム・マンの労働組合論をもって『新社会』の附録『労働組合』というリーフレット（第一回は四月一八日、第二号は七月一日、後不明）を発行して、

自由の悲哀（石川三四郎）『生活と芸術』2
民衆的勢力（石坂養平）『新潮』2
所謂生意気とは何ぞや（荒川義英）『世界人』2
新文学の生るるまで（内藤濯）『六合雑誌』2
無明（加藤一夫）『科学と文芸』3
或る青年の夢（武者小路実篤）『白樺』3
逃避（江渡狄嶺）『新社会』3
牛部屋の臭い（正宗白鳥）『中央公論』5
食糧労働と自我表現（加藤一夫）『科学と文芸』5
反逆の芸術（加藤一夫）『生活と芸術』6
『逃避者』（荒畑寒村）東雲堂刊 5
一円五十銭という金（荒川義英）『秀才文壇』7
『都市居住者』（西村陽吉）東雲堂刊

二月、雑誌『世界人』荒川義英・五十里幸太郎などによって創刊さる。執筆者は大杉栄・堺利彦・辻潤・小原慎三・山川均など。
二月、この月を以て『青鞜』廃刊となる。第六巻第二号なり。
三月、山川均、ラッポポオルの『唯物論者の見たるベルグソン』を『新社会』に訳載し、ようやく大杉栄たちとの対立が生れ始める。
同月、石川三四郎、ロマン・ローランの有名な反戦告発状『ハウプトマンに与う』を『新社会』に訳出す。
同月、秩序紊乱のため、『新社会』三月号発禁、また『労働運動の哲学』（大杉栄）も発禁となる。
同月、雑誌『科学と文芸』が西村伊作を金主とし、加藤一夫の編集で創刊さる。
五月、江渡狄嶺・堺枯川などの旧社会主義者間に転向問題論議され始む。
六月、雑誌『生活と芸術』廃刊す。知識的手淫にあきたりず、『近代思想』にならったもの。
同月、インド詩人タゴール来朝す。
七月、雑誌『霊と肉』創刊。執筆者

労働者の団結と罷業権を主張した。また産業別労働運動を唱道した。
五月、友愛会本部は新に五部三課を新設し、会員三万に上る。
同月、職工組合期成同志会が大阪において堂前孫三郎、坂本孝三郎、横田千代吉、西尾末広、平井栄蔵たちによって組織された。組合活動の母胎たらんとして機関紙『工場生活』を発行。五ヵ月にして組合員千名を超えた。関係工場は久保田鉄工所、住友鋳鋼所、大阪電燈株式会社、大阪砲兵工廠、大阪鉄工所など。
六月一日、工場法施行。工場法を逆用し、永年勤続工、老病職工、不当馘首頻出。旧欧友会員之に憤起し再組織闘争を計画す。
同月、袁世凱死し、北方軍閥独裁解体し始む。
七月、友愛会に日本最初の婦人部設置、機関紙『友愛婦人』を発行す。部員一、六五六人に上る。
九月、日米間移民問題再び紛糾したので、鈴木文治又渡米し、加州労働

7

民衆芸術の意義及価値（本間久雄）**『早稲田文学』8**

貧しき人々の群（**中条百合子＝宮本百合子**）**『中央公論』9**

君は貴族か平民か（安成貞雄）『読売新聞』8

9

民衆芸術について（本間久雄）8・9

民衆芸術論の根本問題（安成貞雄）9・10

『一人と全体』（百田宗治）表現発行所刊9

帰途（宮地嘉六）『新公論』10

『マドロスの悲哀』（**米窪太刀雄**）**中興館刊10**

芸術における民衆的要素（田中純）『早稲田文学』10

民衆芸術について（内藤濯）『ローマ字世界』10

平民劇の真意義（**ロマン・ローラン、大杉栄訳**）**『塵労』11**

汎労働主義の結論（加藤一夫）『近代

は山口孤剣、青柳有美、荒畑寒村、小原慎三、高島米峰、西川文子、堺利彦など。

八月、本間久雄の論文『民衆芸術の意義及び価値』を端緒として安成貞雄との間に読売新聞で論争起り、ようやく民衆芸術論の風潮が抬頭した。

九月、『新社会』発禁。

同月、『新社会』九月号、『流行文芸に心酔する現代青年の心理』を特集す。安成貞雄『現実を廻避せんとするにあり』、山口孤剣『組織的兇暴からの避難所』、馬場孤蝶『一番安全の生活』、宮島資夫『一種の手淫に過ぎない』などを始めとして青山菊栄、白柳秀湖、荒川義英、土岐哀果たちが文章を寄す。

十月、堺利彦、『新社会』において中条百合子の『貧しき人々の群』を評価す。

同月、大杉栄らの影響の下に新人養成文芸雑誌『塵労』創刊さる。

十一月八日、大杉栄、神近市子に葉山の日蔭茶屋で刺され、所謂葉山事件が起きた。

同月、『科学と文芸』、『近代思潮』と

者大会、全米労働者大会、国際海員同盟大会等に出席し諒解に努む。これについて片山潜しばしばアメリカより通信を『新社会』に寄す。

十月三一日、欧文工組合「信友会」創立協議会開催さる。後、大杉栄たちの影響下に次第にアナルコ・サンヂカリズムの傾向を強めた。

思潮』11

改題す。
同月、民衆芸術について安成貞雄と内藤濯との間に論争起る。
十二月、『新社会』、トルストイ論特集を行い、堺利彦、高畠素之、荒畑寒村、白柳秀湖、山川均、山口孤剣らの文章を載せ、アナアキストに対する批判の一つとする。
同月、夏目漱石死す。

一九一七年（大正六年）

生存を拒絶する人（上司小剣）『新小説』1

下積（〃）『文章世界』1

日は輝けり（中条百合子）『中央公論』1

『一兵卒の銃殺』（田山花袋）刊1

社会主義者の杜翁観（堺利彦）『トルストイ研究』1

貴様は国賊だ（江口渙）『星座』2

悪人（小川未明）『太陽』2

犧牲者（下村千秋）『塵労』2

卒塔婆の家（宮地嘉六）『洪水以後』2

民衆芸術に就いて・特集『早稲田文学』2

- 民衆芸術としての演劇（島村抱月・談）
- 民衆芸術としての詩歌（富田砕花）
- 民衆芸術としての小説（中村星湖）

『零落者の群』（ゴリキー他九人の飜訳集・昇曙夢訳）春陽堂刊3

庶民的詩歌へ（福田正夫）『科学と文芸』3

民衆芸術とジャーナリズム（加藤朝鳥）『読売新聞』3

一月、宮島資夫『新社会』に『予の見たる大杉事件の真相』という批判的文章を載せた。

二月十八日、小川未明を中心とする急進的文学青年の団体である青鳥会第二回例会が行われた。坪田譲治や藤井真澄はその幹事であった。

同月、和田久太郎『新社会』編集に従事していたが、同誌に『脱走するまで』という自伝的なエッセイを載せる。

同月、文壇に通俗芸術問題流行。

三月、『科学と文芸』再び加藤一夫たちによって発刊することになった。

五月、佐藤緑葉主幹『近代芸術』創刊さる。

七月、大杉栄と荒畑寒村との対立は全く明白となる。

八月、『白樺』風俗壊乱の廉で発禁。

同月、丹潔・渡平民ら『近代文芸』

一月、堺利彦が売文社の一団に推され東京市に於て総選挙に立候補し、二五票を得た。

二月　ペトログラードに革命勃発す。

同月、友愛会神戸聯合会及び友愛会海員部組織さる。

三月、ロシア皇帝退位し、カデット、右翼社会革命党、十月党などの臨時政府樹立す。

四月、欧文工組合信友会発会式。欧文工の大半を組織。後会員六百に上る。幹事長は杉崎国太郎と定った。

同月、室蘭製鋼所争議。

同月、ドイツ独立社会民主党の成立。スパルタカス団も加盟。ベルリンにおいて三〇万労働者のストライキ。

同月頃、イタリーのトリノに於いて数千の労働者の革命的暴動。

子を棄てる籔（上司小剣）『中央公論』4
戯曲・土地（秋田雨雀）『早稲田文学』4
新しき奴隷（加藤一夫）『科学と文芸』4
独逸に於ける民衆劇場（島村民蔵）『早稲田文学』4
民衆芸術としての俳句（荻原井泉水）4
文学上より見たるロシア革命（昇曙夢）『早稲田文学』5
トルストイは革命運動を伺うみたか（加藤一夫）『科学と文芸』5
労働と生（福田正夫）『早稲田文学』5
自然の言葉（白鳥省吾）5
ヴァガボンド魂（大杉栄）『新小説』5
二重の微笑（江口渙）『大学評論』5
発禁
民芸芸術とは何か（本間久雄）『中央文学』5
窮迫と幻想（宮地嘉六）『日本評論』5
小作人の死（小川未明）『新小説』6
夜（和田信義）『新社会』6

を発行す。
十一月、橘静二を主幹として『大学及び大学生』創刊さる。
同月、『トルストイ研究』は安寧秩序紊乱の廉にて発売を禁止さる。
同月、詩話会が白鳥省吾・川路柳虹・百田宗治民衆派詩人たちによって結成さる。
十二月、大杉栄、伊藤野枝と共に、月刊『文明批評』を創刊した。
同月、和田久太郎、久板卯之助は日暮里貧民街に住居し労働運動を始む。
同月、大杉栄は『新小説』アンケートで宮本百合子の『貧しき人々の群れ』を評価し、その前途に大きな期待をかけた。同月、浅野造船及び横浜ドックに大規模なストライキ。
この年、多少進歩的な傾向をもった劇団「民衆劇社」が生れて、秋田雨雀らの周囲で活動していたという。花柳はるみらがロシアの婦人革命家ヴェーラ・フィグネルを主人公にしたワイルド劇などを上演した。

同月、アメリカ第一次世界大戦に参加。
同月、堺枯川、山川均、荒畑寒村らロシア革命の成功と休戦のための決議をロシアに送った。
五月、第一回全ロシア農民代議員大会。
同月、友愛会大阪聯合会組織さる。
三月、山川均、荒畑寒村ら、労働者の団結のために『新社会』附録『青服』を七月まで四回発行す。
六月、第一回全ロシア・ソヴェート大会開かる。
同月、ドイツのウイルヘルム・ハーフェンにおいて水兵の暴動起る。
同月、長崎三菱造船所ストライキ。
七月、ロシア・ボリシェヴィキ党第六回大会を開く。
同月、『新社会』は組織を変更し、山川、高畠、山崎今朝弥、吉川守邦、荒畑、渡辺政太郎の七人の共同経営となった。
八月、鉄工労働者大会、米国鉄材輸

『民衆芸術論』（ロマン・ローラン、大杉栄訳）阿蘭陀書房刊6
民衆芸術家としての中村星湖『文章世界』6
戯曲・捕虜の妻（秋田雨雀）『早稲田文学』7
彌宜様宮田（中条百合子）『中央公論』7
カインの末裔（有島武郎）『新小説』7
停船（宮地嘉六）『新公論』7
汽車の中で（佐野袈裟美）『科学と文芸』7
武者小路実篤氏に誨う（山川亮）『日本評論』7
花袋氏の功罪（金子洋文）7
其一人（宮地嘉六）『早稲田文学』8
「竹」と貧民伝道者（加藤一夫）『新公論』8
時代の要求と民衆芸術（本間久雄）『青年文壇』8
露西亜革命と文学者の宣言（昇曙夢）『露西亜』8
心の響（佐藤緑葉）『近代芸術』9
恨まれぬ殺人（宮島資夫）『新日本』9

出禁止に対する反対決議し、アメリカ労働総同盟サミエル・ゴンパースに尽力を要請す。
同月、長崎三菱造船所争議。
一〇月、ロシア十月革命。ペトログラード（今のレニングラード）ソヴエート及軍事委員会は首都で権力を獲得す。第二回全ロシア・ソヴエート大会開かる。
一二月、『新社会』三月号はアメリカ参戦に反対して投獄されたI・W・Wの会員一六六六人に対する保釈運動資金運動の檄を飛ばした。
大正六年の労働争議の件数は三九八件で参加人員五七、三〇九人であった。なお、小作争議は八五件であった。この頻発するストライキは賃金要求に関するものが多く、会社側ブラック・リスト、ロックアウトで対抗するものがようやく増え始めた。

米盗人（江口渙）『新公論』9
戯曲・東方の星（秋田雨雀）『文章世界』10
なぜ母を呼ぶ（小川未明）『太陽』10
木偶は躍る（山川亮）『日本評論』10
神経病時代（広津和郎）『中央公論』10
新しき世界の為めの新しき芸術（大杉栄）『早稲田文学』10
『土の叫び地のささやき』（加藤一夫）洛陽堂刊10発禁
政治小説と社会劇（上司小剣）『青年文壇』11
治作と米造（江口渙）『太陽』12
民衆芸術論の出発点（西宮藤朝）『文章世界』12
大正六年文芸界の事業、作品、人（大杉栄）『新小説』12

一九一八年（大正七年）

転機（伊藤野枝）『文明批評』1・2
戦争（小川未明）『科学と文芸』1
髪（沖野岩三郎）〃
或る少年の轢死（加藤一夫）〃
乞食の群（中村星湖）『新潮』1
動かぬ時計（有島武郎）『中央公論』1
地は饑なり（中条百合子）〃
戯曲・三つの魂（秋田雨雀）『早稲田文学』1
無籍者の思い出（小川未明）〃
最近思想界の動向（大杉栄）『文明批評』1
社会問題か芸術問題か（〃）〃
民衆は何処に在りや（加藤一夫）『新潮』1
煉瓦の雨（沖野岩三郎）『黒潮』2
『小作人の死』（小川未明）春陽堂刊 2
宣伝者トラウベル（福田正夫）『科学と文芸』2
日本に於ける詩歌の民衆の勝利（秋田雨雀）『短歌雑誌』2
僕は精神が好きだ（大杉栄）『文明批

一月、大杉栄は労働者街に住み、労働者と共に活動したいと云う年来の希望を果し、亀戸の労働街に転居す。和田久太郎・久板卯之助はそれに応じて日暮里をたたみそれに同居す。
同月、吉野作造『中央公論』に『民本主義を説いて再び憲政有終の美を済すの途を論ず』という長文論文を発表し、これ以後デモクラシー論流行思潮となる。
同月、『民衆』創刊され民衆詩派さかんになる。
二月、大杉たちの『文明批評』三号で廃刊。大杉・和田・久板は直ちに労働者向きの『労働新聞』の発刊にかかる。
三月、片上伸二カ年のロシア留学を終って帰朝。
同月、中条百合子アイヌを書きたいと思って北海道へ行った。
四月、『中外』・『六合雑誌』の四月号はいずれも安寧秩序紊乱の廉にて発

一月、荒畑寒村の『労働組合運動の将来』（新社会）をめぐって高畠素之と山川均に論争があり、高畠の理論が一頭抜きんでていた。
同月、友愛会関西出張所大阪に設立。
同月、第三回全ロシア・ソヴェート大会『勤労被搾取人民の権利宣言』を採決。
同月、ベルリンにおいて政治的大ストライキ開始。
同月、大杉栄、和田・久板の出席していた上野の『労働問題座談会』にサンジカリズムやアナアキズムを詳説し始む。
同月、欧文工組合信友会は、活版印刷組合信友会と改称す。
同月、フインランドに労働者革命。
三月、信友会機関紙『信友』発行せらる。この頃より大杉栄たちの影響下に次第にアナアキスト的傾向を取

評』2
民主主義堕落（〃）〃
線路工夫の死（中村星湖）『新日本』3
二つの運命（加藤一夫）『科学と文芸』3
自惚（沖野岩三郎）〃
雪の平原（小川未明）〃
次郎作の家（福田正夫）〃
詩と民衆の交渉（白鳥省吾）〃
国民的詩人を熱望す（〃）『文章世界』3
民衆及民衆芸術の意義（川路柳虹）『雄弁』3
民衆文芸の内容（吉田絃二郎）『新時代』3
石にひしがれた雑草（有島武郎）『太陽』4
文明の狂人（小川未明）『文章世界』4
未決檻の朝（秋田雨雀）『新時代』4
真昼の世界（坪田譲治）『科学と文芸』4
労働者誘拐（江口渙）『雄弁』4
免囚者の如く（宮地嘉六）『中外』4
生れ出る悩み（有島武郎）『東京日々』4

売禁止さる。

同月、大杉栄・伊藤野枝・和田久太郎たち『労働新聞』を創刊す。宮島資夫夫妻その編集を委任さる。一方宮島は株式に手を出し、放蕩をし、これ以後スランプ状態が続く。サンジカリズム研究会のメンバーから苦情出る。

五月、大隈重信を主宰とし、五来素川を編集主任とし、雑誌『大観』創刊。後小川未明、藤森成吉たちこれに執筆す。

同月、『労働新聞』第二号発禁。

六月、『労働新聞』第三号発禁。

七月、武者小路実篤、志賀直哉たちによって雑誌『新しき村』創刊さる。

同月、雑詩『労働と文芸』創刊さる。

同月、『労働新聞』すでに資金の道絶えて、大杉、和田ら居を田端に移した。大杉夫妻は九州にたち、和田たちだけで第四号(終刊号)を出した。忽ち新聞紙法違反として起訴され、久板卯之助は五カ月、和田は十カ月の禁錮申し渡されて、十月に入監し

り始める。

同月、東京府下の紡績労働者によって友愛会紡績労働組合が組織さる。

同月、ブレストリトウスクの講和。

四月、大杉・和田・久板ら『労働新聞』を創刊す。

同月、三日友愛会六周年大会開催、此頃会員一二〇支部三万人に上る。

同月、売文社の高畠素之、国家社会主義に変節す。

同月、一七日軍需工業動員法公布。

五月一日、メーデー東京で行われ、ロシア革命に対する決議行わる。

七月、ロシアにおいてソヴェート憲法制定さる。

同月、この頃和田たちの「労働問題座談会」と大杉の「サンジカリズム研究会」が合併して「北風会」と称した。研究会の創立者である渡辺政太郎が死んだので、その別名「北風」に因んで名づけたのである。

八月三日、富山県下を口火に米騒動起り、次いで全国的に焼打流血の大

民衆芸術の意義（加藤一夫）『科学と文芸』4
民衆創造論（西宮藤朝）『東方時論』4
露西亜文学と民本思想（昇曙夢）『文章世界』4
有島武郎論（江口渙）〃
脚本・責任者（中村吉蔵）『新公論』5
田舎教師（加藤武雄）〃
写真とハンケチ（安成二郎）〃
喜劇・作者（小川未明）〃
侵入者（沖野岩三郎）『科学と文芸』5
『民衆の為に』（丹潔）如山堂・星文館刊5
民衆芸術の為に（加藤一夫）『時事新報』5
詩の民衆精神（福田正夫）『新潮』5
民衆芸術を毆す（川路柳虹）〃
民衆芸術の問題（生田長江）〃
国民性の革新と短歌（小川未明）『短歌雑誌』5
近代人と民衆愛（吉田絃二郎）『新時代』6
民衆芸術の問題（本間久雄）『早稲田文学』6

た。
同月、堺利彦・山口孤剣たちの紹介によって宮地嘉六の『煤煙の匂い』中外にのり、彼の出世作となる。これにより、嘉六の名と共に労働文学の機運が急速に抬頭する。
同月、雑誌『赤い鳥』創刊。
同月、『民衆の芸術』三上於菟吉・永田衡吉・江連沙村・西村陽吉などの手によって創刊さる。
八月、十四日本郷追分東大青年会館に「新しき村」の人々の演説会開かる。武者小路実篤・木村荘太たち出席す。
同月、中条百合子渡米す。
十月、六年頃より鳥居素川、長谷川如是閑、大山郁夫、丸山幹次を擁して民本主義を主張していた大阪朝日新聞社長村山龍平を迫害した右翼グループは九日、日比谷松本楼において浪人会を開き、大阪朝日新聞膺懲、国体擁護を決議し、実行に着手した。
十一月、右翼団体浪人会は「民本主

米騒動起る。
八月一二日、ウラジオストックに日米両国共同出兵す。所謂シベリア出兵が行われ、司令官大谷喜久蔵ら出発す。
同月、友愛会神戸聯合会、機関紙『新神戸』発刊。賀川豊彦、高山義三の活躍が著かった。
九月、寺内内閣総辞職し原内閣に代る。
二月、オーストリ・ハンガリに革命起る。
同月、ベルリンに革命勃発し、ドイツ共和国宣言され、エーベルト、シャイデマン等の六人内閣成立す。
同月、世界大戦休戦条約成立す。
一二月、スパルタカス団の全国大会あり、ドイツ共産党誕生す。同時にブレーメンに蜂起が始まった。
同月、二日日英米仏伊五ヵ国支那南北妥協勧告の覚え書を発表す。
同月、大阪商船会社船乗組司厨員七〇〇名により商船同志会組織さる。

民衆芸術の根本問題（三井甲之）『新潮』6
民衆芸術の意義（赤木桁平）〃
先ず民衆の意義を決定せよ（江口渙）〃
民衆的精神とは何ぞや（前田晁）〃
「民衆のために」の意味（野上豊一郎）〃
新しい村（山川均）6
　長文の武者小路批判で、翌大正八年一一月刊の山川著『社会主義者の社会観』聚文閣刊に収む
民衆芸術の精神（加藤一夫）『科学と文学』6
低地に住む人々（小川未明）『新日本』7
激動（江口渙）『雄弁』7
煤煙の匂い（宮地嘉六）『中外』7
煉獄（上山草人）〃
山（藤森成吉）〃
暗い曙（三上於菟吉）『民衆の芸術』7
芸術の社会的価値（本間久雄）『早稲田文学』7
民衆芸術の史的事実（広瀬哲士）『日本主義』7

義は我国体と相容れざる危険思想」だとし、吉野作造に立会演説会を申入れ、ここに神田南明倶楽部でその演説会が行われた。浪人会側から葛生能文、伊藤杉雄、小川運平、内田良平などが壇上に出でた。

同月、五日抱月、島村滝太郎歿す。年四十七。

同月、久米正雄、灰野庄平、仲木貞一その他の人々によって演劇協会成る。

十二月、東京帝大に新人会、次で早大に暁民会、建設者同盟などが組織さる。

同月、浪人会との立会演説会が機会となり、吉野作造・福田徳三らを中心として民本主義を基調とする黎明会が誕生した。文学者では姉崎嘲風・三宅雪嶺・麻生久たちが参加す。

同月、この年の終り頃には小川未明愛読者の会であった青鳥会は著しい成長を遂げ、すでに藤井真澄・坪田譲治・尾崎士郎・佐々木味津三・吉田金重・岡田三郎・宮地嘉六・浜田広介・伊藤松雄・邦枝史郎・丹潔・

吾人の観たる所謂民衆芸術論（加藤一夫）『新潮』7
武者小路兄へ（有島武郎）『中央公論』7
民衆芸術の技巧（大杉栄）『民衆の芸術』7
民衆の芸術（大石七分）〃
貴族芸術か平民芸術か（西村陽吉）〃
馬鹿野郎！（中村星湖）『早稲田文学』8
眼を開けた屍（小川未明）『早稲田文学』8
赤熱の地上（〃）『中央公論』
風に乗ってくるコロポックル（中条百合子）8頃成る（没後発表）
芸術制作の開放（有島武郎）『新公論』8
民衆芸術としての短歌（西村陽吉）『短歌雑誌』8
民衆芸術の主張と批判（川路柳虹）『新潮』8
エセ民衆芸術（大杉栄）『民衆の芸術』8
生活と芸術の統一（大石七分）〃
馬車屋と軍人（江口渙）『新日本』9
脚本・土地を離れて（渡平民）『ライフ』9
涸れる麻（沖野岩三郎）『中外』9

大城永昌・内藤辰雄・新井紀一たちが結集し、自分たちの習作合評会を行っていた。

今日の民衆芸術（西村陽吉）『民衆の芸術』9
文芸上の民本主義について（大西克礼）『帝国文学』9
斯くあるべき民衆（小島徳弥）『文章世界』9
惑い（伊藤野枝）『新日本』10
根を断たれた花（小川未明）『太陽』10
二つの虚偽（江口渙）『文章世界』10発禁
小作人の茶粥（加藤一夫）『秀才文壇』10
場末をさまよえる男（宮地嘉六）『雄弁』10
石川啄木の歌論と詩論（西村陽吉）『短歌雑誌』10
三つの生活者（渡平民）『ライフ』11
徳川時代に於ける民衆芸術の復興及び其の衰頽（本間久雄）『早稲田文学』11
颪の叫び（宮地嘉六）『新時代』11・12
空想の花（**上司小剣**）『**中央公論**』12
トラウベル特集（富田砕花・白鳥省吾・百田宗治・井上康文ら）『民衆』12

一九一九年（大正八年）

森を通して（佐藤緑葉）『早稲田文学』1
冷酷なる正直（小川未明）〃
お玉婆さん（藤森成吉）『中外』1
十一月三日午後の事（志賀直哉）『新潮』1
取材の革命（西村陽吉）『短歌雑誌』1
去来する影（〃）〃
中尉と廃兵（江口渙）『新小説』2
蠟（宮地嘉六）『文章世界』2
新しき世界へ（上司小剣）〃
奇抜な精神病者の話（長谷川如是閑）『我等』2
雑信一束（有島武郎）〃
津村教授（山本有三）『帝国文学』2
民衆芸術の新使命（日高只一）『大観』2
『草の葉』第一集（ホイットマン、富田砕花訳）大鐙閣刊2
民衆芸術の出発点とその目標（加藤一夫）『読売新聞』2
脚本・窟（藤井真澄）『黒煙』3
弟（小川未明）〃

一月、徳富蘆花、夫人を伴いポルネオ丸にて海外に出発す。

二月十日夜、青鳥会第二回例会は江戸川清風亭においてひらかる。

同月、新井紀一、砲兵工廠を止め、『中央文学』の記者となった。

同月、長谷川如是閑・大山郁夫らによって『我等』創刊さる。

同月、デューイ来朝す。

三月、この頃より宮島資夫は一週間に一度ずつ高畠素之についてマルクスの資本論の手ほどきを受く。しかし、当時彼は前途に絶望し悶々たる荒んだ生活を送るにいたる。その頃ドストエフスキーに傾倒す。

同月、青鳥会機関誌『黒煙』は小川未明・藤井真澄・坪田譲治によって創刊さる。

同月、加藤一夫・佐野茂・宇佐美文蔵・福田正夫・工藤信・諸根正一・新居格・百田宗治などと『労働文学』を創刊す。

一月、ブレーメンはドイツ・ソヴェート共和国宣言さる。一五日、カール・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルグ虐殺さる。

同月、アイルランド国民議会は共和国を宣言す。

同月、友愛会主事棚橋小虎・麻生久たちの努力によって以後ようやく友愛会は労資協調から脱皮し始む。

同月、この初頭より、大杉栄たちの北風会員は労資協調的演説会のぶちこわしに歩いた。この頃が所謂大杉一派の全盛時代であった。

二月、普選運動への関心高まる。

同月、シベリア出兵の日本軍ソヴェート軍に敗北す。

三月、モスクワにおいてコミンテルン第一回大会開かる。

同月、ハンガリーにプロレタリア革命成立し、以後四カ月間ソヴェート政権を維持す。

同月、ムッソリーニはイタリー社会

森の中（坪田譲治）3
少年の殺傷（小川未明）『新潮』3
放火理由（伊藤松雄）『労働世界』3
黒い塊（工藤信）『労働文学』3
民衆芸術と人道文芸（田部重治）『地平線』3
芸術批評界の三星（平林初之輔）『新時代』3
我等も労働者である（加藤一夫）『労働文学』3
労働者より身を起したるゴオリキー（宇佐美文蔵）〃
自由舞台論（伊藤松雄）〃
トルストイ革命（片上伸）『露西亜評論』3
美人国の旅（上司小剣）『大観』4
金の指輪（小川未明）『労働文学』4
一植字工に送る手紙（百田宗治）〃
閉った耳（小川未明）『黒煙』4
戯曲・犬殺し（藤井真澄）〃
人殺し（吉田金重）〃
白い石（坪田譲治）〃
新しき村に対する疑義（加藤一夫）『時事新報』4
危険思想問題特集（長谷川天渓・内田魯庵・吉野作造・桑木厳翼ら）『早稲田文学』4

四月、『改造』創刊す。

同月、小山内薫・里見弴・長田秀雄・田中純その他内相・政治家・実業家にて国民文芸会設立す。これより文芸と政治の関係しきりに論ぜらる。

五月、堺利彦・山崎今朝彌・山川均ら雑誌『社会主義研究』を創刊す。

同月、角谷伊作送別会上、吉田金重と小川未明と対立することあり、丹潔などそこから『黒煙』の刷新に向う。

同月、『労働文学』五月号はホイットマン特集を行った。

同月、十一日夜富田砕花らの発起でホイットマン誕生百年記念会開く。

六月、『労働文学』はトルストイ特集号を行った。

同月、『解放』創刊す。

七月、青鳥会機関誌『黒煙』刷新号を出し、労働者文学のためのものとして続刊することになり、面目を一新した。

同月、馬場孤蝶・中村吉蔵・大庭柯公・杉村楚人冠・生田長江・中村星

党に対抗するためにファシスタなる政治団体を組織す。

同月、一日朝鮮京城に騒擾あり、以後暴動六カ月に渉る。各地に官民衝突し流血あり、所謂万才事件起きる。

同月二九日、朝鮮京城満鉄鮮人職工八〇〇名罷業、後惨敗す。

同月、高畠素之、黎明会に対抗してできた右翼団体老壮会と連絡ができるようになり、『新社会』はいつのまにか遠藤友四郎・北原竜雄・茂木久平らによって皇室中心社会主義に転化し、売文社は完全に分裂した。

同月、『日本労働新聞』大阪にて岩出金次郎によって創刊さる。以後荒畑寒村・堺利彦・山川均の論文が掲載さる。

四月、ドイツ・バイエルンにソヴェート共和国宣言さる。

同月一三日、友愛会関西労働同盟会創立大会を大阪に挙行。

同月同日、宇都宮師団、シベリアに出兵、翌年一月、高田師団更に出兵す。

『街路樹』（西村陽吉）洛陽堂刊4
遼河の夜（江口渙）『新小説』5
若き教師の悩み（青木健作＝井本健作）『読売新聞』5
脚本・颱風前後（秋田雨雀）『早稲田文学』5
彼の生涯の第二期（宮地嘉六）『雄弁』5
姉（青野季吉）『主潮』5
『民本主義者』（藤井真澄）進栄堂刊5
童話小説・犬と人と花（小川未明）『黒煙』5
〃・縄の話（丹潔）〃
〃・盲いし小鳥（角谷伊作）〃
〃・雪山童児（藤井真澄）〃
〃・村へ帰る心（坪田譲治）〃
遠い処へ（小川未明）『労働文学』5
詩・空と雲（加藤一夫）〃
詩・悲しき労働（福田正夫）〃
民衆芸術はどうして起らぬか（**加藤一夫**）〃
文芸家と社会運動（田中純）『早稲田文学』5
詩集『大地の愛』（**白鳥省吾**）**抒情詩社刊6**
黒王の国（上司小剣）『中央公論』6

湖・土岐哀果たちによって著作家組合結成さる。
八月、堺利彦は文壇革新運動の一つとして社会講談を独唱し、『一休と自来也』を『改造』に寄す。以後『鋳掛松』『大塩騒動』『パリ・コムミュン』の作あり。
同月、『解放』賀川豊彦の『労働者崇拝論』のために発禁さる。
同月、『黒煙』は自身を明確に民衆文芸雑誌・新しい世のための新しい言葉・新しき社会の為の新しき文芸雑誌と規定した。同人、藤井真澄・吉田金重・内藤辰雄・丹潔・大城永昌・大庭柯公・青山義雄・京屋金介・石渡山達・渡平民・斎藤正次郎・伊藤松雄ら。
同月、山崎今朝弥の平民文学は堺利彦・山川均・高畠素之などを講師として社会問題夏期講習会が開かれ、その聴講生の一部は労働組合研究会に吸収された。
九月、内藤辰雄・新井紀一を『黒煙』同人に紹介す。尾崎士郎も時々『黒煙』同人会に来り、ひとりニヒリス

五月、信友会復興し、会員一、五〇〇名に上る。
同月、東大新人会・渡辺政之輔などセルロイド職工組合を組織す。
同月一八日、鉄工組合同志会の後身大阪鉄工組合発会式。
同月四日、中国において五・四運動勃発す。
六月二日、京都市電壬生車庫現業員六百名罷業し後、有利に解決し、ために後友愛会支部設置さる。
六月二八日、俸給生活者同盟会が東京に**成立す**。
七月一二日、啓明会、学校教員などによって組織さる。
同月、高畠素之、マルクス資本論を翻訳す。
八月一日、岡山県三井玉造造船所職工二、〇〇〇名サボタージュす。同じく中央郵便局・大連・群馬県大胡局に争議。
同月一二日、東京砲兵工廠及王子、板橋、十条、目黒の各分工場職工一万人の罷業・怠業あり、一一日間

少女の顔（宇佐美文蔵）『労働文学』6
父の話（福田正夫）〃
坑夫の死（諸根正一）〃
新詩壇の覚醒と民主的運動（白鳥省吾）6
『地上』（島田清次郎）新潮社刊6
『民衆芸術論』（加藤一夫）洛陽堂刊6
近代文芸に現れた民本主義（赤木桁平）『新潮』6
文芸家と為政者との接触を如何に見るか（特集、厨川白村・石坂養平・秋田雨雀）『早稲田文学』6
社会批評家の現下文壇に対する批判と要求（特集、長谷川如是閑・三宅幾太郎・山川均・小林欣一・茅原華山・山川菊栄・堺利彦その他）『新潮』6
騒動後（宮地嘉六）『中央公論』7
戯曲・職業紹介所（中村吉蔵）『改造』7
先に行った友達（小川未明）〃
花火（永井荷風）〃
愛国者（上司小剣）〃
旧先生（藤森成吉）『文章世界』7
朝鮮飴屋（丹潔）『黒煙』7

テイックに他を冷眼視していた。
十月、『解放』、宮地嘉六の小説『お千代と母』のため発禁となる。
同月、労働新聞社は、大阪中央公会堂に労働問題大講演会を開く。講師は堺利彦・生田長江・賀川豊彦・高山義三ら。
同月、神近市子二年ぶりで出獄。
同月、大杉栄・村木源次郎・近藤憲二・和田久太郎・中村還一・久板卯之助・伊藤野枝らは労働運動社を起し、『労働運動』を創刊した。和田久太郎は大阪に行き支局を設く。
同月、藤井真澄・内藤辰雄の出世作『馬を洗う』を長谷川如是閑に紹介す。内藤はなお日本織物工場の雑役夫であった。
同月、『黒煙』同人会は一日に内藤辰雄のところで、十五日藤井のところで行われた。新井紀一は『中央文学』の編輯を止めて『黒煙』の創作に専心することになった。
十一月一日、『黒煙』同人会が内藤辰雄のところで行われた。

持続す。同じく東京池貝鉄工場罷業。最初のピケッチングが行われた。
同月、内務省・農商務省の国際労働代表選出の方法の官僚主義にたいして反対蜂起す。
同月、友愛会八年度大会を開き、大日本労働総同盟友愛会と改称す。なお、会長独裁制を理事合議制に改組し、従来の地域的支部を漸次職業別産業別に再編することに決定す。堺利彦らはその懇談会に招かれ、以後社会主義と労働運動はきわめて接近するにいたった。
同月、この頃荒畑寒村・山川均はウェッブ夫妻著『労働組合運動史』の飜訳に従い、また一方では労働組合研究会を設けて毎月二回有楽町服部洋服店楼上で講演を行い、友愛会・新聞印刷工組合革新会、市電従組の会員などが集った。
九月、アメリカ社会党大会はコミンテルンに対する態度決定で分裂し、共産系は同党を脱退し、共産党及び共産労働党を組織す。

喜劇・同志打（藤井真澄）〃
蛙の声（内藤辰雄）〃
落書（吉田金重）〃
創作『労働問題』（平沢紫魂＝平沢計七）海外植民学校出版部刊7
『民衆的文芸の先駆』（白鳥省吾）新潮社刊7
或る女の犯罪（江口渙）『解放』8
田園生活者の告白（加藤一夫）〃
立ちん坊の死（内藤辰雄）『黒煙』8・9
五銭の猿股（丹潔）〃8・9
愛国心と世界主義（本間久雄）『早稲田文学』8
新浪漫主義と社会運動（小川未明）『東京日日』8
『古事記及び日本書紀の新研究』（津田左右吉）岩波書店刊8
ある職工の手記（宮地嘉六）『改造』9
死灰の中から（大杉栄）『新小説』9
魚食人と央食人（堺枯川）〃
土地（小川未明）『雄弁』9
最初の奇蹟（藤井真澄）『新公論』9
窟を出て（〃）『黒煙』9
戯曲・牢死者の家（渡平民）〃
或る影（小泉鉄）『我等』9

十二月、宮島資夫、比叡山に辻潤・武林無想庵を訪ぬ。
同月、内藤辰雄・職工生活をやめて創作に没頭す。『馬を洗う』の原稿料と工場の賞与によるものであった。『黒煙』の新しいパトロンであった社会主義青年笹野徳三郎の家に食客す。
同月、柳田国男官吏生活を打切る。

同月一日、大日本鉱山労働者同盟会発会式が足尾にてひらかる。
同月一一日、日本交通労働組合、八月結成したが、本所支部発会式挙行。
同月一八日、神戸市川崎造船所職工一万六千人、一一日間大総怠業す。兵庫分工場も同情怠業す。
同月二七日、労働組合団体の猛烈な反対に国際労働代表の候補者相次いで辞任し、政府狼狽し、桝本某に強贈し辛うじて派遣す。
一〇月、ドイツ共産党第一回大会開く。
同月、イタリー社会党大会はボロニアに開催され、共産主義的新綱領を採用し、コミンテルンに加盟す。
同月七日、室蘭、日本製鋼所職工五千名一一日間罷業。
同月一七日、信友会、東京諸印刷工場に対しゼネスト敢行。十余工場二千人の一五日間の大罷業となる。
同月二一日、山梨県下、巡査増俸要求争議あり。
一一月八日、東京市電従業員八、三

民衆運動の点火者としての知識階級(大庭柯公)『早稲田文学』9
文芸の社会的意義(片上伸)『大観』9
局部的文学と民衆的文学を論ず—和歌と民謡について—(島木赤彦)『雄弁』9
社会改造と文芸(馬場孤蝶)『文章世界』9
思想変動期と芸術家の態度(秋田雨雀)『抒情文学』9
民主詩に就ての考察(井上康文)〃
文壇諸家の見たる労働問題(特集、小川未明・赤木桁平・上司小剣・森田草平)『新潮』9
社会改造と文芸(特集、昇曙夢・石坂養平・中村吉蔵・小川未明・加藤一夫・赤木桁平)『新潮』10
悪霊(江口渙)『中央公論』10
雙六の駒(宮地嘉六)『解放』10
寝顔を眺めつつ(沖野岩三郎)〃
二囚徒(宮地嘉六)『雄弁』10
浮浪漢の手紙(小川未明)『新小説』〃
顔(〃)『黒煙』10
暗い顔(新井紀一)〃
青い馬(荒畑寒村)『新社会』10

〇〇名一ヵ月間争議す。
同月一〇日、岩手県釜石鉱山六千人争議、暴動化す。
同月二〇日、足尾銅山鉱夫一〇、〇〇〇名一〇日間罷業、官憲と衝突・暴行事件起きる。
同月二四日、日本労働党結党式、東京に行わる。
同月二九日、国際労働会議第一回総会がワシントンにひらかれた。
一二月、日本労農同盟会の発会宣言書発表さる。

労働問題を描ける文学（厨川白村）『改造』10

当来の文芸と社会問題（片上伸）『大観』10

労働問題と労働文学について（和辻哲郎）『読売新聞』10

読点射撃（新井紀一）『黒煙』11

秋の工場（日吉春夫）〃

無神論者の苦笑（内藤辰雄）〃

馬を洗う（〃）**『我等』11**

長詩・暗に燃える予言（福田正夫）『解放』11

宮地嘉六氏を紹介す（藤森成吉）『時事新報』11

再び現実主義（加藤一夫）『読売新聞』11

階級打破（内田魯庵）『太陽』11

村の反逆者（神近市子）『改造』12

Y牧師の半生（沖野岩三郎）〃

労働者のみの社会（与謝野晶子）『解放』12

『食後の唄』（木下杢太郎）アララギ発行所刊12

一九二〇年（大正九年）

放浪者富蔵（宮地嘉六）『解放』1
母と子（宮島資夫）『新公論』1
門を開ける話（江口渙）『改造』1
水兵の宿（宮地嘉六）『内外時論』1
戯曲・日本第一の智者（藤井真澄）『黒煙』1
坑夫の夢（新井紀一）〃
児をおろす話（江口渙）『雄弁』1
『或る職工の手記』（宮地嘉六）聚英閣刊1
社会的文芸について（馬場孤蝶）『黒煙』1
日本に於ける社会主義者の文芸観（西宮藤朝）『早稲田文学』1
民衆文化の世界へ（大山郁夫）『中央公論』1
中間階級の文学（片上伸）『大観』1
文芸と問題（有島武郎）『新潮』1
初年兵江木の死（細田民樹）『雄弁』2
間諜（小川未明）〃
車掌（藤森成吉）〃
浅草の犬（西村陽吉）『黒煙』2
獄中の心（大庭柯公）〃

一月、『黒煙』新方針を発表す。寄稿者を次の如く掲ぐ。
馬場孤蝶、堺利彦、中村吉蔵、生田長江、大山郁夫、長谷川如是閑、加藤一夫、大杉栄、山川均、伊藤松雄、宮地嘉六、小川未明、荒畑寒村、大庭柯公。
事業としては芸術的にして民衆的な劇団・映画・講談・落語・童話・歌謡を研究創造すること。
なお、記録文学を提唱、工場・鉱山・貧民窟・山寺・売婬・貴族・富豪・監獄・瘋狂院・木賃宿・船乗・特殊部落のルポルタージュの発表を意図する旨発表す。
同月、警視庁、『黒煙』に対して新井紀一作『坑夫の夢』秩序紊乱の恐れあると警告す。
二月、『黒煙』、藤井真澄の『廃刊の言葉』をのせ、廃刊す。
同月、堺利彦・山川均らの『新社会』、『新社会評論』と改題。
同月七日、片上伸の発起にてトルストイ会の設立。

一月、シベリアにソヴェート政権復活す。
同月二五日、大日本機械技工組合発会式、東京において挙行す。
二月、ドイツ共産党第二回大会、極左分子を除名す。
同月、フランス統一社会党ストラスブルグ大会、第二インターナショナル脱退を宣言す。
同月一一日、普通選挙促進大会、上野・芝両公園に開催す。
同月、岡山県妹尾村呑海等小作争議。地主側耕地取戻、賃傭農耕し、小作側団結破れ惨敗す。小作組合発達過程における典型的争議とす。
同月、東京市電従組八千名スト。六日間にわたる。
三月、ドイツに「カップ騒動」起る。
同月三日、東大教授森戸辰男、クロポトキンの思想を紹介し、筆禍にかかり、所謂森戸事件起る。

生きる為に（大城永昌）〃
僕の立場から（井田秀明）〃
歌舞伎劇と民衆劇（中村吉蔵）〃
労働の芸術化か思想の芸術化か（長谷川如是閑）『解放』2
新文化の創造と労働運動（野村隈畔）〃
歌集『無産者』（西川百子）弘文堂書房刊2
誘惑（山川亮）『早稲田文学』3
一粒の粟（中条百合子）『解放』3
思想の危険より生活の危険（内田魯庵）『太陽』3
或兵卒の記録（細田民樹）『雄弁』4
『生存を拒絶する人』（上司小剣）聚英閣刊4
『哀楽児』（福田正夫）〃
歌集無産者を読む（厨川白村）『解放』4
ゴルスワージイの社会劇（菊池寛）『早稲田文学』4
ボリシェヴィズムの政府と芸術（原田実）〃
手をさしのべる男（小川未明）『中央公論』5
死線を越えて（賀川豊彦）『改造』5
雪の夜（宮島資夫）『新時代』5

三月、内藤辰雄、帝国鉄道新聞に入社す。
四月、早大にロシア文学科新設（主任は片上伸）。
同月、『労働運動』関西版を設く。
同月、『新小説』は細田民樹の小説『極みなき破局』のため風俗紊乱の廉をもって発売禁止さる。
同月、藤井真澄ら『黒煙』同人は茅原華山とともに『内観』を創刊す。
同月、著作家組合、機関誌『著作評論』を創刊す。
五月、メーデー準備に幸徳秋水『基督抹殺論』の印税が堺利彦によって供された。
同月、荒畑寒村は大阪に行き、岩出金次郎の『労働新聞』の編集にあたる。和田信義ら退社す。それ以後、荒畑は毎月二回労働問題研究会を開き、次第に関西鉄工組合・住友伸銅工組合などと結合し始む。
同月、岩野泡鳴、化膿性腹炎のため逝く。年四十八。
同月、自由人聯盟誕生す。
同月、宮島資夫、加藤一夫の依頼により比叡山を降りて、大阪・京都の自由人聯盟の講演会に演説す。それ

同月一三日、東北シベリヤ・ニコラエフスクにパルチザンと衝突し、日本人・領事たち一〇〇余名死し、尼港事件起る。
同月二三日、同盟罷業・持久戦中の争議団、芝浦製作所・明電社・池貝鉄工所・大阪鉄工所の各争議団、提携す。
四月一二日、国際労働代表岡崎、顧問等政府より指命発表され、排斥運動起る。
同月、日本『尼港救援軍』侵出し、後サガレンを軍事占領す。
五月、フランスC・G・Tのオルレアン大会。少数派はC・G・Tの内部に『革命的サンジカリスト委員会』を組織す。
同月、中国共産党生誕。第三インターナショナル極東代表ボクポップ、陳独秀を得、彼をその代表となす。
同月二日、日本最初のメーデー上野に挙行、一五団体一〇、〇〇〇人参加す。
同月、メーデを機縁として友愛会・信友会・樋口政太などの正進会・熊

『性格破産者』（江口渙）新潮社刊5
詩歌集『どん底で歌う』（根岸正吉・伊藤公敬）日本評論社刊5
『未墾地』（福田正夫）聚英閣刊5
文芸の社会化（特集、小川未明・江口渙・中村吉蔵・有島武郎・本間久雄）『読売新聞』5—6
罪の記録（宮地嘉六）『新潮』6
佐野中隊長（小泉鉄）『我等』6
『無明』（加藤一夫）春秋社刊6
短歌・東京にて（西川百子）『解放』6
『松倉米吉歌集』行路詩社刊6
労働者（内藤辰雄）『内観』6—
芸術的社会主義者ウイリアム・モリス（堺利彦）『改造』6
ブラック・リスト（江口渙）『新潮』7
刑余の姿（上司小剣）『解放』8
民衆芸術としての新講談（本間久雄）『早稲田文学』8
卒倒者（内藤辰雄）『新小説』8
現代文芸の根本欠陥（加藤一夫）『早稲田文学』9
第四階級の文学（中野秀人）『文章世界』9
真理の使徒ロマン・ロラン（新城和

以後、比叡山に警察の注意次第にきびしくなる。
六月、高畠素之の『資本論』翻訳完成祝賀会開催す。
同月、『労働運動』六号をもって廃刊す。
同月、菊池寛の『真珠夫人』、『東京日々』紙上に現れはじめ通俗小説これからさかんになる。
七月、『日本労働新聞』京都版を出し友愛会西陣支部・印刷工組合などの報道にあたる。
同月、吉田金重『内観』に『錠前屋から』という文章を寄す。大阪にて錠前屋の職工をしていた。
八月、友愛会大会開き、大杉栄の影響下にあった正進会の活潑な討論により、宣言中「労働者の解放のためには如何なる手段も厭うべきでない」との言葉が見出されるほど急進化した。これより友愛会内の急進主義と協調主義の対立いよいよ深刻化す。
同月、日本社会主義同盟の創立計画は左記発起人によって進められることになった。
赤松克麿（新人会）、荒畑勝三（大阪

田国吉などの工人会・中西伊之助などの日本交通労働組合・石川信造らの汎労会・下中弥三郎らの啓明会・岡田金太郎らの大進会・横光晃一らの工友会など九組合が労働組合同盟会を結成、未組織労働者の吸収と相互の提携を目的とした。幹事は野村孝太郎・松岡駒吉・武井栄。
同月、日本海員組合発会式東京によって挙行さる。二三団体五、〇〇〇名を組織。
六月、アメリカ共産労働党は共産党の一部を加えて統一共産党を組織。一月すでに共産党は非合法に追いこまれており、もちろん事実上の秘密結社であった。
七月、モスクワにおいてコミンテルン第二回世界大会行われ、八月まで続く。
同月、イギリス共産党結成す。
四月、国際労働会議、イタリー・ゼノアに開催。日本の資本家代表八時間制特殊国扱を力説し辛うじて承認さる。
同月、八幡製鉄所第二回総罷工及び

一)『新潮』9
文学革命の意義(平林初之輔)『文章世界』9
民衆文化への疑義に就いて(大山郁夫)『我等』9
山口孤剣君を憶う(堺利彦)『社会主義』9
熱烈奔放(尾崎士郎)〃
土方部屋(宮島資夫)『解放』10
ある女の死(小川未明)〃
戯曲・国境の夜(秋田雨雀)『新小説』10
服役の頃(細田民樹)『文章世界』10
反抗的精神と文芸(平林初之輔)『サンエス』10
現代文学の正体(〃)『新潮』10
文学者より観たる社会主義同盟(江口渙)『読売新聞』10
芸術か直接行動か(〃)『時事新報』10
乞食同志の会話(長谷川如是閑)『大観』11
牧師のボーイ(細田源吉)〃
裏切られた人々(宮地嘉六)『解放』11
淳吉と失業者(江口渙)『文章世界』11

L・L会)、麻生久(日本労働総同盟)、布留川桂(正進会)、橋浦時雄(北郊自主会)、服部浜次(労働組合研究会)、岩佐作太郎(北風会)、京谷周一(鉱夫総同盟)、近藤憲二(東京労働運動同盟)、水沼辰夫(東京労働組合同盟会)、前川二亨(交通労働組合)、延島英一(信友会)、大庭柯公(著作家組合)、島中雄三(文化学会)、高畠素之(大衆運動社)、高津正道(暁民会)、田村大秀(法政大学扶信会)、和田巌(早大建設者同盟)、渡辺満三(時計工組合)、吉田只次(横浜赤旗会)、加藤一夫、加藤勘十、小川未明、岡千代彦、大杉栄、堺利彦、植田好太郎、山川均、山崎今朝弥、吉川守邦。
これ以後十二月まで毎月一回申込者懇談会・宣伝演説会・講演会・ブックデーが催された。十二月の創立大会まで三千人を算えた。文学者では江口渙・藤森成吉ら加盟す。
同月、吉江孤雁フランスより帰朝。
九月、日本社会主義同盟機関紙『社会主義』をその組織拡大のために創刊す。即時発禁さる。巻頭にゴルキ

王子工廠争議に関する裁判判決あり、七八名に課刑。
同月、大阪で友愛会・刷毛工組合・関西鉄工組合・新進会・大阪鉄工組合・向上会・車夫連盟・印刷工革新同志会が中心となり失業問題連合大会を中央公会堂にひらく。
七月三一日より九月二六日まで、イタリーのミラノにおいて二八〇の工場が労働者に完全に占領された。
同月、孫文などによって広東政府成立す。
同月一四日・東京富士瓦斯押上工場男女職工二、〇〇〇余は団結権の承認を要求して二週間にわたってストを行った。日本最初の組合承認要求争議とす。
九月、アメリカ・ウエスト・ヴァジニアーにおいて鉱山労働者のストライキ。警官と衝突。罷業者二〇〇名射殺さる。
同月、東京一五大新聞印刷工の争議再発す。弾圧と聯絡欠如のため失敗す(正進会)。
九月、『日本労働新聞』主催の労働問

文芸の社会的要素（白鳥省吾）『中央文学』11
一兵卒の立場から（平林初之輔）『新潮』11
黒衣の人（沖野岩三郎）『大観』12

ーの『知識階級への挑戦』を掲ぐ。『新社会評論』の改題であり、編集委員は赤松克磨・麻生久・槌田好太郎・山川均の四名。
山口孤剣の追悼を行っている。
同月、内藤辰雄・吉田金重とともに平沢計七のところに働く。
同月、宮島資夫、比叡山より帰京し文筆生活に入った。
十月、平沢計七、郊外の鉄工・紡績工を組織し、純労働者組合を結成す。
同月、『社会主義』編集委員、赤松克磨・橋浦時雄・小川未明・大杉栄・山崎今朝弥と変更す。
同月、大杉栄、極東社会主義者会議に出席し、コミンテルン代表と会い運動資金など受け取り、帰朝す。
同月、『万朝報』社長黒岩涙香逝く。年五六。
十一月、加藤一夫らの自由人連盟は機関雑誌『自由人』を創刊す。
同月、『解放』発売禁止さる。
十二月十日、神田キリスト教青年会館において日本社会主義同盟創立大会を開く。すでに当局の意図に応じ十二月九日在京同志打ち合せ会を開

題大講演会、京阪神にひらかれ極めて盛況であった。講師は、堺利彦、麻生久、加藤勘十、賀川豊彦であった。
一〇月六日、友愛会鉱山部の主唱によって全国抗夫組合・大日本鉱山労働同盟会の三団体は足尾銅山の争議を機会として全日本鉱夫総聯合会を開く。理事は麻生久・棚橋小虎・酒井栄蔵・北沢新次郎で、組織人員三、二〇〇人。
一二月、ドイツ独立社会民主党の多数派左翼、ドイツ共産党と合同し、合同共産党を形成す。
同月、フランス統一社会党ツール大会。二一カ条の承認とロンゲを除名すべしとのモスクワの要求を認め、コミンテルン加入を決議。統一社会党は分裂、多数派は共産党、少数派は社会党をそれぞれ組織す。
同月、三越洋服技工争議、次で全三越に争議起り、東京大阪両三越呼応し三越占領の策行われ東西より一斉攻撃起る。

き、それを創立大会に変更し規約宣言役員選挙の件は発起人に一任することにきめ、十日は創立報告演説会とした。執行委員岩佐作太郎起って報告するや直ちに解散を命ぜらる。
執行委員は次の如し。
赤松克麿、麻生久、阿部小一郎、江口渙、布留川桂、服部浜次、橋浦時雄、原沢武之助、岩佐作太郎、近藤憲二、加藤一夫、加藤勘十、北原竜雄、百瀬二郎、水沼辰夫、望月桂、新明正道、諏訪与三郎、杉浦啓一、髙田村逸、吉田順司、竹内一郎、和田久太郎、渡辺善寿、渡辺満三、和田巌、吉川守邦、髙津正道。
同月、『文章世界』廃刊となる。
月は不詳だが、この年川崎造船所の労働者によって「日本労働劇団」が生れ、翌大正十年に平沢計七が組織した労働劇団とともに日本の労働者演劇運動の先駆となった。

一九二一年（大正一〇年）

凱旋（細田民樹）『太陽』1
戦慄（小川未明）〃
お沢と其良人（宮地嘉六）『解放』1
象やの粂さん（長谷川如是閑）『中央公論』1
上酒婆（上司小剣）『早稲田文学』1
老旗振り（小川未明）〃
喰倒れ（生方敏郎）〃
炭坑の人々（白鳥省吾）『小説倶楽部』1
心と心（大泉黒石）〃
新国民主義（吉江孤雁）『改造』1
己の要求（有島武郎）〃
ゴオルキーの作の特色（宮地嘉六）『中央文学』1
民衆芸術の二問題（平林初之輔）『時事新報』1
芸術の蘇生時代（小川未明）〃
民衆芸術としての探偵小説（長谷川天渓）『新文学』1
死刑囚の写真（小川未明）『中央公論』2
家庭（加藤一夫）『解放』2
お猿の番人になるまで（長谷川如是

一月二十一日、五反田相生亭でひらかれた自由人連盟演説会席上、雑誌『中外』記者松本淳三は大和民労会員のために短刀で刺された。
同月、宮島資夫、労働社の新聞『労働者』の編集に従事す。
二月、第一次『種蒔く人』、小牧近江、金子洋文、今野賢三、山川亮、畠山松次郎らを同人として秋田県土崎港で創刊す。部数二〇〇。
三月十一日、中村吉蔵等の組織せる演劇研究会、イプセン会第一回例会開かる。藤井真澄たちこれに参加す。
四月、この月以後次第にアナアキスト対ボルシェヴィキとの対立、所謂アナボルの論争が開始される。
同月、第一次『種蒔く人』三号を以て終刊す。
同月平沢計七ら、藤井真澄らの『黒煙』系の『民衆芸術研究会』の援助によって労働劇団の活動を始む。主として、江東五ノ橋館で興行し、後堺枯川・白柳秀湖の援助で新橋でも

一月一二日、東京足立鉄工場争議、職工側（東京鉄工組合）工場襲撃、場主等傷害、機械破壊を敢行。
同月二九日、大杉栄・近藤憲二・高津正道・竹内一郎・寺内鼎・近藤栄蔵・三田村四郎らは神田北甲賀町駿台倶楽部内に労働運動社を設け、週刊『労働運動』を創刊す。
同月、友愛会東京連合会主事棚橋小虎は友愛会機関紙『労働』に『労働組合に帰れ』という一文を発表し、労働組合から社会主義が遊離し、街頭化することを警告した。
同月、吉田一、高尾平兵衛、和田軌一郎たちは大塚に労働社を起し、月刊新聞『労働者』を発刊し、大杉たちに対抗した。正進会と接近す。
二月、借家人同盟会は第一回演説会を大阪に開催す。
三月、ロシア共産党第一〇回大会が開かれ、新経済政策を採用。
同月、社会主義同盟は堺・荒畑・高津・岩佐ら一四人を派して関西、中国、九州の遊説に向わせたが、大阪・

閑）『解放』2
放火顛末（細田民樹）『新小説』2
ある心の自叙伝（長谷川如是閑）『我等』2
第二インターナショナルか第三インターナショナルか？（小牧近江）『第一次種蒔く人』2
シャルル・ルイ・フィリップに就いて（小牧近江）『中央文学』2
性格と社会運動（賀川豊彦）『新文学』2
生の明暗（新居格）『解放』2
残骸（宮島資夫）『大観』3
砂地の花（小川未明）『小説倶楽部』3
詩・恐ろしい低空（福田正夫）『解放』3
第三インターナショナルと議会政略（小牧近江）『第一次種蒔く人』3
老火夫（宮島資夫）『太陽』4
人間の機械（小川未明）『早稲田文学』4
日露のおじさん（細田民樹）『新潮』4
童話・お釈迦様と花（秋田雨雀）『自由教育』4
『響かぬ鐘』（加藤一夫）春秋社刊4

行った。
五月、社会主義同盟は解散されたがそれまでの文学者の加盟者は小川未明・加藤一夫・秋田雨雀・藤森成吉・江口渙・小牧近江・佐々木孝丸・村松正俊・尾崎士郎・前田河広一郎・平林初之輔などであった。この大会にては加藤・江口は席上検束された。
同月、吉江喬松を中心とするフランス同好会の計画があり、そこで小牧と佐々木孝丸・村松正俊らが結ばれ、長谷川如是閑によって柳瀬が結ばれた。
同月、エロシェンコ退去命令によって去る。かれは日本のエスペラント運動を大きく発展させた盲詩人で、流浪中に日本に来て秋田雨雀らとしたしみ、すぐれた童話集をも出している。中村ツネにすぐれたエロシェンコ像あり。追放後はウラジオを経てソヴェートに帰った。
六月、『労働運動』廃刊す。
同月、『社会主義』は発禁となった。社会主義同盟第二回大会の特集で、和田久太郎『弱者の狂憤』、秋田雨雀『メーデー印象記』があるほか、第

京都の演説会は警察と国粋会との蹂躙するところとなり、広島・福山・八幡・博多の会場は警察の干渉で拒絶された。
四月、足尾銅山に争議があったが、その争議をめぐって革命的サンジカリストたちと麻生久・棚橋小虎たちとの間に評価の対立が生れた。麻生たちの意見は妥当なものであったが革命的サンジカリストによる知識階級指導者排斥論は急速に関東の労働者間にひろがり、この頃が大杉たちの全盛時代であった。
五月九日、社会主義同盟第二回大会が神田で開催。解散せしめられ、二八日に同盟禁止さる。この解体以後分派闘争が公然と行われはじめることになった。
同月、大阪藤永田造船争議。総罷業次いで相沢造船・村尾造船・旭鉄工・合同紡績等同情罷工し、全大阪混乱す。
六月、モスクワにコミンテルン第三回世界大会。
同月四日、信友会・正進会など友愛会と対立し、友愛会東京聯合会は労働組合同盟会を脱退す。

遺されし児（沖野岩三郎）『新公論』5
閃光（宮島資夫）『小説倶楽部』5
詩・虐げられた小草（秋田雨雀）『社会主義』5
冷静なる記憶（小川未明）『社会主義』5
『黎明』（佐藤緑葉）新潮社刊5
大杉栄論（宮島資夫）『解放』5
阿部次郎氏と社会問題（村松正俊）『新小説』5
創作上の態度（宮地嘉六）『中央文学』5
社会主義的傾向の文学は人心を乾燥にする（武者小路実篤）『読売新聞』
文学の劫久性と現実（前田河広一郎）『読売新聞』5
文学と社会主義と（平林初之輔）『読売新聞』5
文芸の解放（吉江孤雁）『新潮』5
崩れかかる街（小川未明）『中央公論』6
煉獄（藤森成吉）『万朝報』6
最初の涙（島田清次郎）『解放』6
現代社会意識と芸術の将来（村松正俊）『新潮』6
自伝（片山潜）『改造』6

二回大会の報告決議で埋められる。
同月五日、佐藤緑葉『黎明』記念会如水館にて開く。
八月、コミンテルン極東支部に連絡した近藤栄蔵は下関で捕われたが、その持参した金によって暁民共産党を創立、反軍パンフレットを撒布した。
同月二十日、種蒔き社第一回講演会秋田県一日市町にて行わる。
九月、第三次『ロシア文学』創刊（三田書房）外村史郎・蔵原惟人ら東京外語露西亜文学研究会によるもの。
同月、和田久太郎・近藤憲二らは麹町元園町元社会主義同盟本部にて労働運動社の再挙を計る。
十月、『壊人』橋浦泰雄・村上吉蔵らによって創刊さる。
同月、再刊『種蒔く人』小牧近江・金子洋文・山川亮・柳瀬正夢・村松正俊・今野賢三・佐々木孝丸・松本弘二などによって創刊す。創刊号ただちに発禁となる。
『宣言』『思想家に訴う』を発表し、次の執筆者を掲ぐ。
有島武郎、アンリ・バルビュス、馬場孤蝶、エドワード・カーペンタア、

同月、神戸三菱及び川崎造船所争議、争議中、軍隊出動、警官抜剣事件などがあった。罷業三万五千人、死傷三〇〇名、収監二五〇名を出す。
七月、モスクワにおいて赤色労働組合インターナショナル（プロフィンテルン）の創立大会開かる。
同月五日、友愛会東京聯合会第二回大会を開催、現実、理論両派の対立あり、混乱す。
知識階級排斥の実現策決定さる。
同月七日、棚橋小虎は東京聯合会主事を辞任、それより東京鉄工組合、赤羽労働聯合会、黒色労働組合などぞくぞくと聯合会を脱退す。
八月、海軍軍縮会議ワシントンに開催す。
暁民共産党結成。
九月、フランスC・G・T中央委員会は革命的サンジカリスト委員会加盟を除名。
同月、鈴木文治等は日本労働学校を芝唯一館に開設。
一〇月一日、総同盟友愛会一〇周年大会、名称より友愛会の字を削ることに決定。次いで全総同盟の機関紙発行。大組合主義愈々確立す。

人格主義を駁す（平林初之輔）『新文学』6
カーペンター（石川三四郎）『我等』6
失職（宮島資夫）『解放』7
戯曲・大塩平八郎（中村吉蔵）『新小説』7
河畔（宮地嘉六）『中央公論』7
夕陽（吉田金重）『社会主義』7
獄中より大杉栄さんに（高尾平公）『社会主義』7
日本のナイヒリスト（藤森成吉）『社会主義』7
雨を衝いて（吉田金重）『解放』8
怒れる高村軍曹（**新井紀一**）『**早稲田文学**』8
松村訓導（沖野岩三郎）『日本一』8
窟へ（吉田金重）『自由人』8
「**クラルテ**」**の運動と日本の思想家**（**小牧近江**）『**我等**』8
民衆芸術論の理論と実際（平林初之輔）『新潮』8
労働小説家の一群（内藤辰雄）『時事新報』8
同胞（細田民樹）『解放』9
戯曲・切支丹ころび（高倉輝）『改造』9

クリスチアン・コルネリセン、ワシリイ・エロシェンコ、江口渙、藤井真澄、藤森成吉、福田正夫、アナトル・フランス、ポール・ジン、長谷川如是閑、林倭衛、平林初之輔、石川三四郎、神近市子、加藤一夫、川路柳虹、宮地嘉六、宮島資夫、百田宗治、小川未明、ポール・ルクリュ、白鳥省吾、富田砕花、山川菊栄、吉江喬松。
創刊号部数三千。
十一月、『種蒔く人』は特集『飢えたるロシアの為めに』を行う。
十二月、暁民共産党事件起る。
同月二十七日、種蒔き社第二回講演会。秋田五城目で種蒔き社湖東支部主催であった。
同月、『種蒔く人』は十二月号を非軍国主義号とす。

一一月四日、首相原敬は中岡艮一のため東京駅頭で刺殺された。
同月、芝浦労働組合、従来の四団体を合同し一工場一団体の戦闘単位、縦断組合主義を実行す。以後この傾向続出す。
同月、露西亜飢餓同情労働会組織さる。
十二月十一日、官業労働総同盟臨時大会。軍縮による失業反対を決議す。
同月十三日、関東労働同盟成立す。東京鉄工組合など脱退後、東京聯合会と友愛会の関東団体と合同し新に成立したもの。

明るい世界へ（小川未明）『小説倶楽部』9
霊魂のための戦士（大杉栄）『改造』9
小川未明氏に与う（小島徳弥）『国民新聞』9
プロレタリアート芸術（宮地嘉六）『読売』9
民衆芸術の精神（小川未明）『東京日日』9
地獄（細田民樹）『大観』10
道草（宮島資夫）『太陽』10
戯曲・老船夫（金子洋文）『新潮』10
戯曲・浪人宿（藤井真澄）『早稲田文学』10
山の誘惑（新井紀一）『三田文学』10
ある日の悪夢（神近市子）『我等』10
戯曲・夜明をまつ（下村千秋）『新小説』10
石炭がら（山川菊栄飜案）『種蒔く人』10
三人の乞食（沼田流人）〃
詩・炎の海（福田正夫）〃
詩・爛れた眼（白鳥省吾）〃
詩・刃に刺されて（松本淳三）〃
比叡の雪（宮島資夫）〃
俳句・罷業の朝（山上正義）〃

盗　難（新井紀一）『現代文学』10
労働運動と知識階級（村松正俊）『種蒔く人』10
文芸批評家の感想二篇（津田光造）『我等』10
種蒔く人々（秋田雨雀）『東京日々』10
赤シャツの仲間（宮地嘉六）『中央公論』11
工場主の娘（宮地嘉六）『太陽』11
戯曲・失職者（渡平民）『舞台芸術』11
罪を知らぬ人々（沖野岩三郎）『我等』11
村長殺し（片岡厚）『種蒔く人』11
詩・血の日曜日（井上康文）〃
詩・飢えて死ぬ露西亜に（川路柳虹）〃
詩・神様とロシア（金子洋文）〃
詩・露西亜民衆に与う（加藤一夫）〃
詩・北天の星（百田宗治）〃
詩・Tristitia Mundi（村松正俊）〃
『空に指して語る』（内藤辰雄）天祜社刊11
『逃避行』（尾崎士郎）改造社刊11
『死線を越えて』（賀川豊彦）改造社

刊11
『最後の溜息』（エロシェンコ・秋田雨雀）叢文閣刊11
現実のロシアと架空のロシア（平林初之輔）『種蒔く人』11
西田幾太郎氏の「真美の合一点」を評す（村松正俊）『種蒔く人』11
軍備縮小の徹底的主張（小牧近江）『種蒔く人』11
社会文学者に対する不満と要求（藤井真澄）『新潮』11
ポール・クローデルの印象（小牧近江）『日本詩人』11
未来主義の意義（村松正俊）『詩聖』11
地下室にて（宮地嘉六）『時事新報』11
眼（金子洋文）『種蒔く人』12
月（藤森成吉）〃
空を指して語る（内藤辰雄）〃
保証人（吉田金重）〃
童話詩・コスモポリタン（佐々木孝丸）〃
太陽を射るもの（賀川豊彦）『改造社刊』12
詩・戦争はよくない（武者小路実篤）『種蒔く人』12

第二半インターナショナルの死産（小牧近江）『太陽』12
唯物史観と文学（平林初之輔）『新潮』12
非軍国主義の論理（社論、無署名執筆は小牧近江）
革命家を取扱った最近の創作（藤井真澄）『種蒔く人』12
露西亜革命と婦人（山川菊栄）〃
平和私観（吉江孤雁）〃
芸術に於ける個性と民衆（村松正俊）『東京日日』12

一九二二年（大正一一年）

虚脱者（宮島資夫）『解放』1
牢獄の中の歌い手（ホイットマン作・有島武郎訳）『解放』1
凍てついた眼玉（秋田雨雀）『早稲田文学』1
雄阿寒おろし（神近市子）『**種蒔く人**』1
旅行鞄（松本弘二）〃
鉄鎖を断つ（川崎春二）〃
乱　舞（井東憲）〃
詩・現実の方へ！ Im Anfang war die That（村松正俊）
「労働祭（メーデー）」前夜の曲（鳳逸平）〃
俺の詩三箇（石渡山達）〃
地上にてよびかくる言葉（角園春之助）〃
プロレタリアートの歌える（松本淳三）〃
『女人焚殺』（高倉輝）アルス刊1
『日本社会詩人集』（福田正夫・賀川豊彦・富田砕花・白鳥省吾・百田宗治・加藤一夫共著）日本評論社刊1
『泰西社会詩人詩集』（百田宗治ら訳）

一月、『種蒔く人』発売禁止さる。
同月、『壊人』四号をもって廃刊す。
同月、平林初之輔、津田光造、松本淳三ら『種蒔く人』同人となる。
同月、『前衛』創刊す。堺利彦・山川均・荒畑寒村・上田茂樹・高橋貞樹・田所輝明らによるもの。
同月、『現代三十三人集』出版さる。印税を以て、武者小路実篤の『新しき村』電化の新設備の資に宛てんがため。
同月、堺利彦、一兇漢に襲わる。
同月、大杉栄・伊藤野枝・近藤憲二・村木源次郎・和田久太郎ら本郷駒込町一五に労働運動社を設け、月刊『労働運動』を創刊す。信友会・正進会これを支持し、以後アナ・ボルの対立激化す。
二月、『小説倶楽部』（民衆芸術社）創刊。前年一月創刊された『演芸と講談』の後身。山田清三郎・近藤憲二らが社主を説得して改革したも

一月九日、総同盟、『政治主義排撃、普選運動放棄―直接主義』を可決。
同月二十八日、日本製鋼広島工場職工六百人争議す。
同月、極東民族労働大会、モスクワに開催す。アジアのプロレタリアの戦線統一成立す。
同月、悪法「過激社会運動取締法案」反対の無産者同盟組織され、全国労働組合同盟と提携抗争す。
同月、奈良県野原村に小作一揆。後騒擾罪にて起訴さる。
同月、プロレタリア的統一戦線に関するコミンテルンの檄、発せらる。
同月、香港において海員工会の大罷業起る。
二月九日、絶対主義権力の支柱の一人山県有朋の国葬行わる。
二月二十一日、横浜船渠職工四千罷業す。争議団側に右左の抗争を生じ休戦となり敗北す。すなわち左翼は横浜造船工組合・総同盟で、右翼は

芸術は革命的精神に醱酵す（小川未明）『解放』1
労働文学の主張（宮島資夫）『解放』1
第四階級の文学（平林初之輔）『解放』1
芸術に於ける国際主義と世界主義（社論）『種蒔く人』1
宗教的センチメンタリズムと偶像崇拝の時代錯誤（佐々木孝丸）『種蒔く人』1
戦争と愛国観念（小牧近江）『解放』1
第四階級の文学（宮島資夫）『読売』1
宣言一つ（有島武郎）『改造』1
第四階級の芸術（有島武郎）『読売』1
現文壇の革新策（平林初之輔）『新潮』1
第四階級の芸術（長谷川如是閑）『読売』1
革新前の日本文壇（特集、村松正俊・正宗白鳥・小川未明・平林初之輔・広津和郎・宮島新三郎・藤井真澄）『解放』1
死と生と一緒（細井和喜蔵）『種蒔く

の。
同月、帝国議会に過激思想取締法案上程せられんとし、思想家皆それに対する抗議に立つ。
同月二十六日、ホイットマン誕生百年記念講演会、早稲田大学恩賜館内に開かる。有島武郎・日夏耿之介・吉田絃二郎・白鳥省吾などの講演あり。
三月一日、過激思想取締法案反対演説会行われ（青年会館）、大山郁夫・永井柳太郎らとともに秋田雨雀演説す。
三月十一日、神田「池国」で「階級芸術、階級意識に就ての問題、並に過激主義取締法案に就て緊急討議」する文芸家懇親会があり、平林初之輔が法案反対の理由を説明し、議長松本淳三が朗読した決議文が満場一致可決さる。この会を恒常的とすることになり、自由思想家組合生る。実行委員は小島徳弥・前田河広一郎・佐野袈裟美・橋浦泰雄・松本淳三と定る。参会者は他に金子洋文・松本弘二・吉田金重・佐々木孝丸・上野虎雄・山川亮・小川未明・山辺林

造機技工聯合であった。
同月二十三日、普選案を野党上程し否決さる。請願数万に上り、警官弾圧し、抜剣問題起る。
同月、ドイツ鉄道従業員の大ストライキ。参加者八十万人。南ドイツにおいて金属工の大ストライキ、参加者二十万人。
同月、フランスC・G・Tの被除名派は『統一労働総同盟』（C・G・T・U）を組織す。
同月、イタリー労働総同盟、イタリーサンジカリスト同盟、イタリー労働同盟、鉄道従業員組合の大合同成立し、労働者同盟成立す。
三月、水平社結成さる。被虐待部落民解放を積極的に要求す。中央執行委員長は南梅吉。
同月、西部交通労働同盟、大阪市電を中心に組織さる。
同月、北京大学、宗教特に基督教を帝国主義の傀儡として排斥議決す。
同月、イタリー海港労働者のセネスト行わる。

人』2
煽　動（新井紀一）〃
へんな客人（前田河広一郎）〃
人間派と蟻の会議（金子洋文）〃
童話・理草花（エロシェンコ）〃
鈴の響き（吉田金重）『日本文芸』2
『諸土に芽ぐむもの』（中西伊之助）
改造社刊2
詩集『青い翼』（百田宗治）大鐙閣刊
2
阿部次郎氏の人格主義を難ず（竹内仁）『新潮』2
ブルジョアの芸術観（佐野袈裟美）
『東京日日』2
有島武郎氏の絶望の宣言（堺利彦）
『前衛』2
プロレタリアの文学（吉田金重）『種蒔く人』2
三たび飢えたるロシアのために（社論）〃
階級芸術の問題（片上伸）『新潮』2
民衆の中に動きつつある芸術的新機運（特集、権田保之助ら）『早稲田文学』2
プロレタリアートの文芸について
（武藤直治）『早稲田文学』2
未来主義の方へ（村松正俊）『東京日

太郎・川崎長太郎・清水弥太郎・村松正俊・畠山松次郎・今野賢三・森輝・新居格・津田光造・柳瀬正夢・小牧近江・川崎春二・大藤治郎・江間道助・秋田雨雀・山内房吉・細田民樹・景山要・辻潤の三二名で、種蒔き社の提唱によるものであった。
同月十五日、種蒔き社第一回文芸講演会、神田青年会館でひらかれるところ開会間際に禁止さる。予告によれば、秋田雨雀・藤森成吉・神近市子・前田河広一郎・白鳥省吾・吉江孤雁の講演の外、種蒔き社同人の余興としてロマン・ローランの劇『ダントン』を上演する筈であった。
同月、美術団体「第一作家聯盟」創立す。
四月、『種蒔く人』は宣伝用リーフレット『飛び行く種子』を創刊す。種蒔き社はガンジー捕縛に対してイギリス政府に抗議す。同人村松正俊・平林初之輔・金子洋文・佐々木孝丸・京都・大阪・神戸に講演旅行す。
同月、青野季吉・市川正一・平林初之輔・佐野文夫によって『無産階級』創刊。

四月、日本農民組合組織さる。
同月十一日、対露交渉ゼノア会議開始、劈頭英・露衝突し、後、仏・白及日本各々ソヴェートと対立し、決裂す。
同月十六日、大連の日露交渉決裂しチタ代表引き上ぐ。
同月二十五日、暁民共産党事件判決あり。
同月二十九日、労働組合同盟会、反総同盟系の京阪諸団体によって組織された。（サンジカリズム傾向）
同月二十八日、兵庫県伊香保村小作争議起り、貢米共同管理す。日本農民組合に団体加入し、闘争、有利解決す。
同月二十日及び五月一日、第二インターナショナル側のサボタージュにかかわらず、ウインナ会議において決定された共同デモンストレーションは非常な成功を以て終った。
同月、アメリカ鉱山労働者の大ストライキ。
五月一日、第三回メーデー。東京・大阪・神戸・足尾・岡山・横浜・尼

日』2
獄室の暗影（**尾崎士郎**）『**改造**』3
傷ついた人（小川未明）『中央公論』3
惧　れ（新井紀一）〃
種ガ島の名人（三島章道）『解放』3
トロッコ（芥川龍之介）『大観』3
子を打つ（安成二郎）『我等』3
無産階級の芸術としての未来主義の意義（社論）『種蒔く人』3
無　日（平戸廉吉）〃
肥後守（今東光）『新思想』3
詩・白き指よ強き瞳よ（萩原恭次郎）『種蒔く人』3
復讐（バルビュス作 佐々木孝丸訳）『早稲田文学』3
『**第四階級の文学**』（**宮島資夫**）**下出書店刊3**
『新社会への芸術』（西村陽吉）東雲堂刊3
『船出の歌』（福田正夫）大鐙閣刊3
戯曲の創造性と価値（**佐々木孝丸**）『**種蒔く人**』3
生きんとする本能（渡辺順三）『種蒔く人』3
支配階級の分裂と知識階級（平林初之輔）『朝日新聞』3
文壇のプロレタリア論（加藤一夫）

同月、『シムーン』創刊。同人は加藤一夫・佐野袈裟美・内藤辰雄・津田光造・岡本潤・井東憲・吉田金重・山内房吉・高橋新吉・川崎春二・新島栄治・渡辺順三・角園春之助。

同月二十一日夜、種蒔き社地方講演会神戸と大阪で行わる。大阪では村松正俊「世界主義の良心」、佐々木孝丸は「世界主義とエスペラント」、平林初之輔は「唯物史観より見たる文芸」、金子洋文は「空想社会に於ける男女関係」をそれぞれ講演し、異端座同人が洋文作脚本『洗濯屋と詩人』を朗読す。

同月、この月より有島武郎と片上伸とがインテリゲンチャと労働運動の関係をめぐって論争す。

同月、石川啄木の十周忌にあたり、盛岡市外渋民村に記念碑除幕式行わる。

五月、菊池寛の『芸術本態（プロパア）**に階級なし』より、前田河と菊池の間に論争起る。**

同月、『シムーン』、『熱風』と改題す。

崎・八幡・京都等各地にデモ行わる。

同月二十七日、大阪鉄工所争議。持久困難となり、且、附近の争議惨敗に元気阻喪し惨敗す。

同月、広州において中国社会主義青年団第一回大会。共産青年インターナショナルへの加入を決議す。また広東において第一回全国労働大会行われ、中国共産党第二回大会開かる。

六月、機械労働組合聯合、組織さる。純労働・機械技工・労働会の三団体の合同したもので、サンジカリズム系の反総同盟傾向のもの。

同月、対露非干渉同盟会成立す。

同月、山梨県住吉村民が若尾地所部と争議す。地主側は自社耕作を開始したため、小作側は植付を開始す。そのため小作側業務妨害として送局され、後妥協す。

同月、コミンテルン執行委員会第二回総会。再び統一戦線戦術の問題を討議す。

同月、ラーテナウス暗殺事件に対する大デモ、全ドイツに行わる。

3
プロレタリア芸術に就いて—平林君に—（細田民樹）〃
〈文芸と階級意識〉特輯『改造』3
階級と文学（武者小路実篤）
プロレタリアートはそれ自身の文学を要求する（加藤一夫）
芸術と階級（宮島新三郎）
何のかかわりもなし（里見弴）
労働文学是非（特集、小川未明・水守亀之助・新井紀一・陶山務・平林初之輔）『無我の愛』3
民衆芸術の犠牲者（諸家）『婦人公論』3
細田民樹に答う（平林初之輔）『時事新報』3
芸術と革命との関係（有島武郎）3
戯曲・銭屋五兵衛父子（中村吉蔵）『改造』4
戯曲・洗濯屋と詩人（金子洋文）『解放』4
戯曲・科学食料会社（藤井真澄）〃
営倉（新井紀一）『小説倶楽部』4
四日間（下村千秋）〃
闇に生きる（松本淳三）『種蒔く人』4
青年指導者（津田光造）4

六月、種蒔き社、対露非干渉同盟会に加盟し、活躍す。
同月、前衛社、ロシア大飢饉のための救済基金募集を始む。
七月、森鴎外逝く。享年六三。また未来派詩人平戸廉吉逝去す。
八月、種蒔き社『人と思想叢書』の発行を予告し、金子洋文の『生ける武者小路実篤』を十月二十日に処女出版。
同月十七、八日、種蒔き社主催の「秋田地方ロシア飢饉救済講演会」行われ、今野・佐々木・小牧・金子・藤森・秋田・大藤が講演す。
同月、『種蒔く人』巻頭に「ロマン・ローラン対バルビュッスの論争」を五つの論争文の紹介によって特集した。
同月二十五日、種蒔き社のイニシアチーブで秋田青年思想研究会創立総会開く。
同月、『熱風』五号をもって廃刊す。
同月、劇団表現座結成さる。金子洋文・今野賢三・佐々木孝丸ら、秋田

同月、フランスC・G・T・Uのサン・テティエンヌ大会。共産派勝を制し、赤色労働組合インターナショナルへの加入を決定す。
同月、孫文、陳炯明との不和から再び広東を追わる。
七月二十日、国際労働代表選出を工場職場員千人単位制とし、組合を認めず、ために反対運動蜂起す。
同月二十五日、大阪尼崎の阪神電車従業員五百、組合宣伝の争議を起し、要求概略貫徹し大阪郊外交通労働者にショックを与う。
同月、日本共産党、コミンテルン日本支部として誕生す。
同月、フランス軍艦『クールベ』『ストラスブルグ』『パリー』において叛乱勃発す。
同月、アメリカ鉱山労働者のストライキ応援のため、三十万の鉄道従業員仕事を放棄す。
八月六日、大阪官業の向上会長八木辞任し、分裂す。右派純向上会を組織。

弾き初め（松本弘二）4
嘘に就いての感想（金子洋文）〃
戯曲・出獄の夜（渡平民）『人と芸術』4
金持と若者（津田光造）『熱風』4
懐しい食卓（吉田金重）〃
光を掲ぐる者（荒畑寒村）『前衛』4
再び阿部次郎氏に（竹内仁）『新潮』4
プロレタリア文学宣伝者に（細田民樹）〃
アンリ・バルビュスと非愛国思想（小牧近江）『早稲田文学』4
文壇に於ける階級闘争の意義（佐野袈裟美）『シムーン』4
芸術と革命の関係（有島武郎）『時事新報』4
吾等の要求する文芸（渡辺順三）『種蒔く人』4
過激法案に対する自己の立場（今野賢三）〃
土地と自由（三和一男）〃
有島武郎の態度（片上伸）『我等』4
民衆芸術論の基底（権田保之助）『表現』4
犬（金子洋文）『中央公論』5
路傍の人々（前田河広一郎）『表現』

へロシア飢餓救済運動公演を行う。
同月、『小説倶楽部』廃刊す。
同月、有島武郎、北海道狩太有島農園を解放す。
九月、『種蒔く人』「赤色プロレタリアカルト・インタナショナル研究」を特集す。
同月、『熱風』、『大衆』と改題す。
十月、有島武郎、個人雑誌『泉』を創刊す。
同月、木下白露などによって『文学世界』を創刊さる。
同月二十八日、前田河広一郎の『三等船客』出版記念会、神田小川町今文で催さる。小川未明・千葉亀雄・本間久雄・内藤辰雄ら十余名出席す。
同月三十一日、新興文学社主催の文芸大講演会開かる。神田の中央仏教会館で聴衆七百。講師は津田光造・池宮積宝重・佐野袈裟美・吉田金重・堀江かど江・平沢計七・井東憲・藤井真澄・宮島新三郎・吉植庄亮・内藤辰雄・前田河広一郎・井田秀明・岡本潤・前田春声・新島栄治など。

同月十五日、国際労働代表に協調会理事田沢義輔を指定発表す。向上会・総同盟等、代表否認抗議を国際事務局に発信す。
同月二十日。沢田合金争議の糾弾演説会に国粋会、乱入暴行し、破壊傷害大。
同月、山川均、『無産運動の方向転換』を雑誌『前衛』に発表し、それ以後労働運動・社会主義運動は新しい段階に入った。
同月、フランス労働者同盟のゼネスト計画失敗し、鉄道従業員組合の脱退により労働者同盟崩壊す。
同月、イタリのボログナ、ペサロ、シエナにおいて労働者とファシスト衝突す。
同月、京漢鉄道従業者は総工会準備委員会の下に結合し、第一回罷業を開始す。
九月二十二日、大阪最初の紡織労働組合総同盟組織さる。
同月二十五日、対露非干渉運動講演会、大阪・神戸・尼崎に開催さる。

5
詩・自由の廃虚（中山啓）『解放』5
河童（芥川龍之介）『新小説』5
或る機械（細井和喜蔵）『種蒔く人』5
洋刀の響（吉田金重）『熱風』5
予覚（井東憲）〃
暗い海（佐野袈裟美）〃
「心霊」の滅亡（青野季吉）『新潮』5
最後の幻覚（平林初之輔）『前衛』5
階級と文学との関係を論ず（江口渙）『新潮』5
武者小路実篤氏と新しき村の事業（大杉栄）〃
芸術本態に階級なし（菊池寛）『新潮』5
白樺派の作家と社会主義（加藤一夫）『解放』5
人気作家菊池・芥川・里見諸氏（前田河広一郎）〃
片上伸と吉江孤雁（平林初之輔）〃
当代劇作家の一群（藤井真澄）〃
女流作家と評論家（神近市子）〃
創作家の体験としての階級闘争の事実（武藤直治）『表現』5
『解放の芸術』（富田砕花）大鐙閣刊

同月、樋口一葉の記念碑、山梨県大藤村に建てらる。

十一月十日、竹内仁（片上伸の弟で阿部次郎批判で注目されていた批評家）恋人の両親を殺して自殺。

同月、山田清三郎・伊藤たちによって『新興文学』を創刊さる。

同月、佐々木孝丸を中心にフランス語から国際革命歌「インターナショナル」を翻訳す。

同月、新興芸術大講演会、新興文学社後援の下に牛込神楽坂の牛込会館で開催す。当日は第三インターナショナルデーであり・聴衆満場を埋む。講師は秋田雨雀・小牧近江・西宮藤朝・佐野袈裟美・津田光造・内藤辰雄・井東憲・新島栄治など。

同月、北原白秋と福田正夫、白鳥省吾等との間に詩のリズムについての小論争行わる。

同月、和田久太郎、大阪に赴き、南区天王寺公園前に労働運動社支局を設く。

同月、『種蒔く人』第二年第三巻第十四号十一月号発禁さる。

同月三十日、労働組合総聯合組織第三回協議会開催さる。組合同盟会側（アナ系）と、総同盟側ボル系と対立し、議事何等進行決定せず、当分沙汰止みとなる。これ以後サンジカリズム労働運動より退潮し始む。

同月、暁民社、『農民運動』を創刊す。

同月、ニュールンベルグにて社会民主党と独立社会民主党と合同し、合同社会民主党成立す。

十月十八日、第四回国際労働会議開催す。資格審査にて日本労働代表否認抗議に関し問題となる。

同月二十五日、サガレン以外のシベリア及後北満撤兵完了す。

同月三十日、ムッソリーニのクーデター成功し、ファシズム政権樹立す。

十一月、モスクワにおいてコミンテルン第四回世界大会。六二カ国三百四十人の代表参加。統一戦線戦術を労働者または労働者農民の政府戦略の上に有機的に結合し、国際ファシズムに対する闘争を強調す。

同月、モスクワにおいてプロフィン

5
安全弁（宮島資夫）『解放』6
失業者（新井紀一）『人間』〃
廃兵を乗せた赤電車（金子洋文）『種蒔く人』6
帰村せる署長（飯田徳太郎）〃
路傍の男（今野賢三）〃
奇怪な幻想（小川未明）『熱風』6
無産階級の芸術（平林初之輔）『朝日新聞』6
犬（金子洋文）『中央公論』6
政治と文芸との交叉点（長谷川如是閑）『新潮』6
芸術運動に於ける共同戦線（社論）『**種蒔く人**』6
文芸運動と労働運動（**平林初之輔**）〃
崩されたる団結（江口渙）『中央公論』7
友を売る（**新井紀一**）『**中央公論**』7
増刊号
地底へ歩く（小川未明）〃
戯曲・亡国行（中島清）〃
7
緑蔭（中西伊之助）『早稲田文学』
ある体操教師の死（**藤森成吉**）『**解放**』7

同月、フイリップ記念講演会、神田明治館で行わる。ポール・クローデルなど出席す。
十二月、さきに財産抛棄を宣言した有島武郎、所有の絵画及び版画を牛込原町の同邸にて公売に附す。
同月、堺利彦、再び兇漢に襲われ、胸部その他を刺さる。
同月、大杉栄、世界アナキスト大会出席のためフランスに渡る。
同月、『中央公論』、「全然失敗に畢りたる西伯利亜出兵の全部撤退を機とし軍閥を葬る辞」を特輯す。

テルン第二回世界大会。特に東洋諸国の労働運動を審議す。
同月七日、ロシア革命五周年記念祭各地に開催す。雑誌『前衛』『無産階級』及び『労働新聞』各々号外を発行す。
同月、最初の革命的青年運動たる学生聯合会誕生す。
同月二十五日、大阪岸和田市の寺田、和泉、岸和田の三紡績会社男女工七、九〇〇名の大争議起る。官業・総同盟応援す。
同月、純向上会発会式。大阪・名古屋に各々挙行さる。
十二月、鮮人労働者同盟会、京阪神鮮人労働者三百名にて組織さる。
同月三十日、ロシア、ウクライナ、白ロシア、トランス・コーカサスの四社会主義ソヴェート共和国を統一する聯邦国家「ソ連」（C・C・C・R）建設さる。
同月、コミンテルン第四回大会はイタリーのファシズム政権樹立に際しイタリー社会党と共産党の合同を決議し、十四条の条件を提議す。三十

火つけ彦七（伊藤野枝）『水平』7
国定教科書に現れた軍国主義を評す（本間久雄）『中央公論』7増刊号
人類愛と世界平和を基調とする近代文芸の考察（千葉亀雄）〃
短歌・生生諸相（島木赤彦）〃
短歌・平和（与謝野晶子）〃
世界主義文学の世界語（佐々木孝丸）『朝日』7
監獄の庭（井東憲）『熱風』8
労働者の日記（吉田金重）〃
プロレタリアの正義と芸術（小川未明）『解放』8
人道主義の芸術と悪魔の芸術（津田光造）『種蒔く人』8
有島武郎氏の農園解放（堺利彦）『前衛』8
不逞鮮人（中西伊之助）『改造』9
裏切る（前田河広一郎）『早稲田文学』9
死体の発掘（麻生久）『種蒔く人』9
無産階級文化と美的要求（社論）『種蒔く人』9
『文芸教育論』（片上伸）文教書院刊 9
死刑囚と其裁判長（中西伊之助）『早稲田文学』10

一日、その提議を議すべきイタリー社会党執行委員会はヴェラ一派の非合同派の支配によって分裂す。

暴風雨（松本弘二）『種蒔く人』10
『三等船客』（前田河広一郎）自然社刊10
革命詩人マルセル・マルチネ（佐々木孝丸）『サンデー毎日』10
コムレードの芸術（青野季吉）「芸術戦線」10
労働運動と労働文学（大杉栄）『新潮』10
留置場の一隅にて（江口渙）『改造』11
彼等の行く方へ（小川未明）『改造』11
屋根裏の男（内藤辰雄）『新興文学』11
宮島資夫自叙伝『裸像彫刻』春秋社刊11
詩・敵を呪う詩（松本淳三）『種蒔く人』11
最近仏蘭西に現われた非愛国思想（小牧近江）『解放』11
善行章（新井紀一）『解放』12
一人の漂泊者（吉田金重）『新興文学』12
夜逃げした男（中沢静雄）〃
『燃ゆる反抗』（新井紀一）自然社刊12
詩・雲と池との交合（髙橋新吉）『新興文学』12

詩・胃と同居主から（新島栄治）〃

詩・行進曲（壺井繁治）〃

シャルル・ルイ・フィリップとエミル・ギョマン（小牧近江）『早稲田文学』12

力の芸術へ（今野賢三）『朝日新聞』12

抬頭期にある農民芸術に就いて（松本淳三）『種蒔く人』12

俎上の新井紀一氏（吉田金重・井東憲・藤井真澄・井田秀明）『新興文学』12

階級の文学（立野信之）『新興文学』12

一九二三年（大正十二年）

疎　隔（神近市子）『改造』1
脱走者（藤森成吉）『解放』1
戯曲・手榴弾（秋田雨雀）『解放』1
交叉点を走る影（小川未明）『解放』1
戯曲・精神医学者（藤井真澄）『解放』1―2
戯曲・地下室（中村吉蔵）『解放』1
蘆川の死因（新井紀一）『新潮』1
嘘をつかなかったら（小川未明）『早稲田文学』1
力（堀江かど江）『新興文学』1
健（小林多喜二）『新興文学』1
脱船以後（前田河広一郎）『新興文学』1
『溷流に泳ぐ』（麻生久）新光社刊1
『無産階級の文化』（平林初之輔）泰文社刊
『死刑囚と其裁判長』（中西伊之助）自然社刊1
畑と人間（萩原恭次郎）『赤と黒』1
廻　転（岡本潤）〃
風の中の乞食（壺井繁治）〃
ブルジョア作家とプロレタリア作家

一月、青野季吉が『種蒔く人』同人となる。
同月、種蒔き社、過激社会運動取締法案反対無産者同盟へ加盟し、宣言と決議に署名す。
同月、国民文芸会及び劇作家協会有志による国立劇場設立請願提案あり、秋田雨雀・中村吉蔵・金子洋文・大関柊郎・清見陸郎たち反対す。
同月、詩誌『赤と黒』創刊す。「詩とは？詩人とは？我々は過去の一切の概念を放棄して、大胆に断言する！『詩とは爆弾である！詩人とは牢獄の固き壁と扉とに爆弾を投ずる黒き犯人である！』」との宣言を掲ぐ。同人は萩原恭次郎・岡本潤・壺井繁治・川崎長太郎のち小野十三郎も参加す。基金は有島武郎からリヤクしたものによる。
同月、『文芸春秋』創刊す。
同月、詩誌『感覚革命』創刊す。伊福部隆輝らによるもの。以後続いて詩誌『鏡』(松本淳三・村松正俊ら)、

一月、フランスのルール占領前一週間前にエッセンにおいてフランスとドイツの共産主義者の代表者会議が開催され、フランス帝国主義の膨脹に対してフランス及びドイツの労働者の革命的勢力の結合を以て対抗すべきことを決定す。フランス軍、ルール占領す。フランス及びドイツ共産党は両国のブルジョアジーに対し闘争を開始し、コミンテルンこれを積極的に支持す。
同月、孫文派の軍隊は広東を占領しここに大元帥府を置く。
同月、中国国民党宣言を発表し、民国革命以来久しく忘れたる三民主義を強調す。
同月、日本労農同盟会、京都に組織され、機関紙『同志』を発行す。
同月、朝鮮大邱に三百余人の小作争議、埼玉県井泉村に五百人の小作争議あり。
同月、中国二七記念日。京漢鉄道の大罷業において軍閥の従業員虐殺記

対抗の現勢（加藤一夫）『解放』1
文芸運動と労働運動（青野季吉）『新興文学』1
論争を通じて観た民衆詩派（川崎春二）『新興文学』1
ロシアの小さき同志のために（小牧近江）『朝日』1
プロレタリア文学への挑戦（福士幸次郎）『新潮』1
死滅する村（小川未明）『中央公論』2
お絹の心（中西伊之助）『新潮』2
手　紙（新井紀一）『太陽』2
赤い馬車（前田河広一郎）『解放』2
或る施療患者（有島武郎）『泉』2
『彼等の行く方へ』（小川未明）総文館刊 2
『虚無』（加藤一夫）春秋社刊2
『汝等の背後より』（中西伊之助）改造社刊2
『ダダイスト新吉の詩』（高橋新吉）中央美術社刊2
煤けた梟（岡本潤）『赤と黒』2
挙（壺井繁治）〃 〃
〈階級文芸に対する私の態度〉特集『改造』2
階級文芸に対して（久米正雄）

『悍馬』（陀田勘助・細井和喜蔵ら）創刊す。
二月、麻生久『濁流に泳ぐ』出版記念会開く。小川未明・秋田雨雀・生方敏郎・新居格・中西伊之助・鈴木文治ら出席す。
同月、無産階級社「インタナショナル通報」を創刊す。
同月、鎖人社『鎖』を創刊す。同人は松本淳三・坂本斐沙子・重広虎雄・藤村義助・村松正俊・和田信義・二木正夫・趙明漂・桑田克己・国木田文子らによるもの。
同月、種蒔き社、少年版『種蒔き少年』を発行。
同月、『種蒔く人』、「水平社運動」を特集す。
同月、ルール地方占領に対し全日本の無産階級的思想団体三六社はフランス駐日大使の手を経て本国政府に抗議す。種蒔き社もこれに参加す。
同月、ロシア児童救済の募金の計画発表さる。責任者は、平林初之輔で監督者は秋田雨雀・有島武郎であった。

念日。
同月、過激社会運動取締法案及労働組合、小作争議調停の三法案反対運動起こる。
同月、日本農民組合大会開催さる。此の頃会員六万、二百余支部に上る。岡山・香川・兵庫地方特に優勢。
三月五日、失業問題協議会、失業防止政府要求派（総同盟系）、対政府運動否認派（反総同盟系）と対立し纒らず、アナ・ボルの抗争つづく。
同月九日、愛知県芝寺の四年来の小作争議、名古屋地方裁判所長仲裁解決す。解決条件に時代を劃すといわる。
同月十日、失業者大示威運動、東京飛鳥山に懇親会と称し敢行。後、失業防止労働者同盟大会、芝公園にて開催せらる。
同月十七日、奈良県都村に水平社、国粋会の大乱闘起り鉄砲白刃持ち出され大惨事現出す。
四月一日、九州最初の農民学校、福岡県吉武村に開設さる。
同月三日、雑誌『赤旗』、『社会主義

プロレタリヤの世になつて真のプロレタリヤ文芸生る（菊池寛）
新しい革命のために（吉田絃二郎）
時代おくれの考（佐藤春夫）
あらゆる至上主義に好意と尊敬とを持つ（芥川竜之介）
半鐘流して大砲に（中西伊之助）
芸術作品に対する作家の態度（新井紀一）
革命と芸術の要求（藤井真澄）
それの生産とそれの消費関係に就いて知ること（内藤辰雄）
主観同時に現実（加藤一夫）

階級闘争と芸術運動（青野季吉）『種蒔く人』2
三つのプロレットカルト（小牧近江）『早稲田文学』2
所謂民衆詩人を否定す（松本淳三）『報知』2
短　銃（尾崎士郎）『早稲田文学』3
雨の八号室（新井紀一）『中央公論』3
地　獄（金子洋文）『解放』3
街頭で見た事二つ（長谷川如是閑）『解放』3
迷　乱（宮島資夫）『解放』3
雪を砕く（小川未明）『文学世界』3
地　主（藤森成吉）『新潮』3
祭の夜の出来事（加藤武雄）『新潮』3

同月、陀田勘助・伊土競・細井和喜蔵・重広虎雄らによる詩誌『悍馬』の創刊。
同月、『無産階級の文化』の会、市川松桃園にひらかる。平林たちの挨拶あり。
三月八日、神田キリスト教青年会館にて種蒔き社主催『国際婦人デー講演会』行わる。日本最初の国際婦人デーの催し。開会四〇分で中止。講演者、矢部はつ、金子ひろ子、三宅秀子、港ちえ、武田とし、山川菊栄、西たい、仲宗根貞代など。
同月、『先駆座』第一回試演行わる。ストリンドベリ『火あそび』、秋田雨雀『手投弾』など。同人は秋田雨雀・佐藤青夜・川添利基・小林生象・河原侃二・高橋季暉・柳瀬正夢・佐々木孝丸。
同月二十九日、小川未明・津田光造・木下白露・尾崎士郎・林政雄・新島栄治・岡本潤・吉田金重・内藤辰雄・佐野袈裟美・井東憲・小島徳弥・伊藤によって「山田清三郎の会」開く。出席者上記のほかに福田正夫・宮島新三郎・細井和喜蔵・川崎長太

研究』『前衛』『無産階級』三誌の合併として創刊さる。後『階級戦』と改題す。
同月、熊本県郡築村の農民千二百名(日本農民組合)小作争議を起す。翌十三年九月一年半ののち妥協す。
同月二十三日、埼玉県御正村に争議起る。
同月十五日、朝鮮に平壌労働同盟第一回総会開催さる。
同月、日本文化青年同盟（総同盟系）、京都に創立す。官製青年団に対抗することを期す。
五月、第二インターナショナルと第二半インターナショナルとの合同行わる。
同月、ルール地方において坑夫ならびに冶金工のストライキ起る。参加者四十万人。
同月一日、メーデー朝鮮京城その他全国十一都市に行わる。本年より社会主義者または思想団体と分離して独立に行われた。
同月三日、対露問題演説会、次で二十九日、対露通商促進演説会開催さ

火事の夜まで（今野賢三）『種蒔く人』3
女工と淫売婦に就いて（細井和喜蔵）〃
復　讐（江口渙）『文章倶楽部』3
ハハハハ（高橋新吉）『新興文学』3
『二足獣の歌える』（松本淳三）自然社刊3
『地獄の出来事』（井東憲）総文館刊3
郊外の貧しき街より（諏訪三郎）『改造』3
純粋なれ、而して彼等を記憶せよ（小川未明）『種蒔く人』3
通俗芸術家出でよ（藤井真澄）〃
芸術の革命と革命の芸術（青野季吉）『解放』3
民衆芸術の功過（川崎長太郎）『新興文学』3
地　主（藤森成吉）『新潮』4
生ける墳墓（中西伊之助）『解放』4
或るアイデアリストの死（神近市子）『解放』4
桟橋の一夜（山田清三郎）『文学世界』4
戯曲・**狐**（金子洋文）『太陽』4
宝　刀（上司小剣）『太陽』4

郎・新井紀一・立野信之・萩原恭次郎など。
同月、中西伊之助、治安警察法違反事件のため入獄す。
四月、前田河広一郎・佐野袈裟美・中西伊之助の三人、種蒔き社の同人となる。
二二日、種蒔き社青年部成立す。
同月四日夜、松本淳三『二足獣の歌える』の記念会、銀座パウリスタで行われる。
同月十一日、啄木の会（十二周忌記念懇話会）、前記パウリスタで行われ、新居格・小牧近江・松本淳三・武藤等の発起によるもの。なお十二日には本郷追分東大キリスト教青年会館で講演会ひらかる。
同月、『新興文学』山田清三郎編集を止め、伊藤それを継ぐ。
同月、『新興文学』、四月号「階級芸術確立号」とす。
五月七日、「クラルテ」会主催の小牧・佐々木訳の『クラルテ』出版記念講演会が神田中央仏教会館で行われる。佐々木孝丸・有島武郎・吉江喬る。
同月五日、ヨッフェ、長崎経由入京す。
同月五日、第二次日本共産党事件の一斉検挙臨検が行われ、堺利彦ら二十四名起訴収容さる。その事件に関し早大恩賜館に不当臨検強行さる。佐野学・荒畑寒村・近藤栄蔵・高津正道・辻井民之助・山本懸蔵亡命し入露した。
同月十日、早稲田大学軍事研究団発会式。傍聴学生の暴露戦術盛んに行われ、以後学内左右対立し、自由擁護の運動また起る。
同月十四日、岡山県藤田開墾地小作争議に耕地立入禁止。最初の耕地ロックアウト行わる。
同月二十六日、東京汽車会社争議。機械聯合系車輛工組合と総同盟系関東鉄工組合と対立抗争す。
同月、台湾基隆の衛生苦力罷業す。
また、防援会、階級闘争の犠牲者及び家族救援を目的として組織さる。
印刷工聯合会、結成され、正信会・信友会・京都印刷工組合等合同す。

恋と牢獄（江口渙）『太陽』4
奪還（中西伊之助）『早稲田文学』4
点燈前後（小川未明）『新興文学』4
機関庫の朝（中西伊之助）『新興文学』4
内藤辰雄の小説（内藤辰雄）『新興文学』4
被害者（吉田与三）『新興文学』4
佐幌山麓（加藤由蔵）『新興文学』4
敗残者の群（吉田金重）『新興文学』4
『クラルテ』（アンリ・バルビュス、小牧近江、佐々木孝丸訳）叢文閣刊4
『地獄から帰った少年の話』（金子洋文）大鐙閣刊4
啄木に学べ（松本淳三）『国民新聞』4
階級文芸の先駆者―啄木のこと―（武藤直治）『朝日新聞』4
プロレタリア文芸の美（今野賢三）『新興文学』4
血迷える民主詩論（岡本潤）『新興文学』4
菊池対前田河論戦（千葉亀雄）『解放』4
所謂ブルジョア思想の問題（木蘇穀）『解放』4

松・藤森成吉・秋田雨雀などの講演あり。
同八日、「クラルテ」懇話会、神田中央仏教会館楼上ピースサロンで行わる。秋田雨雀・藤森成吉・吉江喬松・長谷川如是閑・柴田勝衛・小川未明・千葉亀雄、『種蒔く人』同人ら発起であった。出席者上記の他に、堺利彦・新居格・細田民樹・中条百合子・三津木貞子・山内義雄・相田隆太郎・小島徳弥・山内房吉・勝田香月など四八名出席。
同月、『新興文学』、「既成文壇破壊号」を特集す。
同月十二日、新興文学社主催第二回文芸講演会千葉市県公会堂にて開かる。弁士は加藤一夫・平沢計七・吉植庄亮・尾山篤二郎・佐野袈裟美・上野虎雄・内藤辰雄ら。聴衆三百五十名。
同月一日、大杉はパリ郊外、サン・ドニにひらかれたメー・デーの集会に行き演説して捕われた。二月に予定された国際無政府主義大会は無期延期となり、大杉はようやく無政府主義に疑問をいだきはじむ。

六月、コミンテルン執行委員会第三回総会開く。
同月、ブルガリアの六月政変あり。スタムブリスキーの労農政府倒れ、ファシスト権力樹立さる。
同月、中国共産党第三次大会開かれ共産党党綱九ヵ条決議さる。
同月四日、京都奥村電気職工八百名争議す。官憲の圧迫暴行を受く。
同月六日、第二次共産党事件は「第二の大逆事件」と大々的デマを伴って五月五日の検挙に関する新聞雑誌の記事掲載解禁さる。
同月二十五日、東京池貝鉄工所争議起り、争議中震災来り弾圧猛烈を極めたが、健闘し惨敗をまぬかる。
同月二十六日、高尾平兵衛ら「戦線同盟」を組織し、この日赤化防止団々長米村某に射殺さる。
七月十三日、中国反帝国主義同盟成立す。
同月八日、高尾平兵衛の社会葬、思想団体、労働団体等により催さる。この種の最初の試みだった。
同月十三日、総同盟、関東同盟会は

全無産者諸君に（前田河広一郎）『解放』４
プロレタリヤ文士の小接戦（新居格）『解放』４
文壇の妥協的精神を排す（青野季吉）『解放』４
文壇の反動的傾向（水守亀之助）『解放』４
嘘のビラ（加藤一夫）『新興文学』５
幽霊読者（山田清三郎）『新興文学』５
掃除人夫の死（小沼文彦）『新興文学』５
盲狂人の死（吉田金重）『解放』５
墜ちる為の塔（エロシェンコ）『解放』５
村の教師（小川未明）『中央公論』５
青い絲（小川未明）『新潮』５
労働者（内藤辰雄）『文芸春秋』５
豆腐屋の笛（宮地嘉六）『太陽』５
泥の雨（下村千秋）『早稲田文学』５
おしんの死（中西伊之助）『文学世界』５
『地獄』（金子洋文）自然社刊５
『農夫喜兵衛の死』（中西伊之助）改造社刊５
『水平』（古手川忠助）二松堂書房刊

六月十八日、金子洋文処女創作集『地獄』出版記念講演会は神田中央仏教会館で行わる。今野賢三の開会挨拶、藤森成吉の洋文に対する感想、秋田雨雀の洋文に対する忠告、水谷八重子と西条しづ子による戯曲『夢』の朗読、洋文の挨拶の後『地獄』の朗読という順序で会が進行し、終って階上のピース・サロンで懇親会があった。

同月十二日、新島栄治、処女詩集『湿地の火』出版記念会は銀座パゥリスタで開かる。秋田雨雀・萩原恭次郎・山田清三郎・立野信之・壷井繁治・岡本潤・小川未明・細井和喜蔵・新井紀一・加藤一夫・平沢計七・中野正人ら出席す。

同月二十五日、小川未明・秋田雨雀・中村吉蔵の事業を慰労する『三人の会』が神田中央仏教会館ピース・サロンでひらかれた。『種蒔く人』同人・旧『熱風』同人・長谷川如是閑・千葉亀雄・新居格・宮島資夫・加藤一夫ら二百二十余名出席す。司会は前田河広一郎、余興は先駆座による朗読―雨雀『国境の夜』・吉蔵『税』・

婦人部を新設し、かつ、自由聯合主義排撃・合同主義容認を決議す。

同月二十日、国際労働代表選出方法に関し横断組合否認に対し総同盟ら反対す。

同月三十日、大阪名古屋の各純向上会・及び日本煙草等合同成立す。

八月、ルール占領に引きつづくマルク紙幣の惨落。全ドイツにわたる饑饉動揺。ために大規模のストライキ起る。

同月、イタリー社会党執行委員会はセラチ一派の合同派を除名した。

同月、中国社会主義青年団第二回大会開かれ、中国共産党との協力援助に努め、国民革命運動を促進させることを決議し、団と党との関係も明確に規定さる。

同月九日、国際労働代表宇野利右衛門、所謂工場側当選す。

九月、ブルガリアにおいて労働者農民の革命的暴動勃発す。

同月、ドイツ共産党の檄発せらる。―セネ・ストへ！ 労働者の武装及び労農政府樹立へ。

5
親　子（有島武郎）『泉』5
第二の菊池寛無用論（前田河広一郎）『新興文学』5
ブルジョア文芸の本塁を粉砕す（津田光造）『新興文学』5
プロ文芸に対する青年労働者の要求（百瀬清吉）『新興文学』5
有島武郎論（青野季吉）『解放』5
プロ文壇の新しい闘士たち（小牧近江）『解放』5
メーデーと芸術家（小牧近江）『報知新聞』5
釈明、弁駁及び啓蒙――冷い頭と温かな心の広津和郎氏（平林初之輔）『新潮』5
菊池・前田河両氏の態度（津田光造）『新潮』5
無産青年とデカダン文芸（津田光造）『種蒔く人』5
第三者として――（今野賢三）『種蒔く人』5
ある部屋での話（宮島資夫）『解放』6
素足で行く旅人（宮地嘉六）『中央公論』6
二人の中尉（平沢計七）『新興文学』

未明童話。この席で平林が過激法案反対の動議をだす。会場は「赤と黒」同人らのアナアキストによって混乱に陥った。
同月、有島武郎、波多野秋子と信州軽井沢に死す。
七月、『種蒔く人』、「反軍国主義・無産青年運動号」を特集す。
同月、石渡山達・村松正俊・武藤直治らによって文芸評論『墓穴』創刊す。
同月、中西伊之助・前田河広一郎・尾崎士郎・藤井真澄・青野季吉編『芸術戦線』（自然社刊）が共産党事件のため入獄した堺利彦慰問のために編集された（第一部創作）。秋田雨雀・新井紀一・有島武郎・麻生久・江口渙・藤井真澄・今野賢三・金子洋文・加藤一夫・小泉鉄・前田河広一郎・松本淳三・宮島資夫・内藤辰雄・中西伊之助・小川未明・尾崎士郎・佐々木孝丸・鄭然圭・吉田金重（第二部批評・詩）青野季吉・藤森成吉・長谷川如是閑・平林初之輔・細井和喜蔵・小牧近江・新居格・新島栄治・佐野袈裟美。これがその内

同月一日、関東地方大震災起り、火災となり、次で鮮人同胞の虐殺さるもの数千に上る。
同月二十八日、関東震災救済委員会を関西同盟会ら組織す。
十月、ポーランドのクラカウにおいて暴動激化す。
同月二十二日、ハムブルグ蜂起開始さる。二十四日、ザクセンにて国防軍と労働者との衝突行われ、二十八日、叛乱、国防軍と水兵により鎮圧さる。
同月、第五回国際労働会議ゼノバに開催さる。
十一月二十二日、ドイツ共産党禁止さる。
同月六日、神戸の日本郵船高級社員に争議起り、停船十一万噸にのぼる。
同月十四日、総同盟、普選権の有効行使を決議し、右翼転換を始む。
同月二十四日、労働組合同盟会の普選対策協議会席上において議会利用派と否認派との衝突を生じ、ために大阪鉄工、紺向上、造船工、美術友禅の各組合の脱退をみる。

6
兵営の背教者（千葉武郎）『新興文学』6
詩集『濕地の火』（新島栄治）紅玉堂刊6
釜（尾崎士郎）『新興文学』6
佩剣鏘々の音（秋草勇三）『新興文学』6
大衆の創造性（菅野季吉）『種蒔く人』6
農民文学の提唱（倉田潮）『新興文学』6
無　心（藤森成吉）『改造』7
正　月（細田民樹）『解放』7
戯曲・車の踊（藤井真澄）『解放』7
蔵　入（小林多喜二）『新興文学』7
戯曲・大衆の力（平沢計七）『新興文学』7
伯父（前田河広一郎）『早稲田文学』7
罰　金（〃）『文学世界』7
新しき芸術青年に檄す（今野賢三）『種蒔く人』7
メーデー印象記（前田河広一郎）〃
プロレタリアの美学と表現主義（石渡山達）『新興文学』7
協同戦線より観たプロ作家の態度

容であった。
同月、武藤直治・山田清三郎、『種蒔く人』同人となる。
同月八日、種蒔き社、高尾平兵衛社会葬に弔辞を送る。
同月七日、勝田香月、抒情詩集『さびしき人々へ』出版記念会が神田中央仏教会館ピース・サロンで行われた。新島栄治・生田花世・伊藤・内藤辰雄・萩原恭次郎・壺井繁治ら出席す。
同月二十八日、村松正俊・加藤一夫・安成貞雄の主催でフランスから帰った大杉栄の歓迎会が銀座パウリスタでひらかれた。大杉、宮島資夫たちに文芸運動の計画をもちかく。
八月、『種蒔く人』、有島武郎の霊に『弔辞』を送る。
九月、『種蒔く人』、「帝都震災号外」を発行す。
同月一日、厨川白村鎌倉の別荘にて圧死す。
同月二十日、大杉栄・伊藤野枝ら、憲兵甘粕大尉に惨殺さる。

同月十日、高麗共産党のデモ、朝鮮国境に行わる。
同月十一日、対亀戸事件聯合協議会を自由法曹団、総同盟らにて組織され、以後京都・大阪・神戸・明石・岡山・高知などで亀戸事件について糾弾会催さる。
同月、ソ連の救援船「レーニン号」来るも入港を許されず。
同月、ドイツ赤色救援会より日本の震災被難労働者に対し救済金を送附したる。
同月二十七日、難波大助、皇太子を虎の門に狙う。ために山本内閣総辞職す。
難波は早稲田高等学院の学生で、政友会の代議士の息。共産主義的傾向があったといわれている。

（松村善寿郎）『新興文学』7
唯物史観と文学（有島武郎）『解放』7
捕虜（綿貫六助）『早稲田文学』8
その頃のこと（宮島資夫）『中央公論』8
七号問題（新井紀一）『解放』8
めざまし時計（井東憲）『文学世界』8
特種事件（山田清三郎）『労働立国』8
幽　車（岡下一郎）『新興文学』8
紛　擾（中野正人）『新興文学』8
二十銭銀貨（加藤由蔵）『新興文学』8
解放戦と芸術運動（青野季吉）『朝日』8
有島氏の死（青野季吉）『解放』8
有島武郎氏の死（平林初之輔）『改造』8
見た儘の有島武郎氏（新島栄治）『新興文学』8
鉄の呻き（吉田金重）『太陽』9
収穫の悲劇（犬田卯）『早稲田文学』9
失業者（小川未明）『早稲田文学』9
泥棒亀とその仲間（山川亮）『解放』9

同月、**関東大震災のため、『新興文学』、『文学世界』廃刊す。**印刷機関全滅、出版の中心関西に移るを説くもの多し、谷崎潤一郎・小山内薫をはじめ関西落ちする文学者多し。

同月、大杉の虐殺後、加藤一夫らを始め、革命家、革命文学者の地方へ逃避行するもの多し。

十月十日、亀戸事件（震災中東京亀戸署は南葛労働の河合義虎、純労働の平沢計七ら九名を虐殺し、屍体を凌辱す）の救済運動一斉に捲き起こる。

同月、『解放』休刊す。

輪　廻（森田草平）『女性』9—
土地繁栄（小川未明）『中央公論』10
荒都断篇（小川未明）『週刊朝日』10
計らざること（小川未明）『改造』11
犬喧嘩（金子洋文）『我観』11
にがい話（片岡鉄兵）『文芸春秋』11
顔（中条百合子）『太陽』11
労働祭の日の事など（諏訪三郎）『我観』11
鴎（金子洋文）『週刊朝日』11
六助の話（前田河広一郎）『大阪毎日』11
光子の母（中西伊之助）『大阪朝日』11
震災と思想・芸術（青野季吉）『報知』11
朝鮮人のために弁ず（中西伊之助）『婦人公論』11
真　偽（宮島資夫）『改造』12
第一号監房にて（宮地嘉六）『中央公論』12
続六助の話（前田河広一郎）『解放』12
重吉の宿（長谷川如是閑）『我等』12
目撃者（前田河広一郎）『サンデー毎日』12
『乞食』（前田河広一郎）総文館刊12
『麺麭』（前田河広一郎）大毎社刊12

日本プロレタリア文学大系　1　定価一二〇〇円

一九五五年 一月三十一日 第一版発行
一九六九年 一月 十五日 第四刷発行

編者代表　野間　宏
発行者　竹村　一
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京（二九一）三一三一～五
振替東京　八四一一六〇番
郵便番号　一〇一
印刷　文栄印刷株式会社
製本　有限会社佐伯製本所

落丁・乱丁本はおとりかえします

全9巻　第2回配本

日本
プロレタリア
文学大系
1
三一書房